

塚 下 遺 跡 (2) 上 柳 沢 遺 跡

北関東自動車道(伊勢崎～県境)地域並びに
(一)香林羽黒線地方道路交付金事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 0 7

東日本高速道路株式会社
群馬県伊勢崎土木事務所
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

塚 下 遺 跡 (2) 上 柳 沢 遺 跡

北関東自動車道(伊勢崎～県境)地域並びに
(-)香林羽黒線地方道路交付金事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 0 7

東日本高速道路株式会社
群馬県伊勢崎土木事務所
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



遺跡遠景（南より赤城山を望む）▼下方が塚下遺跡



遺跡全景（上が北）

序

北関東自動車道は、本県高崎市の関越自動車道から分岐し、茨城県那珂湊にいたる延長約150kmの高速自動車道です。この高速道路は群馬・栃木・茨城各県の主要都市及び東北自動車道・常磐自動車道を結び、地域社会の発展に大きな役割を果たすものと期待されています。

当事業団ではこの北関東自動車道の伊勢崎～県境間約17.7kmの建設に先立って、平成12年8月から書上遺跡で発掘調査を行い、これに引き続いて東に連なる38の遺跡の発掘調査を実施いたしました。また、これらの遺跡の整理作業は平成16年度から実施しており、本書「塚下遺跡(2)・上柳沢遺跡」はその発掘調査報告書として刊行するものです。

塚下遺跡は、伊勢崎市上田町(旧佐波郡東村)地内に所在し、発掘調査は平成13年度から14年度まで、整理は平成17年度から実施しました。その結果、旧石器時代の石器群や縄文、古墳、奈良・平安の各時代にわたる竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑などの遺構群とともに、多くの遺物が発見されました。本報告書はこれらについてまとめたものです。

本遺跡は竪穴住居跡群を主体とする集落遺跡ですが、低地帯を望む微高地上にあります。集落は各時代を経る間に成立と断絶を繰り返していますが、その消長をたどることによって、周辺地域の歴史や土地利用の変遷を考える上で、良好な研究対象となるものと期待されます。

本報告書は、北関東自動車道の建設に先立ち発掘調査された他の遺跡とともに、伊勢崎市域の古代を明らかにしていく貴重な資料になるものと確信しております。

最後になりましたが、東日本高速道路株式会社、群馬県教育委員会文化課、伊勢崎市教育委員会、地元関係者の皆様には、発掘調査から本報告書刊行に至るまで終始ご協力を賜り、心から感謝の意を表すとともに、発掘調査に携わった担当者、作業員の方々の方々の労をねぎらい序といたします。

平成19年12月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 高橋 勇夫

例 言

1. 本書は北関東自動車道（伊勢崎～県境）地域建設に伴い事前調査された塚下遺跡（遺跡略号 KT-380と上柳沢遺跡（遺跡略号 KT-390）の発掘調査報告書『塚下遺跡（2）・上柳沢遺跡』である。
2. 本遺跡は、側道部との同時調査を実施した関係で平成18年度刊行の『塚下遺跡（1）』に本線部の一部が報告されている。したがって本書における、I 調査の概要・II 周辺の環境の2項については、これと重複するため再録する煩をさけた。当該項目については、既刊『塚下遺跡（1）』の参照を願いたい。
3. 塚下遺跡は群馬県伊勢崎市上田町（旧佐波郡東村上田）地内に所在する。
4. 事業主体 北関東自動車道本線部＝東日本高速自動車道路株式会社（旧日本道路公団）
県側道部＝群馬県中部県民局 伊勢崎土木事務所
5. 調査主体 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
6. 調査期間 平成13年8月1日～平成14年9月24日
7. 整理期間 平成17年4月1日～平成19年7月31日
8. 調査・整理組織
事務担当
(本部) 高橋勇夫・小野宇三郎・木村裕紀・赤山容造・吉田 豊・津金沢吉茂・神保衛史・住谷進・萩原利通・萩原 勉・大島信夫・植原恒夫・笠原秀樹・石井 清・関 晴彦・小山建夫・高橋房雄・須田朋子・斉藤恵利子・吉田有光・森下弘美・片岡徳雄・田中賢一・矢島一美・斉藤陽子・吉田恵子・並木綾子・内山佳子・若田 誠・佐藤美佐子・本間久美子・北原かおり・狩野真子・今井とも子・松下次男・吉田 茂・蘇原正義
(東毛調査事務所) 水田 稔・能登 健・津金沢吉茂・真下高幸・相京建史・笠原秀樹・柳岡良宏・田中賢一・中沢恵子
調査担当 大西雅広・新井 仁・土谷慎二・津島秀章・小室綾子・斉藤利子・斉藤 聡・本間 昇・笹沢泰史・石坂 聡
整理担当・Staff 綿貫邦男・尾田正子・岩田彰子・梅沢きく江・加藤綾・酒井史恵・田村浩子・長谷川公子
遺物写真 綿貫邦男
保存処理 関 邦一・土橋まり子
遺物実測 一部機械実測班
9. 石器石材鑑定 飯島静男氏（群馬地質研究会）
10. 発掘調査資料・出土遺物は群馬県埋蔵文化財センターに保管してある。
11. 発掘調査及び報告書作成には次の方々からご協力・ご指導をいただいた。
伊勢崎市教育委員会・地元関係者各位
12. 本書執筆 IV 綿貫邦男 V 1～4 綿貫邦男 VI 1～3 関根慎二（遺物）綿貫邦男（遺構）
VII 1～4 関口博幸 但し陶磁器類の所見は大西雅広
13. 本書編集 綿貫邦男

凡 例

1. 本書における遺構名称は算用数字と遺構形状や機能による慣例的名称を併せ遺構の固有名詞とする。数字は調査の進行に伴って便宜上付与したもので他にいかなる有意的な順位をも示すものではない。なお、遺構名称のうち竪穴住居跡と竪穴状遺構の区別は基本的には竈・炉跡などの有無を指標にしたが、遺物の出土状況や土層・その他状況に応じて命名したものであり、必ずしも明確な概念によるものではない。
2. 本書の遺構図版中にある+印とそれに付記される5桁2種の数値は国家座標値X・Y値を表す。
3. 本書の本文中で遺構の位置及び範囲を示すに国家座標値X・Y値を用いる。ただし、5桁数値の前2桁X値38、Y値52及び53は略してある。範囲を示す国家座標値の単位は1mである。
4. 本書における遺構図版にはそれぞれに縮尺比例尺を付したが、基本的には次のようである。
竪穴住居跡・竪穴状遺構：1/60 掘立柱建物跡：1/80 竈・炉跡・土坑・井戸跡：1/40
ただし、図によってはこの限りではない。
5. 本書における遺物図版にはそれぞれ縮尺比例尺を付したが基本的に次のようである。
金属器及び石器類や土製品のうち的小型品：1/1または1/2 土器・石器類：1/3
ただし、遺物によってはこの限りではない。
6. 本書における遺構図版中の断面水平基準は標高値でこれを表した。単位はメートル（m）である。
7. 本書における各遺構図版中の遺物、遺物図版、遺物写真図版、遺物計測表の遺物に付けられた番号のうち、同一の番号は同一の遺物を示す。
8. 土器の実測図は原則として四分割法をとった。ただし、残存量が二分の一以下のものは180度展開して図上復元とし、中心線は点線でこれを示した。
9. 「主軸方位」は、竈のある竪穴住居跡については付設される壁線に直交する軸を基線にした。それ以外のものについては、真北に対する長軸線の東ないし西方への傾きを、また、長・短軸長差のない場合は北面あるいは北面近似の壁線に平行する軸線の傾きをもってこれを示した。
10. 遺物の拓影および展開・断面は基本的に一角法で示した。
11. 土層および土器の色調名は「標準土色帳」農林省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修に基本的に準じた。
12. 本書で使用する浅間山および榛名山噴火による降下火砕物・泥流堆積物の呼称については以下のように表記する。
As-A : 浅間山噴出の火砕物 1738 (天明三)年
As-B : 浅間山噴出の火砕物 1108 (天仁元)年
FP 泥流 : 榛名山二ツ岳噴出の火砕物泥流堆積物
FP : 榛名山二ツ岳噴出の火砕物
FA 泥流 : 榛名山二ツ岳噴出の火砕物泥流堆積物
FA : 榛名山二ツ岳噴出の火砕物
C 軽石 : 浅間山噴出の火砕物
13. 遺構平面図・断面図・土層図に示した網のうち、焼土・炭化物・粘土はそれぞれ下記の網別で示した。
焼土：点網 炭化物：黒網 粘土：散換線網

目 次

塚下遺跡 (1) 目次

I 発掘調査の概要	1 地理的環境	7
1 調査に至る経過	2 歴史的環境	9
2 調査の方法と経過		
3 調査区の設定	III 検出遺構と出土遺物	
4 遺構名称	1 竪穴住居跡	15
5 調査の手順	2 掘立柱建物跡	68
6 基本土層	3 井戸跡	69
	4 炉跡	73
	5 土坑跡・遺構外出土遺物	75
II 周辺の環境		

塚下遺跡 (2) 目次 (以下本編)

序		
例 言		
凡 例		
目 次		
挿図目次・写真目次		
報告書抄録		
IV. 塚下遺跡の概要	1 2 その他の遺構と遺物	233
V. 古代・古墳時代の遺構と遺物	5 VII. 旧石器時代の遺構と遺物	273
1 奈良・平安時代の竪穴住居跡とその遺物	5 1 遺跡の概要	273
2 古墳時代中・後期の竪穴住居跡とその遺物	2 石器	281
		85
3 古墳時代前期の竪穴住居跡とその遺物	3 石材・母岩別資料と接合資料	282
4 古代～古墳時代その他の遺構と遺物	4 石器の分布と接合関係	287
		183
VI. 縄文時代の遺構と遺物	附編 自然科学分析	325
1 竪穴住居跡とその遺物	1 塚下遺跡の火山灰分析	325
	2 塚下遺跡の樹種同定	329
		210

上柳沢遺跡 目次

例言・凡例		
目次・図版・写真目次		
I. 発掘調査の概要	337	
II. 検出された遺構と遺物	343	
	III. おわりに	346
	附編 自然科学分析	349

写真図版

挿圖目次

第 1 図 大間々扇状地形……………1	第 70 図 67号住居跡出土遺物③……………56	第1395図 27号住居跡出土遺物……………116
第 2 図 北関東自動車道開通遺跡	第 71 図 68号住居跡……………57	第1400図 29号住居跡……………117
位置図……………2	第 72 図 68号住居跡出土遺物……………57	第1411図 29号住居跡出土遺物……………118
第 3 図 塚下遺跡位置図……………3	第 73 図 71号住居跡……………58	第1422図 33号住居跡……………119
第 4 図 塚下遺跡全体図……………4	第 74 図 71号住居跡出土遺物……………59	第1433図 33号住居跡出土遺物①……………121
第 5 図 奈良～平安時代型穴住居跡	第 75 図 75号住居跡……………60	第1443図 33号住居跡出土遺物②……………122
分布図……………5	第 76 図 75号住居跡出土遺物……………61	第1450図 40号住居跡……………122
第 6 図 奈良～平安時代前半段階……………6	第 77 図 77号住居跡……………60	第1460図 40号住居跡出土遺物①……………123
第 7 図 平安時代中～後段階……………7	第 78 図 77号住居跡出土遺物……………62	第1471図 40号住居跡出土遺物②……………124
第 8 図 平安時代後半段階……………8	第 79 図 78号住居跡……………62	第1480図 46号住居跡……………125
第 9 図 3号住居跡……………9	第 80 図 78号住居跡出土遺物……………63	第1490図 46号住居跡出土遺物……………126
第10 図 3号住居跡出土遺物①……………9	第 81 図 85号住居跡……………64	第1500図 50号住居跡……………128
第11 図 3号住居跡出土遺物②……………10	第 82 図 85号住居跡出土遺物……………65	第1511図 50号住居跡遺物分布図……………129
第12 図 4号住居跡……………11	第 83 図 86号住居跡・出土遺物……………66	第1522図 50号住居跡出土遺物①……………130
第13 図 4号住居跡出土遺物①……………11	第 84 図 87号住居跡……………67	第1533図 50号住居跡出土遺物②……………131
第14 図 4号住居跡出土遺物②……………12	第 85 図 87号住居跡出土遺物①……………67	第1544図 50号住居跡出土遺物③……………132
第15 図 10号住居跡……………13	第 86 図 87号住居跡出土遺物②……………68	第1555図 50号住居跡出土遺物④……………133
第16 図 10号住居跡出土遺物……………14	第 87 図 88号住居跡……………69	第1566図 50号住居跡出土遺物⑤……………134
第17 図 12号住居跡……………15	第 88 図 88号住居跡出土遺物……………69	第1577図 50号住居跡出土遺物⑥……………135
第18 図 12号住居跡出土遺物……………16	第 89 図 89号・90号住居跡……………70	第1588図 72号住居跡……………136
第19 図 13号住居跡……………17	第 90 図 89号住居跡出土遺物……………71	第1599図 72号住居跡出土遺物……………137
第20 図 13号住居跡出土遺物①……………18	第 91 図 90号住居跡出土遺物①……………71	第1610図 80号住居跡……………138
第21 図 13号住居跡出土遺物②……………19	第 92 図 90号住居跡出土遺物②……………72	第1621図 80号住居跡出土遺物①……………139
第22 図 17号・11号住居跡……………19	第 93 図 91号住居跡……………73	第1632図 80号住居跡出土遺物②……………140
第23 図 17号住居跡出土遺物……………20	第 94 図 91号住居跡出土遺物……………73	第1643図 古墳時代前期型穴住居跡
第24 図 34号住居跡……………20	第 95 図 94号住居跡……………74	分布図……………141
第25 図 34号住居跡出土遺物……………21	第 96 図 94号住居跡出土遺物①……………75	第1644図 古墳時代前期集落の変遷……………142
第26 図 35号住居跡・出土遺物①……………22	第 97 図 94号住居跡出土遺物②……………76	第1650図 2号住居跡……………143
第27 図 35号住居跡出土遺物②……………23	第 98 図 99号・108号住居跡……………77	第1661図 2号住居跡出土遺物①……………143
第28 図 36号住居跡……………23	第 99 図 99号住居跡出土遺物①……………78	第1672図 2号住居跡出土遺物②……………144
第29 図 36号住居跡出土遺物①……………24	第100図 99号住居跡出土遺物②……………79	第1682図 6号住居跡……………144
第30 図 36号住居跡出土遺物②……………25	第101図 123号住居跡……………79	第1693図 8号住居跡……………145
第31 図 37号住居跡……………26	第102図 123号住居跡出土遺物……………80	第1704図 8号住居跡出土遺物……………145
第32 図 37号住居跡竈土層図……………27	第103図 126号住居跡……………80	第1711図 9号住居跡……………145
第33 図 37号住居跡出土遺物……………27	第104図 126号住居跡・出土遺物……………81	第1722図 9号住居跡出土遺物……………146
第34 図 41号住居跡……………28	第105図 135号・137号住居跡……………82	第1733図 11号住居跡出土遺物……………146
第35 図 41号住居跡出土遺物……………29	第106図 135号住居跡出土遺物①……………83	第1744図 19号住居跡……………147
第36 図 42号住居跡……………29	第107図 135号住居跡出土遺物②……………84	第1755図 19号住居跡出土遺物①……………148
第37 図 42号住居跡出土遺物……………30	第108図 136号住居跡・出土遺物……………84	第1766図 19号住居跡出土遺物②……………149
第38 図 44号住居跡……………30	第109図 古墳時代中・後期型穴住居跡	第1777図 21号住居跡……………150
第39 図 44号住居跡出土遺物……………31	分布図……………85	第1788図 21号住居跡出土遺物……………151
第40 図 45号住居跡……………32	第110図 古墳時代中・後期集落の変遷	第1799図 23号住居跡……………152
第41 図 45号住居跡出土遺物①……………32	……………86	第1810図 23号住居跡出土遺物……………153
第42 図 45号住居跡出土遺物②……………33	第111図 1号住居跡……………87	第1811図 25号住居跡……………153
第43 図 47号住居跡……………33	第112図 1号住居跡出土遺物……………88	第1822図 26号住居跡……………154
第44 図 47号住居跡出土遺物……………34	第113図 5号住居跡……………90	第1833図 26号住居跡出土遺物……………155
第45 図 48号住居跡……………34	第114図 5号住居跡出土遺物……………91	第1844図 28号住居跡……………155
第46 図 48号住居跡出土遺物①……………35	第115図 15号住居跡……………92	第1855図 30号住居跡……………156
第47 図 48号住居跡出土遺物②……………36	第116図 15号住居跡出土遺物①……………93	第1866図 30号住居跡出土遺物……………156
第48 図 49号住居跡……………36	第117図 15号住居跡出土遺物②……………94	第1877図 31号住居跡……………157
第49 図 49号住居跡出土遺物……………37	第118図 16号住居跡……………95	第1888図 38号住居跡……………158
第50 図 53号住居跡……………38	第119図 16号住居跡出土遺物①……………96	第1899図 38号住居跡出土遺物①……………159
第51 図 53号住居跡出土遺物……………39	第120図 16号住居跡出土遺物②……………97	第1900図 38号住居跡出土遺物②……………160
第52 図 54号住居跡……………40	第121図 18号住居跡……………98	第1911図 51号住居跡・出土遺物……………161
第53 図 54号住居跡出土遺物①……………40	第122図 18号住居跡竈土層図……………99	第1922図 56号住居跡……………162
第54 図 54号住居跡出土遺物②……………41	第123図 18号住居跡遺物分布図……………99	第1933図 56号住居跡出土遺物①……………163
第55 図 55号住居跡……………42	第124図 18号住居跡出土遺物①……………101	第1944図 56号住居跡出土遺物②……………164
第56 図 55号住居跡出土遺物①……………42	第125図 18号住居跡出土遺物②……………102	第1955図 60号住居跡……………164
第57 図 55号住居跡出土遺物②……………43	第126図 18号住居跡出土遺物③……………103	第1966図 60号住居跡出土遺物……………165
第58 図 57号住居跡……………44	第127図 18号住居跡出土遺物④……………104	第1977図 63号住居跡……………166
第59 図 57号住居跡出土遺物①……………45	第128図 18号住居跡出土遺物⑤……………105	第1988図 63号住居跡出土遺物①……………168
第60 図 57号住居跡出土遺物②……………46	第129図 18号住居跡出土遺物⑥……………106	第1999図 63号住居跡出土遺物②……………169
第61 図 58号住居跡……………47	第130図 20号住居跡……………107	第2000図 63号住居跡出土遺物③……………170
第62 図 58号住居跡出土遺物……………48	第131図 20号住居跡出土遺物①……………108	第2011図 66号住居跡……………170
第63 図 61号・62号住居跡……………49	第132図 20号住居跡出土遺物②……………109	第2022図 69号住居跡出土遺物……………171
第64 図 61号・62号住居跡出土遺物……………50	第133図 22号住居跡……………110	第2033図 69号住居跡出土遺物……………171
第65 図 64号・62号住居跡……………51	第134図 22号住居跡出土遺物……………111	第2044図 69号住居跡……………172
第66 図 64号住居跡出土遺物……………52	第135図 24号住居跡……………112	第2055図 74号住居跡・出土遺物……………173
第67 図 67号住居跡……………53	第136図 24号住居跡出土遺物①……………113	第2066図 74号住居跡・出土遺物……………174
第68 図 67号住居跡出土遺物①……………54	第137図 24号住居跡出土遺物②……………114	第2077図 79号住居跡・出土遺物……………175
第69 図 67号住居跡出土遺物②……………55	第138図 27号住居跡……………115	第2088図 79号住居跡出土遺物①……………176

第209図	79号住居跡出土遺物①	177	第255図	82号住居跡出土遺物③	222	第303図	出土石器①	293	
第210図	80号住居跡	178	第256図	110号住居跡	223	第304図	出土石器②	294	
第211図	80号住居跡出土遺物①	179	第257図	110号住居跡出土遺物①	224	第305図	出土石器③	295	
第212図	80号住居跡出土遺物②	180	第258図	110号住居跡出土遺物②	225	第306図	出土石器④	296	
第213図	84号住居跡	181	第259図	110号住居跡出土遺物③	226	第307図	出土石器⑤	297	
第214図	84号住居跡出土遺物	182	第260図	110号住居跡出土遺物④	227	第308図	出土石器⑥	298	
第215図	127号住居跡	182	第261図	110号住居跡出土遺物⑤	228	第309図	出土石器⑦	299	
第216図	獨立柱建物跡・竪穴式遺構 井戸跡・土坑・溝跡分布区	183	第262図	110号住居跡出土遺物⑥	229	第310図	出土石器⑧	300	
第217図	1号竪穴式遺構	184	第263図	110号住居跡出土遺物⑦	231	第311図	出土石器⑨	301	
第218図	7号竪穴式遺構	184	第264図	122号住居跡・出土遺物	232	第312図	出土石器⑩	302	
第219図	59号竪穴式遺構	185	第265図	129号住居跡	232	第313図	出土石器⑪	303	
第220図	65号竪穴式遺構	185	第266図	129号住居跡出土遺物	233	第314図	出土石器⑫	304	
第221図	65号竪穴式遺構出土遺物	186	第267図	2号竪穴式遺構・出土遺物	234	第315図	出土石器⑬	305	
第222図	獨立柱建物跡分布区	186	第268図	1号埋藏	234	第316図	石部分布全体図	306	
第223図	獨立柱建物跡埋藏分布区	187	第269図	1号埋藏出土遺物	234	第317図	ブロック設定図	307	
第224図	1号・2号獨立柱建物跡	187	第270図	2号埋藏	234	第318図	1号ブロック器類石部 分布区	308	
第225図	3号・4号獨立柱建物跡	193	第271図	2号埋藏出土遺物	235	第319図	1号ブロック母岩別石部 分布区	309	
第226図	5号・6号・7号獨立柱 建物跡	194	第272図	5号・16号土坑・出土遺物	248	第320図	2号ブロック器類石部 分布区	310	
第227図	8号・9号・10号獨立柱 建物跡	195	第273図	20号・25号土坑・出土遺物	249	第321図	2号ブロック母岩別石部 分布区	311	
第228図	11号・12号・13号獨立柱 建物跡・出土遺物	196	第274図	25号・31号・33号土坑・ 出土遺物	250	第322図	3号ブロック器類石部 分布区	312	
第229図	14号・15号獨立柱建物跡・ 出土遺物	197	第275図	40号・42号土坑・出土遺物	251	第323図	3号ブロック母岩別石部 分布区	313	
第230図	16号・17号獨立柱建物跡	198	第276図	67号・141号・143号・148号 土坑・出土遺物	252	第324図	4号ブロック器類石部 分布区	314	
第231図	18号・19号獨立柱建物跡・ 出土遺物	199	第277図	155 A号・163号・170号土坑・ 出土遺物	253	第325図	4号ブロック母岩別石部 分布区	315	
第232図	3号井戸跡	200	第278図	175号・177 A号・184号土坑・ 出土遺物	254	第326図	5号ブロック器類石部 分布区	316	
第233図	4号井戸跡	200	第279図	185号・188号・223号・224号・ 236号・231号・240号・241号 土坑・出土遺物	255	第327図	5号ブロック母岩別石部 分布区	317	
第234図	3号・4号井戸跡出土遺物	201	第280図	236号・248号・252号土坑・ 出土遺物	256	第328図	6号ブロック器類石部 分布区	318	
第235図	4号・75号・145号・358 B号 土坑・出土遺物①	203	第281図	257号・258号・264号・273号・ 319号・338 A号土坑・ 出土遺物	257	第329図	6号ブロック母岩別石部 分布区	319	
第236図	362 B号・363 B号・364 B号・ 365 B号・366 B号・423号 424号・446号土坑	204	第282図	342 A号・345号・361 B号・ 365 A号・366 A号・369 B号 土坑・出土遺物	258	第330図	8号土坑・出土遺物	320	
第237図	溝跡土層①②③	204	第283図	388号土坑・出土遺物	259	第331図	石材別石部分布全体図	321	
第238図	溝跡土層④⑤	205	第284図	405号・411号土坑・出土遺物	260	第332図	接合全体図	322	
第239図	5号・6号・8号・9号・ 10号・11号・13号・16号溝・ 出土遺物	206	第285図	遺跡出土縄文土層①	260	第333図	土層状況 附編第1図	328	
第240図	39号周溝式遺構	207	第286図	遺跡出土縄文土層②	261	第334図	土層状況 附編第2図	328	
第241図	埋藏遺構	207	第287図	遺跡出土縄文時代石部①	263	第335図	火山ガラス比イヤグラム 附編第3図	328	
第242図	遺跡出土遺物 (古墳時代(中・近世))	208	第288図	遺跡出土縄文時代石部②	264	第336図	塚下遺跡 炭化材出土 住居跡	331	
第243図	塚下遺跡縄文時代遺構 全体図	209	第289図	遺跡出土縄文時代石部③	265	第337図	上柳沢遺跡位置図	338	
第244図	32号住居跡	210	第290図	遺跡出土縄文時代石部④	266	第338図	上柳沢遺跡第1図	340	
第245図	32号住居跡出土遺物①	211	第291図	遺跡出土縄文時代石部⑤	267	第339図	上柳沢遺跡調査区全体図	344	
第246図	32号住居跡出土遺物②	212	第292図	遺跡出土縄文時代石部⑥	268	第340図	上柳沢遺跡第3図	344	
第247図	70号住居跡	213	第293図	遺跡出土縄文時代石部⑦	269	第341図	溝跡・井戸跡・出土遺物	347	
第248図	70号住居跡出土遺物①	214	第294図	遺跡出土縄文時代石部⑧	270	第342図	上柳沢遺跡第4図	348	
第249図	70号住居跡出土遺物②	215	第295図	遺跡出土縄文時代石部⑨	271	第343図	溝跡・土坑・出土遺物	348	
第250図	70号住居跡出土遺物③	216	第296図	縄文時代石部出土遺構	272		上柳沢遺跡第5図	353	
第251図	70号住居跡出土遺物④	217	第297図	縄文時代石部出土遺物	272		上柳沢遺跡 附編 第1図	357	
第252図	82号住居跡	218	第298図	旧石器時代周辺の遺跡	274		土層状況 附編 第2図	363	
第253図	82号住居跡出土遺物①	219	第299図	北国東国連旧石器時代 地形図	276		上柳沢遺跡	363	
第254図	82号住居跡出土遺物②	221	第300図	塚下遺跡地形図	277		上柳沢遺跡第6図	363	
				塚下遺跡基本土層及び調査区 土層	278			363	
				第301図	塚下遺跡旧石器時代 調査区図	280			363
				第302図	その他の石器	282			363

写真目次

PL. 1	塚下遺跡 全体	13号住居跡	41号住居跡
PL. 2	3号・14号・15号住居跡 4号住居跡	34号住居跡	41号住居跡 1電
	10号住居跡	34号住居跡遺構出土状況	42号住居跡
	10号住居跡 1号・2号電	PL. 3	35号住居跡
	12号住居跡		36号住居跡
			37号住居跡
			37号住居跡遺構出土状況
			PL. 4
			41号住居跡
			42号住居跡
			42号住居跡遺構出土状況
			44号住居跡
			44号住居跡貯蔵穴
			45号住居跡

PL. 5	45号住居跡貯藏穴	PL. 16	49号住居跡出土遺物②	PL. 31	80号住居跡竈
	47号住居跡		53号住居跡出土遺物		80号住居跡貯藏穴遺物出土狀況
	47号住居跡竈		54号住居跡出土遺物		2号住居跡
	48号住居跡		55号住居跡出土遺物①		2号住居跡遺物出土狀況
	48号住居跡竈遺物出土狀況		55号住居跡出土遺物②		6号住居跡
PL. 6	49号住居跡	PL. 17	57号住居跡出土遺物①	PL. 18	8号住居跡
	49号住居跡竈遺物出土狀況		57号住居跡出土遺物②		9号住居跡
	53号住居跡		58号住居跡出土遺物		9号住居跡貯藏穴
	53号住居跡竈		61号住居跡出土遺物		19号住居跡
	54号住居跡		62号住居跡出土遺物		19号住居跡貯藏穴遺物出土狀況
PL. 7	54号住居跡竈	PL. 19	67号住居跡出土遺物①	PL. 20	21号住居跡
	55号住居跡		67号住居跡出土遺物②		21号住居跡遺物出土狀況
	55号・56号住居跡		71号住居跡出土遺物		23号住居跡
	57号住居跡		75号住居跡出土遺物		25号住居跡
	57号住居跡掘形		78号住居跡出土遺物		26号住居跡
PL. 8	58号住居跡掘形	PL. 21	85号住居跡出土遺物	PL. 22	26号住居跡貯藏穴遺物出土狀況
	58号住居跡床下土坑		87号住居跡出土遺物①		28号住居跡掘形
	61号住居跡		87号住居跡出土遺物②		29号住居跡
	62号住居跡		90号住居跡出土遺物		28号住居跡
	64号住居跡		91号住居跡出土遺物		28号住居跡貯藏穴
PL. 9	64号住居跡掘形	PL. 23	94号住居跡出土遺物①	PL. 24	28号住居跡床下土坑
	67号住居跡		94号住居跡出土遺物②		51号住居跡
	67号住居跡竈遺物出土狀況		99号住居跡出土遺物		51号住居跡貯藏穴 1・貯藏 2
	68号住居跡		123号住居跡出土遺物		51号住居跡貯藏穴 4
	71号住居跡		128号住居跡出土遺物		56号住居跡掘形
PL. 10	75号住居跡	PL. 24	135号住居跡出土遺物	PL. 25	56号住居跡貯藏穴
	75号住居跡竈遺物出土狀況		136号住居跡出土遺物		60号住居跡
	77号住居跡		1号住居跡		63号住居跡
	77号住居跡遺物出土狀況		1号住居跡遺物出土狀況		63号住居跡貯藏穴
	78号住居跡		1号住居跡貯藏穴遺物出土狀況		63号住居跡遺物出土狀況
PL. 11	78号住居跡遺物出土狀況	PL. 26	1号住居跡竈	PL. 27	66号住居跡
	85号住居跡		5号住居跡		66号住居跡遺物出土狀況
	85号住居跡遺物出土狀況		5号住居跡竈		76号住居跡
	86号住居跡		16号住居跡		76号住居跡貯藏穴
	86号住居跡竈遺物出土狀況		16号住居跡掘形		79号住居跡
PL. 12	87号住居跡	PL. 28	18号住居跡	PL. 36	79号住居跡貯藏穴
	87号住居跡遺物出土狀況		18号住居跡竈		79号住居跡遺物出土狀況
	88号住居跡		18号住居跡貯藏穴		79号住居跡遺物出土狀況
	88号住居跡竈遺物出土狀況		22号住居跡		83号住居跡
	90号住居跡		22号住居跡竈		83号住居跡掘形
PL. 13	90号住居跡遺物出土狀況	PL. 29	22号住居跡貯藏穴	PL. 37	84号住居跡
	91号住居跡		22号住居跡貯藏穴遺物出土狀況		127号住居跡掘形
	91号住居跡竈遺物出土狀況		22号住居跡貯藏穴遺物出土狀況		1号掘立柱建物跡
	94号住居跡		24号住居跡		2号掘立柱建物跡
	94号住居跡竈遺物出土狀況		24号住居跡貯藏穴		3号掘立柱建物跡
PL. 14	99号住居跡	PL. 30	24号住居跡貯藏穴	PL. 38	4号掘立柱建物跡
	123号住居跡		27号住居跡		5号掘立柱建物跡
	126号住居跡掘形		29号住居跡		6号掘立柱建物跡
	128号住居跡掘形		29号住居跡貯藏穴		3号井戸跡
	135号・137号住居跡		33号住居跡		4号井戸跡
PL. 15	136号住居跡	PL. 31	33号住居跡遺物出土狀況	PL. 39	1号・2号溝跡土層断面
	調査風景		40号住居跡		3号溝跡土層断面
	調査風景		40号住居跡遺物出土狀況		4号溝跡土層断面
	3号住居跡出土遺物		40号住居跡竈遺物出土狀況		5号溝跡
	4号住居跡出土遺物		40号住居跡貯藏穴		8号溝跡
PL. 16	10号住居跡出土遺物	PL. 32	46号住居跡	PL. 40	9号溝跡
	12号住居跡出土遺物①		46号住居跡遺物出土狀況		10号溝跡土層断面
	12号住居跡出土遺物②		46号住居跡竈		11号溝跡
	13号住居跡出土遺物		46号住居跡遺物出土狀況		13号溝跡
	17号住居跡出土遺物		50号住居跡		13号溝跡遺物出土狀況
PL. 17	34号住居跡出土遺物	PL. 33	50号住居跡遺物出土狀況	PL. 41	16号溝跡
	35号住居跡出土遺物		50号住居跡貯藏穴遺物出土狀況		16号溝跡土層断面
	36号住居跡出土遺物		50号住居跡竈周刃遺物出土狀況		1号住居跡出土遺物
	37号住居跡出土遺物		50号住居跡遺物出土狀況		5号住居跡出土遺物
	41号住居跡出土遺物		50号住居跡竈遺物出土狀況		15号住居跡出土遺物
PL. 18	42号住居跡出土遺物	PL. 34	72号住居跡	PL. 42	16号住居跡出土遺物
	44号住居跡出土遺物		72号住居跡遺物出土狀況		18号住居跡出土遺物①
	45号住居跡出土遺物①		80号住居跡		18号住居跡出土遺物②
	45号住居跡出土遺物②		80号住居跡		18号住居跡出土遺物③
	47号住居跡出土遺物		80号住居跡竈		18号住居跡出土遺物④
PL. 19	48号住居跡出土遺物	PL. 35	80号住居跡竈	PL. 43	18号住居跡出土遺物5
	49号住居跡出土遺物①		80号住居跡竈		18号住居跡出土遺物6
			80号住居跡竈		18号住居跡出土遺物7
			80号住居跡竈		18号住居跡出土遺物8
			80号住居跡竈		18号住居跡出土遺物9

PL.48	20号住居跡出土遺物	75号土坑	148号土坑出土遺物
	22号住居跡出土遺物(1)	PL.69	155 A号土坑出土遺物
PL.49	22号住居跡出土遺物(2)		163号土坑出土遺物
	24号住居跡出土遺物(1)		170号土坑出土遺物
PL.50	24号住居跡出土遺物(2)		175号土坑出土遺物
	27号住居跡出土遺物		177 A号土坑出土遺物
	29号住居跡出土遺物		184号土坑出土遺物
PL.51	33号住居跡出土遺物		PL.94
	40号住居跡出土遺物(1)	PL.70	184号、185号・188号・223号・ 224号、241号土坑出土遺物
PL.52	40号住居跡出土遺物(2)		226号土坑出土遺物(1)
	46号住居跡出土遺物(1)		PL.95
PL.53	46号住居跡出土遺物(2)		226号土坑出土遺物(2)
	50号住居跡出土遺物(1)		248号土坑出土遺物
PL.54	50号住居跡出土遺物(2)		252号土坑出土遺物
PL.55	50号住居跡出土遺物(3)		257号土坑出土遺物
PL.56	50号住居跡出土遺物(4)		258号土坑出土遺物
PL.57	50号住居跡出土遺物(5)		264号土坑出土遺物
	72号住居跡出土遺物		273号土坑出土遺物
	80号住居跡出土遺物(1)	PL.71	319号土坑出土遺物
	80号住居跡出土遺物(2)		338 A号土坑出土遺物
PL.58	80号住居跡出土遺物(3)		342 A号土坑出土遺物
PL.59	80号住居跡出土遺物(4)		345号土坑出土遺物
	2号住居跡出土遺物		361 B号土坑出土遺物
	11号住居跡出土遺物		PL.96
PL.60	19号住居跡出土遺物		365 A号土坑出土遺物
	21号住居跡出土遺物(1)		369 B号土坑出土遺物
PL.61	21号住居跡出土遺物(2)	PL.72	388号土坑出土遺物
	23号住居跡出土遺物		405号土坑出土遺物
	30号住居跡出土遺物		411号土坑出土遺物
	38号住居跡出土遺物		遺跡出土土器
	51号住居跡出土遺物		PL.97
PL.62	56号住居跡出土遺物		遺跡出土石器(1)
	60号住居跡出土遺物		PL.98
	63号住居跡出土遺物(1)		遺跡出土石器(2)
PL.63	63号住居跡出土遺物(2)	PL.73	PL.99
PL.64	63号住居跡出土遺物(3)		遺跡出土石器(3)
	74号住居跡出土遺物		PL.100
	79号住居跡出土遺物	PL.75	遺跡出土石器(4)
PL.65	83号住居跡出土遺物	PL.76	PL.101
	84号住居跡出土遺物		遺跡出土石器(5)
	3号井戸出土遺物	PL.78	PL.102
	4号井戸出土遺物		遺跡出土石器(6)
	75号土坑出土遺物	PL.79	PL.103
	363 B号土坑出土遺物		遺跡出土石器(7)
	16号溝出土遺物	PL.80	PL.104
PL.66	32号住居跡		遺跡出土石器(8)
	70号住居跡	PL.81	PL.105
	70号住居跡遺物出土状況		遺跡出土石器(9)
	70号住居跡遺物出土状況	PL.82	PL.106
	70号住居跡遺物出土状況		旧石器出土状況
	70号住居跡伊勢	PL.83	PL.107
	70号住居跡伊勢		1号・2号・3号ブロック
PL.67	82号住居跡	PL.84	2号・3号・4号・5号ブロック
	82号住居跡遺物出土状況		4号ブロック
	82号住居跡埋藏跡	PL.85	5号ブロック
	82号住居跡埋藏跡		6号ブロック
	110号住居跡	PL.86	調査風景
	110号住居跡遺物出土状況		調査風景
	110号住居跡遺物出土状況	PL.87	調査風景
	110号住居跡伊勢		PL.108
PL.68	31号土坑	PL.88	旧石器遺物(1)
	33号土坑		PL.109
	40号土坑	PL.89	旧石器遺物(2)
	42号土坑		PL.110
	60号土坑		旧石器遺物(3)
	67号土坑		PL.111
	75号土坑遺物出土状況		旧石器遺物(4)
			PL.112
			旧石器遺物(5)
			PL.113
			旧石器遺物(6)
			PL.114
			旧石器遺物(7)
			PL.115
			旧石器遺物(8)
			PL.116
			旧石器遺物(9)
			PL.117
			旧石器遺物(10)
			PL.118
			旧石器遺物(11)
			上柳穴遺跡
			PL.1
			遺跡遠景・側面全景・本線部
			1号・2号・3号溝跡
			PL.2
			2号・3号・6号・7号・8号溝跡
			PL.3
			3号・4号溝・1号井戸跡
			PL.4
			1号・4号・5号溝跡・1号土坑

塚下遺跡報告書抄録

書名ふりがな	つかしたいせき
書名	塚下遺跡(2)
副書名	北関東自動車道(伊勢崎～県境)地域埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	第414集
編著者名	関根慎二/関口博幸/綿貫邦男
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	2007.12.1
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橋町下箱田784-2
遺跡名ふりがな	つかしたいせき
遺跡名	塚下遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんいせさきしかみだまち
遺跡所在地	群馬県伊勢崎市上田町
市町村コード	10-204
遺跡番号	21005-00705
北緯(日本測地系)	36°20'47"
東経(日本測地系)	139°14'36"
北緯(世界測地系)	36°20'58"
東経(世界測地系)	139°14'24"
調査期間	20010801—20020924
調査面積	7357㎡
調査原因	高速道路建設(北関東自動車道)
種別	集落
主な時代	旧石器/縄文/古墳/奈良・平安
遺跡概要	旧石器ブロック/縄文中期竪穴+埋壘+土坑/縄文包含層/古墳前・中期竪穴+掘立/奈良・平安竪穴+掘立
特記事項	縄文・鉄模倣土製品/古墳竪穴-高坏多量廃棄/奈良竪穴-「井」刻書土器/平安竪穴-「乙」墨書土器-鍛冶滓

要約

遺跡は赤城山南麓末端部で大間々屈状地標高900m付近の湧水を背景にする。旧石器、縄文、古墳、奈良・平安の各時代で構成される。旧石器時代は、槍先形先器器・ナイフ形・彫刻刀形・楔形石器など石器関連116点。縄文時代は、中期竪穴13軒の埋壘等。古墳時代は前期から中・後期にかけての竪穴45軒(前期2、中・後期17)。中期には高坏・壺が多量に出土する竪穴がある。奈良・平安時代は竪穴59軒。刻・掘書土器「井」・「乙」、鉄滓・鉄塊が出土する竪穴も多い。古墳、奈良・平安時代の集落と単位集落的構造とその変遷が窺われる。

IV. 塚下遺跡の概要

北方から広がる赤城山の南裾野が平野部に移行する末端部に立地する塚下遺跡は、大間々扇状地の標高約90m付近に点在する伏流水の湧水地を背景として展開した遺跡の一つである。大間々扇状地は、渡良瀬川が足尾山地を流れ出る谷口にある大間々町を扇頂とし、西は赤城山南東斜面、東は八王子丘陵・金山丘陵を限りとする。地界は東西約14km、南北約16kmに及ぶ範囲で関東地方3番目に大きな扇状地である。大量の砂礫を堆積させた渡良瀬川は、その後現流路が変わったため扇中央部に河川の無い広大な乾燥地帯を形成した。

一方、基盤層である厚い砂礫層を流れたたわゆる地下水や扇状地形に降った雨水は扇先端部で多くの湧水点を出現させている。これらを源として小河川が生まれ、南を画す利根川に沿って形成された帯状の自然堤防との間は広範な沖積低地となっている。この湧水点が重要な遺跡の立地条件の一つとなっており、沖積地帯を臨む低舌状台地の先端部にある塚下遺跡は西を道下遺跡に、東は上柳沢遺跡に続くが、両者からは湧水地からの流水に開析された谷地地形で区切られる。(第1図～第3図、図線カラー)

本遺跡の成り立ちは旧石器時代に端を発し、概略は縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代に連なり基本的性格は一貫して集落遺跡であるとすることができよう。遺跡は自動車道路本線域と側道部に分割調査され分冊報告の形態をとっているが、遺跡の概要等総合的な記述を要する項目では両者を一括して扱ってある。

旧石器時代は遺跡地西側の南西方向に緩く傾斜する台地縁辺にある。遺物分布に明確な集中傾向はないが約30mの範囲に加工・非加工の石材資料数120余点中に、石器関連資料が116点とその大多数を占めている。主な石器種には、槍先形先頭器・ナイフ形石器・彫刻刀形石器・楔形石器などがある。近年、この湧水地を巡る一帯では多くの調査・発見が続いている。今後、県内での後期旧石器時代研究の中心的地域になろう。

縄文時代は縄文中期を中心とする段階に集落跡が形成されている。しかし、縄文時代前半期と後



第1図 大間々扇状地形

Ⅳ、塚下遺跡の概要



第2図 北関東自動車道(伊勢崎～県境)関連道路位置図

番号	K.T	道路名	所在地(調査時)
1	340	替上遺跡	伊勢崎市三和町
2	350	天ヶ丘遺跡	伊勢崎市三和町
3	360	大上遺跡	佐波郡東村西小保方・上田
4	370	前道下遺跡	佐波郡東村上田
5	380	塚下遺跡	佐波郡東村上田
6	390	上柳元遺跡	佐波郡東村東小保方
7	400	瀬西遺跡	下元車敷遺跡
8	410	下田遺跡	佐波郡東村田部井
9	420	南原加遺跡	佐波郡東村田部井
10	430	南原加遺跡	佐波郡東村田部井
11	440	下久保遺跡	佐波郡東村田部井
12	450	大久保御前遺跡	新田郡家本町大久保

13	510	大原白石遺跡	新田郡家本町大原
14	520	山ノ神野田遺跡	新田郡家本町山ノ神
15	530	山ノ神野田遺跡	新田郡家本町山ノ神
16	540	藪野西野遺跡	新田郡家本町藪野
17	550	西長岡橋岡古遺跡	本田市長岡町
18	560	島合戸遺跡	本田市長岡町
19	570	西長岡宿遺跡	本田市長岡町
20	580	菅集遺跡群	本田市菅集町
21	590	成塚向山古墳群	本市成塚町
22	600	成塚向山古墳群	本市成塚町・北金井町
23	610	大鷲遺跡群	本市大鷲町
24	620	上巻戸遺跡群	本市強戸町
25	630	鎌山遺跡	本市強戸町字鎌山

26	640	萩原遺跡	太田市緑町
27	650	古水多摩水田跡	太田市緑町
28	660	二の宮遺跡	太田市緑町
29	670	八ヶ入遺跡	太田市緑町・車今泉町
30	680	大道西遺跡	太田市車今泉町
31	690	大道東遺跡	太田市車今泉町
32	700	栗駒遺跡	太田市只上町
33	710	鹿島津遺跡	太田市車今泉町
34	720	向矢部遺跡	太田市只上町
35	730	矢部遺跡	太田市只上町
36	740	以上宗町遺跡	太田市只上町
37	750	新島遺跡	太田市只上町
38	760	道原遺跡	太田市只上町

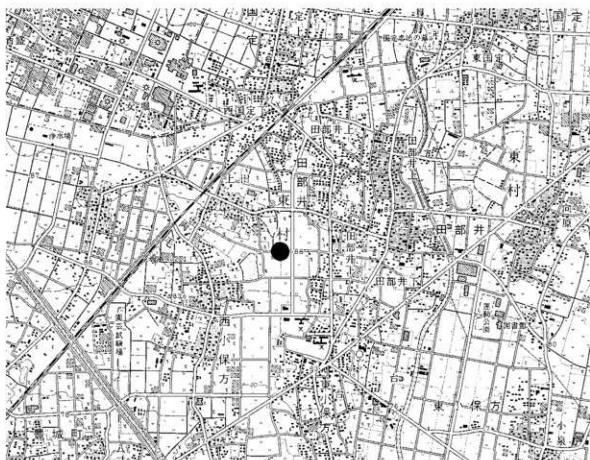
北関東自動車道(伊勢崎～県境)地域 遺跡一覧

IV. 塚下遺跡の概要

半期、それに続く弥生時代の活動痕跡は検出できなかった。遺跡の内容は13軒の竪穴住居跡を主とした構成で、その他の遺構としては埋壙および数基ながら完形度の高い土器を埋納する土坑や袋状土坑などの他、多様な形状や浅・深の土坑群からなる。遺構の分布は調査域に限定してではあるが北側台地の東方中央部に集中して検出されている。

古墳時代における遺跡内容はおおよそ前期から中期（一部後期にかかる）にかけての集落跡である。前期に属すると考えられる竪穴住居跡は28軒からなる。台地中央部に分布し、総体的には南（台地先端部）に向かい緩く弧状に配される。集落の構成形態は、比較的平面規模の大きい住居跡4～5軒が小規模住居を加えての単位集団として、それぞれ円形または半円形の共同集落的配置をとるようである。古墳時代中～後期の住居跡軒数は17軒で、台地先端南寄りに偏在する傾向にある。集落としての構成形態は、前期ほど多くの軒数からなる単位集団的配置をなさず、より縮小化しなお散漫な状況である。また、住居跡規模についてはより顕眼的な大・小格差の発生がみられる。前期から中期への推移の中で、特定大型住居跡が出現し、それが求心的存在になるような個別化小単位の構成体へと変化した階と見るのは穿ちに過ぎようか。

古墳時代について大まかに前期・中期に大別したが、その推移は「前期から中期」という単純な過程ですますことはできない。個々の遺構の中で顕在する差違は施設にあり、竈跡と竈が最も注視されるであろう。その転換は食生活をはじめ家屋の構造的・機能的変化等様々な面に大きな影響を及ぼしたであろう。伊そのものが変化・発展して竈になったのでないならば、そこにはどれ程かであれ生活様式として質的にかき離れたものがあるとおもわれる。また、それぞれの該当期遺構から出土する土器資料に目を転じれば、土器種の

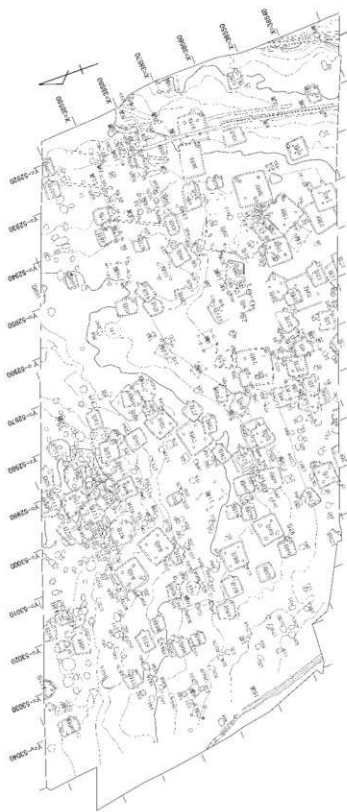


第3図 塚下遺跡位置図（国土地理院「大胡」・「桐生」1/25,000 ●印

Ⅳ、塚下遺跡の概要

組み合わせや個々の形態には時間的な間・断が存在するとは大方の首肯するところであろう。その後の遺跡の展開は、調査域に限って見れば古墳時代前・中期の集落は後期への時間帯に僅かに脚を踏み入れるものの、大々的な集落継続を認めることはできない。その後の遺跡は奈良～平安時代初期までの約250年あまりにわたっては積極的な活動の痕跡を残していないのである。

奈良時代から平安時代に属する竪穴住居跡は59軒である。その分布状況は台地全域に及び、とくに偏在性はない。集落の推移という視点で各住居跡の出土遺物を概観すれば、竪穴住居跡はおおよそ奈良時代から平安時代にかけての段階別変遷が見て取れる。竪穴住居間の重複関係は極めて少なく、切り合いでもその多くが建て替えや拡張したものであるとしたほうが良いであろう。したがって、集落跡の編成経過としては、集落は先行する建物がいまだ認識される程度の共時的環境の連続性にあり、その形成に大きな間断が無い故の現象と考えられる。ただ、このような、集落の段階的区分と継続的推移という相反的な言い様についてはどのような融合的変遷の説明理解が可能なのか、検討課題として残る。その他、古墳時代あるいは平安時代に属する井戸跡4基、掘立柱建物跡18棟、竪穴状遺構4棟、時期不明の溝跡15条がある。(第4図、PL.1)



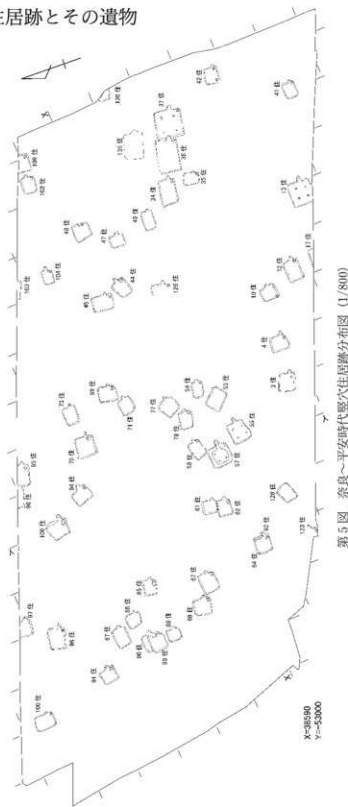
第4図 塚下遺跡全体図 1/800

V. 古代・古墳時代の遺構と遺物

1 奈良・平安時代の竪穴住居跡とその遺物

当該期の竪穴住居跡は総数59軒（内11軒は「塚下遺跡(1)」）で、その分布状況は調査域内である台地全域に及ぶ（第5図）。住居跡の平面形態や構造には幾つか同・異の項目が抽出できる。まず、① 当該期の住居跡の基本的施設である竪は、その付設される位置は観察される全てが北東から東北東方（壁線が面する方向）にあること。② 竪設置軸方位は大別2～3に分類されること。③ 竪の設置壁線から見た平面形状には、横長・縦長・正方形があること。④ 構造的には4柱穴を持つものと、柱穴が全く欠如するものに2分されること。⑤ 出土遺物には製品としての鉄器の他、製鉄・精鉄過程に因って生成される滓類や羽口など鉄生産に纏わる遺物が目立つ。遺跡内出土の滓類全体で、磁気を帯びる鉄塊は8844 μ （住居跡出土は7899 μ ）・鉄滓が1566 μ になり、遺構出土の大半は奈良・平安時代に集中すること。

これらを含め、集落の具体的な内容の理解に近づくために、大まかな変遷ではあるが竪穴住居跡を大別以下の時期に分類した。その時間的・段階的変遷は出土土器の編年の様相から、奈良～平安時代前半・平安時代中頃そして後半の三段階として大略理解できよう。各段階の竪穴住居数はそれぞれ、奈良～平安前半が17軒、平安中頃が13軒で後半段階が25軒に集約され、各段階における住居跡の分布状況は第6～8図ようになる。しかし、段階の設定はそこに決定的な画期や断絶



第5図 奈良～平安時代竪穴住居跡分布図 (1/800)

V、古代・古墳時代の遺構と遺物

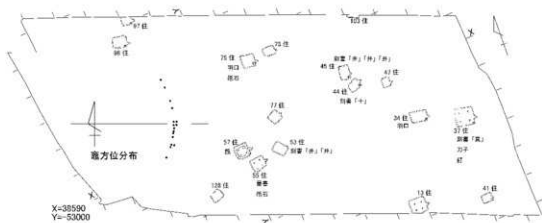
を求めることを意図したことはない。結果的に、段階ごとの分布に表象されることは、遺構数に多少の増減をきたしつつも有機的關係に基づいた継続的集落として良いと思われることである。

ここでは極概観的ではあるが、集落構成の基本となる最小単位の認識や出土遺物などから各段階の特徴を述べようと思う。単位抽出の観点は、住居が接近して建てられるという表層的な現象の他に、電設置の軸方位の近似値傾向が同調するのではないかという希望的憶測による。しかし、電設置軸方位による分類が適合する単位が各段階における小期的な時間軸による産物として理解すべきものか、同時存在の別単位の判断はできていない。したがって、単独的な住居跡についても同様な問題として残されている。これにはより精緻な土器編年論的分析手法が有効と考えるが、当報告書においては土器編年にまでは論がおよばず、上述した3段階の設定に止める。

奈良～平安時代前半段階 (第6図)

古墳時代中期以後やや長い空白期を経て、集落形成を見る段階である。17軒の竪穴住居跡群(含む側道)から構成され、重複するものはない。偏在性はなく調査域全体に分布する。13・34・37・41・44・45・47・53・55・57・73・75・77・97・98・109・128号の各住居跡が該当する。その分布状況からはおおよそ2軒一対が単位と認めうるものが7単位(一部3軒)ある。電設置軸方位は大別3つに分類が可能である。方位による括りは分布単位とおおよそで一致し、この組み合わせからは2軒一対で6単位が抽出される。また、単位を形成しない44・45・47・128号住居跡に関しての位置付けはできていない。平面形状には横長・縦長・正方形の3形態があり、正方形形状の住居跡が多数を占める。また、4柱穴を持つ住居跡は当段階に限られる。13号・37号・55号・57号住居跡があり群中での規模はいずれも大型に属している。

出土遺物には、文字資料で刻書・墨書土器、刻書紡錘輪がある。刻書土器は45号住居跡で、見込み部及び底部にそれぞれ『井』と刻す土器器・須恵器環が3個体、53号住居跡からは前者より小体同字『井』を底部に刻す土器器環2個体を出土する。44号住居跡には『十』刻書が、その他37号住居跡には『真』の刻文字がある。墨書土器は55・98号住居跡より各『里カ』・『中カ』の須恵器小片が出土する。鉄製品は37号住居跡に刀子・釘があり、その他製・精鉄に関わる羽口・鉄塊・鉄滓などを有する遺構には13・34・37・57・75・77号住居跡がある。滓類出土重量比率は、鉄塊量2498/8844²⁾で28% (住居分は31.5%)、鉄滓量168/1566²⁾ (11%)になる。土器類には、須恵器櫃で寸胴形の取手付き底部多孔形式である。南関東的な形態で、今のところ県内では希な資料になる。

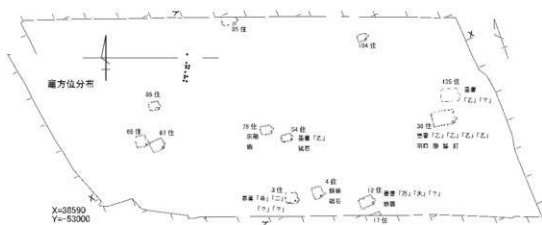


第6図 奈良～平安時代前半段階 (1/1,200)

平安時代中頃段階（第7図）

前段階に比べて若干集落の縮小傾向が見られる。13軒の住居跡で、3・4・12・17・36・54・67・68・85・103・104・135号住居跡が該当し、重複するものはない。分布状況からは前段階よりまとまり良く2軒一对で6単位（一部3軒）を捉えうるが、2分類できる竈設置軸方位とともに符合するものは4単位となる。住居跡の平面形状には横長・縦長・正方形の3形態があり、縦長型が圧倒的に多い。また、住居群中には前段階に存在した柱穴（4柱穴）を有するものはなく、大型住居の数も前段に比べて少なくなっている。規模の大きなものとしては36・135号住居跡の2軒である。

出土遺物には、墨書土器が目立っている。〔乙〕字が36号住居跡より土師器環4個体に、135号住居跡に1個体（他1は不明）。54号住居跡の1個体は逆〔乙〕の〔S〕字になり、不明1点がある。その他、3号住居跡には〔寺〕・〔二〕・〔?〕・〔?〕、12号住居跡には〔大〕・〔大カ〕・〔万カ〕がある。鉄製品は36号住居跡より鉄2点・鋳鉄製品・釘5点など計11点、75号住居跡には刀子、78号住居跡から鉄が、135号住居跡からは刀子他3点の鉄器が検出される。他、4・12号住居跡にも鉄製利器が出土する。また、製・精鉄関連の遺物を出土する遺構には、3・4・12・17・36・67・78・135号の各住居跡がある。鉄塊量1349/8844^gで15%（住居分で17%）、鉄滓量640/1566^g（41%）を有する。土器類には78号住居跡に瓶形灰軸陶器片がある。



第7図 平安時代中頃段階（1/1,200）

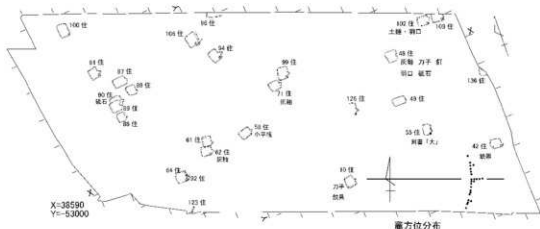
平安時代後半段階（第8図）

住居数25軒からなり、当段階に該当するのは35・42・48・49・58・61・62・64・71・86・87・88・89・90・91・92・94・95・96・99・100・102・106・123・136号住居跡である。集落の拡大傾向が窺われるものの、従来には無かった重複（建て替え）現象がみられる。このことは当段階の時間的長さに由来する変遷過程か、または集落構造自体に何らかの変化が生じている可能性もある。分布状況や3分類される竈設置軸方位に符合する単位の抽出は、重複関係を加味すれば4例に止まり、住居跡の単分散化の動きが看取される。また、柱穴を有しなお大型住居跡はなく小型均等化した規模になっている。住居跡の平面形状は、横長・縦長・正方形の3形態があり、正方形型のものが多い。

出土遺物には、比較的豊富であった文字資料は少なく、35号住居跡に刻書土器「大」、96号住居跡に「十」95・99号住居跡に各1点の墨書土器「?」がある。鉄製品は比較的豊富で10号住には鉸貝・刀子、48号住に刀子・釘、94号住に板状鉄器、99号住に鎌、100号住に刀子、136号住に大釘のほか42号住にも鉄器が検出される。また、48号住居跡の竈支脚には完形の羽口が用いられている。なお製・精鉄関連の遺物は、42・126・

V. 古代・古墳時代の遺構と遺物

99・61・64・92・123・88・89・90・91号住居跡を除く半数以上の住居跡が有する。鉄塊量2897/8844²で33%（住居分は36.5%）、鉄滓702/1566²（45%）になる。土器類は48号・62号住居跡に灰軸陶器が、58号住居跡からは須恵器小型平瓶が、94号住居跡には当遺跡唯一緑軸陶器境片が出土する。



第8図 平安時代後半段階 (1/1,200)

以上、各段階の特徴を概観してきたが、最も注意を喚起されるものの一つに製・精鉄・鍛冶関連遺物としての羽口・鉄塊・鉄滓があらう。量の多寡は当然のごとく大きな問題であるが、各段階の住居跡に比較的満遍なく検出されるそれらの存在は遺跡の性格をうかがい知るには重要な事項であらう。しかしながら、遺跡内においては塊・滓を産するような工房跡的な遺構または施設が検出されておらず、それらの出自を特定することができない。また、塊・滓の各遺構からの出土状況もその多くは埋土中に見いだされるとされるものも少なくない。調査記録上では、これらの遺物は奈良～平安時代の住居跡を主とする遺構以外に、古墳時代前期・中期とした住居跡からも検出されている。しかし、本遺跡においては、その種の遺物を出土する前記古墳時代の遺構自体の少なさと出土量の微量さとともに、遺跡の変遷過程を考慮して古墳時代の遺構と遺物には有機的な関連が無いと考えている。ただし、このことは古墳時代における製・精鉄の存在を否定するというものではないことをお断りしておく。

塚下遺跡における製鉄・精鉄関連の各種遺物については、遺構との関係がいま一明瞭さを欠いていることは述べたが、これらは近接域内や隣接遺跡からの二次的搬入が最も自然に帰結されることである。それ故なお出土状況など、調査段階でのより詳細な所見・説明と分析的な記録・情報収集が望まれる。なお、このような当遺跡の状況で製・精鉄の工程に積極的に関わると評価すれば、生産初期工程に因る大・小型滓から鉄塊・鉄滓への小割分離や分選・素材としての鉄塊集積などの機能が想定できそうである。鉄生産の諸過程においては、工房跡的な遺構や施設のない一般的集落の様相（表層的には）のままに、大規模・重厚な施設を必要としない工程などは全くの考慮外のことであらうか。今後、遺跡や個別遺構についてはより多面的視点での調査と記録収集の方法が望まれる。

近年、赤城山南面平野部では多様な生産遺跡の存在が明らかになりつつある。当遺跡周辺域においても多くの製鉄炉や炭室など製鉄に関連する遺跡・遺構の発見・調査がおこなわれている。それら生産域からはやや後背地的位置にある塚下遺跡については、直接的生産遺跡とともに集積・流通などを含めた総合的・多面的鉄生産体制の中での一工程を担う遺跡としてみる視点もあらうか。

3号住居跡 (第9～11図、PL. 2・11)

位置は、座標値 X561～566・Y-987～993の範囲にある。

重複は、古墳時代後期15号・前期26号住居跡と西側で重なる。

平面形状は、西壁線は重複による確認の困難さから検出が遅れ不鮮明であるが、東西方向に長軸をもつ略方形を呈しよう。

規模は、長軸4.9m+ ϕ ・短軸3.6mである。壁高は34cmを測る。床面積は16.0m²を有する。

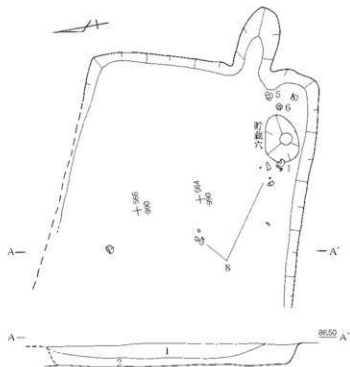
主軸方位は、N-74°-Wを示す。

埋土は2層に大別され、下位層にloam粒を多く混入する

竈は、東壁南に偏って付設され壁線を約90cmと大きく穿って構築する。火床部は壁線外にある。袖部は検出されていないが、火床部の位置から見て、本来的に具備していない形態と考えられる。

貯蔵穴は、南東隅、竈右手にあり楕円形状を呈し、すり鉢状に落ち込む。径76×56cm・深さ31cmを測る。なお、柱穴は検出されていない。

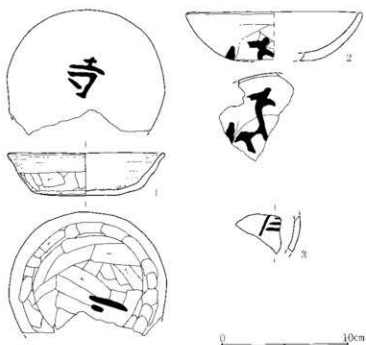
出土遺物は、貯蔵穴周辺より土師器環・甕、須恵器塊などがありいずれも完形度が低い。土師器環(1～3)は体部を細かく横位削り方を施し、上位に指頭痕を残す平底気味の形状をもつ。墨書文字を有する環3点がある。うち1点(1)は底部と見込み部にそれぞれに1字を書き。底部は「二」に、見込み部は「寺」と読める。須恵器塊(4～6)はいずれも酸化炎焼成で右回転の轆轤で付け高台。土師器甕(7～9)は「コ」の字口縁と知れる3点で、形状は口縁部周辺の復元に止まる。鉄塊20g 中



3号住

1. 黒褐色土 白色軽石多混、loam小塊少混
2. 暗褐色土 loam粒多混

第9図 3号住居跡

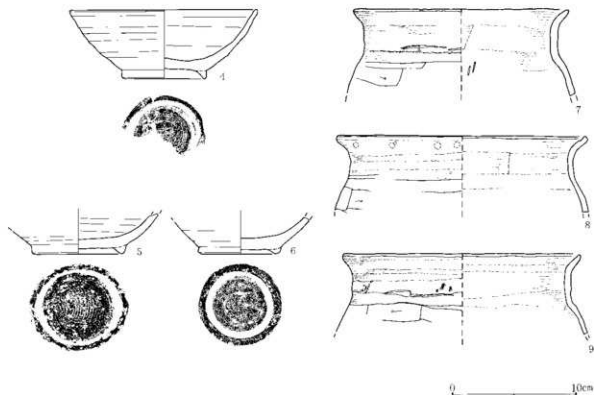


第10図 3号住居跡出土遺物(1)

V、古代・古墳時代の遺構と遺物

3号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師部 坏	12.4	—	3.4	内?外?底(二)磨滑	6	須恵部 埴	—	6.5	(2.9)	酸化表
2	土師部 坏	(14.0)	—	(3.8)	外?内?磨滑	7	土師部 埴	(17.0)	—	(7.0)	
3	土師部 坏	—	—	—	内?外?磨滑	8	土師部 埴	(19.8)	—	(8.0)	
4	須恵部 埴	14.9	6.4	5.5	酸化表	9	土師部 埴	(18.8)	—	(6.3)	
5	須恵部 埴	—	7.2	(3.1)	酸化表						



第11図 3号住居跡出土遺物(2)

期

4号住居跡 (第12~14図、PL. 2・11)

位置は、座標値 $X=560\sim 564$ ・ $Y=-978\sim -982$ の範囲にある。

重複は、古墳時代前期と考えられる31号住居跡と重複する。

平面形状は、南北方向に若干の長軸を持つ方形を呈し、南東隅部の肩は流れ、南西隅部の壁線は丸まる。

規模は、長軸4m・短軸3.4mを測る。壁高は、50cmの深い掘形である。床面積は11.0㎡を有する。

主軸方位は、 $N-83^{\circ}-W$ を示す。

柱穴に関しては、北東部と南西部にそれぞれ楕円形の小穴があり柱穴かは不明である。P1は径45cm・深さ約50cm、P2は径30cm・深さ20cmを測る。掘形はいずれも明瞭である。

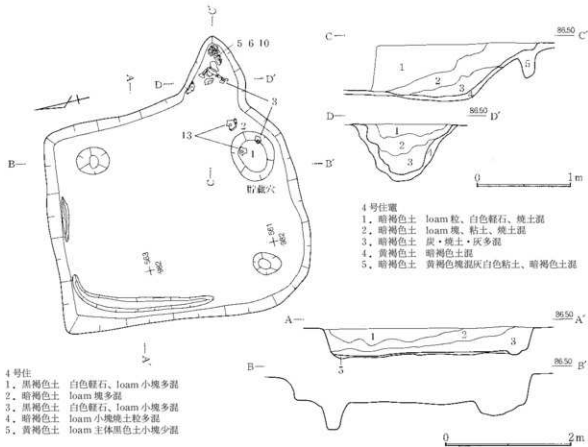
壁下溝は、東壁の一部と北壁から西壁にかけて不連続にある。幅は最大で22cm、深さ15cmである。

埋土は、大別5層で総体的に loam 塊の混入が目立ち土層流入状況からは、北側からの人為的な埋め土の可能性が考えられる。

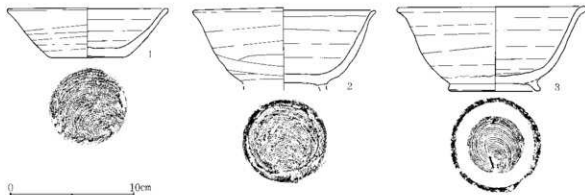
竈は、東壁大きく南に偏って付設され、壁線を約1mと大きく張り出し、火床部は壁線外にある。明瞭な袖部を有さない形態の竈と考えられる。

貯蔵穴は、南東隅電右手にあり、楕円形を呈する。径78×68cm 深さ15cmを測り、明瞭な掘形である。

出土遺物は、電煙道部より土師器コの字口縁甕がややまとまって出土している。その他須恵器環・塊、砥石がある。須恵器環(1)は還元炎焼成、塊(2・3)は酸化炎焼成で付け高台、環・塊とも轆轤右回転糸切りである。「コ」の字口縁甕(7~13)は胴部の張りが強く比較的薄手作りである。頸部に弱い指頭痕を残し、肩部から胴部上位は横位の、中位以下は縦位の篋削りを施す。甕類には台付の形態にならう。小型の甕(4~6)も数点存在する。砥石(14)は砥沢石製の定型小片である。鉄製品(15)は有頸脇扶三角形鐵、その他厚みのある鉄片など数点の鉄製品らしき小片がある。鉄片鉄塊65g 中期



第12図 4号住居跡

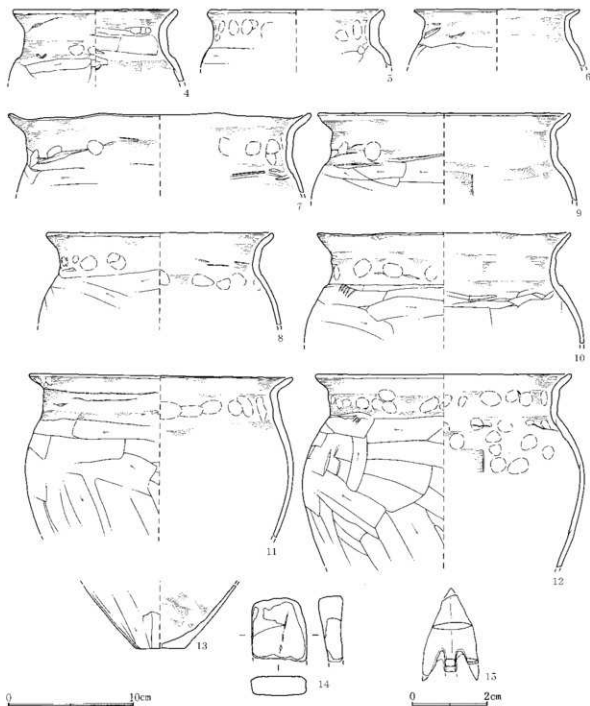


第13図 4号住居跡出土遺物(1)

V. 古代・古墳時代の遺構と遺物

4号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	須弥部 坏	(12.8)	6.2	4.9		9	土師部 甕	(20.0)	—	(6.9)	
2	須弥部 埴	14.4	—	(6.1)	變化尖	10	土師部 甕	(20.0)	—	(8.8)	
3	須弥部 埴	(15.0)	7.6	6.7	變化尖	11	土師部 甕	(20.8)	—	(12.6)	
4	土師部 甕	(13.0)	—	(5.7)		12	土師部 甕	(20.2)	—	(13.2)	
5	土師部 甕	(14.0)	—	(4.5)		13	土師部 甕	—	4.0	(4.0)	
6	土師部 甕	(13.0)	—	(4.5)		14	磁石	長 5.0 幅 4.30 厚 1.95			56.65g 磁石石 右側脇袂三角形跡
7	土師部 甕	(24.0)	—	(6.3)		15	鉄鏝	長 (4.0) 幅 3.0			
8	土師部 甕	(18.0)	—	(7.3)							



第14図 4号住居跡出土遺物(2)

10号住居跡 (第15・16図、PL. 2・11)

位置は、座標値 $X = 558 \sim 562$ ・ $Y = -968 \sim -971$ の範囲にある。

重複は、古墳時代中期に属する29号および33号住居跡と重なる。

平面形状は、南北に長軸をもつ方形を呈する。

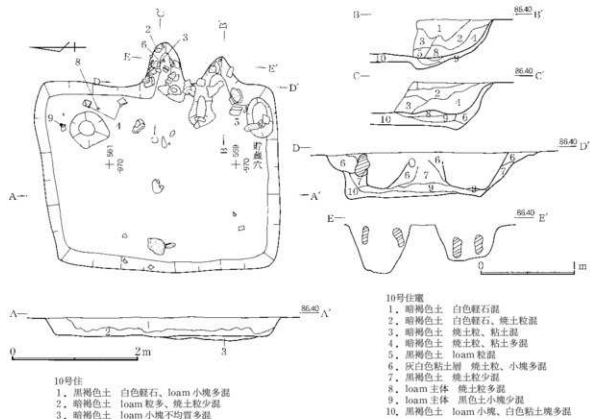
規模は、長軸3.8m・短軸2.9mを測り、壁高は30cmで壁立ちは比較的しっかりしている。床面積は8.5m²を有する。

主軸方位は、ほぼN-90°-Eを示す。

埋土は、大別4層からなる。住居跡縁辺から中央部にかけて平坦な堆積状況を示し、埋土中には loam 土粒の混入が多いことなどから、人為的な埋土も考えられる。

竈は、東壁ほぼ中央とこれに接して南側に併置して2基が検出されている。壁縁を約70~80cmほど掘り込む。同一住居跡での造り替えと思われるが、構築順等について調査時の所見は明らかではない。左右竈とも、火床部の壁面には長径川原石を構築材として用いている。左側の竈で石材が多く残されていることや、遺物の出土も多いことから後出のような感を受ける。しかし、右側の竈もまったくの破壊を受けているような状態ではなく、なお袖部の痕跡を思わせる部分もあり同時存在の可能性とともに両竈の前後関係については確定できない。

貯蔵穴は住居南東隅で竈の右手にあり、略楕円形を呈する。径60×40cmで、深さ15cmの浅いすり鉢状を呈する。



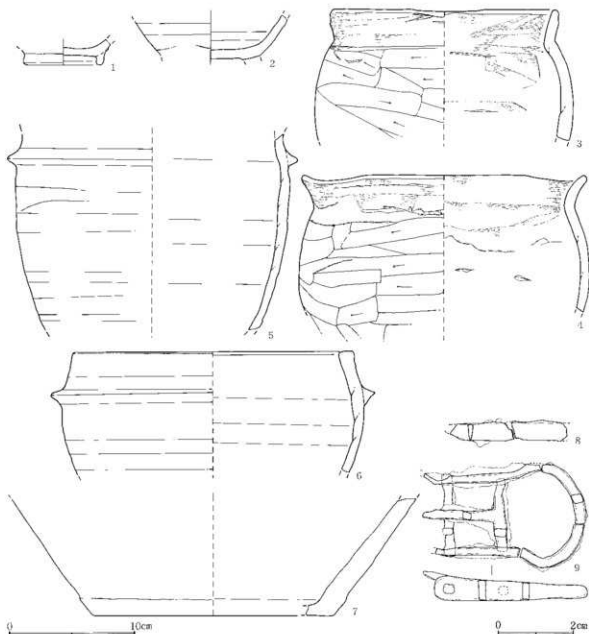
第15図 10号住居跡

V、古代・古墳時代の遺構と遺物

出土遺物は、左御室より土師器甕・羽釜等が出土する。いずれも破片化したものである。須恵器椀(1・2)は極めて軟質化した酸化炭焼成である。土師器甕(3・4)は器内の厚い土釜風のもので短い口縁部に丸く張り、寸詰まりの胴部になろう。胴部上半は横位寛削りを施す。羽釜(5・6)は小片で酸化の強い焼成である。(6)は鉢形の浅い形状になろう。須恵器甕底部片(7)は内面の摩擦が著しい。(8)は刀子刃部、(9)は鉄製鉸具。鉄塊1080g・鉄滓510g 後期

10号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	須恵器 椀	—	6.4	(2.0)	酸化炭	6	羽釜	(22.2)	—	(9.5)	酸化炭
2	須恵器 椀	—	(7.8)	(3.5)	酸化炭	7	須恵器 甕	—	(19.0)	—	(9.3)
3	土師器 甕	(18.0)	—	(10.3)		8	刀子	刃長6.0	刃幅1.0		
4	土師器 甕	(22.6)	—	(12.9)		9	鉄製鉸具	長 9.0	刃幅4.0	軸長4.5	重42.3g T字状刺金
5	羽釜	—	—	(13.4)	酸化炭						



第16図 10号住居跡出土遺物

12号住居跡 (第17・18図, PL. 2・11・12)

位置は、座標値 $X=551\sim555$ ・ $Y=-964\sim-969$ の範囲にある。

重複は、南側で古墳時代前期の11号と、北側で同じく古墳時代中期の33号住居跡と重なる。

平面形状は、長軸を東西方向にもち、長短軸長差の大きい方形を呈する。

規模は、長軸4.7m、短軸3.6mで、壁高は46cmを測り、壁立ちは明瞭である。床面積は14.1㎡を有する。

主軸方位は、 $N-88^{\circ}-E$ を示す。

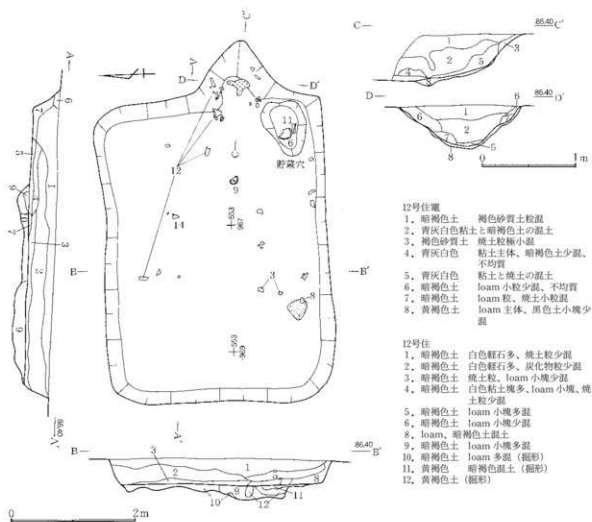
埋土は、大別3層からなる。東側縁辺には白色粘土粒層の堆積が見られ、竈構築材の流出であろう。また、南側からは部分的に loam 粒・塊層の流入があり、人為的な投入が行われたと考えられる。

竈は、短辺東壁のやや南に偏って付設され、壁縁を約80cm大きく三角形に張り出す。遺存状態は構築材と考えられる粘土の流出もありほとんど元形をとどめてはいない。

貯蔵穴は南東隅、竈の右手にある。不整な楕円形を呈し、径90×60cm、深さ15cmで、すり鉢状をなす。

その他、柱穴・壁下溝などの諸施設は検出されていない。

出土遺物は、少量・散在的な出土ながら墨書土器3点がある。土師器坏小片(1・2)は見込みに「方?・万?」「大」の墨書文字を記す。須恵器坏(3・4)は軸轡右回転で回転糸切り無調整、小底径である。(3)は器



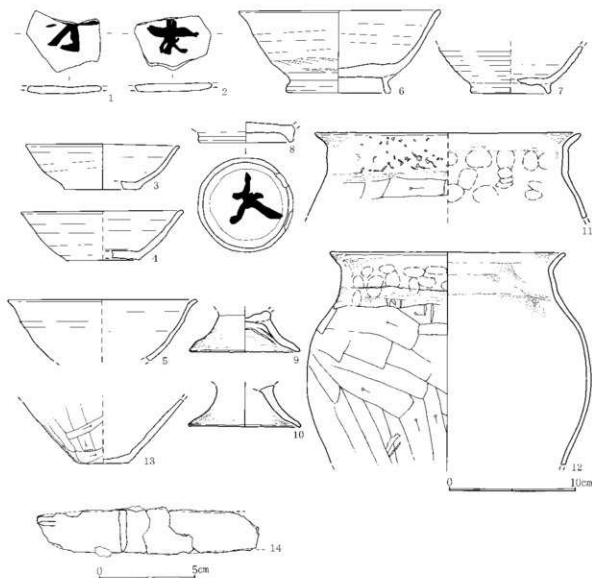
第17図 12号住居跡

V、古代・古墳時代の遺構と遺物

内薄く、胎土細密で焼成はやや甘い。(4)は堅緻な焼成である。須恵器境(5～8)は軸軸右回転、高台は付け高台である。胎土はいずれも細土で土質に粘りが少なく、薄作りである。(8)底部には「大」の墨書文字がある。台付き小型甕の台部(9・10)である。「コ」の字口縁甕(11・12)はで頸部に指頭痕を残し、胴部上半が強く張り、寸詰まりの形状になろう。肩部は横、胴の上位には斜、中位から下半にかけては縦方向の篋削りを施す。(13)は「コ」の字口縁甕底部になろう。(14)は身厚だが片端小口と片側縁が刃様で利器か。鉄塊139g・鉄滓560g 中期

12号住居跡出土遺物計測表

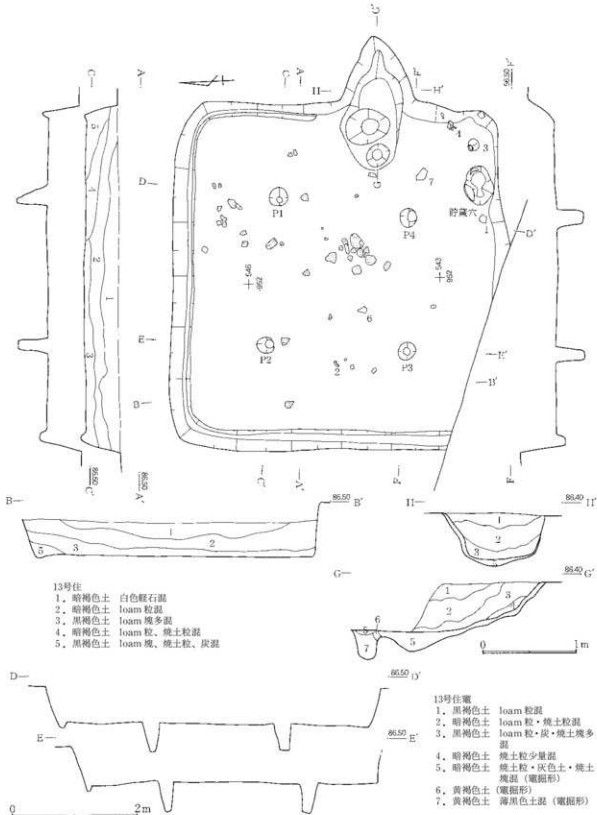
番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器 杯				見込部墨書「方」? 「万」?	8	須恵器 甕	—	7.6	(1.6)	底部墨書「大」?
2	土師器 杯				見込部墨書「大」	9	土師器 台付甕	—	(8.8)	(3.2)	
3	須恵器 杯	12.2	(6.0)	3.6		10	土師器 台付甕	—	(8.9)	(3.3)	
4	須恵器 杯	(12.8)	(5.8)	3.9		11	土師器 甕	(10.5)	—	(6.6)	
5	須恵器 甕	(15.0)	—	(4.8)		12	土師器 甕	18.6	—	(16.7)	
6	須恵器 甕	(16.0)	8.2	6.6		13	土師器 甕	(12.8)	(2.0)	(5.0)	
7	須恵器 甕	(11.4)	(6.4)	(3.7)		14	鉄製品	長 11.5	幅 3.6	厚 0.4	判図か



第18図 12号住居跡出土遺物

13号住居跡 (第19~21図, PL. 2・12)

位置は、座標値X=541~547・Y=-948~-954の範囲にあり、南縁の一部は調査区域外にかかる。



第19図 13号住居跡

V、古代・古墳時代の遺構と遺物

重複は、古墳時代前期の23号住居跡と重なる。

平面形状は、長短軸長差の少ない比較的整った方形を呈する。

規模は、長軸5.5m、短軸5.3mで、壁高は56cmを測り、明瞭な壁立ちである。床面積は24.8㎡を有する。

主軸方位は、N-84°-Wを示す。

埋土は、大別5層からなり、暗褐色土ないしは黒褐色土が埋土となる。北または東壁下に loam 粒・塊の混入する三角堆積が形成され、主だった堆積土流入がこの方向にあったことを示している。

竈は、東壁わずかなりより付設され、壁線から約1m掘り込み大きく張り出す。袖部は検出されていないが火床部は壁線の内側にあり、本来は袖部を作っていたと考えられる。

貯蔵穴は、南東隅に近く小穴が検出されているが、通常の位置をややことすること、あるいは大きさがやや貧弱に過ぎ貯蔵穴かというかは確定できない。形状は楕円形で、径62×48cm、深さ37cmである。

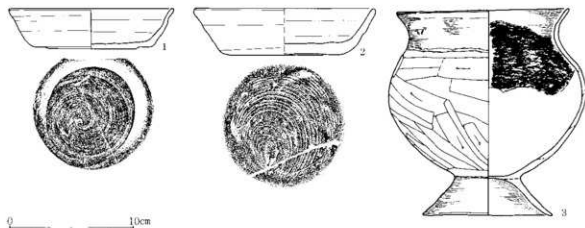
柱穴は、主柱穴4本が検出されている。上縁径約30cm、下縁径10~15cm、深さ42~48cmで均一で明瞭な掘形をもつ。柱間寸法はP1・P2が2.25m、P2・P3が2.15m、P3・P4とP1・P4がともに2.1mを測る。

壁下溝は、東壁北半から北壁・西壁下に回り、幅約18cm・深さ12cm程度の比較的明瞭な形状を呈する。

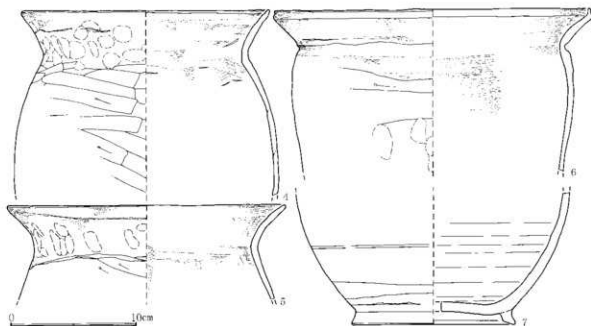
出土遺物は、竈や貯蔵穴様の小穴付近に出土するが少数・散在的である。須恵器環・土師器甕、などがある。須恵器環(1)は底部右回転斡り。胎土は細かいが粗砂が少量混じる。(2)は右回転糸切り無調整である。細土である。両者とも灰白で焼成は良好。土師器甕(3~6)は(3)は台付き、口縁部は大きく開き胴部は強く球形に張る。肩部は横位気味から下位にかけて斜位の斡り。鈍橙で胎土は細土。(4・5)は「く」の字口縁でやや張りのある長胴になろう。胴の上半部は斜位気味の斡り。橙で細土。(6)は強く屈する「く」の字口縁で口唇部は鋭く屈して尖る。胴外面は紐作り撫で調整で内面は横位刷毛目調整痕が明瞭。他国産の可能性が高い。鈍黄灰、細砂粒多い。須恵器短頸壺(7)はやや間延びした球胴部で初期の形態になろう。灰色で焼成は堅軟である。鉄塊360g 奈良

13号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	須恵器 環	13.1	9.5	3.2		5	土師器 甕	(22.0)	—	(14.4)	
2	須恵器 環	(14.2)	11.4	3.7		6	土師器 甕	(24.9)	—	(12.6)	輸入品か
3	土師器 台付甕	13.5	10.1	16.3	内面上位に煤状付着物	7	須恵器 壺	—	(13.0)	(10.4)	短頸壺か
4	土師器 甕	(19.6)	—	(14.4)							



第20図 13号住居跡出土遺物(1)



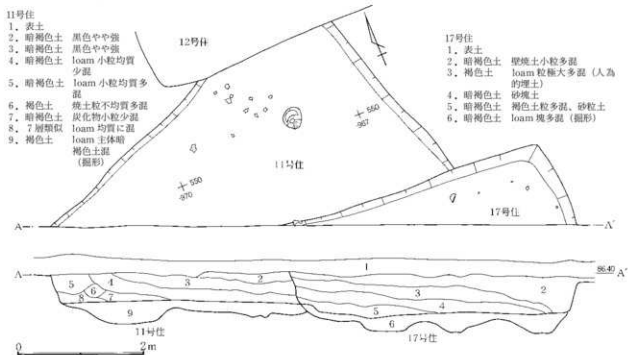
第21図 13号住居跡出土遺物(2)

17号住居跡 (第22・23図, PL.12)

位置は、座標値 $X = 547 \sim 548 \cdot Y = -964 \sim -968$ にあるが、検出部分は住居跡の北東隅部のごく狭小な範囲で大半は調査区域外にかかる。

重複は、北側で古墳時代前期の11号住居跡と重なる。

平面形状は、方形を呈すると思われるが、規模・床面積・竈等諸施設は不明である。北壁軸線方位はほぼ東西を示す。



第22図 17号・11号住居跡

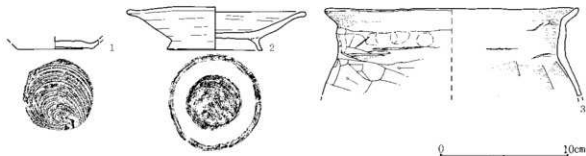
V、古代・古墳時代の遺構と遺物

埋土は大別4層からなり、北ないしは西側からの流入が顕著である。

出土遺物は、須恵器坏片・皿、(1・2)、土師器甕片(3)など少量の出土である。(1)は坏底部で右回転糸切り。灰白色で粗砂粒の比較的混入が多く焼成は良好。(2)は角高台気味で体部は外反して大きく開く。器肉は薄く細土で、酸化炭焼成の軟質である。褐灰色から浅黄橙色を呈す。(3)は「コ」の字口縁甕である。口縁部は指頭痕が残り、肩部は横位寛削りを施す。細土で焼成は良好。橙色を呈す。鉄塊25g・鉄滓20g 中期

17号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	須恵器 坏	—	6.9	(0.7)		3	土師器 甕	(20.0)	—	(6.9)	
2	須恵器 皿	14.2	7.5	3.4	酸化炭						



第23図 17号住居跡出土遺物

34号住居跡 (第24・25図、PL. 2・12)

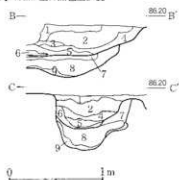
位置は、座標値 $X=570\sim574$ 、 $Y=-937\sim-943$ の範囲にある。

重複は、北側で古墳時代中期に属する50号住居跡と重複する。

平面形状は、東西方向に著しい長軸をもつ方形を呈する。

34号住居

1. 赤褐色土と黒色土の混土 白色軽石、焼土混
2. 赤褐色土 黒色土少混
3. 赤褐色土 焼土混
4. 赤褐色土 焼土多、炭混
5. 赤褐色土 焼土多混
6. 炭屑、焼土多混
7. 赤褐色土 焼土少、loam混
8. 赤褐色土 loam多混
9. loam土に黒色土少混



第24図 34号住居跡

規模は、長軸6.0m・短軸3.8mで、壁高は40cmの深い掘形をもつ。床面積は19.0㎡を有する。

主軸方向はN-74°-Wを示す。

埋土は、ほぼ1層でloam塊を多量に混入する褐色土を主体とし、人為的埋土の可能性も考えられる。

竈は、東壁大きく南に偏って有設される。袖部の痕跡とおぼしき小さな凸部が見られるが、袖部としての機能は定かではない。壁線を約1m掘り込み、火床は壁線外にある。

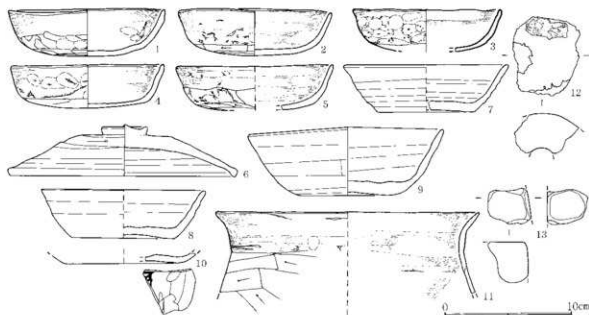
貯蔵穴は、南東隅部にある。略円形を呈し、径60×54cm、深さ18cmで浅く不安定な底面を有する。

その他の施設には柱穴は見られず、小穴が2カ所ほどに検出されている。また北東隅には痕跡程度の壁下溝が検出されているがごくわずかな部分である。

出土遺物は、主には貯蔵穴内及びその周辺より土師器環・須恵器蓋・環類がある。土師器環(1～5)は底部に若干の丸みを残すか体部に指頭状調整痕を用いる。須恵器蓋(6)は粗砂粒の混入が多く鈍赤褐色のやや甘い焼成である。中高で扁平な撮みをもつ。端部は短く直に折れる。胎土中に変色が混じり、その形態からも埼玉県末野窯跡の製品と考えられる。須恵器環(7～9)は右回転糸切り。(7)は白みのある焼き上がり軽い質量で、細砂粒の混じる胎土とその形態から伊勢崎市舞台遺跡窯跡か光仙房窯跡の製品に類似している。(8)は青灰色を呈し、粗砂粒を多く混入する(9)は大振りで淡黄色を呈しやや焼成が甘い。粗砂粒が多い。底部周辺に篋調整を施す。須恵器環底部(10)は酸化炎焼成。墨書文字痕がある。土師器甕(11)はやや間延びして外反する口縁部をもつ。羽口(12)は小片。砥石(13)は流紋岩製の小片。鉄塊83g 前半期

34号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器環	12.4	丸底	3.7		8	須恵器環	(13.0)	(4.0)	(3.8)	
2	土師器環	12.2	丸底	3.7		9	須恵器環	15.5	7.5	5.4	
3	土師器環	11.7	—	(3.3)	加注・9より編入	10	須恵器環	—	(9.8)	—	不明な青 酸化炎
4	土師器環	12.2	丸底	3.4		11	土師器甕	(20.8)	—	(6.3)	
5	土師器環	12.4	丸底	3.5		12	羽口	長 6.0	—	—	
6	須恵器蓋	(18.1)	横径3.6	(4.0)	武蔵産か	13	砥石	長 2.80	幅 3.40	厚 3.25	31.25g 流紋石
7	須恵器環	(13.0)	(7.6)	3.8							



第25図 34号住居跡出土遺物

V、古代・古墳時代の遺構と遺物

35号住居跡 (第26・27図、PL.3・12)

位置は、座標値 $X=564\sim568$ ・ $Y=-937\sim-941$ の範囲にある。

平面形状は、南壁線は削平によって消失しているが南北方向に長軸をもつ略方形を呈する。四周壁線はやや膨らみ加減で巡る。

規模は、長軸約3.7m・短軸2.6mで、壁高20cmを測る。床面積は約8.1m²になろう。

主軸方位は、 $N-70^{\circ}-W$ を示す。

埋土は、大別2層になり、壁際に三角堆積を形成しており、自然埋没に近い。

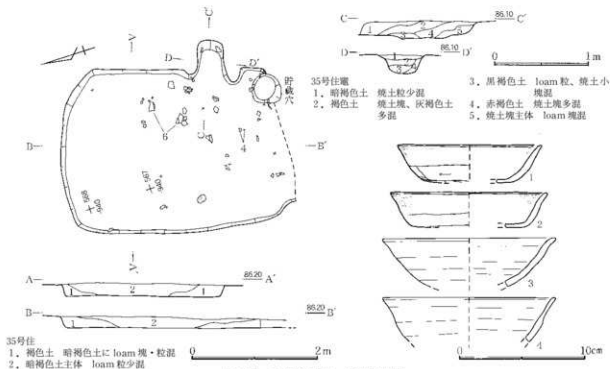
竈は、東壁に大きく南に偏って付設され、壁線を約50cm掘り込み、火床面は壁外にある。袖部は基盤層のloam土を掘り残して構築するためか、袖様の小さく突出した部分が残る。

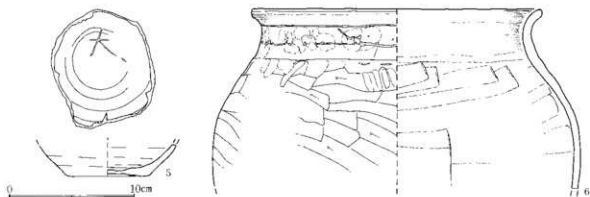
貯蔵穴は、南東隅部竈右手にあり、底面に不安定な凹凸がある。径46cmの略円形で、深さ15cmである。その他、柱穴等の諸施設は検出されていない。

出土遺物は、竈前面に散在的な出土である。土師器環・甕、須恵器環など小片少数である。土師器環(1・2)は体部下半に横位の寛削りを施す平底の形態である。須恵器環(3~5)。(3)は灰色で薄手堅緻な焼成。胎土は砂粒を多く含む。(4)は淡黄灰色、酸化炭焼成で甘い。胎土は粗砂粒が多い。(5)は見込みに「大」の刻書文字。酸化炭焼成気味の鈍赤褐色。右回転の糸切り。胎土は粗砂粒多い。土師器甕(6)はやや厚手で寸詰まりな「コ」の字状口縁に指頭痕が顕著。胴部は強く張る。肩部から胴部上半は横位の寛削り。鉄塊65g・鉄滓60g 後期

35号住居跡出土遺物計測表

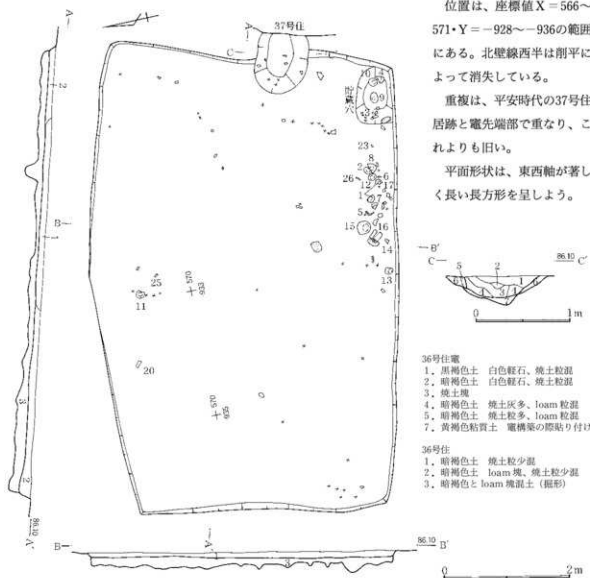
番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器環	(11.4)	—	(3.0)		4	須恵器環	(13.8)		(3.8)	酸化炭
2	土師器環	(12.4)	—	(2.75)		5	須恵器環		(6.4)	(2.5)	刻字「大」酸化炭
3	須恵器環	(13.7)	—	(3.5)		6	土師器甕	(22.8)		(14.1)	





第27図 35号住居跡出土遺物(2)

36号住居跡 (第28~30図、PL. 3・13)



位置は、座標値 $X = 566 \sim 571 \cdot Y = -928 \sim -936$ の範囲にある。北壁線西半は削平によって消失している。

重複は、平安時代の37号住居跡と竪先端部で重なり、これよりも古い。

平面形状は、東西軸が著しく長い長方形を呈しよう。

- 36号住電
1. 黒褐色土 白色礫石、焼土粒混
 2. 暗褐色土 白色礫石、焼土粒混
 3. 焼土塊
 4. 暗褐色土 焼土灰多、loam 粒混
 5. 暗褐色土 焼土粒多、loam 粒混
 7. 黄褐色粘質土 竪構築の際貼り付け

- 36号住
1. 暗褐色土 焼土粒少混
 2. 暗褐色土 loam 塊、焼土粒少混
 3. 暗褐色と loam 塊混土 (掘形)

第28図 36号住居跡

V、古代・古墳時代の遺構と遺物

規模は、長軸7.3m・短軸4.9mを測り、壁高は浅く約10cm程度である。床面積は32.4m²ほどになる。

主軸方位は、N-76°-Wを示す。

埋土は、残存掘り込みが浅く、暗褐色土単層である。

竈は、東壁大きく南に偏って付設される。住居跡全体の削平が著しいため竈の遺存状況は不良で火床面の窪みとして検出されている。先端部は37号住居跡によって消失している。

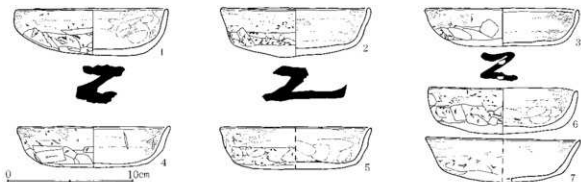
貯蔵穴は、南東隅部、竈右手にあり、径90×58cm・深さ22cmの略楕円形を呈す。

その他、柱穴などの諸施設は検出されていない。

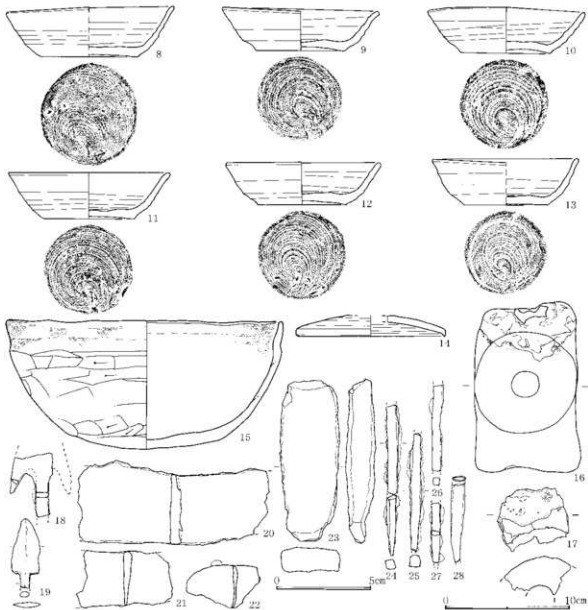
出土遺物は、土師器環・鉢・須恵器環のほか、灰軸陶器がある。その他、羽口と少量の小鉄塊を検出しているが、それらに関わる工房的な施設はみられない。遺物は貯蔵穴及びそれに続く南壁沿いに集中して出土する。いずれも床面より若干浮いた位置にあり、遺物は貯蔵穴の周辺のものに関しては、その埋設後の上面に分布する。土師器環(1～7)は平底気味の形状である。口縁部横撫で。体部下半に指頭痕による調整を主とし、軽い篋撫でを施すものもある。底部は(1・2)が一方の、他は不定方向の篋削りである。色調は橙色を呈し、胎土は総じて細土を用いる。(1～4)には、底部に「乙」の墨書文字を記す。須恵器環(8～13)は右回転糸切り。(8)は灰色で胎土に粗砂粒が多く、焼成は堅緻。須恵器環の中ではやや大振りて他とは時間差があると思われる。(9～13)色調は灰白色を呈し、焼成は良好だが軽質である。胎土は粗砂粒が多く混入するが(13)は粗砂粒が混じる。灰軸陶器(14)は、短頸壺の蓋にならうか。握みが欠損する。胎土は細土でオリブ灰を呈し内面器表に黒粒が浮く。軸葉は天井部と口縁部に厚く施される。内面は光沢が生じるほどに研磨が見られ、転用税と思われる。猿投産にならう。土師器鉢(15)は平底気味で、口縁部横位撫で、体部横位・底部不定方向の篋削り。胎土は細かく、色調赤褐色を呈す。羽口(16・17)。鉄鎌(18・19)は平根型。(18)は逆刺付き。(20～22)は板状。(23)は壺状の鉄製品(24～28)は角釘か。鉄塊626g・鉄滓60g 中期

36号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器環	12.0	丸底	3.7	底面墨書「乙」	12	須恵器環	12.2	7.0	3.35	
2	土師器環	12.0	10.0	3.5	底面墨書「乙」	13	須恵器環	(11.6)	(6.6)	(3.6)	
3	土師器環	12.2	—	3.0	底面墨書「乙」	14	灰軸陶器蓋	—	(11.8)	(1.6)	短頸壺蓋か
4	土師器環	12.1	—	3.2	底面墨書「乙」	15	土師器鉢	21.9	丸底	10.1	
5	土師器環	12.0	—	3.35	墨書?	16	羽口	長12.5	幅8.1	8.0	
6	土師器環	11.8	—	3.6		17	羽口片	長5.0			
7	土師器環	12.7	丸底	2.4		18	鉄鎌片	長(5.3)			有頭縁缺三角形跡 小片
8	須恵器環	(12.3)	7.8	4.0		19	鉄鎌	長(4.6)	幅1.5	厚0.2	
9	須恵器環	12.3	7.0	3.4		20	鉄片	長(10.0)	幅4.0	厚0.6	板状
10	須恵器環	12.0	7.1	3.6		21	鉄片	長(5.0)	幅3.0	厚0.5	刺部か
11	須恵器環	12.8	7.2	33.6		22	壺状鉄製品	長8.5	幅3.0	厚1.2	



第29図 36号住居跡出土遺物(1)



第30図 36号住居跡出土遺物(2)

37号住居跡 (第31～33図、PL.3・14)

位置は、座標値 $X = 562 \sim 569 \cdot Y = -922 \sim -929$ の範囲にある。

重複は、西側を1号溝が南北走り分断され、南縁は攪乱溝が東西走して南壁が消失する。

平面形状は、東西方向に長軸をもつ方形を呈し、当該期の竪穴住居跡としては大型に属しよう。

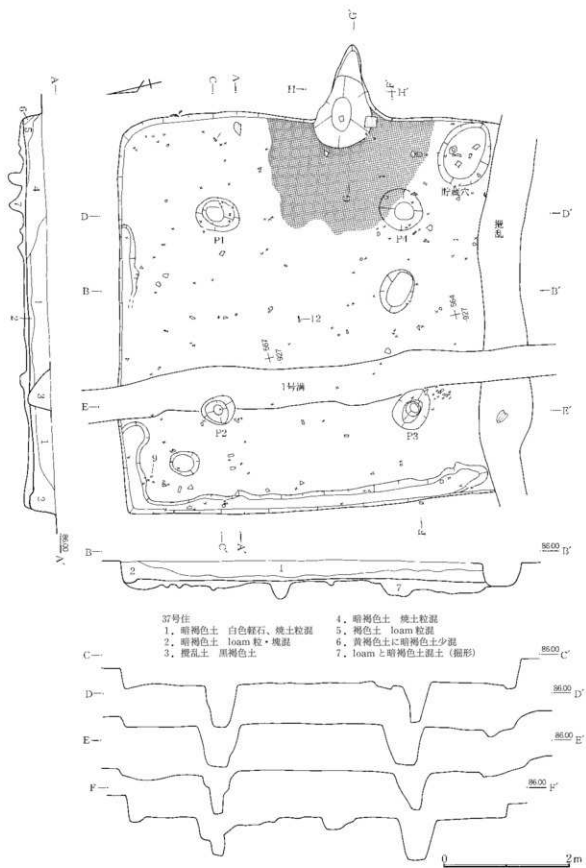
規模は、長軸6.9m・短軸は5.6mである。壁高は30cmを測り比較的深い掘形をもつ。床面積は34.8㎡を有する。

主軸方位は、 $N-75^{\circ}-W$ を示す。

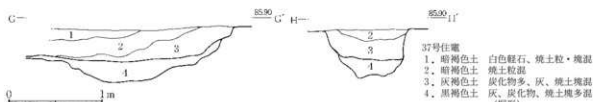
埋土は、大別2層で堆積状況及び単味近い土質から自然埋没と思われる。

竈は、東壁にありやや南に偏って付設される。壁線先細りに長く1.1mほど掘り込む。袖部はなく、右側の壁線上に砂質凝灰岩製の切石が埋置されている。火床部は壁線外にある。焚き口幅約60cmになろうか。

V. 古代・古墳時代の遺構と遺物



第31図 37号住居跡



第32図 37号住居跡電土層図

貯蔵穴は、南東隅、竈右手にあり、径100×80cmの楕円形・深さ20cmのすり鉢状を呈する。

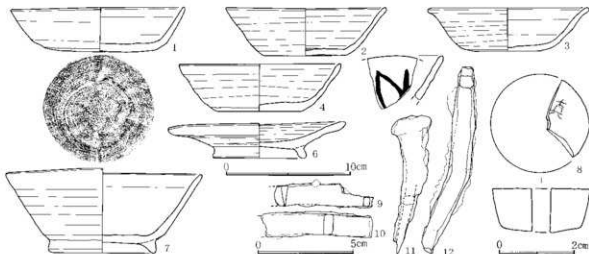
柱穴は、4穴を検出。径50～70cmの楕円形の掘形で、深さ60cm前後である。柱間寸法は各柱間とも3.0m。壁下の溝は、西壁から北壁にかけて見られるが、幅20cm・深さ10cmほど掘形での検出である。

なお、柱穴P3・P4の柱筋の中間部に鉄滓及び鉄塊や羽口小片の集中する径70×50cmの小土坑が検出されている。鍛冶炉なども考えられたが、断ち割りの結果では土坑壁面や底面の被熱現象もなく浅いすり鉢状のものである。その他には鍛冶工房に関連する施設は検出されていない。鉄滓・鉄塊の総重量は1.73kg。

出土遺物は土師器を中心に細片化したものが異常に多く住居内全体に散在した状態である。器種には、土師器杯・甕、須恵器杯・塊、灰軸陶器などがある。ただ、形状の知れるものは須恵器杯類を主にし、特に土師器類は出土量の割には図示出来るものが少ない。須恵器杯(1～5)。(1)のみ底部回転糸切り後、回転篋削り。腰部に強い差し込み。軟質な焼成。燻し気味～灰白色、白色細粒混で細土。(2～4)は轆轤右回転または底部右回転糸切り。青灰色～灰白色を呈し、焼成は硬い。白色粒等砂粒多く混入。(5)は外面に墨書「乙」か。須恵器皿(6)は轆轤右回転、回転糸切り、付け高台。白色を呈し、砂粒多く混入。須恵器塊(7)焼成は甘い。轆轤右回転糸切り付け高台。細土。砥沢石製紡錘輪(8)は片端面に「真」の刻字。鉄器(9)は刀子で刃・茎部(11・12)は角釘。鉄塊2024g・鉄滓169g 前期

37号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	須恵器 杯	13.8	8.8	2.30	燻し気味	7	須恵器 塊	(15.5)	8.5	6.7	
2	須恵器 杯	12.8	6.5	3.8		8	石器 紡錘輪	上径5.20	下径4.10	高2.30	断面非対称・上表面彫刻
3	須恵器 杯	(12.7)	6.4	3.4		9	鉄器 刀子	長(5.0)	厚(3.0)	刃幅1.2	刃・柄部の小片
4	須恵器 杯	12.8	6.7	3.7		10	鉄片	長6.0	幅1.0	厚0.5	細身板状
5	須恵器 杯	—	—	(3.5)	外面墨書「乙」	11	角釘	長7.6	幅0.8	厚0.6	磨きしい
6	須恵器 皿	14.0	7.5	2.9		12	角釘	長10.0	幅1.3	厚1.2	



第33図 37号住居跡出土遺物

V、古代・古墳時代の遺構と遺物

41号住居跡 (第34・35図、PL.3・14)

位置は、座標値 $X = 536 \sim 539$ ・ $Y = -927 \sim -931$ の範囲にある。

重複は、住居跡中央部に76号土坑が穿たれる。

平面形状は、東西に長軸をもつ方形を呈する。

規模は、長軸3.65m 短軸3.0mである。壁高約30cmを測り、立ち上がりは明瞭である。床面積は9.4m²を有する。

主軸方位は、ほぼN-90°-Eを示す。

埋土は、76号土坑との重複で中央部の堆積状況は不明である。大別2層になろう。

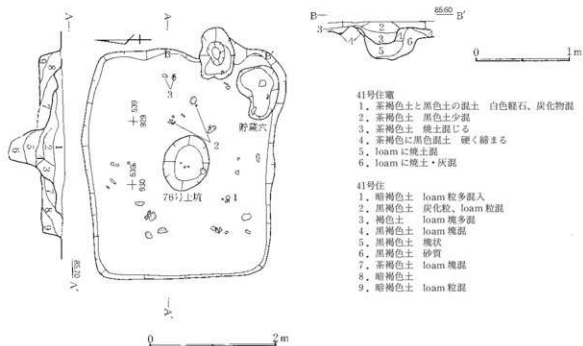
竈は、東壁のやや南に偏って付設される。袖部は約50cmで loam と黒褐色土の混土を用いてある。火床部幅約40cmである。

貯蔵穴は、南東隅部、竈右手にある。やや不整な楕円形を呈し、径86×50cm・深さ40cmである。

その他柱穴などの諸施設は検出されていない。

遺物は散在的な出土状況でなお少量である。土師器盤・鉢(1・2)・甕底部(3)でいずれも遺存度は低い。(1)は短い口縁部が外反気味に開く形状で、(2)は低い口縁部が小さく段をなし内湾気味になり、端部は丸まる。共に浅身で不定方向の篋削りを施す。橙色を呈し、胎土には細砂粒を多く混入する。前期

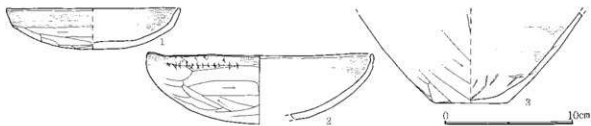
76号土坑 住居跡のほぼ中央に位置し、付属施設とも考えられるが、明らかな新旧関係が看られる。平面形状は略円形を呈すると思われる。土層記録からは土坑上半部は漏斗状の掘形で大きく開き、下半は直に近く落ち込む。この大きく掘られた上半部の底面に loam を主体とする土塊を輪形に充填している。輪形は厚さ20cm前後、幅50cmほどになる。ただし、調査所見からはこの輪形の施工状態(硬軟・表面調整・土質等)や、機能に関する情報は得られない。規模は、漏斗部上面径2.3m、直坑部上面径90×80cm・底面径50×40cm、深さ90cm(漏斗部30cm・直坑部60cm)を測る。



第34図 41号住居跡

41号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師部 甕	13.8	丸底	3.2		3	土師部 甕	(17.6)	5.8	7.1	
2	土師部 鉢	17.8	丸底	5.6							



第35図 41号住居跡出土遺物

42号住居跡 (第36・37図、PL. 3・14)

位置は、座標値 $X = 551 \sim 554 \cdot Y = -917 \sim -922$ の範囲にある。

平面形状は、東西方向に長軸をもつ方形を呈する。

規模は、長軸3.7m・短軸3.2m、を測り、壁高約10cmと浅い。小型竪穴で床面積は11.1m²である。

主軸方位は、 $N-84^{\circ}-W$ を示す。

埋土は、浅い掘形で黒褐色土の一層からなる。下位は斑点状に黄褐色土が入る。

竈は、東壁で大きく南に偏って付設される。遺存状況は悪く、火床部の楕円形の掘形として検出され、詳細は不明だが壁外に火床部を有する形態にならう。

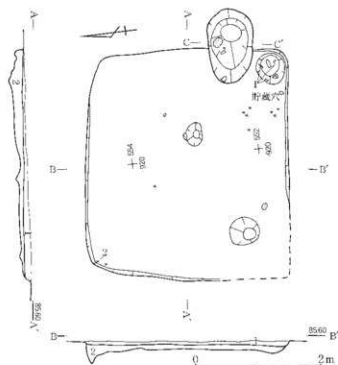
貯蔵穴は、南東隅、竈の右手に位置する。径約50cmで深さ20cm程度の略円形を呈する。

その他の施設としては住居跡ほぼ中央と南西に2穴を検出しているが、柱穴としての機能は考えられない。

出土遺物はごく少量で土師器類の他須恵器片などである。竈及び貯蔵穴内に小片で散在的な状態である。

土師器甕口縁部(1)のみの図示である。薄

作りである。口縁部は短い上半と胴部にそのまま続く下半からなり、上半は横断で、下半には指頭痕が残る。胴部は横位篋削り。赤褐色を呈し、微細砂粒が混じるが粗土である。鉄器(2)は管状鉄製品である。両端欠。 後期



第36図 42号住居跡

42号住

1. 黒褐色土 褐色土層を塊状に混
2. loamと黒色土混土 (細形)

42号住竈

1. 黒色土 焼土粒、白色軽石多混
2. 褐色土 地山塊 (電機素材崩落か?)
3. 褐色粘土 (崩落した電機素材)
4. 暗褐色土 焼土粒、loam粒多混 (電機崩土)

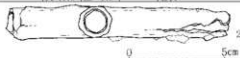


V、古代・古墳時代の遺構と遺物



42号住居跡出土遺物計測表

品名	種類	直径	底径	高さ	備考
1	土師器	11.8		16.0	
2	炭製品	11.5	1.5		円状



第37図 42号住居跡出土遺物

44号住居跡 (第38・39図, PL. 4・14)

位置は、座標値 X = 588 ~ 592・Y = -953 ~ -958 の範囲にある。

重複は、西側で時期不明の43号竪穴状遺構と重複するがこれより新しい。

平面形状は、北東～南西方向に長軸をもつ比較的整った方形を呈する。

規模は、長軸4.0m・短軸3.3m、壁高30cmを測り、深めの掘形である。床面積は10.9㎡を有する。

主軸方位は、N-70°-Eを示す。

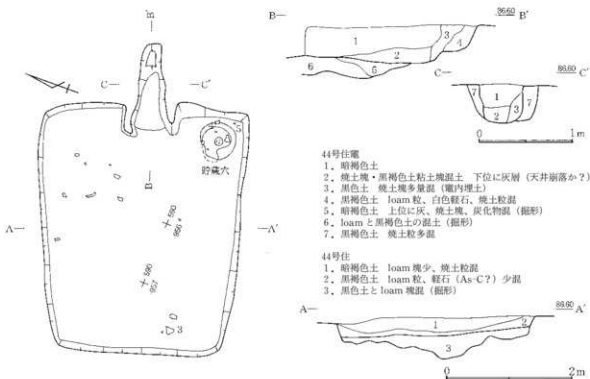
埋土は大別3層からなり、暗～黒褐色土が主体で、壁際の loam 塊混じり三角堆積など自然埋没であろう。

竈は、東壁ほぼ中央に付設され、壁線外へは1mほど張り出す。火床部は壁外にかかり、やや長目の煙道部を有する。袖部は50cmほどに突出し焚き口幅は40～50cmになる。

貯蔵穴は、南東の隅部、竈右手にある。径58cmの略円形を呈し、深さ約40cmである。

その他柱穴等の諸施設は検出されていない。

出土遺物は、土師器・甕など少量で、破片状のものがほとんどで散在的な出土である。土師器環(1)は貯蔵穴内の出土で内面に文字様「十」が、底部に「十」の寛書きがある。底部は平底化する。口縁部は横無

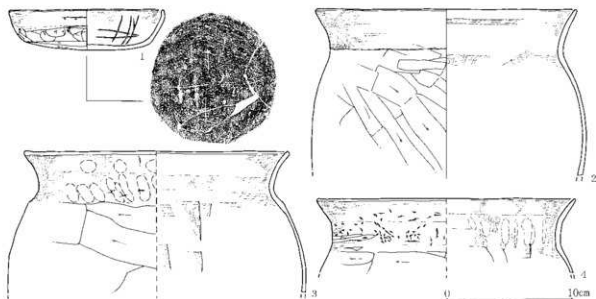


第38図 44号住居跡

で、体部下半は横位のやや弱めな篋削りで底部は不定方向の篋削り。橙色を呈し、胎土は比較的細土である。土師器莖口縁部(2~4)は緩く外反して開く。(4)がややコの字状の口縁を持ち、口縁下半に指頭痕が残る。前期

44号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器 坏	12.3	9.9	3.2	須恵内【*・井】外【+】	3	土師器 甕	(21.0)	—	(11.5)	
2	土師器 甕	20.6	—	(13.0)		4	土師器 甕	(20.4)	—	(5.8)	



第39図 44号住居跡出土遺物

45号住居跡 (第40~42図、PL. 4・14・15)

位置は、座標値 $X=593\sim 598$ ・ $Y=-955\sim -959$ の範囲にある。

平面形状は、南北に長軸をもつ方形を呈する。

規模は、長軸4.7m・短軸3.4m、壁高24cmを測り、床面積は14.0m²を有する。

主軸方位は、 $N-78^{\circ}-W$ を示す。

埋土は大別2層になり、自然埋没の様相を呈する。

竈は、東壁で大きく南に偏って付設される。袖部は暗褐色土に loam 塊を混入した材を用い、20~40cmほどに張り出して残る。火床面はほぼ住居内にあり、煙道部は壁縁を三角形に50cm掘り込む。焚き口部の袖部内法幅約80cmで広目である。

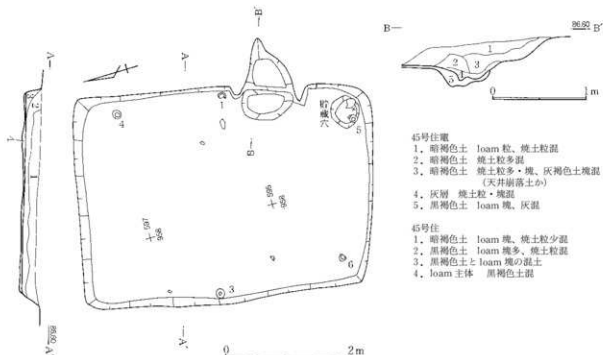
貯蔵穴は、南東隅、竈右手にある。径40cmの略円形で、深さ50cm余のすり鉢状の落ち込みである。

その他、柱穴などの諸施設は検出されていない。

出土遺物は、土師器坏・台付き甕、須恵器坏・塊などがある。土師器坏(1・2)。(1)は内湾する深目の体部で底部は平底気味に強い不定方向の篋削りを施す。(2)は底部小片である。両者見込み部と底部に「井」の字様の篋書きを施す。橙色で細土である。須恵器坏(3)は強い指当てで腰部がくびれる。底部は右回転の篋削り調整。見込み部と底部に「井」の字様の篋書きを施す。灰褐色で外面はやや吸炭する。焼成やや甘く胎土は細砂粒混じる。須恵器塊(4)は浅い坏部に腰を作って付高台。底部は右回転の篋削りで周径中程に列点状の匠

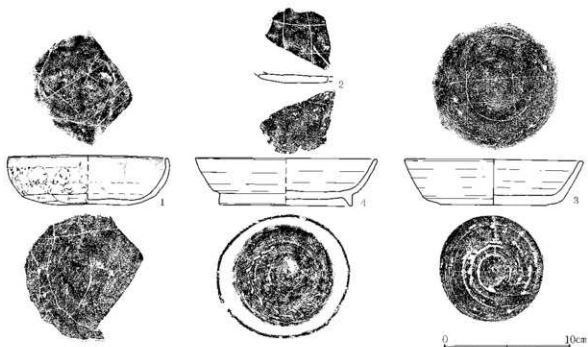
V、古代・古墳時代の遺構と遺物

痕とその外周に爪形の圧痕が巡る。灰白で細土である。焼成良好。台付甕(5・6)は貯蔵穴の上面からの出土である。(6)は台部を欠損する。口縁部は直線的に外反し、肩部にきつい段を作り胴部は強く張る、薄作りである。上位は横位、中位から下位は斜位の寛削りを施す。胴中位には煤様の付着が見られる。赤褐色を呈し、細土である。砥石(7)は定型砥で砥沢石製 前期



第40図 45号住居跡

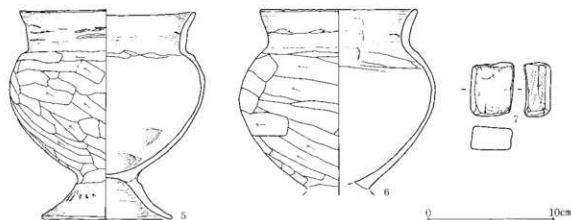
- 45号住居
1. 暗褐色土 loam 粒、焼土粒混
 2. 暗褐色土 焼土粒多混
 3. 暗褐色土 焼土粒多・塊、灰褐色土塊混
(天井崩落土か)
 4. 灰層 焼土粒・焼混
 5. 黒褐色土 loam 塊、灰混
- 45号住
1. 暗褐色土 loam 塊、焼土粒少混
 2. 黒褐色土 loam 塊多、焼土粒混
 3. 黒褐色土 loam 塊の粗土
 4. loam 主体 黒褐色土混



第41図 45号住居跡出土遺物(1)

45号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師部 杯	12.6	(10.2)	3.9	内外面割書「井か」	5	土師部 台付甕	13.9	10.3	16.5	
2	土師部 杯	—	(5.5)	(0.7)	内外面割書「井」	6	土師部 台付甕	(12.4)	—	(14.2)	
3	須恵部 杯	14.2	8.4	3.5	内外面割書「井」	7	磁石 仕上げ砥	現長4.0	幅 3.0	厚 1.7	磁石 欠品
4	須恵部 壺	14.4	10.6	3.7	底部爪彫住痕						



第42図 45号住居跡出土遺物(2)

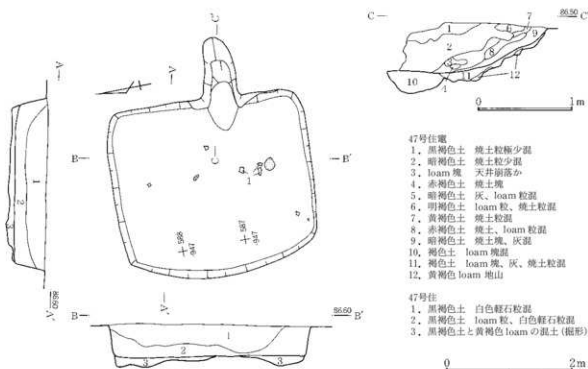
47号住居跡 (第43・44図、PL. 4・15)

位置は、座標値 $X = 585 \sim 588 \cdot Y = -943 \sim -947$ の範囲にある。

平面形状は、南北方向に長軸をもつ略方形を呈するが、西壁線がわずかに膨らむ。

規模は、長軸3.16m・短軸2.84m、壁高50cmを測り、明瞭な壁立ちである。床面積は7.4m²を有する。

主軸方位は、N-87°-Wを示す。



第43図 47号住居跡

47号住居

1. 黒褐色土 焼土粒少混
2. 暗褐色土 焼土粒少混
3. loam 塊 天井崩落か
4. 赤褐色土 焼土塊
5. 暗褐色土 灰、loam 粒混
6. 明褐色土 loam 粒、焼土粒混
7. 黄褐色土 焼土粒混
8. 赤褐色土 焼土、loam 粒混
9. 暗褐色土 焼土塊、灰混
10. 褐色土 loam 塊混
11. 褐色土 loam 塊、灰、焼土粒混
12. 黄褐色 loam 地山

47号住

1. 黒褐色土 白色軽石粒混
2. 黒褐色土 loam 粒、白色軽石粒混
3. 黒褐色土と黄褐色 loam の混土 (掘形)

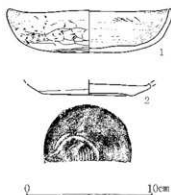
V. 古代・古墳時代の遺構と遺物

埋土は大別2層からなり、黒褐色土の単純堆積状況を示すところから自然埋没と考えられる。

竈は、東壁やや南に偏って付設される。袖部の痕跡は見られず、火床面は大半壁線外にかかる。煙道部は幅広く大きく掘り込まれ、壁線より約1m突出する。煙道の立ち上がりは急傾斜である。

貯蔵穴・柱穴等の諸施設は検出されていない。

出土遺物は極めて少なく、住居跡中央の埋土内より土師器環がある。土師器環(1)は内湾する深めの体部で、底部は平底気味である。口縁部は横撫で、体部は指頭圧による調整、底部は不定方向の寛削り。見込み部に「|」の寛書きが見える。棕色を呈し、細土である。口径13cm・器高3.1cm。須恵器環底部(2)は腰部に強い指当て。回転糸切り後右回転寛削り。灰色を呈し、白色微細粒を含む細土。焼成は良好。底径7cm。奈良末～平安前期



第44図 47号住居跡出土遺物

48号住居跡 (第45~47図, PL. 4・15)

位置は、座標値X=591~595・Y=-939~-942の範囲にある。

重複は、17号掘建柱建物跡と東半で重複するが、新旧関係は不明である。

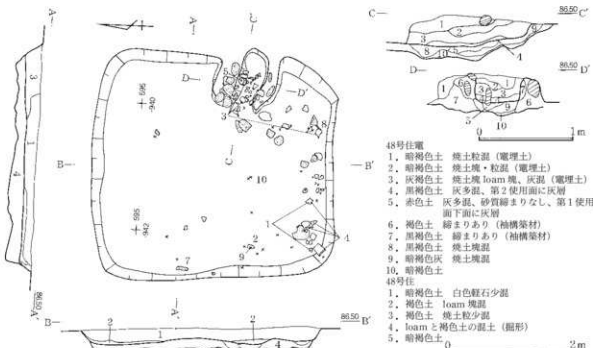
平面形状は、長短軸長差のない方形を呈するが四隅部に丸みを持ち、とくに南東隅部は肩流れになる。

規模は、東西軸長3.84m・南北軸長3.7m、壁高24cmを測り、床面積11.0m²を有する。

主軸方位は、ほぼN-90°-Eを示す。

埋土は、大別1層で床面に近く、loam塊を多く含む。自然埋没と考えられる。

竈は、東壁やや南に偏って付設される。大きく張り出す袖部は多量の河原石を構築材に使用しており、と



第45図 48号住居跡

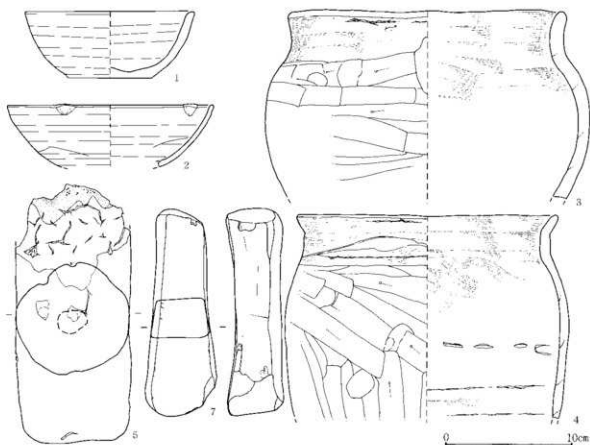
くに左袖には小児頭大のものを4~5点ほど配し、褐色土で隙間を充填する。袖部長さ約80cm・焼き口幅30cmである。煙道部は壁線外までは延びない。火床部はやや広がり、幅45cmほどになる。火床面には大型の羽口を埋設して支脚としている。

貯蔵穴・柱穴等の諸施設は検出されない。

出土遺物は、竈内及び住居内東縁に沿って集中している。環類などの小型品は少なく、土釜様の土師器甕のたぐいが目立つ。須恵器環(1)はやや深めの体部で回転糸切り。黄褐色を呈し焼きの甘い酸化炭焼成。胎土は細砂粒を多く混入。灰軸陶器(2)は輪花境。漬け掛け施軸。大原2号窯式期にならう。土師器甕(3・4)は土鍋様の甕。短めの口縁部で端部は丸く肥厚し、器内は総体的に厚い。肩部は横位、上位から以下は縦方向の寛削り。胎土は比較的細土。羽口(5)は大振り。竈の支脚として転用。住居内には羽口と関連づけられる施設は検出されていない。土製品(6)は土玉様。形状は不整で孔は貫通していない。砥石(7)は定型仕上げ砥で四面使用、砥沢石製。鉄器(8)は刀子、(9)は(2)灰軸陶器に付着。両端部は欠損。(10)は刀子で茎端部欠。鉄塊259g・100g 後期

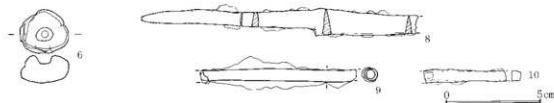
48号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	須恵器 環	(13.4)	6.8	5.2	酸化炭	6	土製品	径 2.5	厚 1.5	口径 0.7	
2	灰軸陶器 輪花境	(16.4)	—	4.9	大原2号窯式期か	7	砥石 仕上げ砥	長 16.5	厚 3.0	幅3~4.5	砥沢石
3	土師器 甕	(22.0)	—	(15.0)		8	鉄製品 刀子	長 14.5	刃長10.5	刀幅 1.5	柄部端欠
4	土師器 甕	(20.6)	—	(16.0)		9	鉄製品	長 8.2	径 0.6		丸棒状
5	羽口	長 29.5	径 8.9	孔径 2.2		10	鉄製品	長 4.3	幅 0.5	厚 0.5	鍔柄部欠



第46図 48号住居跡出土遺物(1)

V、古代・古墳時代の遺構と遺物



第47図 48号住居跡出土遺物(2)

49号住居跡 (第48・49図, PL. 5・15・16)

位置は、座標値 X=580~587・Y=-942~-946の範囲にある。

重複は、古墳時代中期に属する50号住居跡と南東部隅で重複する。

平面形状は、東西方向に長軸をもち、長短軸長差の顕著な方形を呈する。

規模は、長軸4.3m・短軸2.9m、壁高は16cmで掘形は浅い。床面積は10.5㎡を有する。

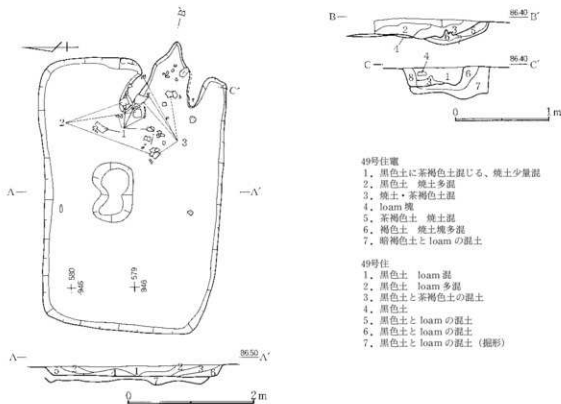
主軸方位は、N-85°-Wを示す。

埋土は、大別5~6層になるが loam 土の混入それぞれにみられ、人為的な埋土による可能性もある。

竈は、東壁で大きく南に偏って付設される。袖部は大きく「ハ」の字状に開き幅広い焚き口をなす。袖部長さ50~80cm・焚き口幅90cmほどになる。煙道部は三角に壁線を30cmほど掘り込む。火床部と煙道部の変換部右縁に長径20cm前後の川原石を埋設するがこのほかに電構築材は遺存していない。

貯蔵穴・柱穴などの諸施設は検出されていない。

出土遺物は、竈周辺に壺類が検出されているが遺物量は少なく、とくに坏などの小型土器類がみられない。



- 49号住竈
1. 黒色土に茶褐色土混じる、焼土少量混
 2. 黒色土 焼土多混
 3. 焼土・茶褐色土混
 4. loam 塊
 5. 茶褐色土 焼土混
 6. 褐色土 焼土塊多混
 7. 暗褐色土と loam の混土

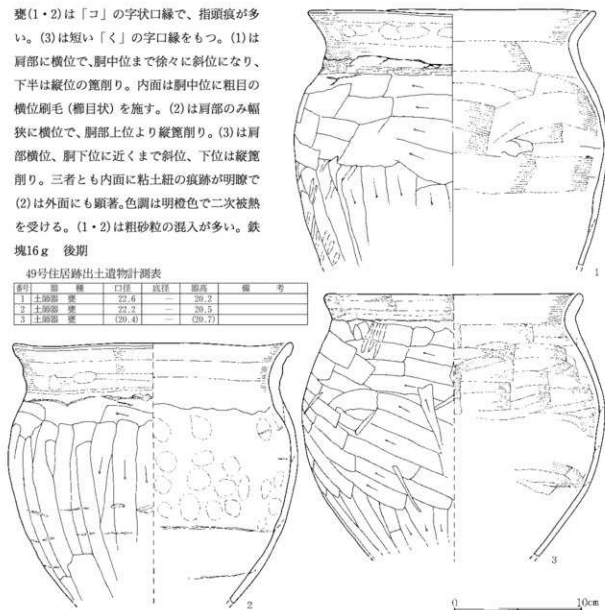
- 49号住
1. 黒色土 loam 混
 2. 黒色土 loam 多混
 3. 黒色土と茶褐色土の混土
 4. 黒色土
 5. 黒色土と loam の混土
 6. 黒色土と loam の混土
 7. 黒色土と loam の混土 (掘形)

第48図 49号住居跡

甕(1・2)は「コ」の字状口縁で、指頭痕が多い。(3)は短い「く」の字口縁をもつ。(1)は肩部に横位で、胴中位まで徐々に斜位になり、下半は縦位の寛削り。内面は胴中位に粗目の横位刷毛(櫛目状)を施す。(2)は肩部のみ幅広く横位で、胴部上位より縦削り。(3)は肩部横位、胴下位に近くまで斜位、下位は縦削り。三者とも内面に粘土紐の痕跡が明瞭で(2)は外面にも顕著。色調は明褐色で二次被熱を受ける。(1・2)は粗砂粒の混入が多い。鉄塊16g 後期

49号住居跡出土土物計測表

番号	部 種	口径	底径	部高	備 考
1	土器部 甕	22.6	—	20.2	
2	土器部 甕	22.2	—	20.5	
3	土器部 甕	(20.4)	—	(20.7)	



第49図 49号住居跡出土土物

53号住居跡 (第50・51図、PL.5・16)

位置は、座標値 $X = 577 \sim 582$ ・ $Y = -984 \sim -989$ の範囲にある。

重複は、5号掘立柱建物跡と重なるが新旧関係は不明である。

平面形状は、南東から北西方に長軸をもつ整った方形を呈する。

規模は、長軸4.5m・短軸3.5mを測り、壁高は36cmで比較的深い掘形である。床面積は、13.4㎡を有する。

主軸方位はN-56°-Eを示す。

埋土は、大別3層からなる。壁際に形成された三角堆積は乱れもなく、黒褐色土を主体とする埋土で、自然埋没と考えられる。

竈は、北東壁に南に大きく偏って付設される。左右袖端部には長径30cmほどの河原石が立位で埋設され、構築材には粘性の強い暗褐色土を用いる。袖部長さ約40cm、焚き口幅50cmである。煙道部は、壁線に三角に

V、古代・古墳時代の遺構と遺物

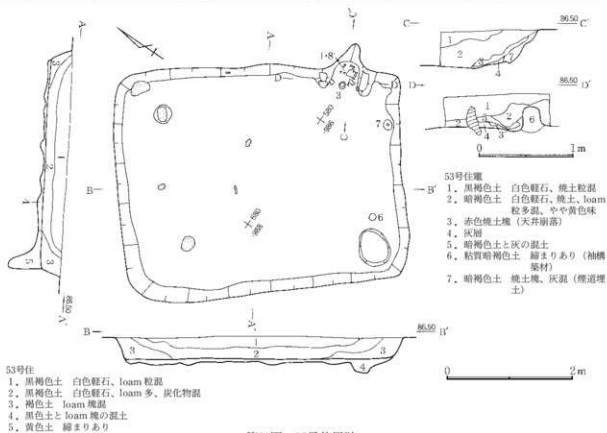
取り50cmほど突出させるが火床部と一体形である。

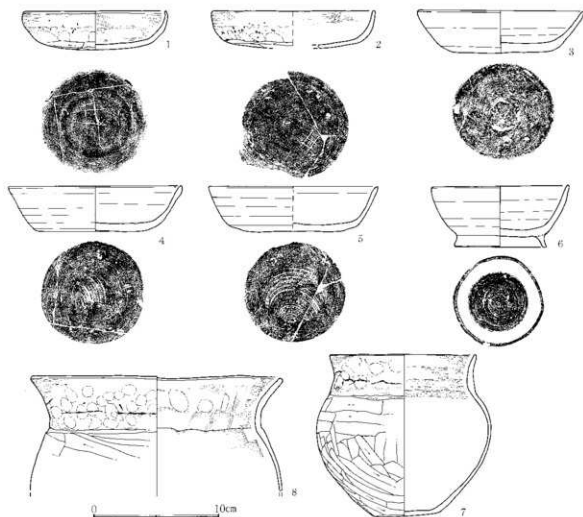
住居内の施設には南東隅に径60×40cm・深さ10cm余りの浅いすり鉢状円形土坑が検出されている。形態など貯蔵穴に類似するが竈近傍の通常からは例外的である。また、北西壁縁寄りに4点ほどの人頭大の礫が見られる。北西にある1点のみ床面が窪み、設置状態を示すように出土したが他は僅かながらも床面より浮いたように在る。北西・南西に位置する2点は柱基礎石とも考えられるが形状その他不明部分が多く確証は得られない。

出土遺物は、土師器環・甕、須恵器環・埴などがある。土師器環(1・2)は扁平な体部で弱い丸底。体部は内湾気味で上半は撫で、下半は指頭調整後に撫でか。淡橙色で比較的細土。須恵器環(3～5)は底径大きく扁平な体部。腰部に強目の差し込みでくびれる。(3)は甘い酸化炎焼成。底部作り厚く右回転斫削り。淡黄色で粗砂混入するが細土。(4・5)は回転糸切り後右回転斫削り。燻し焼成気味の甘い焼き。2者とも見込み部に「井」の匭書き文字を刻す。褐色～黄灰色。細土。須恵器埴(6)は小振り。内湾して立つ体部に、高めで細身の付け高台。角高台様。燻し焼成気味の甘い焼き。底部右回転斫削り。外面褐色灰色、微細白色粒混入する細土。土師器小型甕(7)は中位に接合痕の巡る高い口頸部に丸く張る胴部。作りは薄手で肩部横位、上位から下位にかけて斜位の斫削り。胴部に被熱による煤状付着物。淡黄橙。細土。土師器甕(8)は中位に接合痕が巡り外反して開く高めの口縁部。肩部は横位斫削り。橙色を呈し、細土。 奈良末～平安後期

53号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器 環	(11.6)	丸底	(3.0)		5	須恵器 環	(13.4)	(8.0)	(4.0)	見込部刻書「井」
2	土師器 環	(13.0)	丸底	(2.9)		6	須恵器 埴	10.8	7.2	4.9	燻し焼成
3	須恵器 環	13.2	7.6	3.5		7	土師器 小型甕	11.6	5.1	12.8	
4	須恵器 環	(13.8)	8.2	3.6	見込部刻書「井」	8	土師器 甕	(20.0)	—	(9.0)	





第51図 53号住居跡出土遺物

54号住居跡 (第52～54図、PL. 5・16)

位置は、座標値 $X = 581 \sim 584$ ・ $Y = -981 \sim -985$ の範囲にある。

重複は、南西側で5号掘立柱建物跡と重なるが、新旧関係は不明である。

平面形状は、東西に長軸をもち、長短軸差の著しい方形を呈する。

規模は、長軸3.45m・短軸2.3m、壁厚26cmを測り深めの掘形をもつ。床面積は7.2m²を有する。

主軸方位は、 $N-81^{\circ}-W$ を示す。

埋土は、大別2層に分から短時間の埋没と考えられる。総体的に loam 塊の混入が多く、人為的な埋土の可能性もある。

竈は、東壁のほぼ中央に付設される。袖部は基盤 loam を小さく掘残している。火床部は大きく楕円形になり、煙道部との一体形である。壁線から30cmほど突出させる。

貯蔵穴は、南東隅、竈右手にあり、径70×50cm・深さ30cmの楕円形を呈する。

柱穴等は検出されていない。床面掘形は中央部東西方を瓢箪形に約20cmで掘り窪めて loam と黒褐色土塊の混土を充填する。

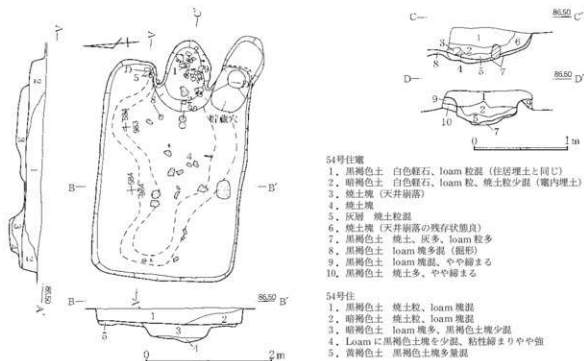
出土遺物は、竈内及びその周辺に散在して検出された。土師器・須恵器環類の他、土師器甕は数個体見ら

V、古代・古墳時代の遺構と遺物

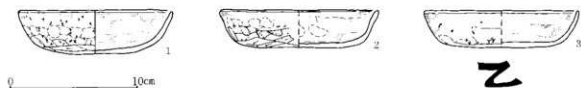
れるが、いずれも完成度の低いものである。また、形状は不明ながら鉄器小片・砥石片も出土している。土師器環(1~3)。(1)は、丸底気味で深めの体部をもつ。中に指頭痕を残し僅かにびれを生じる、上位は撫で、下位は弱い寛調整を施す。底部は不定方向の寛削り。橙色で胎土は微細土。(2・3)は平底気味で中央に小円盤状の作りが見える。(2)は中位の強い指頭痕でびれを生じ、口縁は外反。(3)は底部に「乙」の墨書文字。体部上位横位撫で、下位弱い寛調整。底部は不定方向の寛削り。橙色を呈し、細土。須恵器環(4)は小口径で体部に丸みをもつ。見込みは強い縁部をなす。右回転糸切り。灰白を呈し、胎土は緻密で焼成やや甘い。内黒土器(5)の見込み部は直交二方向寛磨き、体部は横位の寛磨き。右回転糸切り。黄橙色を呈し酸化炭焼成、小石入るか細土。土師器甕口縁部と底部(6~9)は赤橙色を呈し、細土。(6)は緩い「コ」の字口縁、(7)は緩い「く」の字口縁。肩部横位寛削り。(8・9)は縦位の寛削りで(6・7)と同種体。砥石(10)は砥沢石製定型残欠。鉄器は利器または小鉄片欠がある。中期

54号住居跡出土遺物計測表

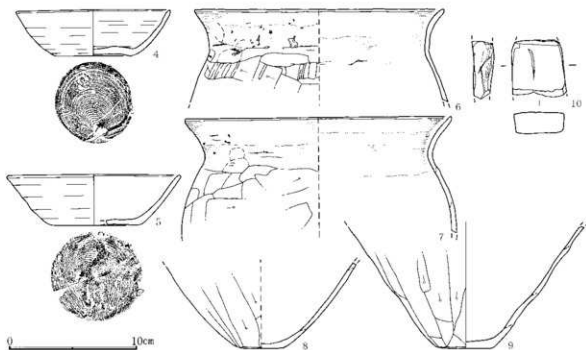
番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考	
1	土師器環	12.2	丸底	3.4		6	土師器甕	(19.6)	—	(7.3)		
2	土師器環	(12.6)	平底	(3.0)		7	土師器甕	(21.0)	—	(9.1)		
3	土師器環	(12.7)	平底	(2.9)	底面墨書「乙」	8	土師器甕	(15.0)	3.6	(6.7)		
4	須恵器環	12.2	6.1	3.6		9	土師器甕	(18.6)	4.5	(19.6)		
5	内黒土師器	13.8	7.1	4.0	内黒磨磨き	10	砥石	仕上げ砥	長 4.5	幅 4.4	厚 1.7	砥沢石



第52図 54号住居跡



第53図 54号住居跡出土遺物(1)



第54図 54号住居跡出土遺物(2)

55号住居跡 (第55～57図、PL. 5・16・17)

位置は、座標値 $X = 576 \sim 580 \cdot Y = -993 \sim -998$ の範囲にある。

重複は、古墳時代前期に属する56号住居跡と大方の部分で重なる。

平面形状は、長短軸長差の小さい方形を呈するが南壁線が歪む。

規模は、長軸4.7m・短軸4.5m、壁高は30cmを測り深めの掘形をもつ。床面積は18.3㎡を有する。

主軸方位は、N-88°Eを示す。

埋土は、大別2層からなるが、ほぼ黒褐色土の単層に近い。

竈は、東壁の中央ほどに付設される。遺存状態は悪く、壁線を1mほどに大きく挟る楕円形の掘形が残る。なお貯蔵穴は検出されていない。

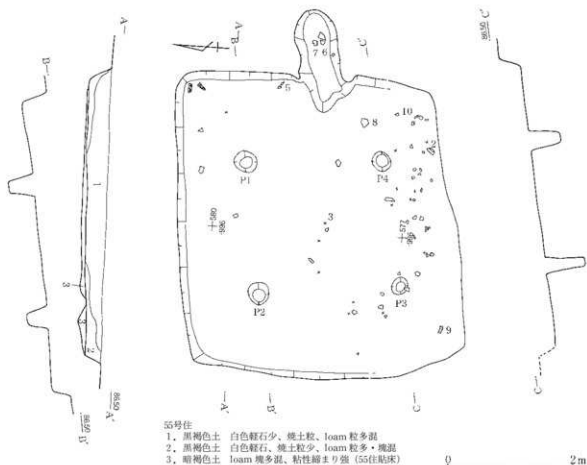
柱穴は4穴で、径30～35cm・深さ30～65cmの掘形をもち、P2の掘形が浅い。柱間寸法は、P1・P2が2.1m、P2・P3が2.2m、P3・P4が2.0m、P1・P4は2.15mを測る。

出土遺物は、土師器環・甕、須恵器環類がある。大半は埋土中からの出土で完成度は低い。土師器環(1)は、口縁が内湾する浅身丸底の形態で体部から底部へ不明瞭に変移する。口縁部横位撫で、体部下指頭痕及び弱い寛撫で、底部不定方向の寛削り。鈍橙色を呈し、細土。須恵器環(2)は底部右回転寛削りで腰部に及ぶ。灰白色を呈し、細土に粗砂粒少し混入。須恵器環(3)は腰部に強めの差し込みでくびれる。灰色を呈し、胎土は粗く白色細粒が少量に混入。坏底部は小片(4)で「里?」の墨書文字。回転糸切り後周辺右回転寛削り。浅黄橙色を呈し焼成は甘い。胎土は緻密。他に数片の須恵器坏底部あり、いずれも回転糸切り後周辺回転寛削り。土師器甕(5)は小型球胴で口縁は高めで紐接合痕が巡る。直立に近く、僅かに外反して開く。肩部横位・上位から下位にかけて斜位寛削り。赤褐色を呈し、細土。長胴甕(6～8)は短胴化する時期のもので同類の口縁と下半部。口縁は下半部で直立し外反して開く。中位に指頭痕、肩部横位寛削り。下半部は縦位寛削り。鈍橙色で胎土は細砂粒多く混入。砥石(9)は定型砥で調整痕あり。砥石石裂、刃痕あり。(10)は刀子片。奈良末～平安前期

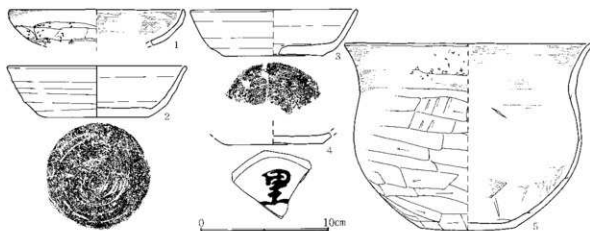
V、古代・古墳時代の遺構と遺物

55号住居跡出土遺物計測表

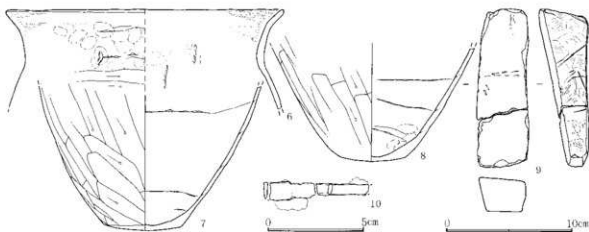
番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師部 坏	(13.8)	丸底	(2.8)		6	土師部 甕	(22.0)	—	(7.8)	
2	須恵部 坏	(14.2)	8.2	4.0		7	土師部 甕	(26.0)	—	(6.3)	
3	須恵部 坏	(13.2)	(7.8)	(3.6)		8	土師部 甕	(15.6)	(3.8)	(11.4)	
4	須恵部 坏	—	(8.0)	(8.9)	底面磨面「黒か」	9	磁石 住上付砥	長 12.3	幅 4.0	厚 3.5	砥石
5	土師部 甕	(19.6)	(7.4)	(14.7)		10	鉄製品 刀子	長 5.2	幅 0.8	厚 0.2	



第55図 55号住居跡



第56図 55号住居跡出土遺物(1)



第57図 55号住居跡出土遺物(2)

57号住居跡 (第58～60図、PL. 6・17・18)

位置は、座標値 $X = 581 \sim 586$ ・ $Y = -995 \sim -001$ の範囲にある。

平面形状は、長短軸長差の小さい比較的整った方形を呈する。

規模は、長軸4.9m・短軸4.7m、壁高34cmを測り、深めの掘形をもつ。床面積は19.7㎡を有する。

主軸方位は、 $N-88^{\circ}-E$ を示す。

埋土は大別2層からなり、壁際の三角堆積と変化の乏しい単調な土質からなる堆積状況を示し、自然埋没と思われる。

竈は、東壁僅かに南へ偏って付設される。袖部は粘性の強い褐色土を用い、右袖で長さ約90cmである。火床面は壁線内に位置し、焚き口幅は60cmを測る。煙道部は幅広で長い掘形をもち壁線から1mほども突出させる。

貯蔵穴は、南東隅で竈右手にあり、径100×70cm、深さ20cm足らずで楕円形のすり鉢形状を呈する。

柱穴は4穴が検出され、上場径が80～60cm・深さ60～40cmで漏斗状を呈する大きな掘形をもつ。柱間寸法はP1～P4の各間寸法はほぼ2.0mで均等である。

その他の施設としては、西壁下縁の一部分に壁下溝が検出されている。幅15cm・深さ5cmほどである。また、住居跡中央部には径1.4×1.3m・深さ60cmの土坑が検出されている。いわゆる床下土坑にならう。掘形は明瞭で、多量のloam塊を混入し、褐色土を厚く充填するがこの段階で圧したような状況はない。床面より僅かに窪みをなすが、上位の層厚約10cmは焼土塊が混入する黒褐色土で硬く填圧され張床土の体をなす。

出土遺物は、土師器杯・甕などで、竈周辺など散在的に埋土からの出土が主である。土師器杯(1～3)は内湾気味の口縁で、部丸底扁平形状である。口縁部横位撫で、体部弱い寛撫で、底部不定方向の寛削り。橙色を呈し、細土。土師器甕(4～9)はいずれも長胴の形態。緩く外反して開く口縁部。肩部横位・胴部の上位から中位に斜位・下位は縦位の寛削り。橙色を呈し、細砂粒混入。土師器甕(10・11)は大きく強く張る球胴の形態。口縁部は直立気味で上半は外反にして開く。肩部横位・胴中位斜位・下位は縦位の寛削り。橙色を呈し、細砂粒混入。須恵器甕(12)は底部に受け羽が付く。周5孔で中心1孔の計6孔か。寸胴鉢形にならうか。外面胴部に把手剥落痕がある。対に貼付されたものであろう。内面下位に掻き目状調整痕。3号井戸跡出土資料と接合。灰白色を呈し焼成やや甘く細土。土師器小壺(13)は埋土のかなり上位より出土。古墳時代中期頃の物か。器肉厚く、模造土器か。鈍橙色を呈し、焼成甘い。砂粒多く混入。奈良末～平安前期

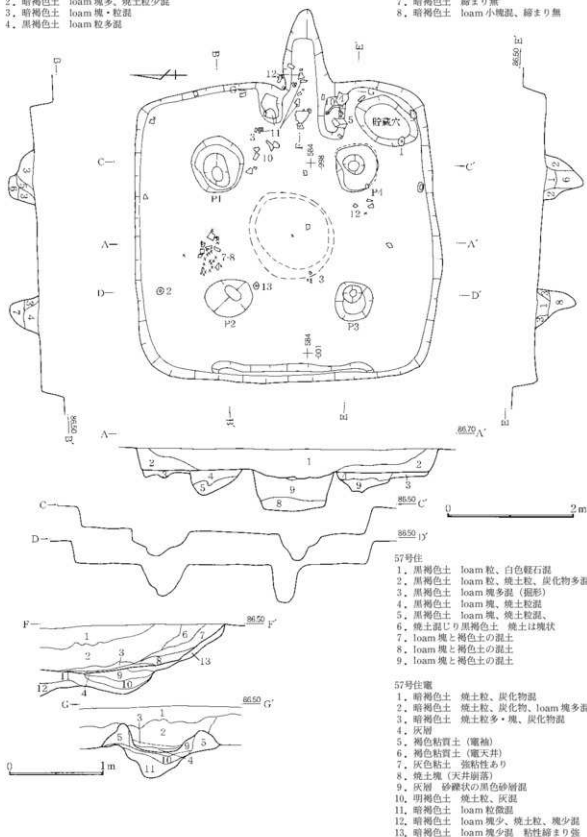
V. 古代・古墳時代の遺構と遺物

57号住柱穴

1. 暗褐色土 loam塊、焼土粒少混
2. 暗褐色土 loam塊多、焼土粒少混
3. 暗褐色土 loam塊・粒混
4. 黒褐色土 loam粒多混

5. 暗褐色土

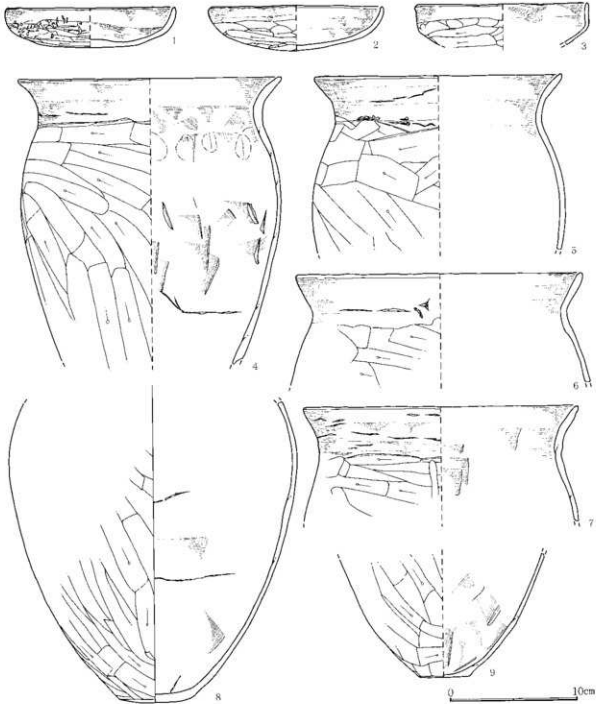
6. 暗褐色土 loam粒混、縮まり無
7. 暗褐色土 縮まり無
8. 暗褐色土 loam小塊混、縮まり無



第58図 57号住居跡

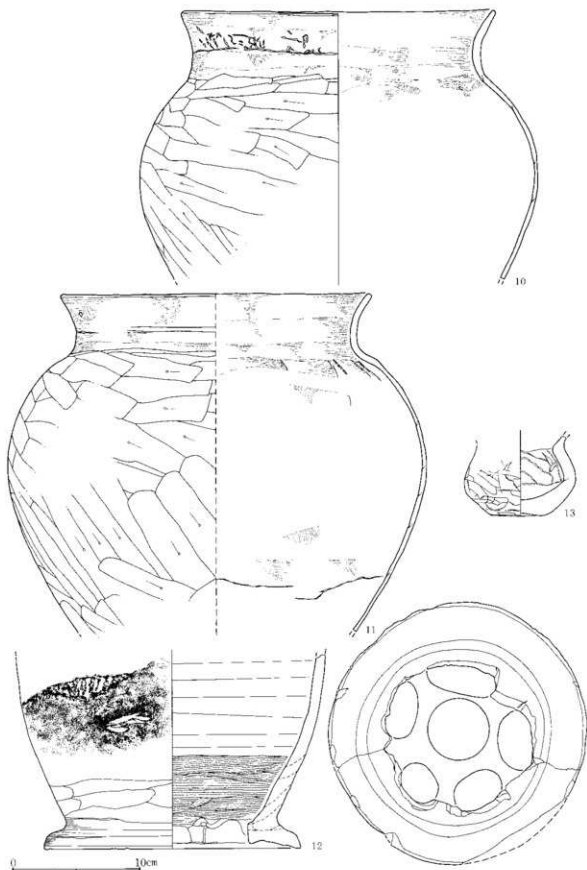
57号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器 杯	(13.6)	—	(3.1)		8	土師器 甕	—	(6.0)	(24.0)	
2	土師器 杯	(14.0)	—	(3.6)		9	土師器 甕	—	(4.0)	(9.2)	
3	土師器 杯	(13.8)	—	(3.3)		10	土師器 甕	(24.8)	—	(21.2)	最大径割 31.4
4	土師器 甕	(28.8)	—	(23.2)		11	土師器 甕	(25.0)	—	(26.0)	最大径割 33.2
5	土師器 甕	(19.5)	—	(14.0)		12	須恵器 甕	—	20.4	(16.0)	3号开戸と接合 6孔か
6	土師器 甕	(22.0)	—	(9.0)		13	土師器 手捏小甕	—	4.3	(6.2)	
7	土師器 甕	(21.8)	—	(9.1)							



第59図 57号住居跡出土遺物(1)

V. 古代・古墳時代の遺構と遺物



第60図 57号住居跡出土遺物(2)

58号住居跡 (第61・62図, PL. 6・18)

位置は、座標値 $X = 586 \sim 590$ ・ $Y = -993 \sim -998$ の範囲にある。

平面形状は、東西方向に長軸をもつ方形を呈する。

規模は、長軸4.0m・短軸3.0mを測り、壁高14cmの浅い掘形である。床面積は10.5m²を有する。

主軸方位は、N-80°-Wを示す。

埋土は大別1層である。

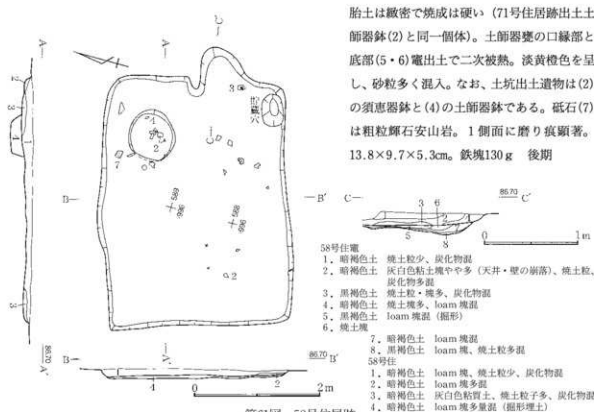
竈は、東壁やや南に偏って付設される。壁線を半楕円に掘り込み、壁線より約50cm突出する。火床部は壁線の外に位置し、火床部左手に小袖部であろう凸部が見られるが痕跡程度の残存である。

貯蔵穴は、南東隅で竈の右手にある。径50×30cm、深さ15cmの楕円形を、断面形はすり鉢状を呈する。

柱穴その他の施設は見られないが、北東寄りに円形土坑1基が検出されている。径80cm・深さ15cmときほどの掘形をもたないが、平面形・断面形とも比較的整っている。土坑上位における土層が床面とどのような状態であったかの所見が得られず、当住居跡との関係は不明である。土坑上位から出土する遺物の時期は住居跡の遺物ときほどの隔たりはないようである。なお、土師器鉢(4)は東方約20mにある71号住居跡出土のものと同接する。

出土遺物は、須恵器鉢・塊・小型平瓶、土師器甕・鉢などがある。須恵器塊(1)は足高の付け高台。橙色で酸化炭焼成。右回転糸切り。細土。(2)は鉢型土器の台部と考えられる。轆轤回転右。二次被熱で色調は灰白や部分的に淡赤橙色を呈す。砂粒及び白灰色粗土粒を多く混入。須恵器平瓶(3)は極めて小型。底部は右螺旋紐作り痕。口頸部は体部と接合。口縁部内面と体部半身に黒色付着物(煤か墨か)。灰色を呈し、細土。竈右袖部の下部に埋設されたような状態で出土。供え具的な意味もあろうか。土師器鉢(4)は口縁部短く体部の張り小さい。黒斑が多く部分的に淡赤橙色で二次被熱。内面・口縁・肩部に強い横位無で。体部縦位置削り。

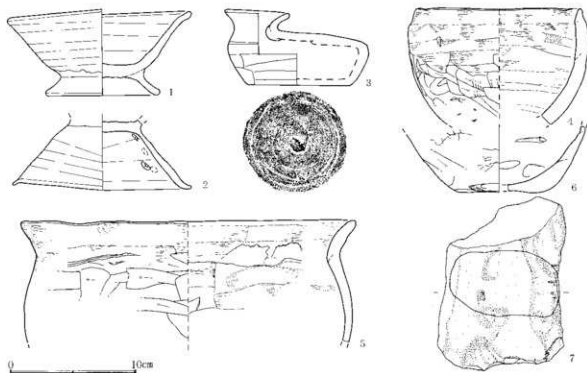
胎土は緻密で焼成は硬い(71号住居跡出土土師器鉢(2)と同一個体)。土師器甕の口縁部と底部(5・6)竈出土で二次被熱。淡黄橙色を呈し、砂粒多く混入。なお、土坑出土物は(2)の須恵器鉢と(4)の土師器鉢である。砥石(7)は粗粒輝石安山岩。1側面に磨り痕顕著。13.8×9.7×5.3cm。鉄塊130g 後期



V、古代・古墳時代の遺構と遺物

58号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	須恵器 埴	14.55	(9.0)	6.6	酸化赤	4	土師器 鉢	(13.0)	—	(9.2)	71号住-2と接合
2	須恵器 石付鉢	(14.0)	—	(5.8)	二次焼熟	5	土師器 壺	(13.2)	—	(9.2)	
3	須恵器 平瓶	5.2	8.2	6.0	底部破れ有り	6	土師器 壺	—	(6.6)	(5.2)	



第62図 58号住居跡出土遺物

61号住居跡 (第63・64図、PL. 6・18)

位置は、X=589~592・Y=-007~-010の範囲にある。

重複は、南側で62号住居跡と南壁線が接しており、新旧関係は当跡が古い。

平面形状は、南北に若干の長軸をなす方形を呈する。

規模は、長軸3.4m・短軸2.9mで壁高28cmを測る。床面積は8.2㎡を有する。

主軸方位は、N-73°-Wを示す。

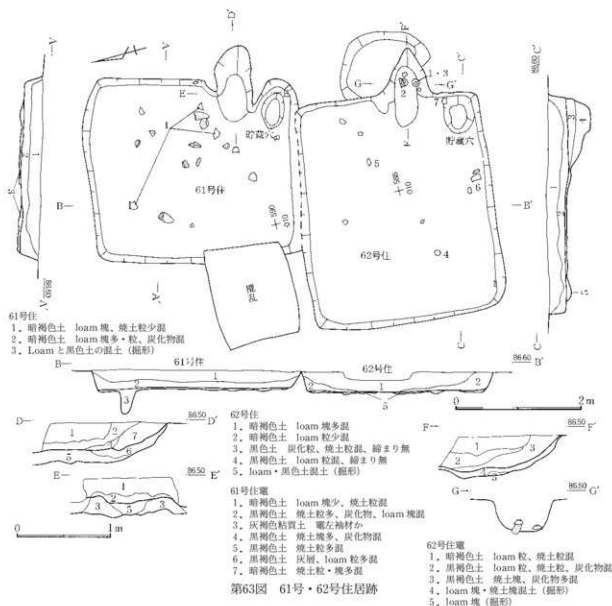
埋土は大別2層に分かつ。堆積土は単味に近く緩やかな自然堆積と考えられる。

竈は東壁で大きく南に偏って付設され、壁線を半円に50cmほど掘り込む。火床部は壁線内にあり、煙道部への部位の変換は無い。袖部はやや崩れ気味ながら右袖部は約50cmの長さを有し、灰褐色の粘質土をもって構築する。

貯蔵穴は、南東隅で竈右手にあり、径60×35cm、深さ30cmの楕円形を呈する。

その他、柱穴等の諸施設は検出されていない。

出土遺物は極めて少なく、わずかに須恵器壺口縁部片がある。埋土中には投棄された破礫(被熱した転石)が若干検出されている。須恵器壺(1)は中型になろう。頭部には斜位掻き目状の痕跡あるも後撫でにより不鮮明。灰色を呈し、硬い焼成。細土で黒色小粒混入。口径23cm 後期



62号住居跡 (第63・64図、PL. 6・18)

位置は、X=586~589・Y=-007~-012の範囲にある。

重複は、北側に接して61号住居跡と北壁線が重なり、新旧関係は当跡が新しい。

平面形状は、東西に長軸をもつ方形を呈する。

規模は、長軸3.6m・短軸3.1m、壁高30cmで比較的深い掘形をもつ。床面積は9.6㎡を有する。

主軸方位は、N-80°-Wを示す。

竈は、東壁やや南に偏って付設され壁線を約70cm掘り込む。左に小さな袖部が残存する。火床部は壁線外にあり、煙道端部は三角に細まって尖る。火床部前方寄りに2個の須恵器塊が並列倒位で埋設され、2壁を掛けるための支脚に供したものであろう。なお左方のそれは長円形転石を下部に置くが、左右塊の高差は2cm余りである。

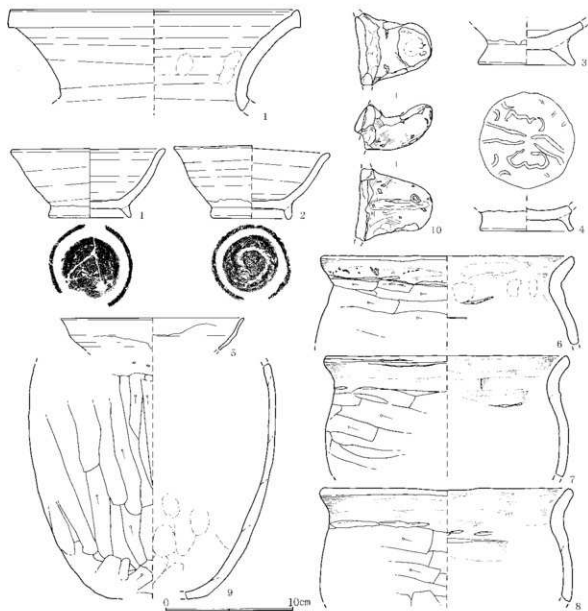
貯蔵穴は、南東隅で竈右手にあり、径60×48cm、深さ20cmの楕円形を呈する。その他、柱穴などの諸施設は検出されていない。

V、古代・古墳時代の遺構と遺物

出土遺物は、須恵器埴・土師器埴の他、内黒土器・灰軸陶器片などがある。須恵器埴(1・2)は竈内で支脚として用いられたものである。轆轤右回転で付け高台。底部は回転糸切りの痕跡がある。二次被熱、浅黄橙色を呈し、胎土には砂粒多く感触は粗い。足高の埴(3)の高台部。底部は砂底。竈内出土で二次被熱。白灰色。砂粒多く粗い。内黒土器埴(4)の底部。見込み部に花卉状の寛磨き文様。灰軸陶器埴(5)は付け掛け施軸。土師器埴(6～9)は口縁と胴部。口縁下は横位寛削り。胴部は縦位の寛削り。二次被熱か灰白～鈍赤褐色。砂粒多く混入。(10)は甕の取手 鉄塊150g 後期

62号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	須恵器 埴	12.4	6.5	5.7	電支脚軸用	6	土師器 埴	(20.0)	—	(6.9)	
2	須恵器 埴	12.3	6.6	5.5	電支脚軸用	7	土師器 埴	(19.4)	—	(9.4)	
3	須恵器 埴	—	(7.7)	(3.2)	砂底	8	土師器 埴	(10.0)	—	(8.9)	
4	内黒土器 埴	—	(7.5)	(2.0)	見込花卉状寛磨き	9	土師器 埴	—	—	(18.5)	
5	灰軸陶器 甕	(14.9)	—	(2.6)		10	土師器 埴取手				



第64図 61号・62号住居跡出土遺物

64号住居跡 (第65・66図, PL. 6)

位置は、座標値 $X=581\sim585$ ・ $Y=-018\sim-022$ の範囲にある。

重複は、92号住居跡と切り合う。両者は壁線をなぞる形で重なり、当跡が新しい。

平面形状は、長短軸長差が小さく、南北軸のわずかに勝る方形を呈する。

規模は、長軸3.55m・短軸3.2m、壁高40cmで深い掘形をもつ。床面積は10.0m²を有する。

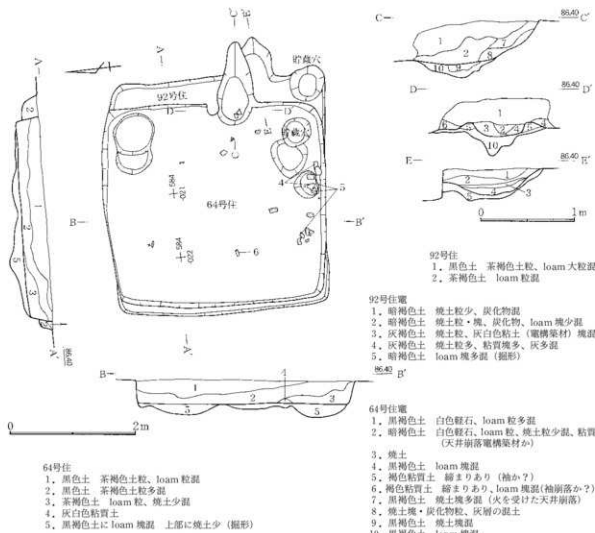
主軸方位は、 $N-85^{\circ}-W$ を示す。

埋土は、大別3層になり、中位層黒褐色土に褐色土塊が多く混入する。また、南西方壁際に三角堆積が形成され、埋土の流入が主にはこの方よりあったものと思われる。

竈は、東壁やや南に偏って付設され、壁線を約1mと大きく先細りに掘り込む。火床部はほぼ壁外にある。袖部と考えられる小さな凸部は残り、不明瞭ながら褐色粘質土を構築材に用いているようである。現状の焚き口幅約40cmである。

貯蔵穴は、南東隅部、竈の右手にあり、径40cm、深さ35cm余りの円形を呈する。

その他、北東隅部に2基の土坑が東西にずれた状態の重なりで検出されている。2基の土坑は径60cm前後、



第65図 64号・92号住居跡

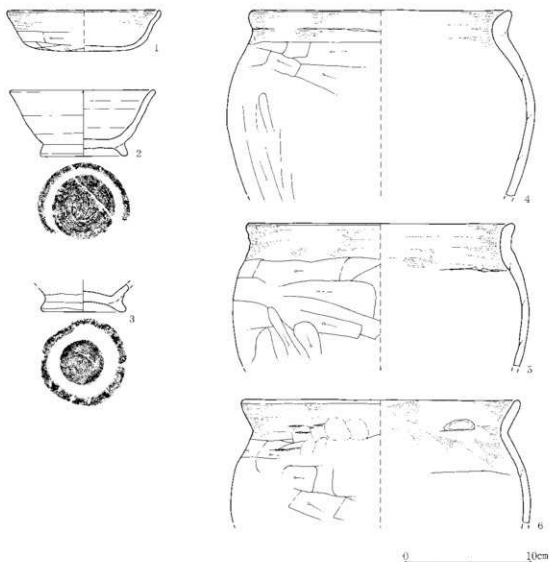
V、古代・古墳時代の遺構と遺物

深さ40cmと30cmの円形を呈し、掘形は明瞭である。埋土は貯蔵穴と同質な土層との所見があり、当跡に付随する施設の可能性もある。

出土遺物は、土師器環・甕、須恵器塊など少量で、散在した出土状況である。また、南壁沿いに若干の礫が見られたが不定形のものも多く所謂菰編み石のごとくのものではない。土師器環(1)は平底気味で体部中部で括れて口縁部は内湾する。口縁部横位撫で、腰部弱い寛撫で、底部不定方向の寛削り。赤褐色を呈し細土。須恵器塊(2・3)は粗い作りで酸化炎焼成。回転糸切り、付け高台。二次被熱で脆い。淡黄色、砂粒多混。土師器甕(4～6)は器内厚く短い口縁部をもつ。口縁部横位撫で、肩部横位・下位へ斜位・縦位の寛削り。(4)は橙色、(5・6)は黄褐色。(6)は細土。 後期

64号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器 環	(12.2)	—	(3.2)		4	土師器 甕	20.8	—	(14.7)	
2	須恵器 塊	11.6	5.9	5.2	酸化炎	5	土師器 甕	(21.2)	—	(11.2)	
3	須恵器 塊	—	(6.8)	(12.2)	酸化炎	6	土師器 甕	(22.0)	—	(9.6)	



第66図 64号住居跡出土遺物

92号住居跡 (第65図)

位置は、座標値 $X=581\sim585$ ・ $Y=-018\sim-022$ の範囲にある。当跡より新しい64号住居跡と重なり、東・西壁線は平行方向にずれを生じ、南・北・壁線はほぼ一致する。両者は重複よりは、64号住居跡が東西方向へ縮小して建て替えを行ったともいべき現象である。主軸方位は $N-87-W$ を示す。西壁線で10cm・東線では50cmの差がある。

平面形状は、東西方向に長軸をもつ方形を呈し、長軸3.8m・短軸3.5mで掘形は浅く壁線の痕跡を認識できる程度である。竈は64号住居より僅かに南にある。貯蔵穴は南東隅にあり、径55cm、深き20cmの円形である。

67号住居跡 (第67～70図、PL. 7・19・20)

位置は、座標値 $X=596\sim599$ ・ $Y=-021\sim-026$ の範囲にある。

平面形状は東西方向に長軸をもつ方形を呈するが、南東部住居壁線と竈の一部は擾乱によって消失する。規模は、長軸4.6m・短軸3.7m、壁高は34cmを測り、深い掘形をもつ。床面積は14.3㎡を有する。

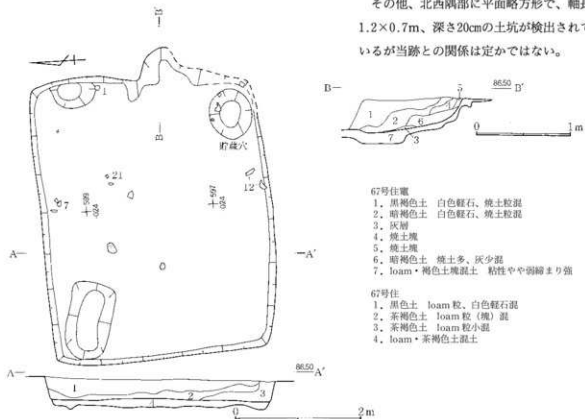
主軸方位は、ほぼ $N-90-E$ を示す。

埋土は、大別3層に分け、単味気味な黒色土を主層とし自然埋没と思われる。

竈は東壁でやや南に偏って付設される。壁線を小さく掘り込み煙道部を作り、火床部は壁線内になる。内部には多量な土器が廃棄状態で検出されている。竈の遺存度は悪く、竈自体の破壊的行為も想定されるところである。袖部などの不明部も多い。

貯蔵穴は、南東隅で竈右手にある。径90×60cm・深き約20cmで円形を呈する。

その他、北西隅部に平面略方形で、軸長1.2×0.7m、深き20cmの土坑が検出されているが当跡との関係は定かではない。



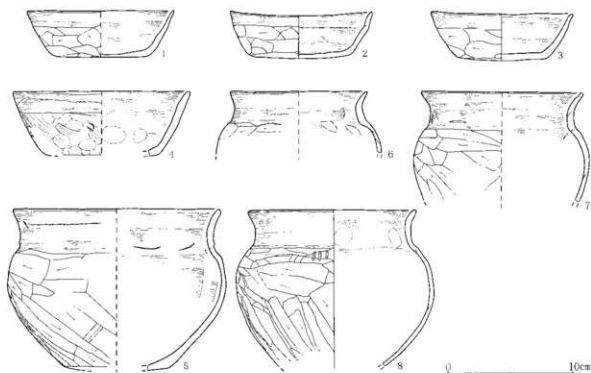
第67図 67号住居跡

V、古代・古墳時代の遺構と遺物

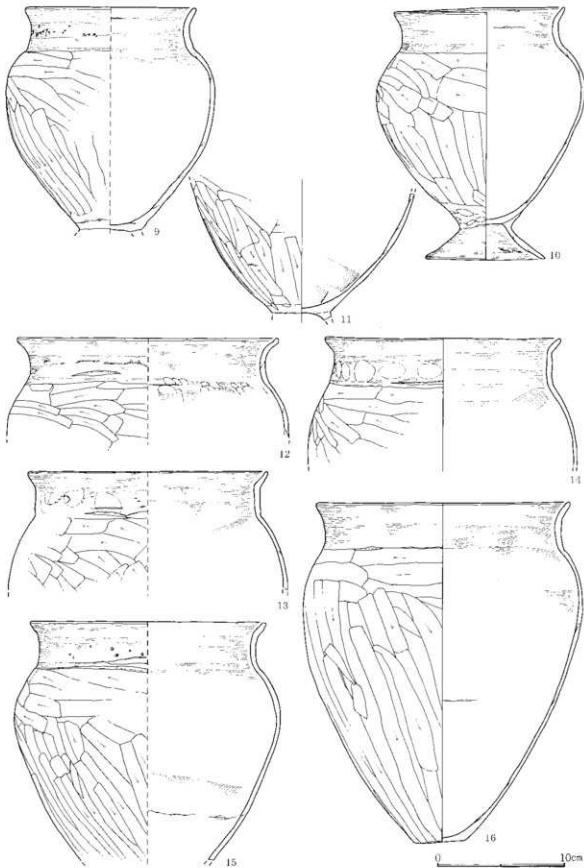
出土遺物は、竈内に投棄された如くに集中した状態で検出されている。土師器甕類が多く完形に近い甕だけでも6個体を数える。須恵器は少なく、とくに図示出来るような資料は得られていない。土師器杯(1~4)は箱型平底である。(1~3)はやや小振りで体部は緩く屈曲して口縁部は小さく外反。口縁部横位撫で、体部は指頭成形後に弱い撫で調整を施すが器面は粗い。底部の寛削りは不定方向と一方向の2通りがある。橙~黄橙色を呈し、砂粒は多少混入。(4)はやや大振りで平底。口縁部横位撫で、体部は3~4段の指頭痕調整。鈍褐色で比較的細土。(5)は土師器小型球胴の甕または安定感のある大径な底部で広口の鉢形にもなるか。肩部横位寛削り後下方向に斜位寛削り。鈍黄橙色、細土。(6~11)は台付き小型甕で、(6)は中でも小型である。口縁部は小さな「コ」の字口縁を呈す。口縁部横位撫で。寛削りは、肩部横位で右から左、胴部上位は斜位・下半は縦位で上から下方向へ削る。土師器甕(12~20)は「コ」の字口縁で肩部は強く張り、底部へ向かい強く窄まる。口縁部に指頭痕を残すもの多く、横位撫で。肩部は右左横位~上げ方向斜位の寛削り後、底部に向かい下方向の寛削り。色調はおおよそ淡橙または橙色を呈し、乳白色土粒を多く混える。(21)は小型羽釜に付く足部と思われる。焼成堅緻で赤橙色を呈す。鉄塊18g 中期

67号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器 杯	(11.4)	(7.5)	3.6		12	土師器 甕	(20.6)	—	(7.9)	
2	土師器 杯	10.2	8.1	3.7		13	土師器 甕	(19.0)	—	(8.3)	
3	土師器 杯	11.2	7.0	3.8		14	土師器 甕	18.6	—	(10.0)	
4	土師器 杯	(15.0)	(9.0)	(5.1)		15	土師器 甕	18.7	—	(18.9)	
5	土師器 小型甕	(16.4)	(8.4)	(12.4)		16	土師器 甕	20.0	4.0	26.8	
6	土師器 台付甕	(11.0)	—	(4.8)		17	土師器 甕	18.7	4.4	26.7	
7	土師器 台付甕	(12.8)	—	(8.0)		18	土師器 甕	19.2	4.8	26.0	
8	土師器 台付甕	13.3	—	(12.3)		19	土師器 甕	19.6	4.3	26.9	
9	土師器 台付甕	12.8	—	(16.7)		20	土師器 甕	19.5	4.3	27.0	
10	土師器 台付甕	—	—	(13.3)		21	羽釜脚部	縦12.6	幅3.3	厚2.9	
11	土師器 台付甕	13.5	9.5	19.9							

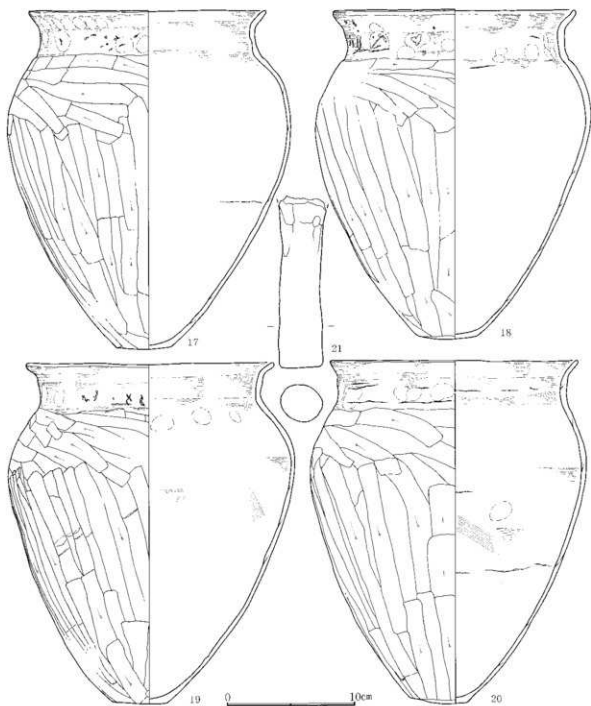


第68図 67号住居跡出土遺物(1)



第69図 67号住居跡出土遺物(2)

V. 古代・古墳時代の遺構と遺物



第70図 67号住居跡出土遺物(3)

68号住居跡 (第71・72図, PL. 7)

位置は、座標値 $X = 599 \sim 603$ $Y = -599 \sim -030$ の範囲にあり、東側の一部に擾乱が入る。

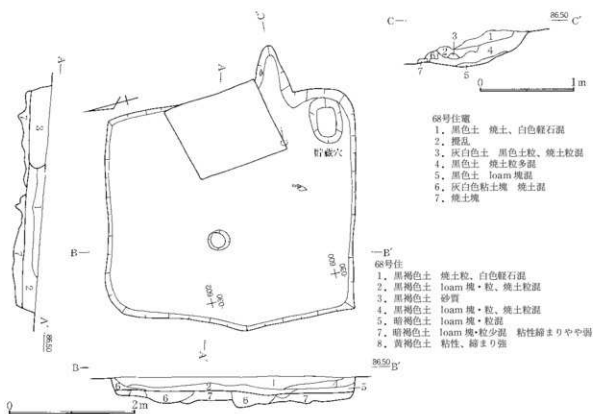
平面形状は、長短軸長差が小さく、南北方向に長軸をもつ方形を呈する。西壁縁に若干のゆがみがある。

規模は、長軸4.0m・短軸3.6m、壁高は約30cmで掘形はかなり深い。床面積は12.5㎡を有する。

主軸方位は $N-84^{\circ}-W$ を示す。

埋土は、大別3層になり、堆積状況などから自然埋没にならう。

1 奈良・平安時代の堅穴住居跡とその遺物

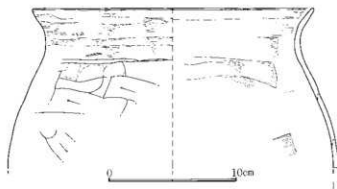


第71図 68号住居跡

竈は東壁にあり、大きく南に偏って付設される。壁線を先細りに70cmほど大きく掘り込こむ。火床部は壁外にある。袖部は検出されず、本来的に明確な形状をもっていなかったと考えられる

貯蔵穴は南東隅で竈右手にあり、径72×48cm・深さ10cmの浅い楕円形を呈する。その他、住居跡中央に小穴1穴が検出されている。径30cm・深さ80cmのかなり堅牢な掘形である。住居構造に関わるかは不明である。

出土遺物は土師器壺小片にとどまる。口縁は緩く外反して開く。肩部横～斜位筥削り。淡橙色。砂粒混入。口径22.2cm、最大径は胴部にあり26cm。 中期



第72図 68号住居跡出土遺物

71号住居跡 (第図73・74、PL.7・20)

位置は、座標値X=597~601・Y=-978~-982の範囲にある。

重複は東で竈先端部に縄文時代70号住居が、北では古墳時代前期の69号住居がさらに西側では古墳時代前の72号住居とそれぞれ僅かながら重なる。

平面形状は、長短軸長差が小さく、東西方向に長軸をもつ方形を呈する。

V. 古代・古墳時代の遺構と遺物

規模は、長軸3.56m・短軸3.3mを測り、壁高は僅か10cmで浅い掘形である。床面積は8.1㎡を有する。

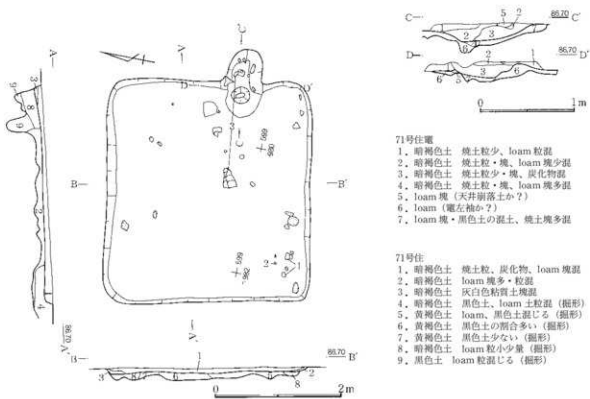
主軸方位は、N-80°-Eを示す。

埋土は、焼土粒・loam粒の混入する暗褐色土の単層である。混入物の状況から、上位層はある程度削平された可能性がある。

竈は、東壁やや南に偏って付設される。壁線を楕円形に50cmほど張り出す。火床部は壁内にあるが袖部の検出はない。竈内より長径の転石が出土し、支脚に用いられたと思われるが源位置の出土ではない。

その他、貯蔵穴・柱穴などの諸施設は検出されない。

遺物は少なく、小片で散在した出土状況である。内黒土器・土師器壺などがある。内黒土器(1)は西方約35mの62号住居跡の内黒土器(4)と見込み部の寛書き文様が同一意匠である。右回転轆轤成形回転糸切りで付け高台。内面体部横位の寛磨き、見込み部は寛磨き手法による花卉?文様。外面は黄棕色を呈し、細土。土師器鉢(2)は西方約20mの58号住居跡出土の(4)と接合する。口縁部短く体部の張りが小さい。黒斑が生じており、二次被熱内面口縁部肩部に強い横位撫で。体部縦位寛削り、胎土は緻密で焼成は硬い。土師器壺(3)は短い口縁部で横位撫で。胴部は上位から中位まで横位、下半に至り短い斜位~縦位の寛削り。内面は強い横位の寛撫で。橙色を呈し、細土で焼成は硬め。鉄塊54g 後期



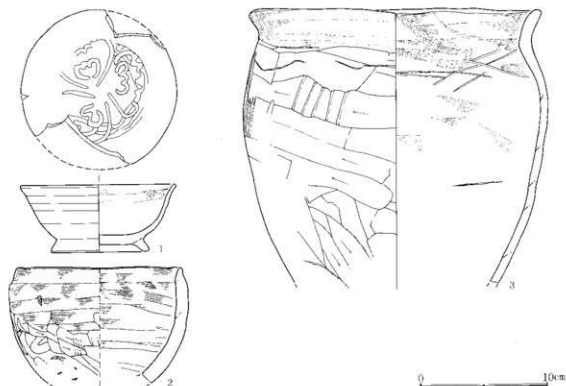
- 71号住竈
1. 暗褐色土 焼土粒少・loam粒混
 2. 暗褐色土 焼土粒・塊、loam塊少混
 3. 暗褐色土 焼土粒少・塊、炭化物混
 4. 暗褐色土 焼土粒・塊、loam塊多混
 5. loam塊 (天井崩落土か?)
 6. loam塊 (竈左袖か?)
 7. loam塊・黒色土の混土、焼土塊多混

- 71号住
1. 暗褐色土 焼土粒、炭化物、loam塊混
 2. 暗褐色土 loam塊多・粒混
 3. 暗褐色土 灰白色粘質土塊混
 4. 暗褐色土 黒色土、loam土粒混(掘形)
 5. 黄褐色土 loam、黒色土混じる(掘形)
 6. 黄褐色土 黒色土の割合多い(掘形)
 7. 黄褐色土 黒色土少ない(掘形)
 8. 暗褐色土 loam粒少量(掘形)
 9. 黒色土 loam粒混じる(掘形)

第73図 71号住居跡

71号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	内黒土器 壺	12.3	7.8	12.6	寛磨き62号住と同程度	3	土師器 壺	23.0	—	(21.6)	
2	土師器 鉢	(13.0)	—	(9.2)	58号住-4と接合						



第74図 71号住居跡出土遺物

75号住居跡 (第75・76図、PL.7・20)

位置は、座標値 $X = 609 \sim 614$ ・ $Y = -982 \sim -987$ の範囲にある。

重複は、古墳時代前期74号住居跡・縄文時代110号住居跡と重なる。

平面形状は、東西軸長が僅かに勝る方形を呈する。

規模は、長軸4.5m・短軸4.3mを測り、壁高は50cmで深い掘形をもつ。床面積は16.3m²を有する。

主軸方位は、 $N-85^{\circ}-W$ を示す。

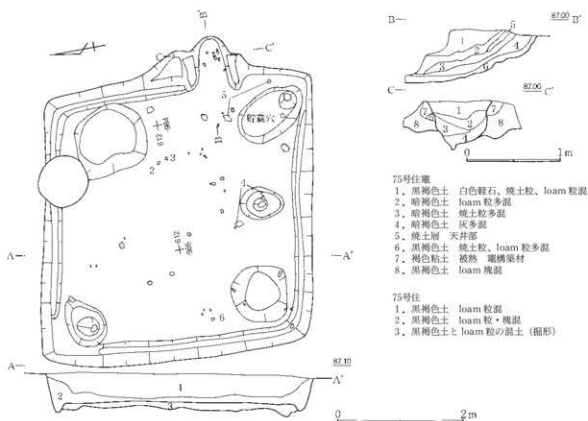
竈は東壁にあり、やや南に偏って付設される。短い袖部を有し壁線を約60cm掘り込み、その先端部に煙出し孔を穿つ。火床部位置は壁線外で、焚き口幅40cmを測る。袖部の構築材には褐色の粘土を用いている。

貯蔵穴は、南東隅、竈右手にあり、径120×70cm・深さ25cmの大振りな楕円形ですり鉢状の形態である。

その他、北東隅と南東隅に土坑が検出されている。径100cm前後の楕円形ですり鉢状を呈するが当住居跡に属するかの所見はない。また、北西隅と南壁沿いの小穴は、前者が径90×60cm深さ40cmで重複する縄文時代110号住居跡に、後者は径70×50cm・深さ45cmで古墳前期74号住居跡に属する可能性がある。

遺物は、小数量的な出土状況である。土師器坏(1)は平底気味で箱型の器形。体部の指頭痕調整が顕著。橙色、細土。須惠器坏(2・3)は小振り。回転糸切り、灰白色でやや粗土。焼成はやや甘く、(2)は外面燻気味。須惠器蓋(4)は大振りで扁平な形状。口縁端部は短く直に折れる。天井部は右回転の篋削り。灰色を呈し、焼成堅緻。砂粒多混。土師器甕(5・6)は同一個体にならう。口縁部やや高くゆるやかに外反し、胴部はやや膨らみをもつ。肩部〜胴部上位は横位〜斜位の左から右方向への篋削り。橙色を呈し、細土。砥石片(9)は定形流紋岩製。表裏研面に刃痕。羽口片(7・8)。鉄製品は刀子(10)の他、微磁気反応鉄塊など少量が出土している。前期

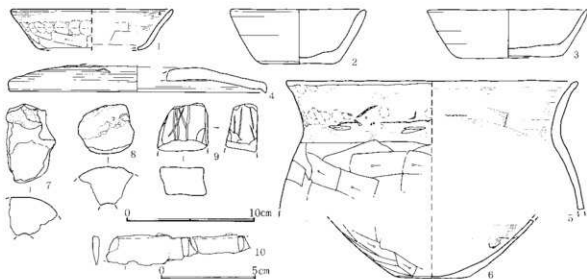
V. 古代・古墳時代の遺構と遺物



第75図 75号住居跡

75号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器 坏	(12.8)	—	3.2		6	土師器 甕	—	(6.0)	(5.7)	
2	須恵器 坏	(10.7)	(5.8)	4.3	横し焼成	7	羽口	縦(6.2)	幅(3.9)	厚 2.8	
3	須恵器 坏	12.7	8.0	3.7		8	羽口	縦(3.8)	幅(4.4)	厚 3.0	
4	須恵器 蓋	20.4	—	(2.0)		9	砥石	縦 3.7	幅 3.9	厚 2.5	肌紋岩
5	土師器 甕	(23.0)	—	(10.0)		10	鉄製品 牙子	長 7.5	牙幅1.5	厚 0.3	



第76図 75号住居跡出土遺物

77号住居跡 (第77・78図, PL. 7)

位置は、座標値 $X = 588 \sim 592$ ・ $Y = -982 \sim -987$ の範囲にある。

重複は、西角端で古墳時代前期の79号住居跡と重なる。

平面形状は、長短軸長差のない方形を呈する。

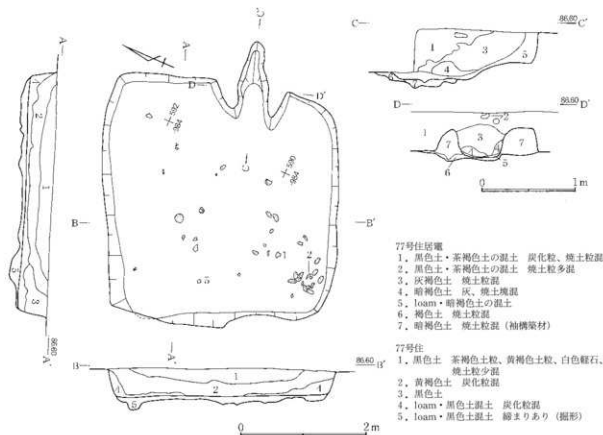
規模は、東西・南北軸長とも3.8mを測る。壁高は44cmで深い掘形をもつ。床面積は11.4m²を有する。

主軸方位は、 $N-73^{\circ}-E$ を示す。

埋土は、大別3層に分ち、黒褐色土にかなりの黄褐色土塊が混入し、人為的ないしは短時間の埋没が考えられる。

竈は東壁やや南に偏って付設され、長さ60cm余りの袖部を有する。火床部は壁線内に位置し、60cmほどの狭長な煙道部が壁線外にのびる。袖部は石材などの使用は見られず、やや粘性のある暗褐色土を用いる。焚き口幅は40cmである。貯蔵穴・柱穴などの諸施設は検出されていない。

遺物は極少量・小片化したものが散在する。当住居に直接伴うものはさらに少なく、南隅部床面に菰編み石に類する長径転石が数点検出されている。土師器環(1~4)は扁平な丸底で、口縁部は横位撫で、体部は弱い篋撫でまたは指頭痕様の調整がなされる。底部は不定方向の篋削り。鈍橙色~橙色を呈し、細土である。須恵器環(5)は右回転糸切り周辺回転篋削り調整。塊(6)は右回転糸切り、断面角状の付け高台である。灰色を呈し、白色細粒を混入。須恵器甕(7)は中型の甕で底部付近小片。平底で胴部の張りは少ない形態になろう。外面平行引き目・腰部篋削り、内面は撫で調整。灰色を呈し、白色細粒と黒色粒を混す。鉄塊31g 前期

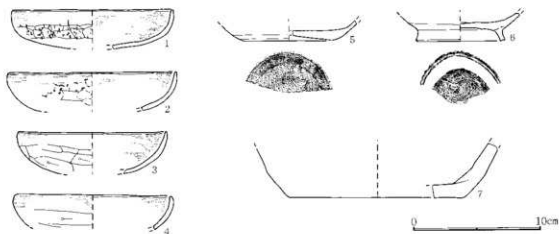


第77図 77号住居跡

V、古代・古墳時代の遺構と遺物

77号住居跡出土遺物計測表

順	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器 杯	(12.8)	丸底	(3.0)		5	須恵器 杯	(10.6)	(8.6)	(1.5)	同床切り後回裏所り
2	土師器 杯	(13.4)	丸底	(3.0)		6	須恵器 甕	(9.4)	(3.5)	(2.1)	
3	土師器 杯	(11.8)	丸底	(3.3)		7	須恵器 甕	(19.0)	(14.0)	(4.3)	
4	土師器 杯	(12.6)	—	(2.6)							

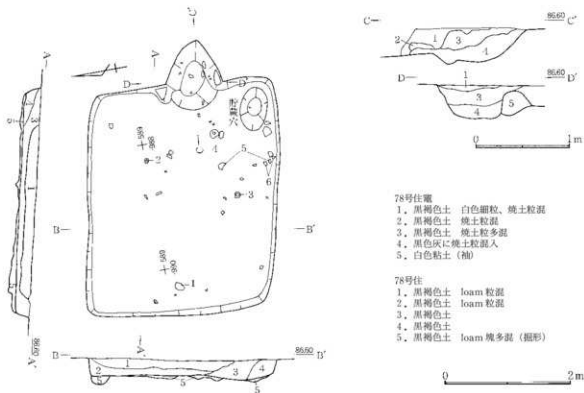


第78図 77号住居跡出土遺物

78号住居跡 (第79・80図、PL. 8・21)

位置は、座標値 $X = 586 \sim 590$ ・ $Y = -986 \sim -990$ の範囲にある。

重複は、北側隅部で古墳時代79号住居跡と重なる。



78号住居

1. 黒褐色土 白色細粒、焼土粒混
2. 黒褐色土 焼土粒混
3. 黒褐色土 焼土粒多混
4. 黒色灰に焼土粒混入
5. 白色粘土 (袖)

78号住

1. 黒褐色土 loam 粒混
2. 黒褐色土 loam 粒混
3. 黒褐色土
4. 黒褐色土
5. 黒褐色土 loam 焼多混 (掘形)

第79図 78号住居跡

平面形状は、東西に長軸をもつ方形を呈する。

規模は、長軸3.6m・短軸3.0mを測り、壁高は26cmである。床面積は9.5㎡を有する。

主軸方位はN-86°Wを示す。

埋土は大別単味の層質で、黒褐色土を主体に僅か loam 粒の混入で細分出来る。

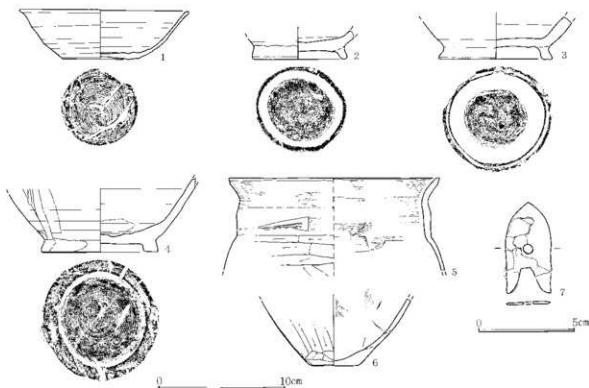
竈は東壁ほぼ中央に付設される。壁線を奥行き70cmほど楕円形に掘り込み、火床部は壁線外にある。竈左手には袖部を思わせるような小さな凸部が見られる。右手にはその痕跡はなく判然としない。

貯蔵穴は南東隅部竈右手にあり、径70×40cmの楕円形を呈し、深さ25cmほどの浅いすり鉢状を呈す。埋土には少量の焼土・炭化粒が混入する。

遺物は少量で散在的な出土状況である。土器類は須恵器環・埴・瓶・灰軸陶器瓶、土師器甕があり、底部などほとんどが破片である。そのほか鉄鏝1点・少数の鉄塊がある。須恵器環(1)は底径が小さく体部に丸みのある薄手の作りである。右回転糸切り。灰白色でやや焼成が甘い。細土。埴(2)は酸化炭焼成の底部。回転糸切り、付け高台。黄橙色、細土で茶褐色粒・雲母・角閃石粒混入。須恵器瓶(3)は底部角高台風付け高台。暗灰色、細土。灰軸陶器(4)は瓶底部。低い幅広い高台底面に「十」の寛書き。腰部正位右回転の篋削り。内底・外面に釉垂れ。外面赤橙色。細土で灰黄色。土師器甕(5・6)は「コ」の字口縁甕の口縁と底部。赤橙〜鈍褐色、細土。鉄鏝(7)は無頭腸状三角鏝で中央に円孔。 中期

78号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	須恵器 環	13.3	5.8	3.8		5	土師器 甕	16.6	—	(7.3)	
2	須恵器 埴	—	7.4	(2.2)	酸化炭	6	土師器 甕	—	4.0	(5.2)	
3	須恵器 瓶	—	9.2	(3.3)		7	鉄器 鏝	縦 4.8	幅 2.5	厚 0.2	惣室前縁三角形鏝中央に円孔
4	灰軸陶器 瓶	—	9.3	(5.8)	底面「十」寛書き						



第80図 78号住居跡出土遺物

V、古代・古墳時代の遺構と遺物

85号住居跡 (第81・82図、PL. 8・21)

位置は、座標値 $X = 609 \sim 612$ ・ $Y = -017 \sim -021$ の範囲にある。

重複は、南側で10号掘立柱建物跡の柱筋と重なる。

平面形状は、東西に長軸をもつ方形を呈する。

規模は、長軸3.2m・短軸2.7mを測り、壁高25cmの比較的深度のある掘形である。床面積は7.6m²を有する。

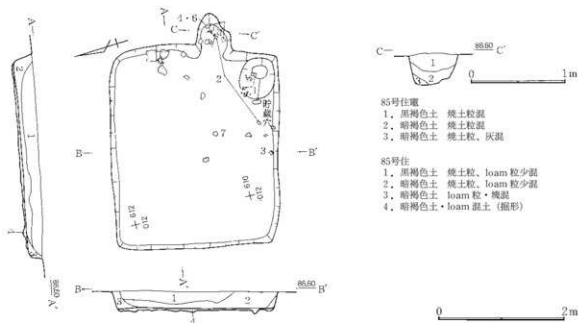
主軸方位はN-76°-Wを示す。

埋土は大別3層に分け、黒～暗褐色土の漸移的な変化をなし、自然堆積を思わせる。

竈は東壁やや南に偏って付設される。火床部は壁線外にあり、小さく先端部を細め楕円状に掘り込む。袖部は本来有しないためか、検出されていない。

貯蔵穴は南東隅、竈右手にあり、径64×52cm・深さ20cmの楕円形ですり鉢状を呈する。その他柱穴などは検出されない。

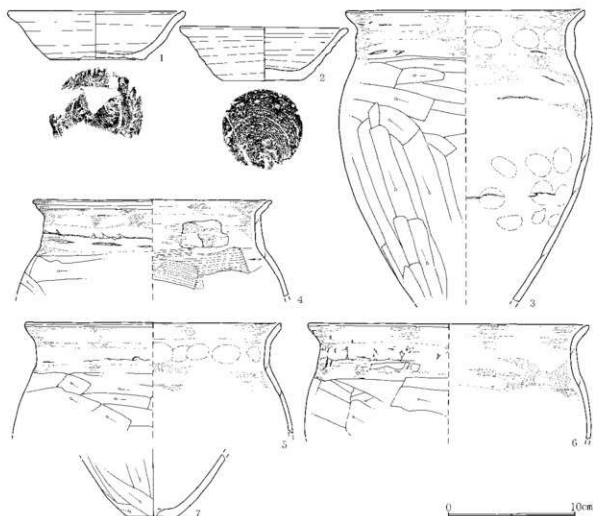
出土遺物は竈内に土師器破片が集中して検出されたが、総じて散在的な状況である。須恵器坏(1)は底径がやや大きく体部に丸みをもち口縁部がゆったりと開く。回転糸切り、底部の始末不良。青灰色を呈し、白濁長石粒(片岩)多く混入し胎土粗い。坏(2)は酸化炭焼成、右回転糸切り。黄褐色を呈し、砂粒多く混入。土師器甕(3～7)は「コ」の字状口縁で口唇部が、下顎状(3)・面取り状(4・5)・素縁(6)などがある。(7)は底部。肩部横位～斜位、上位より縦位寛削り。(4)は内面横位の刷毛目調整、他は寛無で。橙～鈍橙色を呈し、細土。(3)は製糟に近く、極めて軟質白色粘土が縮状に残る。中期



第81図 85号住居跡

85号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	須恵器 坏	14.1	7.5	3.8		5	土師器 甕	(20.2)	—	(8.65)	
2	須恵器 坏	13.3	6.6	4.3		6	土師器 甕	(22.2)	—	(8.9)	
3	土師器 甕	(18.8)	—	23.0		7	土師器 甕	—	(3.9)	(4.95)	
4	土師器 甕	18.8	—	7.55							



第82図 85号住居跡出土遺物

86号住居跡 (第83図、PL. 8)

位置は座標値 $X=615\sim 618$ ・ $Y=-023\sim -026$ の範囲にある。南・東壁に渡り竈前を斜に幅1.3mほどの攪乱土坑が侵す。

平面形状は南北に長軸をもつ方形を呈する。

規模は長軸3.3m・短軸2.8mを測り、壁高24cmで掘形は比較的深い。床面積は8.2㎡を有する。

主軸方位は $N-82^{\circ}-E$ を示す。

埋土は大別単層となる。堆積状況は比較的混入物の少ない黒褐色土が漸移的な土質を示し、自然埋没と考えられる。

竈は東壁大きく南に偏って付設され、壁線を楕円状に掘り込む。袖部に相当する様な痕跡は見られないが火床部の左壁面には構築材の一部と思われる長楕円形の転石が1石埋設された状態で検出されている。

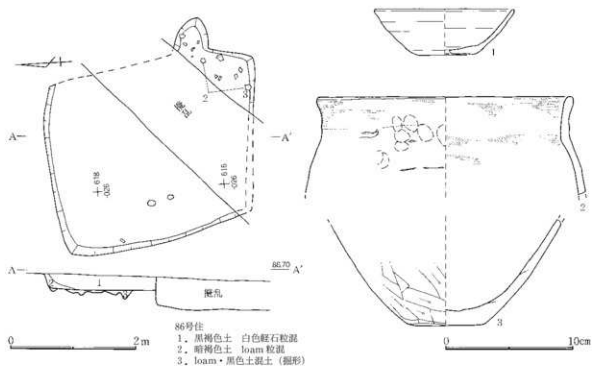
貯蔵穴・柱穴などの施設は検出されていない。

遺物は、竈内より小片の出土が知られるのみで他に1点の鉄滓がある。須恵器環(1)は小振り。轆轤右回転、回転糸切り。白灰色で二次被熱。細土。土師器甕(2・3)はで一体のものと考えられる。器内厚く、削り調整など弱い。鈍黄褐色、細砂粒混入。 後期

V、古代・古墳時代の遺構と遺物

86号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	須恵器 坏	(11.0)	(4.4)	3.6	二次被熱	3	土師器 甕	(18.2)	(5.6)	(8.3)	2と同一個体
2	土師器 甕	(20.2)	—	(7.7)	3と同一個体						



第83図 86号住居跡・出土遺物

87号住居跡 (第84～86図、PL. 8・21・22)

位置は、座標値 $X = 619 \sim 623$ ・ $Y = -024 \sim -030$ の範囲にある。

平面形状は、東西方向に長軸をもつ方形を呈する。

規模は、長軸4.4m・短軸3.4mを測り、壁高36cmで深い掘形をもつ。床面積は11.9㎡を有する。

主軸方位(東壁竈に基づく)は、 $N-86^{\circ}-E$ を示す。

埋土は、倒木跡と重なるが大別2層であろう。層相は比較的単味で自然埋没であろう。

竈は、東壁竈と北壁竈があり、東竈から北竈への造りかえである。東竈は東壁を大きく南に偏って付設され、壁線を60cmほど掘り込んである。竈前は焼土や灰層の散乱・流出もなく住居の建て替えまたは拡張等によって取り払われたものと思われる。北壁竈は大きく東に偏って付設される。袖部は約50cmの長さで張り出し、明褐色粘土を構築材に用いる。壁線外への掘り込みは小さく20cm程度である。焚き口幅は40cmほどである。

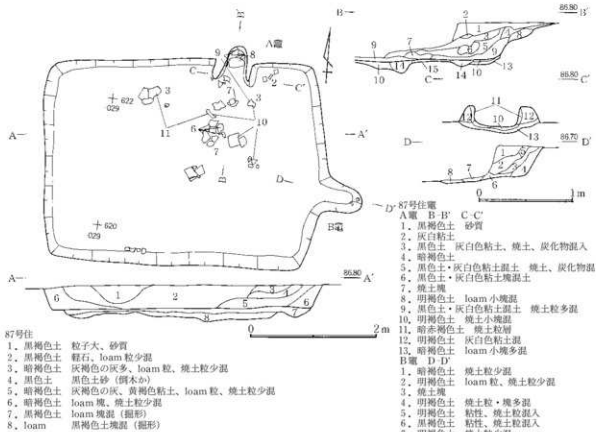
貯蔵穴・柱穴などの諸施設は検出されていない。

出土遺物は、北壁竈の内と竈前面に集中して分布する。土師器甕が多く、その他羽釜・須恵器中型甕などが目立つ。須恵器塊(1～3)は浅黄橙色の酸化炭焼成である。(2・3)は足高気味の形態になろう。轆轤右回転、胎土は砂粒の混入が多い。灰軸陶器(4・5)は皿と埴。高台は「ハ」の字状に開き外縁下端面取り状に細まって疑似三日月高台。漬け掛け施軸。(4)は胎土浅黄灰、(5)は灰色で堅緻。土師器甕(6～9)はやや厚手の口縁部で外反の度合いは緩く直立気味のものもある。胴部上半は横位・下半は縦位寛削り。浅黄橙色を呈し、二

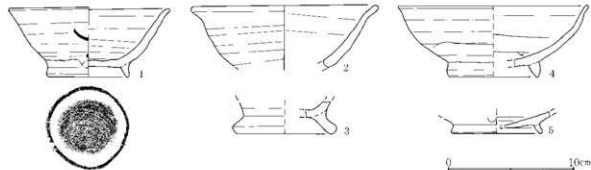
次被熱。胎土は比較的細土。羽釜(10)の鐔はやや短いが断面細身の三角。口縁部内傾して短め。胴部中位まで回転撫で調整、下半は斜気味の縦径寛削り。鈍橙色で細土、赤褐色土粒混入。須臾器(11)は平底で肩部にやや張りをもつ。組作り痕(巻き上げ)顕著。成形は指頭による。内面下位斜位・外面横位寛撫で後横位撫で調整。やや酸化炎焼成気味で軟質。外面鈍灰色、内面鈍橙色。細土で微細白色粒混入。鉄塊108g 後期

87号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	須臾器	(12.8)	6.5	5.5	酸化炎 器蓋あり	7	土師器 壺	(19.6)	—	(16.9)	
2	須臾器	14.8	—	(4.9)	酸化炎	8	土師器 壺	22.0	—	(15.0)	
3	須臾器	—	(8.1)	(2.5)	酸化炎	9	土師器 壺	(22.2)	—	(24.7)	
4	灰褐色器	(15.0)	(7.0)	5.6		10	羽釜	(18.8)	—	(22.6)	
5	灰褐色器	—	(7.2)	(1.7)		11	須臾器	—	(18.6)	(31.6)	平底
6	土師器 壺	22.2	—	21.4							

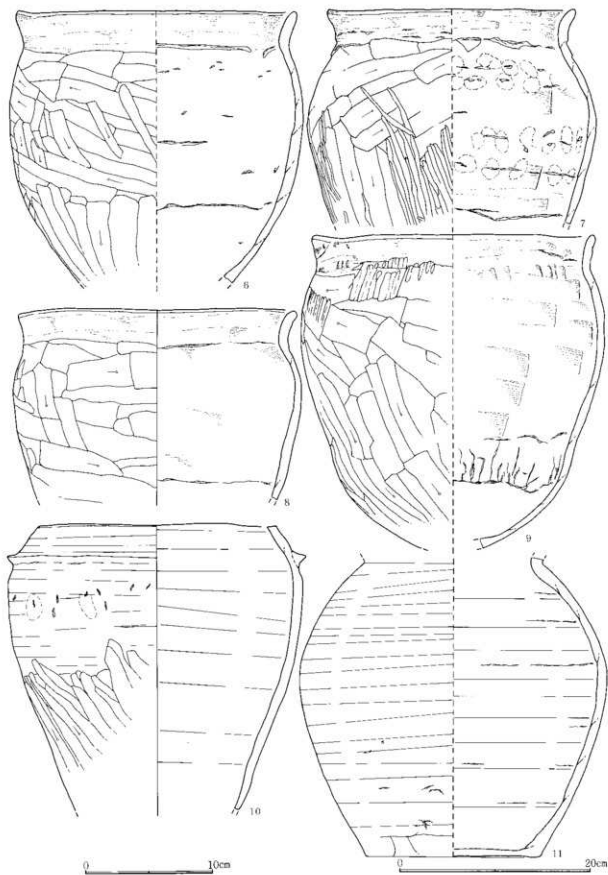


第84図 87号住居跡



第85図 87号住居跡出土遺物(1)

V. 古代・古墳時代の遺構と遺物



第86図 87号住居跡出土遺物(2)

88号住居跡 (第87・88図, PL. 9)

位置は、座標値 $X = 608 \sim 611$ ・ $Y = -030 \sim -033$ の範囲にある。

平面形状は、南北軸長が僅かに勝る方形を呈する。南西～北東隅への斜方向に攪乱が入り、床面・壁線が消失する。

規模は、長軸3.0m・短軸2.6mを測り、壁高20cmの掘形をもつ。床面積は6.4㎡を有する。

主軸方位は、ほぼ $N-90^{\circ}-E$ を示す。

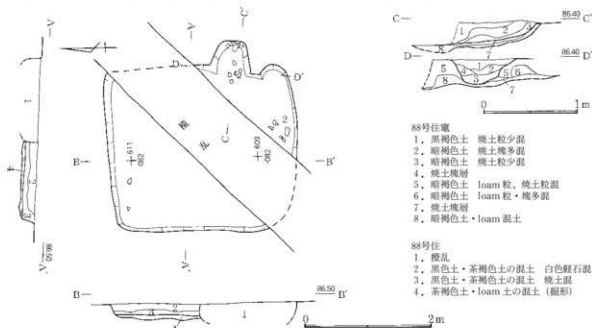
埋土は、大別2層になる。水平堆積に近く、人為的埋土の可能性も考えられるが、loam塊などの土質所見はなく自然堆積であろうか。

竈は東壁にあり、大きく南に偏って付設される。壁線を約40cmに楕円形状に掘り込み、袖部は検出されていない。焚き口幅は50cmほどで、火床部はほぼ壁線外にある。貯蔵穴・柱穴などは検出されていない。

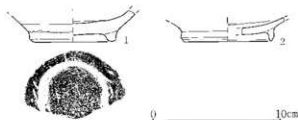
出土遺物は、竈内より小片・少数である。須恵器塊(1)は底部で酸化炭焼成、二次被熱。底面の器面荒れ不詳だが回転糸切り、付け高台は作り粗雑。黄橙色で細土。灰釉陶器(2)は塊か。内湾する高台。見込み部重ね焼き痕が残る。漬け掛け施軸か。胎土灰白色で堅緻。 後期

88号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	須恵器塊	(9.8)	(6.8)	(2.4)	酸化炭	2	灰釉陶器塊	(9.0)	(7.0)	(1.8)	



第87図 88号住居跡



第88図 88号住居跡出土遺物

V、古代・古墳時代の遺構と遺物

89号住居跡 (第89・90図)

位置は、座標値 $X=613\sim617$ ・ $Y=-028\sim-033$ の範囲にある。

重複は、南半で同時代平安期90号住居跡と重なり、これよりも旧く掘形の深い90号住居によって南西の大部が消失する。

平面形状は、東西軸長が僅かに勝る方形を呈しよう。

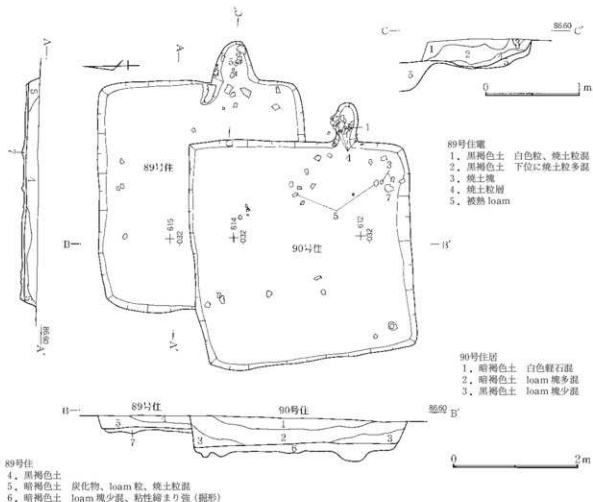
規模は、長軸3.6m・短軸3.3mを測り、壁高20cmを測る。床面積は10.4m²を有する。

主軸方位は、ほぼN-90°-Eを示す。

埋土は、大別2層で90号住の掘り込みに近い範囲には loam 塊の混入が顕著である。90号住の設営に伴う排土であろう。

竈は、東壁にあり、大きく南に偏って付設される。壁線を楕円形に70cmほど掘り込み、火床部は壁線外にある。左袖部の様な凸部がかろうじて検出されているが、遺存状態は悪い。竈内には数個の破礫が残り、竈構築材の一部とも思われる。貯蔵穴・柱穴などは検出されていない。

出土遺物は、極少量で須恵器環・埴・灰釉陶器・甕など、いずれも小片である。須恵器環(1)軸右回転、酸化炎焼成で軟質。黄橙色、細土。(2)は埴にならうか。灰白色で軟質。軸右回転。細土。灰釉陶器塊(3・4)は漬け掛け施釉。胎土灰白色で堅緻。土師器甕(5)は底部。二次被熱、淡黄橙色。砂粒多混。後期



第89図 89号・90号住居跡

90号住居跡 (第89・91・92図、PL.9・22)

位置は、座標値 $X=612\sim 615$ ・ $Y=-029\sim -034$ の範囲にある。

重複は北半で同時代平安期の89号住居跡と重なり、これよりも新しい。

平面形状は、長短軸長にほとんど差のない方形を呈する。

規模は、東西・南北軸長とも3.5mを測り、壁高は50cmの深い掘形である。床面積は10.7㎡を有する。

主軸方位は、ほぼ $N-90^{\circ}-E$ を示す。

埋土は大別3層に分かつ。中位層に多量の loam 塊の混入が見られ、人為的な埋め戻しの可能性がある。

竈は東壁にあり、大きく南に偏って付設される。壁線をやや長径な楕円で60cmほどに掘り込む。袖部の検出はなく、火床部は壁線外になる。焚き口幅はやや狭く40cmほどである。貯蔵穴・柱穴などは検出されていない。

遺物は、竈内の他住居内の埋土を中心に散在的な出土状況である。須恵器杯・土師器壺類などであるが完形度はいずれも低い。須恵器塊(1・2)は足高台気味である。轆轤回転右。酸化炭焼成で甘い焼き。黄褐色を呈し、胎土に砂粒の混入多い。小型壺(3)は内面口縁部を中心に表・内面とも炭化皮膜が付着。土師器壺(4～6)は厚い器内。外反が小さく短い口縁部で肩部の張りも小さく短胴の形状。底部径小さく肥厚。胴部上位は縦上方へ寛削り。最下部は(5)が縦または斜下方へ、(6)は横位左方への寛削り。二次被熱で黄褐色～鈍褐色を呈す。胎土は比較的細土。羽釜(7)は上半横位撫で。外面二次被熱で赤褐色を呈す。細砂粒混。須恵器壺(8)は肩部に平行叩き目。内面無紋当て目。灰色を呈し、白色微細粒混。その他鉄塊小粒がある。磁石(9)は定型砥で砥沢石製、西面使用 後期

89号住居跡出土遺物計測表

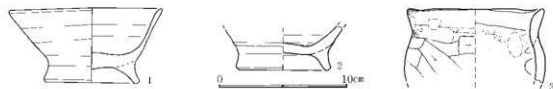
番号	器種	口径	底径	部高	備考	番号	器種	口径	底径	部高	備考
1	須恵器 杯	(11.9)	—	6.0	酸化炭	4	灰釉陶器 塊	—	(6.0)	(2.8)	
2	須恵器 塊	(15.0)	—	(3.8)		5	土師器 壺	—	5.8	(5.6)	
3	灰釉陶器 皿	(15.4)	—	(3.7)							



第90図 89号住居跡出土遺物

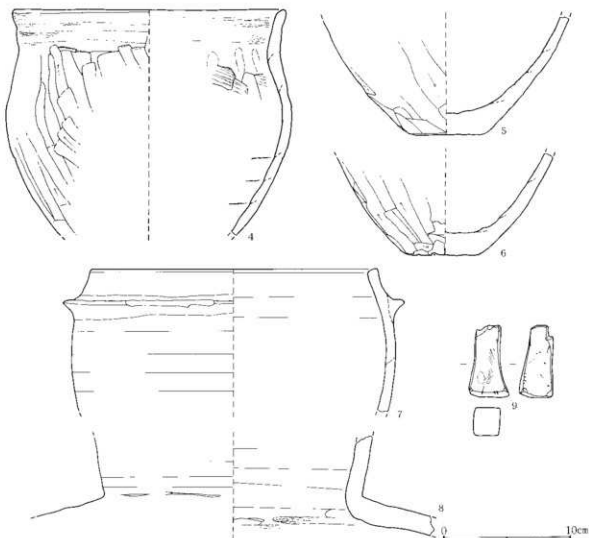
90号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	部高	備考	番号	器種	口径	底径	部高	備考
1	須恵器 塊	(11.2)	7.6	(5.9)	酸化炭	6	土師器 壺	—	5.8	(8.1)	
2	須恵器 塊	(9.2)	(7.6)	(3.5)	酸化炭	7	須恵器 羽釜	(22.6)	—	(11.2)	
3	土師器 小型壺	(16.8)	—	(5.8)		8	須恵器 壺	—	—	(7.8)	
4	土師器 壺	(21.6)	—	(17.8)		9	磁石 仕上げ砥	長 5.5	幅 3.0	厚 2.5	砥沢石 欠品
5	土師器 壺	—	5.8	9.2							



第91図 90号住居跡出土遺物(1)

V. 古代・古墳時代の遺構と遺物



第92図 90号住居跡出土遺物(2)

91号住居跡 (第93・94図、PL. 9・22)

位置は、座標値 $X=625\sim 629$ ・ $Y=-032\sim -036$ の範囲にある。

平面形状は、南北に長軸をもつ方形を呈する。

規模は、長軸3.7m・短軸3.0mを測り、壁高14cmの浅い掘形である。床面積は10.0㎡を有する。

主軸方位は、 $N-78^{\circ}-E$ を示す。

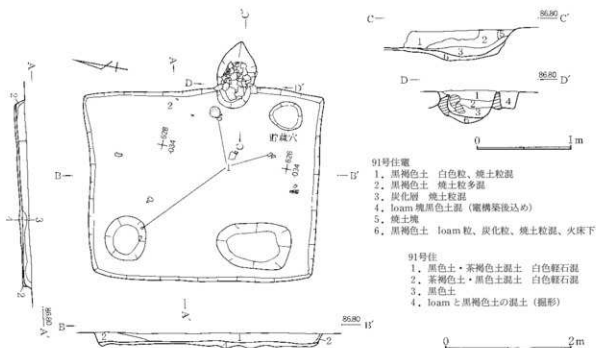
埋土は、大別2層で混入物の少ない淡味な土質である。

竈は、東壁にあり、大きく南に偏って付設される。壁線を大きく先細りに穿ち、70cmほど突出する。火床部は壁線外にあり、ほぼ壁線上に長人頭大の転石を埋設する。左右各二〜三石を用いて焚き口部の用を果たすもので、突出する袖部の形状ではない。火床部には逆円錐に転石材の支脚を据える。焚き口幅約50cmを測る。

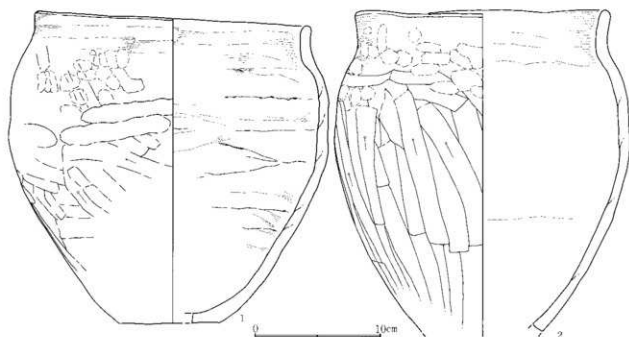
貯蔵穴は南東隅、竈の右手にある。径50×45cmの円形で深さ11cmの浅いすり鉢状をなす。柱穴は検出されないが、北西・南西隅のそれぞれに土坑が検出されている。北西のそれは円形で径約70cm・深さ20cm、南西のものは楕円形で径115×75cm・深さ15cmである。位置的に当跡に伴う床下土坑などの可能性は高いが調査所見は得られていない。

1 奈良・平安時代の竪穴住居跡とその遺物

遺物は、竈内に2個体分の土師器壺片が投棄状態で出土している。住居内では他に小片が散在的に認められるにすぎない。土師器壺(1・2)は厚手、口縁部は短めで僅かに外反する。肩部・胴部の張りは小さい。口縁部は横位の撫で、肩部から胴部上位は指頭による凹凸が目立つ。下半は下方から上方へ弱めの篋削り。二次被熱のため淡黄橙色～鈍褐色で胎土は比較的細土。(1)は口径22cm・底径8cm・器高24cm・最大径胴部25.2cm、(2)は口径20cm・器高26+ α ・最大径胴部23.2cm 後期



第93図 91号住居跡



第94図 91号住居跡出土遺物

V、古代・古墳時代の遺構と遺物

94号住居跡 (第95～97図、PL. 9・22・23)

位置は、座標値 $X=614\sim619$ ・ $Y=-992\sim-997$ の範囲にある。

重複は、北側で縄文時代の117号住居跡と重なる。

平面形状は、南北方向に長軸をもつ方形を呈する。

規模は、長軸4.1m・短軸3.1mを測り、壁高は36cmの深い掘形をもつ。床面積は11.0m²を有する。

主軸方位は、 $N-73^{\circ}-E$ を示す。

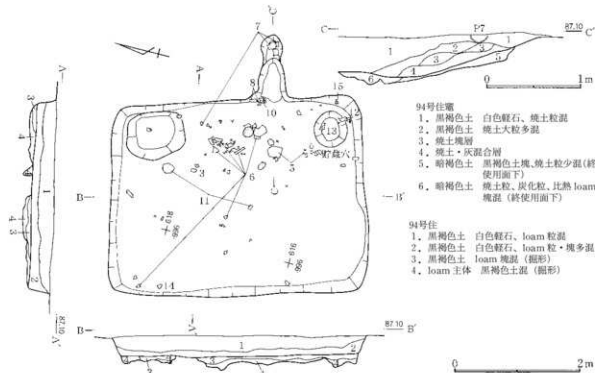
埋土は、大別2層からなり、やや水平堆積気味である。下位層には loam 塊の混入もあるが、総じて土質に複雑さはなく、自然堆積によるものと考えられる。

竈は、東壁中央でやや南に偏って付設される。火床部は壁線外にあり煙道部とともに大きく突出し、壁線より1mほど張り出す。袖部検出されていないが、竈前面には被熱痕のある幾つかの転石が散在し、袖部構築材の一部である可能性もある。壁面焚口部の開口幅は約30cmである。

貯蔵穴は、竈の右手、南東隅にあり、径60×50cm・深さ15cmの円形を呈する。

柱穴・壁下溝などの諸施設は検出されていない。

遺物は竈前面に主として分布するが、出土状況は散在的に埋土中からの出土も多い。須恵器環・塊・内黒土器はいずれも小片で、壘類が多い。須恵器環(1)は右回転糸切り、灰色で粗砂粒多混。塊(2)は回転糸切り付け高台。白灰色で砂粒多混。内黒土器(3)は内面放射状寛磨きか。付け高台、底部縁辺に爪状斑痕。淡褐色で細土。緑釉陶器塊(4)は口縁部ゆったりと外反し、体部中位に寛削り。胎土は白灰色の細土で釉薬は薄めに施す。土師器壘(5～13)は相対的に長胴傾向の(5～9)と短胴気味で脹りみの強い(10～12)がある。口縁部は短く、「く」の字状に折れる。2～3段の寛状工具横撫で、胴肩部から上位は横、中位は斜、下半部は縦位の寛削りを施す。内面は横位の寛撫で。橙色～明赤褐色で比較的細土。壘類総じて器内は厚手傾向にあるが(12)が薄手。(13)は砂目底。砥石(14)は定型砥石用か、不定型で多面使用。砥沢石製。(15)は板状鉄器。片



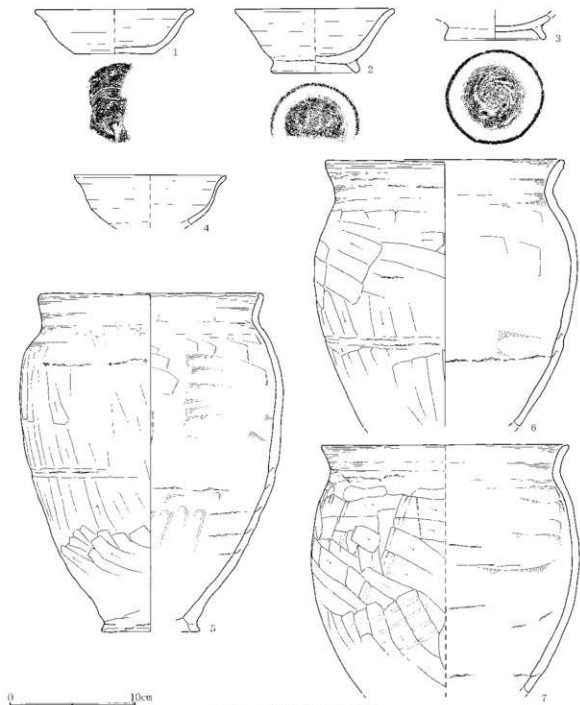
- 94号住竈
- 1. 黒褐色土 白色軽石、焼土粒混
 - 2. 黒褐色土 焼土大粒多混
 - 3. 焼土塊屑
 - 4. 焼土・灰混合層
 - 5. 暗褐色土 黒褐色土塊、焼土粒少混(終使用面下)
 - 6. 暗褐色土 焼土粒、炭色粒、炭熱 loam 塊混(終使用面下)
- 94号住
- 1. 黒褐色土 白色軽石、loam 粒混
 - 2. 黒褐色土 白色軽石、loam 粒・塊多混
 - 3. 黒褐色土 loam 塊混(掘形)
 - 4. loam 主体 黒褐色土混(掘形)

第95図 94号住居跡

端部僅かに広がり、対端部は巻く。 後期

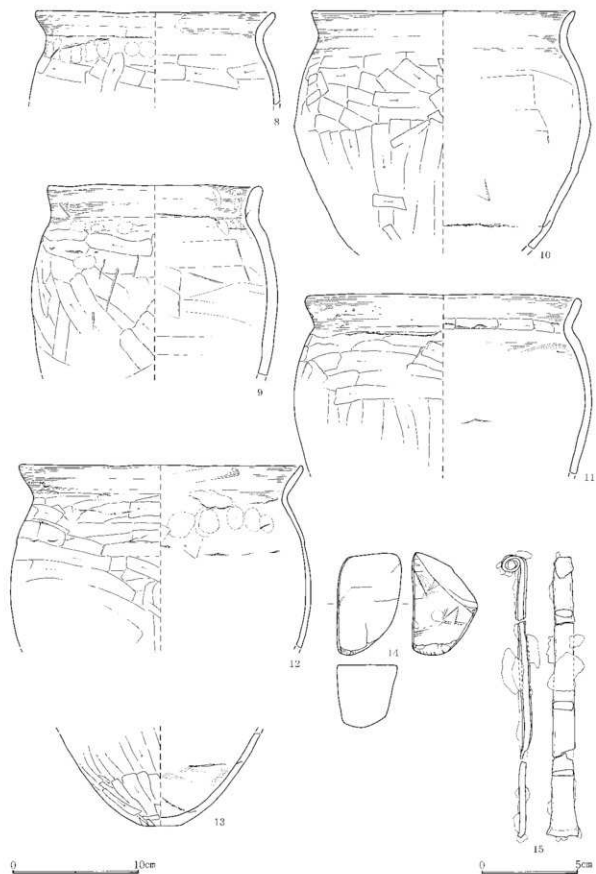
94号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	直差器 坏	(12.6)	(6.2)	3.5		8	土師器 甕	(18.6)	—	—	
2	直差器 坏	—	(6.6)	5.5		9	土師器 甕	(16.8)	—	(15.0)	
3	内黒土器 埴	—	2.8	(1.9)	内面放射状溝磨き	10	土師器 甕	(26.0)	—	(18.7)	
4	緑釉陶器 埴	12	—	(3.9)		11	土師器 甕	(21.3)	—	(14.1)	
5	土師器 甕	(17.8)	—	26.6		12	土師器 甕	(22.0)	—	(14.3)	
6	土師器 甕	(18.8)	—	(21.0)		13	土師器 甕	(15.8)	(3.4-3.9)	(7.3)	
7	土師器 甕	(19.4)	—	(19.5)		14	磁石 仕上げ砥	長 8.5	幅 4.5	厚 5.0	磁石石



第96図 94号住居跡出土遺物(1)

V. 古代・古墳時代の遺構と遺物



第97図 94号住居跡出土遺物(2)

99号住居跡 (第98～100図, PL.10・23)

位置は、座標値 $X = 601 \sim 605$ ・ $Y = -974 \sim -978$ の範囲にある。

重複は、古墳時代前期69号住居跡と縄文時代70号住居跡、さらに時期不明の108号住居跡とも重なる。

平面形状は、南北に長軸をもつ方形を呈するが、南東隅部の壁線はなで肩の丸みをもつ。

規模は、長軸3.8m・短軸3.2mを測り、壁高は24cmである。床面積は12.0㎡を有する。

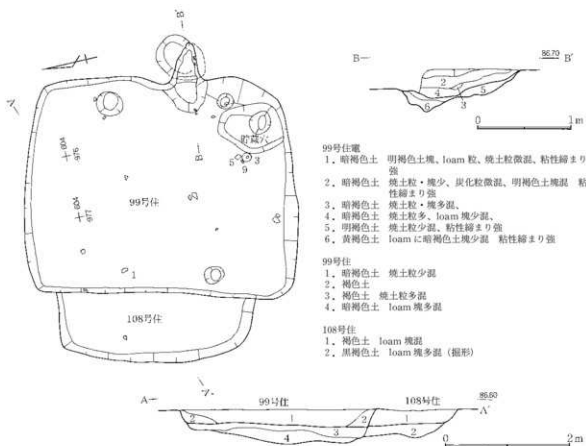
主軸方位は、 $N-76^{\circ}-W$ を示す。

埋土は、大別2層で混入物の少ない単味な土質で自然埋没と思われる。

竈は東壁にあり、やや南に偏って付設される。壁線先細りに約70cm掘り込み、袖を有しない形態である。火床部は壁線外にある。

貯蔵穴は、南東隅にあり、楕円形状で径100×70cm、深さ20cmである。その他、柱穴などは検出されていない。

遺物は散在的で少なく、土師器環・甕、須恵器環などがある。土師器環(1・2)は体部に指頭痕成調整を施す平底気味の形態。(2)は底部に墨書「?」。橙色。細土。須恵器環(3)は右回転糸切り。焼成堅緻で灰色を呈し、粗砂粒多く混入。(4)は砂粒が多く粗い。回転糸切り。須恵器塊(5)は、軸轆右回転。回転糸切り、付け高台。下端面は凹線状。外面黒灰色。砂粒多く混入。土師器甕(6・7)は短胴の形態。(6)は薄手。肩部に小さな段縁を有する。肩～胴部上位は左から右方向へ、胴部中位下は上から下方へ篋削り。橙色を呈し、細砂粒



第98図 99号・108号住居跡

V、古代・古墳時代の遺構と遺物

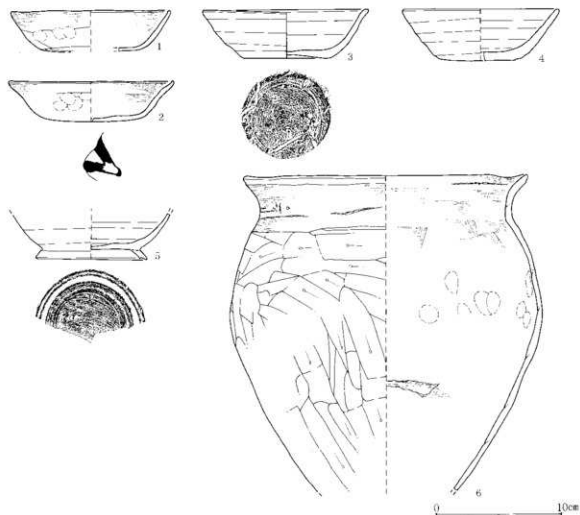
混。(7)は器内厚め。短い口縁部で寸詰まりの胴部。肩部から胴部上位は横位・斜位の右から左方向への篋削り。胴中位より下方向に向かい縦位篋削り。淡黄橙色を呈し、細土。砥石(8)は粘板岩製。片深い刃痕。鉄製品(9)は鎌。 後期

108号住居跡 (第98図)

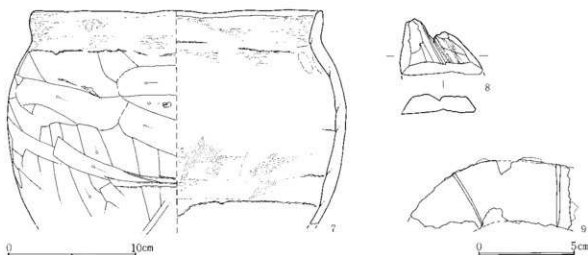
当跡より旧く掘形の深い99号住居跡とほぼ重なり、僅か西側にその存在を知るのみである。南北軸長は約2.9mを測る。掘形は約20cmである。平面形状・出土遺物なども少なく詳細は不明である。

99号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師部 杯	(12.6)	(8.1)	(3.2)		5	須恵部 埴	—	(8.8)	(3.6)	
2	土師部 杯	(13.0)	—	3.2	不明塗書有り	6	土師部 壺	(22.4)	—	(24.8)	
3	須恵部 杯	13.0	7.0	3.9		7	土師部 壺	(23.5)	—	(16.8)	
4	須恵部 杯	(12.4)	(6.4)	4.0		8	砥石	厚 4.4	幅 6.6	厚 1.5	粘板岩



第99図 99号住居跡出土遺物(1)



第100図 99号住居跡出土遺物(2)

123号住居跡 (第101・102図、PL.10・24)

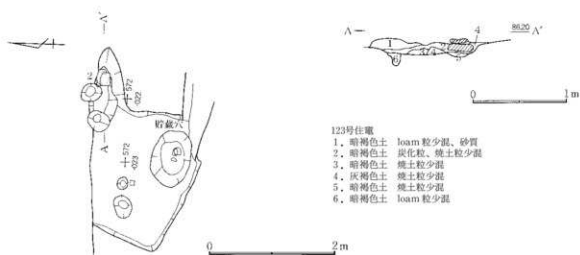
位置は、座標値X=570~572・Y=-021~-024の範囲にある。南側の一部はかろうじて調査区域に取まるが、北半は攪乱によって消失している。また、西端は明らかになっていない。

平面形状は、略方形を呈すると思われるが、上述の如く全容は不明である。検出部分は2×2mほどの範囲にすぎない。主軸方位はほぼN-90°-Eを示そう。

竈は、東壁に付設され壁線先細りに1mほど掘り込む。袖部などの痕跡は明らかではない。竈内より径20cmほどの扁平な転石が検出されている。竈構築材の一部であろうか。

貯蔵穴は南東隅、竈右手にあり、径90×60cmの楕円形状で深さ20cmを測る。

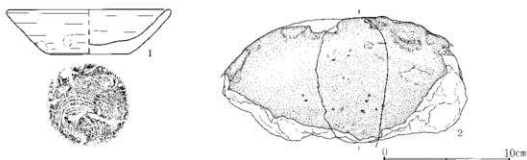
出土遺物は少なく、貯蔵穴内より須恵器杯1点が見るべきものである。須恵器杯(1)はくすみのかかった淡黄色で甘い焼成である。器内は厚く、作りは粗雑。右回転糸切り。細土。口径12.4cm・底径6.6cm・器高3.4cm。(2)は縄文時代石皿片で竈構築材に使用した物。粗粒輝石安山岩。 後期



- 123号住居
- 1, 暗褐色土 loam 粒少混、砂質
 - 2, 暗褐色土 炭化粒、焼土粒少混
 - 3, 暗褐色土 焼土粒少混
 - 4, 灰褐色土 焼土粒少混
 - 5, 暗褐色土 焼土粒少混
 - 6, 暗褐色土 loam 粒少混

第101図 123号住居跡

V、古代・古墳時代の遺構と遺物



第102図 123号住居跡出土遺物

126号住居跡 (第103図、PL.10)

位置は、座標値 $X=580\sim 584$ ・ $Y=-958\sim -959$ の範囲にある。西側の大半は擾乱の為か消失している。

平面形状は、上述のように全容は不明であるが、ほぼ方形を呈すると考えられる。

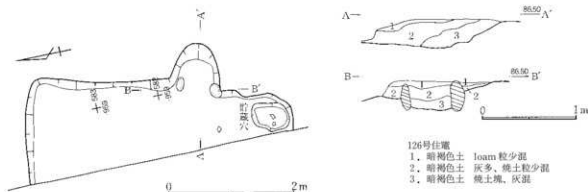
規模は、南北軸長で4.2mを測り、壁高は20cmである。

主軸方位は、 $N-75^{\circ}-W$ を示す。

竈は東壁にあり、大きく南に偏って付設される。壁線を70cmほど楕円形に掘り込み、壁線上の左右に長径25~30cmの転石を埋設し、焚き口部を造る。焚き口部幅は、45cmを測る。

貯蔵穴は南東隅、竈の右手にあり、径60×40cmの楕円形を呈する。

遺物は少量で、土師器環・須恵器皿などの小片である。 後期



第103図 126号住居跡

128号住居跡 (第104図、PL.10・24)

位置は、座標値 $X=572\sim 575$ ・ $Y=-010\sim -015$ の範囲にある。南側を擾乱溝が東走し、南西部は削平によって一部消失する。また、全体に削平が及んでおり、遺構の遺存状況は悪く壁線の軌跡は心許ない。北東及び南西隅に土坑を検出しているが、当跡との関係は定かではない。

平面形状は、東西に長軸をもつ方形を呈しよう。

規模は、長軸4.1m・短軸3.0mを測り、壁高は良好な部分で5cmに満たない。

主軸方位は $N-60^{\circ}-E$ を示す。

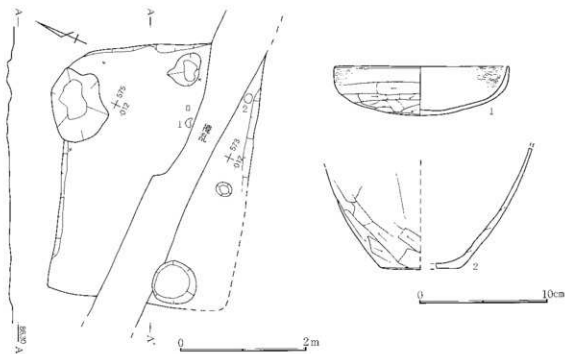
竈は、東壁沿い床面に火床部と思われる被熱が残る。やや南に偏った位置である。

出土遺物には、土師器環・甕など少量がある。土師器環(1)は扁平丸底の形態で、口縁部横位撫で、体部下

半は弱い篋削り、底部不定方向の篋削り。橙色を呈し、細土。土師器甕底部(2)。下方向への斜または縦位の篋削り。橙色を呈し、細土。 前期

128号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器 埴	(13.8)	—	(3.8)		2	土師器 甕	—	6.3	(9.5)	



第104図 128号住居跡・出土遺物

135号住居跡 (第105～107図、PL.10・24)

位置は、座標値 $X = 573 \sim 578$ ・ $Y = -924 \sim -931$ の範囲にある。

重複は、時期不明の137号住居跡と重なるが、これより新しい所産である。また、住居内西側と東側を後世の1号溝・10号溝が南北走る。

平面形状は、東西に長軸をもつ方形を呈する。

規模は、長軸5.5m・短軸4.4mを測り、壁高は56cmと深い掘形である。床面積は21.0㎡を有する。

主軸方位は、 $N-72^{\circ}-W$ を示す。

埋土は、大別2層からなるが土中には多量の loam 塊が混入する。また、堆積状況は水平堆積に近く、人為的な埋土行為も考えられる。

竈は東壁にあり、やや南に偏って付設される。南側は東西に走る攪乱溝によって消失する。壁線を大きく1mほども掘り込む大型な竈であるが、袖部の遺存は確認されていない。

壁下の溝は北・西・南壁下の一部に見られる。幅は不規則で5～20cm、深さは10cm前後である。貯蔵穴・柱穴などは検出されない。

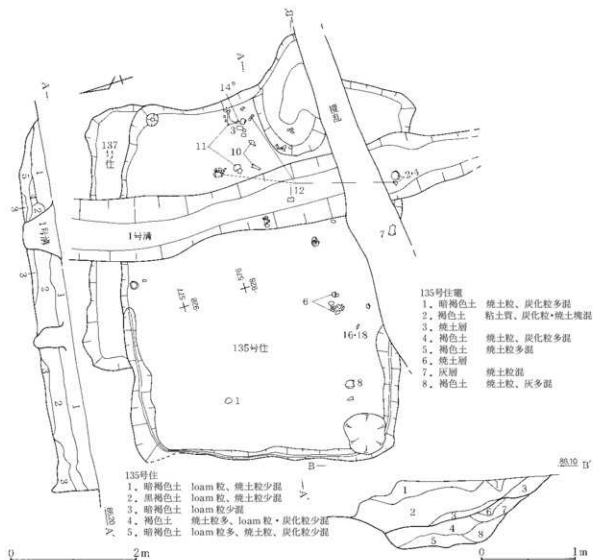
出土遺物は土師器埴・須恵器埴・土師器甕のほか、鉄器として刀子・角釘・鉄片がある。底部に墨書文字の須恵器埴小片がある。遺物は散在的で、なお埋土中からの出土が大半である。土師器埴・甕、須恵器埴

V、古代・古墳時代の遺構と遺物

などの他数粒の鉄塊がある。土師器環(1~4)はやや深めの体部で平底の形態をもつ。(1)は腰部にやや丸みをもち、口縁部横位無で、体部指頭痕成・調整は丁寧。(2・3)は体部の指頭痕成調整が粗く、顕著な縮輪状の轍面を残す。(2)は底部に逆「乙」墨書文字。底部調整は周辺不定方向・中心は一方方向の寛削り。橙色を呈し細土で(1)は密。(4)は緩く屈曲する横位無で口縁。腰部は幅広い寛削りで面取り状になる。底部不定方向の寛削り。内面体部に粗間隔の放射状暗文。鈍褐色で細土。須恵器蓋・環(5~9)。(6・7)は底部右回転寛削り。灰色を呈し、粗砂粒極めて多く混入する。(8)は白灰色を呈し、酸化炭焼成気味の甘い焼き。右回転糸切り。粗砂粒多く混入。(9)は右回転糸切りの底部不明墨書文字あり。土師器壺(10~14)は器内薄い。胴部は緩やかに張る。口縁部は「コ」の字状口縁。肩部横位右から左方へ、胴部上位は斜位下から上方へ寛削り。橙~淡黄橙色。細砂粒痕。鉄器(15・16)は刀子、(17)は鉄片、(18)は角釘か。中期

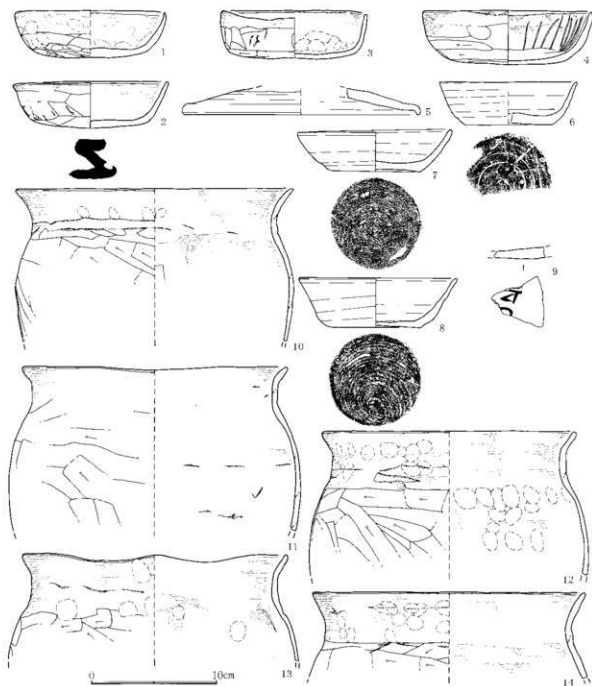
137号住居跡 (第105図、PL.10)

位置は、135号住居跡にほぼ重なり、かろうじて北壁線が検出された。135号住居跡より旧く、掘形も浅いためその存在を知るにすぎない。北壁線から東西軸長は4.1m、掘形は極浅く、5cm前後である。鉄塊72g



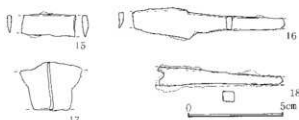
135号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器 坏	(11.6)	—	3.7		8	須恵器 坏	(12.5)	7.2	3.9	
2	土師器 坏	12.4	—	3.7	底面準直線「乙」	10	土師器 壺	(22.0)	—	(12.0)	
3	土師器 坏	12.4	—	3.7		11	土師器 壺	(20.1)	—	(12.4)	
4	土師器 坏	12.2	—	4.2	内面放射状暗紋	12	土師器 壺	(20.0)	—	(11.3)	
5	須恵器 蓋	19.0	—	(2.0)		13	土師器 壺	(21.0)	—	(8.4)	
6	須恵器 坏	(10.8)	(7.0)	2.4		14	土師器 壺	(21.8)	—	(7.2)	
7	須恵器 坏	12.2	7.2	3.3							



第106図 135号住居跡出土遺物(1)

V、古代・古墳時代の遺構と遺物



第107図 135号住居跡出土遺物(2)

136号住居跡 (第108図、PL.10・24)

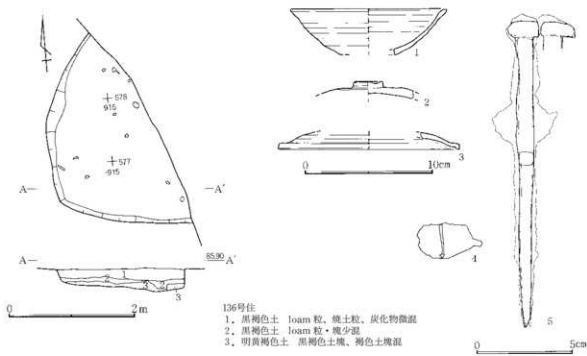
位置は、座標値 $X=575\sim 579$ ・ $Y=-913\sim -915$ の範囲にある。東側の大半は調査区域外に入り西壁から南壁線にかけての検出で全容は不明である。

平面形状は方形を呈すると考えられるが、西壁線はやや弧状に膨らむ。検出部分は西壁線長2.7m、南壁線長2.2mの僅かな範囲である。壁高は約15cmで、埋土は大別3層である。床面の構築土はやや不安定で、掘形埋土との識別に明瞭さを欠く。

出土遺物は少なく、須恵器坏・蓋など小片がある。須恵器坏(1)は薄手。轆轤右回転。灰色を呈し、砂粒多く混入。蓋(2)は扁平な鈕状撮み。白灰色で焼成やや甘い。細土。蓋(3)は折れの短い端部。灰色を呈し、砂粒の混入多い。鉄器(4)は薄い鉄片、(5)は瓦釘か。鉄塊186g 後期

136号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	須恵器 坏	(12.2)	(4.2)	(3.6)		3	須恵器 蓋	—	(14.2)	(1.4)	
2	須恵器 蓋	(2.4)	—	(1.4)	鈕状撮み	5	瓦釘	長 16.0	径 0.8		瓦釘か



136号住
1. 黒褐色土 loam 粒、焼土粒、炭化物微混
2. 黒褐色土 loam 粒・焼少混
3. 明黄褐色土 黒褐色土塊、褐色土塊混

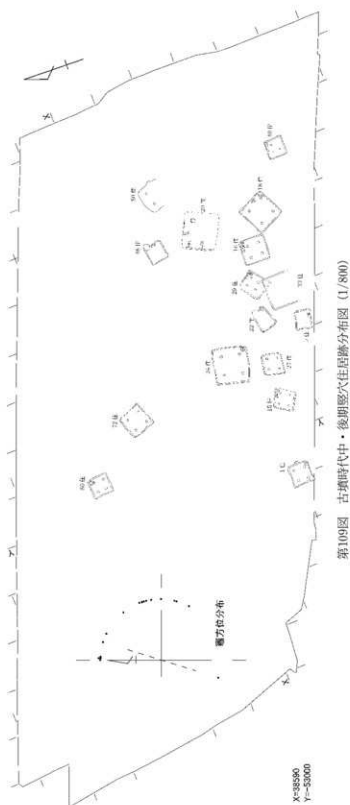
第108図 136号住居跡・出土遺物

2 古墳時代中・後期の竪穴住居跡とその遺物

古墳時代中・後期に比定した竪穴住居跡は17軒（内1軒は「塚下遺跡(1)」）からなる。分布状況は台地先端部の南寄りに集中する傾向にあり、当該期において直接の重複関係にある遺構は1例のみである。前述したように本書では、古墳時代の中で前期との区別は竈の存在が大きな比重を占める。これには、出土土器の編年的傾向とともに、竈跡と竈という住居内施設の違いが食生活をはじめとし住居構造など生活諸様式の変化に大きく関わったと見做し、時期区分の重要な目安としたためである。

中期と後期の区分については出土土器の形態的様相から18号住居跡に代表される中期に比定されるものと、1号・16号・40号・80号住居跡など明らかに後期に属する一群が認められる。さらに、土器様相を勘案すれば両者の中間的位置にある22号・33号住居跡などの存在によって、集落そのものの移行は中期から後期へとさほどの間断なく進化したものと考えられる。したがって、土器変化の印象から受ける段階的な変遷感覚を和らげたい意図から中・後期をまとめて一項とした(第109図)。

当該期住居跡群の外観的様相として1、2の特徴がある。一つには、竈は東壁線か北壁線に付設され竈軸を主軸とする方位によって3群(A・B・C)に分かつ。(ただし、5号住居跡のみ例外的に南壁に竈が付設されている)。A群は、20号・24号・27号住居跡で主軸方位はN-118°~103°-E。B群は、1号・18号・22号・29号・46号・50号・72号住居跡で主軸方位はN-90°~52°-E。C群は、15



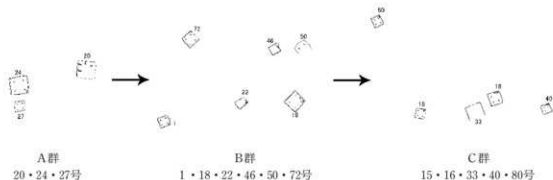
V、古代・古墳時代の遺構と遺物

号・16号・33号・40号・80号住居跡で主軸方位がN-27°0'-Eの範囲になる。なお、平面形状は正方形が大半で1軒のみ縦長型である。二つには床面積についておおよそ大・中・小の規模に分かつ。大規模住居跡は、18号・20号・24号・33号住居跡で41.2~57.6㎡、中規模は1号・16号・29号・50号・72号の各住居跡で21~31.0㎡、小規模は5号・15号・22号・27号・40号・46号・80号住居跡で14.1~16.8㎡になる。

これらの分類諸相にいかなる意味付けができるか難しい問題ではある。ここでは、その可能性の一つとして、大・中・小の住居規模が階層の分化を示しており、異なる住居規模（階層）の組み合わせで単位集団を構成する。そして、その単位集団としての認識は主軸方位の共通性に求める。ただし、単位的竪穴住居跡群は遺構の重複現象に見るようにその全部が同時存在ではない。主軸方位を近似させる各単位は有機的な関連（一系的集団）をもちつつ、なおそれらをして緩やかに継続的な変化（家屋数の増減・建て替え等）をなして集落変遷を示していると考えたい。ちなみに、単位住居跡群よる基本的な変遷は、出土土器の様相や重複関係などからA群→B群→C群と推移したと考えられる（第110図）。

出土遺物には、石製品では18号住居跡より2個同形の蛇紋岩製紡錘輪、20号住居跡には蛇紋岩製管玉・勾玉（面取り残り未製品か）、29号住居跡に変玄武岩製の有孔円盤などがある。土器類は、坏・埴・鉢・高坏・壺・甕など当該期の住居跡としては比較的通例な器種揃えになるが、50号住居跡より出土する大小2種類各一对のKop型土師器がやや特殊物である。

土器類を中心とした遺物の出土状況は、一般的な住居廃棄時の放置（竈・貯蔵穴内）状態や埋没過程に伴う小破片などの散在的投棄等を示すものが大半であるが、出土状況と器種に関しては特異な事例として18号・50号住居跡がある。両者は単位集団B群に属しており18号は大規模住居跡に、50号は中規模住居跡とともに単位集団内の中心的存在といえる。18号住居跡からは坏・壺・甕類とともに多量の高坏が出土しているが、北東面壁際で竈の両側縁と貯蔵穴内及びその周辺に著しい集中を見せ、いずれも完成度の高い遺物が多い。それらは、一時に、一括して置くがごとくに廃棄された状況が窺われ、特に略完形高坏は26個体を数える。また、50号住居跡からは先のKop型をはじめ高坏・甕類とともに20個以上の中・小型壺が出土する。出土状況は、北壁に沿った状態で分布しなお破片化した状態のものが多い。この点で両者はやや異なった様相を呈するが、遺物分布の濃密さと短期間一気的な投棄行為とともに、高坏と壺というやや非日常的な土器が主体であるとする状況の背景に何らかの共通する行為が連想されるのである。あまりに通俗的な発想ながら「祭祀」というような語句が思い浮かぶが、それは、あくまで「祭りの後」的な情景である。従って、18号・50号住居跡は祭祀場として直接の機能を全く有さない単なる捨て場である。



第110図 古墳時代中・後期集落の変遷

1号住居跡 (第111・112図、PL.25・39)

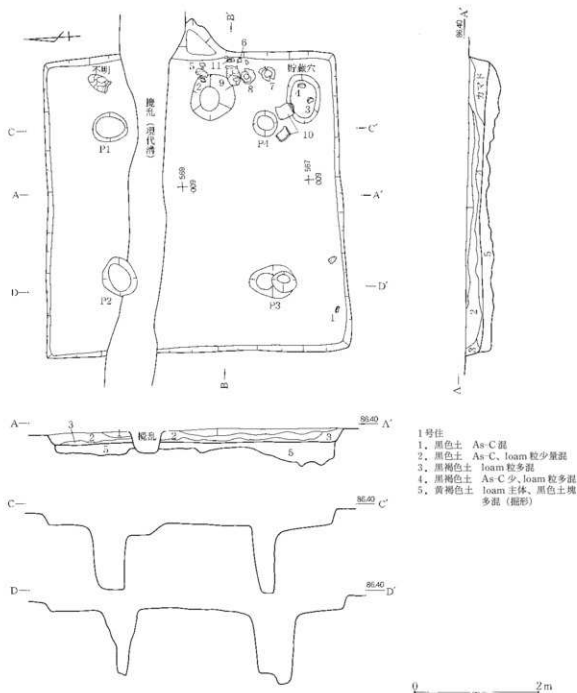
位置は、座標値X566~571・Y-006~-011の範囲にある。

重複は、住居内のやや北側を東西方向に現代の溝が走行する。

平面形状は、長短軸長差が小さく整った方形を呈する。

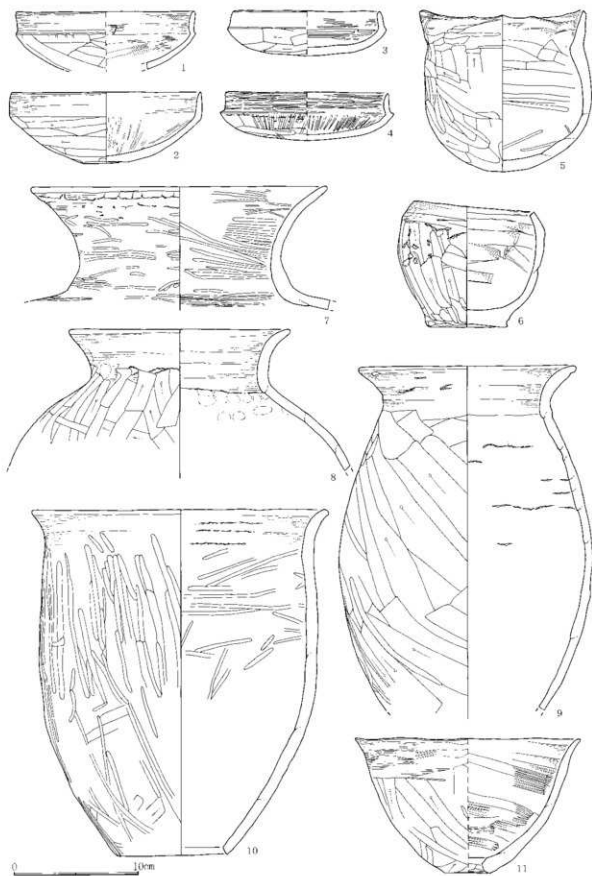
規模は、長軸4.7m・短軸4.3mを測り、壁高は26cmである。床面積は21.0㎡を有する。

主軸方位は、ほぼN-90°-Eを示す。



第111図 1号住居跡

V. 古代・古墳時代の遺構と遺物



第112図 1号住居跡出土遺物

埋土は、大別5層でC軽石を含み10mm粒を混ざる黒色または黒褐色土を主体とする

竈は、東壁の中央に付設し袖部の認識が遅れたためか、芯材に埋め込まれていたと考えられる右袖部の竈と左袖部の川原石が検出されている。左右の石と土師器甕芯材の間隔は約30cmである。煙道部の掘り込みは壁線の上縁を小さく挟ったほどである。

貯蔵穴は南東隅、電右手にあり、径78×54cm、深さ64cmの楕円形状である。

柱穴は、4穴が検出される。柱間寸法は、P1・P2が2.4m、P2・P3は2.6m、P3・P4は2.5m、P1・P4は2.4mである。深さはいずれも1m前後の深い掘形をもつ。

床下掘形は、中央部を3×3mほどの台状に掘り残し、壁沿いに若干の凹帯を巡らす。

出土遺物は電周辺および貯蔵穴内に多い。土師器環・鉢・長胴甕・球胴甕・大小の甕などがある。環(1～4)は所謂須恵器蓋環の模倣形態である。やや深めの体部で、口縁部横位撫で、底部不定方向の寛削り。(1)は短い口縁部が外反気味に立つ。外面は黒褐色の塗布剤か、淡橙色で精土。(2)は小さな平底へ窄まる様な深い体部。口縁部は直に立つ。内面に寛磨きの痕跡。赤褐色を呈し硬い焼き。細砂粒・凝灰岩微細粒が多く混入。(3・4)は浅く扁平でともに寛磨きを施す。吸炭気味だが白～淡黄色を呈す。細土。(3)は短い口縁部が内傾。内周で横位寛磨き。(4)の口縁部は外反気味に直立。内面と外面に放射状・外面口縁部は横位寛磨き。深鉢(5・6)。胴部外面の調整痕は、下から上方への撫で上げ。(5)は丸底球胴で屈曲が小さく口縁部が立つ。器内厚く、持ち重い。赤褐色で硬めの焼成。比較的細土。(6)は無頸で口縁は内傾し小さく窄まるが、口縁の破損を調整・修復した可能性がある。底部はやや凸状な平底。寸胴部は寛削り工具による強く撫で上げ。淡黄色を呈し、細土。壺(7)は頸部内傾気味で口縁部は強く外反して開く。球胴形で最大径は30cm以上の大型になろう。口頸部内外面に横位寛磨きを施す。灰白～淡黄色を呈し、比較的細土。甕は球胴と、長胴形態がある。(8)はやや頸部の窄まりが強いものの球胴の甕になろう。胴部上半は下から上方へ強めの寛撫で。淡橙色を呈し、砂粒多く混入。(9)は胴部中位に最大径をもつ卵形長胴の甕。器内厚く重量大。胴部上半は下から上方、下半は上から下方へ斜位の寛削り。赤褐色を呈し、粗砂粒多く混入。甕は長胴大型(10)と小型鉢形(11)がある。(10)は括れない口縁部が小さく外反する。底部は大径単孔。口縁部横位撫で。胴部弱い縦撫で後縦位寛磨き。内面横位寛磨き。淡黄橙色を呈し、細土。(11)は底部単孔。口縁部は僅かに外反して開く。口縁部強め横位寛撫で、胴部弱い縦位寛撫で、内面強い横位の寛撫で。単黄橙色を呈し、細土。

1号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器 環	14.2	—	4.6	外面黒褐色塗布か	7	土師器 壺	23.2	—	9.7	
2	土師器 鉢	15.1	3.9	5.6		8	土師器 甕	17.4	—	(11.1)	
3	土師器 鉢	11.6	—	3.5	内黒	9	土師器 甕	17.0	—	—	
4	土師器 環	12.8	—	3.7		10	土師器 甕	23.4	8.8	27.2	単孔
5	土師器 鉢	13.0	—	12.6		11	土師器 甕	17.6	3.8	19.6	単孔
6	土師器 鉢	10.5	6.4	10.0	口縁部後縦位修復						

5号住居跡 (第113・114図、PL.25・39)

位置は、座標値X=552～557・Y=-975～-980の範囲にあり、住居跡中央部を覆乱溝が東西走する。

平面形状は、東西に長軸をもつ方形を呈する。

規模は、長軸4.2m・短軸3.6mを測り、壁高は約10cmの浅い掘形である。床面積は14.1㎡を有する。

主軸方位は、N-17°-Eを示す。

竈は南壁にあり、大きく東に偏って付設される。当遺跡の竪穴住居跡では南壁の竈は唯一の例である。構築については、壁線外への掘り込みはなく、袖部だけではなく竈本体も粘土材を用いた独立的構築を行って

V、古代・古墳時代の遺構と遺物

いる。また、竈の軸線は南壁線に対して“ずれ”を生じており、このことも構築に関わる現象と考えられる。竈の長さ（奥行き）は約70cm、焚き口幅30cm余りである。

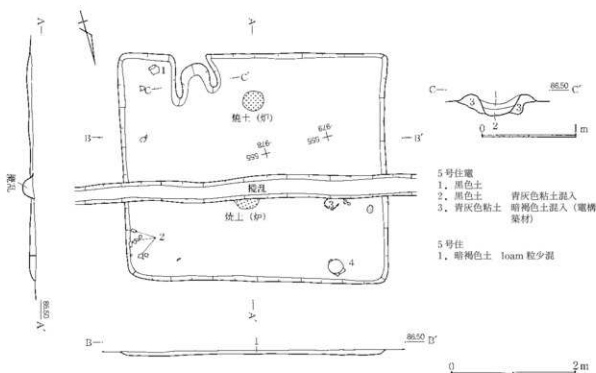
火所については床面に2カ所の焼土面が検出されている。一つは竈右手前と、他は中央部にある。床面の被熱痕程度と考えられるが、使用状況については所見が得られず竈との併用関係など明らかではない。

貯蔵穴・柱穴などの諸施設は検出されていない。

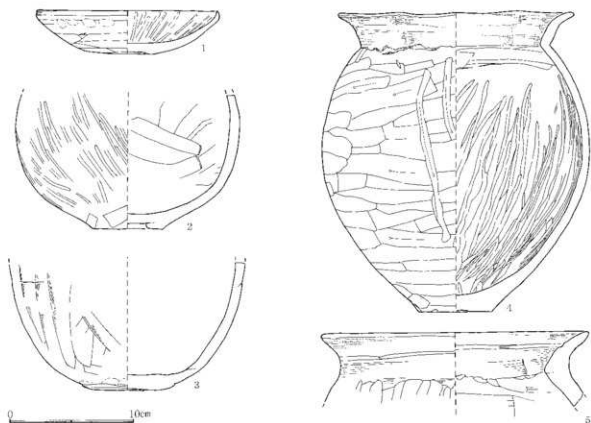
遺物は散在的な出土状況で、坏・壺・甕などであるが、完形度は低い。坏(1)は浅身で口縁部が短く直立する形態になろうか。口縁端部欠損。極小径で凹気味な底部。外面は不定方向の弱い寛削り。内面放射状磨き。橙色、細土で風化凝灰岩粒混。小型壺型(2)になろうか。上半部は欠損。球胴形で底部は凹む。外面斜位の磨き。鈍黄橙色、細土。甕(3)は小型で下膨れ風な胴下半部。底部は凸気味。外面縦位の弱い寛撫で調整。器面は焼し風な褐灰色。内面は鈍橙色、細砂粒混。(4)は胴部中位に最大径をもつ卵形。底部は小さく凹む。外面横位の強い寛削り。内面縦位の強い磨きを施す。赤褐色を呈し、焼成は硬い。細土。(5)は器内の厚い狭口縁部。口径の比較的小さい球胴形になろうか。肩部縦位寛削り。口縁内面凹線状の段を作る。淡黄色、細砂粒混。

5号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器 坏	(14.4)	(4.0)	(2.3)		4	土師器 甕	23.6	(18.7)	5.7	
2	土師器 壺	(10.6)	—	5.6		5	土師器 甕	(21.0)	—	(5.9)	
3	土師器 甕	—	6.0	9.9							



第113図 5号住居跡



第114図 5号住居跡出土遺物

15号住居跡 (第115～117図、PL.40)

位置は、座標値 $X=563\sim 568$ ・ $Y=-989\sim -995$ の範囲にある。

重複は、古墳時代前期の25号・26号住居跡及び平安時代3号住居跡と重なる。

平面形状は、北西～南東に長軸をもつ方形を呈する。

規模は、長軸4.5m・短軸4.3m、壁高36cmの比較的深い掘形をもつ。床面積は15.9㎡を有する。

主軸方位は、 $N-27^{\circ}-E$ を示す。

埋土は、大別2層で比較的単味、自然埋没と考えられる。

竈は、北壁にあり、やや東に偏って付設される。袖部は約90cmの長さをもつが、左袖は遺存状況が悪く定かではない。煙道部にあたる壁線への掘り込みは小さく僅かである。袖部の構築には灰白色の粘土材を用いてある。

貯蔵穴は、東隅の竈右手にあり、径60cmの略円形を呈する。

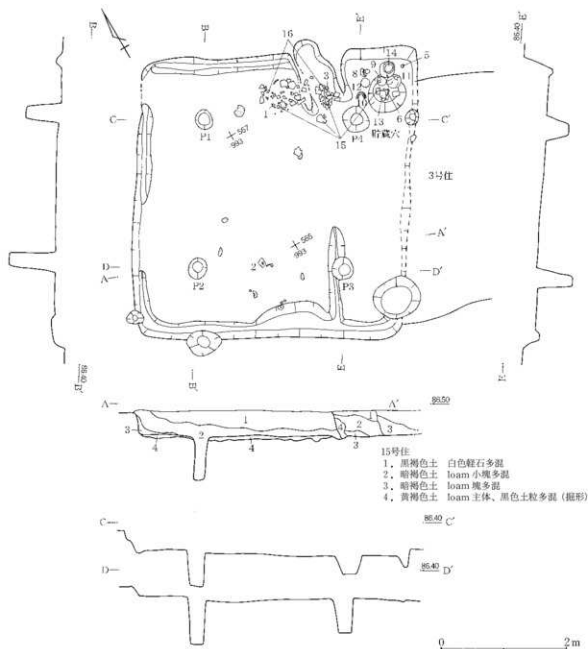
柱穴は、4穴が検出され、径30～40cm、深さ40～70cmである。柱間寸法はほぼ等間で2.4mである。南壁東偏よりP3を通して間仕切り状の浅溝が走る。

その他、壁下溝は北・西・南壁のそれぞれで部分的な検出がある。幅15cm前後、深さ5～8cmを測る。

遺物は竈内と貯蔵穴に集中する。坏・鉢・高坏・壺・甕などがある。坏(1)は、体部浅く、口縁部が短く立つ。体部との変換部は凹線状の段をなす。底部へ窄まって丸底か。体部上半弱い寛撫で、下半縦位寛削り。内面放射状寛磨き痕。橙色、細砂粒多混。(2)は内斜型口縁をもつ。体部は丸みをもって深く底部は小径な平底。外面横位寛削り、上半に寛磨き。内面は被熱か肌荒れ。橙色、細土。高坏(3～6)は坏部及び脚部。(3)

V、古代・古墳時代の遺構と遺物

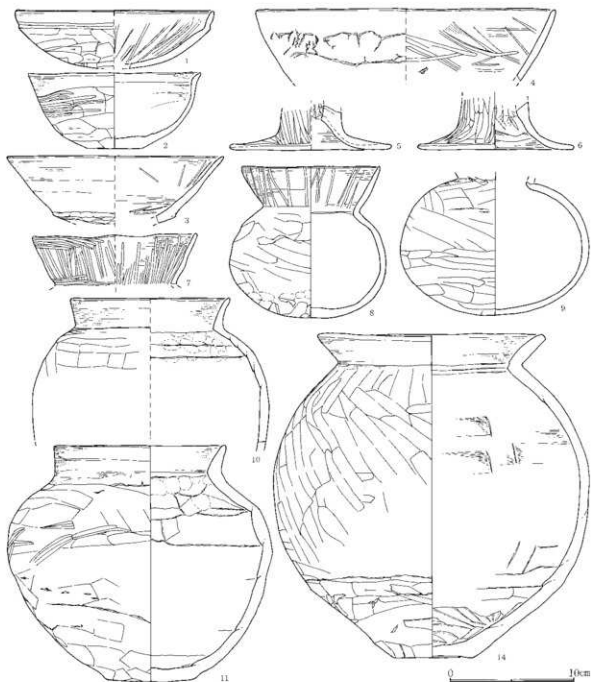
は腰部に段をなし体部は直線的に開く。腰部に寛磨き、内面に粗く寛磨き。赤色を呈し、硬い焼き。細土。
 (4)は大型の鉢型の坏部か。外面の調整は粗い。内面強い寛磨き状痕。煙し気味で黒褐色。砂質度高い。(5・6)は太めの脚部で裾は水平に近く開く。外面強い縦線寛磨き。(5)は浅黄橙色、(6)は鈍橙色で硬い焼き。細土。壺は大頸径(7・8)と小頸径(9)がある。体部は扁平なほどに張り強い球胴で横位の弱い寛撫で調整。(7・8)は口縁部内外面に縦線の寛磨き。浅黄橙色で(8)は二次被熱。(7)は細砂粒多い。甕(10~13)は小型甕・(14~16)は大型。(10・11)は口縁部短く直立気味に立つ。(12・14)は強く、「く」の字状に折れる。甕類の外面調整はほぼ篋状工具による弱い撫で調整。鈍褐色を呈し細砂粒多く混入。(15)は肩部に斜位刷毛目状撫で。下膨れの胴部で底部は凸状。赤橙色を呈し、比較的硬い焼き。細土。



第115図 15号住居跡

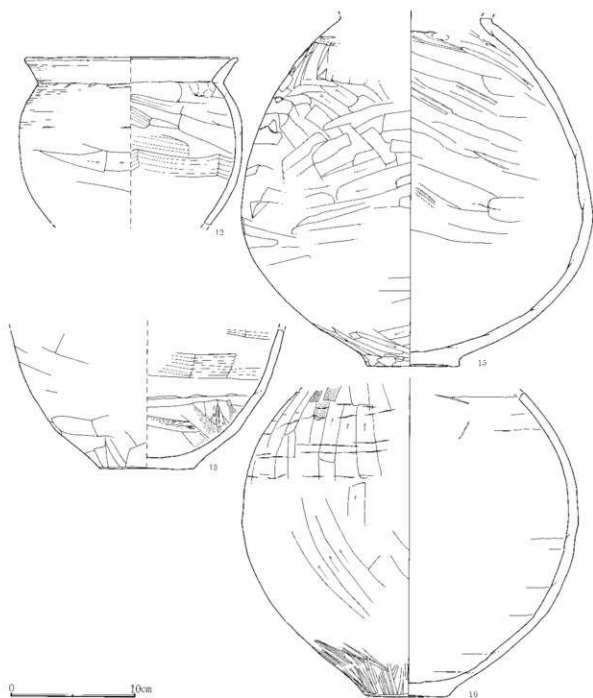
15号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器 杯	(15.6)	—	(5.6)		9	土師器 壺	—	—	(10.7)	
2	土師器 杯	13.6	4.2	5.9		10	土師器 壺	(12.6)	—	(11.3)	
3	土師器 高杯	17.0	—	(5.3)		11	土師器 壺	13.6	6.9	18.3	
4	土師器 鉢	(23.6)	—	(5.4)	横し焼成気味	12	土師器 壺	(16.7)	—	(13.2)	
5	土師器 高杯	—	(12.8)	(3.5)		13	土師器 壺	—	(7.4)	(11.4)	
6	土師器 高杯	—	12.3	(4.0)		14	土師器 壺	17.8	6.2	25.6	
7	土師器 壺	(13.0)	—	(3.9)		15	土師器 壺	—	7.4	(27.5)	
8	土師器 壺	10.8	—	11.9	二次焼熟	16	土師器 壺	—	6.0	(24.5)	



第116図 15号住居跡出土遺物(1)

V. 古代・古墳時代の遺構と遺物



第117図 15号住居跡出土遺物(2)

16号住居跡 (第118～120図、PL.25・41)

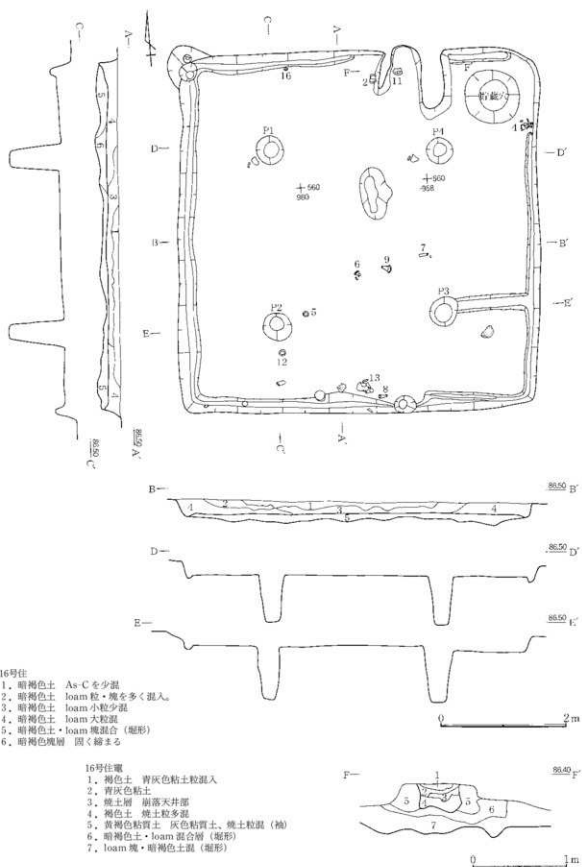
位置は、座標値 $X=556\sim 562$ ・ $Y=-956\sim -962$ の範囲にある。

重複は、北縁で古墳前期の21号住居跡とまた南縁で1号掘立柱建物跡といずれも僅かに重なる。

平面形状は、長短軸長差のなく整った方形を呈する。

規模は、軸長5.7mで、壁高24cmを測る。床面積は27.4㎡を有する。

主軸方位は、 $N-2^{\circ}-E$ を示す。



第118図 16号住居跡

V、古代・古墳時代の遺構と遺物

埋土は、大別2層で下位層に loam 塊の混入が多く、人為または急激な埋没の可能性も考えられる。

竈は、北壁にあり、大きく東に偏って付設される。壁線への掘り込みはほとんどなく、青灰色粘土を混入する褐色土をもって袖部などを構築する。袖部長さは約80cmで焚き口幅30cmを測る。

貯蔵穴は南東隅、竈右手にある。径80cm・深さ60cmの円形を呈する。

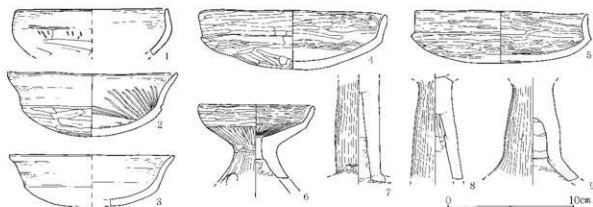
柱穴は、4穴が検出され、径40cm前後、深さ75～90cmである。各柱穴間は2.7mのほぼ等間であるがP3・P4間のみやや短く2.5mである。なおP3のみに東壁縁より間仕切り状の細溝が取り付く。

壁下溝は各壁に巡り、幅10cm前後、深さ5～6cmである。

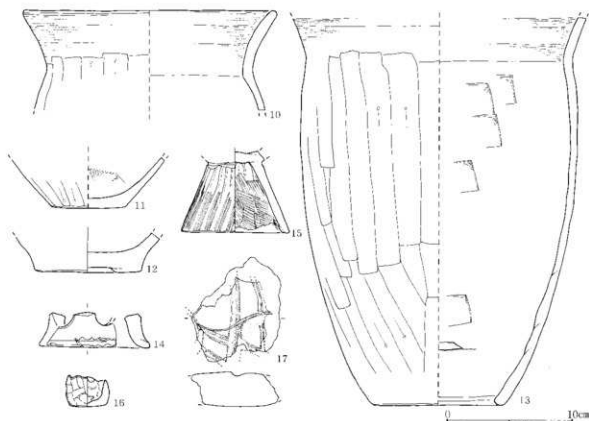
遺物は、比較的少数で散在的な出土状況である。環・甕・甕などの他、埋土中にはやや古式に属する器台・高坏脚部・台付き壺台部がある。環(1)は深目の体部で口縁部は短く直立する。(2・3)は須恵器環蓋の模倣形態である。口縁部は大きく外気味に開く。(2)は内面に放射状寛磨き。(4・5)は須恵器環身の模倣形態になるが、(5)の模倣程度が勝り内外面は黒褐色に発色させる。両者とも内外面は寛磨きを施す。(1～4)は橙色を呈し、(5)の地色は淡黄色である。胎土は比較的細土。小型器台(6)は赤色塗彩。坏部と脚部を通す孔と脚部に3孔を有する。内外面に寛磨きを施し、口縁部と外面腰部は横位・体部放射状・脚部は縦位。地色は淡黄色。砂粒多混。高坏脚部(7・8)は棒状脚から強く屈折して開く裾の形態であろう。丁寧な縦位の寛磨き。淡黄色で細土。(9)は中腹らみ様の脚。縦位の寛磨き。赤橙色で砂粒多混。壺(10・11)は、口縁部及び底部で長胴形態。(10)は下から上方へ、(11)は上から下方への寛削り。淡黄色で粗砂粒多混。壺の底部(12)。古墳前期の煮類に多い。器内厚く蛇の目高台様に真ん中が凹状。鈍淡黄色、砂粒多混。甕(13)は通例になく胎土・調整が粗い。底部大単孔。口縁部の屈曲少なく寸胴形態。上下二段の寛削り、上半は下から上方へ、下半は上から下方への寛削り。鈍黄橙色で粗砂粒多混。有孔の台部(14)は淡黄色、細土。素口縁甕の台部(15)は、鈍橙色、砂粒多混。手握土器(16)は淡黄色、細土。(17)は不明土板片鋤型か。交差する丸沈線で器表面は微細土で淡黄橙色。

16号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土器部 環	(12.0)	—	(3.6)		9	土器部 高坏	—	—	(7.7)	
2	土器部 環	13.4	丸底	5.0		10	土器部 壺	(20.0)	—	(7.8)	
3	土器部 環	(13.0)	—	(4.0)		11	土器部 壺	—	6.0	(4.0)	
4	土器部 環	14.8	14.2	4.7		12	土器部 壺	—	8.4	(3.1)	
5	土器部 環	13.6	14.2	4.1	黒褐色塗彩か	13	土器部 甕	—	(10.5)	(30.5)	単孔径 9.0
6	土器部 器台	3.9	—	—	赤色塗彩	14	土器部 不明	—	(3.8)	(2.7)	
7	土器部 高坏	—	—	(8.0)		15	土器部 台付壺	—	(8.6)	(6.4)	
8	土器部 高坏	—	—	—		16	平埴ね	3.0	2.8	3.0	



第119図 16号住居跡出土遺物(1)



第120図 16号住居跡出土遺物(2)

18号住居跡 (第121～129図、PL.26・41～47)

位置は、座標値 $X=550\sim 559$ ・ $Y=-947\sim -956$ の範囲にある。

重複は、古墳時代前期の28号住居跡と重なる。また、北西部を斜めに攪乱溝が走行する。

平面形状は、長短軸長差の小さい整った方形を呈する。

規模は、遺跡内当該期の竪穴では大型に属し、東西軸が7.1m・南北軸は7.0mで、壁高は40cmを測る。床面積は41.2m²を有する。

主軸方位は、 $N-69^{\circ}-E$ を示す。

埋土は大別3層からなり、loam粒を若干混入する比較的単味な土層で自然の流入による堆積状況である。

竈は、東壁にあり、やや南に偏って付設される。煙道部を含み壁線への掘り込みはなく、灰白色粘土を主材にしてU字状に突出する袖部を造る。袖部長さは残りの良い右袖で約1mである。

貯蔵穴は、竈右手の南東隅にあり、径 100×82 cm・深さ50cmの楕円形を呈する。

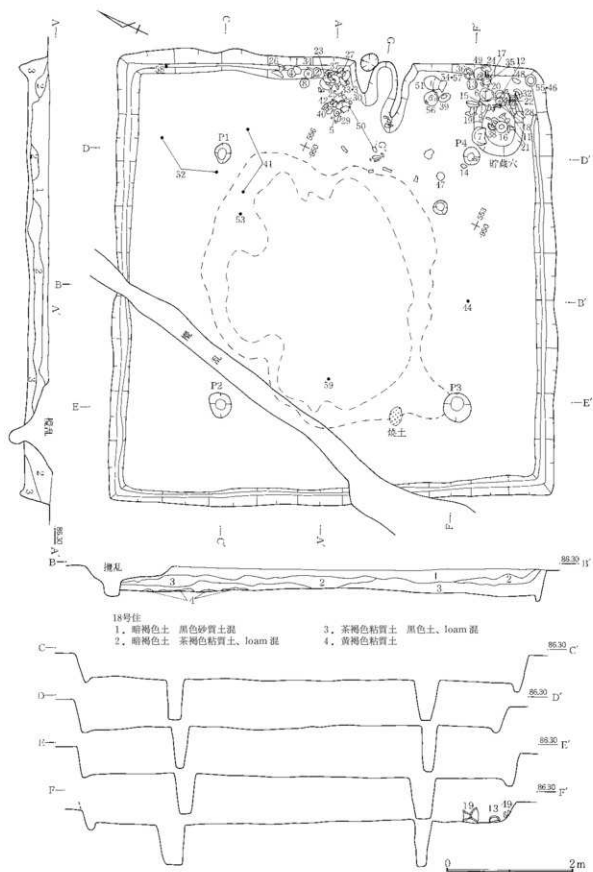
柱穴は4穴が検出され、径25～40cm前後、深さ60～70cmである。各柱間は、 $P1\cdot P2$ が4.0m、 $P2\cdot P3$ は3.7m、 $P3\cdot P4$ と $P1\cdot P4$ は3.9mを測る。

壁下溝は、四壁に巡り比較的明瞭に検出されている。幅6～15cm・深さ約10cmである。

床下の堀形は中央部に約4m範囲で高まりを残し、周囲を深さ20～30cmの凹みを巡らす。なお中央部の高まりは定型化したような屈形形状ではない。

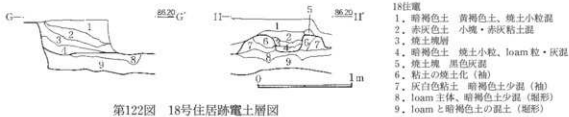
出土遺物は完成度の高い土器器類が多量である。竈の左側縁には坏・高坏を主に、右側縁からは甕・高坏が、さらには貯蔵穴の周縁および貯蔵穴内からは坏・高坏・壺の類が折り重なるような状態で出土している。

V. 古代・古墳時代の遺構と遺物

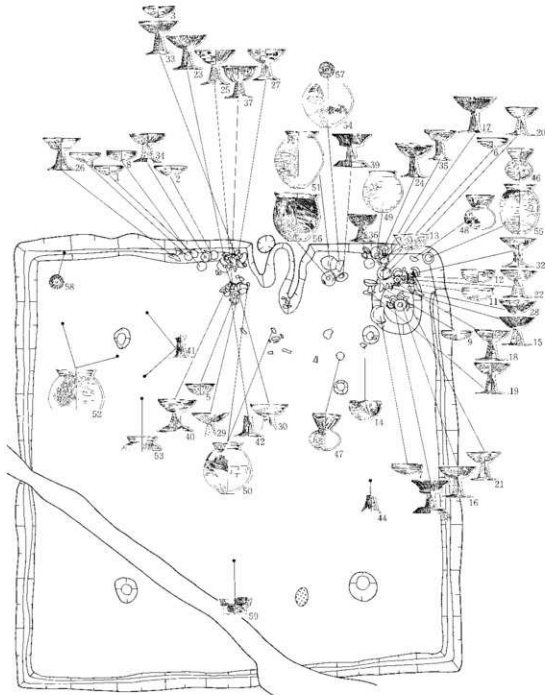


第121図 18号住居跡

2 古墳時代中・後期の竪穴住居跡とその遺物



第122図 18号住居跡電土層図



第123図 18号住居跡遺物分布図

V. 古代・古墳時代の遺構と遺物

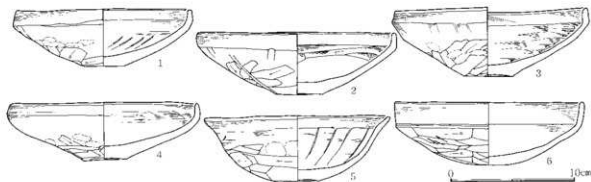
いずれの箇所でも著しい集中の度合いから、一時の遺棄または投棄であろう。坏(1~10)は形態から4種類(A~D)に分類される。A類(1~4)は短い口縁部が直立し、B類(5)は口縁部が外傾して開く。A・Bの体部は反時計回りに篋削りを行い、削りによる小径な平底を作る。内面は弱い横位の篋撫で、(5)は篋止め痕が放射状に残る。赤橙色を呈し、硬い焼成。細土砂粒少混。C類(6~8)はA類より長い口縁部が直立し、(7・8)は体部との変換部に低い稜をもつ。体部は反時計回りに篋削りを行い、底部は丸底を作る。内面は弱い横位の篋撫で。橙色を呈し細砂土。D類(9・10)は口縁部が内湾気味に開き、丸底。口縁・体部の変換部に低い稜を作るが、(10)は篋状具による沈線で画し明瞭。(9)は橙色で砂質が強い。(10)は器内薄く淡橙色で細密土。鉢(11~14)は形態から3種類(A~C)に分類される。A類(11・12)は内斜口縁をもつ深めの丸底である。体部は時計回りに篋削りを行い、内面は横位篋撫で。淡橙色を呈し、細土。B類(13)は丸底の深い体部から口縁部はゆったりと外反する。体・底部は反時計回りの強い篋撫で調整を施す。内面は横位の強い指頭撫で調整。淡橙色を呈し胎土粗く粗砂粒・小石多混。C類(14)は平底、半円形の深い体部で口縁部は内湾気味して窄まる。外面は横位篋削り、口縁部下位は横位篋磨き。内面は放射状篋磨き。鈍橙色を呈し、細土。高坏(15~40)は坏部および脚部の形態から7種類(A~F)に分類される。A・B類は脚部の形状が異なる。A類(15~22)は坏底部が水平。角折れて腰部を作り、体部は直線的に外傾して開く。脚部は僅かに裾広がり柱状形で裾部は強く水平の様に折れて開く。篋磨きは(15・17・18)が内外面とも、(19)は坏内面と脚に磨き、坏外面は指頭痕が顕著。(16・20・22)は坏内面に磨き、外面は横位の撫で、脚は篋削り。(21)は磨き無く、坏部は撫で、脚は削り。当類は総じて明赤橙色~橙色を呈し、細土。B類(23~27)の坏部と脚部上半の裾広がり柱状形はAと同形態であるが、裾部は強く湾曲して開く。(23・24)は坏内外面と脚部ともに篋磨きを施す。(25)は坏内面ののみ磨きで外面に横位撫でを、脚は削り。(26・27)は坏部撫で、脚は削りを行う。明赤橙色を呈し、比較的細土。(28~30)はA・B類の坏形態に属する。(28)は内外面に篋磨き、明赤橙色で茶褐色土粒を混入。やや軟質な焼き。(29)は内面に磨き、外面弱い削りと指頭痕。砂質感が強い。C類(31・32)は坏腰部に丸味のある括れて体部は直線的に開く。脚部は強く湾曲して開く。(31)は坏外面腰部に、(32)は脚に篋磨きを施す。橙色を呈し、細土。D類(33~35)は坏部上縁が括れて口縁部を作る。脚部は強く湾曲して開く。橙色~赤橙色を呈し、細土。(33)は坏・脚部に篋磨き。(34)は坏内面・脚に磨き。(35)は坏内面撫で、坏外面・脚は撫でと篋削りで坏部のつくりが粗い。E類(36・37)は深めの椀型の坏形態である。坏部および脚部とも篋磨きを施し、器内は薄い。(37)の口縁部は内斜口縁である。橙色で細白土粒が多く混入。F類(38~40)は二段脚部である。(38・39)は柱状部から裾部上段が水平に折れ、下段は「ハ」の字状に開く。坏部は大径な底部内側に体部部分を乗せて明瞭な段を作り、体部は大きく外反して開く。坏内外・脚ともに篋磨き。明赤橙色を呈し、細土。(40)は柱状部に3孔を穿つ。脚部上段は「ハ」の字状に開く。三角断面形の凸帯をなし、下段も大きく「ハ」の字状に開く。坏部は腰に若干の括れを作り、内湾気味に開く。坏・脚部とも撫で調整を施す。橙色を呈し、細土。高坏脚部(41~44)はいずれも篋磨きを施す。橙色~淡橙色を呈し、比較的細土。壺は、胴部が扁平球形をなし、丈高で大きく開く口縁部をもつ。底部は小さな平底を基本とするようである。壺(45~48)の口縁部の形状には上縁が小さく括れる(45~47)と素口縁の(48)がある。胴部下半は横位篋削り、上半または肩部と口縁部内外面は縦位放射状の篋磨きを施す。(48)は篋磨き無く、掻き目状の削り調整後に撫で。明赤橙~橙色で比較的細土。甕(49~54)は口縁部が外反気味にくの字状に開き、胴部は下膨れ風な短胴である。平の底部のほか蛇の目高台風な凹状のもの(51)がある。甕の多くは、胴部上半は掻き目状の、下半には篋削り調整を施すが痕跡に微弱なものが多い。(52)は胴部上半に縦位の、下半は横位の篋磨きを施す。(53)は内面に紐作り痕および指頭痕調整が明瞭に残る。(49・50・52・54)は鈍黄

2 古墳時代中・後期の堅穴住居跡とその遺物

橙色、(52)は橙色、(52)は赤橙色を呈す。砂粒多混。甕(55・56)は底部径の単孔である。肩部から胴部上と(56)には内面も掻き目状寛削りが残る。鈍黄褐色、細土。(55)は肩部に張りをもち形状は壘形態である。橙色、細土で細白色粒混。石製紡錘輪(57・58)は蛇紋岩。凸面は放射状の磨き様に面取り調整。壺(59~61)は埋土からの出土である。(59)は二段口縁で、上段の口縁に二本単位の棒状浮紋を貼る。上段は細目斜掻き目後撫で、下段は細目縦位掻き目後磨き。橙色(60)は単口縁で頸部に刻み凸帯。外面掻き目、内面磨き。橙色(61)は頸部に疑似凸帯。外面弱い掻き目。鈍黄褐色。

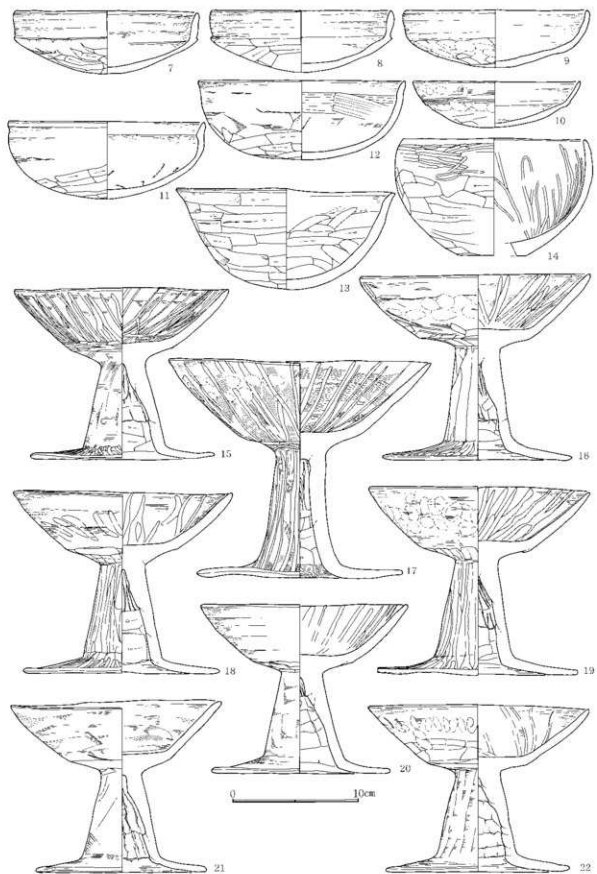
18号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師部 環	13.8	5.2	4.5	甕穴	32	土師部 高環	17.7	15.5	14.2	貯蔵穴
2	土師部 環	15.6	3.6	4.9	甕穴	33	土師部 高環	19.0	13.9	15.8	甕穴
3	土師部 環	15.2	3.9	5.4	甕穴	34	土師部 高環	17.5	13.3	13.8	甕穴
4	土師部 環	14.8	3.8	4.6	甕穴	35	土師部 高環	15.4	11.1	13.4	貯蔵穴
5	土師部 環	14.5	3.4	5.2	甕穴	36	土師部 高環	14.0	12.8	13.3	貯蔵穴
6	土師部 環	15.0	—	4.95	貯蔵穴	37	土師部 高環	16.3	(13.4)	15.4	甕穴
7	土師部 環	14.5	—	5.0	貯蔵穴	38	土師部 高環	16.8	16.8	13.6	貯蔵穴
8	土師部 環	14.5	—	4.8	甕穴	39	土師部 高環	19.1	17.1	15.8	甕穴
9	土師部 環	14.6	—	4.5	貯蔵穴	40	土師部 高環	(18.6)	(17.4)	15.7	甕穴
10	土師部 環	13.1	—	3.6	—	41	土師部 高環	—	—	(10.6)	—
11	土師部 鉢	15.4	—	6.1	貯蔵穴	42	土師部 高環	—	14.3	(9.9)	甕穴
12	土師部 鉢	16.3	—	6.2	貯蔵穴	43	土師部 高環	—	—	(10.15)	—
13	土師部 鉢	17.3	—	8.0	貯蔵穴	44	土師部 高環	—	—	(8.3)	—
14	土師部 鉢	14.4	5.3	9.2	貯蔵穴	45	土師部 壺	(10.2)	—	(5.0)	—
15	土師部 高環	17.0	14.6	13.5	貯蔵穴	46	土師部 壺	12.6	—	(5.9)	—
16	土師部 高環	18.2	14.9	14.6	貯蔵穴	47	土師部 壺	13.0	5.1	17.8	貯蔵穴
17	土師部 高環	20.6	16.2	17.3	貯蔵穴	48	土師部 壺	13.6	3.3	16.4	貯蔵穴
18	土師部 高環	17.8	15.6	14.3	貯蔵穴	49	土師部 壺	(15.6)	4.6	19.8	貯蔵穴
19	土師部 高環	17.5	15.8	15.1	貯蔵穴	50	土師部 壺	(14.6)	6.6	24.5	甕穴
20	土師部 高環	16.3	14.1	13.3	貯蔵穴	51	土師部 壺	(16.2)	6.3	27.5	甕穴
21	土師部 高環	16.50	13.4	13.5	貯蔵穴	52	土師部 壺	(19.6)	—	(18.6)	—
22	土師部 高環	17.5	14.5	13.2	貯蔵穴	53	土師部 壺	(17.0)	—	(6.6)	—
23	土師部 高環	19.6	14.3	16.3	甕穴	54	土師部 壺	—	6.8	(21.1)	甕穴
24	土師部 高環	16.1	12.8	16.4	貯蔵穴	55	土師部 甕	15.6	6.0	23.9	貯蔵穴
25	土師部 高環	19.8	13.8	16.8	甕穴	56	土師部 甕	21.8	8.4	23.3	貯蔵穴
26	土師部 高環	17.0	15.2	15.4	甕穴	57	石製紡錘輪	上径5.1 下径2.3	高 1.0	孔径0.9 重34.41g	—
27	土師部 高環	18.1	13.0	14.8	甕穴	58	石製紡錘輪	上径4.6 下径2.3	高 1.0	孔径0.7~0.8 重13.19g	—
28	土師部 高環	18.0	—	(6.7)	貯蔵穴	59	土師部 壺	—	—	(8.2)	—
29	土師部 高環	(17.8)	—	(11.0)	甕穴	60	土師部 壺	—	—	(5.3)	—
30	土師部 高環	(18.2)	—	(11.9)	甕穴	61	土師部 壺	—	—	(7.0)	—
31	土師部 高環	20.1	15.4	15.7	—						

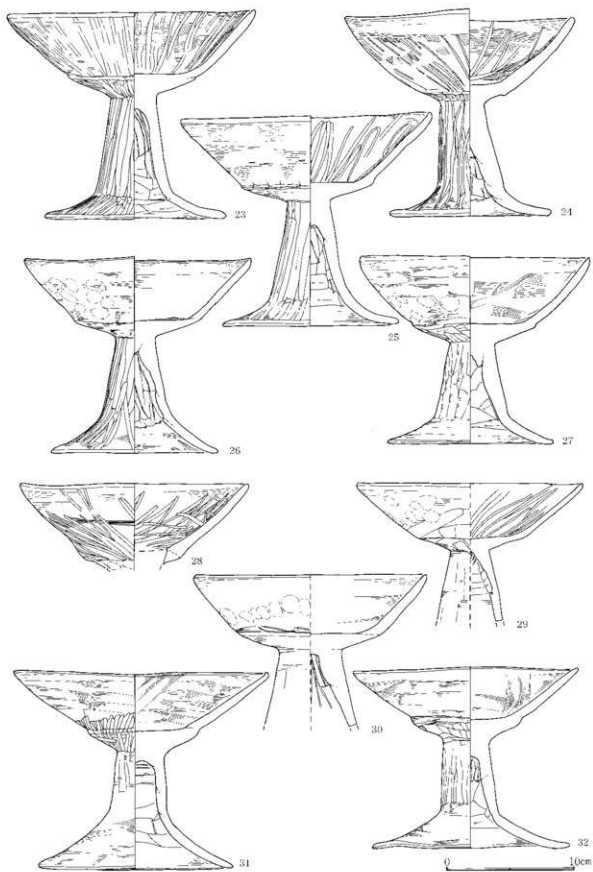


第124図 18号住居跡出土遺物(1)

V. 古代・古墳時代の遺構と遺物



第125図 18号住居跡出土遺物(2)

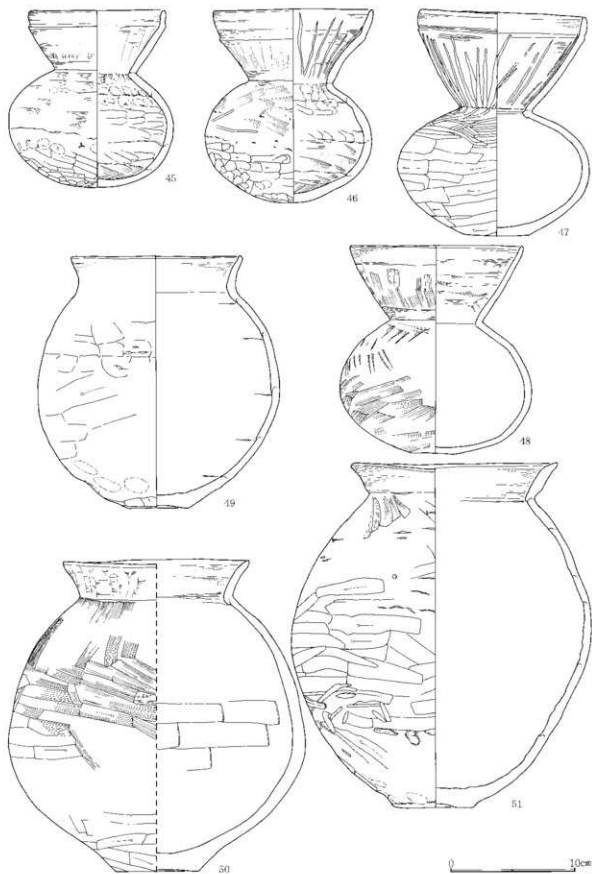


第126図 18号住居跡出土遺物(3)

V. 古代・古墳時代の遺構と遺物

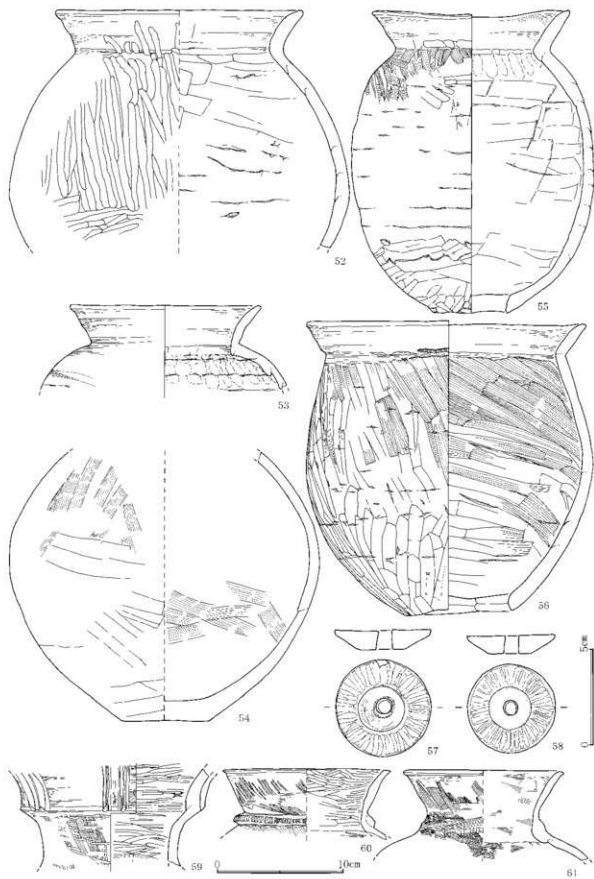


第127図 18号住居跡出土遺物(4)



第128図 18号住居跡出土遺物(5)

V. 古代・古墳時代の遺構と遺物



第129図 18号住居跡出土遺物(6)

20号住居跡 (第130～132図、PL.48)

位置は、座標値 $X = 565 \sim 573$ ・ $Y = -964 \sim -955$ の範囲にある。

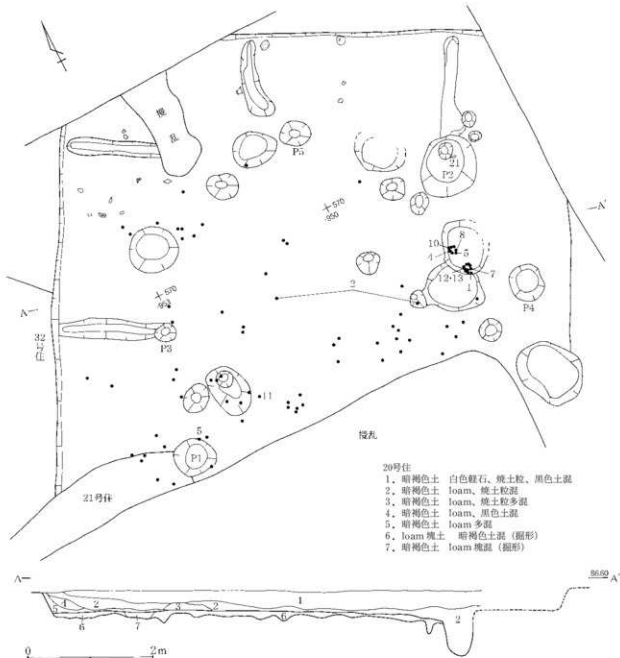
重複は、南縁で古墳時代前期の21号住居跡と、北縁では縄文時代129号竪穴と重なる。

平面形状は、東・南・北側で攪乱が広くおよび全体形状を欠くが、かなり大型の方形になるう。

規模は、全容が不明なためか定かではないが軸長は8m前後になるう。壁高は30cmを測る。床面積は54.3m²を超えよう。

主軸方位は、電付設想定位置から $N-62^{\circ}-W$ を示す。

竈・貯蔵穴は検出されていないが、住居施設や出土遺物の帰属時期などからすでに竈出現期に入っており、



第130図 20号住居跡

V、古代・古墳時代の遺構と遺物

擾乱によって消失したものと考えられるが南東壁に付設が想定される。

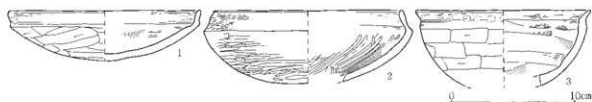
柱穴は4穴の主柱穴からなると考えられるが、P1・P2の2穴が検出されている。柱穴掘形平面形状は定かではないが、深さはP1が46cm、P2が70cmを測る。なお主柱穴間には柱筋より外側に、間柱または補助的な柱穴と思われる小穴P3・P4・P5がある。

その他の施設には、主柱穴P2と北西部の主柱穴想定箇所および間柱P3・P4から壁縁に直交する区画溝（間仕切り溝）がある。

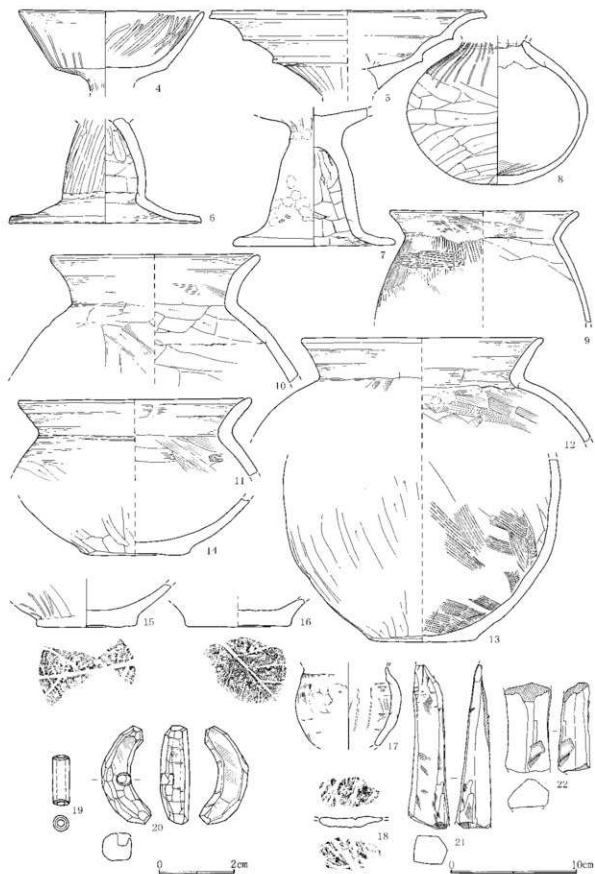
出土遺物は散在的狀況で、破片化したものが多い。土師器環・鉢・高環・壺・甕などのほか、蛇紋岩製の勾玉・管玉がある。また、埋土中より縄文中期の土器片や石器の出土がある。環(1)は短い口縁が直立し、扁平な体部から不安定な丸底になる。外面寛削り。明赤褐色で細砂粒混。(2)はやや大振りな横做環形状で、受け部は小さく、口縁部は内傾する。外面は横位の、内面は放射状の寛磨きを施す。淡黄～白灰色の胎土に黒色(黒褐色)処理。精土。内斜口縁鉢(3)は外面横位寛削り、内面横位寛撫で調整。明赤褐色砂粒多混。高環(4)は直線的な環部で内外面放射状の寛磨きを施す。黄褐色で焼成はやや甘く器面の荒が目立つ。(5)は強い三段外反構成の環部である。作りは丁寧で口唇部は断面矩形を呈し、外面は外反する区切り強い三角帯を作る。橙で細土。高環脚部(6・7)は脚柱部が短めで膨らみが強い。(6)は縦位寛磨き。橙で細土。(7)は明黄褐色で粗砂混入し器面の荒顕著。壺(8)はV字状に開く口縁部を有する形状になろう。体部は中央部がもっとも強く張り、扁平気味になる。外面肩部は粗間隔で放射状の寛磨きを施す。中位は弱く下位は強い寛削りを施す。内面見込み部には櫛目状撫で痕がある。明赤橙で細土。甕(9～16)は脚部に張りの弱い長胴系(9～11)と球胴系(12～14)がある。総体に調整が寛撫でを主体としているため痕跡が不鮮明。器内が厚い。浅黄橙～鈍橙で比較的細土。(13)は粗砂粒多混。(9)は器内が薄く、掻き目による調整が鮮明で縦位掻き目後肩部に横位の廉状紋の掻き目を一条施す。出土遺物の中では古手の様相。(15・16)は木炭痕のある底部。外面に寛磨きを施し、壺底部の可能性もある。手捏ね土器(17)は淡橙色。不定形土板(18)は表裏面に葉状圧痕のある焼成物。淡黄色、細土。勾玉(20)は面取り状調整、中央に未貫通の孔。管玉(19)と共に蛇紋岩製。砥石(21)は黒色頁岩製、(22)は流紋岩で共に定形または略定形砥石。

20号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器 環	(15.2)	—	(4.0)		12	土師器 甕	(19.0)	—	(8.25)	
2	土師器 環	(15.0)	—	(5.8)	黒褐色塗布か	13	土師器 甕	—	(8.4)	(14.3)	
3	土師器 鉢	(13.8)	—	(7.0)		14	土師器 甕	—	(8.6)	(4.4)	
4	土師器 高環	(14.6)	—	(6.3)		15	土師器 甕	—	(7.85)	(3.35)	木炭痕あり
5	土師器 高環	(21.4)	—	(6.2)		16	土師器 甕	—	(4.1)	(2.05)	木炭痕あり
6	土師器 高環	—	(15.2)	(8.25)		17	土師器 手捏ね	—	—	(5.75)	
7	土師器 高環	—	12.8	(10.8)		18	土製品 管玉	長 (4.9)	幅 (2.7)	厚 (0.75)	2次使用
8	土師器 壺	—	4.0	(11.3)	胴径14.0	19	管玉	長 1.3	径 0.4	孔径 0.7	重0.46g 蛇紋岩
9	土師器 甕	(15.0)	—	(8.65)		20	勾玉長2.0幅0.8	厚 0.7	孔径0.3	重2.84g	孔未通 蛇紋岩
10	土師器 甕	(16.5)	—	(10.05)		21	砥石	長 12.9	幅 2.7	厚 2.3	重120g 黒色頁岩
11	土師器 甕	(18.4)	—	(6.1)		22	砥石	長 7.1	幅 3.2	厚 2.3	重70g 流紋岩



第131図 20号住居跡出土遺物(1)



第132図 20号住居跡出土遺物(2)

V、古代・古墳時代の遺構と遺物

22号住居跡 (第133・134図、PL.26・48・49)

位置は、座標値 $X=561\sim 565$ ・ $Y=-971\sim -976$ の範囲にある。

重複は、古墳時代前期の30号住居跡と重なる。また北西～南東方向に攪乱溝が走る。

平面形状は、東西方向に長軸をもつ方形を呈する。

規模は、長軸4.9m・短軸3.5m、壁高は浅い堀形で15cm足らずである。床面積は16.1㎡を有する。

主軸方位は、 $N-75^{\circ}-E$ を示す。

埋土は、loam粒が少量混入する暗褐色土の単層である。

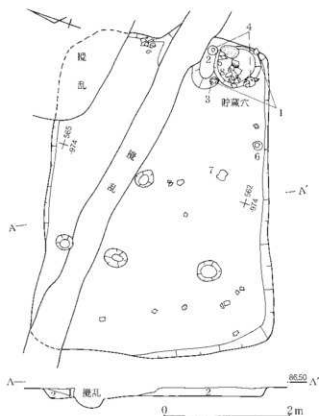
竈は東壁の中央わずかに南に偏って付設されるが、上記攪乱溝によって中心部分が破壊されている。壁線より約90cmの長さで張り出す右袖部が残る。

貯蔵穴は竈右、南東隅部にある。径70×65cm、深さ25cmの略円形を呈する。

床面には4穴ほどの小穴が検出されているが、柱穴を想定できるような配置を取っていない。

遺物は竈周辺と貯蔵穴に集中する。土師器 杯・壺などがある。杯(1)は扁平な浅い体部で、短い口縁部は緩く括れて外反気味に立つ。

外面指頭痕が残る、内面は放射状撫で。明赤褐色で細土。鉢には開口(2)と袋型の(3)がある。(2)は深目の体部に小さな平底。口縁部は僅かに括れて直立。外面は篋割り後細かな寛磨き。内面寛撫で。焼成堅緻、赤褐色で精土。(3)は小型で偏球形な体部に、底部は小さな凹になる。器内厚く、短い口縁部は先細り直立気味。外面寛磨きで焼成気味。鈍褐色で細砂多い。壺(4)は算盤珠状に扁平な体部に底部は凸気味な平底。丈高な口頸部は内湾気味に開く。頸部から体部上半に縦位寛磨き、下半には横位寛磨り。両者の接点部位には横位の寛磨きを施す。口頸部内面は斜位の寛磨き。鈍赤褐色で細土。壺は小型と長胴大型壺がある。小型壺の(5・6)はやや下膨れ風の胴部になろう。外面縦位寛磨り、内面寛撫で。暗褐色で比較的細土だが作りは粗い。長胴大型壺(7)は肩部に張りもち底部が円盤状に突出する。外面縦位の寛磨り内面は紐作り痕が著しい。鈍褐色で粗砂粒多混。(8)は胴部が全体に張る。底部が不安定な丸底。外面は弱い篋割り調整が疎らに施され、内面は横位の寛撫で。鈍褐色で比較的細土。

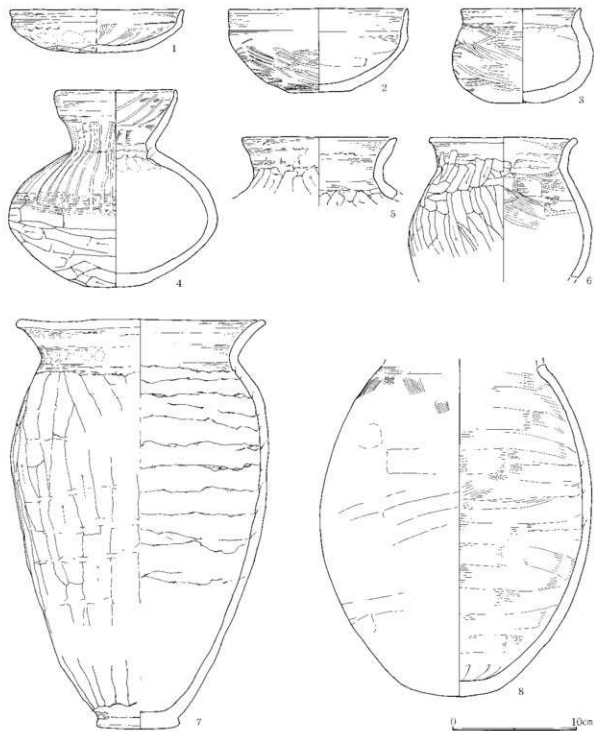


22号住
1. 暗褐色土 loam 小粒疎らに混
2. 暗褐色土 loam 小粒混

第133図 22号住居跡

22号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器 杯	(13.7)	—	(3.3)		5	土師器 小型壺	(12.2)	—	(4.9)	
2	土師器 鉢	14.2	4.7	6.7		6	土師器 小型壺	11.6	—	(11.0)	
3	土師器 鉢	9.5	1.8	7.4		7	土師器 壺	19.6	6.8	32.2	底部厚く円盤状
4	土師器 壺	(9.4)	4.6	15.5		8	土師器 壺	—	7.2	(26.1)	丸底



第134図 22号住居跡出土遺物

24号住居跡 (第135～137図、PL.27・49・50)

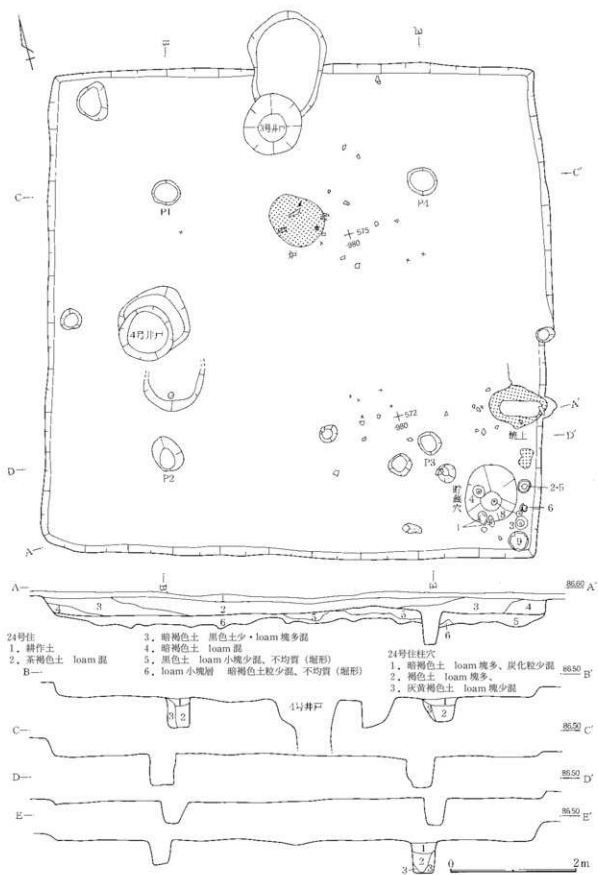
位置は、座標値 $X=569\sim578$ ・ $Y=-976\sim-985$ の範囲にある。

重複は住居跡内に平安時代に考えられる3号・4号の井戸が2基重なる。

平面形状は、長短軸長差のない整った方形を呈する。

規模は、東西・南北の両軸長とも7.9mで、壁高は30cmを測る。床面積は57.6㎡を有する。

V. 古代・古墳時代の遺構と遺物



第135図 24号住居跡

主軸方位は、N-75°-Wを示す。

埋土は、大別2層で暗褐色土を主体とする比較的単なる自然体積であろう。

竈は、東壁にあり、南に偏って付設されたと考えられる。構築材の認定ができなかったためか袖部などの検出がなされず、かろうじて火床の窪みを確認したにとどまる。また、中央部やや北側に寄った位置に地床がと思われる被熱焼土面が検出されている。径100×80cmのわずかな凹みをなす楕円形状である。粘土などの構築材は見られないが、長径20cmあまりの転石が埋設されている。竈との共存関係は明らかではないが、石材などの遺存状況からは両者とも併用されていた可能性が高い。

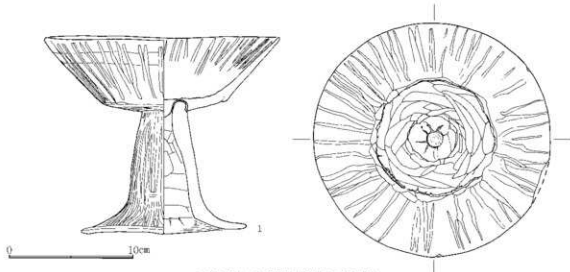
貯蔵穴は南東隅、竈の右手にある。径90×80cm、深さ50cmの略円形である。

柱穴は、4穴が検出され、径40~55cm、深さ35~50cmの堀形をもつ。柱間寸法は、P1・P2とP2・P3は4.2m、P3・P4とP1・P4は4.1mの等間である。

出土遺物は貯蔵穴周辺に集中する。遺物種には土師器高坏・小壺・壺・手捏ね土器などがある。高坏(1~3)は腰部が角折れて体部が直線的に開く。内外面とも放射状の、見込み部には一方向の密な磨きを施す。ただし(1・2)の器面が荒れて不鮮明である。なお、(4)は体部に湾曲が見られ形態差も感じられ、磨き調整も弱い。(1)は坏・脚部の接合状態が鮮明、坏底には臍状の突起、脚部は臍穴状になる。高坏脚部(5)の裾部の開きは(1)よりも強い。いずれも明赤褐色を呈し、細土である。小型壺(6~8)は口頸部の形状および作りの精粗から2形態がある。(6・7)はやや短めの口頸部で緩く内湾して開く。外面口頸部は光沢の少ない磨き様の調整で、体部は横位磨削り。小径な平底。鈍黄橙~灰黄褐色を呈し、細土だが作りはやや粗い。(8)は伸びやかに外反して開く口頸部で、体部は横位の磨削り。内面口頸部に磨き様の痕跡を認めるが僅か。底部は平底気味ながら不安定。橙で軟質な精土。大型壺(9)は肥厚した底部で体部は球形に強く張る。外面磨きが顕著。内面の荒れ著しい。鈍赤褐色で比較的細土。手捏ね土器(10)は、内面を強い指頭様の撫で上げて成・調整。鈍黄橙色で細土。

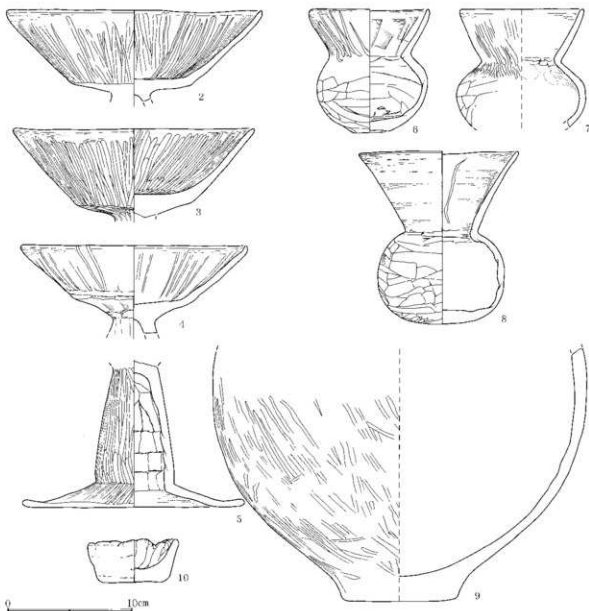
24号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器 高坏	18.5	12.9	15.6	坏部臍状に凸	6	土師器 壺	9.6	2.6	9.7	
2	土師器 高坏	20.2	—	(7.1)		9	土師器 壺	—	(9.0)	(19.9)	
3	土師器 高坏	16.0	—	(7.3)		8	土師器 壺	12.6	—	13.6	
4	土師器 高坏	17.8	—	(6.9)		7	土師器 壺	(9.8)	—	(9.35)	
5	土師器 高坏	—	(17.5)	(11.4)		10	土師器 手捏	7.2	4.5	3.4	



第136図 24号住居跡出土遺物(1)

V. 古代・古墳時代の遺構と遺物



第137図 24号住居跡出土遺物(2)

27号住居跡 (第138・139図、PL.27・50)

位置は、座標値 $X=562\sim 567$ ・ $Y=-981\sim -987$ の範囲にある。埋土中より少量の炭化材が検出されており、被火住居とも考えられるが床面および壁面での被熱現象や焼土粒層の存在等の所見は得られていない。

重複は、東縁で古墳時代前期31号住居跡、および平安時代4号住居跡と重なる。また、中央部東西に攪乱溝が走り、北壁の西端も東西走の攪乱溝で一部が消失する。

平面形状は、長短軸長差のない方形を呈する。

規模は東西・南北軸長とも4.6mで、壁高は約20cmを測る。床面積は16.8㎡を有する。

主軸方位はN-76°-Wを示す。

埋土は、大別2層になり、単味な自然堆積と考えられる。

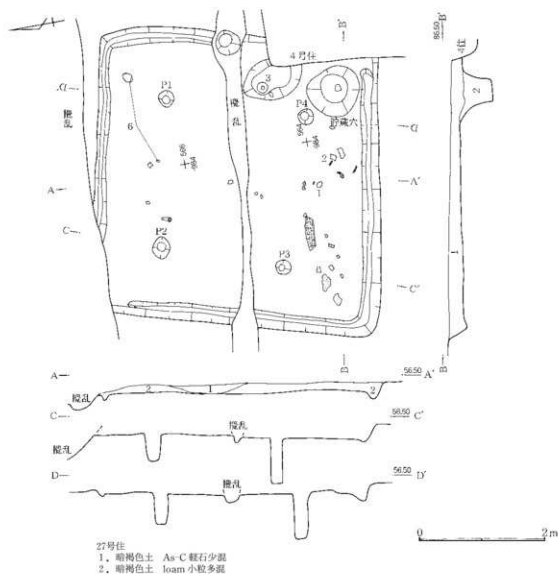
竈は東壁やや南に偏って付設されたと考えられるが、4号住居跡との重複によって消失したものであろう。

貯蔵穴は南東隅にあり、竈右手にならう。径85×80cm・深さ50cmの円形を呈する。

柱穴は4穴が検出され、径25～35cm・深さ45～75cmの掘形をもつ。柱間寸法はP1・P2は2.4m、P2 P3は1.9m、P3・P4が2.5m、P1・P4が2.2mをそれぞれ測る。

壁下溝は各壁に巡り、幅10～20cm・深さ7cm前後である。

出土遺物には土師器鉢・高坏・甕・壺などがあるが、完形度は低く散在的な出土である。大・小の鉢(1・2)は作りがやや粗略。小型鉢(1)は深めの体部に小径の平底である。口縁部は僅かに括れて直立する。体部下半は寛削り。明赤橙色で焼成は堅緻。細土。(2)は内湾気味の体部で使用擦れ無くも調整痕は不鮮明。橙色で細土。高坏の坏部(3)は立ち上がりか内湾気味で器内が厚い。明赤橙色で細土。(4)は直線的に開く。内面粗間隔に寛磨きを施す。下半部は器面の荒れが著しい。橙色で細土。壺(5)は擬似二段口縁。口頸部外面には粗間隔で縦位寛磨きを施す。浅黄橙色で細土。甕(6)は小型球胴で寛削りの平底。胴部は横位寛削り、内面横位寛撫で。鈍赤褐色で砂粒多混。甕(7)は口唇部断面矩形をなし、口縁中位に段をもつ。口縁・胴部は掻き目状調整。橙色で精土。(8)は壺底部か。内面に縦位寛磨きを施す。鈍橙色で細砂混。

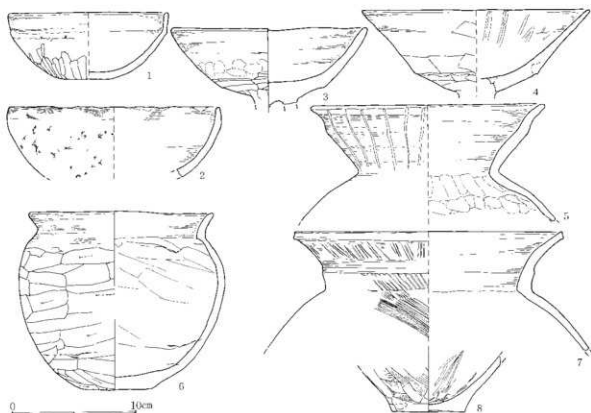


第138図 27号住居跡

V、古代・古墳時代の遺構と遺物

27号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	口径	器高	備考	番号	器種	口径	口径	器高	備考
1	土師器 鉢	(12.6)	丸底	(5.2)		5	土師器 壺	(18.4)	—	(9.2)	疑似二段口縁
2	土師器 鉢	(16.6)	—	(5.5)		6	土師器 甕	14.6	5.6	14.1	
3	土師器 高坏	16.5	—	(6.0)		7	土師器 甕	(21.2)	—	(9.3)	
4	土師器 高坏	(18.0)	—	(6.4)		8	土師器 甕	—	5.7	(4.8)	



第139図 27号住居跡出土遺物

29号住居跡 (第140・141図、PL.27・50)

位置は、座標値、X=559~564・Y=-962~-969の範囲にある。

重複は、南側で新旧関係は不明であるが同時代に属する古墳時代中期の33号住居跡と、そして平安時代10号住居跡と重なる。なお、北側は大規模な攪乱溝によって消失し、南に平行する一条の攪乱溝は竈にかかり右袖の一部が残るのみである。

平面形状は、長短軸長差のない方形を呈し、南・西隅部は隅丸になる。

規模は、軸長5.0m、壁高12cmあまりで、浅い掘形である。床面積は約22.2㎡を有する。

主軸方位は、N-52°-Eを示す。

埋土は、大別1層で小粒な loam 土粒を混入する暗褐色土である。

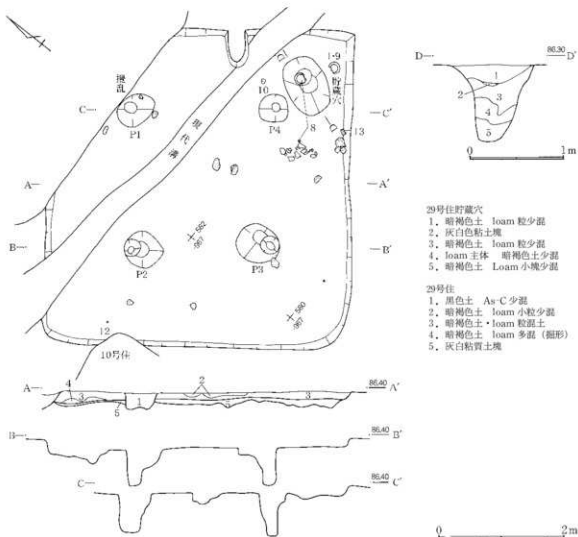
竈は北東面壁にあり、やや南東に偏って付設されており長さ約60cmの右袖が遺存するのみである。

貯蔵穴は東隅、竈右手にある。径90×70cm・深さ85cmの楕円形を呈する。

柱穴は4穴が確認され、径50cm前後で深さ60~70cmの掘形をもつ。柱間はP1・P2とP2・P3およびP3・P4は2.2m、P1・P4が2.3mを測る。

遺物は土師器杯・鉢・高坏・壺・甕などのほかに各一点ながら石製有孔円盤と手捏ね土器がある。出土状

況は貯蔵穴内および周辺で見られる。なお、量的には少ない。環(1・2)は須恵器模倣型に近いが受け部の作りが弱く、(2)口縁部の立ち上がりはより小さい。体部外面は篋削り。内面口縁横位、体部は放射状磨き。(1)は外口縁も横位の磨きを施す。鈍黄褐色で細土軟質の焼成。(2)は橙色で細土。鉢(3)は環に類するがやや大振りで鉢とした。体部は直線的に窄まる様相で小径平底にならうか。口縁部は僅かに括れて外傾して立つ。内面放射状磨きを施すが不鮮明。鈍赤褐色で細砂多混。(4)は内斜口縁。偏平で丸みが強い体部、丸底。外面細密な横位磨き、内面放射状磨き。明赤褐色で細土、焼成は硬。高環(5)の腰部は有段状に屈して体部は直線的。上縁が折れ気味で二段口縁様に開く。口唇部は鋭三角に整う。内外面放射状の磨き。赤褐色で、細土。脚部(6)はやや短寸の柱部に裾は水平に近く開き端部は鋭三角に整う。柱~裾部縦位磨き。赤褐色で細土。壺(7)は内湾気味に立つ口縁部に縦位の磨き。肩部は緩い波状の磨きが見える。焼成で黒褐色を呈し細土。壺(8)は無肩で長胴にならうか。口縁部は外反気味に開く。内器面の荒れ著しい。鈍褐色で砂粒多混。(9)は強い篋削り調整。胎土には石英粒を多量に含む粗土。手捏土器(10)は灰白色で細土。(11)石製模造剣、(12)石製有孔円は縁辺に近く対孔を穿つ。表裏は擦痕調整。変玄武岩製。砥石(12)は定型でやや硬質な砥沢石製。壁縁の上位出土で当跡に直接伴う資料では無からう。

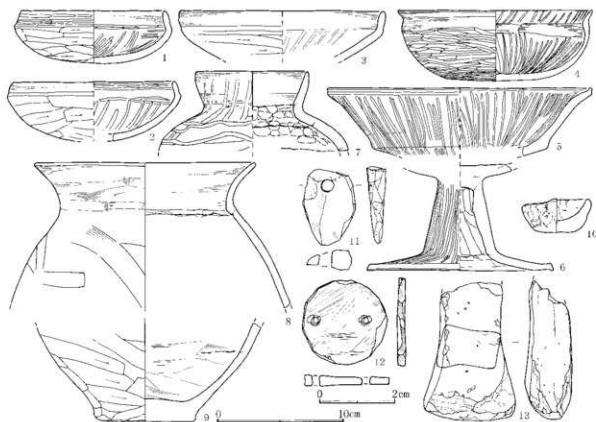


第140図 29号住居跡

V、古代・古墳時代の遺構と遺物

29号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	口径	器高	備考	番号	器種	口径	口径	器高	備考
1	土師器 坏	(11.4)	丸底	(4.1)		8	土師器 甕	17.5	—	(11.4)	
2	土師器 坏	(13.0)	—	(5.1)		9	土師器 甕	(17.7)	7.8	(7.8)	
3	土師器 钵	(16.1)	—	(3.8)		10	土師器 手埴	5.4	3.3	2.7	
4	土師器 钵	15.3	丸底	5.5		11	石製埴造削形	長 2.0	幅 1.4	厚 0.5	重1.67g 磨石
5	土師器 高坏	(20.8)	—	(5.3)		12	石製埴造円板	径2.3-2.3	厚4.0-4.5	孔径0.2	重5.5g 変玄武岩
6	土師器 高坏	(14.6)	—	(8.3)		13	磁石 定型砥	長 10.5	7.0	3.5	磁片石
7	土師器 甕	(8.8)	—	(6.2)	焼し焼成						



第141図 29号住居跡出土遺物

33号住居跡 (第142~144図、PL.27・51)

位置は、座標値 $X = 552 \sim 560 \cdot Y = -965 \sim -973$ の範囲にある。

重複は、北側で同古墳時代中期29号住居跡および平安時代10号住居跡と、また南側では平安時代12号住居跡と重なる。なお、29号住居跡との新旧関係は不明である。

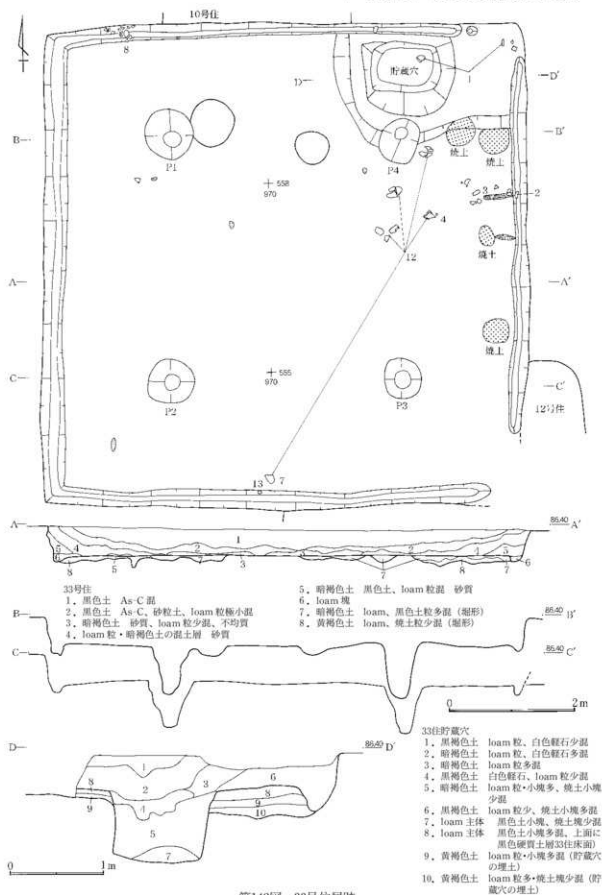
平面形状は長短軸差のない整った大型の方形を呈する。

規模は、軸長7.7mで壁高は45cmの深い掘形をもつ。床面積は50.6㎡を有する。

南北軸方位は、ほぼN-0°-Eを示す。

埋土は、大別4層に分ち、壁際に三角堆積を形成し、自然流入的な状況を見せるが中位層には loam 粒の混入が多い。

当住居跡より竈は検出されていない。本書では古墳時代竪穴住居跡における竈の付設如何について、古墳時代の前期と他を分かち最大の指標にするものである。しかし、本跡では検出されず、帰属時代とした古墳時代中期の認定にやや不安が残る。ここでは出土遺物の形態と住居内の一施設である明瞭な壁下溝などの存



第142図 33号住居跡

V、古代・古墳時代の遺構と遺物

在をもって古墳時代中期とした。(前期の竪穴に壁下溝が存在しないと言う意味ではない。ただ県内においては古墳前期に属する竪穴住居跡壁下溝の明瞭な検出例は管見ながら知らない。)竈は北壁あったものが、10号住居跡との重複によって消失したものと考えられる。

貯蔵穴は北東に偏つてあるが東壁までには1mほどの間隔がある。110×80cm・深さ75cmの比較的大きな楕円形掘形をもち、上縁は緩く開口する。貯蔵穴周縁は床面より約10cmの高まりが堤上に回り、東壁までの空間もそのままに高まっている。埋土中の下位層中に焼土塊の混入が見られることから、左手東壁に存在を想定した竈の傍証にならう。

柱穴は4穴が検出され、径60～70cm・深さ60～90cm前後の掘形をもつ。柱間寸法は、P1・P2とP3・P4が3.9m、P2・P3とP1・P4が3.7mを測り、相対の柱間寸法は同じである。

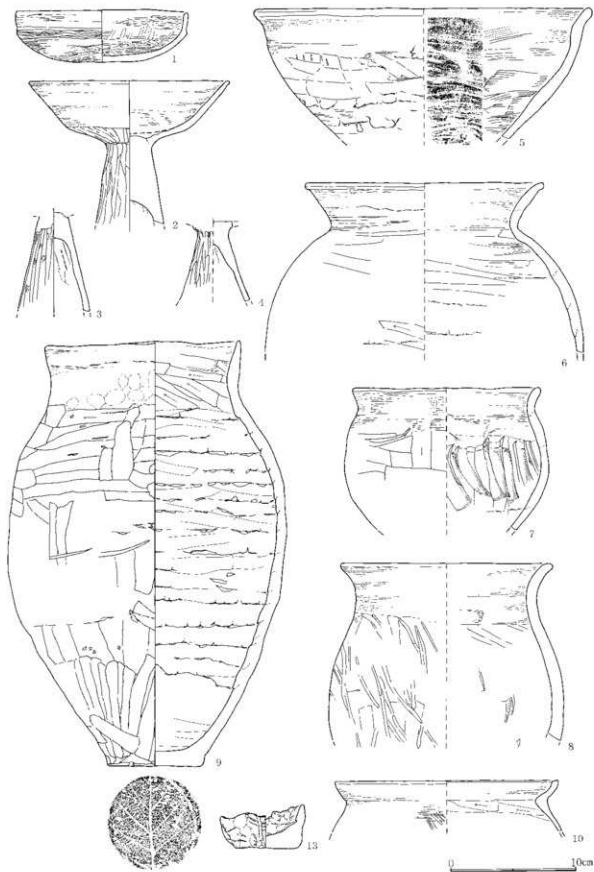
壁下溝はほぼ四周に回り、幅10～25cm・深さ8～10cmを測る。

なお、東壁に沿う位置の3～4箇所に床面の被熱痕とともに少量の炭化材が検出されている。床面の被熱痕の詳細な所見は得られていないが位置的に灰跡ではなかろう。また炭化材の存在と考え合わせた場合、被火住居(所謂火災住居)の可能性もある。ただし、住居内他所の床面や埋土の土層ではその痕跡は認められていない。例えば、住居廃棄後の廃材等の焼却行為などが考えられる。

遺物は少量で、散在的な出土状況である。土師器環・高環・鉢・甕・手捏ね土器などがある。なお、完形度の高い須恵器小型甕は埋土中の出土である。環(1)は口縁部直立し下位に小さな段を有する模倣环蓋形である。内外面細密な寛磨きを施し、黒褐色顔料を塗布する。胎土は灰黄色で精土。高環(2)は環部の腰が折れて直線的に開く。脚柱部の持ちが浅い形態である。環腰部と脚部は細かく強い寛削りで光沢を発する。浅黄橙色で細土。高環脚柱部(3・4)は縦位寛磨きで褐色～明赤褐色で細土。鉢(5)は開放広口で口縁部は小さく外反する。平底にならうか。器内厚く、撫で調整の粗い作り。灰黄褐色で細土。甕(6～10)は成・調整で精・粗の様がある。(6)は器面が滑らかに調整され、球胴形の古墳時代前期代の様相を持った壺とすべきかもしれない。明褐色で細土。他は(7～9)で器内が厚く器面調整の粗い長胴形の甕である。(7)は小型短胴で鉢形に分類される可能性もある。内面は強い縦位の寛撫で、外面は被熱痕が著しい。鈍褐色で細土。(8)は下膨れ様の胴部から撫肩で緩やかに外反する口縁部へ続く。外面縦位に寛磨き。被熱痕著しい。鈍褐色で細土。(9)は長胴で口縁部は丈高に直立する。胴部上半は横位、中位から下位は縦位の寛削り。内面は紐巻上げ痕が極めて顕著。約16本の紐痕を観察する。底部木葉痕。浅黄褐色で細土。甕(10)は受け口状の口縁部をもつ。口唇部断面は略短形である。器内は薄手で掻き目状の調整痕が僅かに残る。明褐色で細砂混。口縁部の形状から北陸系土器に繋がるか。須恵器は(11)が寸胴無頸壺にならう。口唇部は小さく内屈し、斜行上端面に僅かな蓋受け部を作る。胴部に円形の添付材の剥落痕が残るがいかなるものか不明である。灰色で細土。器面は融解状に暗緑色の発色あり。小型甕(12)は丸底。胴部中位に平行叩き目が、内面は青海波紋状で目が残る。灰色で細土。手捏ね土器(13)は灰黄褐色で細土。

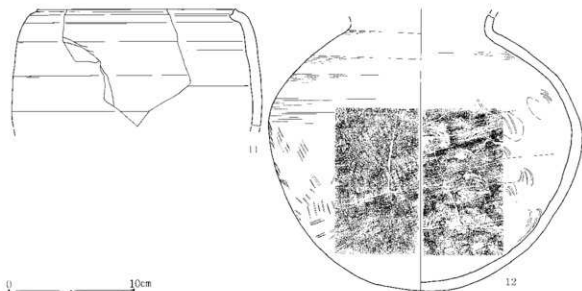
33号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器 環	(13.6)	—	(4.1)	黒褐色塗布か	7	土師器 甕	(14.8)	—	(11.2)	—
2	土師器 高環	(15.8)	—	(11.3)	—	8	土師器 甕	(16.7)	—	(13.9)	二次被熱
3	土師器 高環	—	—	(7.4)	—	9	土師器 甕	15.4	7.4	35.5	—
4	土師器 高環	—	—	(6.2)	—	10	土師器 甕	(17.6)	—	(3.95)	北陸系か
5	土師器 鉢	(26.6)	—	(10.3)	10住より	11	須恵器 無頸壺	(15.6)	—	—	—
6	土師器 甕	(18.8)	—	(13.3)	—	12	須恵器 甕	—	—	丸底 (21.7)	—



第143図 33号住居跡出土遺物(1)

V、古代・古墳時代の遺構と遺物



第144図 33号住居跡出土遺物(2)

40号住居跡 (第145~147図、PL.28・51・52)

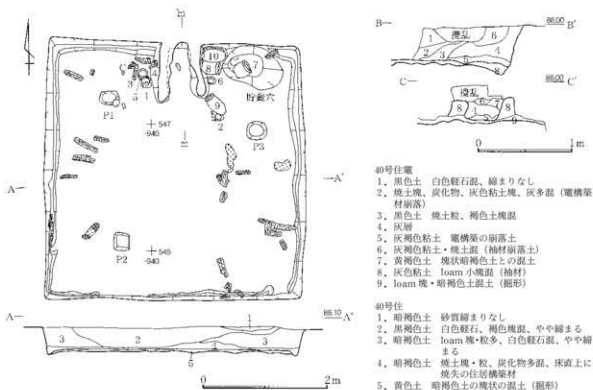
位置は、座標値 X=544~548・Y=-937~-941の範囲にある。炭化材の検出状況から被火住居にならう。

平面形状は、長短軸長差のない整った方形を呈する。

規模は、軸長4.1mで、壁高35cmを測る。床面積は14.1㎡を有する。

主軸方位はN-3°-Eを示す。

埋土は、大別3層からなり、床面直上の薄層は焼土・炭化物などを主体とし、床面上には垂木状の家屋構



第145図 40号住居跡

- 40号住居
1. 黒色土 白色靫石混、締まりなし
 2. 焼土塊、炭化物、灰色粘土塊、灰多混 (竈構築材崩落)
 3. 黒色土 焼土粒、褐色土塊混
 4. 灰層
 5. 灰褐色粘土 竈構築の崩落土
 6. 灰褐色粘土・焼土混 (袖材崩落土)
 7. 黄褐色土 塊状暗褐色土との混土
 8. 灰色粘土 loam 小塊混 (袖材)
 9. loam 塊・暗褐色土混土 (掘形)
- 40号住
1. 暗褐色土 砂質締まりなし
 2. 黒褐色土 白色靫石、褐色塊混、やや締まる
 3. 暗褐色土 loam 塊・粒多、白色靫石混、やや締まる
 4. 暗褐色土 焼土塊・粒、炭化物多混、床直上に焼失の住居構築材
 5. 黄色土 暗褐色土の塊状の混土 (掘形)

造材と考えられる炭化材が残る。

竈は、北壁ほぼ中央に付設される。煙道部など壁線への掘り込みはなく、灰色粘土を主材にする長さ1mほどの袖部を有する。焚き口幅は約40cmを測る。火床部には長さ15cm、径10cmほどの長径転石が支脚として埋設されている。

貯蔵穴は竈の右手、北東部隅にある。径95×66cm・深さ35cmの楕円形を呈する。

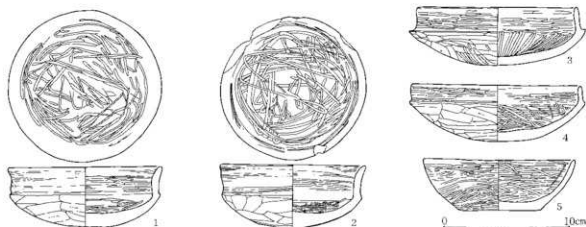
柱穴は3穴で、配置上は南東部にあるべき1穴が検出されず、不可解な状況である。柱穴P1は径32×22cm深さ30cm、P2は径32×26cm・深さ15cmの方形掘形で、P3が径34×30cm深さ22cmの略円形である。柱間寸法はP1・P2が2.2m、P1・P3が2.3mである。

壁下溝は、南壁の一部が途切れるものの全壁下に巡る。幅4～10cm・深さ10cm程度である。

遺物は、竈周辺に集中し、土師器環・鉢・甕がある。土師器環は須恵器蓋・身模倣のほか平底形態がある。環蓋模倣(1・2)はやや小振りで口縁部は外反気味に直立する。器内は厚い。内面口縁部は横位の、見込み部は擬似螺旋状の寛磨き。外面体底部は寛削り後部分的に寛磨きを施す。(1)は内黒処理。(2)は煙気味の焼成。両者共地色は浅黄褐色で細土。坏身模倣(3・4)は受け部やや弱いが口縁部は内傾気味に立つ。黒褐色顔料を塗布する。口縁部内外面は横位の寛磨き。(3)は内面を放射状に、(4)は横位と斜位の寛磨きを施す。胎土は浅黄褐色で共に精土。平底形態の(5)は体部が内湾して開く。内外面とも横位を主とする寛磨き。黒褐色の顔料を塗布。胎土は浅黄褐色で精土。鉢(6)は器内厚め。小振りで口縁部が小さく外傾し、深身で平底。外面は強い撫で付け状の寛削り、内面の寛磨き間隔は疎。浅黄褐色で細土。甕(7～10)は胴張り形・下膨れ形・長胴形がある。(7)は広口形状で台付の可能性もある。口縁部は指頭痕が残り胴部は幅狭な寛削り。胴部中に接合痕あり、上・下2分割作りを接合したごとくである。中型甕(8)は下膨れ様の胴部で被熱。外面縦位の寛削り、内面に疎間隔の寛磨き。鈍黄褐色で砂粒多混。長胴甕(9・10)の寛削りは引きの長い縦位、下位は斜位の寛削り。浅黄褐色で(9)は細土。(10)は砂粒の混入が多い。

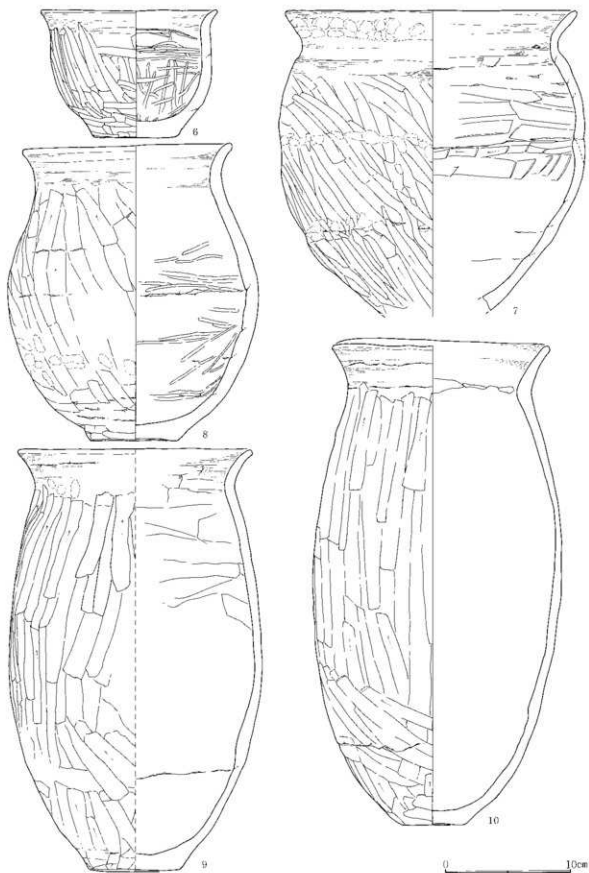
40号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器 環	12.1	丸底	4.7	内黒 内面縦位寛磨き	6	土師器 鉢	13.9	6.7	10.0	
2	土師器 環	11.4	丸底	4.9	煙焼成 内面縦位寛磨き	7	土師器 甕	22.9	—	23.5	
3	土師器 環	12.7	丸底	4.6	黒褐色塗布か	8	土師器 甕	16.5	6.7	23.5	
4	土師器 環	(13.2)	丸底	4.4	黒褐色塗布か	9	土師器 甕	18.6	(7.2)	33.3	
5	土師器 環	12.0	6.4	4.1	黒褐色塗布か	10	土師器 長胴甕	17.1	4.8	38.5	



第146図 40号住居跡出土遺物(1)

V. 古代・古墳時代の遺構と遺物



第147図 40号住居跡出土遺物(2)

46号住居跡 (第148・149図、PL.28・52・53)

位置は、座標値 $X=577\sim 582$ ・ $Y=949\sim 953$ の範囲にある。

平面形状は、長短軸長差のない方形を呈する。

規模は、軸長4.1mで、壁高は、わずかに12cmの浅い掘形である。床面積は16.2㎡を有する。

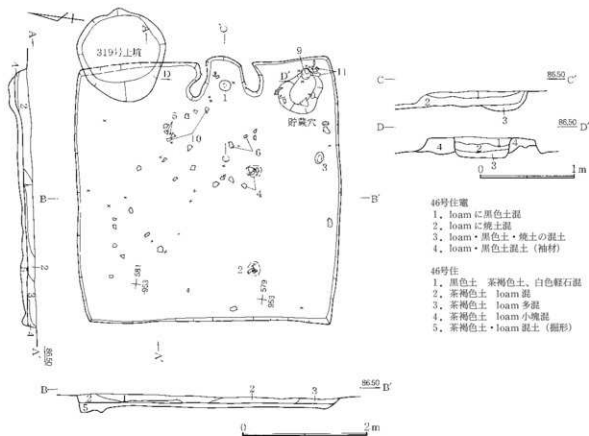
主軸方位は、 $N-81^{\circ}-E$ を示す。

埋土は、大別2層で、薄層ながら loam 塊の混入が多い。

竈は東壁わずかに南に偏って付設される。煙道部などの壁線への掘り込みはほとんどなく、ハの字状に開く袖部が付く。袖材は loam 土と黒褐色土の混土を主材にし、長さ60cmほどで、焚き口幅は60cmを測る。

貯蔵穴は、竈右手の南東隅部にある。径70×60cm・深さ約40cmの楕円形を呈する。

柱穴・壁下溝などの諸施設は検出されていない。



第148図 46号住居跡

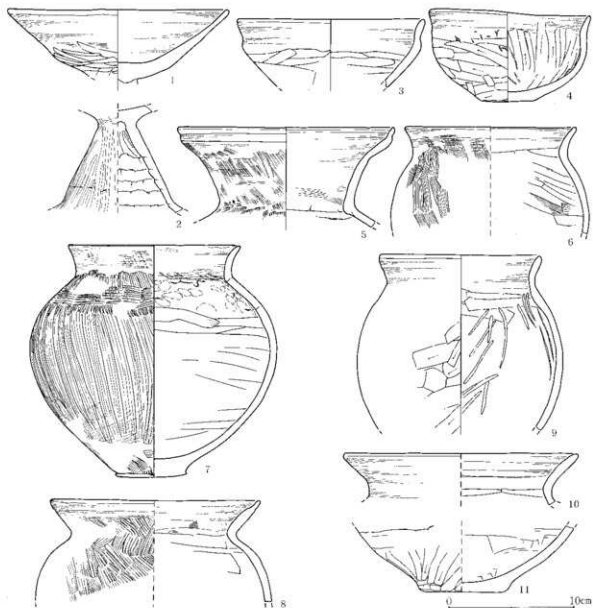
遺物は、破片化したものが多く、散在的なお埋土中の出土がほとんどである。土師器高環・鉢・壺・甕などがあり、鉢・甕類の一部を除き当住居跡からはやや時間の遡る古墳時代前期的な遺物が目に付く。高環(1)は体部が直線的に開き腰部の折れに前期の様相がある。腰部細かい寛削り。橙色で細砂粒の混入多い。脚部(2)は「ハ」の字状に開き時期的に前者と同じ時代相をもつ。縦位寛磨き、内面巻上げ痕顕著。鈍黄褐色で細土。鉢(3)は口縁部が括れて外傾し、体部は丸み無く腰部へ細る。赤褐色で砂粒多混。(4)は影らみのある体部で平底。内斜口縁。外面横位寛削り、内面縦位の強い寛撫で上げ。橙色で細砂粒多混。壺(5)は頸部上位

V、古代・古墳時代の遺構と遺物

で内湾気味に大きく開き、小さく屈して受け口状の口唇部を作る。頸部に掻き目後横撫で。橙色で細砂粒多混。甕(6～11)。(6～8)は胴部外面に掻き目調整。(6)は細目の掻き目で多段調整。(7)・(8)は粗目の掻き目で、前者は胴部縦位三段に肩部へ横位の多止め掻き目を施す。後者は多段掻き目調整である。強い「く」の字状に屈する口縁部は端部が細る。鈍黄橙色～橙色で細土。(9～11)は胴部の調整は篋削り。(9)は内面に疎間隔の磨きを施す。(9・10)は橙色で細土。(11)は赤褐色で砂粒多混。

46号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器 高坏	(17.5)	—	(5.4)		7	土師器 甕	(13.6)	5.4	(7.8)	
2	土師器 高坏	—	—	(8.4)		8	土師器 甕	(16.7)	—	(8.0)	
3	土師器 鉢	14.8	—	—		9	土師器 甕	(12.7)	—	(7.6)	
4	土師器 鉢	12.7	4.2	7.3		10	土師器 甕	(18.5)	—	(4.0)	
5	土師器 壺	(17.0)	—	(7.8)		11	土師器 甕	—	6.1	(5.2)	
6	土師器 甕	(13.5)	—	(8.3)							



第149図 46号住居跡出土遺物

50号住居跡 (第150～157図、PL.29・53～57)

位置は、座標値 $X = 574 \sim 577$ ・ $Y = -935 \sim -942$ の範囲にある。

重複は、南側で平安時代34号住居跡と北西隅では同じく平安時代の49号住居跡と重なり、さらに東壁の壁線にそって攪乱溝が走る。

平面形状は、ほぼ方形を呈すると思われるが、34号住居跡によって南壁線が消失し、また、北縁部の調査が前年度に実施されておりやや壁線筋が不整合となっている。

規模は、東西軸長が6.2m、南北軸方向は5.5mほどの範囲まで確認検出されている。壁高は、40cmで比較的深い掘形をもつ。床面積は検出した現状で31.0㎡になる。

主軸方位は、 $N-76^{\circ}-E$ を示す。

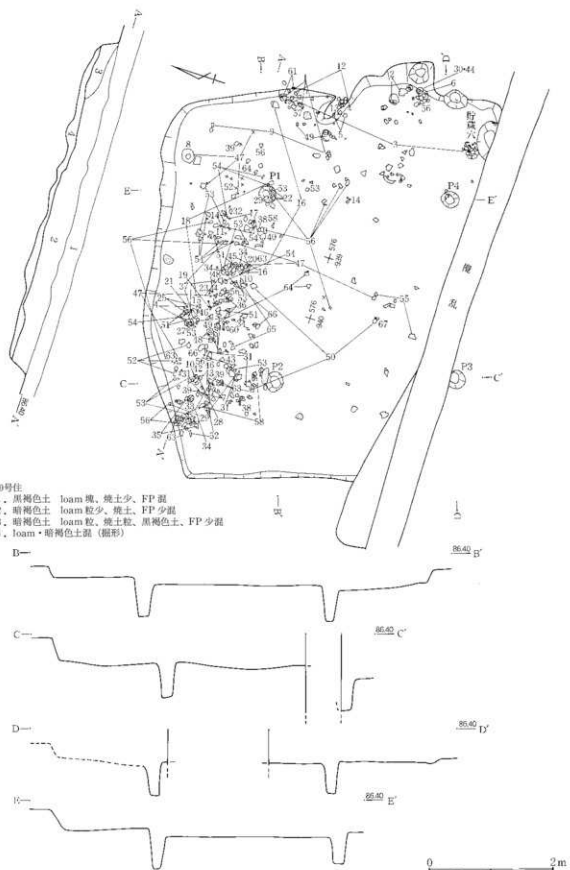
埋土は、大別2層に分ち、混入物の少ない単味の堆積状況である。

竈は、東壁にあり南に偏って付設されているようであるが遺存が劣弱だったためか、検出状況では形状など不明部分多い。また、貯蔵穴は竈の右手、南東隅にあると思われ、攪乱によって大半消失するが痕跡のみとどめる。

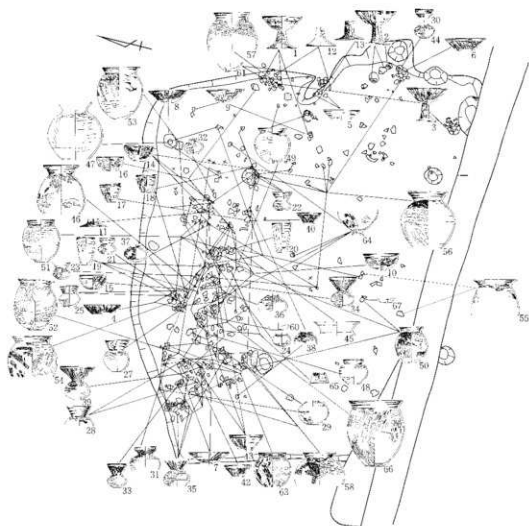
柱穴は4穴が検出され、径30cm前後、深さ50～60cmを測る。柱間寸法は $P1 \cdot P2$ が3m、 $P2 \cdot P3$ 、 $P3 \cdot P4$ は2.8mで、 $P1 \cdot P4$ が2.9mを測る。

遺物は竈周辺の床面には比較的完形度の高いものが多く検出され、一方、住居北側では埋土中ほぼ水平状態で破片化した遺物の集中分布が見られる。二様の遺棄または投棄があったようである。遺物種には土師器高坏・鉢・鈿・甕・甕の他、特異な器形にKop形土器などがある。高坏(1～13)。坏部は平底から体部が直線的に大きく開くが、(9)は反気味。(10)は内斜口縁の鉢である。脚は柱状部が棒状と緩く開くものがあり、裾部は開き強い「ハ」の字状が多く、水平に折れる(2・3)がある。最終器面調整は寛磨きで、坏部放射状、脚部縦位が大平であるが(1・5)のように不鮮明または撫で調整と脚部寛削り段階のものもある。色調は赤褐色～鈍橙色で比較的細土を用いる。なお(5)は器内が薄手で色調は黄橙色を呈す。鉢(14～16)は小型。深めの体部で平底。口縁部の形状に、内屈(14)・直立(15)・内斜(16)の各口縁形態がある。(14・15)の器面調整は外面に弱い寛撫を施し、内面は放射状寛磨き。(16)は指頭痕が著しく調整が荒く、内面は弱い掻き目状調整。(14・16)は鈍黄褐色、(15)は明赤褐色で胎土は細土。Kop型土器(17～20)は大小1対がある。小型(17・18)は口縁部が小さく折れて直立気味。外面身細で強い縦位寛撫で。明赤褐色で細砂混。大型(19・20)は直線的な体部で細る口縁部に続く。外面は縦位の弱い寛撫で。鈍褐色で細砂混。Kop型大小とも外面に比べて、内面はやや粗略な調整である。その差は大型のものがより顕著である。容器とした場合にやや疑問の生じるところである。ならば、形状的には竈内に設置される支脚型土製品に類似するが、なお、口縁部の作りと内外面調整の丁寧さが過ぎる。壺は小(21～44)・大(45～47)がある。小型品は口頸部と胴部の形態から大別4類に分かつ。1類には、小型で厚手なものが多い(21～26)。口頸部は僅かに内湾して開くものが多い。扁平な胴部と径・高がほぼ同じ。平底で(21)は小径な凹をなす。胴部寛削り、口頸部寛撫で。赤褐・橙・浅黄褐色で細土。2類には、球胴で平底。口頸部は直線的に開く。胴部調整は寛削りと寛磨きを施すもの(29)がある。色調は浅黄橙(27)・明赤褐色で細土だが微細な砂粒を多量に含む。3類には、口縁部に特徴があり口縁部下縁に括れをなして、直立(30・31)・内湾(33・34・39・42・43)・外反(40・41)するものなどがある。扁平気味な胴部で頸部が細めに窄まり、口頸部が大きく開くものが多い。器面調整は口頸部内外面に放射状寛磨きを、胴部は横位寛削りと寛磨きを施すものがある。焼成は比較的硬質、色調は赤褐色～明黄褐色で細土。4類(44)は、胴部に孔を穿ついわゆる須恵器の甕型である。胴部横位の寛削りで薄手の作り。明褐色で細土。

V. 古代・古墳時代の遺構と遺物



大型壺(45)は折り返し口縁である。口唇端部は矩形に整う。焼成は硬質で器面の荒れが著しい。明赤褐色を呈し細土。(46)は外反気味に開く口頸部でやや下膨れの胴部をなす。外面は強い寛撫で後に部分的に寛磨き、内面は強く寛による撫でつけ調整。浅黄橙色で細土。(47)は胴部中央に最大径をもつ球胴形。肩部横位、胴部は縦位の弱い寛撫で。内面は横位の強い寛撫で。鈍黄橙色で粗砂混。壺(48~58)は小・大型がある。小型壺は球胴と長胴の2形態になろうか。(48・49)は胴部球形で外面の調整は弱い横位の寛削り。橙~赤橙色で細砂混。(50・51)は長胴気味で、(51)は縦位掻き目後に胴下半は寛削りを施す。浅黄橙色で細砂混。(52)は底部が厚く盛り上がる。胴部は横位の寛削り、内面には紐作り痕が顕著。鈍橙色で細土。大型壺(52~58)は胴部上半に縦位の、下半は横位の寛削りを施すものが多い。(52)は内面の胴下半に強い寛削りを施す。(56)は頸部の窄まりとやや高めに開く口縁部をもち、肩部に弱い掻き目調整を残す。(57・58)は下膨れまたは球胴形で若干古式の様相を残す。他と比べてやや幅狭な寛削りまたは掻き目調整を主としている。色調は赤褐色~鈍橙色で比較的細土を用いるが(57)は粗砂粒が多く混入。(59~61)は壺または壺の底部。(59)は底に「十」字様の窠書き紋。(62~65)は古墳時代前期に属すると思われる壺類でS字口縁台付壺と単口縁壺である。甗(66)は底部大径単孔である。胴張りの強い大型品である。胴部上半は縦位の弱い寛削り、下半は光沢の生じ



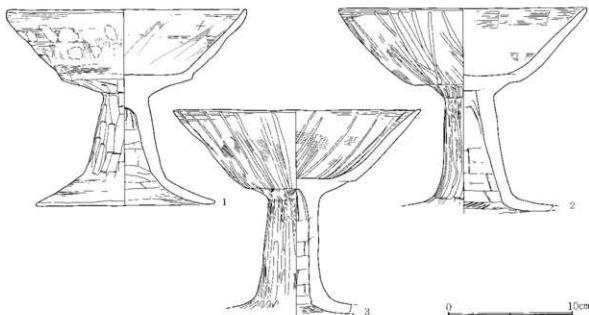
第151図 50号住居跡遺物分布図

V、古代・古墳時代の遺構と遺物

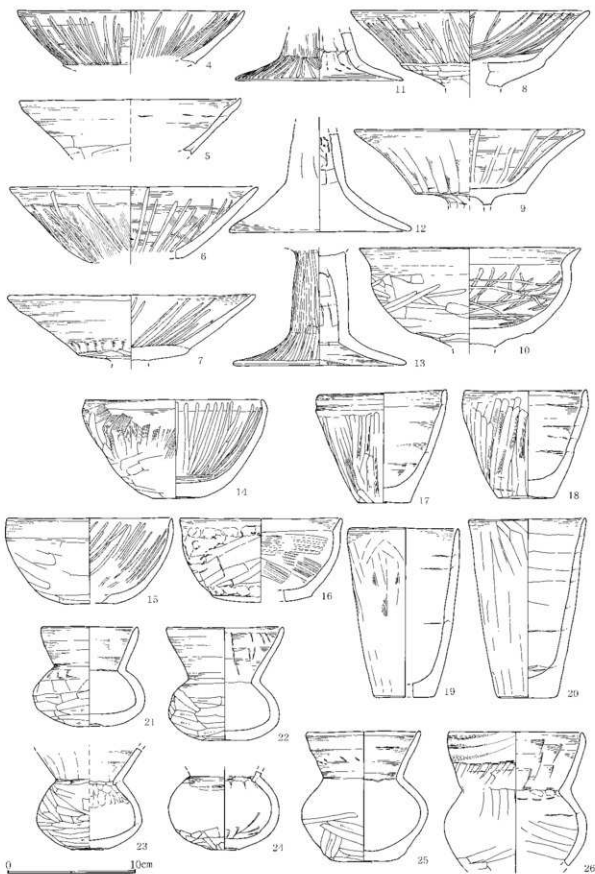
る強い撫でつけのような削り、また内面は縦位の強い篋撫でを施す。橙色で細土。(67)は小径単孔の椀底部。明赤褐色で細土。

50号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器 高坏	19.0	14.2	15.3		35	土師器 甕	—	—	(12.5)	
2	土師器 高坏	19.6	—	16.0		36	土師器 甕	—	—	(7.5)	
3	土師器 高坏	19.5	—	15.5		37	土師器 甕	—	—	(7.8)	
4	土師器 高坏	17.9	—	(5.3)		38	土師器 甕	—	—	(5.4)	
5	土師器 高坏	(17.5)	—	(4.3)		39	土師器 甕	16.5	—	(15.6)	
6	土師器 高坏	19.7	—	(6.0)		40	土師器 甕	(12.0)	—	(4.9)	
7	土師器 高坏	19.6	—	(5.2)		41	土師器 高坏	17.5	—	(5.8)	
8	土師器 高坏	18.8	—	(6.0)		42	土師器 甕	(12.7)	—	(5.7)	
9	土師器 高坏	(18.2)	—	(5.3)		43	土師器 甕	19.1	—	7.5	
10	土師器 総合形土器	(17.3)	—	(7.3)	鉢形	44	土師器 甕	—	—	(6.6)	椀形土器
11	土師器 高坏	—	(13.2)	(3.8)		45	土師器 甕	(21.8)	—	(7.9)	
12	土師器 高坏	—	(14.4)	(8.5)		46	土師器 甕	(17.4)	—	(17.1)	
13	土師器 高坏	—	13.9	(9.0)		47	土師器 甕	—	—	(27.6)	
14	土師器 鉢	(14.0)	3.6	(7.8)		48	土師器 小型甕	9.6	(4.9)	(11.4)	
15	土師器 鉢	(13.0)	—	6.7		49	土師器 小型甕	13.6	4.8	16.9	
16	土師器 鉢	(12.8)	—	(6.6)		50	土師器 甕	(11.4)	(6.0)	17.1	
17	土師器 Kop型	10.3	4.0	8.9	支脚形土製品に類似	51	土師器 甕	(13.1)	6.0	(21.3)	
18	土師器 Kop型	9.6	4.3	8.5	支脚形土製品に類似	52	土師器 甕	(17.6)	7.0	(24.6)	
19	土師器 Kop型	8.8	4.8	13.3	支脚形土製品に類似	53	土師器 甕	18.2	6.2	24.7	
20	土師器 Kop型	9.2	5.0	14.2	支脚形土製品に類似	54	土師器 甕	(19.0)	—	(19.4)	
21	土師器 甕	(7.5)	丸底	7.8		55	土師器 甕	(20.9)	—	(17.1)	
22	土師器 甕	9.3	3.3	9.0		56	土師器 甕	(19.3)	—	(27.1)	
23	土師器 甕	—	2.3	(7.3)		57	土師器 甕	(17.3)	—	(17.5)	
24	土師器 甕	—	2.2	(5.9)		58	土師器 甕	(16.0)	—	(15.1)	
25	土師器 甕	9.0	4.0	10.2		59	土師器 甕	—	5.4	—	底部裏書「十」
26	土師器 甕	10.9	—	(10.7)		60	土師器 甕	—	8.2	(2.8)	
27	土師器 甕	(11.5)	4.8	14.8		61	土師器 甕	—	5.4	(3.9)	
28	土師器 甕	(11.4)	—	(8.8)		62	土師器 甕	(15.5)	—	(4.7)	
29	土師器 小型甕	—	4.9	(11.4)		63	土師器 S字甕	(13.4)	—	(16.3)	
30	土師器 甕	8.7	—	(4.5)		64	土師器 台付甕	—	—	(11.5)	
31	土師器 甕	(10.4)	—	(11.2)		65	土師器 台付甕	—	—	(9.6)	(4.9)
32	土師器 甕	—	4.0	(7.2)		66	土師器 甕	(25.9)	(8.9)	31.3	単孔径7.0
33	土師器 甕	(9.3)	3.6	11.2		67	土師器 甕	—	5.2	2.3	単孔径1.8
34	土師器 甕	(13.3)	3.6	14.3							

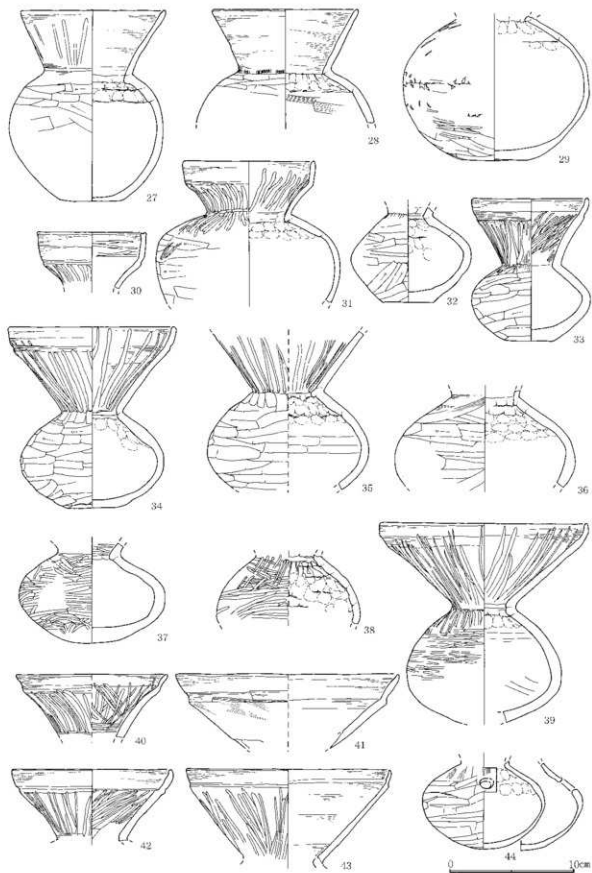


第152図 50号住居跡出土遺物(1)

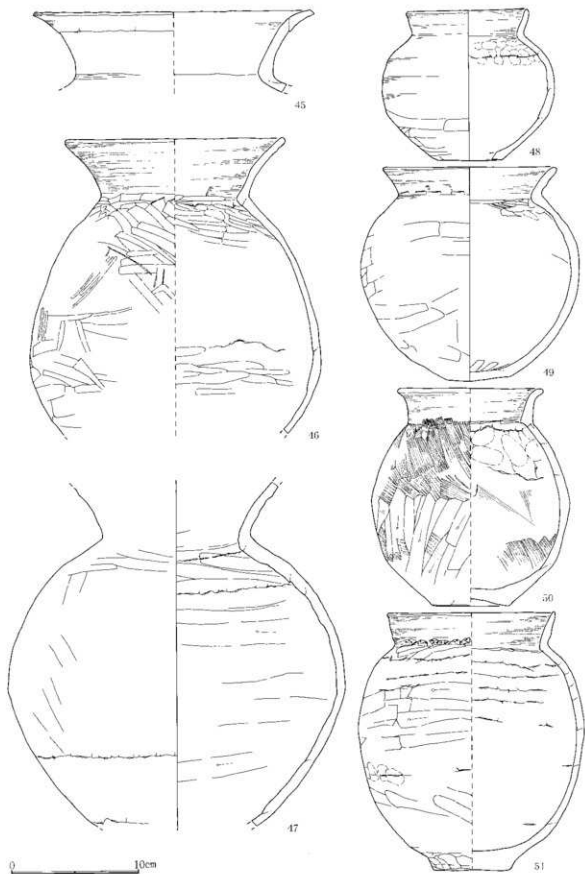


第153図 50号住居跡出土遺物(2)

V. 古代・古墳時代の遺構と遺物

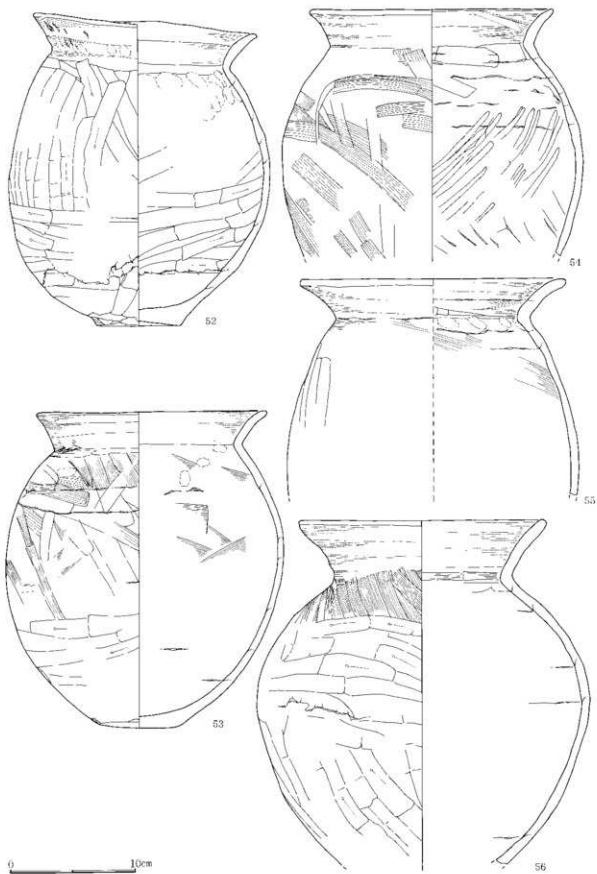


第154図 50号住居跡出土遺物(3)



第155図 50号住居跡出土遺物(4)

V. 古代・古墳時代の遺構と遺物



第156図 50号住居跡出土遺物(5)



第157図 50号住居跡出土遺物(6)

V、古代・古墳時代の遺構と遺物

72号住居跡 (第158・159図、PL.29・57)

位置は、座標値 $X = 595 \sim 602$ ・ $Y = -981 \sim -987$ の範囲にある。

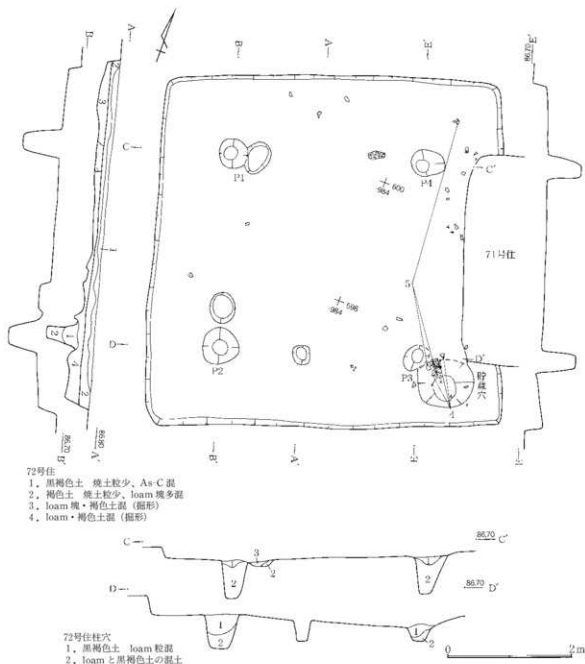
重複は、平安時代71号住居跡と重なる。

平面形状は、長短軸長差の無い方形を呈する。

規模は、軸長5.5～5.6mである。壁高は、5cm足らずで浅い堀形である。床面積は29m²を有する。

竈は検出されていないが71号住居跡と重複・消失した北東面壁線に付設されていたと考えられる。貯蔵穴との位置関係からもその可能性は高く、主軸方位はN-68°-Eを示そう。

貯蔵穴は南東隅部にあり、径90×80cm・深さ40cmの楕円形・すり鉢状を呈する。

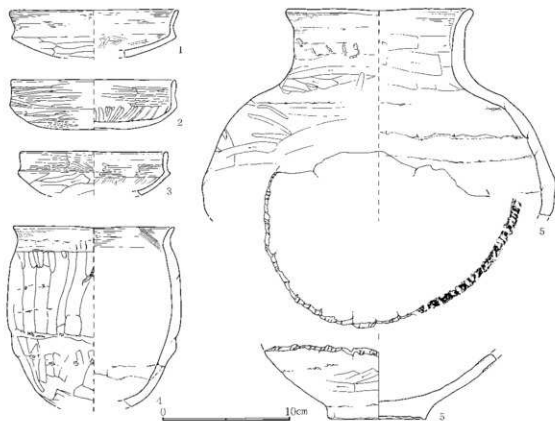


柱穴は4穴が検出され、径40～50cm・深さ45～60cmの掘形をもつ。柱間寸法は、P1・P2とP2・P3が3.1m、P3・P4とP1・P4が3.0mの等間である。

出土遺物は土師器環・甕など少量である。環(1～3)は須恵器環蓋・身の模倣形態と思われる。(1)は体部の変換部が鋭稜をなし口縁部は外反して開き気味。内外面に寛磨きを施す。浅黄橙色で細土。(2)は底面が平らかで口縁部は直立する。内外面寛磨き。浅黄橙色で細土。(3)はやや小振りて環身形態になろうか受け部比較的明瞭で口縁部は内傾気味に直立。内外面寛磨き、黒褐色顔料を塗布する。胎土は明褐色で細土。小型甕(4)は張りの少ない胴部に小さく外傾する口縁部。胴部は縦位の、腰部は斜位の寛削り。橙色で細土。壺(5)は同一体になろう。作りはやや粗雑。頸部は直立し口縁部が小さく外傾する。肩部から強く張り、球脚に近く小径な底部に至ると思われる。胴下半部位で一上周端面に刻み目を入れてある。上位からかかる重圧に下半部の定立が必要であり、一旦半乾燥状態にしたため上位部位粘土との接着を確実にするための方策であろう。また、接合接着面の下位幅広く表裏面に薄く延ばして塗布した粘土膜が観察される。胴部弱めの寛削り後疎間に寛磨きを施す。被熱が顕著で表裏の器面が荒い。橙色を呈し細砂混。

72号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器 環	13.4	—	(3.9)		4	土師器 甕	12.6	—	(14.3)	
2	土師器 環	13.0	—	3.9		5	土師器 壺	14.8	7.7	(28.0)	接合痕顕著
3	土師器 環	11.6	—	3.4	黒褐色塗布か						



第159図 72号住居跡出土遺物

V. 古代・古墳時代の遺構と遺物

80号住居跡 (第160~162図、PL.30・57~59)

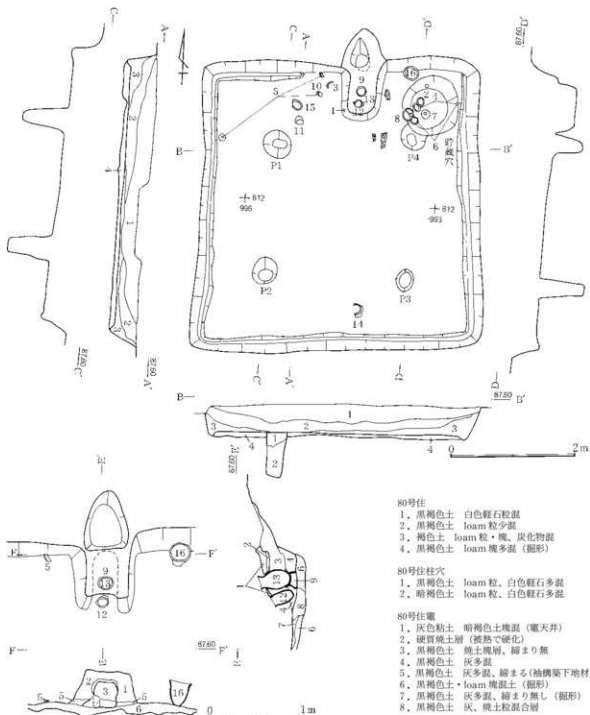
位置は、座標値X=609~614・Y=-992~-996の範囲にある。

平面形状は、長短軸長差のない整った方形を呈する。

規模は、軸長4.5mで、掘形は深く壁高40cmを測る。床面積は16.0㎡を有する。

主軸方位は、N-3°-Wを示す。

埋土は大別3層からなり、緩いすり鉢状の埋没常態を示し、自然堆積であろう。



- 80号住居
1. 黒褐色土 白色軽石多混
 2. 黒褐色土 loam 粒少混
 3. 褐色土 loam 粒・塊、灰化物混
 4. 黒褐色土 loam 塊多混 (掘形)
- 80号住居柱穴
1. 黒褐色土 loam 粒、白色軽石多混
 2. 暗褐色土 loam 粒、白色軽石多混
- 80号住居
1. 灰色粘土 暗褐色土堆積 (竈天井)
 2. 硬質黄土層 (竈熱で硬化)
 3. 風褐色土 粘土堆積層、締まり無し
 4. 黒褐色土 灰多混
 5. 黒褐色土 灰多混、締まる (袖構築下地材)
 6. 黒褐色土・loam 塊混土 (掘形)
 7. 黒褐色土 灰多混、締まり無し (掘形)
 8. 黒褐色土 灰、礫土粒混合層

第160図 80号住居跡

竈は北壁にありわずか東に偏って付設される。煙道部は壁線を大きく掘り込むが、本来は狭長だったとも考えられる。竈本体は天井部の崩落もなく、極めて良好な形で遺存する。竈内には2個の長胴甕を縦列に設置した状態で検出されている。しかし、2個の甕のうち奥部の甕にのみ支脚が伴い、手前の甕の設置位置からは焚き口部を塞ぐことになることから、常態は単独設置の可能性が高い。竈の形態は方形台状で、壁線より約60cm突出し、高さは30cmあまり、上縁幅40cm・下縁70cmを測る。前面焚き口は幅30cm・高さ20cmのarch状に開口する。構築材は灰色粘土を主材とし、天井部の層厚は10cm、袖部の厚みは15cmほどである。煙道部長さ約50cm、傾斜角度は60度になる。

貯蔵穴は竈の右手、北東隅にある。径90cm・深さ30cmの円形を呈する。

柱穴は、4穴が検出され、径35~50cm・深さ45~70cmの掘形をもつ。柱間寸法はP1・P2とP1・P4が2.1m、P2・P3とP3・P4は2.2mをそれぞれ測る。

壁下溝は、竈周辺をのぞき、各壁下に巡る。幅8~10cm・深さ8cm前後を測る。

遺物は竈内および貯蔵穴内に多く出土し、土師器環・高坏・鉢・甕・甔などがある。環(1~8)はいずれも須恵器環の模倣形である。(1)は口縁部が直立外反する環蓋模倣にならうか。橙で細土。坏身形(2~6)は内外面とも荒磨きを施す。浅黄橙色の胎土で細土、黒褐色の顔料を塗布する。(2)は扁平な体部で(6)は深目な体部である。(7~8)はやや大振りして(7)は口縁部が強く内屈する。荒磨き調整が無く、暗赤褐色で黒褐色顔料を塗布する。細土。高坏(9)も須恵器有蓋高坏模倣である。竈内検出の甕(12)の転用支脚として倒立で出土した。坏部内外面・脚外面に荒磨きを施し、脚には縦長な三角透かしを三方に配する。浅黄橙色で細土。鉢(10・11)は作りが粗い。内外面に紐作り痕が多少に残り、荒い荒磨で調整を施す。(10)は口縁部内傾して立ち胴部小さく膨らむ。内面を強い指頭痕の横位調整。橙で粗砂流多混。(11)は口縁部小さく外反し広めの底部。鈍灰黄色で比較的細土。甕(12・13)は長胴形で、竈内に縦列設置の状態で検出された。胴部は縦位の、腰部は斜位の荒磨きを施す。(12)は短い口縁部、(13)の口縁部は高く、ともに淡橙色で砂粒多混。(14)は球胴形の甕。浅黄橙色で砂粒多混。甔(15)は鉢形の小型品。丸みのある腰部で、底部単孔。口縁部小さく外反。作りはやや粗略で外面胴部上半縦位、腰部斜位荒磨り。内面横位の荒磨で。浅黄色で細土。(16)は大型で底部大径の単孔甔。寸胴で口縁部小さく外反して開く。内外面縦位の荒磨き。浅黄橙色で細土。

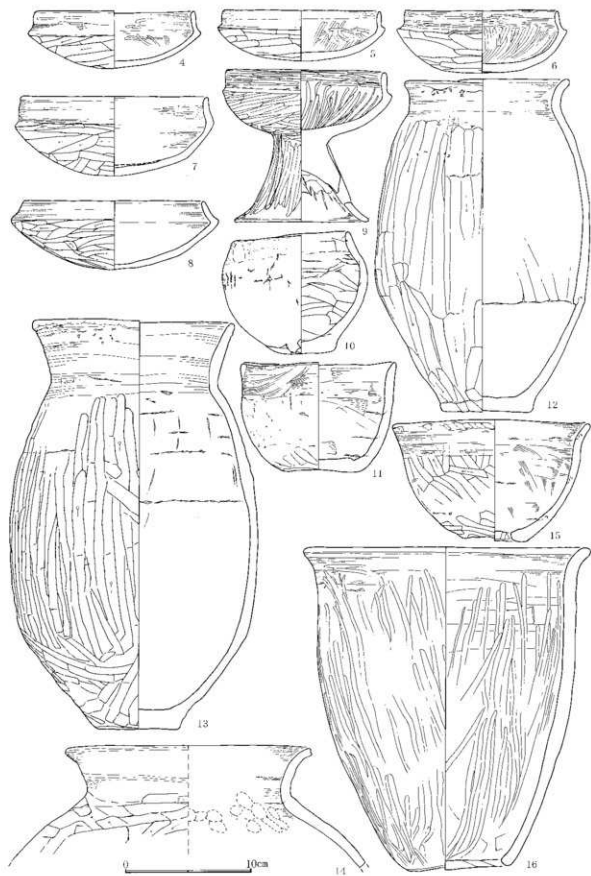
80号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器 環	13.0	—	4.4		9	土師器 高坏	11.6	10.6	12.0	
2	土師器 環	12.5	—	3.4	黒褐色塗布か	10	土師器 鉢	9.2	5.5	9.7	
3	土師器 環	11.6	—	4.9	黒褐色塗布か	11	土師器 鉢	12.3	5.9	8.7	
4	土師器 環	12.6	—	4.6	黒褐色塗布か	12	土師器 甕	12.9	7.2	26.1	甔脚と置き
5	土師器 環	12.4	—	4.0	黒褐色塗布か	13	土師器 甕	16.0	6.8	31.1	甔脚と置き
6	土師器 環	12.0	—	4.9	黒褐色塗布か	14	土師器 甕	19.4	—	(9.3)	
7	土師器 環	14.8	—	6.2	黒褐色塗布か	15	土師器 甔	15.5	5.1	9.6	単孔径 3.0
8	土師器 環	14.3	—	5.4		16	土師器 甔	22.7	8.2	22.5	単孔径 6.5



第161図 80号住居跡出土遺物(1)

V. 古代・古墳時代の遺構と遺物



第162図 80号住居跡出土遺物(2)

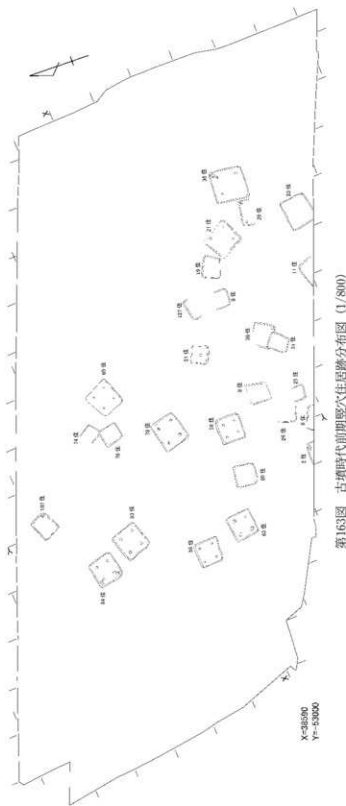
3 古墳時代前期の竪穴住居跡とその出土遺物

古墳時代前期として検出した竪穴住居跡は28軒からなる。集落景観としては、数軒の竪穴住居跡が最小単位として半円に近い配置状態をつくるようである。それらの連続性をもって全体的には台地西縁から南端部へ広がる様相を見せている（第163図）。

住居跡の形状または形態は正方形と長方形がある。古墳前期以降の竪穴住居跡では竈の設置が通例となり、竈を基準にすると長方形形態は横長型と縦長型とに分かたれる場合がある（当遺跡では奈良平安期の住居跡に顕著であるが、古墳中後期にかけては正方形と縦長型で横長型の存否は確認の必要がある）。竈出現以前においては当該期竪穴住居跡でその様な分類がいかにか適用されるかであるがここでは、火処としては竈とある程度同機能施設である炉跡にならぬかの指標を求めようとした。

炉跡は総じて住居跡の中央部分から多少とも略北（北東）側に偏り、それが当該期における炉跡位置の定常的傾向であると思われる。この北偏炉跡を基準とし炉跡を北に対面した場合、軸長差のない正方形（A群）にたいし、長方形住居の形態は東西に長軸をなす横長型（B群）と南北に長軸をもつ縦長型（C群）に3分類される。A群正方形は56号・60号・63号・66号・83号・84号住居跡、B群横長型は19号・23号・30号・51号・69号・79号・107号住居跡が、C群縦長型は8号・9号・21号・25号・31号・38号・76号住居跡がそれぞれに該当する（その他、分類型不明が6軒ある）。

平面的な住居規模は、おおよそ、大・中・小に分かつ。計測可能なもので床面積最大は38号住居跡の46.1㎡を筆頭に30



V、古代・古墳時代の遺構と遺物

m以上の大型が21号・23号・63号・69号・79号・83号・84号住居跡の8軒である。床面積20～30m²の中型が30号・56号・60号・66号住居跡の4軒だが、計測できない5軒がこれに該当する可能性が高く計9軒になる。20m²以下の小型住居跡は8号・9号・19号・31号・51号・76号・107号住居跡の7軒だがこれも計測不能なものを加算すれば14軒になる。

古墳前期におけるこれらの分類項目もまたいかなる意味付けできるのかは、前節に述べた古墳中～後期段階と同様に曖昧のままである。しかし、塚下遺跡における集落変遷の理解において、同位視点で後代への継続性を考える必要があろう。ここでは、前節と同様住居跡規模の大・中・小が階層の分化を示し、異なる住居規模の組み合わせによって単位集団を構成すると推定する。そして、単位集団の抽出は跡位置から分類された正方形・横長型・縦長型の平面形態類似群に求め、A群・B群・C群を設定する。この3群の設定に妥当性があるとすれば集落構造及び変遷にどのように関わってくるのであろうか。ここで問題になるのはA群とした単位である。住居跡は大・中規模だけで構成されており小規模住居跡は編入されず、このことを重視すれば、A群は、B・C群よりは階層構成の未分明段階を示すとも考えられる。従って、A群は現状塚下遺跡における古墳前期の集落変遷過程においてはその形成期第一段階としての集落構造・景観を示しているといえよう。なお、重複などからの検証例に乏しいが、B群30号住居跡とC群31号住居跡の切り合いによってB群からC群へと変遷すると考えられる（第164図）。

竪穴住居跡出土の遺物は、古墳前期に一般的な土器を中心にしている。主な土器器種は高坏、小型埴、見込み無孔器台、鉢、二重口縁・素口縁壺、甕、単口縁・S字口縁台付甕、などからなる。出土状況は総じて散漫・少量の感があり、住居廃棄に際しての家財始末の徹底さを思わせる。強いては、小型埴、器台、高坏、壺類の他、甕類を多く出土する63号住居跡が目立つ。また、二重口縁壺を出土する19号・21号住居跡などもある。希少遺物としては、管玉が11号・38号（蛇紋岩）・84号住居跡（緑色細粒凝灰岩）より各1個が出土する。また、砥石は11号（定型で珪質頁岩）・60号・79号（定型で流紋岩）・83号（未加工自然石）・84号住居跡（粗粒輝石安山岩）から、そして手捏ね土器は38号・63号住居跡に検出されている。

遺構（住居跡）の表層的な現象（平面形態・床面積など）による分類は偶然性と恣意性に左右され、飛躍の大きなものになっている事実は認めざるを得ない。これらについての検証または論証の意義は、対象とすべき事物が時間・地域の共通性のもとに一般的な事実として認識されるか否かにかかっている。また、土器等の型式変遷や土器編年などには速効・即断的な共時性・変遷観の把握に大きな魅力ではあるが、古墳前期の時代相を巡る論議は当該群馬の地にあつて多岐でなお、錯綜を極めていっているといつてよい。土器を中心とする遺物相も違わず複雑であり、土器型式論や編年観がいまだ有意な検証手段としての信頼を確立しているとはいえないようである。本書では遺物の分析的視点を全く放棄したような状態であるが、編者の不明・不確かな土器編年観による同定は收拾のつかない場面に陥る危険性が高い。ここでは果たせるならば何時か、各時代・時期とも遺構分類と遺物分析の相互的検証の試行を望むに止まる。



第164図 古墳時代前期集落の変遷

2号住居跡 (第165~167図、PL.31・59)

位置は、座標値 $X = 563 \sim 565$ ・ $Y = -004 \sim -009$ の範囲にあり、南側のほとんどが調査区域外にかかり、北壁と東壁線の僅かな部分が明らかになったにすぎない。

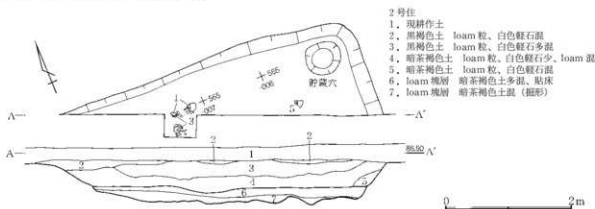
平面形状は、略方形を呈すると考えられるが詳細は不明である。北壁線4.7m・東壁線1.56mの範囲が検出され、壁高は50cmを測り、深い掘形をもつ。

北壁線軸方位は、 $N-97^{\circ}-E$ を示す。

埋土は、大別2層で loam 粒を含む黒・暗褐色土を主体とし、比較的単味な土質で自然埋没になろう。

北東隅部に貯蔵穴と思われる円形土坑が検出されている。径60×50cm・深さ40cmである。

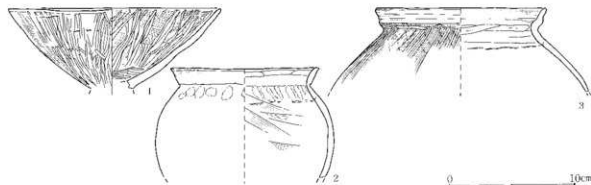
遺物は少量だが、高坏・小型甕・S字口縁台付甕がある。高坏坏部(1)は深く小径な見込み部から直線状で大きく開く。外面縁位の細蜜篋磨き、内面横位櫛目後に縁位の細密単位篋磨き。浅黄橙を呈し、細砂多混。小型甕(2)は、短い口縁部で断面矩形をなす。内面縁部は篋削り。鈍褐色と呈し、細砂多混。S字口縁台付甕(3・4)は上半部。(4)は肩部に横線が巡る。赤橙色部が多い。細砂多混。(5・6)はS字状口縁台付甕台部。胴部見込み部および台部内面見込み部には砂粒土を塗布する。(5)は胴部との接着面を棒状工具で菊花紋状に凹凸を作る。橙色を呈し、細砂多混。



第165図 2号住居跡

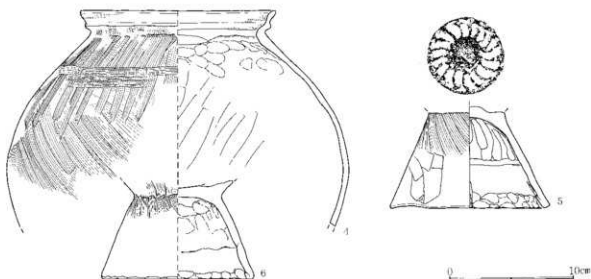
2号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器 高坏	(16.8)	—	(6.3)		4	土師器 S字甕	(15.4)	—	(17.0)	横線あり
2	土師器 単口縁甕	(11.6)	—	(9.1)	台付きか	5	土師器 S字甕台部	—	12.6	(8.0)	
3	土師器 S字甕	(13.4)	—	(6.5)		6	土師器 S字甕台部	—	12.0)	(7.8)	



第166図 2号住居跡出土遺物(1)

V. 古代・古墳時代の遺構と遺物



第167図 2号住居跡出土遺物(2)

6号住居跡 (第168図、PL.31)

位置は、座標値 $X=560\sim563 \cdot Y=-996\sim-001$ の範囲にあり西側に近接する2号住居跡同様に南側の大半は調査区域外にかかる。検出部分は北壁線と東・西壁線の極一部にすぎない。また、南北走る攪乱溝が東西に分断する。

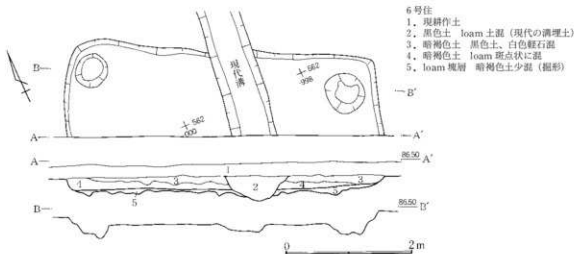
平面形状は、方形になろう。

規模は、北壁線長4.9m、壁高22cmを測る。

北壁の軸線方位は $N-62^{\circ}-W$ を示す。

埋土は大別2層からなり、粘性のある暗褐色土を主体に、混入物の少ない単味な土質で自然堆積になろう。北東および北西の隅にそれぞれ径50~60cm・深さ20~30cmの円形土坑状の落ち込みが検出されている。両者は対となる位置にあり、柱穴など上屋構造に関係するとも考えられるが底面の掘形がやや不安定である。

出土遺物は少なく、時代認識が難しいが小片ながら古墳時代前期の甕片などがある。また、遺構埋土は古墳前期の遺構にまみ見られるやや粘性のある暗褐色土を主体にする等々から当該期の遺構とした。



第168図 6号住居跡

8号住居跡 (第169・170図、PL.31)

位置は、座標値 $X = 568 \sim 572$ ・ $Y = -987 \sim -911$ の範囲にある。南縁は東西走する覆乱溝に、北縁は削平によって壁線は消失している。

重複は、南側で2号掘立柱建物跡の北辺柱筋と重なり、これよりも古い所産と考えられる。

平面形状は、上述のように壁線の消失により定かではないが、大略形状を呈しよう。

規模は、東西軸長で約4.3m、壁高は10cm足らずの浅い掘形である。床面積は $15.6 + \alpha$ m^2 を有する。

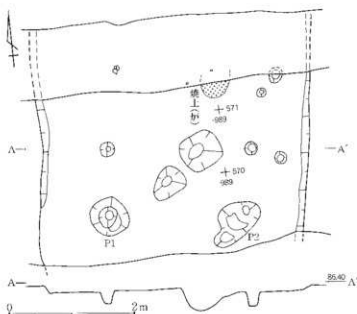
東壁線の方位は $N-7^{\circ}-E$ を示す。

炉跡は北東部に若干偏って位置するが、大半は削平され床面に小範囲な被然面として残るのみである。

柱穴に想定される穴は $P1$ ・ $P2$ である。径・深さ20cmあまりの小さな掘形で、柱間寸法は2.3mを測る。出土遺物は少量で、S字口縁甕(1)の台部がある。内面見込み部に砂粒土を塗布する。鈍橙色。砂粒多混底径9cm・現高6.7cm。



第170図 8号住居跡出土遺物



第169図 8号住居跡

9号住居跡 (第171・172図、PL.31)

位置は、座標値 $X = 568 \sim 571$ ・ $Y = -965 \sim -968$ の範囲にある。

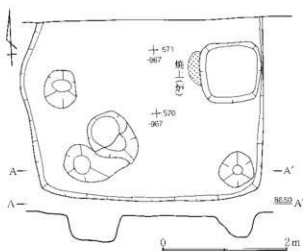
平面形状は、略方形を呈すると思われるが、本調査前の試掘溝によるためか、北縁は削平されている。

規模は、東西長約3.7mで南北軸方向は2.9mの範囲まで確認している。壁高といえるほどの掘形は見られず辛うじてその痕跡をたどることができる。

床面積は、 $10.6 + \alpha$ m^2 を有する。

炉跡と思われる焼土痕は東に偏った位置に検出されているが、後世の土坑により1/2が消失している。

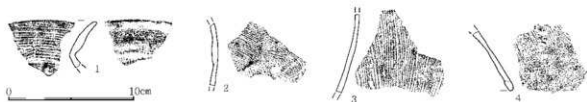
その他、南東・南西隅・西縁に小穴が検出されているが当跡に伴うかは不明である。南西隅部の1穴は最上面に貼り床状の埋土が認められた。



第171図 9号住居跡

V、古代・古墳時代の遺構と遺物

出土遺物は微量である。埋土中の遺物が多く当跡の帰属年代の認定に苦慮するが、少ないながら縄文時代と古墳時代前期の土器片が認められた。わずかに残された遺構の埋土と地床炉の形態から古墳時代前期のものとした。(1・2)は単口縁甕の口縁部と胴部片、(3・4)はS字口縁台付甕腰部と台部である。



第172図 9号住居跡出土遺物

11号住居跡 (第173図、PL.59)

位置は、座標値 $X=548\sim 551$ ・ $Y=-966\sim -972$ の範囲にある。南側の大半は調査区域外にかり、北壁と東壁の一部を検出したにとどまるが、平面形状は略方形を呈しよう。北壁線約3.5m、東壁線約3mまで確認した。壁高は約50cmで比較的深い掘形を有する。

重複は、南・北に平安時代に属する12号住居跡・17号住居跡と重なる。

東壁線の方位は、 $N-20^{\circ}-W$ を示す。

埋土は、大別5層からなり、混入物の少ない暗褐色土を主とする自然堆積になるよう。

炉跡などの諸施設は検出されないが、北東部床面に柱穴であろう1穴を検出した。径70×80cm、深さ70cmを測る。また、東壁には壁下溝が巡る。

出土遺物は埴(小型丸底土器)・高坏片・台付甕片の他管玉1点がある。埴(1)は扁平弱小な体部で口縁部は大きく直線的に開く。口縁部内外面横位の撫で。橙で細土。(2)は単口縁台付き甕の台部になるよう。小片である。内外面とも粗い撫で目調整。鈍黄褐色で祖土。砥石(3)は定型砥で珪質頁岩製。混入品であろう。(4)は蛇紋岩製の管玉。

11号住居跡出土遺物計測表

番号	部 種	口径	底径	器高	備 考	番号	部 種	口径	底径	器高	備 考
1	土師部 埴	12.0		(5.3)		3	砥石 定型	長 8.3	幅 3.1	厚 1.3	珪質頁岩
2	土師部 甕台部	10.0		(5.6)	単口縁甕	4	管玉	長 2.0	径 0.6	孔径0.2	重1.42g 蛇紋岩



第173図 11号住居跡出土遺物

19号住居跡 (第174～176図、PL.31・60)

位置は、座標値 $X=567\sim 572$ ・ $Y=-956\sim -962$ の範囲にあり、被火住居跡である。

重複は、歴史時代に属すると思われる大形掘形をもつ14号掘立柱建物跡と重なり床面はかなり破壊を受けている。また当跡掘形面より縄文中期に属する小型深鉢が検出されていることから、形状検出には至らなかったが縄文時代の遺構との重複も考えられる。

平面形状は、北西～南東軸方向に長軸をもつ方形を呈する。

規模は、長軸4.8m・短軸4.0mで、壁高は約10cmと浅い掘形である。床面積は16.2㎡を有する。

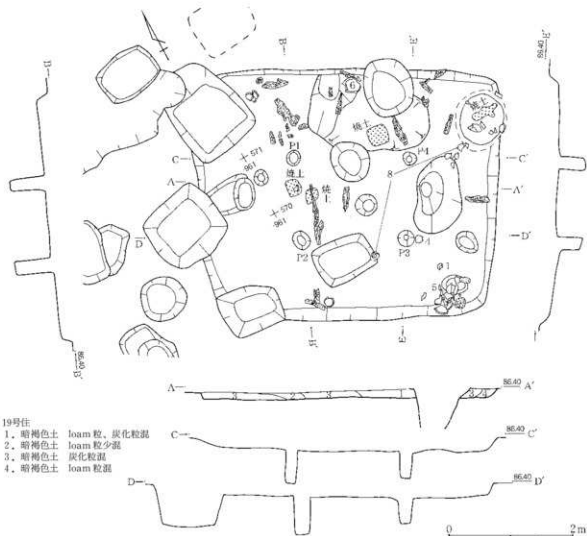
長軸方位は、N-58°-Wを示す。

埋土は薄く、床面または薄層中に当跡上層構造材と思われる炭化材が検出されている。

床面中央部の北および西側で3箇所の小焼土面が確認されているが、炉跡としての所見はない。

柱穴は4穴が検出され、径20～30cm・深さ40～55cmの掘形をもつ。柱間寸法はP1・P2が1.3m、P2・P3が1.7m、P3・P4は1.2m、P1・P4は1.8mを測る。

出土遺物には、埴・高坏・鉢・壺・甕などがあり、南東部隅に集中して検出されている。埴(小型丸底土器)(1)は丸底。体部から底部は光沢を生じるような細幅な篋削り。鈍黄褐色。細土。高坏(2)は浅い皿型の坏部で無孔器台の可能性ある。篋磨きの脚部は3孔を穿つ。坏部内面吸炭。黄褐色。細土。鉢(3)は小さな高台を作る。作りやや粗い。深い体部から口縁部は短く外傾して端部は尖る。体部上半は粗目の縦位掻き目。腰部強い指撫で。鈍黄橙。細土。壺(4～6)。(4)は腰部に張り落ちのない整った偏半球胴で、細密な縦位篋磨き。内面横位掻き目。小さく深い凹底部。明黄褐色。細土。(5)は二段口縁で下段は僅かに内傾して立ち、



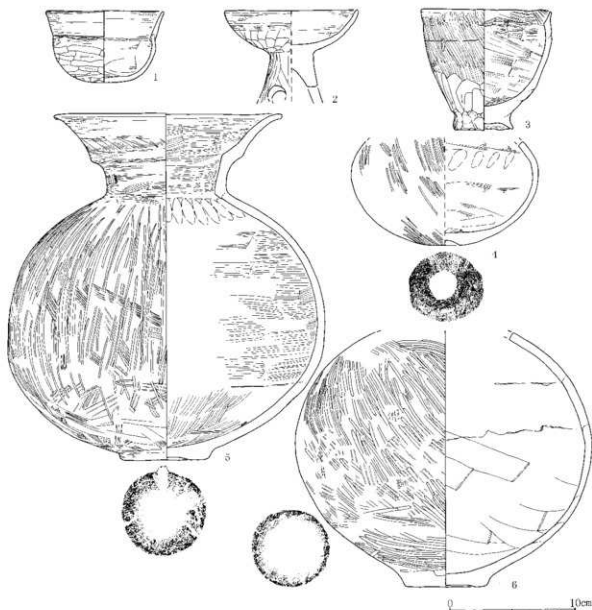
第174図 19号住居跡

V、古代・古墳時代の遺構と遺物

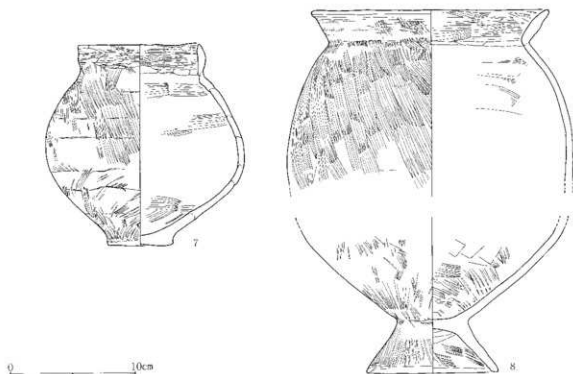
上段は大きく外反して開く。(6)も同形態か。胴部は整った球胴を呈し、斜位掻き目後縦位寛磨き。底部は厚く凹状。鈍黄橙色。細土。甕(7)は作りの粗い小型甕。口縁部が短く直立する。外面口縁部横位・胴部縦位、内面横位の粗目掻き目調整。胴部中位以下に被熱痕。黄橙色。粗砂混。単口縁台付甕(8)は、肥厚する短い口縁部が「く」の字状に開く。胴部は球胴に強く張り、縦位の粗掻き目を施す。内面口縁部は横位粗掻き目、胴部は横位の寛撫で。鈍黄橙色。砂粒多混。

19号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器 埴	9.3	—	5.6		5	土師器 二段口縁甕	18.0	6.8	27.3	
2	土師器 高坏	(10.5)	—	(7.1)		6	土師器 甕	—	6.4	(20.0)	
3	土師器 小型鉢	10.3	4.7	9.5		7	土師器 甕	9.7	5.2	15.8	
4	土師器 甕	—	2.2	(8.2)	底部小深く凹む	8	土師器 台付甕	18.7	10.4	(25.8)	



第175図 19号住居跡出土遺物(1)



第176図 19号住居跡出土遺物(2)

21号住居跡 (第177・178図、PL.32・60・61)

位置は、座標値 $X = 511 \sim 558$ ・ $Y = -950 \sim -958$ の範囲にある。

重複は、南側と北側とともに古墳時代中期の16号・20号住居跡と重なる。また中央部には幅広い攪乱溝が東西走り、主要床面の消失が広範に及ぶ。

平面形状は上述のように重複・攪乱などで判然としないが略方形を呈しよう。

規模は形状と同様、推定で軸長6.5mほどになろう。壁高は20cmを測るが、床下の掘形は深く約30cmになる。床面積は35.0m²ほどになろう。

軸方位は、残りの良い南壁線でおおよそ $N-70^{\circ}-E$ を示す。

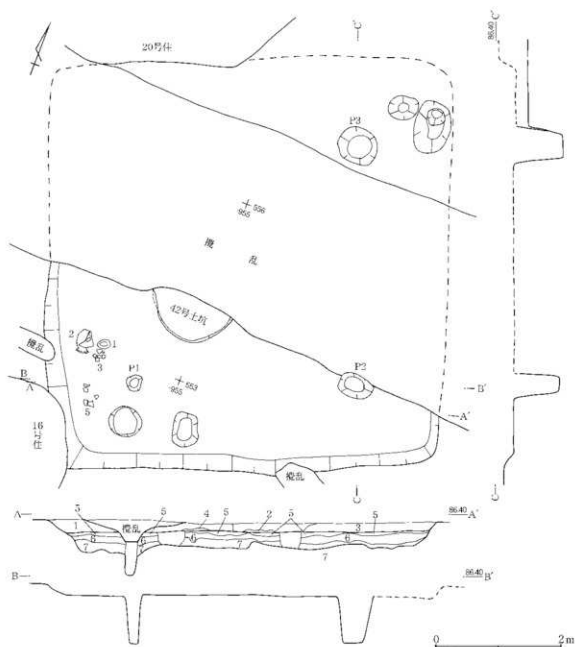
埋土は大別1層で、焼土粒や炭化物粒を不均一に混入する。また床面直上には炭化物も遺存することから、当跡は被火住居跡の可能性が高い。

柱穴は3穴が検出されている。1穴は攪乱溝で消失する。径40~60cm・深さ70cm前後の掘形をもつ。柱間寸法は、 $P1 \cdot P2$ が3.5m、 $P2 \cdot P3$ が3.7mを測る。なお跡跡は検出されていないが攪乱溝による消失であろう。

遺物は、南西部隅の床面直上で集中的に出土し、高坏・壺・甕などがある。高坏の坏部(1)はやや小振りて直線的に開く。内外面には細密に縦位寛磨きを施す。鈍褐色を呈し、細砂粒多混。二段口縁壺(2)は張りの強い球胴形。口縁部は上下段外反して開き上段部の丈が短い。内外面口頸部には縦位寛磨き。外面肩部に縦位掻き目、以下胴部は篋削りを施す。鈍褐色で砂粒多混。(3・4)は頸部径が比較的小さく、短目の素口縁。胴部は強く張る。(3)は下膨れの形態で薄手の作り。底部は丸底に近いが中心は径2cmほどの凹を作る。外面は篋削り後、内面は掻き目後に斜位ないしは横位寛磨き。光沢を有する。暗褐色を呈し、細土。(4)は球胴である。底部は凸状で中央が凹む砂目底。外面縦位寛削り後縦位寛磨き。内面横位掻き目が顕著。橙色、細土。

V、古代・古墳時代の遺構と遺物

甕(5)は比較的薄手の作り。直立気味の短い口縁部で端部が丸まる。肩張りの卵形で底部はベタ平底になろうか。外面は肩・胴部上・中・下段毎に異なる方向の、内面は斜位に極細目の掻き目。胴部外面全体に煤状附着物。鈍橙色、細土。



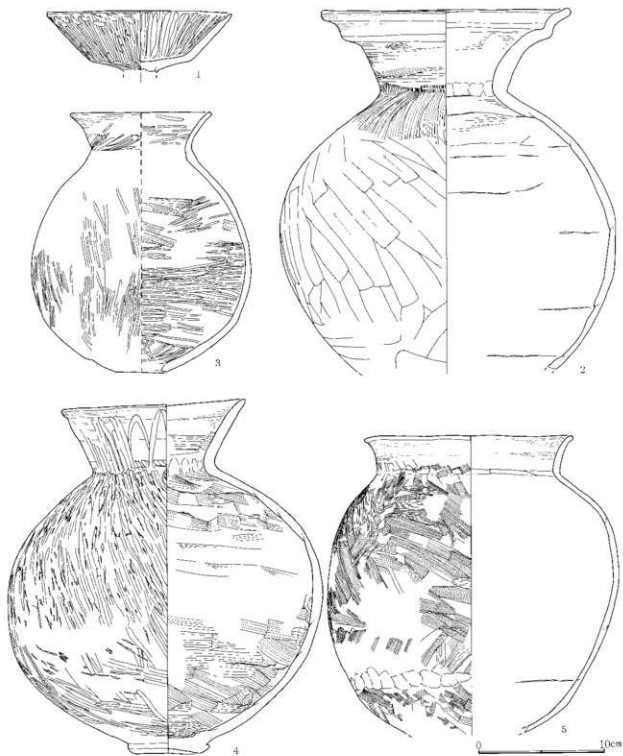
21号住

1. 褐色砂質土 炭化物不均質に泥部分的に焼土混
2. loam主体 褐色土を不均質に混
3. 褐色土 loam粒小多混
4. 炭化物
5. loam小塊主体 黒色土を不均質に多混(掘形)
6. 黒色土主体 loam粒小不均質に少混(掘形)
7. loam主体 黒色土を不均質に少混(掘形)

第177図 21号住居跡

21号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器 高坏	14.6	—	(4.9)		4	土師器 壺	(14.5)	6.4	27.8	砂流で凹む
2	土師器 壺	19.6	—	(28.3)		5	土師器 壺	16.4	—	(23.5)	断面に保灰付着物
3	土師器 壺	(11.0)	(4.0)	(20.5)							



第178図 21号住居跡出土遺物

V、古代・古墳時代の遺構と遺物

23号住居跡 (第179・180図、PL.32・61)

位置は、座標値 $X=543\sim 550$ ・ $Y=-952\sim -959$ の範囲にある。

重複は、南東部で平安時代13号住居跡と重なる。また住居中央には攪乱溝が南北走り、南西隅部は調査区域外にかかる。

平面形状は、東西方向に長軸をもつ方形を呈する。

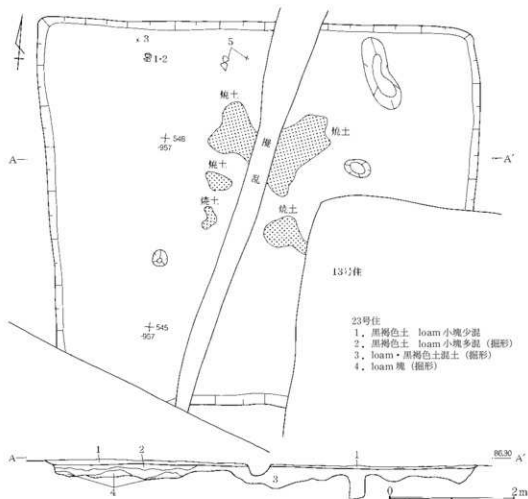
規模は、長軸7.0m・短軸6.1mを測り、壁高は、10cmの浅い掘形である。床面積は約37.5m²を有する。

長軸方位は、 $N-8^{\circ}-W$ を示す。

炉跡は中央やや北寄りに1m強の範囲に炉跡らしき焼土面が検出されている。断ち割り土層からは明瞭な地床焼土層が形成されているようである。範囲・形状から複数の地床炉が近接してあるように思われるが、詳細な炉形や構造に触れた所見は得られていない。また中央部にはこのほかに3箇所ほど、焼土痕検出されているがこれらについての所見はない。

2～3の小穴が見られるが、柱穴として構成するような穴は検出されていない。

遺物は少量、散在的な状態で埋土中からの出土である。(1～3)は小型の高環型であるが坏部無孔の器台になろう。浅い碗形坏部で脚はゆったりと大きく開き、径約1.5cmの3円孔を穿つ。内外面は横位撫で後放射状磨きを施すが不鮮明。外面の下地調整は部分的に掻き目の痕跡が残る。浅黄橙色で細土。(4)は壺底部か。



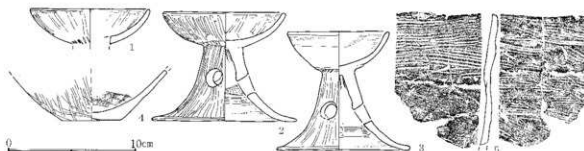
第179図 23号住居跡

3 古墳時代前期の竪穴住居跡とその遺物

器内薄く外面は下方向に向かい寛削り後縦位に寛磨き。内面は短止めの細掻き目。灰白色で比較的細土。(5)は大径の甕 or 鉢か。薄手で粗雑な作り。僅かに張る胴部に外傾する口縁部は幅広く付き、胴部との接合痕顕著。外面横位粗目な寛状掻き目。内面口縁部は横位寛状掻き目。胴部は横位の寛削り。鈍黄橙色を呈し、細土比較的硬い焼き。

23号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器 甕台	9.5	—	(7.7)	坏部無孔	3	土師器 甕台	(7.9)	(10.6)	9.3	坏部無孔
2	土師器 甕台	(9.6)	11.4	13.5	坏部無孔	4	土師器 甕	—	4.6	(3.8)	



第180図 23号住居跡出土遺物

25号住居跡 (第181図、PL.32)

位置は、座標値 $X = 561 \sim 564 \cdot Y = -991 \sim -994$ の範囲にある。

重複は著しく、平安時代3号住居跡・古墳時代中期15号住居跡・さらに古墳前期の26号住居跡と重なり北半はこれによって消失している。

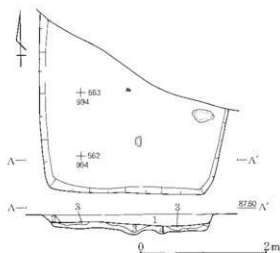
平面形状の全容は不明であるが、南北軸方向に長軸をもつ方形を呈すると思われる。

規模は、南壁線が唯一の完全壁線で2.5mを測り、西壁線は不完全ながら2.8mの範囲まで検出した。壁高は約15cmを測り、浅い掘形である。

埋土は、単味の黒褐色土の単層である。

住居長軸方向である西壁線の方位はほぼ真北を示す。

住居内施設は、灰跡や柱穴等いずれも検出されていない。また、出土遺物に関してほとんど皆無に近く、唯一個平な転石が埋土中に認められたに過ぎない。時代認定には、遺構埋土の土質によっている。



25号住

1. 黒褐色土 loam 大粒少混 不均質
2. 暗褐色土 loam 粒極少混
3. 暗褐色土 loam 粒多混 (掘形)
4. loam 主体 黒褐色土小塊多混 (掘形)

第181図 25号住居跡

V、古代・古墳時代の遺構と遺物

26号住居跡 (第182・183図、PL.32)

位置は、座標値 $X = 564 \sim 569$ ・ $Y = -994 \sim -998$ の範囲にある。

重複は前述25号住居跡との重なりとともに平安・古墳中期の3号・15号住居跡と重畳している。また、北側は東西走する現代攪乱溝によって消失する。

平面形状は著しい切り合いによって不明範囲が広く定め難いが方形を呈しよう。一部検出されている南壁および西壁線からの推察である。大型の住居跡に属しよう。

規模も不明であるが南壁線は約4.5mで、西壁線は3mほどの範囲まで確認できる。壁高は、僅か10cmに満たない。

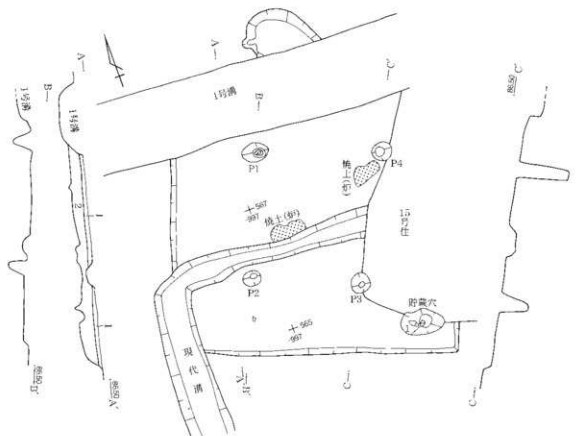
南壁線の方位は $N-70^{\circ}-W$ を示す。

炉跡と思われる焼土面は住居中央部に2箇所検出されている。炉に使用されたような石などの炉材も見られず簡単な地床炉にならうか。長径50~60cmの略楕円形状である。

柱穴は4穴が検出され、上径約30cmの均一的な略円形掘形をもつが、深さはP1の30cmからP4の80cmと差が著しい。柱間寸法はP1・P2と対面P3・P4が2.0mで等間、P2・P3は1.7m、P1・P4が1.9mを測る。

貯蔵穴と思われる落ち込みは南東隅部にある。径70×50cm・深さ25cmの楕円形摺鉢形状である。

遺物は極少量である。貯蔵穴の埋土上面より、大型高環の環部が出土している。高環の環部(1)は外面底辺



26号住
1. 暗褐色土 暗褐色土・loam 粒の不均質な混土層
2. loam 主体 黒色土塊多混 (掘形)

第182図 26号住居跡

3 古墳時代前期の竪穴住居跡とその遺物

に小さく腰部を作り、直線的に開く。脚径は坏部径より小さくなる形態になろう。外面口縁部横位撫で後中位に下方から弱い笠無で上げ。腰部は横位の笕削り。下地に掻き目が見える。内面は横位撫で後放射状笕磨きを施すが不鮮明。浅黄色を呈し細土。口径21.8cm・底径8cm・器高6.5cm。



第183図 26号住居跡出土遺物

28号住居跡 (第184図、PL.32)

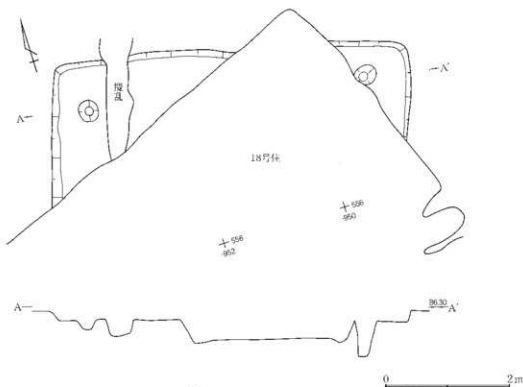
位置は、座標値 $X=556\sim 559$ ・ $Y=-948\sim -954$ の範囲にある。

重複は、古墳時代中期の18号住居跡と重なる。大半は18号住居跡により削平され、遺存は北壁線と東・西壁線の一部が残る小範囲に過ぎない。

平面形状は方形を呈すると思われる。北壁線長は5.7mを測る。壁高は約20cmである。

柱穴と思われる小穴は北西・北東部に検出される。径30cmの円形の掘形をもつが、深さは北東の穴が50cmに対し、北西のそれは20cmに満たず両者を同列に扱うかは疑問である。

出土遺物は無く時代認定に確証を欠くが、粘性のある黒褐色土など埋土の土質から当該期とした。



第184図 28号住居跡

30号住居跡 (第185・186図、PL.32・61)

位置は、座標値 $X=561\sim 566$ ・ $Y=-975\sim -981$ の範囲にある。

重複は著しく、平安時代4号住居跡・古墳時代中期4号・31号住居跡および3号掘立柱建物跡と重なる。また、北縁は東西走る掘乱溝によって消失する。

平面形状は、北西～南東方向に長軸をもつ方形を呈する。

V、古代・古墳時代の遺構と遺物

規模は、長軸5.1m・短軸4.6mを測り、本来の掘形が浅いためか、床面の検出が確認の契機になり壁の立ち上がりはほとんど遺存していない。床面積はおよそ20.7㎡になろう。

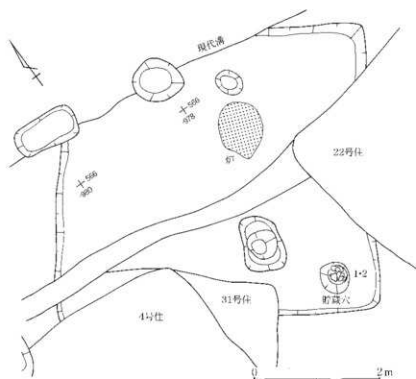
長軸方位は、N-59°-Wを示す。

炉跡は、中央やや北東部寄りにある。100×70cmの楕円形の焼土面として検出され、地床炉であろう。

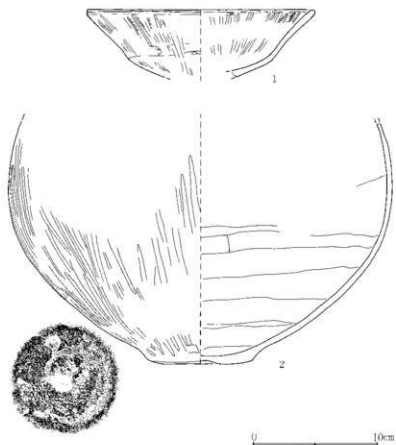
貯蔵穴と考えられる穴は南東隅部にあり、径60×50cm・深さ70cmの円形を呈する。

その他柱穴などは検出されない。

遺物は少量で、貯蔵穴の底面近くに壺の下半および高坏坏部小片が検出されている。高坏坏部(1)は半部で小さく屈して上半は外反気味に開く。口唇部内・外縁に細凹線巡る。内外面は縦位の細密磨き。径18cm・器高(5.5)cm。黄橙色を呈し、細砂混。壺下半部(2)は器内薄く、強く張る球胴形をなす。底部は中心が凹み小さな上げ底になっている。底部砂底状。内面見込み部に砂粒土を塗布する。(S字口縁台付甕の見込み部の処理に類似)。外面縦位寛削り後縦位磨き。内面横位寛撫で。胴径30cm・底径8cm・器高(19)cm。黄橙色を呈し、細砂混。



第185図 30号住居跡



第186図 30号住居跡出土遺物

31号住居跡 (第187図)

位置は、座標値 $X = 560 \sim 564$ ・ $Y = -978 \sim -983$ の範囲にある。

重複は平安時代4号住居跡・同3号掘立柱建物跡・古墳時代前期30号住居跡と重なる。同時代に属する30号住居跡との前後関係は不明である。また、掘形の深い4号住居跡によって中央部床面も大半は消失しており、形状を知りうる壁線を窺うにとどまる。

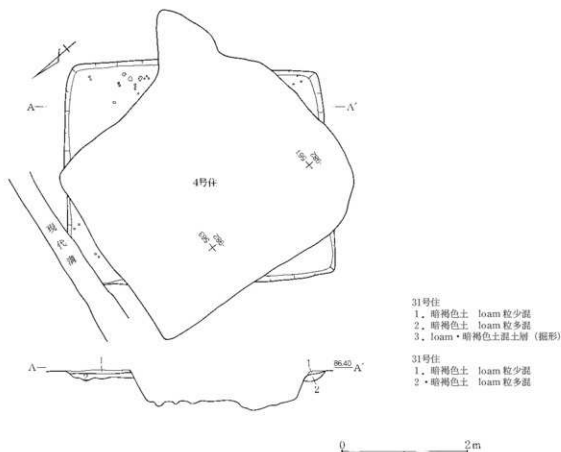
平面形状は、北東～南西方向に長軸をもつ方形を呈する。

規模は長軸4.1m、短軸3.5mで、壁高は僅か5cm前後の浅い掘形である。床面積は13.1㎡ほどになる。

長軸方位は $N-42^{\circ}-E$ を示す。

住居内施設には竪跡・柱穴などは検出されていない。

遺物は古墳時代前期に属すると思われる斐などの小細片が得られたのみである。



第187図 31号住居跡

38号住居跡 (第188～190図、PL.33・61)

位置は、座標値 $X = 555 \sim 561$ ・ $Y = -940 \sim -948$ の範囲にある。

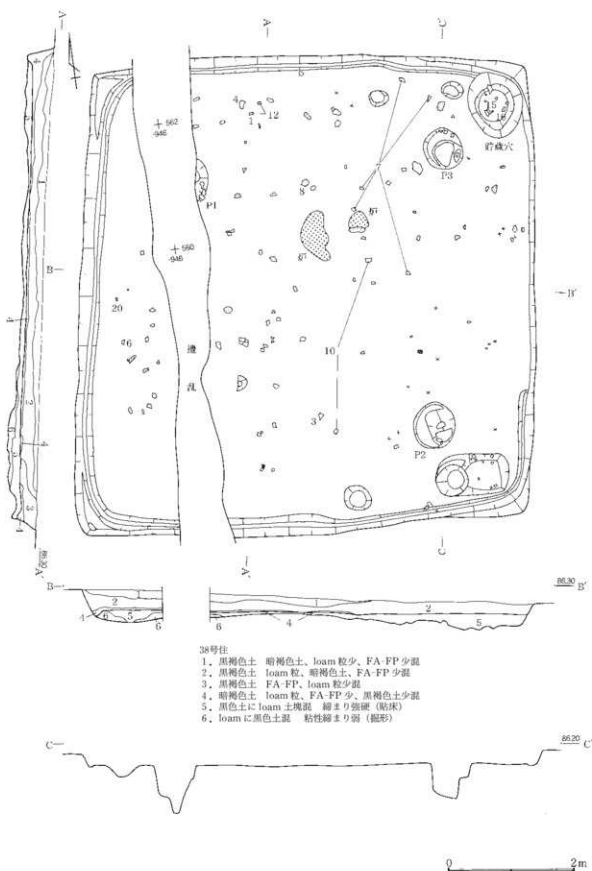
平面形状は、南北軸方向に長軸をもつ略方形の大型住居跡である。西寄りに南北走る椀乱溝が分断する。

規模は、長軸7.6m・短軸7.3mで、壁高は約32cmを測る。床面積は、46.1㎡を有する。

長軸方位は、 $N-2^{\circ}-E$ を示す。

埋土は、大別3層からなる。三角堆積を形成し比較的単味な土質で、自然堆積になる。

V. 古代・古墳時代の遺構と遺物



第188図 38号住居跡

3 古墳時代前期の竪穴住居跡とその遺物

炉跡は、中央僅か北側に偏って二基が東西位置に併並するように検出されている。西側の炉跡は60×40cmの楕円形で浅い窪みをなす地床炉である。東側の炉跡は40×30cmの楕円形を呈する。前者と同じく浅い窪みの地床炉であるが、北縁に径25cmあまりの長径転石を配してある。同時に使用していたか否かは不明であるが、石材が残る東側の炉跡が後出。貯蔵穴は、北東隅部にあり、径90×80cm・深さ40cmの楕円形を呈する。

柱穴は、3穴が検出されるが攪乱溝によって北西の1穴は半截され、南西部の1穴は消失する。径50～60cm・深さ50～40cmの掘形をもつ。柱間寸法はP2・P3が4.3mで、P1・P3が4.0mを測る。

壁下溝は、東壁を除き各壁下に巡る。幅10～20cm・深さ10cmほどである。

遺物は、小片で散在的な出土状況にあり、床面直上のものは少ない。土師器で器台・鉢・壺・甕などとともにも手捏ね土器と蛇紋岩製の管玉がある。器台(1)は小径な坏部で口縁部外縁が強く折れる。外面に疎間な篋磨き(2)は緩く内湾して開く。外面掻き目調整。鈍黄橙色で(1)は細粒混、(2)は細土。高环脚部(3)3孔を穿つ。縦位篋削り後縦位篋磨きを施す。鈍黄橙色で細土。鉢(4)は小型丸底で薄作り。口縁部に接合時の段を作る。内外面に篋磨き、内面口縁部は粗い掻き目調整。底部は指頭大の凹み。鈍黄橙色で細土。(5)は薄手の作り。丸みのある体部に上半は外反し口縁端部は短く直立する。内外面細密な篋磨きで赤色塗彩を施す。胎土は黄橙色で細土。(6)は深く丸みのある体部は強く括れて口縁部は内湾して立つ。外面は荒めの掻き目を施し、肩部および腰部は弱めの篋削り。内面は口縁部の接合部に掻き目調整。浅黄橙色で細土。壺(7)は大きく外反して開く口縁部。外面縦位の掻き目、口縁部は掻き目後に横位の撫で。内面横位の掻き目。灰白色を呈し細土。(8)は球胴形の小型の壺。底部に小径な凹みを作る。外面篋磨き。内面に部分的篋磨き。黄橙色で細土。甕(9・10)は球胴形、外面は斜位の掻き目。(9)は掻き目の引きが短く、調整の手順は器体上位から下位の順で掻き目を施す。(S字口縁甕などは逆手順)鈍褐色を呈し、細土。(11)は壺の底部が、上げ底状。外面掻き目、内面に篋磨き痕が残る。鈍褐色で細砂混。(12・13)はS字口縁甕と台部。胴部細掻き目。胴部見込みおよび台部見込みに砂土塗布。浅黄橙色細砂混。手捏ね土器(14～19)は台付甕・壺・鉢などを模したものとと思われる。浅黄橙色を呈し、比較的細土。(20)は蛇紋岩製管玉。

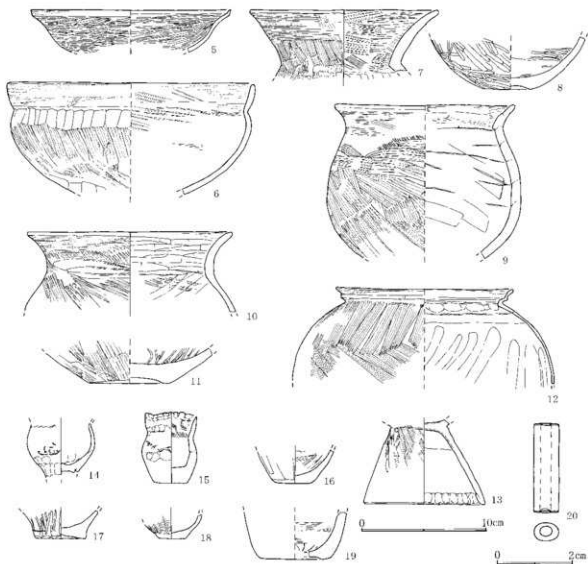
38号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器 器台	6.7	—	(1.8)		11	土師器 壺	—	6.4	(2.7)	
2	土師器 器台	(9.4)	—	(2.5)		12	土師器 S字甕	(14.0)	—	(7.4)	
3	土師器 高环	—	—	(6.1)		13	土師器 S字甕台部	—	8.6	(6.4)	
4	土師器 鉢	(11.0)	(1.8)	4.2		14	土師器 手捏	—	—	(4.7)	
5	土師器 鉢	(15.8)	—	(3.4)	赤色塗彩	15	土師器 手捏	4.0	2.7	3.5	
6	土師器 鉢	(19.5)	—	(8.7)		16	土師器 手捏	—	3.0	(2.5)	
7	土師器 壺	14.9	—	(4.8)		17	土師器 手捏	—	3.9	(2.2)	
8	土師器 壺	—	3.6	(4.2)	小径凹む	18	土師器 手捏	—	2.1	1.8	
9	土師器 甕	(15.3)	—	(12.0)		19	土師器 手捏	—	(5.5)	(3.8)	
10	土師器 甕	16.0	—	(5.3)		20	管玉	長 2.4	径0.7×0.5	孔径 0.3	重 1.36g 蛇紋岩



第189図 38号住居跡出土遺物(1)

V. 古代・古墳時代の遺構と遺物



第190図 38号住居跡出土遺物(2)

51号住居跡 (第191図、PL.33・61)

位置は、座標値 $X=577\sim 582$ ・ $Y=-974\sim -979$ の範囲にある。

平面形状は、長短軸長差は小さいが東西軸が僅かに勝り、整った方形を呈する。

規模は、長軸3.9m・短軸3.7mを測り、壁高は僅か12cmの浅い掘形である。床面積は13.4㎡を有する。

長軸方位は、 $N-62^{\circ}-W$ を示す。

埋土は、大別2層に分かつが、loam粒を多く混入する黒褐色土である。

炉跡は、中央部に1箇所と隣接して北東方向に3箇所の被熱面が連なる。70～50cm程度の楕円形を呈する。いずれも床面が薄い焼土化した地床炉である。炉跡の形成順などについては炉材などの痕跡がなく不明である。

貯蔵穴は南東隅にあり、径100×80cm・深さ15cmの楕円形外縁を作る。さらに径50cm・深さ40cmの円形掘形が落ち込む。

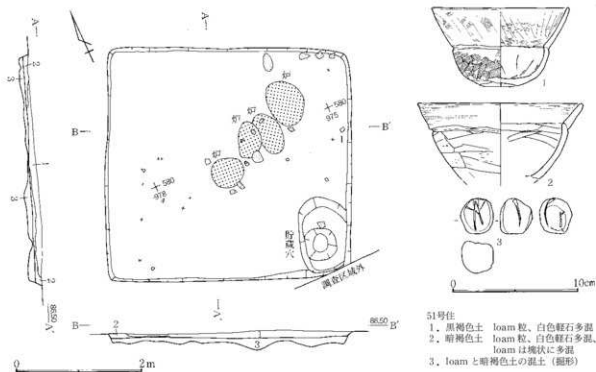
柱穴・壁下の溝などは検出されていない。

3 古墳時代前期の竪穴住居跡とその遺物

遺物は小片・少量で散在的な出土状況である。図化遺物は埴・鉢の2点である。その他刻みの入る小粒軽石がある。埴(小型丸底土器)(1)は口縁部が僅かに内湾気味に開く。底部は小径な凹み底である。口縁部内外面は縦位の極細目の掻き目後に弱い寛撫でですり消す意図か。体部は極細目の短引足の掻き目。灰白色を呈し細土。鉢(2)は「く」の字状に折れて開く口縁部で、体部は横位の寛削り。橙色を呈し細土。磁石(3)は軽石製で小球体。深い刃痕が残る。

51号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器 埴	(10.2)	2.6	(6.1)	小底凹み	3	磁石か	径 2.8	幅 2.5	厚 2.6	軽石
2	土師器 鉢	(13.0)	—	(6.0)							



第191図 51号住居跡・出土遺物

56号住居跡 (第192～194図、PL.33・62)

位置は、座標値 $X = 577 \sim 582$ ・ $Y = -991 \sim -997$ の範囲にある。

重複は、南側で大きく平安時代の55号住居跡と重なり壁線と床面が広範囲に消失する。

平面形形状は、長短軸長差のない方形を呈しよう。

規模は、軸長が5.7mで、壁高は35cmと比較的深い掘形をもつ。床面積はほぼ26.7㎡を有しよう。

東壁線の軸方位はほぼ真北を示す。

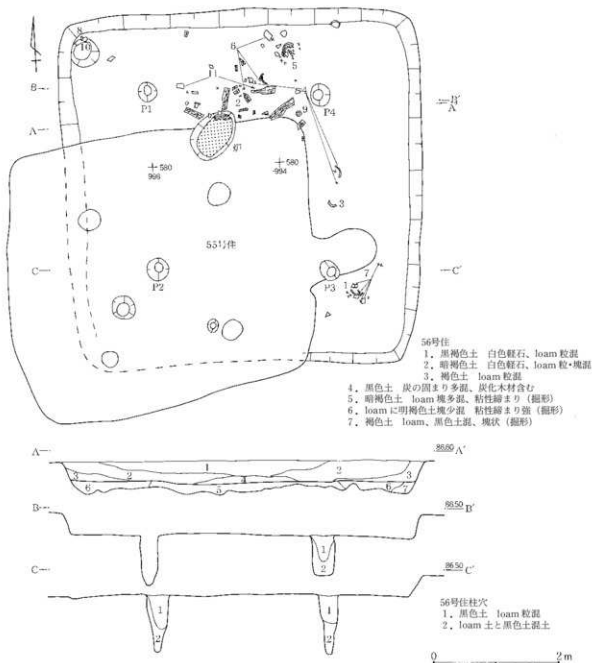
埋土は大別3層である。主層には斑点状に loam 塊の混入が見られるが単味な土質相を示し、自然堆積であろう。

炉跡は中央やや北側に偏つてある。大部分は55号住居跡との重なりで上面は削平されるが、辛うじて被熱痕が観察される。径80×60cmの略楕円形で、床面を僅かに窪ませる地床炉になろう。炉跡周辺にはやや浮いた位置に炭化材が集中するが、他所には検出されていない。廃絶に伴う意図的な焼却がなされたものであろう。

V. 古代・古墳時代の遺構と遺物

うか。

柱穴は4穴が検出され、径約30cm・深さ60～90cmの掘形をもつ。各柱間寸法はほぼ等間で2.7～2.8mを測る。その他、北西隅部に径45cm・深さ35cmの小穴が見られる。位置的には貯蔵穴を思しめるが規模にやや疑問が残る。



第192図 56号住居跡

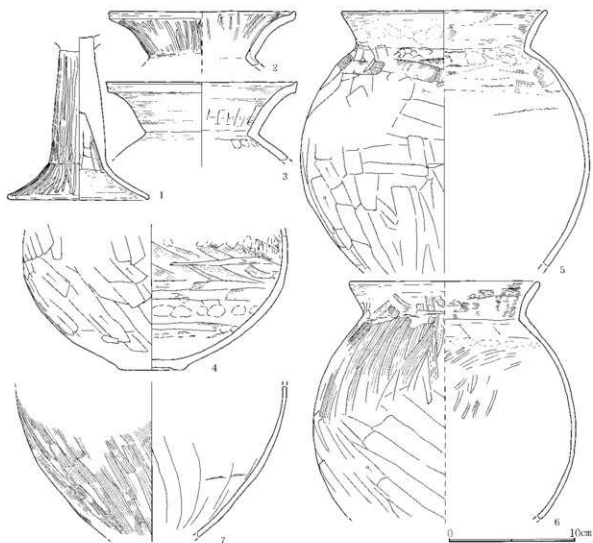
遺物は、埋土中の出土がほとんどである。壺・甕類が多く見られるもの、完形度の高い遺物はない。高坏脚部(1)は細身の脚柱部に裾部は強めに折れて開く。作り丁寧で脚柱・裾部の二段寛磨き。明黄橙色で細土。壺口縁部(2・3)は口唇部外縁が直立し端部が細る。共に縁の作りが鋭い。(2)は内外面放射状寛磨き。橙色を呈し細土。(3)の器面調整が端整で焼成は硬質感があり酸化焼成須恵器の趣がある。(4)は壺下半部。強く張

3 古墳時代前期の竪穴住居跡とその遺物

る球胴のまま小径な底部に至る。底部は縁部輪状で凹気味になり砂底。胴部下半は斜位篋削り。内面は腰部接合箇所はじめ篋撫でおよび指撫で状調整顕著。橙色で細土。甕(5・6)は丸く張る球胴形で口縁部は「く」の字状に外傾する単口縁。(5)は肩部に横位1～2段の弱い細目掻き目、中位まで斜位篋削り、下位は縦位の篋削りを施す。(6)は胴部全体に斜位の篋削り後、肩部から上半に縦位の粗雑目の掻き目。鈍浅黄橙色で細粒混。(7)はS字状口縁台付甕になろう。細目掻き目。鈍褐色で砂粒多混。(8～11)はS字状口縁台付甕の台部。下端内側に折り返し。外面斜位掻き目後縦位の撫で擦り消し状調整。(10)は胴部の付け根に縦位の短い篋削り。(11)とも台部内・胴底に砂土を塗布し、胴底は台部との接着のため篋状工具による放射状圧痕。鈍浅黄橙色、(11)は赤褐色で砂粒多混。

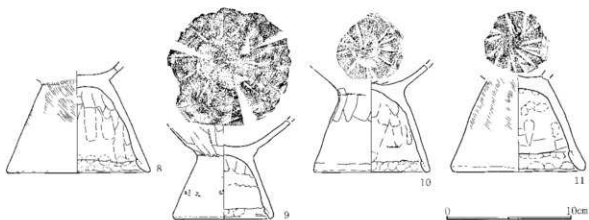
56号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	胴高	備考	番号	器種	口径	底径	胴高	備考
1	土師部 高坏	—	(11.2)	(11.8)		7	土師部 S字甕	—	—	(11.8)	
2	土師部 甕	(14.6)	—	(4.2)		8	土師部 S字甕台	—	—	(11.4)	(8.3)
3	土師部 甕	15.1	—	6.2		9	土師部 S字甕台	—	—	8.0	(7.7)
4	土師部 甕	—	(5.5)	(10.8)	砂底高台状に凹む	10	土師部 S字甕台	—	—	9.2	(8.4) 見込み部放射状痕
5	土師部 甕	16.2	—	(20.7)		11	土師部 S字甕台	—	—	(10.7)	(7.5) 見込み部放射状痕
6	土師部 甕	15.0	—	(18.6)							



第193図 56号住居跡出土遺物(1)

V、古代・古墳時代の遺構と遺物



第194図 56号住居跡出土遺物(2)

60号住居跡 (第195・196図、PL.34・62)

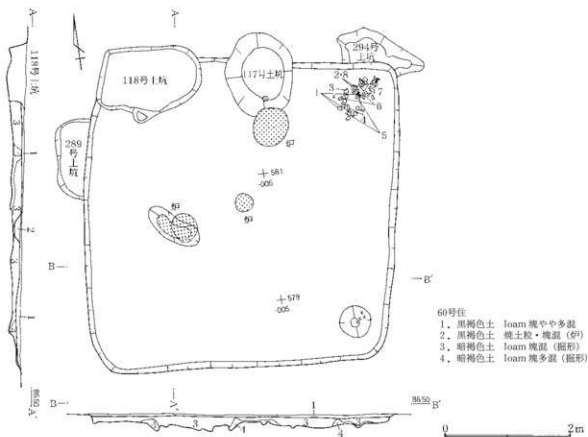
位置は、座標値 $X=577\sim 582$ ・ $Y=-002\sim -008$ の範囲にある。

平面形状は、ほぼ長短軸長差のない方形を呈する。

規模は、軸長4.9mを測り、壁高はわずか5cm足らずの浅い掘形である。床面積は21.9m²を有する。

南北軸方位はN-11°-Eを示す。

炉跡と思われる焼土面は中央部(1号炉)・西寄り(2号炉)・北寄り(3号炉)の3箇所に検出されてい



第195図 60号住居跡

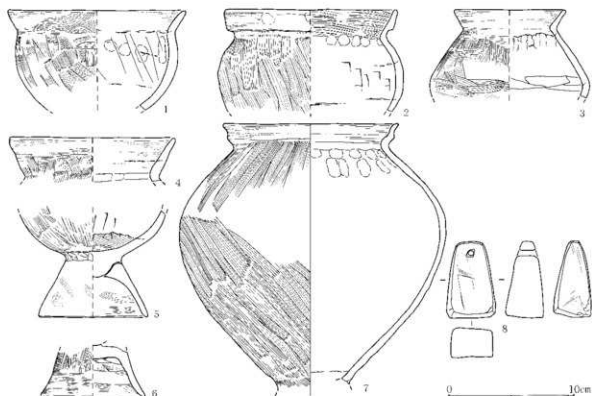
る。1号炉は30cmあまりの小径な円形で、遺存状況から他の炉跡に先行するものと思われる。2号炉は70×40cmの長径な楕円形、3号炉は径60cmの円形を呈する。いずれの炉跡も粘土材などの使用は認められず地床炉であろう。

貯蔵穴は検出されない。北東隅で小片化した土器が集中して検出され、それらの下に貯蔵穴の存在が予想されたが僅かに窪んだ程度である。また、南東隅に円形落ち込みが検出されているが径・深さ50cmで形態から見て貯蔵穴以外の施設と思われる。その他、柱穴などの諸施設も検出されていない。

遺物は上記北東隅部に破片した状態で、鉢・甕などが出土している。床面に近いがいずれも完形度は低い。鉢(1)口縁部は「く」の字状に屈し体部は半球形。口縁部から体部は細目掻き目、内面は弱い寛撫で。浅黄色で細土。(2)はやや作りが粗い。折り返し口縁状の幅広な口縁帯をもつ。体部は球形で外面粗目の縦位多段掻き目。口縁内横位で粗掻き目。黒褐色を呈し細砂粒多混。壺(3)は短い口縁部が強く「く」の字状に折れる。胴部中央が算盤玉椽に張る。上半は縦位と斜位の、中央部は横位の細目掻き目調整。鈍黄色細土。甕(4)は単口縁。掻き目調整。黄橙色で細土。(5・6)は単口縁台付甕。(5)は胴底が柄状に突出し台部に差し込まれて接合される。作り粗く、粗目の掻き目。暗褐色で細土。(7)はS字口縁台付甕。丸く張る胴部から腰部に向かい強くしまる。上半一段、下半は略2段の細目掻き目。胴底には砂土を塗布。台部接合のための凹凸痕が転写される。浅黄橙色で砂粒多混。磁石(8)は流紋岩。角柱形で片端穿孔。携帯用か。

60号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土器部 鉢	(13.9)	—	(7.8)		5	土器部 台付甕	—	(8.6)	(8.3)	単口縁甕
2	土器部 鉢	(13.6)	—	(8.1)	折返状口縁	6	土器部 甕台部	—	(8.3)	(4.0)	単口縁甕
3	土器部 壺	(8.8)	—	6.9		7	土器部 S字甕	13.8	—	—	21.1
4	土器部 小型甕	(13.1)	—	(3.2)		8	磁石	長 6.0	幅 3.8	厚 3.0	孔径 0.5 流紋岩



第196図 60号住居跡出土遺物

V、古代・古墳時代の遺構と遺物

63号住居跡 (第197～200図、PL.34・62～64)

位置は、X=5822～588・Y=-012～-018の範囲にある。

平面形状は、東西軸方向に長軸をもつが軸長差の小さい整った方形を呈する。

規模は、長軸5.9m・短軸5.6mを測り、壁高は約30cmの深い掘形をもつ。床面積は30.4m²を有する。

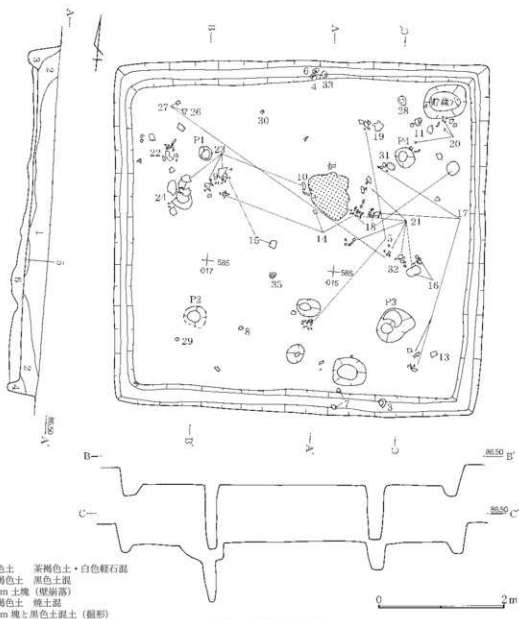
長軸方位は、N-86°-Eを示す。

埋土は大別2層からなり、混入物の少ない単味な土質である。自然堆積であろう。

炉跡は中央やや北東寄りにあり、80×60cmあまりの不整形円形に焼土粒の分布と一回り小径で被火面が形成されている。粘土・石材などの構築材は検出されず、地床炉であろう。

柱穴は4穴が検出された。径は50×40cm・深さ50cmから最深で1.1mの浅・深に差のある掘形をもつ。

柱間寸法は、P1・P2が2.6m、P3・P4は2.6mを測り、P2・P3およびP1・P4が3.1mの等間である。



第197図 63号住居跡

貯蔵穴は、北東隅部にあり、径70×50cm、深さ20cmの楕円形を呈する。

壁下の溝は全壁に巡り、幅20～25cm、深さ10～15cmの明瞭な形状をもっている。

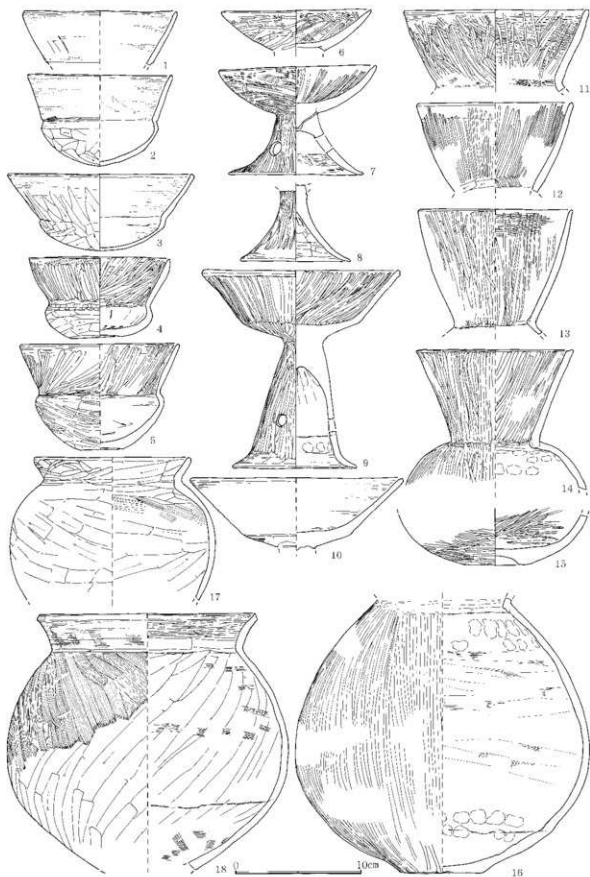
遺物は埴・高坏・壺・甕・手捏ね土器などがある。比較的に量が多いものの、散在的で埋土中からの出土が大半である。埴(小型丸底土器)(1～5)のうち、(2・3)は所謂丸底で器面調整が弱い寛撫を基調にする。

(3)は大径な口縁で縦位の寛撫で調整体部は偏平で浅い。鈍褐色から浅黄褐色で細土。(4・5)は小径な凹底部である。口縁部内外面に主に放射状磨きを施す。黄橙から鈍黄褐色で細土。高坏(6～8)は小型品で坏部は浅く皿型に近く器台か。坏部内外面、脚部外面に比較的細密な磨きを施すが掻き目を下地調整する。(7)は脚部に3孔を穿つ。明黄橙～鈍黄褐色で細土。(9・10)の坏底部は強く折れて角状腰部を作り、体部は直線的に開く。(9)は坏部内外面、脚外面に細密な磨きを施す。脚柱は高く、3孔を穿つ。端部は強く折れて小さな裾部を作る。鈍黄褐色で細土。(10)は明赤褐色で細土。小型壺(11～15)は球形胴部を有する形態になろう。口縁部内外面に細密な縦位または放射状磨きで、胴部も磨きを施すものが多い。(11)には下地に掻き目調整が見える。鈍黄橙～橙褐色で細土。中型壺(16)は下膨れ胴部。全体に細密で引きの長い流麗な縦位磨きを施す。底部は砂底。鈍褐色で細土。甕(17～24)は平底と台付甕がある。平底甕(17)は胴部に弱い磨削り、口縁部内外面に強く短留めの磨削り。胴内面は上端に粗掻き目以下は強い寛撫を施す。橙褐色で細土。(18～20)は単口縁で台部の有無は不明であるが、下端部の折り返さない台部の出土が無い事から多くは平底になろう。胴部外面の調整は下地に磨削り後に上半は細目の掻き目を施す。(20)は横位で掻き幅は狭い。内面は(18)が口縁部横位磨き、胴部は掻き目後寛撫で。(19)は細目の掻き目。(20)は粗目掻き目後縦位の粗間磨き様の調整を施す。明橙～橙褐色で砂粒混。単口縁台付甕(21)は軟質。胴底部に台部との作り分けの痕跡がある。胴部は略三段の掻き目。浅黄褐色で砂粒多混。S字状口縁台付甕(22)は胴部上下半で二段の掻き目。黒褐色で砂粒混。(23)は肩部に短引きの、胴の上半は斜位、下半は縦位の磨削り。胴・台の底部に砂土を塗布する。鈍黄褐色で砂粒混。(24)は大口径台付甕である。口縁基部は擬似S字口縁をなし、さらに外反して開く口縁部を追加高上げの成型を觀察できる。胴部は上下略二段の掻き目調整。内面寛撫で。灰黄褐色で砂粒混。(25～31)はS字状口縁台付甕の台部になろう。端部は全てに内側への折り返しと底面に砂土の塗布が認められる。明黄橙～鈍黄褐色で砂粒混。手捏ね土器(32)は蓋、(33・34)は浅・深鉢、(35)は壺をそれぞれに模した形状に見える。

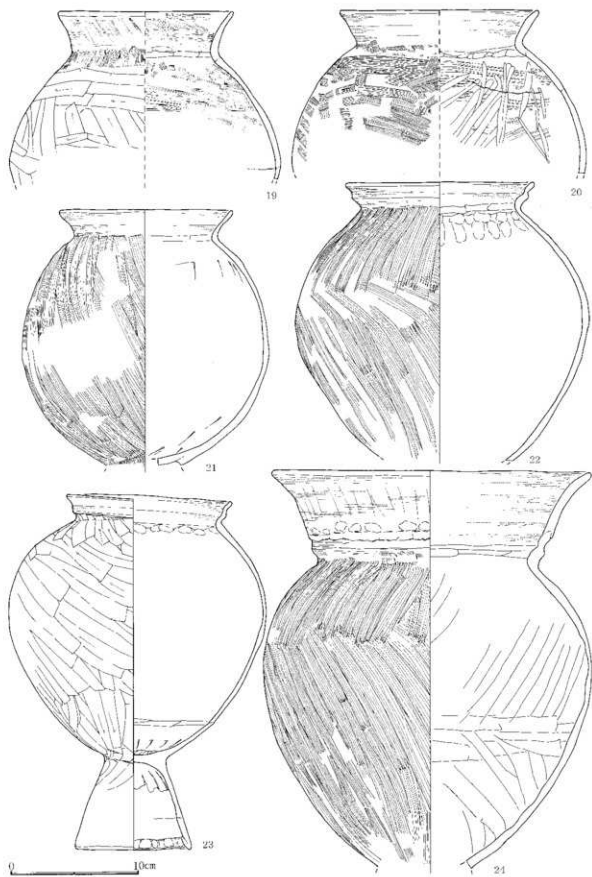
63号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
11	土師器 埴	(12.2)	—	(4.3)		19	土師器 小型壺	(14.0)	—	(13.3)	
2	土師器 埴	(11.4)	—	7.1	丸底	20	土師器 甕	(15.7)	—	(12.9)	
3	土師器 埴	14.7	—	6.1	丸底	21	土師器 小型壺	(13.7)	—	(20.0)	
4	土師器 埴	11.1	—	6.6	小平底	22	土師器 S字壺	14.9	—	(22.0)	
5	土師器 埴	(12.6)	3.6	8.3	小平底	23	土師器 S字壺	13.0	9.2	27.9	横目(眉毛目)無し
6	土師器 高坏	(11.8)	—	3.1	器台か	24	土師器 甕	25.2	—	(31.2)	口縁基部はS字状
7	土師器 高坏	12.4	—	(8.9)	器台か	25	土師器 台付甕	—	(9.5)	(5.2)	
8	土師器 高坏	—	8.8	(5.5)		26	土師器 台付甕	—	(8.5)	(6.4)	
9	土師器 高坏	15.6	9.8	15.6		27	土師器 台付甕	—	(8.8)	(7.2)	
10	土師器 高坏	(16.8)	—	(5.7)		28	土師器 台付甕	—	9.9	(7.7)	
11	土師器 壺	14.6	—	(6.3)		29	土師器 台付甕	—	(10.3)	(6.8)	
12	土師器 壺	(12.2)	—	(7.0)		30	土師器 台付甕	—	8.9	(7.1)	
13	土師器 壺	(12.2)	—	(9.7)		31	土師器 台付甕	—	8.8	9.8	
14	土師器 壺	(12.4)	—	10.3		32	手捏ね土器	5.3	2.7	3.7	蓋形
15	土師器 壺	—	4.8	(4.0)	小底凹む	33	手捏ね土器	8.9	4.0	3.0	鉢形
16	土師器 壺	—	(6.7)	(21.5)	砂底	34	手捏ね土器	8.1	—	(6.1)	鉢形
17	土師器 小型壺	(12.4)	—	(11.2)		35	手捏ね土器	—	3.0	(5.8)	壺形
18	土師器 甕	(17.3)	—	(20.1)							

V. 古代・古墳時代の遺構と遺物

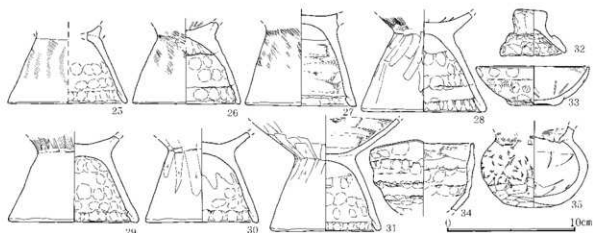


第198図 63号住居跡出土遺物(1)



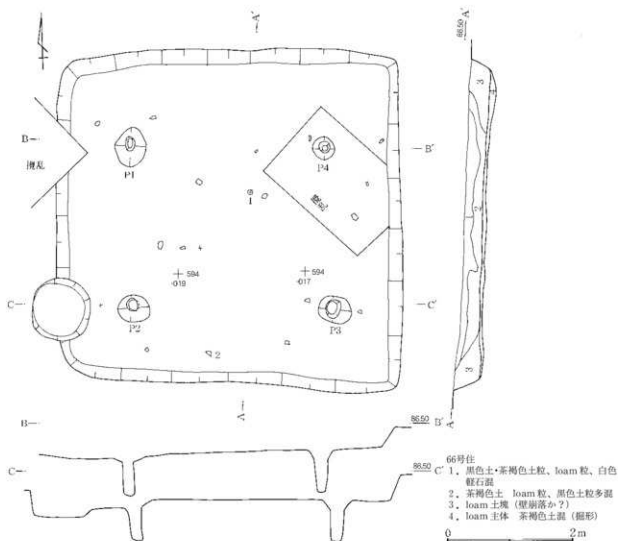
第199図 63号住居跡出土遺物(2)

V. 古代・古墳時代の遺構と遺物



第200図 63号住居跡出土遺物(3)

66号住居跡 (第201・202図、PL.34)



第201図 66号住居跡

位置は、座標値 $X = 592 \sim 597 \cdot Y = -015 \sim -020$ の範囲にある。炉跡は検出されていないが柱穴の存在や、遺物の分布から住居跡とした。

平面形状は、東西方向に若干勝る長軸をもつ方形を呈する。

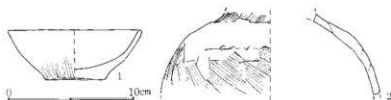
規模は、長軸5.5m・短軸5.3mを測り、壁高40cmで深い掘形である。床面積は24.7m²を有する。

長軸方位は、 $N-1^{\circ}-W$ を示す。

埋土は大別5層に分ち、loam塊・粒を大量に混入する土層が黒褐色土と互層になる。この堆積状況は南側からの流入が顕著であり、人為的な埋土の可能性がある。

柱穴は4穴が検出されている。大きめな外縁が浅く窪み、径20cm・深さ60～70cmの深い漏斗状の掘形をもつ。柱間寸法は $P1 \cdot P2$ が2.6m、 $P2 \cdot P3$ は3.2m、 $P3 \cdot P4$ が2.5m、 $P1 \cdot P4$ は3.1mである。

遺物は極めて少量で、散在的な出土状況である。小鉢形土器(1)は器内の厚い底部を有する。腰部僅かに縦位磨き痕が残る。灰黄橙色細土。埋土。口径10.6cm・底径4.7cm・器高3.9cm。壺の肩部(2)は頸基部、胴部上半に粗目掻き目調整を施す。外面面に紐作り接合痕残る。浅黄橙色で砂粒混。埋土。頸基部径7.5cm・胴部現径17cm・現高6.5cm。



第202図 66号住居跡出土遺物

69号住居跡 (第203・204図)

位置は、座標値 $X = 600 \sim 607 \cdot Y = -973 \sim -981$ の範囲にある。

重複は、平安時代の71号・99号・108号住居跡と、また縄文時代70号住居跡とも重なる。

平面形状は、北東～南西軸方位に長軸をもつ方形を呈する。

規模は、長軸6.4m・短軸6.1mを測り、壁高は約8cmで浅い掘形である。床面積は32.4m²を有する。

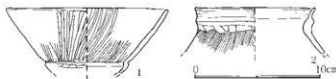
長軸方位は、 $N-67^{\circ}-E$ を示す。

炉跡は、北側に検出され径40cmの地床炉である。

貯蔵穴は、東隅部に近く、径90×60cm・深さ40cmの楕円形を呈す。

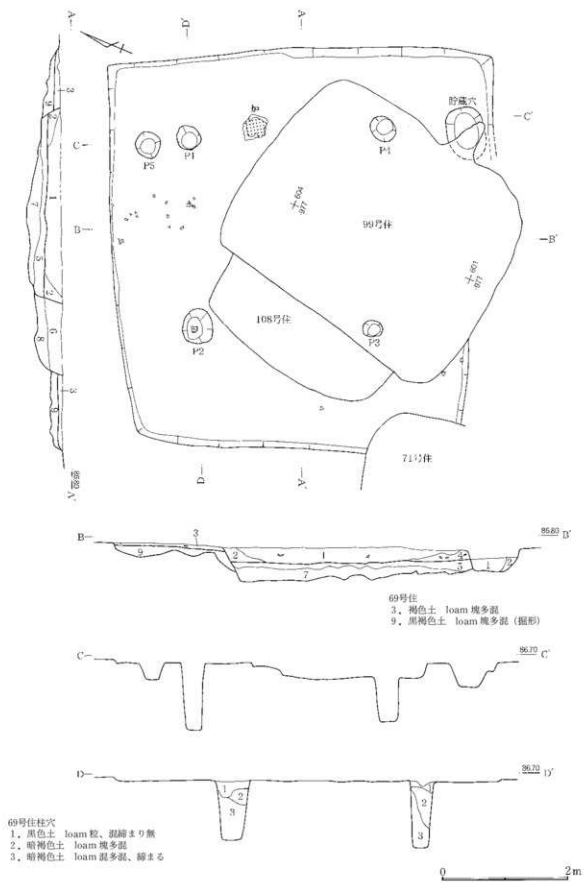
柱穴は、4穴が検出され、径30～50cm、深さ1m前後の深い掘形を呈する。柱間寸法は $P1 \cdot P2$ が3.1m、 $P2 \cdot P3$ が2.9m、 $P3 \cdot P4$ は3.2m、 $P1 \cdot P4$ は31cmを測る。

遺物は少量散在的である。埴(小型丸底土器)(1)は体部が矮小・偏平で、口縁部が大きく丈高に開く。内外面放射状磨きを施す。黄褐色を呈し細土。埋土。口径12.8cm。小型S字口縁埴(2)は台付甕にならう。極めて小型品であるが作りは通常仕様。橙色を呈し、砂粒混。埋土。口径9.3cm。



第203図 69号住居跡出土遺物

V. 古代・古墳時代の遺構と遺物



第204図 69号住居跡

74号住居跡 (第205図, PL.64)

位置は、座標値 $X = 607 \sim 611 \cdot Y = -981 \sim -985$ の範囲にある。

重複は、平安時代75号住居跡と重なり、西半は消失している。

平面形状は、全容が不明なため定かではないが、北西～南東軸方向に長軸をもつ略方形を呈しよう。

規模は、長軸 $3.5\text{m} + \alpha \cdot$ 短軸 3.2m 、壁高は 24cm を測る。

埋土は大別3層で、loam 粒・塊の混入が目立つ。

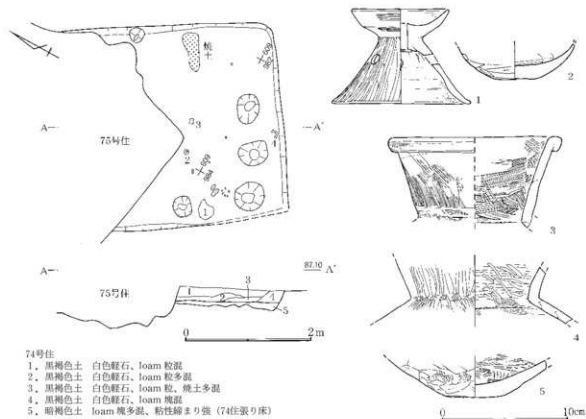
炉跡に関して、東壁に近く焼土の痕跡が記録される。ただ、位置的に見て壁線に近く炉跡かは不明である。

柱穴は、幾つかの小穴が検出されているが配置的に見て整合性に欠け、現状では上屋構造に関わる柱穴を認定できない。

出土遺物は少量・散在的である。器台(1)は腰が僅かに角張る坏部をもち台部は3孔を穿ち大きく開く。坏部は横位・台部は縦位の寛磨きを施す。鈍橙色で細土。壺(2)は小型球胴で小径の平底。口縁部が大きく立つ形態になろうか。鈍黄橙色で細土。壺口頸部(3)は頸部が直線的に外傾し、口縁部は丸めるように外側へ折る折り返し口縁。外面縦位内面横位の掻き目調整。橙色で細土。壺頸～肩部(4)は外面縦位、内面横位の細密寛磨き。内面肩部は横位掻き目。赤褐色で細土。甕底部(5)は内面底部周辺が丁寧な粗目掻き目。鈍橙色で砂粒混。

74号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器 器台	(17.8)	(10.6)	7.3		4	土師器 壺	—	—	(5.7)	
2	土師器 壺	—	—	(3.7)		5	土師器 甕	—	4.2	(3.3)	
3	土師器 壺	(13.8)	—	(7.1)	折返口縁						



74号住

1. 黒褐色土 白色軽石、loam 粒混
2. 黒褐色土 白色軽石、loam 粒多混
3. 黒褐色土 白色軽石、loam 粒、焼土多混
4. 黒褐色土 白色軽石、loam 塊混
5. 黒褐色土 loam 塊多混、粘性綿まり強 (74住張り床)

第205図 74号住居跡・出土遺物

V、古代・古墳時代の遺構と遺物

76号住居跡 (第206図, PL.34)

位置は、座標値 $X = 602 \sim 607$ ・ $Y = -983 \sim -987$ の範囲にある。

重複は、北東部で古墳時代前期74号住居跡と接してあるが両者をまたいで攪乱土坑が穿ち、重複部分を不明にしている。

平面形状は、南北方向に長軸をもつ方形を呈する。

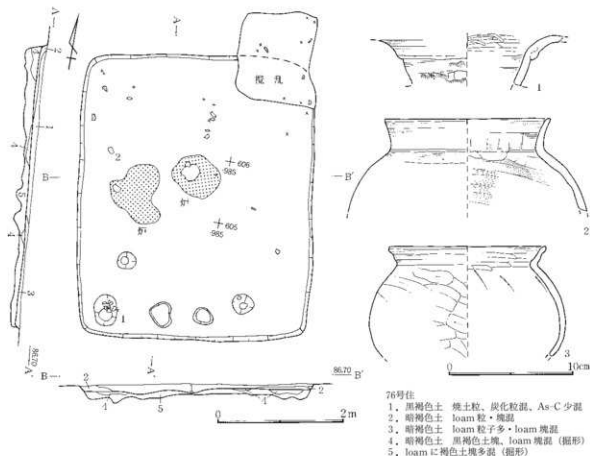
規模は、長軸4.5m・短軸3.7mを測り、壁高は10cmの浅い掘形である。床面積は、15.7㎡を有する。

長軸方位は、 $N-9^{\circ}-W$ を示す。

炉跡は、中央部と西壁寄りに検出されているがいずれも地床炉である。中央部の炉跡は70×60cmの範囲が被熱により硬化面を作り、中心部の径25cmほどが炉床として焼土化している。西寄りの炉跡は、100×50cmの範囲で焼土粒混入土が広がる形状で検出されている。被覆土下は被熱による硬化面が広がり、東西二つに分離して径20cmほどの焼土化した炉床が見られる。

南壁沿いに偏在して4～5個の小穴が検出されているが機能など不明である。南西隅の一穴は径50×35cm・深さ30cmの楕円形を呈し、形状・規模から貯蔵穴の可能性がある。

出土遺物は極めて少なく、小片が多く散在的な出土状況である。二段口縁壺頸部(1)は頸部掻き目、内面横位の寛磨き。浅黄橙色で細砂粒混。南西隅穴(貯蔵穴)出土。単口縁甕(2)は内面横位掻き目。橙色砂粒混。床面。口径13.0cm。S字口縁甕(3)のS字は疑似的である。器内の厚い小型品、胴部寛削り橙色で細土。埋土。口径12.4cm。



第206図 76号住居跡・出土遺物

79号住居跡 (第207~209図、PL.35・64)

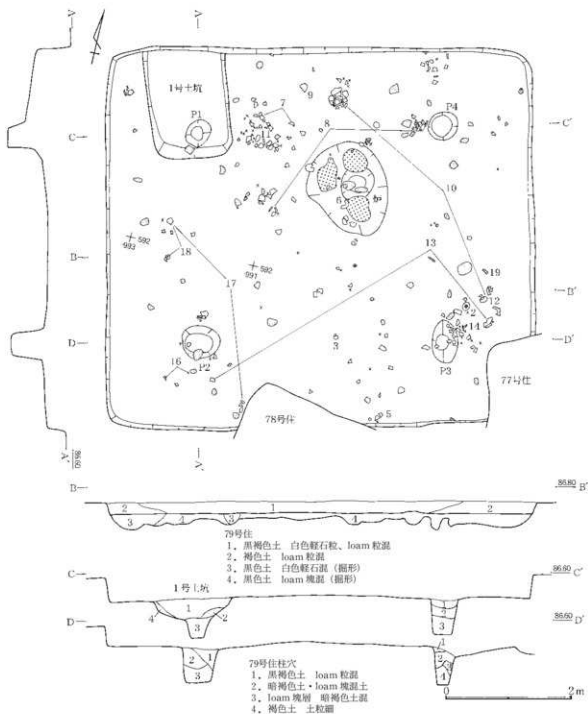
位置は、座標値 $X = 589 \sim 596 \cdot Y = -986 \sim -993$ の範囲にある。

重複は、南側で平安時代77号・78号住居跡と重なる。

平面形状は、東西軸方向に長軸をもつ方形を呈する。

規模は、長軸6.8m・短軸6.0mを測り、壁高は25cmほどである。床面積は39.3m²を有する。

長軸方位は、 $N-73^{\circ}-E$ を示す。



V、古代・古墳時代の遺構と遺物

埋土は大別2層に分かつが、主層は混入物の少ない黒褐色土で単味な土質である。

炉跡は中央やや北東寄りにあり、焼土粒混入の被覆黒褐色土が1.5×1.2mの範囲に楕円形状で検出された。被覆土下には重なりながら4箇所の炉床が見られた。焼土化した炉床は、径40～50cmの大きさである。なお、それらのうち中央にある一基は長径の転石2個を添える。

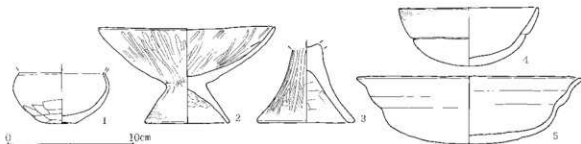
柱穴は4穴が検出され、径50～60cm・深さほぼ60cmの掘形をもつ。柱間寸法はP1・P2は3.3m、P2・P3とP1・P4が共に3.8m、P3・P4は3.5mを測る。

貯蔵穴は検出されていない。なお、北西部に柱穴P1に重なって方形の土坑が見られるが、当住居跡より新しい所産であろう。

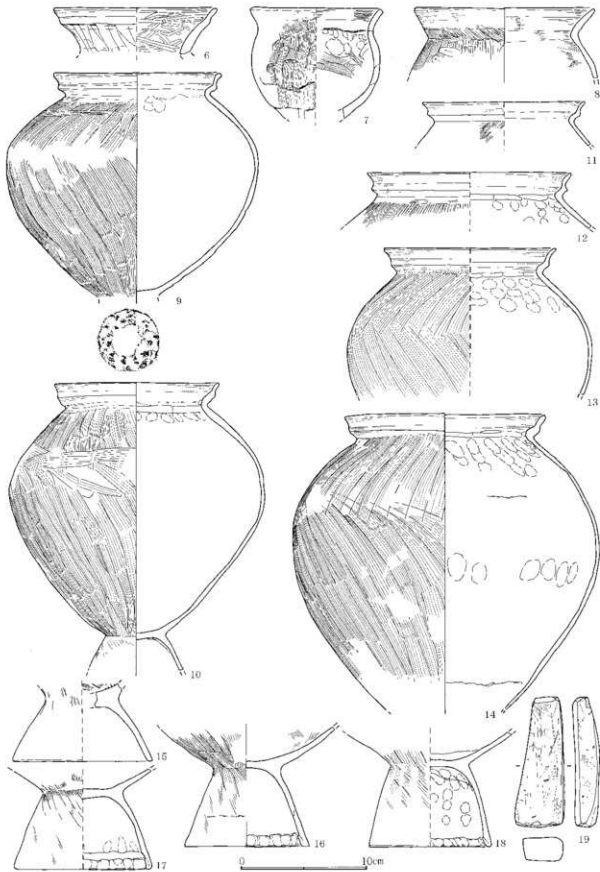
遺物は散在的な分布を示すが総じて柱穴の周辺に集中する。埴(1)はいわゆる小型丸底形土器の形状を呈すが底部は小径な平底。腰部は寛削り。鈍黄褐色で砂粒混。高坏(2)は浅めの椀形の坏部で大きく開く。脚部は低く小径で、坏口径の1/2以下。坏内外面放射状寛磨き。橙色で細土。(3)は高坏脚部と思われるが小型品になろう。外面掻き目後縦位の寛磨き。暗灰黄色で細土。鉢(4)は埴に類するが口縁部の形状から鉢にする。体部と口縁部で成形を分かちが内湾気味の開きは滑らか。器面の磨耗は進み調整は不鮮明。淡黄色で砂粒混。(5)は扁平な体部から伸びやかなS字状にくねって外反する口縁部を作る。内外面横位の寛磨きを施す。作りは丁寧。愛知・滋賀方面の地域に類似する形状の器種あり。橙色で精土。壺口頸部(6)外傾する頸部に口縁部が小さく括れて外反する。頸部縦位寛削り、内面不定方向の寛磨き。明赤褐色で細土。単口縁壺(7)は小型品。手捏ねの可能性があるがそれよりは作りがやや丁寧。縦位の掻き目。鈍黄褐色で細土。(8)は内外面粗目の掻き目。淡褐色で砂粒混。(9～14)はS字口縁壺。胴部は多段掻き目。(9)は肩部上位に極弱細条の横線、(10)は胴部との変換部に粗目の横線を施す。灰白(9)・黒褐(13・14)・鈍橙(10～12)で砂粒混。(15)は端部の折り返しおよび砂土の塗布が無く、単口縁台付壺の台部。灰黄褐色で細土。(16～18)はS字口縁台付壺の台部。端部内側に折り返し。胴・台底部に砂土を塗布。砥石(19)は短冊形で流紋岩製。四面使用。長端面に調整痕あり。

79号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器 埴	—	2.5	3.9		11	土師器 S字壺	16.0	—	(4.4)	
2	土師器 高坏	14.0	6.7	12.6		12	土師器 S字壺	—	9.8	(9.4)	
3	土師器 高坏	—	(7.7)	(6.2)		13	土師器 S字壺	—	9.6	—	
4	土師器 小鉢	(11.0)	丸底	4.5		14	土師器 S字壺	—	(11.0)	6.1	
5	土師器 鉢	(17.8)	—	5.3	東海地方の形制か	15	土師器 S字壺台部	—	11.0	(6.1)	
6	土師器 壺	12.8	—	3.7		16	土師器 S字壺台部	—	9.8	(9.4)	
7	土師器 小型壺	(10.4)	—	8.7		17	土師器 S字壺台部	—	5.4	(7.9)	
8	土師器 壺	14.2	—	5.5		18	土師器 S字壺台部	—	9.6	(9.6)	
9	土師器 S字壺	12.8	—	—	肩部横線	19	砥石	長 10	幅 4.0	厚 1.5	流紋岩 短冊形
10	土師器 S字壺	(13.6)	—	(11.5)	胴部横線						



第208図 79号住居跡出土遺物(1)

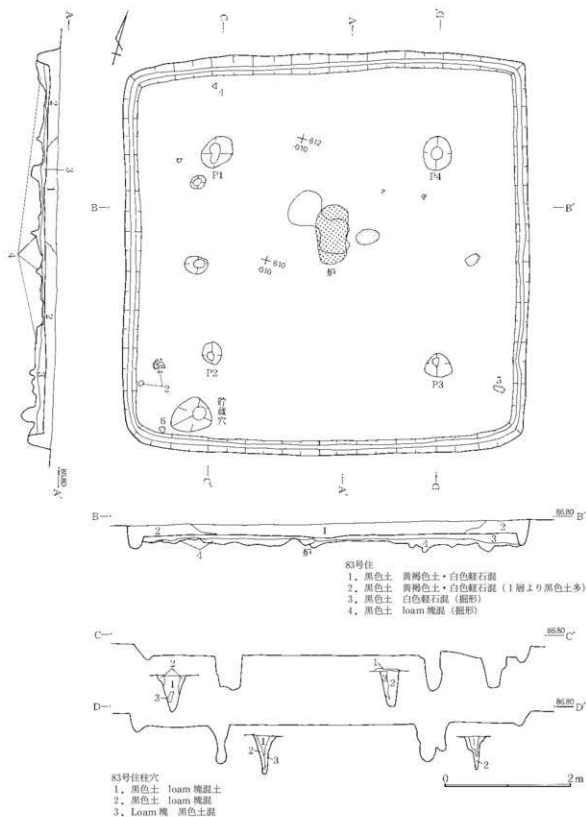


第209図 79号住居跡出土遺物(2)

V. 古代・古墳時代の遺構と遺物

83号住居跡 (第210~212図、PL.35・65)

位置は、X=606~614・Y=-005~-012の範囲にある。



第210図 83号住居跡

重複は、南側で縄文時代122号住居跡と重なる。

平面形状は、長短軸長差が無く整った方形を呈する。

規模は、軸長6.4mを測り、壁高は20cmである。床面積は34.5㎡を有する。

南北軸方向は、N-17-Wを示す。

埋土は大別2層に分ち、loam塊が混入する黒色土が主層で人為的な埋土の可能性もある。

炉跡は住居跡のほぼ中央にあり、径90×50cmの楕円形状で炉底は焼土化した地床炉である。炉跡の東に接するように長径50cmあまりの転石が検出されている。意図的な設置か否かの所見は得られていない。

位置的に貯蔵穴と思われる穴は南西隅にあり、径60×50cm・深さ30cmほどで上縁形は楕円、断面逆円錐形を呈する。貯蔵穴形状としてはややそぐわない。

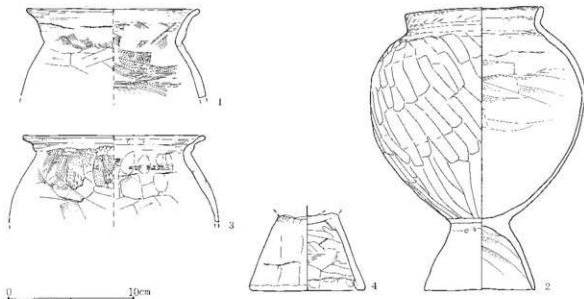
柱穴は4穴が検出され、径35~50cm、深さ60cmほどの掘形をもつ。柱間寸法は、P1・P2が3.2m、P1・P2とP1・P4が3.5m、P3・P4は3.3mを測る。

壁下溝は全壁に巡り、幅は15cm前後、深さ10cmほどである。

遺物は少数で散在的な出土状況である。甕(1)はなで肩形状である。外面に弱い掻き目後弱い寛撫で、内面は掻き目を施す。黒灰褐色で砂粒混。(2)は単口縁台付甕。短く直立気味の口縁部。胴部は多段の篋割り。鈍淡橙色で細土。(3)は崩れ気味のS字口縁甕。外面の掻き目調整も荒く、内面の掻き目や寛撫では通例のS字口縁甕では行われぬ調整である。鈍褐色で砂粒混。(4)はS字口縁台付甕の台部。端部内側に折り返し、底面に砂土塗布。器内厚く鈍重。鈍褐色で砂粒混。砥石(5・6)は自然石不定型である。長辺を多面的に使用する。(6)は半欠だがよく使い込まれる。端部の未擦部分には刃痕が残る。石材はともにデイサイトである。

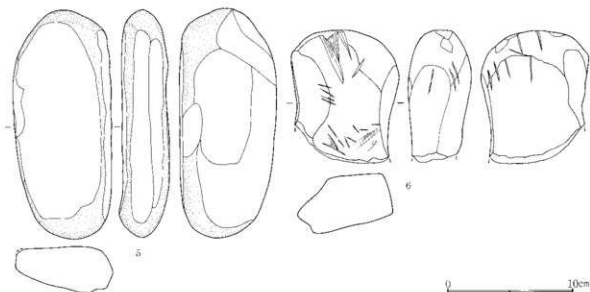
83号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器 甕	(13.6)	—	(7.0)		4	土師器 S字縁台付甕	—	9.2	(6.0)	
2	土師器 台付甕	11.0	9.8	22.4		5	砥石不定型	長 18.0	幅 7.7	厚 4.4	重708g デイサイト
3	土師器 甕	(14.4)	—	(6.8)	略S字口縁	6	砥石不定型	長 10.5	幅 8.6	厚 5.1	重520g デイサイト



第211図 83号住居跡出土遺物(1)

V、古代・古墳時代の遺構と遺物



第212図 83号住居跡出土遺物(2)

84号住居跡 (第213・214図、PL.35・65)

位置は、座標値 $X=615\sim 621$ ・ $Y=-009\sim -015$ の範囲にある。

平面形状は、長短軸長差の無い整った方形を呈する。

規模は、軸長6.1mを測り、壁高は40cmで深い掘形をもつ。床面積は30.0m²を有する。

南北軸方向は、N-12-Wを示す。

埋土は大別2層で、単味な黒褐色土を主層にして壁際には loam 塊層の大きな三角堆積が形成される。自然埋没であろう。住居跡北側の床面に近い埋土中より板状の炭化材および焼土層塊が検出されている。炭化材分布の偏在性や床面より僅かながら浮いた状態などから、住居跡自体の焼失ではなく埋没過程での部分的焼却行為などが考えられる。

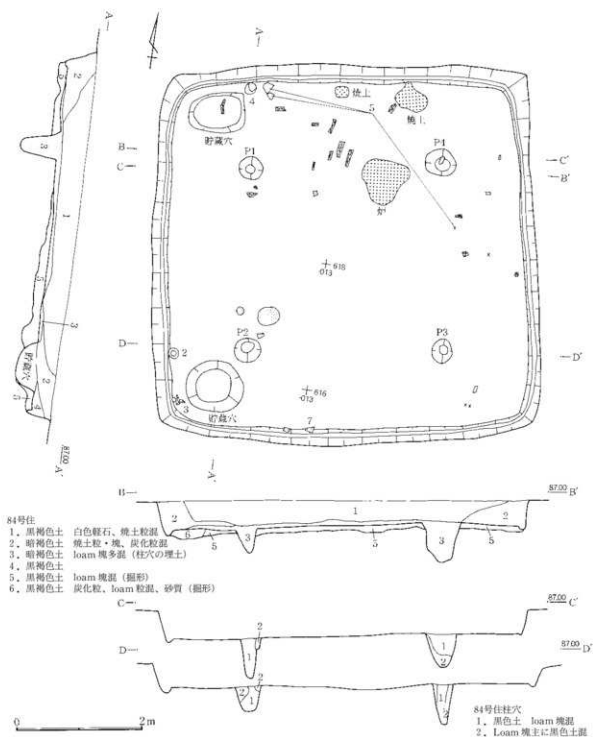
炉跡は、中央やや北東寄りにあり、70×60cm大の不整形な楕円形状である。炉床の形成または遺存状態は軟弱で明瞭な硬質焼土面は残されていない。

貯蔵穴は北西隅と南西隅の2箇所に検出されている。北西隅の貯蔵穴は、90×60cm、深さ20cmでやや方形気味な形状である。南西のそれは、径90cm・深さ30cmの略円形を呈す。

柱穴は4穴が検出され、径40cm前後、深さ40～70cmの掘形をもつ。柱間寸法は、P 1・P 2が2.8m、P 2・P 3は3.1m、P 3・P 4が2.9m、P 1・P 4は3.0mを測る。

壁下の溝は四壁に巡り、幅・深さとも約10cmである。

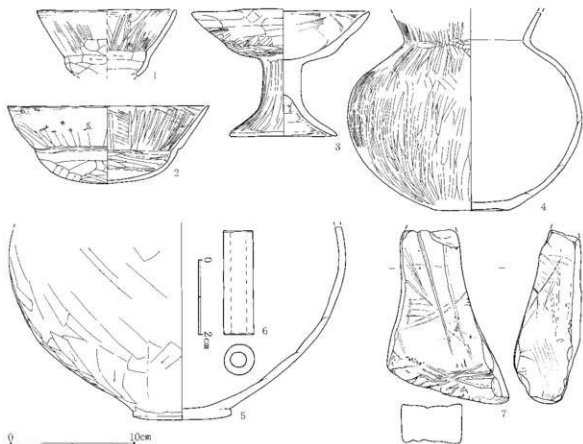
出土遺物は少なく、散在的である。小型丸底(系)鉢は小型(1)と大振り(2)がある。体部は寛削り、口縁部内外面は掻き目後に放射状寛磨きを施す。鈍黄褐色で細土。高坏(3)は粗製であるが内外面に寛磨きを施す。坏部外面は弱い腰を作り浅い塊状に開く。脚部は短い脚柱で据部は、「ハ」の字に開く。灰黄褐色で細土。壺(4)は扁平で強く張る球胴で平底。頸部から胴部は細密な縦位の寛磨き。低腰～底部は橙色で上半は一面に黒褐色に処理されたようである。細土。(5)はやや大型壺の下半。胴部は整った球胴を呈しよう。底部は円盤状にやや凸気味で砂底。腰部に寛削りを施し、胴部は弱い寛磨きで調整。内器面は荒れが顕著。鈍黄褐色で細土。管玉(6)は緑色細粒凝灰岩製。砥石(7)は粗粒輝石安山岩製。大型砥の半欠で広面表裏に深い擦溝各2条、片端縁に著しい擦痕あり。



84号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器 埴	11.0	—	(5.2)		5	土師器 埴	—	7.8	(15.0)	
2	土師器 埴	15.9	—	6.1		6	管玉	長 2.8 径 0.8	孔径0.4	重 6g	緑色細粒硬岩
3	土師器 高坏	14.0	8.4	10.0		7	礫石	長 13.0 幅 9.5	厚 4.5		粗粒輝石安山岩
4	土師器 壺	—	5.8	(15.6)							

V. 古代・古墳時代の遺構と遺物



第214図 84号住居跡出土遺物

127号住居跡 (第215図、PL.35)

位置は、座標値 $X = 576 \sim 578 \cdot Y = -964 \sim -969$ の範囲にある。南側の大半は擾乱によって消失しているため、残存は北壁線の幅状な小範囲である。炉跡・柱穴などの諸施設は検出されない。

平面形状は、方形を呈すると思われるが検出は北壁と僅かな西壁線のため詳細は知りえない。北壁線は約4.5m、西壁線は1.2mほどの残存である。壁高は、約20cmである。

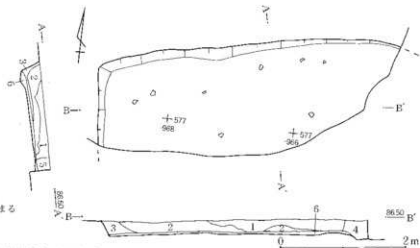
北壁線の軸方向は、N

—77—Eを示す。

遺物は甕類小片で埋土中からのものが多い。

127号住

1. 黒色土 loam 粒、白色軽石混、刷まる
2. 褐色土 loam 塊混、粘性弱まる
3. 褐色土 loam 土塊多混
4. 砂利、現道を造る時の砕石
5. 擾乱、黒色土と黄褐色 loam 土の混土 (現道造成によるもの)
6. 暗褐色土 loam 塊混



第215図 127号住居跡

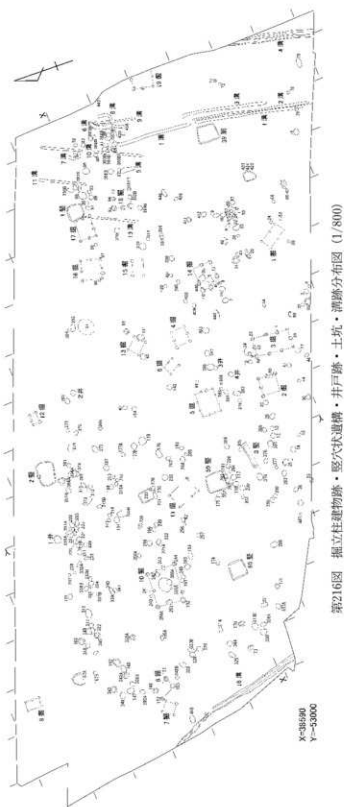
4 古代～古墳時代その他の遺構と遺物

ここで扱う遺構と遺物は古墳時代～平安時代の竪穴住居跡以外の遺構を主とする。主には竪穴状遺構・掘立柱建物跡・井戸跡・土坑・溝跡などが該当する。これら諸遺構の報告もまた竪穴住居跡同様に時代別記述体裁にすべきところではあるが、時代別別は遺物の量・種などを始め、遺構形態など諸属性の貧弱さはその識別をより困難にしておいてここではそれらを遺構種ごとに一括して述べる。ただ、時代等が判明または類推できるものについては個別にまたは大別の方法においても随時述べるように努める。

なお、この他の遺構には土坑と分類したものがあがるが、遺物・土層などで比較的時代判定の容易な古代に帰属するものについてのみ述べることにする。土坑は、検出量が膨大で、比較的縄文時代に帰属するものが目立ち、後章に上げた縄文時代の遺構と遺物の項に節で報告する。

竪穴状遺構は4基を掲載した。遺跡内での分布は散在的である。いずれも方形または長方形形状を呈し、外見的には住居跡と類似する遺構である。この種の遺構は床面の踏み締まりが弱く生活の痕跡が微弱である。炉跡や柱穴が欠如しなお遺物を全くもたないか、あっても極僅かなのが通例である。

掘立柱建物跡は19棟が検出されている。調査区に広く分布しており、主軸方位により類型化の可能性がある。古墳時代から平安時代の各期集落構造について竪穴住居跡とともに単位的構成理解に有意な指標となるべく期待される。その他遺構には、井戸跡4基と墓塚を含む土坑14基、溝跡10余条がある。(第216図)



第216図 掘立柱建物跡・竪穴状遺構・井戸跡・土坑・溝跡分布図 (1/800)

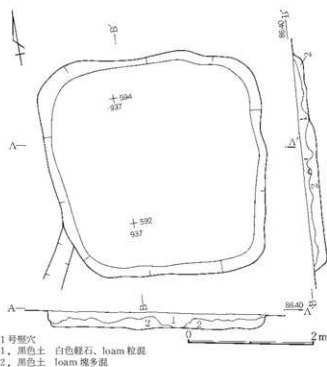
V、古代・古墳時代の遺構と遺物

(1) 竪穴状遺構

当該の類とした遺構には、1号・7号・59号・65号・130号がある。ここでいう竪穴状遺構には定義上の項目は無い(他の遺構について必ずしも明確な定義もっているわけではない)。外観的形狀は竪穴住居跡に類しながら、居住空間としての内部施設、例えば柱穴・炉跡などの基本的構造要素が欠如しているものをいう。ただ、未検出部分がある遺構や重複で部分的に消失してしまった遺構などの事例は通例のこの如く多いため、その判断は往々にして曖昧で恣意的にならざるを得ない。ここでは基本的に調査時の所見に従うこととし、必ずしも否竪穴住居跡ではないことをお断りしておく。なお、帰属時代についても確定に足る条件は無いが、埋土の状態や埋土中の遺物などを参考にして、凡そ古墳時代前期に近い時代に帰属する可能性が高い。また、集落内においては竪穴住居跡の付随施設的な機能を持つと考えられる。

1号竪穴状遺構 (第217図)

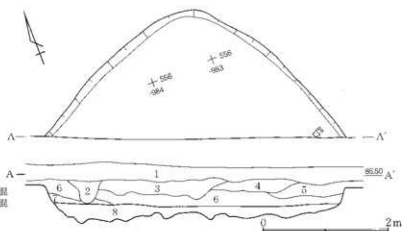
位置は、 $X=591\sim 596$ ・ $Y=-934\sim -937$ の範囲にある。平面形状は東西・南北軸長とも同規模の略隅丸方形を呈するが、南壁線が短く形状が歪む。規模は軸長約3.5mを測り、壁高約30cm、で比較的深い掘形をもつ。床面積は9.30㎡を有する。南北軸方位はおよそ $N-4^{\circ}-E$ を示す。埋土は大別2層になろう。下位層は厚めの堆積で loam 塊が多量に混ざる黒色土で人為的埋土の可能性が高い。床面は平坦をなすが、踏み締りなどによる硬化面は見られなかった。出土遺物も検出されていない。黒色土を主体にする埋土の状況から古墳時代前期に属する可能性が高い。



第217図 1号竪穴状遺構

7号竪穴状遺構 (第218図)

位置は $X=554\sim 556$ ・ $Y=-981\sim -985$ の範囲にある。南側に及ぶ大半の部分は調査区域外にかりり全容は不



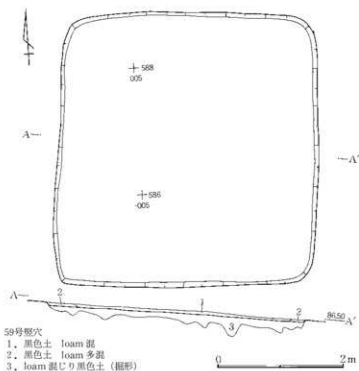
第218図 7号竪穴状遺構

明であるが形状は隅丸の方形を呈すると思われる。略北壁線・東壁線とも約3.5mの範囲を検出した。壁高は約30cmで比較的深い掘形をもつ。埋土は下位に多量の loam 塊混じり暗褐色土を主体にする。当跡にはほとんど住居を窺わせる施設は検出されていない。しかしながら、掘形の形状や埋土と共に安定床面下に凹凸の掘形面が存在することから竪穴住居跡の一部である可能性は高い。また、掘形精査時で北隅下位面に検出された土坑状の落込みは縄文時代の遺構を思わせる埋土であるとの調査所見があり、当跡はそれより新しい縄文時代以降の所産になる。

59号竪穴状遺構 (第219図)

位置は、座標値 X=584~588・Y=-002~-006の範囲にある。当跡に関しては炉跡・柱穴・貯蔵穴などの諸施設のほか、出土遺物もほとんど検出されていないため竪穴状遺構とした。平面形状は、南北軸が僅かに長い方形を呈する。規模は、長軸4.5m・短軸4.1mを測り、壁高は僅か5cmの浅い掘形である。床面積は16.5㎡を有する。長軸方位は、N-3°-Eを示す。

掘属する時代は出土遺物などが得られず判然としないが、埋土の粘性のある黒褐色土の感触から古墳時代前期に属すると考えられる。

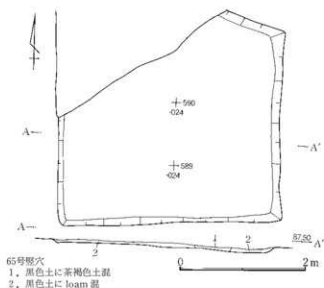


第219図 59号竪穴状遺構

65号竪穴状遺構 (第220・221図)

位置は、座標値 X=587~591・Y=-022~-025の範囲にある。西北部は攪乱土坑によって消失している。平面形状は、僅かに残る北壁線が鈍角方向に延びる傾向にあるが東西軸が勝る略方形を呈しよう。規模は、長軸3.5m短軸3.0mを測り、壁高は僅か6cm浅い掘形である。床面積は11.6㎡を有する。長軸方位は、ほぼN-90°-Eを示す。炉跡・柱穴・など諸施設は新設されず竪穴状遺構とした。

遺物は、小型高坏・甕台部など土器小破片がある。いずれも埋土からの出土である。小型高坏(1)は内外面に放射状磨きを施す。



第220図 65号竪穴状遺構

V. 古代・古墳時代の遺構と遺物

橙色を呈し細土。口径10.4cm。甕台部(2)は端部内側への折り返しが無く、単口縁の甕の台部である。外面縦位の細目掻き目、鈍黄褐色で細砂泥。底径11.3cm。(3)はS字口縁甕台部である。鈍黄褐色で細砂泥。底径11.4cm。



第221図 65号竪穴状遺構出土遺物

(2) 掘立柱建物跡 (第222～231図、PL.36)

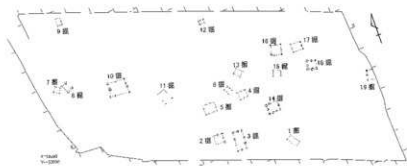
塚下遺跡に検出された掘立柱建物跡は総数19棟である。東西に長辺をなして展開する調査範囲にあって、ほぼ横断的に分布する。建物規模は特に目立つような大規模のものは存在しない。柱間形状から概観すれば、1×1間は5棟、1×2間は4棟、2×2間が6棟、2×3間が3棟、不明1棟の割合である。なお、総柱の建物跡は無い。掘立柱建物跡の帰属時期については、竪穴住居跡を中心とする集落構造に関連しようが個々の遺構からの同定は難しく、分布状況でも特徴的な偏在性は見られない。ここでは軸線方位による分類を試みて後、各時期の竪穴住居跡との配置関係・重複などを考慮して、集落構造の視点からその構成と時期的な位置付けとを試案しよう。

軸線方位による分類は、真北に対する略南北軸の傾きをもって区別した。結果、次の3類に大別できた。

- 1類 南北軸方向 N-30°-W前後の傾きをもつ。1号・6号・8号・11号・13号掘立柱建物跡の5棟。
- 2類 南北軸方向 N-18°-E前後の傾きをもつ。15号・16号・18号・19号掘立柱建物跡(7号?) 4～5棟。
- 3類 南北軸方向 N-6°-E前後の傾きをもつ。2号・3号・4号・5号・9号・10号・12号・14号・17号掘立柱建物跡の9棟。

1類の5棟は1×1間または1×2間の建物であり、柱穴の掘形は脆弱である。分布は調査区全体に散在的な状況である。各時代の竪穴住居跡群との配置状況及び重複関係を比較検討して、古墳時代前期の集落構成に適合する可能性が高いと考えられる。例えば、11号掘立柱建物跡は83号・66号・63号住居跡の弧状配置によって生じる東側の空間地にある。さらに、6号・13号掘立柱建物跡は69号・76号・79号住居跡の配置が作り出す東側空間地に配される。建物規模の小ささや柱穴の脆弱さもまた、当該古墳時代前期掘立柱建物跡の様相に著しく違うものではない。

2類の4ないしは5棟は北東部に分布の偏りがあり、他の類より偏在性が強い。当類を平安時代初期の集落構成としたが、竪穴住居跡との配置については当該期であることの決定的要件を満たしている



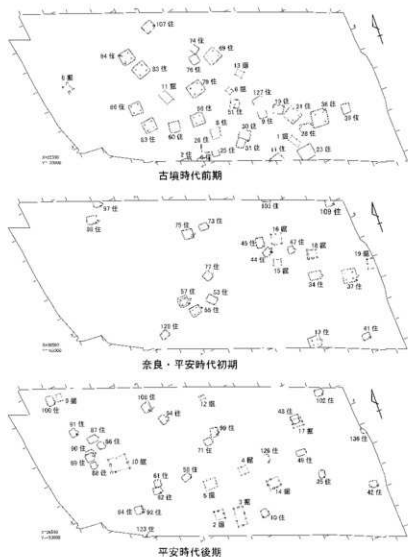
第222図 掘立柱建物跡分布図 (1/1,600)

わけではない。重複関係をはじめ他時期竪穴住居跡との関係が消去法的に得られた要件を満たしているにすぎない。なお、7号掘立柱建物跡は規模・軸線方位とも若干異なり、変則的扱いが必要になろう。

3類の掘立柱建物跡は規模・数とも他類に勝る。平安時代後期の集落構成とした。相対的な要件にならざるを得ないが、竪穴住居跡との重複は他時期と比べ当該期が極めて少ないこと（ただし17号掘立柱建物跡は不適合）。竪穴住居跡との配置に整合性が認められること。また、当該期に集落構成が充実・拡大した様相が窺われ、掘立柱建物跡のあり方にもそれが反映されたと考え（竪穴住居跡が全て同時存在でないことは自明であるが、変遷が活発であることは集落構成にも深く関係し、掘立柱建物跡の数にも反映するであろう）。

以下に記載する掘立柱建物跡のうち、9号・12号掘立柱建物跡は既刊になる『塚下遺跡(1)』2006で報告されたものであるが、集落構成を考える上で必要なためにここに再録した。

柱間寸法など計測値については、基本的には柱穴の中央間を計測した。また、建物面積は各隅部柱穴の内法を直線で結線した範囲を計測した。



第223図 掘立柱建物跡帰属分布図 (1/1,600)

V. 古代・古墳時代の遺構と遺物

1号掘立柱建物跡 (第224図、PL.36)



位置は、座標値 $X = 550 \sim 556 \cdot Y = -955 \sim -960$ の範囲にあり、古墳時代中期の16号住居跡に重なる。桁行2間・梁行1間の北西～南東棟の建物跡である。南東隅柱穴位置がやや内に偏り、柱筋が僅かに歪む。建物面積は9.3㎡を有する。桁行き方向はN-32°-Wを示す。

西面の桁行き全長は5.4m、柱間寸法は2.8×2.6m。東面は5.1mで、柱間寸法は2.9×2.2m。梁行き・柱間寸法は等間で2.5mを測る。柱穴掘形は略楕円形で上径40～50cm、深さ30～50

cmで底面の痕跡が柱は径10～12・3cm程度の材になろう。やや脆弱な建物の感がある。

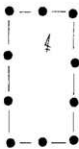
2号掘立柱建物跡 (第224図、PL.36)



位置は、座標値 $X = 564 \sim 569 \cdot Y = -986 \sim -991$ の範囲にあり、古墳時代前・中期の8号・15号・27号、平安時代3号住居跡とそれぞれ重複するが、いずれより新しい所産と考える。南西隅と南面中柱は重複によるためか検出されていないが桁行き、梁行きとも2間の正方形形態で略東西棟の建物跡である。建物面積は約11.6㎡になろう。西面柱筋がやや開き気味で形状は歪むが、南北軸方位はN-6°-Eを示す。

北面長は4.4m、柱間は2.3×2.1m。東面長は4.0m、柱間寸法は2mの等間である。柱穴は堅牢な掘形をもち、略円形で上径60～70cm、深さ60～100cmを測る。なお各柱筋の中柱は角位置柱よりその径・深さとも小規模である。柱穴下部及び底面の観察より、柱材径は約15cmになろう。

3号掘立柱建物跡 (第225図、PL.36)



位置は、座標値 $X = 558 \sim 567 \cdot Y = -977 \sim -983$ の範囲にあり、古墳時代前期・中期の27号・30号・31号住居跡及び平安時代4号住居跡と重複するがいずれより新しい所産である。当遺跡では10号掘立柱建物跡に次ぐ大型建物跡で、柱穴の掘形についてはそれよりも充実している。桁行き3間、梁行き2間の南北棟の建物跡である。建物面積は24.8㎡になろう。桁行き方向はN-6°-Eを示す。

桁行き西面全長は8.3m、柱間は北側より2.8×2.9×2.6m。東面の桁行き全長は8.0mで柱間寸法は北側より3.1×2.5×2.3mである。梁行きは南・北面とも4.0mで柱間寸法はいずれも2.0mである。建物面積は33.2㎡である。柱穴は方形の形状が多く、70×60cmから長辺が1mに及ぶものもある。深さは40cmから80cmの掘形をもつ。柱穴の掘形形状及び規模では北東部約15mに位置する14号掘立柱建物跡が同類であり、なお、軸線がほぼ同方位である。

4号掘立柱建物跡 (第225図、PL.36)



位置は、座標値 $X = 579 \sim 583 \cdot Y = -969 \sim -973$ の範囲にある。桁行き2間、梁行き1間の東西棟の建物跡であるが平面形状は方形に近い。建物面積は8.7㎡を有する。桁行き方向はN-87°-Eを示す。

桁行きは南・北面とも3.6mで柱間寸法も1.9×1.7mの対等間である。梁行きは東・西面とも3.3mを測る。柱穴掘形は楕円形状で径40～50cm、深さ40～50cmである。

5号掘立柱建物跡 (第226図、PL.36)



位置は、座標値 $X=579\sim 583$ ・ $Y=-984\sim -990$ の範囲にあり、平安時代5号・54号住居跡と重複しこれらより新しい時期の所産である。北東隅の1穴が未検出であるが、桁行き・梁行きとも3間の東西棟の建物跡である。建物面積は19.2㎡、桁行き方位はN-88°Eを示す。

桁行き南面全長5.2mで柱間寸法は西より1.3×2.3×1.6m、北面の柱間寸法は1.6×1.6×2.0mを測る。梁行き西面全長4.3m、柱間寸法は北側より1.6×1.2×1.5m。東面柱間は北側より1.6×1.2×1.5mで西面と同寸法にならう。柱穴は径40cm程度の小径の円形掘形で、深さ40～70cmを測る。

6号掘立柱建物跡 (第226図、PL.36)



位置は、座標値 $X=584\sim 587$ ・ $Y=-974\sim -978$ の範囲にある。桁行き・梁行き1間の略南北棟の建物跡で、桁行き東面には間柱がある。建物面積は3.8㎡、桁行き方位はN-25°Wを示す。桁行き全長は2.6mで東面柱間寸法は1.4×1.2m、梁行き全長は2.2mである。柱穴掘形は径30～40cm程度の小穴になるが、深さはおおよそ60cmで比較的深い掘形をもつ。

7号掘立柱建物跡 (第226図)



位置は、座標値 $X=614\sim 618$ ・ $Y=-044\sim 048$ の範囲にあり、8号掘立柱建物跡に隣接する。桁行き・梁行き1間の正方形形態の建物跡である。建物面積は4.5㎡を有し南北軸方位は略N-37°Eをしめす。

柱間寸法は2.6×2.5mで対面柱間が同寸で異なり小さく歪む。柱穴掘形は径約40cm、深さ50～60cmで規模の割には明瞭な掘形をもつ。

8号掘立柱建物跡 (第227図)



7号掘立柱建物跡に隣接し、桁行き・梁行きは1×1間である。柱穴の掘形としてはやや浅く、平面形も粗放な形状を呈し、掘立柱建物跡としては疑問が残る。おおよそに柱筋が通ることから建物跡として掲載する。位置は座標値 $X=612\sim 618$ ・ $Y=-039\sim -044$ の範囲にある。

桁行き3.6m、梁行き2.1～2.3m、掘形は1m前後の大径楕円形で、深さ30cmほどである。建物面積は3.3㎡で、梁行き方位は略N-23°Wを示す。

9号掘立柱建物跡 (第227図)



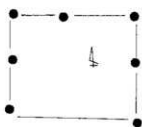
位置は座標値 $X=642\sim 646$ ・ $Y=-032\sim -035$ の範囲にある。桁行き・梁行きは1×1間で、桁行き東面、梁行き南面に間柱をもつ略南北棟の建物跡である。建物面積は4.5㎡を有し、桁行き方位はN-5°Eを示す。

桁行き3.2m、東面柱間は1.7×1.5m。梁行き2.0m、南面柱間は1×1mである。柱穴掘形は楕円形を呈し径30～50cm、深さ30～60cmを測る。

10号掘立柱建物跡 (第227図)

位置は、座標値 $X=602\sim 610$ ・ $Y=-016\sim -026$ の範囲にある。北側で平安時代85号住居跡と重なるが新

V、古代・古墳時代の遺構と遺物



旧関係は不明である。桁行き・梁行きとも2×2間の東西棟の建物跡であるが、桁行き南面の中柱は検出されていない。四面全長は不統一で平面形状はやや歪む。建物面積は約40㎡を有し、桁行き方位は北面でN-85°-Wを示す。

桁行き南面全長8.2m、北面7.6mで柱間寸法は3.1×4.5m。梁行き東面全長6.7m、柱間寸法は2.7×4.0m、西面全長6.1m、柱間寸法は2.9×3.2mである。柱穴掘形は西面の3柱穴はやや大径で1m超の楕円形状である。他は70cm前後

の径をもつ。深さは30~70cmと深淺の差が大きく、掘立柱建物跡としては疑問の残る遺構の一つではある。

11号掘立柱建物跡 (第228図)



位置は、座標値X=59~1597・Y=-53000~-006の範囲にある。桁行き・梁行きとも1×1間で梁行き西面に間柱をもつ、略南北棟の建物跡である。建物面積は16.3㎡を有し、桁行き方位はN-18°-Wを示す。

桁行き全長5.5mで西面柱間は3.7×1.8m、梁行きは南面3.7m、北面3.4mを測る。柱穴掘形は径30~50cmの略楕円形で、深さ30~50cmを測る。

12号掘立柱建物跡 (第228図)



位置は、座標値X=618~620・Y=-974~-976の範囲にある。梁行き・桁行きとも1×1間で桁行き北面には間柱になるかと思われる1穴がある、略東西棟の建物跡である。建物面積は2.0㎡を有し、桁行き方向は略N-90°-Eを示す。

桁行き全長2.8m、北面間柱寸法は1×1.3m、梁行き全長1.5~1.6mである。柱穴掘形は径40、×50cmの楕円形で深さ20~40cmを測る。

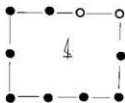
13号掘立柱建物跡 (第228図)



位置は、座標値X=589~593・Y=-967~-971の範囲にある。桁行き、梁行き1×1間で略南北棟の建物跡である。建物面積は5.8㎡を有し、桁行き方位はN-36°-Wを示す。

桁行き寸法は3.2m、梁行き寸法は南面2.8m・北面2.6mである。柱穴は径50cmほどの楕円形で深さ60cmの比較的深い掘形をもつが北東隅の一穴のみ20cmで浅い。

14号掘立柱建物跡 (第229図)



位置は、座標値X=566~572・Y=-957~-965の範囲にあり、古墳時代前期19号住居跡と重複するがこれより新しい所産と考えられる。桁行き3間、梁行き2間の東西棟の建物跡であるが重複のためか北面東側の2柱穴が検出されていない。建物跡面積は約21.5㎡になろう。桁行き方位はほぼN-90°-Eを示す。

桁行き寸法は南面で全長7.0m、柱間寸法は2.5×2.0×2.5mで対北面の西側からの2柱間も2.5mになる。梁行き寸法は西面で全長5.5m、柱間寸法は北側から2.5×3.0mで対東面の南側からの2柱間は2.5mを測る。柱穴は平面形状が略方形をなし、径130×90cmの極めて大きな掘形をもつ。深さは100~40cmほどにかなりの差違がある。相対的に平面掘形に比して浅い掘り込みの穴が多いが、重複等に纏わる削平のためかとも思われる。柱穴の掘形形状及び規模では、南西方約15m

にある3号掘立柱建物跡に類似し、なお、軸線がほぼ同方位である。出土遺物には須恵器碗がある。

15号掘立柱建物跡 (第229図)



位置は、座標値 $X=582\sim 586$ ・ $Y=-951\sim -955$ の範囲にある。桁行き・梁行き 1×1 間の略東西棟の建物跡であるが桁行き北面寸はやや短く小さく歪む。建物面積は 5.5m^2 を有し、桁行き方位は $N-71^{\circ}-W$ を示す。

桁行き寸法南面は 3.5m 、北面が 3.2m 。梁行きは東・西面とも 2.6m の間隔である。柱穴掘形は $50\sim 80\text{cm}$ の楕円形で深さ $20\sim 30\text{cm}$ を測る。

16号掘立柱建物跡 (第230図)



位置は、座標値 $X=591\sim 597$ ・ $Y=-946\sim -952$ の範囲にある。 2×2 間の正方形形跡の建物跡である。四面中柱穴はともに柱筋より僅かに外側へ外れる。建物面積は 15.9m^2 を有し、南北軸方位は $N-16^{\circ}-E$ を示す。

四面寸法はいずれも 4.5m の同寸、柱間寸法もまた中柱穴は同寸中間にある。柱穴掘形は角柱穴を長径 $40\sim 60\text{cm}$ のやや大きめの楕円形に、中柱穴は $30\sim 50\text{cm}$ の小穴気味に穿つ。深さは $20\sim 30\text{cm}$ 前後であるが、西面中柱穴は小径に比して 60cm と深い。

17号掘立柱建物跡 (第230図)



位置は、座標値 $X=589\sim 594$ ・ $Y=-938\sim -943$ の範囲にある。平安時代48号住居跡と重複するがこれより旧く、北面の柱穴が一部消失したと考えられる。桁行き3間梁行き2間の東西棟の建物跡になるが桁行き東面寸法が若干短く形状が歪む。建物面積は 12.0m^2 を有し、桁行き方位は $N-87^{\circ}-W$ を示す。

桁行き 4.6m 、南面柱間寸法は西より $1.5\times 1.3\times 1.3\text{m}$ 。梁行き東面 3.5m 、柱間寸法は北より $1.7\times 1.8\text{m}$ 、西面 3.6m 、柱間寸法は $2.0\times 1.6\text{m}$ である。柱穴掘形は 60cm ほどの略円形を呈し、深さは 30cm 前後のものが多い。

18号掘立柱建物跡 (第231図)



位置は、座標値 $X=579\sim 584$ ・ $Y=-935\sim -940$ の範囲にある。 2×2 間の正方形形跡の建物跡であるが東面の中柱穴は穿たれていない。建物面積は 7.6m^2 を有し、南北軸方位は $N-16^{\circ}-E$ を示す。

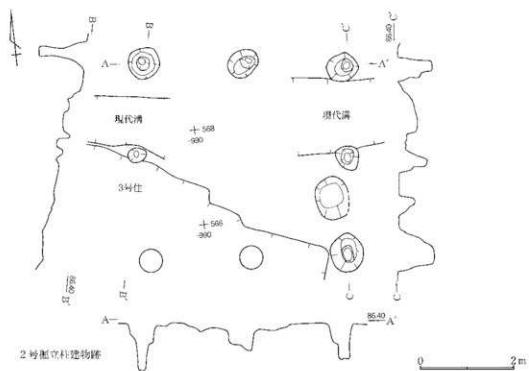
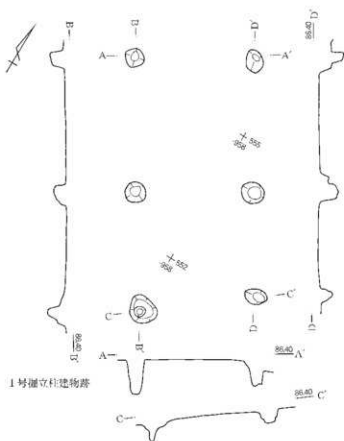
四面ともに全長 3.8m 、柱間寸法は $2.0\times 1.8\text{m}$ で対面とも同寸である。柱穴掘形はいずれも大径で $80\sim 100\text{cm}$ の円形又は隅丸方形に近い。深さは $30\sim 60\text{cm}$ に掘り込む。

19号掘立柱建物跡 (第231図)

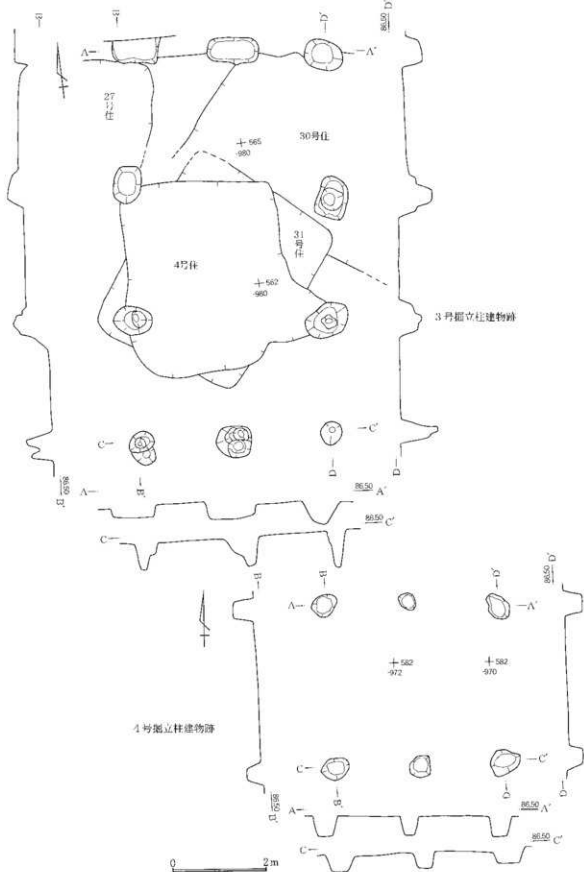


位置は、座標値 $X=563\sim 570$ ・ $Y=-913\sim -916$ の範囲にあるが、東側は調査区域外にかかり、全体を検出できていない。西面2間、南・北面は各1間分の柱穴を確認した。南北軸方位は $N-13^{\circ}-E$ を示す。西面全長 6.0m 、柱間寸法は北より $2.7\times 3.3\text{m}$ 。南・北面の柱間はともに 3.0m を測る。柱穴掘形は、 $50\sim 80\text{cm}$ ほどの略円形または方形状を呈し、深さは $10\sim 50\text{cm}$ である。

V. 古代・古墳時代の遺構と遺物

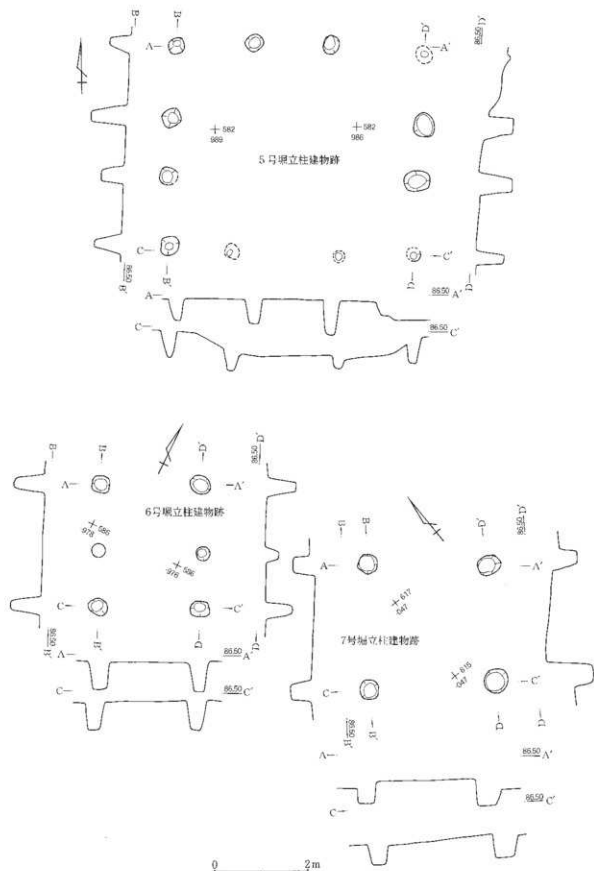


第224図 1号・2号掘立柱建物跡

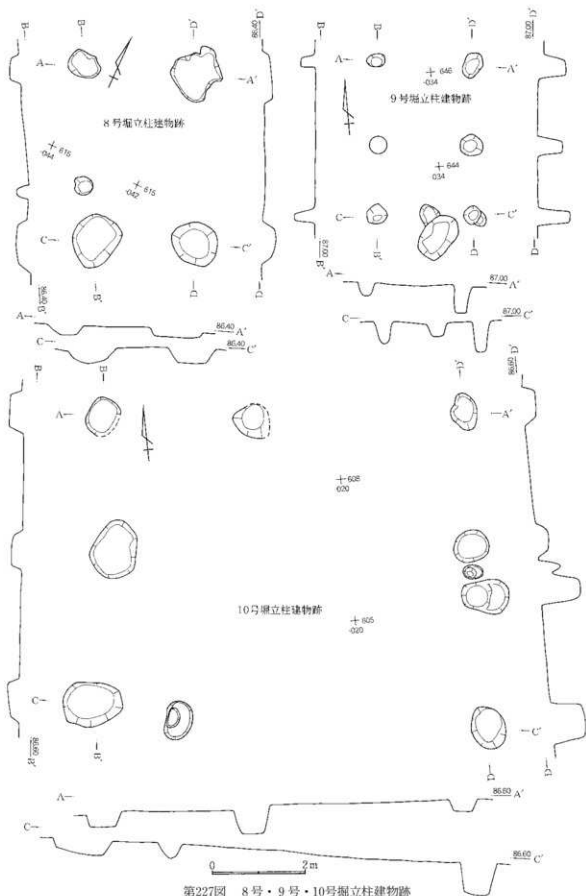


第225図 3号・4号掘立柱建物跡

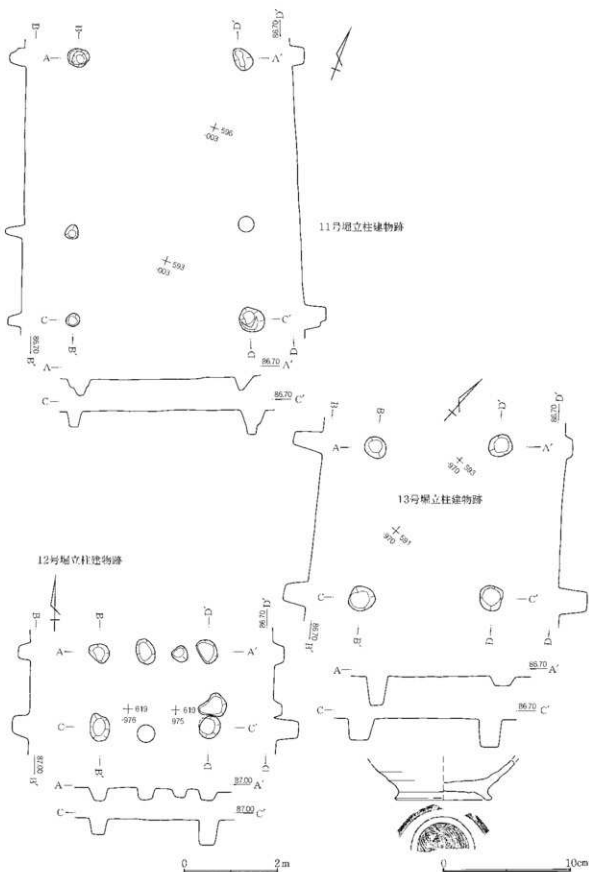
V. 古代・古墳時代の遺構と遺物



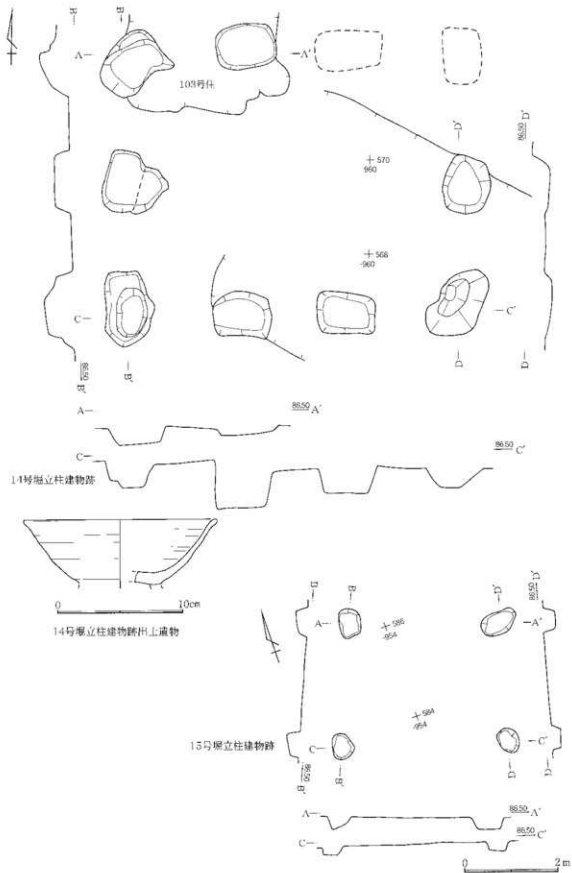
第226図 5号・6号・7号掘立柱建物跡



V、古代・古墳時代の遺構と遺物

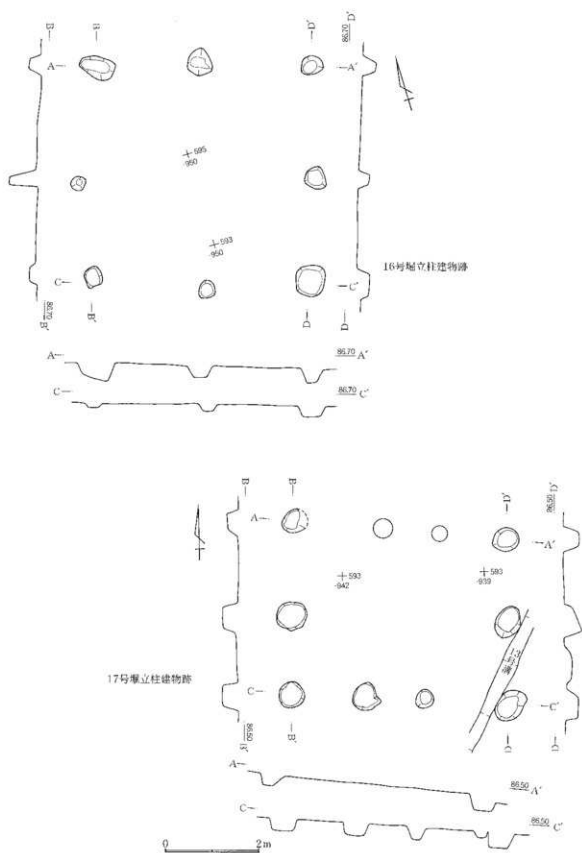


第228図 11号・12号・13号掘立柱建物跡・出土遺物

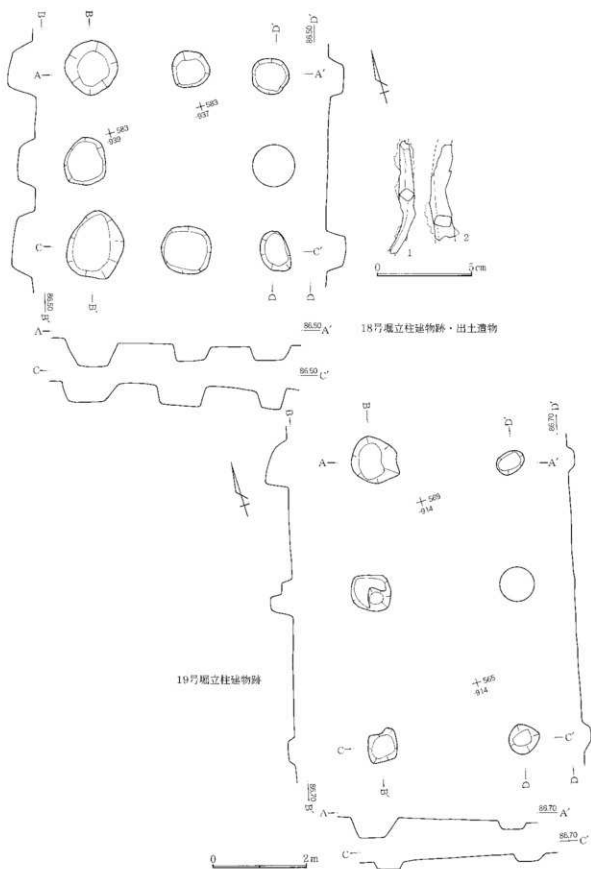


第229図 14号・15号掘立柱建物跡・出土遺物

V. 古代・古墳時代の遺構と遺物



第230図 16号・17号掘立柱建物跡



第231図 18号・19号掘立柱建物跡・出土遺物

V、古代・古墳時代の遺構と遺物

(3) 井戸跡

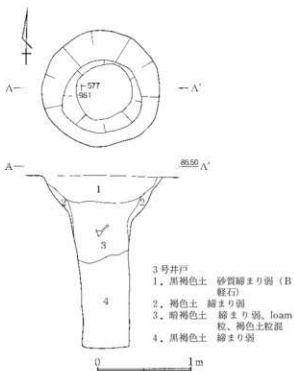
塚下遺跡で検出された井戸跡は遺跡北縁域（県側道部）での2基と本縁部の2基で計4基となる。古墳時代・奈良～平安の各時代とも竅穴住居跡45軒以上の集落規模を有しているが、集落の規模から見て井戸跡がかなり少ない状況となっている（全ての竅穴住居跡が同時並行的に存したものではないという問題はあがる）。ちなみに、大略時代別の竅穴住居跡数に対する井戸跡（その出土遺物から時期を推して）は、古墳時代前期29棟に1基（県側道部1号井戸跡）、奈良～平安初期16棟に2基（3・4号井戸跡）、平安中期13棟または平安後期26棟に1基（県側道部2号井戸跡）の割合である。

塚下遺跡の水利環境については、西側に接してある前道下遺跡と塚下遺跡を画する開析谷に負うところが大きいようである。loam 台地上に展開する遺跡の西側に湧水地点をもつ開析谷は、南方へ扇形に展開して台地の南縁を区切る。遺跡形成の端緒となる旧石器時代・縄文時代は、この間近にある湧水地点と谷底地環境によって水の利便に恵まれ、後世においても取水のための井戸掘削の労を免れていたであろうか。

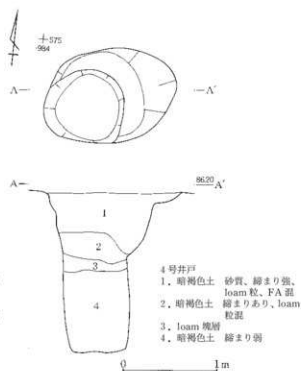
3号井戸跡（第232・234図、PL.36・65）

位置はX=576～577・Y=-980～-981の範囲にある。古墳時代中期の24号住居跡と重複する。平面形状は略円形を呈する。上縁は大きく開口し、検出面より約70cmで窄まり、筒状になって底面に至る漏斗状断面形である。規模は上縁径1.9m・中位径80cm・底径50cm・深さ1.8mを測る。埋土は最上位層にB軽石の混入する黒褐色土が埋まる。下位層は締めり無く粘性の弱い褐・暗褐色・黒褐色土で埋まり、loam 粒・塊の混入も多い。壁面の崩落はほとんど見られず、顕著な湧水線を示すような痕跡は無い。

出土遺物の中ほどやや上部で土師器小型甕・須恵器甕が出土している。この甕は当跡の西方約20mの距離



第232図 3号井戸跡



第233図 4号井戸跡

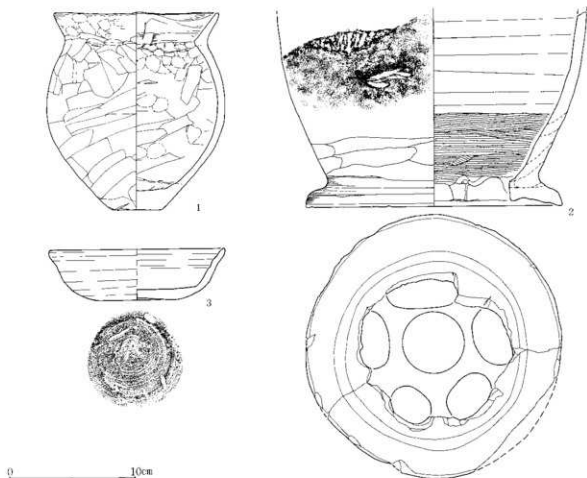
にあり、奈良時代末期から平安時代初期に属する57号住居跡出土のものと同接する。土師器壺(1)は口縁部内縁が鋭く、「く」の字状に屈する外面肩部互斜位・胴部下半斜位寛削り。内面斜～横位の寛削り、口縁部と見込み部に顕著な罫止め痕がある。鈍黄褐色で細土。形態・作り技法は古墳中期的様相が強く24号住居跡よりの混入と思われる。須恵器甕(2)は底部に受け羽が付き、周5孔で中心1孔の計6孔か。寸胴鉢形になろうか。外面胴部に把手の剝落痕がある。対に貼付されたものであろう。内面下位は強い掻き目状調整痕。

4号井戸 (第233・234図、PL.36・65)

位置はX=574・Y=-982～-983の範囲にある。3号井戸と同様に古墳時代中期の24号住居跡と重複しこれより新しい。平面形状は上縁が北東方に偏して広く片側に大きく開口する。規模は上縁径1.7m・中段径1.0m・底径70cm・深さは検出面より2.5mを測る。埋土は大別4層からなり、上位層は砂質でFA(榛名山降下火山灰)混入の所見がある。壁面には湧水高を示すような崩落部分は見られない。遺物は出土層位不明で須恵器杯1点がある。須恵器杯(3)は浅めの体部で腰部に丸をもつ。底部は回転寛削り。灰白色を呈し、細土。

3号・4号井戸跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器 壺	13.0	4.2	15.6	底厚	1	須恵器 杯	14.0	7.4	4.0	右回転寛削り
2	須恵器 甕		20.3	15.2	取っ手痕、底部6孔						



第234図 3号・4号井戸跡出土遺物

V. 古代・古墳時代の遺構と遺物

(4) 土坑 (第235・236図、PL.65)

ここに掲載した土坑は奈良～平安時代を中心とした古代に属するものであるが、塚下遺跡において検出された同種の遺構は数多にのぼる。しかし、帰属する年代・時期等の確定される遺構は少なく調査所見などにもそれらについて言及・記録されることは少ない。ここでは、遺物を伴う事例や土層などでおおよそ推定できるものに限った。土坑という極めて曖昧な呼称に示されるように、各遺構の性格付けは不明である。強いでは、75号土坑は、狭小で深めの掘形で拳大の転石とともに形状の知れる程度に遺存する土師器の大形甕と須恵器壺が出土する。恣意的な埋納の可能性が高く、骨蔵施設とも考えられるが骨片などの所見は無い。遺物の示す年代はおおよそ8世紀の後半から9世紀の前半代にあらう。

145号土坑は長径楕円形を呈し、角釘と思しき数個の鉄片が出土している。また遺構の平面形状などから同形態の446号土坑とともに土壌墓と考えられる。その他4号土坑からは角釘、363B土坑からは柄部に木質の残る刀子の出土を見るが両者とも単純円形土坑の体をなし、遺物を通してその性格は窺い難い。

土坑一覧 (古代他)

(断面形状 A:箱形 B:鏡形 C:U字形 D:底凹凸形 E:深箱形) (単位:cm)

土坑名	図番号	PL	位	置	平面形状	断面形状	長	短	深	遺物・出土遺物		
4号	235		X=569	Y=-962	-963	円形	C	74	68	18	角釘	
75号	235	68	X=537	Y=-538	-933	-934	円形	E	67	63	45	須恵器壺・土師器甕
145号	235		X=610	Y=-612	-988	-989	長楕円形	C	250	90	50	角釘・鉄塊・釘口極小
358B号	235		X=581	Y=-582	-930	-931	円形	C	88	89	50	須恵器片
362B号	236		X=582	Y=-922		円形	A	73	62	32	須恵器塊	
363B号	236		X=581	Y=-925	-926	円形	A	82	76	28	刀子・鉄塊	
364B号	236		X=581	Y=-923	-924	円形	C	87	67	47	須恵器塊	
365B号	236		X=578	Y=-579	-925	-926	楕円形	A	99	70	46	土師器片
366B号	236		X=578	Y=-924	-925	円形	E	80	76	51	須恵器塊	
424号	236		X=552	Y=-554	-944	-946	不整形長方形	A	310	119	24	須恵器塊
446号	236		X=572	Y=-939	-941	長楕円形		167	61	20		

出土遺物

4号土坑 (第235図) 角釘にならう。基部・先端部ともに欠損。4.3×0.7×0.5cm。

75号土坑 (第235図 PL.65) (1)は須恵器瓶胴部。残器高10.1cm・胴径20.2cm・底径13.6cm。灰黄色で焼成良(2)は土師器球胴。1/2。口径24.1cm・底径7.5cm・器高30.0cm・胴部最大径30.8cm。橙色を呈す。

145号土坑 (第235図) (1・2)は角釘にならう。(1)は6.2×0.6cm、(2)は2.8×0.4cm

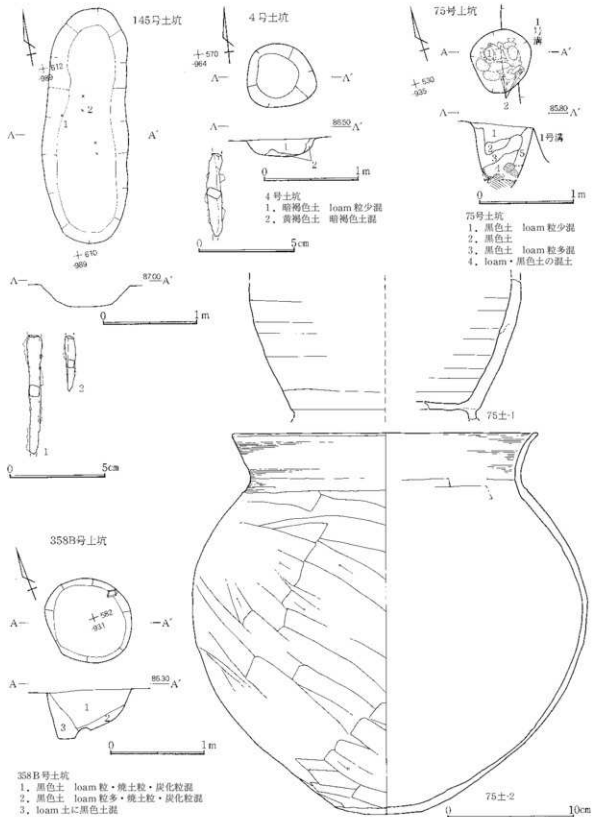
362B土坑 (第236図) (1・2)ともに薄手須恵器壺口縁部小片である。(1)は口径16cm、灰白色を呈す。(2)は口径14.4cm、褐色を呈し酸化炎焼成。

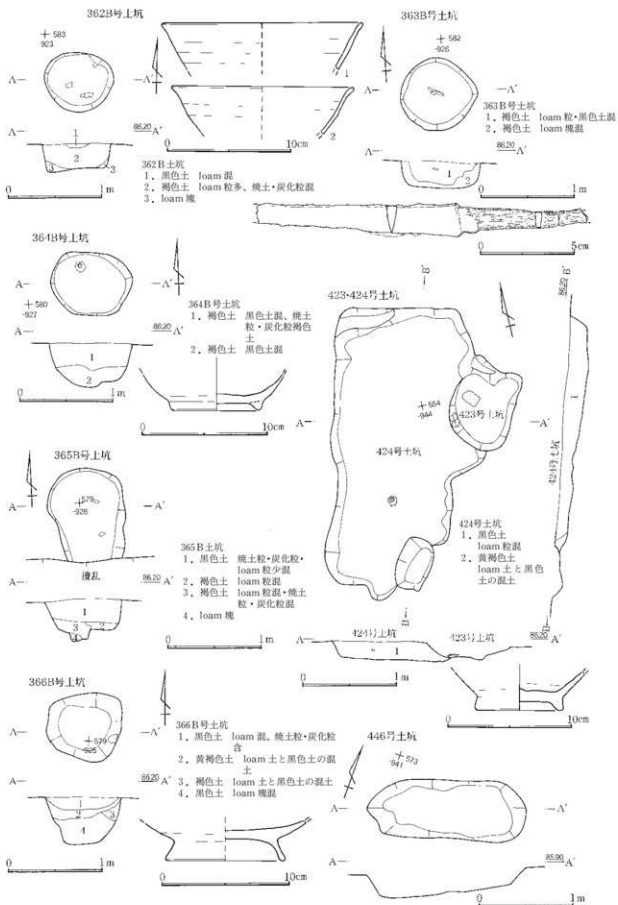
363B号土坑 (第236図、PL.65) 刀子、刃先および柄先が欠損する。柄部には木質が残る。刃長10.5cm・刃幅1.8~1.0cm・胴厚0.4cm、柄長6.7cm・柄幅1.3~0.7cm。

364B土坑 (第236図) 須恵器塊底部。付高台・回転糸切り。底径7.0cm。鈍灰黄色で焼成甘い。

366B土坑 (第236図) 須恵器塊底部。底部に不明墨書あり。高めの付高台・回転糸切り。底径9.4cm。浅黄橙色で酸化炎焼成軟質。

424号土坑 (第236図) 須恵器境底部。付高台・回転系切り。底径7.0cm。橙色を呈し酸化炭焼成ながら比較的硬質。





第236図 土坑・出土遺物(2) 362B号・363B号・364B号・365B号・366B号・423号・424号・446号土坑

(5) 溝跡 (第237・238図、PL.37・38・65)

塚下遺跡で検出された溝跡は10余条である。遺跡の中心部は低台地の突端部にあたり、北側は台地基部方向で、南に緩く傾斜する地勢となる。東・西端は埋没谷への移行地形となり台地縁辺部を形成する。溝跡はこの縁辺に沿うように南北走し、溝跡はいずれも狭長ではあるが幅・深さとも小規模である。調査区西端に検出された16号溝は上縁幅約1.2m、深さ45cmを測り、検出された溝中では明瞭な掘形を残している。東・西方の各地形成は湧水流出が起源であり特に、西方の谷頭には豊富な湧水が知られている。これら溝跡の機能としては、台地縁辺という配置や走行方などを勘案すればまず専水溝的な性格が考えられる。また、調査所見では特に言及されていないが最近の調査事例からは、1号・2号・3号溝とこれらに併走する4号溝を対して道路跡の側溝との見方もできるが、両溝間幅は約15mの大幅員となり、少なくとも古代の道路遺構の規範では考えにくい。溝跡の層属年代は判然としないが、埋土上位層にAs-B軽石混土の堆積が見られる1号・2号・5号・6号溝跡がある。また、調査区東部の溝跡の多くは平安時代堅穴住居跡を貫いて開削されている。このことから、溝跡の層属時代は古代末から中世以降の可能性が高い。

出土遺物 (第238図、PL.65)

9号溝 円弾。径1.3cm。重11g。やや重むか。内部に腐食による空洞が生じる。灰白色系の錆が浮く。

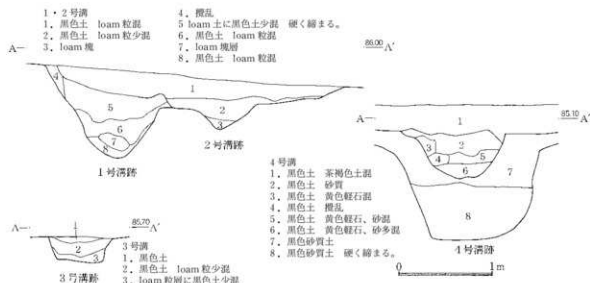
16号溝 銭貨。文久永寶(1863)裏面青海波。径2.65cm。方孔径0.55cm。重2g。波銭または四文銭とも。

塚下溝一覧

(単位:m)

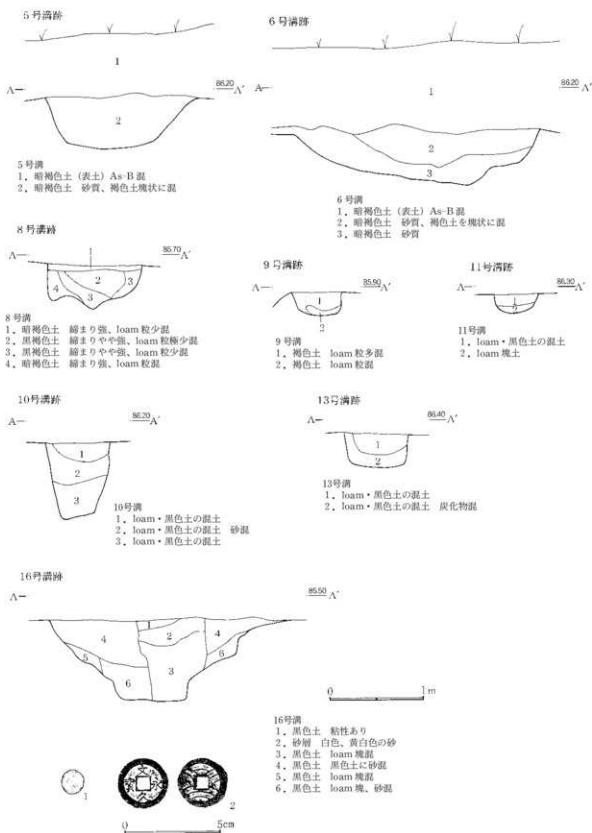
溝名	位置	延長	幅	深さ	断面形	走方向	備考
1	調査区東側	17-1.3-26.5	0.7	0.9	深U字形	北北東-南南西	1.3mの断絶あり。2号溝の西に併走。37・135位と重なる。
2	調査区東側	26.3	0.4	0.5	U字形	北北東-南南西	1号溝南半部の東に併走。
3	調査区東側	19.5	0.7	0.24	箱形	北北東-南南西	
4	調査区東側	15.0	0.7	0.5	U字形	北北東-南南西	
5	調査区東側	3.4	0.8	0.54	緩U字形	北北東-南南西	
6	調査区東側	6.5	1.0	0.38	浅箱形	北北東-南南西	
7	調査区東側	2.0	0.5	0.5	浅箱形	北北東-南南西	
8	調査区東側	11.5	0.6	0.42	U字形	北北東-南南西	南北2.5mで西に直折れ9mのL字。135位と重なる。
9	調査区東側	9.5	0.3	0.24	U字形	北北東-南南西	
10	調査区東側	9.4-2.5-11.0	0.7	0.29	深箱形	北北東-南南西	2.5mの断絶あり。135位と重なる。
11	調査区東側	10.7	0.4	0.2	U字形	北北東-南南西	
12	調査区東側	1.9	0.4			西北西-東南東	11号に直交。13号に続くか。
13	調査区東側	13.5	0.4	0.34	深箱形	北北東-南南西	1号跡と49号住を結状。12号溝に続くか。
16	調査区西側	34.0	1.35.0	0.8	底凹凸形	北北西-南南東	

延長は屈曲する溝の延べた長さである。



第237図 溝跡土層図(1) 1号・2号・3号・4号溝

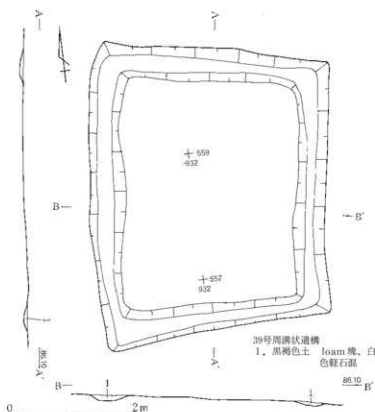
V. 古代・古墳時代の遺構と遺物



第238図 溝跡土層図(2) 5号・6号・8号・9号・10号・11号・13号・16号溝・出土遺物

(6) 39号周溝状遺構 (第239図)

位置は $X=556\sim 560 \cdot Y=-929\sim -933$ の範囲にある。平面形状は南北に長軸をもつ略方形を呈するが、東辺がやや短く歪む。外縁規模は長辺である西縁は5.0m・東縁が4.0m、短辺の南縁・北縁が3.6mを測る。内縁には幅約50cm、深さ10cm程度の浅い溝が巡るが内部には何ら施設を思わせるものは検出されていない。また遺物の出土も無い。内縁の面積は9.60㎡を有する。長軸方位は $N-6^{\circ}-E$ を示す。



第239図 39号周溝状遺構

(7) 埋壘遺構 (第240図 PL.72)

位置は $X=573\sim 574 \cdot Y=-915\sim -916$ の範囲にある。土坑状の掘り込みで壘下半部が残され、表土掘削時に上半部を削りされたものと考えられる。埋設壘は近・現代に下るもので、畑地などに設置され貯水または肥溜めに利用されたと考えられる。

壘は素焼き赤褐色を呈する。寸胴形の胴部から口縁部にそのまま立ち上がる。口唇部は外縁を分厚い帯で突出させ、上端面は幅広い平坦面を作る。腰部下半は強くくびれて小径不安定な底部に至る。口縁部下位に長さ10cmほどの凸手が添貼され、縄掛けの突起が想定されるが対面位置には対になるような添貼痕はない。口径70cm、底径21.5cm、胴部70cm、推定器高80.1cmほどになろう。

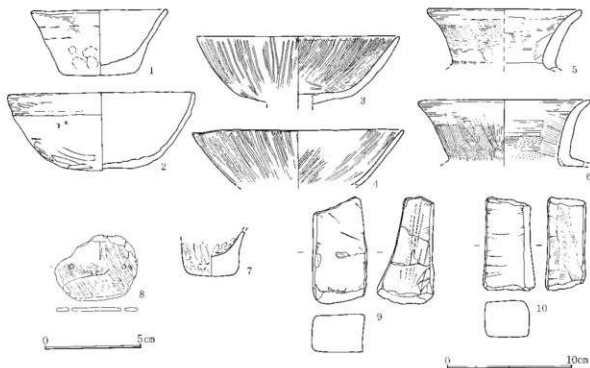


第240図 埋壘遺構

V、古代・古墳時代の遺構と遺物

(8) 遺跡出土遺物 (古墳時代～中近世) (第241図)

土師器鉢(1)は火所(炉 or 竈)に用いた支脚の可能性もある。底部厚く吸炭する。腰部は指頭痕が残るが端部は撫で。内面被熱著しく器面は痘痕状剝離目立つ。橙色で細土。口径10.8cm・底径6.0cm・器高5.1cm。土師器鉢(2)は小径な平底。体部深めで丸みもち、口縁部は小さく括れて内湾気味に立つ。外面弱い篋撫で様の調整。内面被熱著しく器面の痘痕状剝離が目立つ。赤橙色で堅目の焼成。細砂混じる。口径14.8cm・底径4.6cm・器高5.9cm。高坏(3・4)は内外面体部に丁寧な放射状篋磨き(3)は坏部見込みに一方の篋磨き調整。ともに坏腰部の張る形状になろう。赤褐色を呈す。細土。口径16cm・坏高5.4cm。(4)は口径16.8cm・現坏高4.5cm。(5・6)は壺口頸部。(5)は頸部に縦位の掻き目、黄橙色を呈し、胎土に砂粒を多く混ずる。口径12.2cm・器高4.7cm。(6)は頸部に縦～斜位の掻き目、内面は横位の掻き目。鈍灰褐色を呈し、やや軟質。口径13.7cm・器高5.3cm。(7)は手捏ね土器で鉢形。底径3.7cm、現高3.4cm。(8)は石製有孔円板で楕円形状の長径両端に対の小孔を穿つ。長径4.3cm・短径3.4cm・厚0.25cm・重7.02g。石材は流紋岩。(9)は定型の仕上げ砥で半欠。片面に刃痕著しい。長8.4cm・幅4.2cm・厚3.0cm。石材は砥沢石。(10)も定型荒砥か中砥で半欠。表裏に横位～斜位の刃痕多い。長7.4cm・幅4.1cm・厚2.9cm。石材は粗粒輝石安山岩。



第241図 遺跡出土遺物 (古墳時代～中・近世)

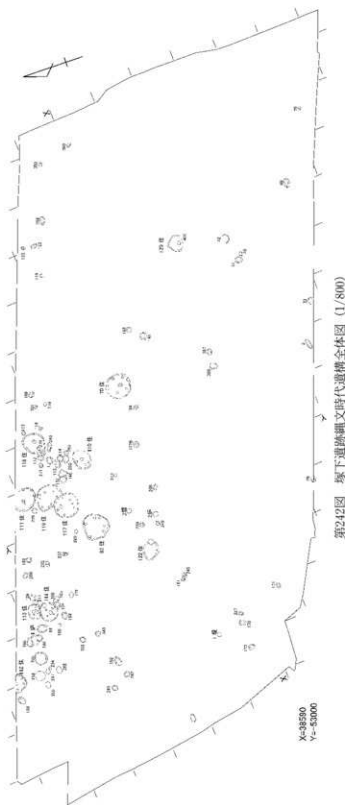
VI 縄文時代の遺構と遺物

塚下遺跡における縄文時代の遺構構成は14軒余りの竪穴住居跡を主とし単独遺構に数基の埋壺・炉跡、多数の大・小土坑と小穴群からなる。土坑小穴群に関しては平面・断面形状などに不明なものが少なからず見られる。ここに掲載した土坑は出土遺物の有無、遺構の形状や埋土などの検討から縄文時代の遺構との判断に因るものである。

調査域における遺構分布は、低台地基部寄りの北側でやや西に偏る傾向があり、より北方に展開している様相が窺われる。竪穴住居跡13軒のうち側室部域を中心とした「塚下遺跡(1)」で当該期7軒が既に報告されている(111号~114号・116号・117号・119号住居跡)。

住居の平面形状は円形または楕円形を呈するが削平が深いためか、やや良好な116号住居跡(側室部)を除き浅い掘形のものが多い。当遺跡内における住居跡規模の床面積に関してはおよそ、大形で20㎡以上(70号・82号・117号・119号住居跡)、中形の10㎡代(110号・111号・112号・114号・116号住居跡)、小形の10㎡以下(113号・122号・129号住居跡)に大別される。炉跡の形態には、埋壺炉(82号・111号・113号・114号住居跡)、地床炉(112号・116号・117号住居跡)、石囲い炉(70号住居跡)、不明(32号・110号・119号・122号・129号住居跡)がある。

出土土器は深鉢形を主に、縄文時代中期後半加曾利EⅢ期とされる時期を中心に加曾利EⅣ期のほか称名寺式が、遡っては勝坂式・諸磯a・b式期が混在する。



1 竪穴住居跡とその遺物

32号住居跡 (第243～245図、PL.66・73・74)

位置は、座標値 $X=567\sim 571$ ・ $Y=-954\sim -758$ の範囲にある。

重複は、古墳時代前期の19号・21号住居跡、古墳時代中期20号住居跡と著しく、僅かな残存部のため検出は炉跡を含む中心部の狭小な範囲である。

平面形状・規模などは重複のため不詳である。北東部で辛うじて本住居跡であろう壁線の痕跡を見るが、壁高は10cmほどになる。

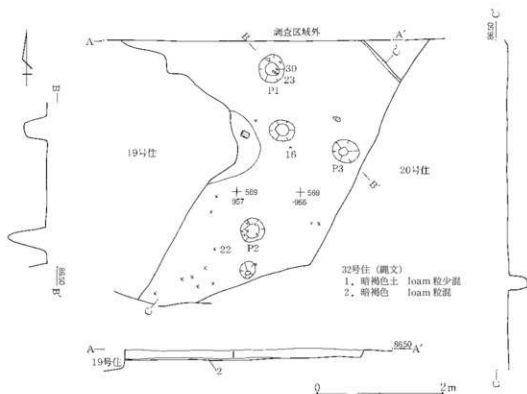
埋土は loam 粒混じりの暗褐色土で締まりが強い。

炉跡は19号住居跡によって削り取られ、僅か東縁が残るのみである。希薄な焼土粒が小範囲に分布する皿状の凹みの体をなす。小塊な角礫が検出されているが炉跡構築材の残欠であろうか。

柱穴に想定される穴は、3穴 (P1～P3) が確認されている。上縁径約40cm、深さはP1が38cm、P2が30cm、P3は深い掘形をもち60cmを測る。

出土遺物のうち、土器類は破片化したものが多く埋設土器などは検出されなかった。石器は鎌・錐・打製石斧・削器などがある。

土器(1～3)は、口縁部無文帯を沈線で横位に区画する。沈線で、対弧状に文様を描く。縄文は、単節RLを横位縦位に施文して、羽状縄文を構成する。(4～6)は、口縁部に列点状の刺突。(7)は細い条線を縦位に施す。(8)は、波状口縁に舌状突起が付く。突起部に低い隆線で円形の区画を作る。地文は、単節RL。(9・10)は、沈線による楕円文様。地文は、単節RLを横位、縦位に施文して羽状縄文を構成する。(11)は、細い沈線で同心円や横位の文様を描く。(12)は、隆起線と沈線による楕円区画。(12)は、半截竹管による平行沈



第243図 32号住居跡

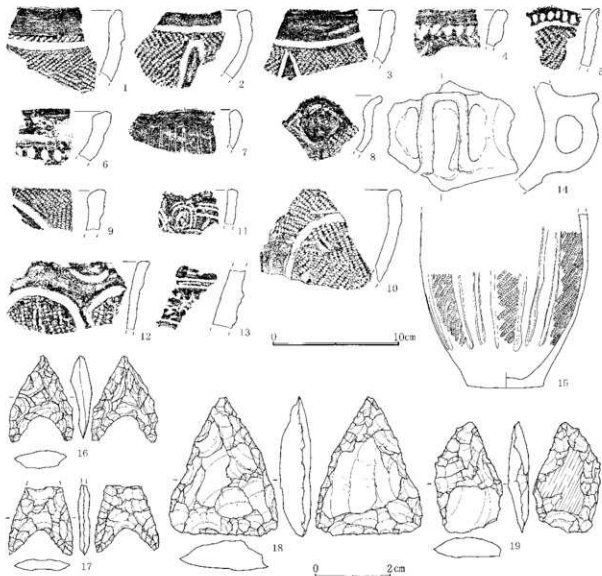
1 整穴住居跡とその遺物

線と、半円状の刺突。(14)は、両耳壺の橋状把手部。(15)は、太さ5~7mmの沈線を3本組にして縦位の区画を作る。地文は、単筋RL。(13)は、竹管による平行沈線と刺突勝坂式。(15)は、加曾利EⅢ式。その他は、加曾利EⅣ式。

32号住居跡石器計測表

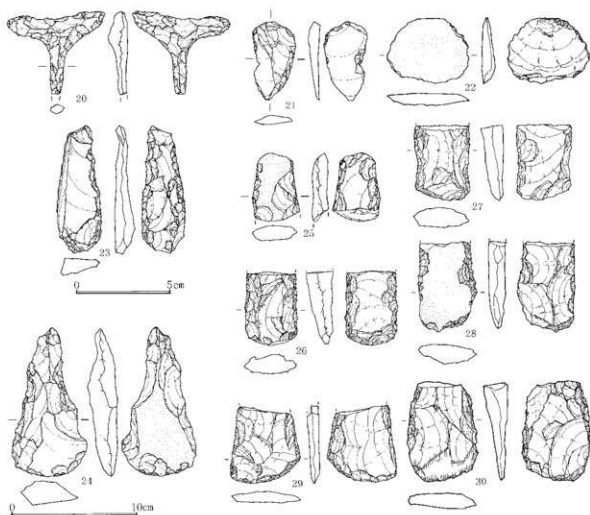
(単位:cm・g)

番号	器種	型	出土位置	部位	長	幅	厚	重	材	備考
16	鏃	凹基無茎	埋土	完	2.25	1.7	0.6	1.11	黒色安山岩	
17	鏃	凹基無茎	埋土	先端欠	1.8	1.7	0.3	0.89	チャート	
18	鏃	平基無茎	埋土	完	3.65	2.4	0.8	8.27	黒色安山岩	
19	鏃	平基無茎	埋土	完	2.95	1.8	0.6	3.69	チャート	未完か
20	鏃		埋土	鏃部欠	4.4	5.2	1.05	8.94	黒色頁岩	
21	所器		埋土		4.2	2.3	0.6	5.26	チャート	
22	所器		埋土		5.1	6.4	1.1	30.37	黒色頁岩	
23	所器		埋土		10.0	3.50	1.6	51.44	黒色頁岩	
24	打棒	楕形	埋土	完	11.7	5.9	2.4	123.6	黒色頁岩	
25	打棒	短卵形	埋土	基部	5.4	3.85	1.2	33.94	黒色頁岩	
26	打棒	短卵形	埋土	刃部	5.7	4.2	2.1	64.88	黒色頁岩	
27	打棒	短卵形	埋土	刃部	5.95	4.4	1.75	66.34	粗粒輝石安山岩	
28	打棒	短卵形	埋土	刃部	7.1	4.7	1.3	67.39	変質玄武岩	
29	打棒	楕形	埋土	刃部	6.0	5.45	0.95	38.81	粗粒輝石安山岩	
30	打棒	短卵形	埋土	刃部	7.9	5.55	1.9	83.53	黒色安山岩	



第244図 32号住居跡出土遺物(1)

VI 縄文時代の遺構と遺物



第245図 32号住居跡出土遺物(2)

70号住居跡 (第246～251図、PL.66・74～78)

位置は、座標値 $X = 596 \sim 601$ ・ $Y = -973 \sim -978$ の範囲にある。

重複は、北半部分で顕著であり、平安時代に属する71号・99号住居跡と古墳時代前期の69号住居跡などと重なり北から西縁にかけての壁線・床面の一部が消失する。

平面形状は壁線にやや直線的な部分が見られるものの略円形を呈しよう。

規模は、径約5.1mで、壁高は確認面より16cmを測る。床面積は20㎡前後になろう。

炉跡は、ほぼ中央に設置される。長形や長形扁平転石8個をもって炉縁および炉壁面を構築し、楕円形状を呈する石囲い炉である。規模は南北方向の内法長径で40cm・東西短径30cm、深さは構築石材頂部から使用面炉底まで25cmを測る。掘形形状は平面隅丸方形様で、上半部はやや開口が大きく下半は直気味に掘り込まれる。掘形規模は長径1.1m・短径90cm、床面からの深さ70cmを測る。炉内の埋土は3層からなり、黒褐色土を主材に焼土粒・炭化粒・loam粒などが混在する。掘形埋土には炉底使用面下に厚目に黒褐色土を充填する。炉縁・炉壁石の後込めには loam 粒を混ざる褐色土を埋める。掘形検出に際して、北側炉縁外に小範囲ながら焼土面の広がりや何らかの物体(石などの炉材または埋壘)を埋設したとも思われる縁辺が被熱する小穴が認められている。これらは前段に構築された炉跡の残欠の可能性であることが高い。

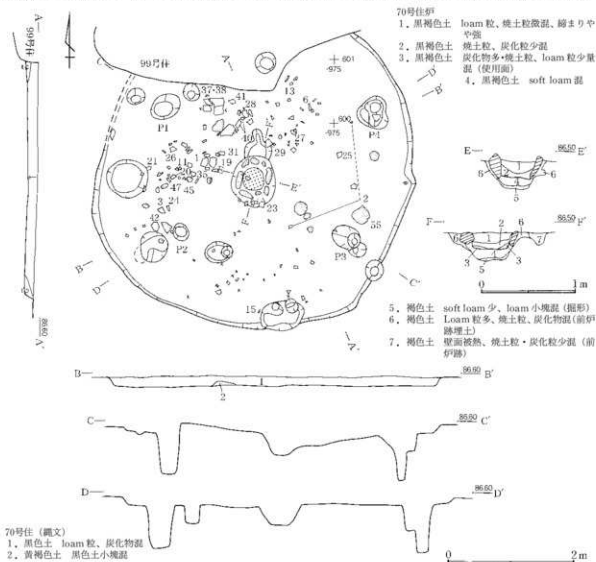
1 整穴住居跡とその遺物

主柱穴と思われる穴はP1～P4が検出されている。掘形径はほぼ50×38～45cmの楕円形または不整楕円形をていし、深さはP3の77cmを最深にP4の65cmまで比較的深い掘形をもつ。その他、径30cm前後で深さ30cm前後の小穴が5穴検出されている。南東部の壁線上2カ所に小穴が見られ入り口施設の可能性もある。また、西壁際には径70×60cm・深さ60cmほどの円形土坑が検出されているがいずれも調査時の所見には当住居跡との関連にはふれられていない。

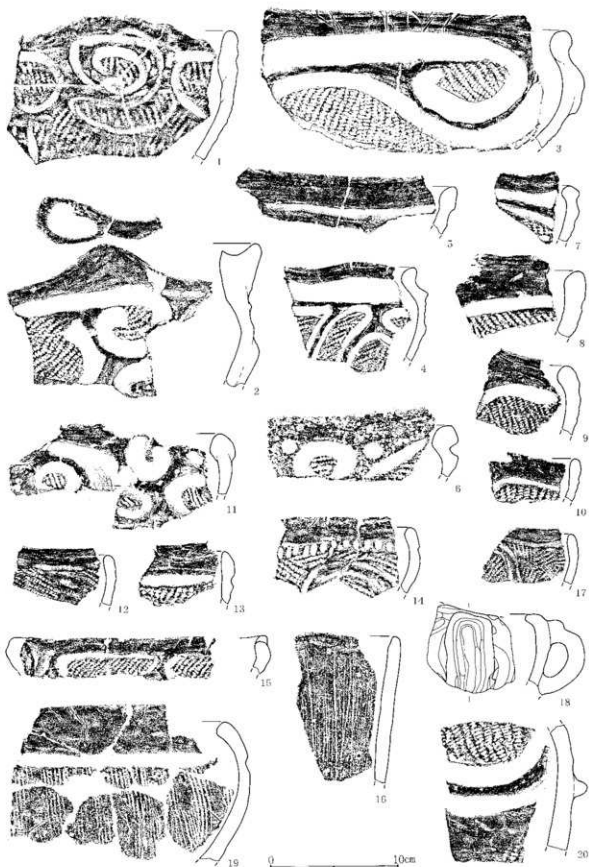
出土遺物は住居跡北西半の埋土中からのものが多く、比較的大形破片が目立つ。また、鉄・打弁などの小型石器類の出土は少ないが大形礫使用の多孔石数点が同じく埋土中より出土している。

土器(1)は、沈線により口縁部に楕円区画や渦巻文様を描く。波状口縁になり舌状突起が付く。地文は、単筋RL。(2)は、太い沈線で渦巻状の文様を描き、口縁部突起上端に「の」の字状沈線が施文される。地文は、単筋RL。(3～12・15・20)は、沈線。隆線により口縁部が文様区画され地文に単筋RLを施文。(14)は、口縁部に刺突列を持ち円形の文様を描く。(17)は、沈線により口縁部無文帯を区画。地文は単筋LR。

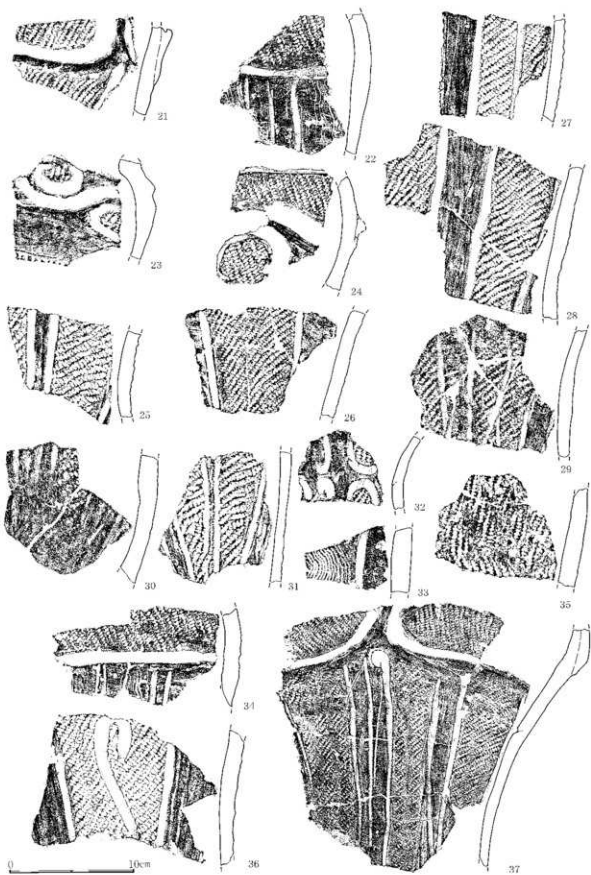
(16・19)は、細い条線施文の土器。加曾利EIIIに伴う。(18)は、橋状取手の付く両耳壺。(21)は、隆帯と沈線による文様区画。(22・34)は、沈線により、口縁部楕円の文様区画、胴部は、縦線の沈線による区画。



第246図 70号住居跡

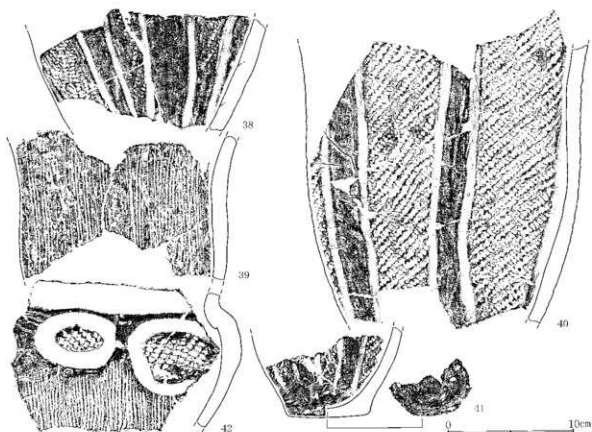


第247図 70号住居跡出土遺物(1)



第248図 70号住居跡出土遺物(2)

VI 縄文時代の遺構と遺物



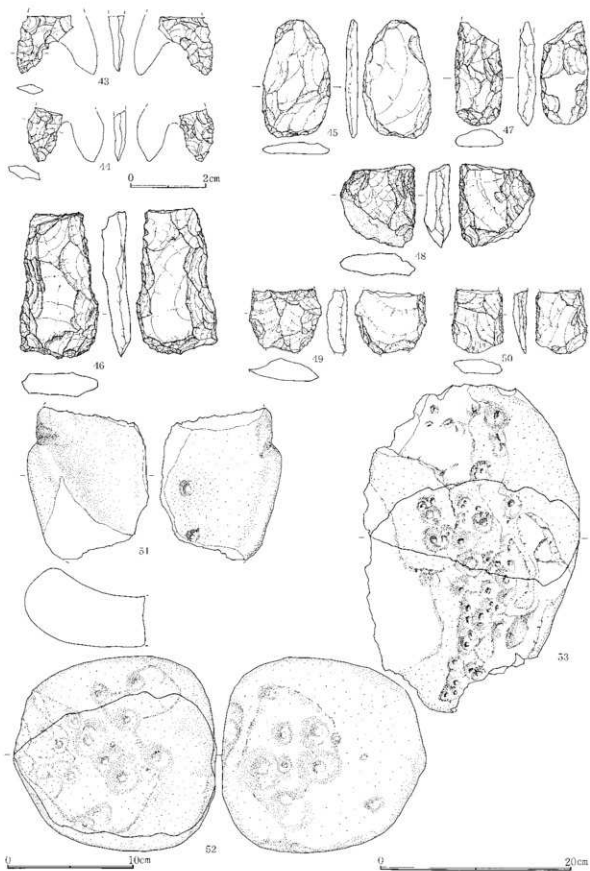
第249図 70号住居跡出土遺物(3)

地文は、口縁部単節 RL の縄文で、胴部は、波状の沈線を施文している。(23)は、口縁部に「 ∞ 」を基調とした渦巻所の文様区画。頸部に無文帯を持つ。(24)は、突起を持ち楕円の区画をする。(25~32・36・38・40・41)は、沈線による縦位の区画。縄文帯と磨り消し縄文による無文帯。縄文帯は、単節 RL を縦位に施文。(36)は、縄文帯に「S」の文様を施文。(33)は、沈線による縦位区画と波状文。(35)は、1段の太きの異なる縄文を2段の単節斜行縄文にして施文。(37)は口縁部文様が楕円区画。胴部は、沈線による縦位区画。胴部の縄文は、1段の太きの異なる縄文を2段の単節斜行縄文にして縦位に施文。(39)は、細い条線を縦位に施文。(42)は、浅鉢になる。口縁部を沈線による楕円区画し、単節 RL を施文。胴部は、条線を縦位に施文している。(14・17)は加曾利EⅣ式。他は、加曾利EⅢ式土器。

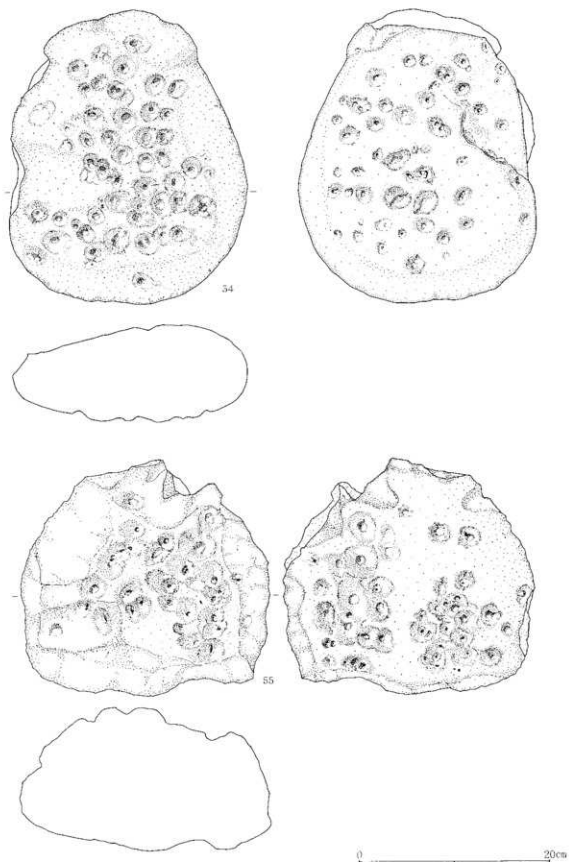
70号住居跡石器計測表

(単位: cm・g)

番号	器種	型	出土位置	部位	長	幅	厚	重	材	備考
43	鉢	凹基無茎	埋土	脚部	1.5			計測不可	黒曜石	
44	鉢	凹基無茎	埋土	脚部	1.3			不可	黒曜石	
45	打棒	楕形	埋土	略完	9.2	5.45	1.05	60.4	ホルンフェルス	
46	打棒	楕形	埋土	略完					黒色安山岩	
47	打棒	短冊形	埋土	基部欠	8.1	3.8	1.4	57.1	粗粒輝石安山岩	
48	打棒		埋土	刃部	6.5	5.9	1.7	94.0	粗粒輝石安山岩	
49	打棒	短冊形	埋土	刃部	5.0	5.7	1.7	52.0	黒色安山岩	
50	打棒	短冊形	埋土	刃部	5.0	4.0	1.0	32.0	粗粒輝石安山岩	
51	石皿	片口伏鉢	埋土	皿部小片	11.8	9.8	6.2	870.0	粗粒輝石安山岩	
52	多孔石	碟形	埋土	略完	16.0	15.5	11	3400.0	粗粒輝石安山岩	被熱
53	多孔石	扁平	鈔材	欠	34.5	23.0	12	8500.0	粗粒輝石安山岩	被熱
54	多孔石	扁平	鈔材	略完	31.0	25.0	10	9350.0	粗粒輝石安山岩	被熱
55	多孔石	厚扁平		略完	26.5	25.0	15	11100.0	粗粒輝石安山岩	被熱



第250図 70号住居跡出土遺物(4)



第251図 70号住居跡出土遺物(5)

82号住居跡 (第252~255図、PL.67・78~80)

位置は、座標値 $X=613\sim 619 \cdot Y=-000\sim -005$ の範囲にある。

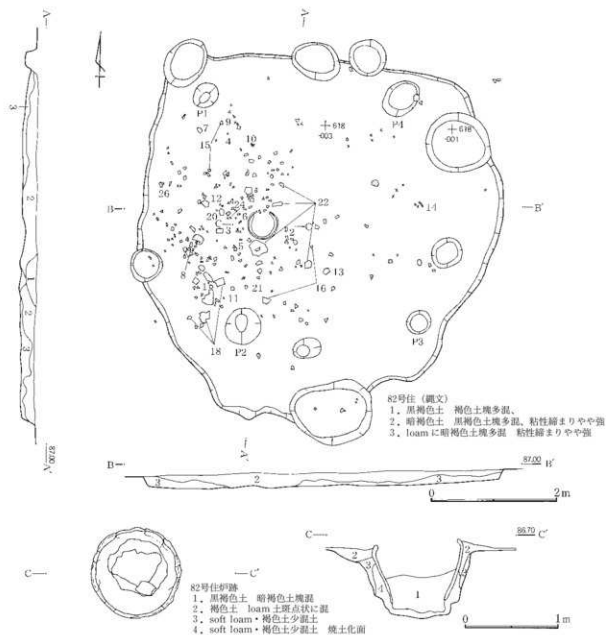
重複は、縁辺部に幾つかの土坑が近接し切り合うが本跡の形状を大きく損なうものではない。

平面形状は壁線が小さく波打って不自然な軌跡を見せ、北壁線と西壁線の一部が直線的な走行をなす。概して略楕円形を呈しようか。

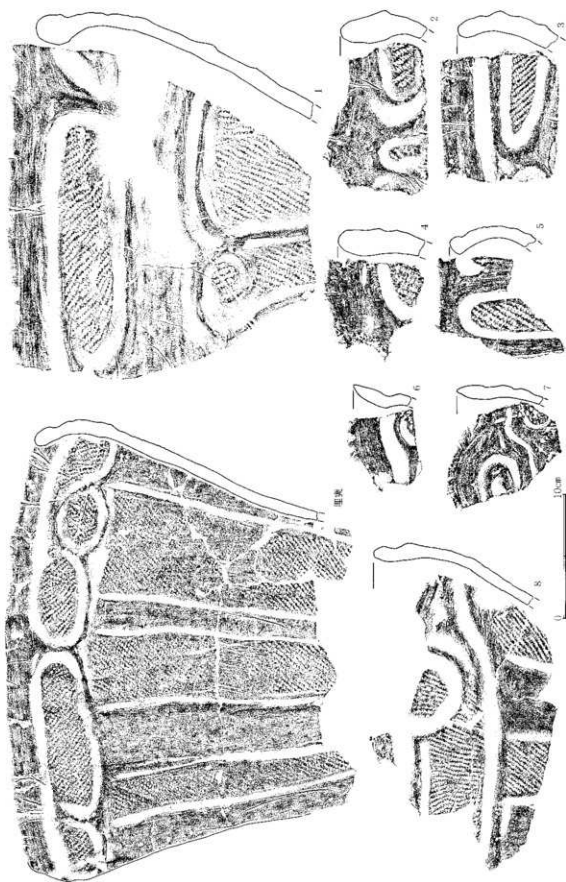
規模は、東西・南北軸長とも5.7~5.8mを測り、壁高は確認面より約20cmである。床面積は24.3m²を有する。

埋土は大別2層になり、比較的粘性のある暗褐色土~黄褐色土で黒褐色土塊が多く混入する。

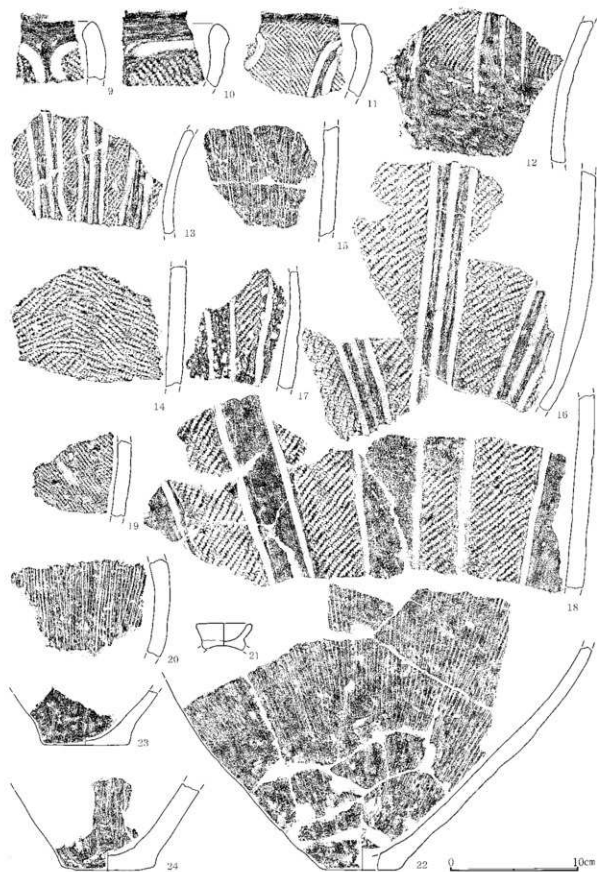
炉跡は西側に偏った位置にあり、石囲いなどの施設はない。炉体は鉢形土器の上半部を埋設した埋塞単体構造のものと考えられる。径55×60cm・深さ40cmあまりの掘形をもつ。埋塞炉内埋土は暗褐色土粒を混ざる



第252図 82号住居跡



第253図 82号住居跡出土遺物(1)



第254図 82号住居跡出土遺物(2)

VI 縄文時代の遺構と遺物

黒褐色土で比較的単味の土質である。炉掘形と埋塞の隙間および炉底には褐色土～黄褐色土を充填するが被熱による焼土化が見られる。

柱穴は、P1～P4の4穴になろう。掘形径40～60cm、深さ15～20cm前後でやや浅い。壁線に沿って穿たれる土坑状遺構の他、北～西壁線に検出される小穴は本跡に伴うものかは不明である。

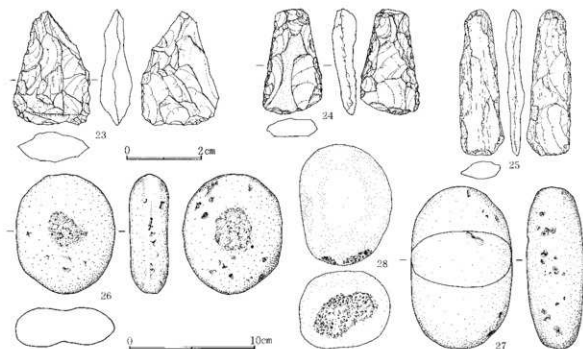
遺物は炉跡周辺を中心にして西側に集中的に分布し、一部大形破片を含むが小土器片が埋土中より多く出土している。石器は比較的少なく、鎌・打斧・磨り石などがある。

埋塞は、口縁部文様帯は、沈線による楕円と玉抱き文による区画。胴部は、沈線による縦位区画。縄文は口縁区画内を単節 RL 横位方向に、胴部は縦位方向に施文している。土器(1)は、口縁部に、「∞」を基調とした楕円区画文様。頸部に無文帯を持つ。胴部は隆線による縦位の区画線。縄文は口縁区画内を単節 RL 横位方向に、胴部は縦位方向に施文している。(2～4・6・9・10)の口縁部文様は、沈線による楕円区画文。区画内を縄文が充填される。(5・11)は、口縁を沈線により、「∩」状の文様区画。縄文を充填する。(7)は、「∞」を基調とした渦巻文施文。口縁波、舌状の突起となる。(8)は、口縁部文様を「∞」を基調とした楕円区画。胴部には、沈線による縦位区画。文は口縁区画内を単節 RL 横位方向に、胴部は縦位方向に施文している。(12・13・16～18)は、沈線による縦位区画。縄文は、単節 RL。(15・20・22)は、条線施文。(14・19)は縄文施文の土器。(23・24)は、胴下部から底部にかけての破片で縦位の磨き整形痕が見られる。これらは、加曽利EⅢ式土器。

82号住居跡石器計測表

(単位: cm・g)

番号	器種	型	出土位置	部位	長	幅	厚	重	材	備考
23-①	鎌	平基無茎	埋土	突	3.0	2.0	0.8	4.5	チャート	未完か
23-②	打斧	楕形	埋土	略突	8.3	4.6	1.9	74.05	黒色頁岩	
23-③	打斧	短冊形	埋土	略突	11.5	3.4	1.3	69.0	ホルンフェルス	
23-④	凹石	扁平楕円	埋土	突	9.4	7.3	3.1	270.0	粗粒輝石安山岩	表面凹
23-⑤	磨石	扁平楕円	埋土	突	13.8	8.9	4.5	780.0	粗粒輝石安山岩	御縁部磨打か
23-⑥	磨石	球楕円	埋土	突	9.5	7.3	6.1	673.0	粗粒輝石安山岩	片端磨打



第255図 82号住居跡出土遺物(3)

110号住居 (第256～263図、PL.67・81～88)

位置は座標値 $X=611\sim 615$ ・ $Y=-985\sim -990$ の範囲にある。

重複は、平安時代75号住居跡と重なり、南東部のやや広めの範囲が消失する。

平面形状は、東西軸の若干長い楕円形を呈しよう。

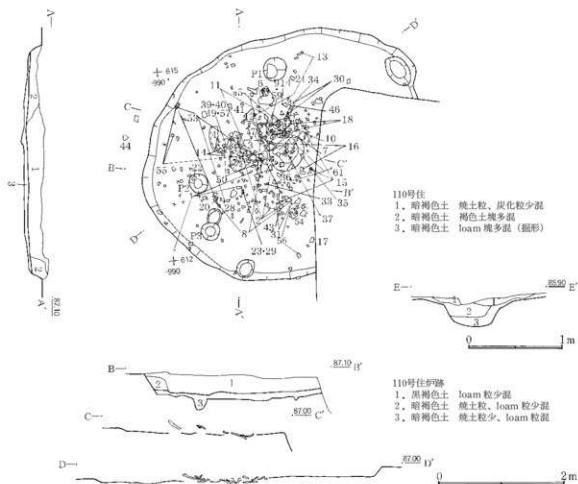
規模は、東西軸長4.6m・南北軸長3.8m、検出面よりの深さ30cmを測る。床面積は12.8m²を有しよう

埋土は大別3層からなり、壁縁辺は褐色土塊の多い暗褐色土が幅広く埋める。中央部は焼土粒・炭化粒の多く混在する暗褐色土が層厚に床面にまで達している。床面に近くは loam 塊が多く混在する暗褐色土で比較的均一平坦な床土をなしている。

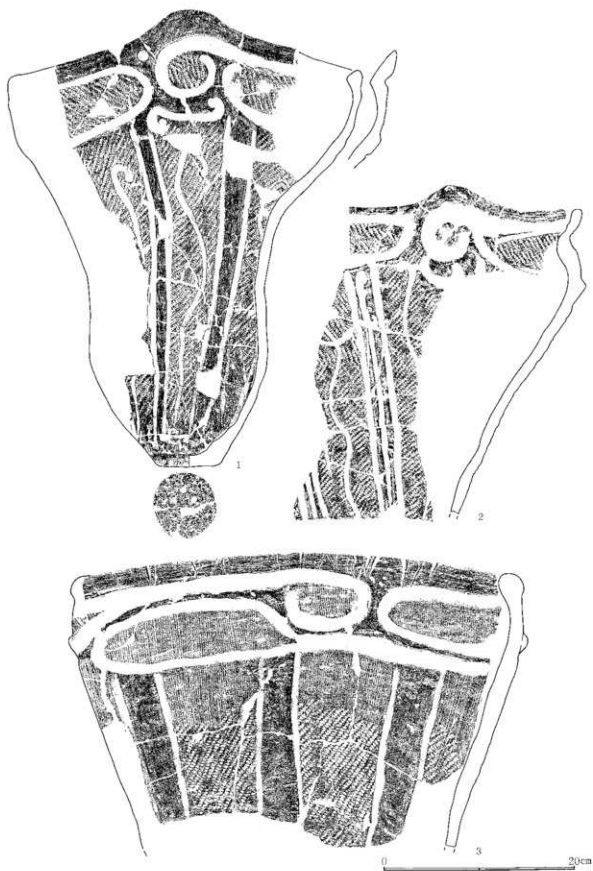
炉跡と思われる痕跡は中央部に検出されている。径約60cm・深さ50cmの掘形をもつが、石材・埋塞などの関連は見いだされない。また、この落ち込みの壁面には被熱による焼土化現象などもなく炉跡である積極的な証拠に欠ける。辛うじて埋土中に焼土粒の混入するのをもって炉跡を推定するのみであるが、掘形の深さからは石囲いまたは埋塞炉などの形態を想定できる。

柱穴に類する小穴は数穴見られるが、P1・P2が相当しよう。基本的には4穴となろうが東側の2穴は75号住居跡との重複に因って消失したと思われる。P1・P2は径30～40cm、深さ20cmほどである。

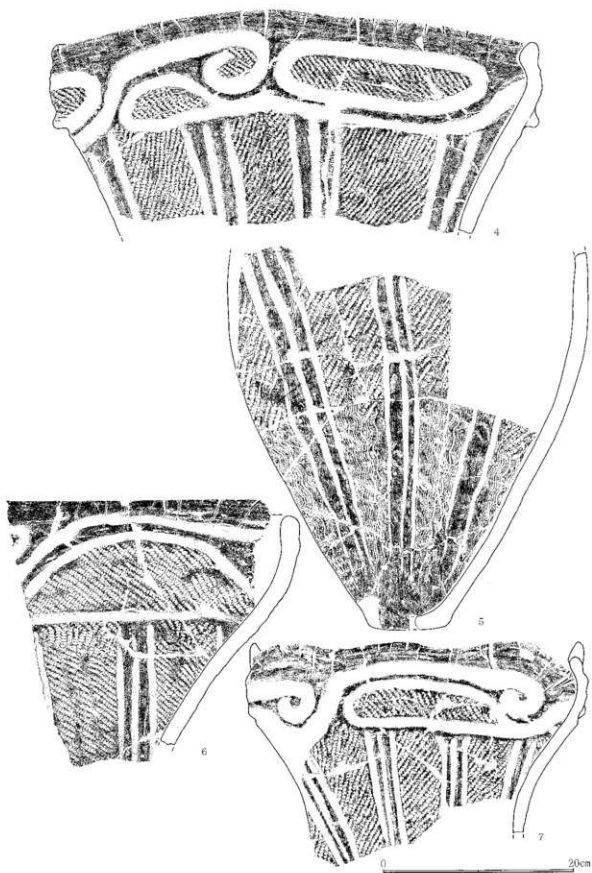
遺物は住居跡中央部に集中し、床面より若干の高さをなし西側から一括投棄の様相が窺われる。ただし、(1～7)などの大形破片の土器は炉跡周辺の床面出土である。土器種は深鉢型土器が主である。石器は少量で



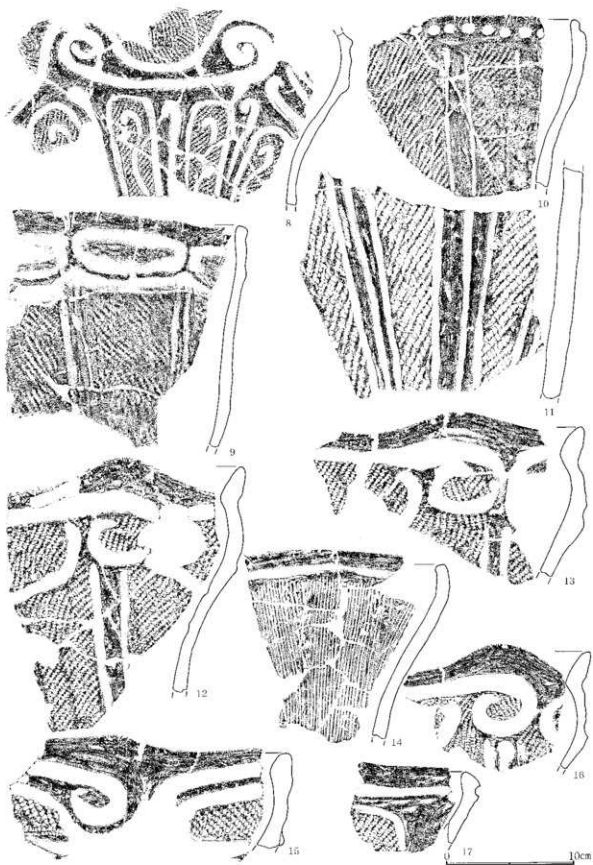
第256図 110号住居跡



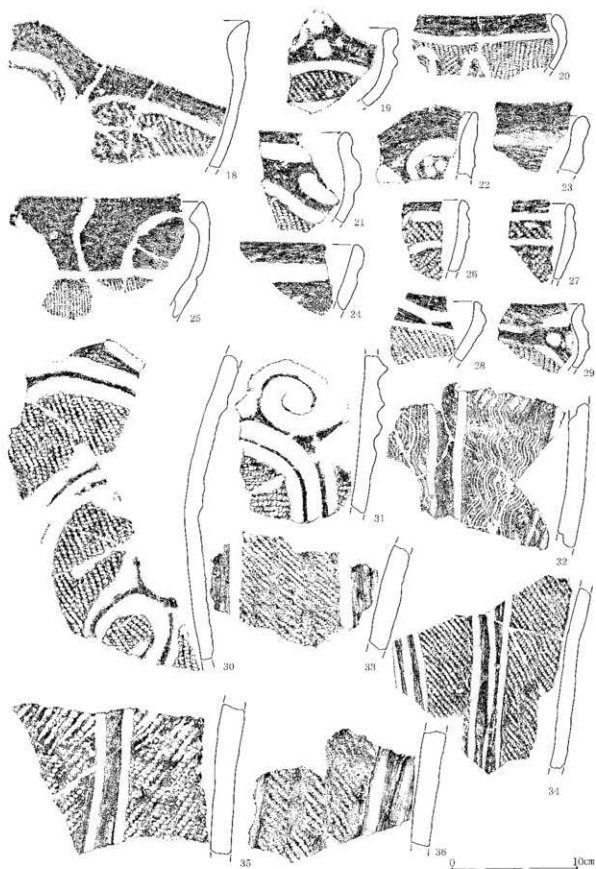
第257図 110号住居跡出土遺物(1)



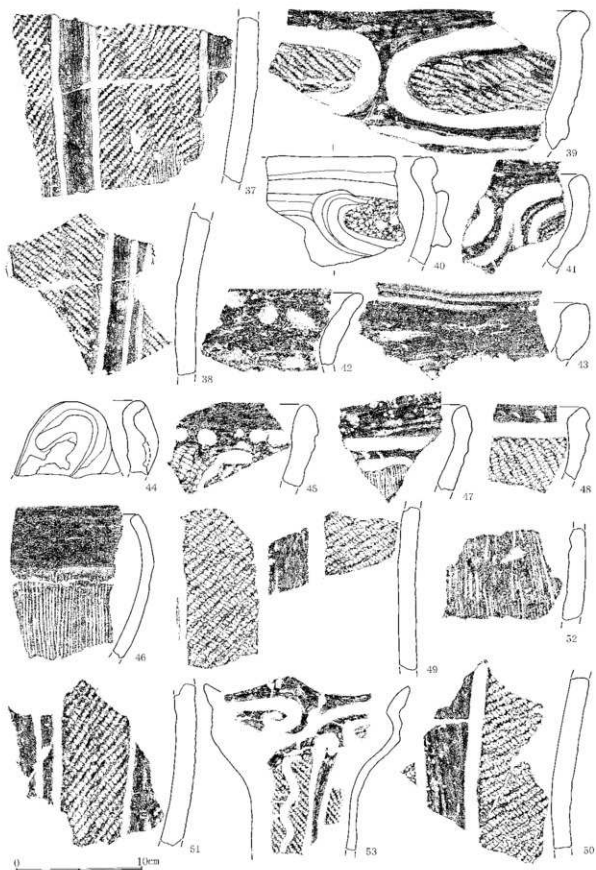
第258図 110号住居跡出土遺物(2)



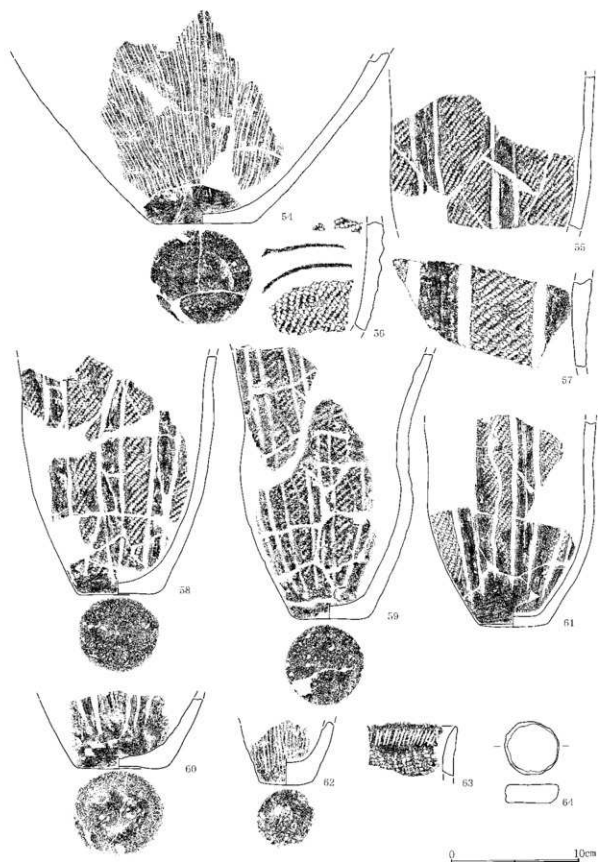
第259図 110号住居跡出土遺物(3)



第260図 110号住居跡出土遺物(4)



第261図 110号住居跡出土遺物(5)



第262図 110号住居跡出土遺物(6)

鎌・打斧などである。

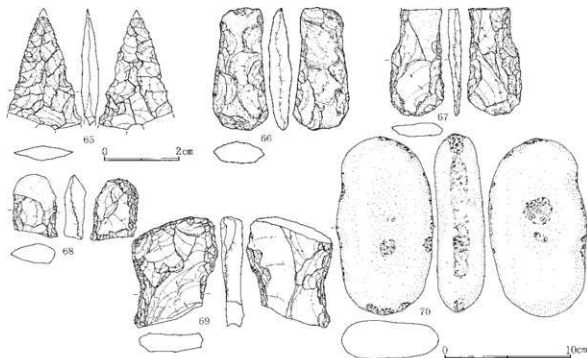
土器(1)は、口縁に舌状突起を持つ波状口縁の土器。口縁部文様は、沈線による「∞」を基調とした楕円区画、渦巻文様。頸部に沈線による「∞」の文様を持つ。胴部は、沈線による縦位区画。縄文帯と磨り消し縄文による無文帯。縄文帯の中に「S」文様が施文される。地文の縄文は、単節 RL を口縁部では横方向、胴部では縦方向に施文し、羽状縄文を構成している。(2)は、口縁に舌状の突起を持つ波状口縁の土器。(1)と同様口縁部に「∞」基調の渦巻と楕円区画文様。胴部は、沈線 3 本を対にした縦位区画。縄文帯の中に「S」文様が施文される。地文の縄文は、単節 RL を口縁～胴部上半では横方向、胴部では縦方向に施文し、羽状縄文を構成している。(3)は、平口縁の土器。口縁部文様は、「∞」基調の楕円、渦巻文様。胴部は、沈線による縦位区画。縄文帯と磨り消し縄文による無文帯。地文は、口縁～頸部にかけては、細い条線を縦位に施文。胴部以下には単節 RL を縦位に施文。(4)は、平口縁の土器で、口縁部文様は「∞」を基調とした楕円区画。胴部は、沈線 3 本を対にして縦位区画。地文の縄文は、単節 RL を口縁部で横位に、胴部では、縦位に施文して羽状縄文を構成する。(5)は、沈線 3 本を対にして縦位区画する。地文の縄文は、単節 RL を縦位に施文。胴部下半～底部にかけては、条線を波状に施文している。(6)は、平口縁の土器。口縁部文様は、半円状の文様を描く。胴部は、沈線 3 本を単位に縦位区画。単節 RL を口縁部では横位に、胴部では縦位に施文している。(7)は、舌状突起を持つ波状口縁の土器。口縁部文様は、「∞」を基調とした渦巻、楕円区画。胴部は、沈線 3 本を対にした縦位区画。地文の縄文は、単節 RL を口縁で横位方向、胴部では、縦位方向に施文している。(8)は、口縁部文様を「∞」基調の渦巻文。胴部は、沈線により「∩」・「S」状の文様と縄文帯・無文帯を作る。縄文帯・無文帯ともに「S」文様を施文。(9)は、平口縁の土器。口縁部文様は楕円区画。胴部は、沈線による縦位区画。地文の縄文は、RL を横位に施文。(10)は、口縁部に円形の刺突列。胴部は、沈線による縦位の区画。(11)は、沈線 3 本による胴部縦位区画。縄文は単節 RL を縦位に施文。(12・13)は、舌状突起を持つ波状口縁の土器。口縁部は、「∞」基調の渦巻文、楕円区画。胴部は、沈線による縦位の区画。(14)は、口縁部に沈線による横位の区画。胴部は、条線を縦位に施文。(15～19)は、舌状突起を持つ波状口縁の土器。「∞」基調の渦巻、楕円区画文様。地文の縄文は、単節 RL。(20)は、沈線による口縁部横位区画。沈線による対弧状の文様。(21～24)は、口縁部で、沈線による楕円区画文様の土器。(25)は、口縁部に無文帯を持ち沈線により区画される。区画線以下を縦位の条線を施文。(26～29)は、沈線で口縁部文様を描く。地文の縄文は、単節 RL を横位・縦位に施文し、羽状縄文を構成する。(30・31)は、胴部に隆帯による渦巻状の文様を施文している。地文の縄文は、単節 LR を施文。(32)は、胴部を沈線によって縦位に区画。区画間を条線による波状文施文。(33～38・49～51・55・58～61)は、胴部に沈線で縦位の区画を作り、縄文帯と磨り消し縄文による無文帯を構成する。「S」文様を施文するものもある。(39～41)は、口縁部に太い沈線による楕円区画。地文の縄文は、単節 RL。(42・43)は、深鉢口縁の口縁部無文帯部分。(44)は、舌状突起部で、頂部に S 状の沈線を施文。(45)は、口縁部に円形の刺突列を施文。胴部は、対弧状の文様を沈線で描く。(46)は、浅鉢で口縁部を浅い沈線で区画し、胴部を条線施文。(47)は、沈線による口縁部楕円区画。区画内の地文を条線にしている。(48)は、沈線による口縁部文様区画。地文の縄文は RL。(53)は、舌状突起を持つ波状口縁の土器。口縁部は、「∞」を基調とした渦巻、楕円区画文様。胴部は、沈線による縦位の区画と「S」の文様。単節 LR の縄文を地文に施文。(54)は、浅鉢になり口縁部も縦位の条線施文。(56)は、胴部に隆帯による楕円形の文様施文。(62)は、条線施文の土器。(10・20)は加曾利 E IV 式、他は、加曾利 E III 式。(63)は、口縁に縦位の沈線と、貝殻復縁による鋸歯状の施文。興津式。(64)は、土製円盤。深鉢の無文部片を外縁打ち欠き後、磨いて成形している。

1 竪穴住居跡とその遺物

110号住居跡石器計測表

(単位: cm・g)

番号	器種	型	出土位置	部位	長	幅	厚	重	材	備考
65-①	鏃	凹基無室	埋土	先・胴部欠	3.0	2.0	0.35	2.0	チャート	
65-②	打棒	短冊形	埋土	略完	9.7	4.3	1.7	87.0	ホルンフェルス	
65-③	打棒	短冊形	埋土	基部欠	8.4	4.1	1.0	44.0	細粒輝石安山岩	
65-④	打棒	短冊形	埋土	刃部	5.0	3.5	1.7	36.0	黒色頁岩	
65-⑤	打棒	分銅形	埋土	片半欠	8.7	6.7	1.6	144.0	黒色頁岩	
65-⑥	磨石	扁平楕円	埋土	略完	14.0	7.6	3.8	620.0	粗粒輝石安山岩	磨縁線打痕



第263図 110号住居跡出土遺物(7)

122号住居跡 (第264図、PL.89)

位置は、座標値 $X=604\sim 608$ ・ $Y=-011\sim -014$ の範囲にある。遺構種は竪穴住居跡としたが、跡など欠如する居住施設がありやや疑問の残る遺構である。

重複は東側で古墳時代前期83号住居跡や時期不明土坑と重なり、壁線の一部が消失する。

平面形状は、南西部の壁線の乱れなどを生じ不整楕円形を呈す。

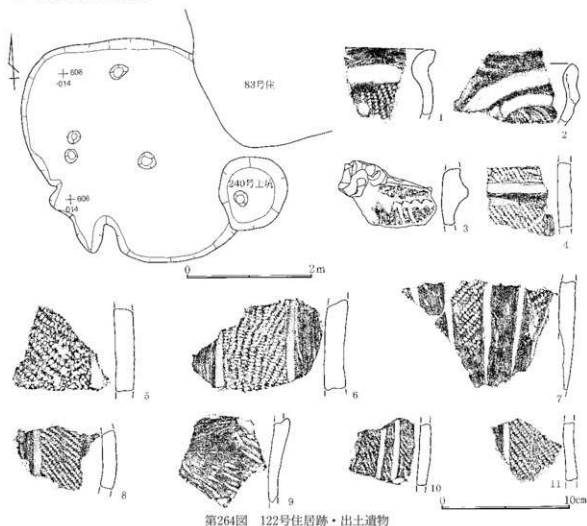
規模は南東～北西方向に長軸をもち、長軸4.1m・短軸3.5m、壁高は確認面より15cmほどである。床面積は復元推定9.0㎡ほどになる。

遺構内施設には数個の小穴が検出されているが、中央部の1穴のみ掘形が明瞭で径30cmの小穴ながら深さ40cmをもつ。中央部の一柱構造になるのか。

出土遺物は少量で小破片の土器類である。

土器(1・2・4)の口縁部文様は、沈線による楕円区画文。区画内を縄文が充填される。(3)は、竹管による縦位の施文。粘土紐による突起を持つ波状口縁。(5～11)は、沈線による縦位区画。縄文は、単筋RL、LRを縦位方向に施文している。加曾利EⅢ式土器。

VI 縄文時代の遺構と遺物



第264図 122号住居跡・出土遺物

129号住居跡 (第265・266図、PL.89)

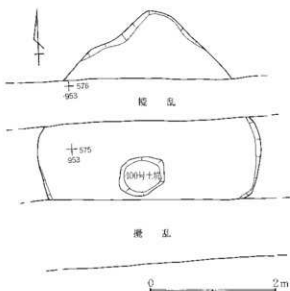
位置は、座標値X=574~576・Y=-950~-953の範囲にある。現代の攪乱溝による破壊が多く遺存状態は悪い。122号住居跡と同様に炉跡などは検出されておらず、竪穴住居跡としては疑問の残る遺構である。

平面形状は、壁線が不明なもの不整形円形になろう。

規模は、径3.5mほどで壁高は壁線を辛うじてたどれる程度である。床面積は復元推定8.5m²を有する。

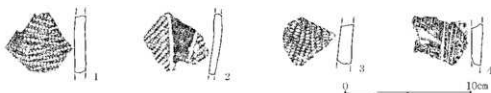
遺構内施設は当跡との関係は不明な略円形の土坑がある。径80×60cm・深さ15cmを測る。

出土遺物は少なく、2~3点の縄文土器片がある。(1)は、沈線による文様区画。縄文は、単節 RL



第265図 129号住居跡

縦位方向に施文。(2・3)の縄文は、単節 RL 施文。(4)は、沈線を縦位方向に施文する。加曾利EⅢ式土器。



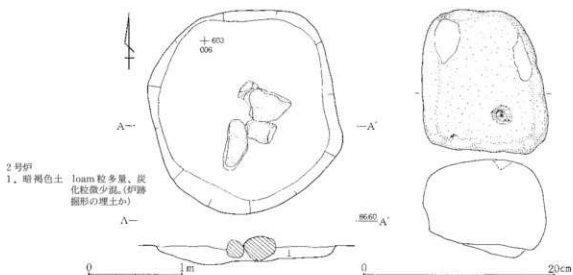
第266図 129号住居跡出土遺物

2 その他の遺構と遺物

炉跡

2号炉跡 (第267図, PL.89)

位置は、座標値 $X=602 \sim 603 \cdot Y=-005 \sim -006$ の範囲にある。遺跡地内中央部西寄りであり、炉石材が露呈した状態での検出であり、遺構上面の大半は既に削平されたものと思われる。浅い掘形状の中に設置された石材は強い被熱現象がみられ、埋設状態から石囲い炉の残欠の可能性が高い。炉跡掘形は1m前後の略隅丸形状で残深は20cmほどである。掘形埋土は暗褐色土 loam 土の混土で僅かな炭化物を含む。炉石材の一つに凹み石を転用している。15.3×13.5×10.3cm・3.3kgの角状転石で片面に1孔の凹が穿たれる。溶結凝灰岩



第267図 2号炉跡・出土遺物

埋甕

1号埋甕 (第268・269図, PL.72・89)

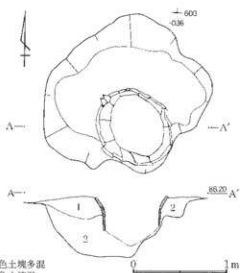
位置は、座標値 $X=599 \cdot Y=-036$ の範囲にある。遺跡地内西側の谷地地形に移る縁辺部にあり、直接に畑属する遺構はなく単独遺構である。また、極間近には住居跡などの大形縄文時代遺構はない。

埋甕掘形は径90cm・深さ30cmの楕円形状をもつ。土器は大形深鉢土器で、胴部を欠く口縁部を倒立して掘形南壁に接し偏って設置する。土器の後込めには暗褐色土と loam 小塊の混土を充填する。深鉢の器表面や埋

VI 縄文時代の遺構と遺物

土および後詰め充填土・壁面には被熱などの痕跡は観察されていない。

埋甕の土器は、口径48cm、下半部が欠損しているが口縁部は全周している。口縁部がやや内湾する太鼓形の深鉢である。口縁部を沈線が横位に廻り、口縁部の無文帯を区画する。口縁部下の文様は、沈線による方形・楕円区画文。文様内を附加条3種で縄文が格子目条に施文される。加曾利EIV式土器。



第268図 1号埋甕



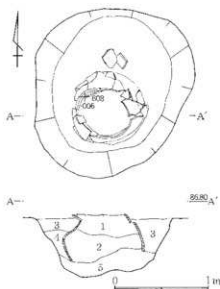
第269図 1号埋甕出土遺物

2号埋甕 (第270・271図、PL.72・90)

位置は、座標値 $X = 608 \cdot Y = -006$ の範囲にある。遺跡地内中央部西寄りにあり、単独遺構と思われるが北・西それぞれ間近に縄文時代82号・122号竅穴住居跡がある。

埋甕掘形は径85×80cm・深さ30cmの比較的整った楕円形を呈す。土器は深鉢形土器の口縁から上半部を倒立して設置し、掘形中央部から僅かに南に偏っている。土器の後詰めは暗褐色土と loam 小塊の混土を充填する。なお、土器の器表面や充填土・壁面には被熱などの痕跡は所見がなく、土器内の埋土中にも焼土粒や炭化粒の存在は確認されていない。

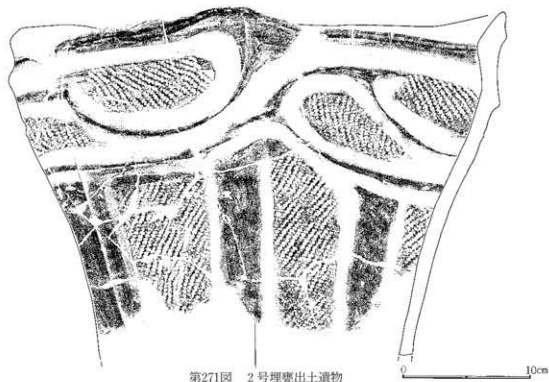
深鉢は口径52cm、口縁から胴の上半部の埋甕である。口縁は緩やかな波状を呈し、頂部は舌状の突起となる。口縁部文様は、「∞」状のモチーフを基調として入組の楕円区画をする。区画



第270図 2号埋甕

- | | | |
|---------|----------|---------|
| 2号埋甕 | 3. 暗褐色土 | 褐色土塊少混 |
| 1. 暗褐色土 | loam 粒少混 | 4. 褐色土 |
| 2. 暗褐色土 | loam 粒少混 | 5. 褐色土 |
| | | loam 塊混 |

内は、単節 RL の縄文が横位方向に施文充填される。胴部は、沈線が垂下し磨り消し縄文による縦位区画をつくる。胴部の縄文は、RL を縦位方向に施文している。加曾利 E III 式土器。



第271図 2号埋塞出土遺物

土坑 (第272~284図, PL.68~72・90~96)

ここに掲載する土坑は出土する遺物から、縄文時代に属すると考えられるものを主にした。また、遺物の出土は無いものの、その形状および土層の所見から当該期として想定される遺構についても合わせ掲載した。その他の土坑については、特に歴史・古墳時代に属すると思われるものは、V. の4 その他の遺構と遺物に掲載した。断面形状の、A：箱形 B：袋形 C：U字形 D：底凹凸形 E：深箱形を示す。

なお、遺構の所見については一覧表に記し、図掲載の無い土坑状遺構についてもあわせて表記してある。

土坑一覧(1) (断面形状 A：箱形 B：袋形 C：U字形 D：底凹凸形 E：深箱形) (単位：cm)

土坑名	図番号	PL	位置	平面形状	断面形状	長	短	深	混入物・出土遺物
1号			X=570・571 Y=-015~-016	楕円形	A	123	80	36	
2号			X=555・556 Y=-982~-984	長方形	C	212	106	25	
3号			X=550・551 Y=-972~-973	円形	C	113	102	32	
5号	272		X=570・571 Y=-961~-962	方形	A	126	95	67	土器 加曾利 E IV
8号			X=550 Y=-971~-972	不整形円形	E	66	62	66	
10号			X=568・569 Y=-982	方形	?	78	77	43	
12号			X=570・571 Y=-999~-000	楕円形	C	120	88	25	
13号			X=570 Y=-997~-998	円形	E	88	76	85	

VI 縄文時代の遺構と遺物

土坑一覧(2) (断面形状 A:箱形 B:袋形 C:U字形 D:底凹凸形 E:深箱形) (単位:cm)

土坑名	図番号	PL	位置	平面形状	断面形状	長	短	深	混入物・出土遺物
14号			X=567・568 Y=-003・-004	不整円形	C	134	114	29	
15号			X=565 Y=-001	円形	E	74	59	61	
16号	272		X=568 Y=-965	不整円形	C	117	103	18	凹み石
17号			X=568・569 Y=-967・-968	不整円形	A	112	102	44	
18号			X=561・562 Y=-949・-950	楕円形	C	129	88	34	
19号			X=562・563 Y=-949	不整長方形	C	106	77	39	
20号	273		X=559・560 Y=-951・-952	不整楕円形	C	160	102	62	土器 加曾利EIII
24号			X=552・553 Y=-955	楕円形	C	89	56	30	
25号	273		X=566・567 Y=-011・-012	不整楕円形	A	140	84	42	土器 勝坂末・ 加曾利EIII
27号			X=557・558 Y=-984	隅丸長方形	C	126	78	29	
28号			X=569 Y=-995・-996	長楕円形	C		92	27	
30号			X=559・560 Y=-994・-995	方形	A	88	74	28	
31号	274	68	X=562・564 Y=-959~-961	円形	A	163	140	47	土器 加曾利EIII
32号			X=553 Y=-974・-975	不整方形	A	75	69	17	
33号	274	68	X=551・552 Y=-974・-975	楕円形	A	180	132	62	土器 加曾利EIII
35号			X=570 Y=-005・-006	楕円形	D	135	123	12	
36号			X=570・571 Y=-012	楕円形	A	108	82	25	
37号			X=569 Y=-992	隅丸方形	C	78	74	18	
39号			X=568・569 Y=-979~-981	不整楕円形	A	74	55	22	
40号	275	68	X=562 Y=-959	円形	E	108	99	55	土器 加曾利EIV
42号	275	68	X=563・564 Y=-954・-955	楕円形	B	142	73	68	土器 加曾利E III・加曾利IV
44号			X=560・561 Y=-990	円形	C	64	60	24	
46号			X=556・557 Y=-985・-986	楕円形	C	94	67	31	
47号			X=561 Y=-986	円形	E	82	81	66	
50号			X=559 Y=-949・-950	円形	C	56		56	
51号			X=558・559 Y=-948・-949	円形	E	105		56	
52号			X=550 Y=-955	円形	E	80		55	
53号			X=559・561 Y=-953・-954	不整楕円形	C	167	110	52	

2 その他の遺構と遺物

土坑一覧(3) (断面形状 A:箱形 B:袋形 C:U字形 D:底凹凸形 E:深箱形) (単位:cm)

土坑名	図番号	PL	位置	平面形状	断面形状	長	短	深	混入物・出土遺物
55号			X=560・561 Y=-949~-951	楕円形	C	175	101	20	
56号			X=559・560 Y=-948・-949	楕円形	C		66	62	
57号			X=559・560 Y=-949	楕円形	E		53	36	
58号			X=560・561 Y=-955	楕円形	C	70	53	43	
59号			X=550・551 Y=-960・-961	楕円形	D	77	70	27	
60号		68	X=565・566 Y=-987	楕円形	E	93	71	85	
61号			X=561・562 Y=-953	楕円形	C		69	24	
63号			X=558・559 Y=-947・-948	楕円形	C	118	29	29	
66号			X=550 Y=-950・-951	楕円形	E	75	59	59	
67号	276	68	X=546・547 Y=-948・-949	楕円形	E	138	120	93	土器 加曾利EⅢ
68号			X=556 Y=-976	円形	A	108	99	33	
74号			X=539・540 Y=-938・-939	楕円形	C	144	100	53	
79A号			X=533 Y=-923~-925	長楕円形	A	200	90	20	
80号			X=579・580 Y=-922・-923	円形	C	85	75	42	
81号			X=580 Y=-924・-925	楕円形	C	93	72	52	
82号			X=579 Y=-926・-927	円形	C	107	97	55	
83号			X=585 Y=-923	不整形	C	73	61	29	
84号			X=587・588 Y=-923~-925	楕円形	A	158	121	21	
85号			X=583 Y=-926	楕円形	E	81	70	34	
86号			X=586・587 Y=-928・-929	楕円形	C	150	130	28	
87号			X=579・580 Y=-931	円形	E	70	67	39	
88号			X=589・590 Y=-932・-934	不整形	A	173	171	25	
89号			X=587・588 Y=-934・-935	円形	A	112	107	23	
90号			X=589・590 Y=-935	円形	E	76	72	51	
91号			X=589・590 Y=-936・-937	円形	A	93	83	24	
92号			X=586・587 Y=-922	楕円形	A	77	54	15	
93号			X=588 Y=-933	円形	A	67	65	23	
96号			X=591 Y=-944	不整形円形	A	87	67	34	

VI 縄文時代の遺構と遺物

土坑一覧(4) (断面形状 A:箱形 B:袋形 C:U字形 D:底凹凸形 E:深箱形) (単位:cm)

土坑名	図番号	PL	位置	平面形状	断面形状	長	短	深	混入物・出土遺物
99号			X=581・582 Y=-981・-982	楕円形	A		66	30	
117号			X=581・583 Y=-004・-005	楕円形	C	129	103	39	
118号			X=582・583 Y=-005・-006	楕円形	D	134	113	19	
119号			X=597~599 Y=-988~-990	方形	C	180	160	20	
120号			X=595・596 Y=-992~-994	長方形	D	174	106	31	
140号			X=598・599 Y=-980・-981	楕円形	C	116	88	28	
141号	276	69	X=589・590 Y=-967・-968	不整形	A	175	148	43	土器 加曾利EⅢ~Ⅳ
142号			X=590・591 Y=-971・-972	円形	C	129	111	43	
143号	276		X=587・588 Y=-980・-981	円形	D	115	111	38	土器 加曾利EⅢ
144号			X=604~607 Y=-019~-022	円形	D	289	288	60	
147号			X=622・623 Y=-039・-040	楕円形	C	141	103	26	
148号	276		X=622 Y=-034・-035	楕円形	A	147	92	14	土器 加曾利E
155A号	277		X=611 Y=-031	円形	A	91	91	47	土器 加曾利E・石皿
155B号			X=608~610 Y=-002・-003	長楕円形	A	240	141	31	
162号		69	X=622~624 Y=-032・-033	楕円形	E	203	132	80	
163号	277	69	X=628・629 Y=-024・-025	円形	E	120		58	土器 加曾利EⅣ
167A号			X=632・633 Y=-031~-034	不整形	D	266		50	
167B号			X=628・629 Y=-032・-033	楕円形		105	85		
170号	277	69	X=593・594 Y=-035	隅丸方形	E	126	106	90	土器 加曾利EⅢ・磨り石
171号		69	X=582・583 Y=-030・-031	楕円形	A	124	83	44	
172号		69	X=627 Y=-014・-015	楕円形	E	83	82	71	
173号		69	X=593・594 Y=-040・-041	楕円形	E	134	67	10	
174号			X=593 Y=-020・-021	円形	A	103	92	55	
175号	278		X=587・588 Y=-007・-008	楕円形	E	145		46	土器 加曾利EⅣ
177A号	278	69	X=600・601 Y=-989・-990	円形	A	133		61	土器 加曾利EⅢ
177B号			X=603・604 Y=-990・-991	不整形		95	83		
183号			X=610・611 Y=-974・-975	円形	C	125	104	37	
184号	278	70	X=596~598 Y=-982・-983	楕円形	C	229	167	50	土器 加曾利EⅢ~Ⅳ

2 その他の遺構と遺物

土坑一覧(5) (断面形状 A:箱形 B:袋形 C:U字形 D:底凹凸形 E:深箱形) (単位:cm)

土坑名	図番号	PL	位置	平面形状	断面形状	長	短	深	混入物・出土遺物
185号	279	70	X=592 Y=-965	不整形円形	A	110	76	96	土器 加曾利E III
186号			X=590・591 Y=-993・-994	円形	E	94	78	47	
187号			X=608・609 Y=-991・-992	円形	C	122	112	34	
188号	279		X=608・609 Y=-995・-996	楕円形	C	103		40	土器 加曾利E III
189号			X=597・598 Y=-016・-017	楕円形	A	151	97	29	
190号			X=599・600 Y=-018・-019	楕円形	A	114	97	40	
191号		70	X=601・602 Y=-021	楕円形	A	83	81	31	
194号			X=610・611 Y=-002~-004	楕円形	C	116		33	
199号			X=603・604 Y=-008・-009	不整形方形	D	103	91	25	
210号			X=620・621 Y=-004~-006	不整形楕円形	D	160	120	27	
211号			X=621・622 Y=-006・-007	不整形方形	D	103	100	24	
213A号		70	X=590・591 Y=-036・-037	不整形円形	E	137	132	115	
213B号			X=607・608 Y=-994	楕円形	C	75	54	23	
214号			X=607 Y=-995	方形	A	67	52	28	
222号			X=620・621 Y=-2.998・-2.999	不整形楕円形	D	132	97	32	
223号	279		X=619 Y=-2.999	楕円形	C	118	78	32	土器 加曾利E III
224号	279		X=620 Y=-003・-004	楕円形	A	82	68	32	土器 加曾利E III・鐵形土製品
225号			X=619・620 Y=-001・-002	不整形楕円形	D	100	66	30	
226号	279	70	X=600 Y=-2.998・-2.999	不整形楕円形	C	116	68	29	土器 加曾利E III
227号			X=626・627 Y=-001	不整形楕円形	C	92	50	21	
228号			X=621 Y=-004	円形	D	67		23	
229号			X=619・620 Y=-005・-006	円形	C	90	87	24	
230号		70	X=600 Y=-2.999	不整形楕円形	C	53	50	31	
231号	279	71	X=600 Y=-001・-002	不整形長方形	C	150	72	27	
233号		71	X=600~603 Y=-2.998~-3.002	不整形長方形	C			24	
235号			X=620 Y=-008	不整形長方形	D			41	
236号			X=624 Y=-010	不整形楕円形	D			32	
237号			X=625 Y=-010	楕円形	C	70	47	46	

VI 縄文時代の遺構と遺物

土坑一覧(6) (断面形状 A:箱形 B:袋形 C:U字形 D:底凹凸形 E:深箱形) (単位:cm)

土坑名	図番号	PL	位置	平面形状	断面形状	長	短	深	混入物・出土遺物
239号		71	X=606 Y=-006・-007	不整形	E	103	97	88	
240号	279		X=610 Y=-022	不整楕円形	A	125		33	
241号	279		X=610 Y=-021	不整楕円形	E	106	48	74	土器 加曾利EⅢ
242号			X=606・607 Y=-017・-018	円形	E	98	95	57	
245号		71	X=601・602 Y=-020・-021	円形	E	99	87	88	
248号	280		X=605・606 Y=-010・-011	円形	A	115	108	38	土器 加曾利EⅢ
249号		71	X=602・603 Y=-007・-008	円形	E	96	83	74	
251A号			X=603・604 Y=-011・-012	円形		78			
251B号			X=618 Y=-992・-993	不整楕円形	A	138	74	51	
252号	280		X=603・604 Y=-011・-012	楕円形	C	136	77	44	土器 加曾利EⅢ
256号			X=596・597 Y=-009・-010	楕円形	E	82	62	47	
257号	281		X=594・595 Y=-012・-013	楕円形	D	92	66	39	土器 加曾利E
258号	281		X=596・597 Y=-998・-999	円形	A	125	115	28	土器 加曾利EⅢ
261号			X=615・616 Y=-987・-988	楕円形	C	98	77	26	
263号			X=594・595 Y=-995	長方形	C	110	65	31	
264号	281		X=591・592 Y=-996・-997	楕円形	C		95	39	土器 加曾利E
265号			X=590 Y=-995・-996	楕円形	C	68	50	22	
266号			X=605・606 Y=-983	楕円形	C	88	62	24	
272号			X=611・612 Y=-981・-982	楕円形	C	112	83	25	
273号	281		X=908・909 Y=-986・-987	楕円形	A	147	123	32	土器 加曾利EⅢ
274号			X=614 Y=-983~-985	不整楕円形	C	150	77	20	
275号			X=616 Y=-980	楕円形	D	75	69	22	
288号			X=579・580 Y=-021・-022	楕円形	C	148	116	24	
289号			X=581・582 Y=-007・-008	隅丸長方形	A	130	97	43	
291号			X=583・584 Y=-062	楕円形	C	98	44	20	
292号			X=583・584 Y=-003・-004	不整楕円形	C	98	73	18	
293号			X=583・584 Y=-004・-005	楕円形	D	113	75	28	
294号			X=583 Y=-002・-003	不整楕円形	C	140	39	29	

土坑一覧(7) (断面形状 A:箱形 B:袋形 C:U字形 D:底凹凸形 E:深箱形) (単位:cm)

土坑名	図番号	PL	位置	平面形状	断面形状	長	短	深	混入物・出土遺物
296号			X=582・583 Y=-011~-022	楕円形	A	109	83	18	
302号			X=586・587 Y=-006・-007	不整楕円形	D	118	89	20	
303号			X=582 Y=-009・-010	楕円形	A	80	56	28	
304号			X=580・581 Y=-997・-998	楕円形	C	96	90	23	
305号			X=578 Y=-999・-3.000	楕円形	D	116	87	16	
311号			X=625 Y=-022	円形	A	68	63	16	
312号			X=624・625 Y=-019・-020	不整形	C	195	128	17	
314号			X=598 Y=-034・-035	不整長方形	C	120	78	22	
315A号			X=607・608 Y=-994・-995	円形		69	67		
315B号			X=612・613 Y=-998・-999	楕円形	C	116	71	22	
316号			X=611・612 Y=-001	楕円形	C	76	65	13	
317号			X=612 Y=-002	楕円形	C	83	60	27	
318号			X=579・580 Y=-948	楕円形		77	63		
319号	281		X=581・582 Y=-948・-949	楕円形	A			47	土器 加曾利EⅢ
322号			X=626 Y=-023・-024	隅丸長方形	A		124	27	
325号			X=598・599 Y=-040・-041	不整形	C	98	93	28	
326号			X=604・605 Y=-036・-037	不整楕円形	D	130	63	21	
327A号		71	X=593 Y=-033	円形	E	86	85	93	
327B号			X=606・607 Y=-036・-037	長楕円形	C	135	62	19	
328号			X=609・610 Y=-038・-039	楕円形	D	148	94	24	
329号			X=606・607 Y=-036・-037	不整楕円形	D	118	94	37	
330号			X=589・590 Y=-038・-039	不整楕円形	A	147	145	27	
331号			X=587・588 Y=-033	不整楕円形	D	166	70	27	
332A号			X=621 Y=-012・-013	不整楕円形	D	98	56	25	
334号			X=621・622 Y=-013・-014	不整楕円形	D	122	76	36	
336A号			X=588・589 Y=-037	楕円形	C	122	84	17	
336B号			X=622・623 Y=-014・-015	楕円形	C	106	77	30	
337A号			X=584・585 Y=-034・-035	楕円形	C	126	98	23	

VI 縄文時代の遺構と遺物

土坑一覧(8) (断面形状 A:箱形 B:袋形 C:U字形 D:底凹凸形 E:深箱形) (単位:cm)

土坑名	図番号	PL	位置	平面形状	断面形状	長	短	深	混入物・出土遺物
337B号			X=621・622 Y=-016	楕円形	D	98	56	28	
338A号	281		X=621・622 Y=-038	楕円形	C	103	95	31	土器 加曾利EⅢ
338B号			X=617 Y=-028	円形	D	76	70	21	
341号			X=617 Y=-017・-018	楕円形	D	100	70	20	
342A号	282	71	X=622・623 Y=-035・-036	不整楕円形	A	129	103	34	土器 加曾利EⅢ
342B号			X=611・612 Y=-040・-041	楕円形	A	78	56	28	
343号		71	X=625・626 Y=-087・-088	円形	E	131	114	89	
345号	282	72	X=624・625 Y=-025	楕円形	E	116	100	62	土器 諸磯b
346号			X=624・625 Y=-039・-040	楕円形	C	134	100	53	
348号			X=627・628 Y=-026・-027	円形	C	85	78	17	
349号			X=626 Y=-023・-024	楕円形	D	129	99	17	
354A号			X=615~617 Y=-989・-990	楕円形	A	230	163	35	
355A号			X=621・622 Y=-001	楕円形	D	146	70	32	
356A号			X=609 Y=-012	楕円形	D	96	76	31	
356B号			X=591・592 Y=-931	不整楕円形	D	143	43	27	
357B号			X=590・591 Y=-931	円形	A	81	67	36	
360A号			X=620 Y=-040・-041	不整円形	A	88	86	30	
361A号			X=620・621 Y=-000~-002	楕円形	D	127	83	26	
361B号	282		X=583 Y=-922	不整方形	A	80	73	37	土器 加曾利EⅢ
365A号	282		X=604・605 Y=-021・-022	楕円形	E		75	62	土器 加曾利EⅢ
366A号	282		X=604・605 Y=-020・-021	円形	B	97	80	80	
367B号			X=578・579 Y=-923	楕円形	E	88	77	39	
368号			X=615 Y=-990	不整楕円形	C	89	62	22	
369B号	282		X=578・579 Y=-941	円形	E	95		58	土器 加曾利EⅢ
370号			X=585・586 Y=-943・-944	楕円形	C	131	89	57	
371号			X=614・615 Y=-992・-993	楕円形	D	142	80	38	
374号			X=615 Y=-988・-989	不整楕円形	A	112	51	19	
376号			X=576・577 Y=-006・-007	楕円形	D	134	115	17	

2 その他の遺構と遺物

土坑一覧(9) (断面形状 A:箱形 B:袋形 C:U字形 D:底凹凸形 E:深箱形) (単位:cm)

土坑名	図番号	PL	位置	平面形状	断面形状	長	短	深	混入物・出土遺物
377号			X=572・573 Y=-006	不整円形	C	64	57	6	
378号			X=574 Y=-003・-004	楕円形	C	108	69	12	
379号			X=574 Y=-989	楕円形	C	81	76	5	
380号			X=576・577 Y=-012・-013	不整楕円形	C	97	84	67	
381号			X=571・572 Y=-3.000・-001	円形	A	130		37	
382号			X=571・572 Y=-007・-008	円形	D	109	101	33	
384号			X=576・577 Y=-986	円形	C	118	116	33	
385号			X=577 Y=-985	楕円形	C	73	49	18	
386号			X=576・577 Y=-984	楕円形	A	69	42	13	
387号		72	X=555 Y=-976・-977	不整円形	A	117	92	31	
388号	283	72	X=577・578 Y=978・-979	楕円形	A	163	126	47	土器 勝坂後半
389号			X=571・572 Y=-997・-998	不整楕円形	D	92	70	18	
390号			X=575 Y=-011・-012	不整楕円形	D	134	79	38	
394号			X=604 Y=-960	楕円形	C	84	49	31	
395号			X=603 Y=-959・-960	楕円形	C	160	103	18	
396号			X=576・577 Y=-948	楕円形	C	75	56	65	
397号			X=576・577 Y=-948・-949	不整楕円形	A	103	75	44	
398号			X=576 Y=-954	円形	A	100	87	39	
399号			X=577 Y=-959・-960	楕円形	A	93	60	39	
400号			X=574 Y=-951・-952	円形	C	77	62	20	
403号			X=575・576 Y=-972	楕円形	C	144	107	19	
404号			X=577・578 Y=-957・-958	円形	D	71	45	26	
405号	284	72	X=571・572 Y=-960・-961	長方形	A	150	100	53	土器 加曾利EIV
406号			X=575・576 Y=-965・-966	楕円形	A	101	65	54	
411号	284		X=569・570 Y=-947・-948	円形	A	100	88	63	土器 加曾利EIII
412号			X=565・566 Y=-947・-948	楕円形	C	111	82	37	
416号			X=572・573 Y=-013・-014	円形	C	71	66	15	
420号			X=580 Y=-959	楕円形	C	59	44	34	

VI 縄文時代の遺構と遺物

土坑一覧00 (断面形状 A:箱形 B:袋形 C:U字形 D:底凹凸形 E:深箱形) (単位:cm)

土坑名	図番号	PL	位置	平面形状	断面形状	長	短	深	混入物・出土遺物
426号			X=570 Y=-946	不整形	C		70	29	
438号			X=575 Y=-922・-923	不整形楕円形	C	77	53	29	
439号			X=575・576 Y=-924	不整形楕円形	C	86	58	70	
441号			X=574・575 Y=-930	方形	C	53	51	27	
443号			X=577・578 Y=-914	不整形楕円形	A	61	46	23	
445号			X=571~573 Y=-968~-971	不整形	C	210	95	11	土器 加曾利EⅢ
447号			X=571・572 Y=-018	円形	C	50	47	12	
448号	72		X=611・612 Y=-050・-051	楕円形	A	166	93	43	
1390号			X=608・609 Y=-050・-051	楕円形		45	32		

5号土坑出土遺物 (第272図、PL.90)

(1)は、断面三角の隆線による弧状の文様。縄文は、単筋RLを縦方向に施文している。加曾利EⅣ式土器。

16号土坑出土遺物 (第272図、PL.90)

凹み石である。長径楕円形状。両面は摩滅により著しく滑らかで、各2孔の凹みがある。長側縁は敲打によって平坦化。14.65×7.1×3.9cm×624g。粗粒輝石安山岩。

20号土坑出土遺物 (第273図、PL.90)

(1)は、波状の口縁部片になる。隆線による渦巻状の文様を施文している。加曾利EⅢ式土器。

25号土坑出土遺物 (第273・274図、PL.90・91)

(1)は、土坑底部からほぼ完形で出土した。キャリバー形を呈する。口縁部文様は、粘土紐を貼り付け2単位の把手を極にして沈線で方形の区画を作る。口縁部、頸部、胴部は、隆線による横位区画がされる。頸部無文帯はわずかに残り、胴部文様帯は、隆線に刻みを施したものが波状に廻る。縄文は、口縁部文様と胴部上半の文様帯に単筋RLが施文される。頸部と胴部下半は、無文帯となる。(2)は口縁部片で、刻みを持つ隆線による曲線文や環状になる把手が意匠される。文様内を斜線で充填する部分がある。(3)は、壺形になる。底部が高台状になり、胴部上半には、突帯が二条廻る。(4)は、口縁部片で隆線による楕円の区画。(5)は、口縁部文様で半截竹管による交互刺突文の土器。(6)は、小形の円筒形を呈する。口縁部にφ4mmほどの孔が穿たれる。二個一組で対角にもある。頸部には、突帯が一錠廻る。(1~3・6)は、勝坂式終末、(4・5)は加曾利EⅢ式土器。(7)は、磨製石斧基部小片。4.8×42.7×5cm×72g。変玄武岩。

31号土坑出土遺物 (第274図、PL.91)

(1)は、口縁部文様を隆線により半円形に区画する。その下部に楕円などの文様を描いている。縄文は、口

縁部区画内に単節 RL を横位方向にそれ以下を縦位に施文している。加曾利 E III 式土器。

33号土坑出土遺物 (第274図、PL.91)

(1)は沈線による楕円区画文。縄文は、単節 LR を縦位に施文。(2)は、隆起線による文様区画。縄文は、単節 RL を横位方向に施文。(3)は、胴部片で櫛状工具による波状文を縦位に施文。加曾利 E III 式土器。

40号土坑出土遺物 (第275図、PL.91)

(1)は口縁部に沈線を廻らし無文帯を作る。緩やかな波状口縁で頂部側縁には突起が付く。突起部から弧線が対になるように施文され楕円の区画を作る。縄文は、単節 RL。(2)は、微隆起線により口縁部の無文帯を区画する。細い沈線で対弧状の線を引き磨り消し縄文による無文帯を作る。縄文は、単節 LR が施文方向を変えて羽状縄文にしている。(3)は、単節 RL の縄文を縦位に施文。加曾利 E IV 式土器。

42号土坑出土遺物 (第275図、PL.92)

(1)は、沈線が横位に廻り口縁部無文帯を区画する。縄文は、単節 RL を横位・縦位に施文し羽状縄文を表現する。(2)は、口縁部破片で、隆線と沈線による渦巻文。(3～5)は、沈線による縦位区画の土器。(6)は、深鉢底部片で底部が若干高台状になる。(1・4)は、加曾利 E IV。他は、加曾利 E III の式土器。(7)は多孔石で表裏面を使用。16×15×7 cm×215 g、粗粒輝石安山岩。(8)は凹み石表裏面使用。側縁・端部に敲打痕7.5×5.7×4 cm×215 g、粗粒輝石安山岩。

67号土坑出土遺物 (第276図、PL.92)

(1)は、口縁部文様帯を隆線で楕円に区画する。加曾利 E III 式土器。

141号土坑出土遺物 (第276図、PL.92)

(1)は、断面三角の隆線による口縁部区画。縄文は、単節 LR を縦位に施文。両耳壺の破片と思われる。加曾利 E III から IV 式土器。(2)は、板状の母岩材か。片小口は平坦な切り口。14×14.5×4 cm×1240 g。黒色変岩。

143号土坑出土遺物 (第276図、PL.92)

(1)は、隆線により縦位に区画。区画内は単節 LR の縄文が充填され、三角の印刻が施される。五頸ヶ台式土器。(2)は、浅鉢で器面全体に磨きかけられる。(3)は、小形の壺形土器。口縁部に小孔が穿たれる。(2・3)は加曾利 E III 式土器。

148号土坑出土遺物 (第276図、PL.92)

(1)は、胴部片で沈線による縦位の区画。縄文は、単節 RL を縦位に施文。加曾利 E III 式土器。

155 A 号土坑出土遺物 (第277図、PL.93)

(1)は、表裏に条痕を施文する早期末の条痕文系土器。(2)は、隆線による縦位区画。縄文は、単節 RL を縦位に施文。加曾利 E IV 式土器。(3)は、石皿片。磨り面は片面。表裏に各浅い3孔あり(多孔石に通有な孔)。32×25×9.5 cm×7400 g。粗粒輝石安山岩。

VI 縄文時代の遺構と遺物

163号土坑出土遺物 (第277図、PL.93)

(1)は、波状口縁になり、口縁部に竹管状の工具で横位に施文。縄文は、単節 RL。(2)は、隆線と沈線による口縁部を区画し、胴部には、重に沈線を施文する。加曾利E IV式土器。

170号土坑出土遺物 (第277図、PL.93)

(1)は、縦位区画で単節 RL を縦位施文の土器。(2)は、縦位区画で単節 RL を縦位施文の土器。加曾利E III式土器。(3)は、磨り石。8.5×8.1×5.1cm×440g。粗粒輝石安山岩。

175号土坑出土遺物 (第278図、PL.93)

(1)は、口縁部に列点状の刺突文を持つ。縄文は単節 LR の土器。加曾利E IV式土器。

177A号土坑出土遺物 (第278図、PL.93)

(1)は、口縁部破片で舌状の突起部。口縁部は、楕円形の文様を描く。縄文は、単節 RL。(2)は、沈線による「S」状の文様。地文は、単節 RL。(3)は、沈線による縦位区画。縄文は、単節 LR。加曾利E III式土器。

184号土坑出土遺物 (第278図、PL.93・94)

(1)は、注口の浅鉢。口縁部に微隆起線で横位に区画する。縄文は、単節 RL で施文方向を変えて羽状縄文にしている。(2)は、口縁部に沈線が横位に廻る。縄文は、単節 RL。(3)は、橋状把手が口縁部に付けられる。口縁部は、微隆起線により区画される。胴部は、細い沈線による弧線区画内を磨り消し縄文による無文帯。(4)は、土器底部で文様が施文されない。(2)加曾利E III、(1・3・4)加曾利IV式土器。

185号土坑遺物 (第279図、PL.94)

(1)は、隆線が弧状に貼り付けられるが剥落している。縄文は、単節 RL。加曾利E III式土器。

188号土坑遺物 (第279図、PL.94)

太めの沈線による縦位区画。縄文は、0段で太さの異なる縄文を単節に燃った RL。加曾利E III式土器。

223号土坑遺物 (第279図、PL.94)

沈線による縦位区画と「S」文様。縄文は、単節 LR。加曾利E III式土器。

224号土坑遺物 (第279図、PL.94)

沈線による縦位区画。縄文は、単節 LR。加曾利E III式土器。

226号土坑遺物 (第280図、PL.94・95)

(1)は、口縁部を「∞」を基調とした楕円区画。胴部は沈線による縦位区画。縄文は、単節 RL で、口縁部は横方向、胴部縦方向に施文。(2)は、口縁部を「∞」を基調とした楕円区画。舌状突起を持つ波状口縁。(4)は、沈線による縦位区画。縄文は、単節 LR。(3・5)は沈線による縦位区画と「S」文様。縄文は、単節 RL。加曾利E III式土器。(6)は鎌(凹基無茎)形焼成土製品。長3.5×幅2.5×厚0.7cm×重3.75g。灰白色で細かい胎土。

241号土坑遺物 (第279図、PL.94)

断面三角の隆線による縦位区画。縄文は、単節 RL。加曾利 E III 式土器。

248号土坑遺物 (第280図、PL.95)

(1)は、隆線による楕円区画文様。縄文は、単節 RL。加曾利 E III 式土器。

252号土坑遺物 (第280図、PL.95)

(1)は、単節 LR の縄文を横位・縦位に施して羽状縄文を構成する。加曾利 E III 式土器。

257号土坑遺物 (第281図、PL.95)

(1)は、沈線による楕円区画文様。縄文は、単節 RL。加曾利 E IV 式土器

258号土坑遺物 (第281図、PL.95)

沈線による縦位区画。縄文は、単節 RL。加曾利 E III 式土器。

264号土坑遺物 (第281図、PL.95)

楕状把手を持つ深鉢。沈線による弧状文様。縄文は、単節 RL で施文方向を変えて羽状縄文を構成する。加曾利 E III ~ IV 式。

273号土坑遺物 (第281図、PL.95)

(1)は、口縁部を沈線が廻り胴部を条線施文の浅鉢。(2)は、沈線による縦位区画と「S」文様。縄文は、単節 LR。(3)は、沈線による縦位区画。縄文は、単節 RL。加曾利 E III 式土器。

319号土坑遺物 (第281図、PL.95)

沈線による縦位区画。縄文は、単節 RL。加曾利 E III 式土器。

338 A 号土坑遺物 (第281図、PL.95)

沈線による文様施文。縄文は、単節 RL。加曾利 E III 式土器。

342 A 号土坑遺物 (第282図、PL.95)

(1)は、口縁部を太めの沈線で半円形に区画。縄文は、単節 RL を口縁部では、横位に胴部では縦位方向に施し、羽状縄文を構成する。(2)は、沈線による縦位区画。縄文は、単節 RL。加曾利 E III 式土器。

345号土坑遺物 (第282図、PL.95)

半截竹管による横位の区画文。諸磯 b 式土器。

361 B 号土坑遺物 (第282図、PL.95)

舌状突起を持つ波状口縁。太めの沈線で楕円区画文様を描く。縄文は、単節 RL で施文方向を変えて羽状縄

VI 縄文時代の遺構と遺物

文にする。加曾利EⅢ式土器。

365A号土坑遺物 (第282図、PL.96)

沈線による縦位区画。縄文は、単節 RL。加曾利EⅢ式土器。

369B号土坑遺物 (第282図、PL.96)

舌状突起を持つ波状口縁。太めの沈線で楕円区画文様を描く。加曾利EⅢ式土器。

388号土坑遺物 (第283図、PL.96)

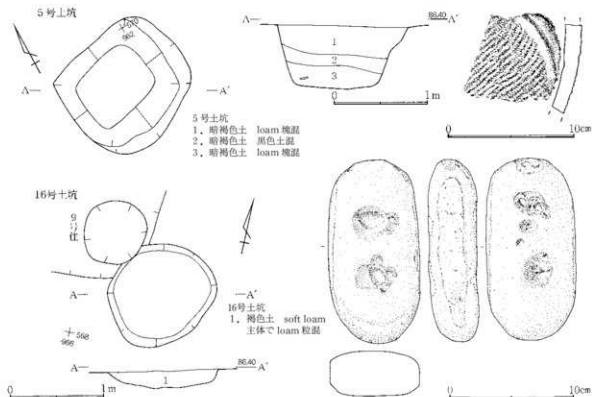
(1)は、口縁部、頸部、胴部と刻みを持つ隆線により分帯される。二単位の大形の突起を持つ。口縁部は、刻みを持つ波状の隆線と隆線間に沈線を充填する文様。頸部に無文帯を持ち、胴部上半は刻みを持つ隆線が施文される。胴部下半は無文帯となる。(2)は、浅鉢で内外面を丁寧な磨き調整がされる。勝板式後半の土器。

405号土坑遺物 (第284図、PL.96)

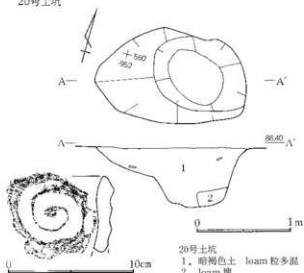
(1)は、単節 RL で施文方向を変えて羽状縄文を表現している。(2)は、沈線による区画内に単節 RL の縄文が斜めに充填施文される。加曾利EⅣ式。

411号土坑遺物 (第284図、PL.96)

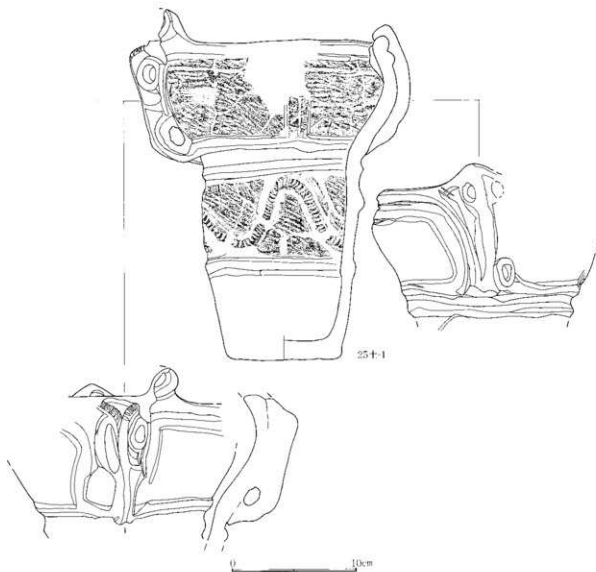
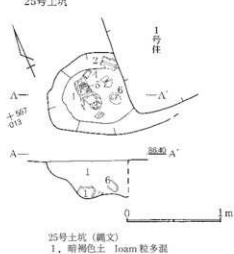
(1・2)は、沈線による縦位区画。縄文は、単節 RL を縦位施文。加曾利EⅢ式土器。(3)は、凹み石小片。
8.5×5.5×4.4cm×190g。粗粒輝石安山岩。



20号上坑



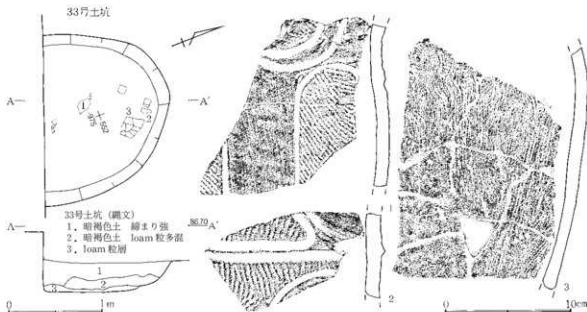
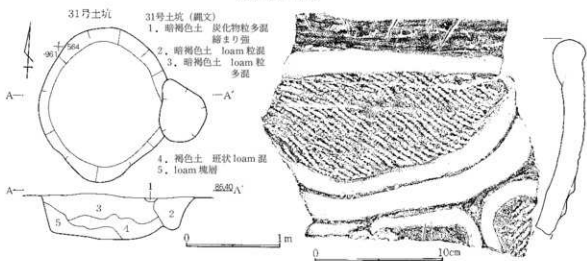
25号上坑



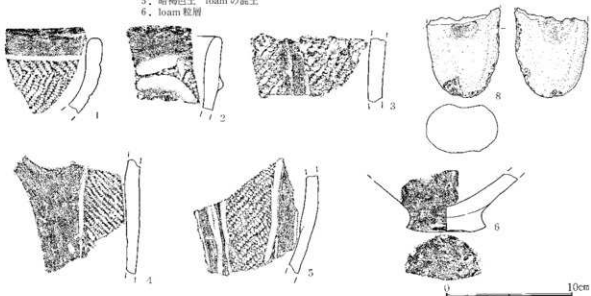
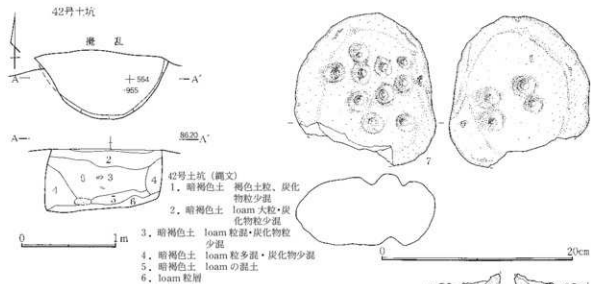
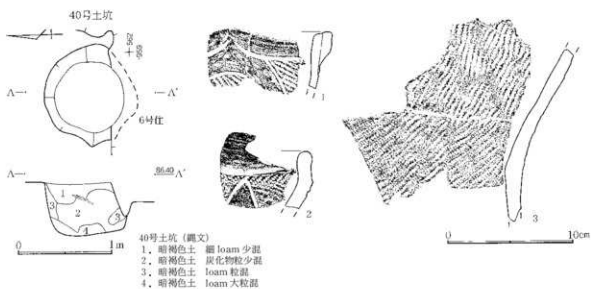
第273図 20号・25号土坑・出土遺物



25号土坑出土遺物

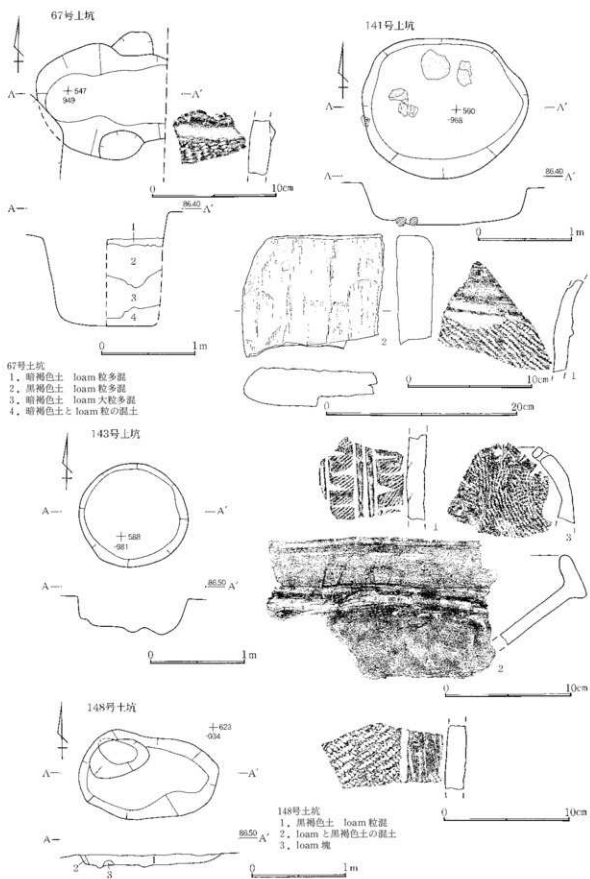


第274図 25号・31号・33号土坑・出土遺物

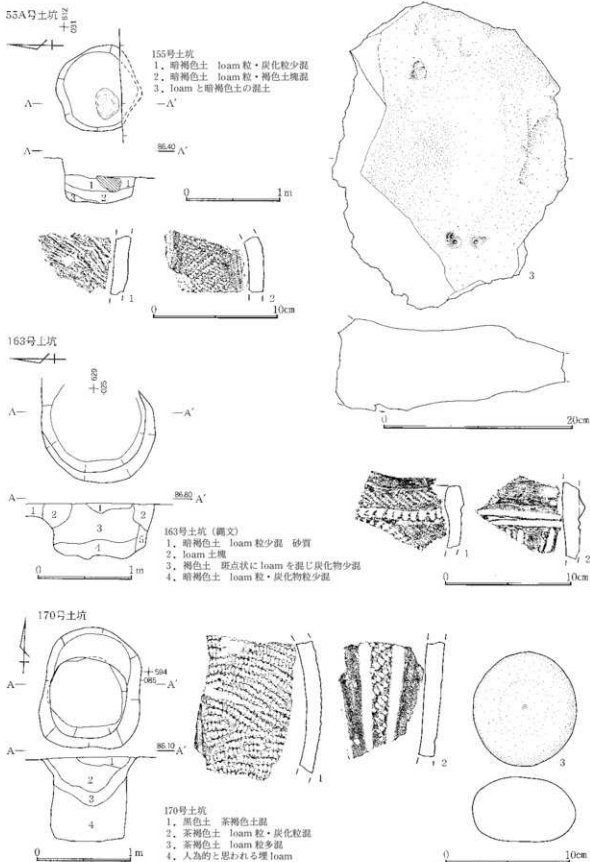


第275図 40号・42号土坑・出土遺物

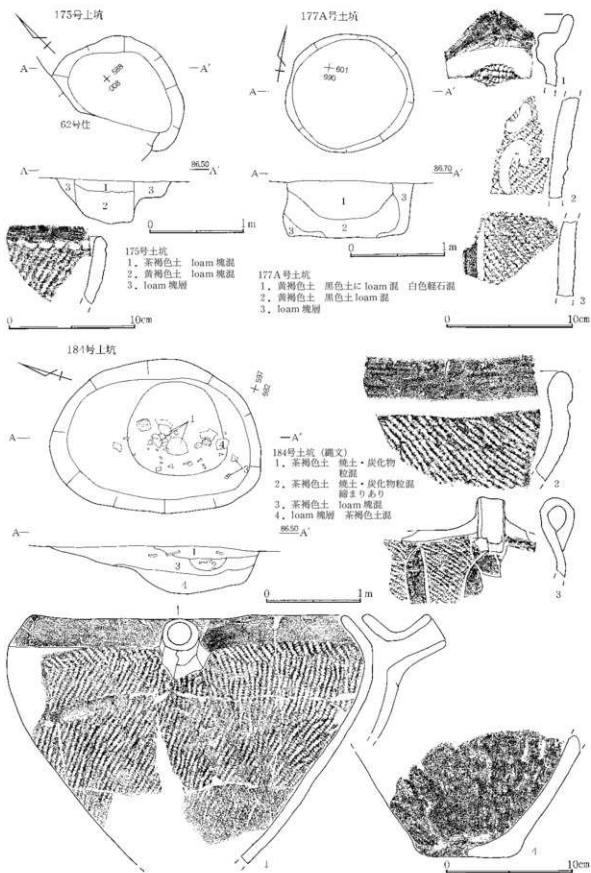
VI 縄文時代の遺構と遺物

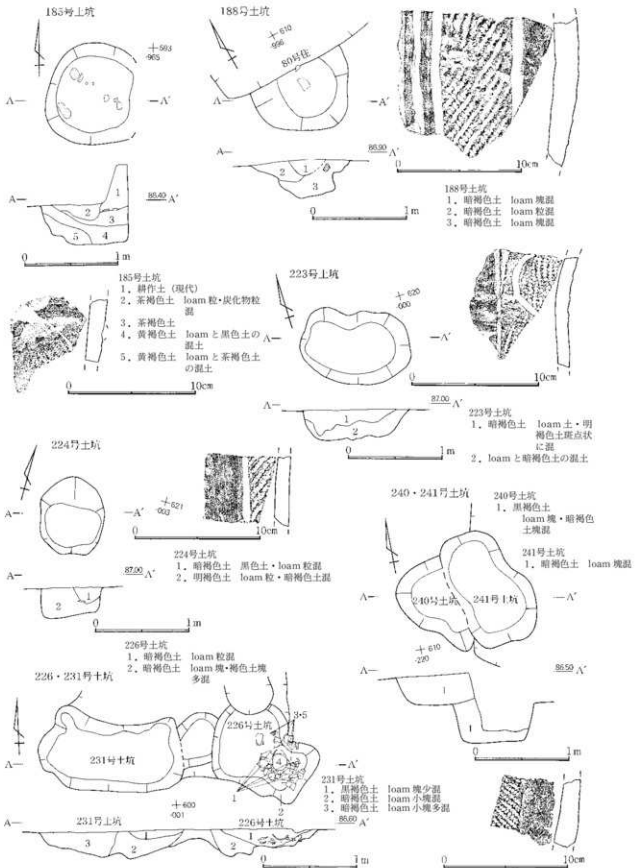


第276図 67号・141号・143号・148号土坑・出土遺物

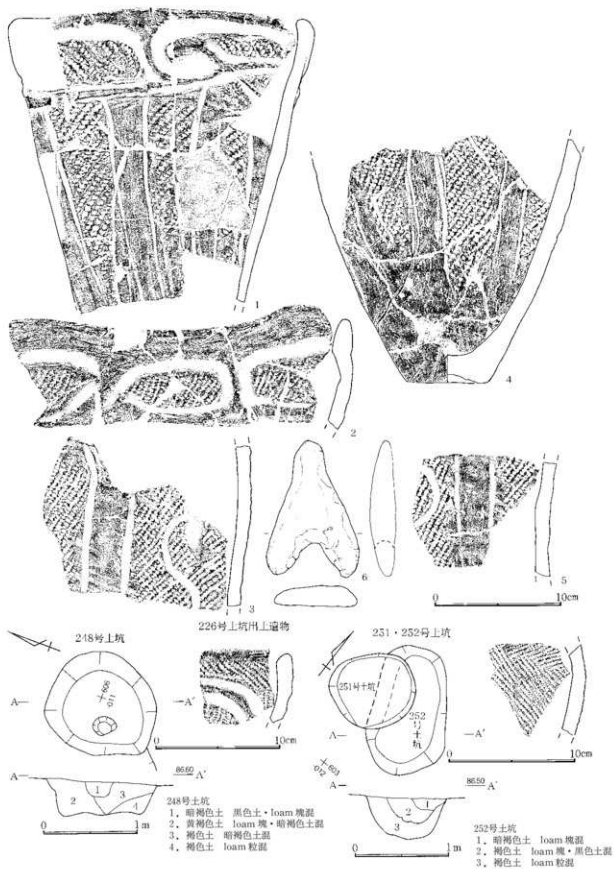


VI 縄文時代の遺構と遺物



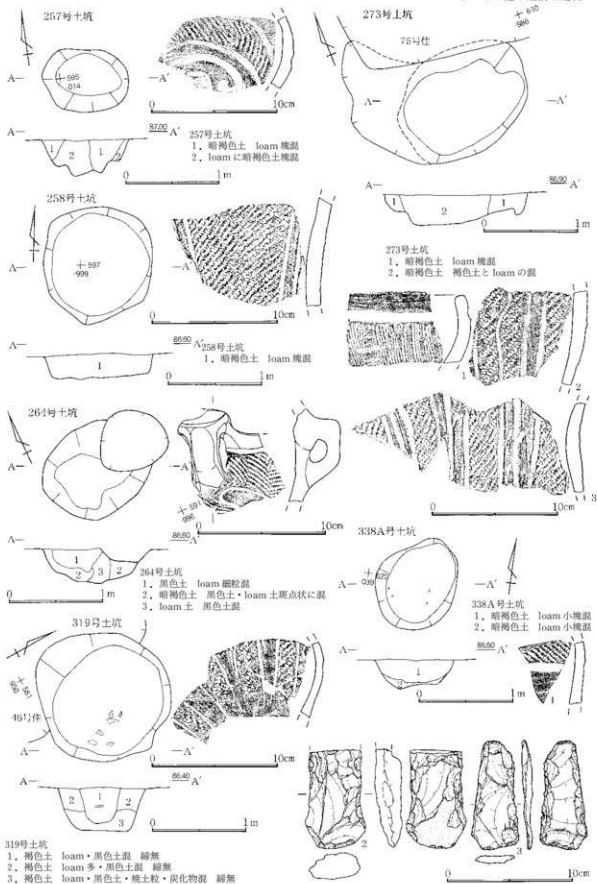


第279図 185号・188号・223号・224号・226号・231号・240号・241号土坑・出土遺物



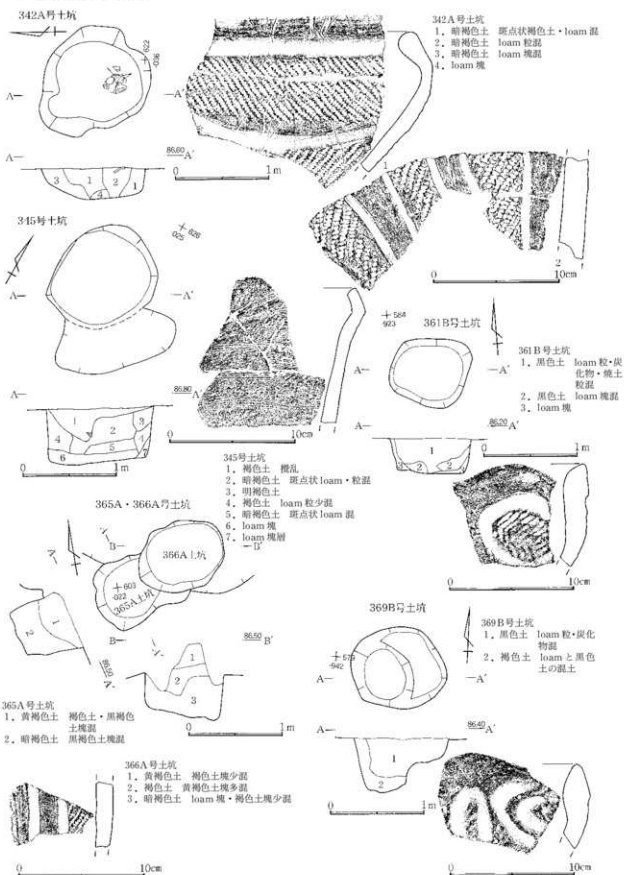
第280図 226号・248号・252号土坑・出土遺物

2 その他の遺構と遺物



第281図 257号・258号・264号・273号・319号・338A号土坑・出土遺物

VI 縄文時代の遺構と遺物

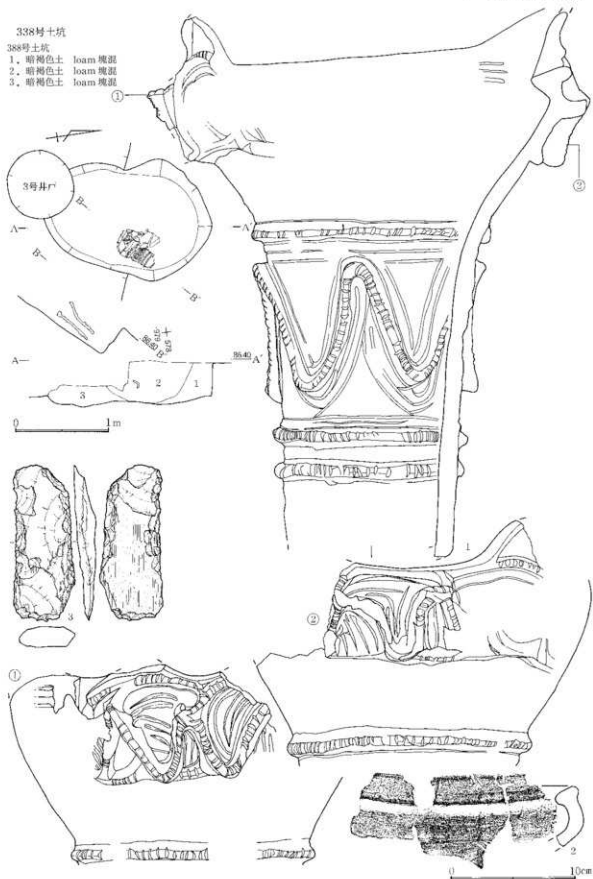


第282図 342号・345号・361B号・365A号・366A号・369B号土坑・出土遺物

338号土坑

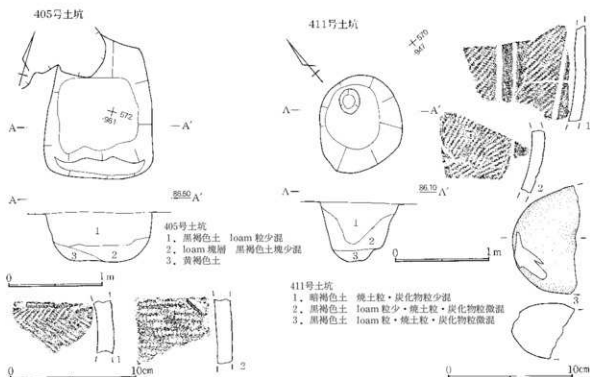
388号土坑

1. 暗褐色土 loam 塊泥
 2. 暗褐色土 loam 塊泥
 3. 暗褐色土 loam 塊泥



第283図 388号土坑・出土遺物

VI 縄文時代の遺構と遺物



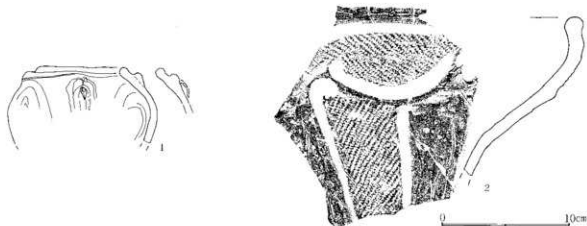
第284図 405号・411号土坑・出土遺物

3 遺跡出土の土器と石器 (第285~295図, PL.96~105)

ここに掲載する土器および石器は、遺構外から出土したものであり、主に縄文時代の遺物である。ただし、石器類は遺構出土のものも多くある。しかし、資料のもつ帰属年代と出土遺構との時代差が顕著に認められるものがある。それらについては出土遺構と分離して掲載することにし、出土遺構名およびその時代を記すことにした。

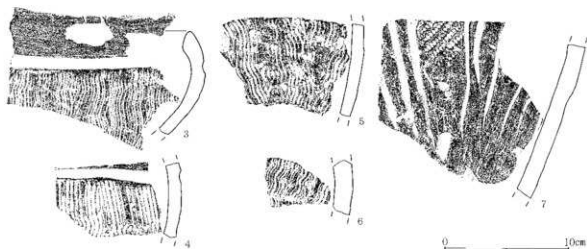
土器

(1)は小型有頸土器で、二単位になる紐による釣り手孔を持つ。胴部には浅い沈線で楕円文様を描く。底部は欠損。口径6.8cm、現高6.0cm。勝坂式土器。(2)は、キャリバー形の深鉢。口縁部文様は、「∞」を基調と



第285図 遺跡出土縄文土器(1)

した楕円区画文様。胴部は沈線による縦位区画。縄文は、単節 RL を口縁部では横位方向、胴部では縦位方向に施文している。(3～6)は、櫛状工具による波状線を描く。(7)は、沈線による縦位区画。縄文は、単節 RL。加曾利EⅢ式土器。



第286図 遺跡出土縄文土器(2)

塚下遺跡出土石器計測表(1)

No	回	PL	遺跡名	位置	部 種	残	長	幅	厚	重	石 材	備 考
1	287	97	33号住	埋土	凹基無基鉢	突形	1.6	1.25	0.45	0.51	黒曜石	
2	287	97	29号住	埋土	凹基無基鉢	略定形	1.95	1.8	0.4	1.25	チャート	
3	287	97	1306Pt	埋土	凹基無基鉢	略定形	2.3	1.2	0.4	0.98	チャート	
4	287	97	1号住	埋土	凹基無基鉢	突形	2.4	1.75	0.3	0.93	チャート	
5	287	97	135号住	埋土	凹基無基鉢	略定形	3.0	1.4	0.3	1.33	黒色頁岩	
6	287	97	66号住	埋土	凹基無基鉢	略定形	3.2	2.0	0.4	1.91	黒色安山岩	
7	288	97	29号住	埋土	凹基無基鉢	片基部欠	3.15	1.9	0.5	1.39	黒色安山岩	
8	288	97	13号住	埋土	凹基無基鉢	片基部欠	2.65	2.0	0.45	1.72	黒色安山岩	
9	288		635-020	埋土	凹基無基鉢	先端欠	2.4	1.9	0.4	1.42	黒色安山岩	
10	288	97	47号住	埋土	凹基無基鉢	片基部欠	2.6	1.6	0.4	1.67	チャート	
11	288	97	45号住	埋土	凹基無基鉢	両基部欠	2.7	1.7	0.55	2.1	チャート	
12	288	97	11号住	埋土	凹基無基鉢	先・基部欠	1.6	1.7	0.4	0.87	チャート	
13	288	97	29号住	埋土	凹基無基鉢	先端部欠	1.9	2.15	0.45	1.42	黒色安山岩	
14	288		97号住	竈埋土	凹基無基鉢	基部欠	3.0	1.5	0.4	1.41	チャート	
15	288	97	63号住	埋土	平基無基鉢	突形	1.65	1.5	0.45	0.69	黒色頁岩	
16	288	97	23号住	埋土	凹基無基鉢	両基部欠	2.15	1.45	0.4	0.83	チャート	
17	288	97	11号溝	埋土	平基有基鉢	略定形	3.3	1.6	0.5	1.57	黒色頁岩	
18	288	97	11号住	埋土	簾	斜部欠	4.25	3.4	1.05	13.03	黒色頁岩	
19	288	97	570-035	埋土	楕型石匙	柄部欠	1.5	4.5	0.4	3.69	チャート	
20	288	88	1区	表土	楕型石匙	柄部欠	2.5	3.3	1.0	6.34	チャート	
21	288	88	51号住	埋土	鏝?		1.9	2.3	0.55	2.22	黒色安山岩	
22	288	88	1号堀欠	埋土	前部縦長形	略定形	4.7	3.4	0.75	13.21	黒色頁岩	
23	288	88	79号住	埋土	短冊形打棒	略定形	5.95	3.6	0.6	16.69	黒色頁岩	
24	288	88	55号住	埋土	銅片石蓋	略定形	7.2	4.2	0.7	31.0	珪質頁岩	
25	288	88	11号住	埋土	前部楕円形	略定形	3.6	4.1	0.7	13.12	黒色安山岩	
26	289	88	50号住	埋土	銅片石蓋	略定形	7.4	5.3	1.3	51.0	黒色頁岩	
27	289	88	13号住	埋土	前部楕円形	略定形	3.95	4.4	0.95	17.32	黒色頁岩	
28	289	88	77号住	埋土	前部縦長形	略定形	2.35	5.15	0.9	11.05	黒色頁岩	
29	289	88	50号住	埋土	前部楕円形	略定形	5.8	6.1	1.25	57.03	黒色頁岩	
30	289	88	10号住	埋土	前部?横長形	略定形	3.3	6.5	0.6	15.84	黒色頁岩	
31	289	88	18号住	埋土	前部?横長形	略定形	5.6	8.15	1.35	69.4	黒色頁岩	
32	289	88	55号土坑	埋土	前部縦長形	略定形	4.9	8.75	1.7	82.04	黒色頁岩	
33	289	88	18号住	竈埋土	前部楕円形	略定形	4.5	5.7	1.25	39.25	ホルンフェルス	

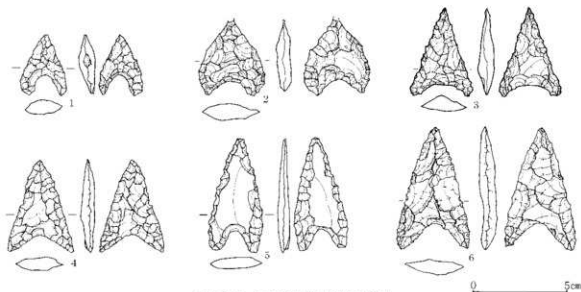
VI 縄文時代の遺構と遺物

塚下遺跡出土石器計測表(2)

No	区	PL	遺構名	位置	器種	残	長	幅	厚	重	石材	備考
34	289	98	55号住	埋土	剥片石器	略完形	7.0	11.8	2.2	220.0	黒色頁岩	
35	289	98	13号住	埋土	礫部?	略完形	6.8	9.8	2.2	161.0	黒色頁岩	
36	289	98	38号住	埋土	礫部?	略完形	5.8	8.2	2.45	130.0	黒色頁岩	
37	289	99	16号住	埋土	短冊形打斧	略完形	108.0	4.3	1.8	80.39	黒色頁岩	
38	289	99	16号住	埋土	短冊形打斧	略完形	11.45	4.1	1.63	91.17	細粒輝石安山岩	
20	289	99	127号住	埋土	短冊形打斧	略完形	11.1	4.2	1.6	97.0	黒色頁岩	
40	289	99	18号住	埋土	打斧	略完形	13.3	5.1	2.1	147.0	珪質頁岩	
41	289	99	16号住	埋土	短冊形打斧	略完形	13.35	5.6	2.1	138.0	黒色頁岩	
42	289	99	18号住	埋土	短冊形打斧	端部欠	9.2	5.15	1.5	78.4	黒色頁岩	
43	290	99	226号土坑	埋土	磨形打斧	略完形	9.95	5.85	1.5	101.35	黒色頁岩	
44	290	99	75号住	埋土	短冊形打斧	略完形	10.4	4.8	1.8	93.0	黒色頁岩	
45	290	99	3号土坑	埋土	短冊形打斧	先端部欠	7.45	3.95	115.0	36.39	黒色頁岩	
46	290	99	13号住	埋土	短冊形打斧	先端部欠	9.6	5.2	2.2	112.59	黒色頁岩	
47	290	99	53号住	埋土	短冊形打斧	略完形	8.75	4.0	1.45	58.36	細粒輝石安山岩	
48	290	99	22号住	埋土	短冊形打斧	基・先端欠	9.2	4.2	1.75	64.04	ホルンフェルス	
49	290	99	27号住	埋土	短冊形打斧	先端欠	6.95	3.95	1.3	50.04	黒色頁岩	
50	290	99	11号住	埋土	打斧	先端部欠	8.8	4.75	2.2	102.01	細粒輝石安山岩	
51	290	99	Ⅲ区	表土	打製石斧	基・先端欠	8.4	4.4	1.3	45.0	黒色頁岩	
52	290	100	Ⅳ区	表土	打製石斧	先端部欠	8.6	4.5	1.3	94.0	細粒輝石安山岩	
53	290	100	35号住	埋土	短冊形打斧	先端部	7.6	4.65	1.5	67.65	細粒輝石安山岩	
54	290	100	64号住	埋土	短冊形打斧	半欠	5.5	4.0	1.2	31.88	珪質頁岩	
55	290	100	29号住	埋土	短冊形打斧	先端部小片	6.1	4.2	1.45	43.42	黒色頁岩	
56	290	100	13号住	埋土	短冊形打斧	先端部欠	5.4	3.5	1.4	26.67	細粒輝石安山岩	
57	290	100	79号住	埋土	短冊形?打斧	先端部	4.2	4.2	1.1	23.0	珪質頁岩	
58	290	100	79号住	埋土	短冊形打斧	基部欠	8.85	4.9	2.2	127.0	細粒輝石安山岩	
59	290	100	79号住	埋土	短冊形打斧	基部欠	7.75	4.15	1.53	44.89	黒色頁岩	
60	290	100	Ⅰ区	表土	打製石斧	基部欠	8.4	5.0	2.1	126.0	ホルンフェルス	
61	290	100	13号住	埋土	短冊形打斧	基部欠	7.15	4.1	2.5	65.51	黒色頁岩	
62	291	100	16号住	埋土	短冊形打斧	基部側半欠	6.0	4.9	1.4	57.25	黒色頁岩	
63	291	100	16号住	埋土	短冊形打斧	先端部小片	4.45	4.15	1.1	17.37	ホルンフェルス	
64	291	100	429Pc	埋土	短冊形打斧	基部半欠	6.0	4.25	1.65	48.11	黒色頁岩	
65	291	100	137号住	埋土	短冊形?打斧	先端部小片	4.3	3.5	1.2	25.0	ホルンフェルス	
66	291	100	79号住	埋土	短冊形?打斧	先端小片	3.8	5.5	1.3	54.0	黒色頁岩	
67	291	100	76号住	埋土	短冊形?打斧	中位小片	6.5	6.0	1.6	89.0	黒色頁岩	
69	291	100	33号住	埋土	磨形?打斧	先端部小片	6.4	6.4	1.2	75.38	緑色頁岩	
69	291	100	33号土坑	埋土	短冊形打斧	両端欠	4.55	4.0	1.45	31.82	細粒輝石安山岩	
70	291	100	55号住	埋土	短冊形?打斧	中位小片	4.0	4.2	1.8	36.0	細粒輝石安山岩	
71	291	100	13号住	埋土	短冊形?打斧	両端小片	3.95	4.4	1.3	27.85	黒色頁岩	
72	291	100	18号住	埋土	短冊形打斧	両端欠小片	4.5	4.7	1.5	36.57	細粒輝石安山岩	
73	291	100	38号住	埋土	短冊形?打斧	中位小片	4.1	3.8	1.5	31.0	黒色頁岩	
74	291	100	I-600Pt	埋土	打製石斧	先端部	4.3	6.7	1.4	56.0	黒色安山岩	
75	291	101	77号住	埋土	短冊形打斧	基部欠	9.85	5.45	1.5	76.34	細粒輝石安山岩	
76	291	101	33号住	埋土	磨形打斧	基部欠	8.95	5.75	1.45	81.33	黒色安山岩	
77	291	101	2号住	埋土	磨形?打斧	基部欠	8.1	5.6	2.0	107.0	黒色頁岩	
78	291	101	13号住	埋土	分銅形打斧	端部少欠	10.55	8.85	2.35	195.0	ホルンフェルス	
79	291	101	13号住	埋土	分銅形打斧	両端欠	8.75	6.1	1.95	96.92	ホルンフェルス	
80	291	101	76号住	埋土	分銅形?打斧	片端	6.8	8.3	2.4	172.0	ホルンフェルス	
81	291	101	12号住	埋土	分銅形?打斧	先端部小片	4.3	7.6	1.3	66.0	細粒輝石安山岩	
82	291	101	Ⅰ区	表土	打製石斧	先端	5.8	5.4	1.5	44.0	細粒輝石安山岩	
83	291	101	29号住	掘埋土	磨形?打斧	先端部小片	5.95	6.7	1.8	97.24	細粒輝石安山岩	
84	291	101	51号住	埋土	磨形?打斧	先端部小片	6.2	5.85	1.35	57.28	黒色頁岩	
85	292	101	18号住	埋土	磨形?打斧	先端部小片	6.8	7.9	2.25	125.0	黒色安山岩	
86	292	101	16号住	埋土	分銅形?打斧	先端部小片	5.8	7.3	2.55	98.57	細粒輝石安山岩	
87	292	101	38号住	埋土	スタンプ形石器	略完形	8.3	7.1	5.7	376.0	砂岩	
88	292	101	610-985	表土	磨製石斧	先端欠	9.5	5.1	3.5	262.1	変質安山岩	
89	292	102	79号住	埋土	印形磨石	完形	10.2	6.2	5.8	540.0	細粒輝石安山岩	身に磨痕あり
90	292	102	Ⅰ区	表土	打斧?	完形	8.1	9.6	2.2	150.0	霞母石英片石	
91	292	102	18号住	埋土	棒状石器	半欠	9.7	4.1	1.9	120.0	霞母石英片石	
92	292	102	53号住	埋土	棒状石器	完形	16.2	2.5	1.8	165.0	霞母石英片石	
93	292	102	11号住	埋土	棒状石器	片端欠	16.6	3.9	1.7	230.0	霞母石英片石	

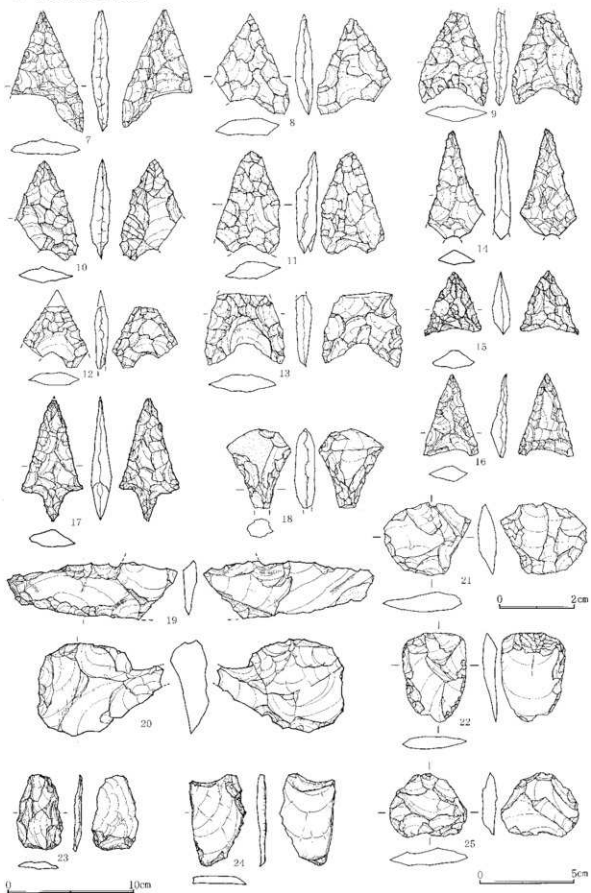
塚下遺跡出土石器計測表(2)

No	図	PL	遺構名	位置	器種	残	長	幅	厚	重	石材	備考
94	292	102	135号住	埋土	棒状石器	半欠	14.7	5.0	3.2	325.0	霞母石英片石	
95	292	102	1238pH	埋土	石鏃	片端	8.5	22.5		69.0	緑色片岩	先端部の磨き面著
96	292	102	370号土坑	埋土	棒状石器	略宛形	22.55	4.55	2.0	235.0	霞母石英片石	
97	292	102	90号住	埋土	鏃頭	未完成	5.05	4.7	0.85	31.27	緑色片岩	表面に未通の孔
98	292	102	13号住	埋土	磨石?	4分の1	6.0	5.8	1.6	65.0	砂岩	
99	292	102	119号住	埋土	薄円石	宛形	8.5	6	1.0	75.0	緑色片岩	
100	292	102	3号住	埋土	薄円石	縁部欠	7.4	4.9	1.2	65.0	霞母石英片石	
101	292	102	15号住	埋土	磨石	宛形	11.5	8.2	5.6	800.0	粗粒輝石安山岩	転石
102	292	102	表探		磨石	宛形	10.6	8.55	4.0	620.0	粗粒輝石安山岩	
103	292	102	119号住	埋土	磨石	宛形	8.7	7.8	4.1	370.0	粗粒輝石安山岩	転石
104	292	102	69号住	埋土	磨石	宛形	9.6	6.9	5.5	440.0	粗粒輝石安山岩	転石
105	292	102	41号住	埋土	磨石	宛形	8.5	8.4	5.5	540.0	粗粒輝石安山岩	転石
106	293	102	79号住	埋土	磨石	宛形	8.0	7.2	3.25	400.0	粗粒輝石安山岩	転石
107	293	102	61号住	埋土	磨石	半欠	7.1	7.9	3.5	290.0	粗粒輝石安山岩	転石
108	293	102	80号住	埋土	磨石	半欠	6.4	8.0	3.6	286.0	粗粒輝石安山岩	
109	293	103	625-990	表土	磨石	宛形	8.3	8.0	4.3	530.0	石英質岩	転石
110	293	103	66号住	埋土	磨石	4分の1	8.65	4.7	4.8	230.0	粗粒輝石安山岩	
111	293	103	49号住	埋土	磨石+敲打石	宛形	11.3	10.2	4.6	640.0	粗粒輝石安山岩	
112	293	103	54号住	埋土	敲打石	宛形	13.8	11.8	7.5	1500.0	粗粒輝石安山岩	転石
113	293	103	II区	表土	凹石	半欠	7.9	6.8	4.1	310.0	粗粒輝石安山岩	転石
114	293	103	66号住	埋土	凹石	4分の1	9.4	5.6	4.3	232.0	粗粒輝石安山岩	
115	293	103	71号住	埋土	凹石	半欠	5.0	8.3	3.3	142.0	粗粒輝石安山岩	
116	293	103	11号住	埋土	凹石	宛形	10.0	7.9	5.8	580.0	粗粒輝石安山岩	転石
117	293	103	127号住	埋土	凹石+磨石	半欠	5.8	8.4	3.5	248.0	粗粒輝石安山岩	
118	293	103	II区	表土	凹石	片	6.0	9.0	4.2	190.0	粗粒輝石安山岩	
119	293	103	114号住	埋土	凹石	片端欠	12.5	8.7	4.8	790.0	粗粒輝石安山岩	転石
120	293		85号住	埋土	敲打石	宛形	15.3	5.6	5.2	745.0	ウレ岩	転石
121	294	103	130号住	埋土	敲打石	宛形	14.1	7.2	5.1	760.0	粗粒輝石安山岩	
122	294	103	33号住	埋土	敲打石	宛形	16.7	7.5	4.5	805.0	帯鉛副灰岩	転石
123	294	103	38号住	埋土	多孔石	片	5.7	11.4	3.7	235.0	粗粒輝石安山岩	
124	294	103	51号住	埋土	石皿+多孔石	小片	9.2	14.2	6.3	780.0	粗粒輝石安山岩	
125	294	104	16号住	埋土	多孔石	半欠	12.9	19.2	10.4	2370.0	粗粒輝石安山岩	
126	294	104	29号住	埋土	多孔石	4分の1	17.0	10.5	9.0	1700.0	粗粒輝石安山岩	転石
127	294	104	79号住	埋土	石皿	4分の1	15.2	12.2	4.9	1235.0	粗粒輝石安山岩	
128	294	104	62号 Pn	埋土	多孔石	宛形	18.0	15.0	11.5	4000.0	粗粒輝石安山岩	転石
129	295	105	90号住欄	埋土	多孔石		29.0	23.0	11.0	11800.0	粗粒輝石安山岩	平安位居の竈材転用
130	295	105	15号住	埋土	石皿+多孔石		18.0	15.0	8.0	2800.0	粗粒輝石安山岩	
131	295	105	表探		石皿	二分の一	27.0	18.0	8.4	2.9	角閃石安山岩	表面使用

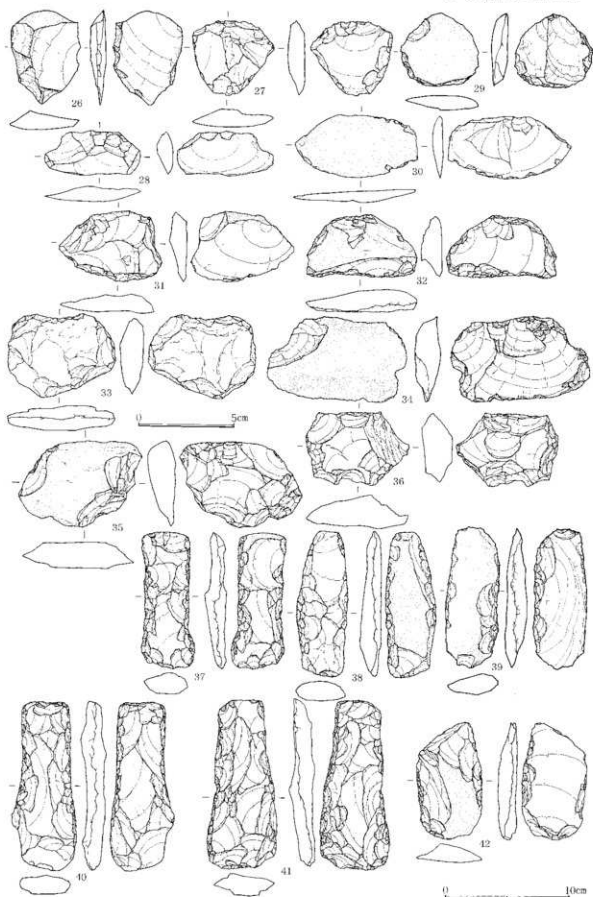


第287図 遺跡出土縄文時代石器(1)

VI 縄文時代の遺構と遺物

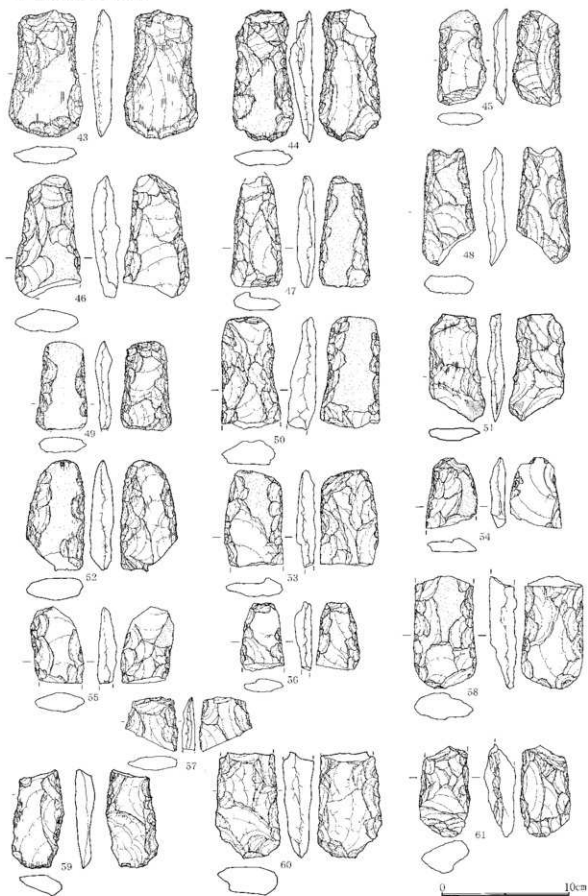


第288図 遺跡出土縄文時代石器(2)



第289図 遺跡出土縄文時代石器(3)

VI 縄文時代の遺構と遺物

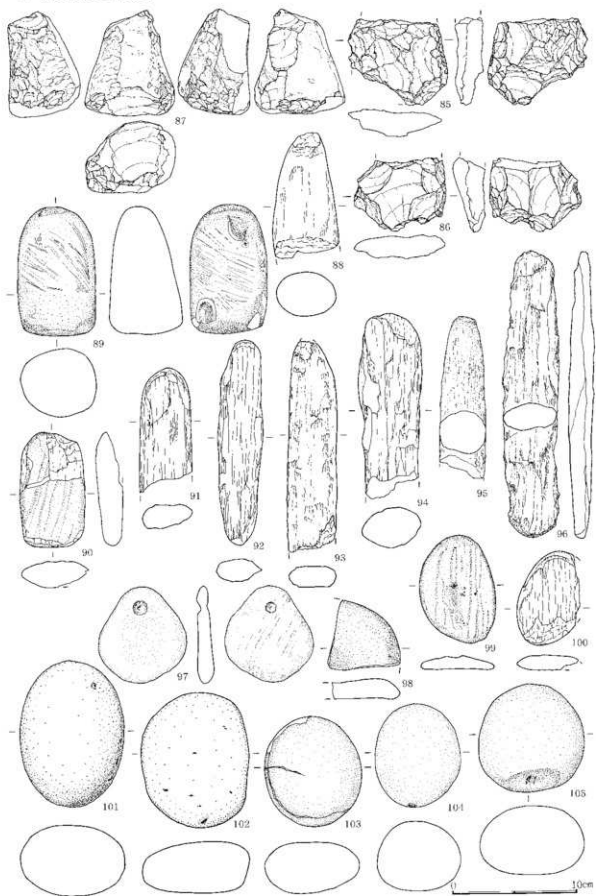


第290図 遺跡出土縄文時代石器(4)

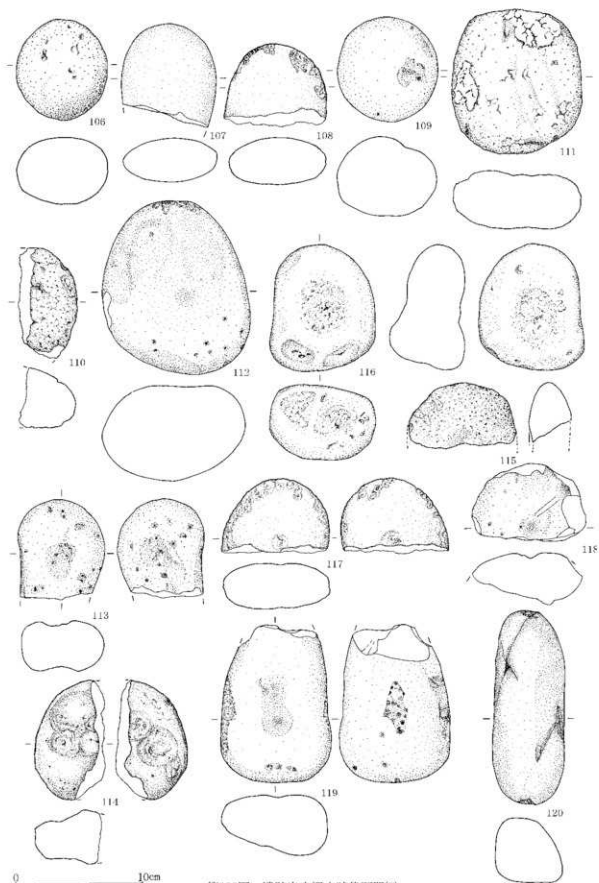


第291図 遺跡出土縄文時代石器(5)

VI 縄文時代の遺構と遺物

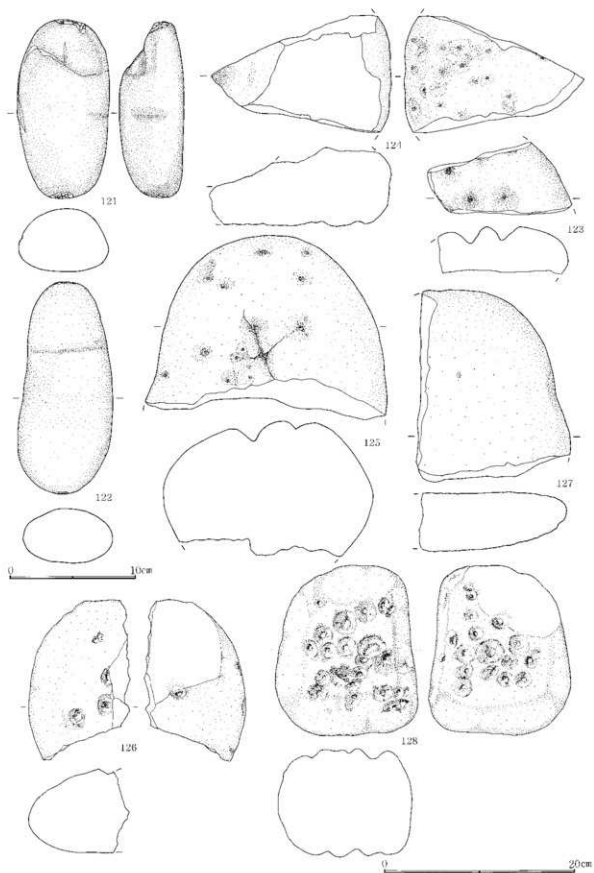


第292図 遺跡出土縄文時代石器(6)

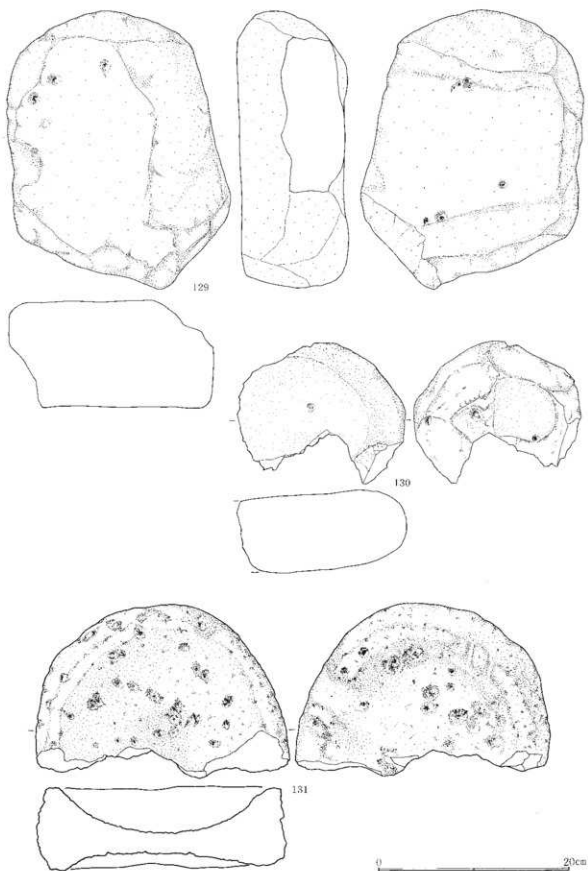


第293図 遺跡出土縄文時代石器(7)

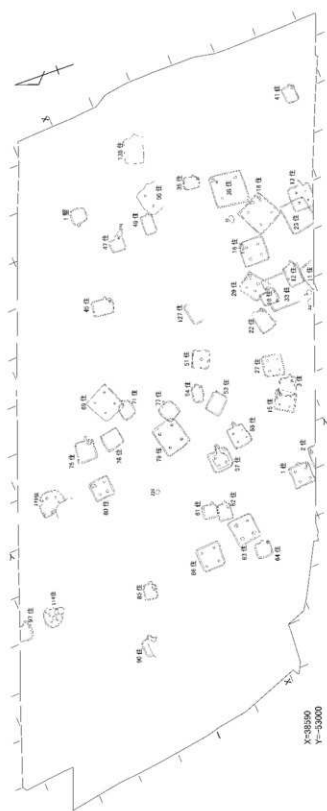
VI 縄文時代の遺構と遺物



第294図 遺跡出土縄文時代石器(8)



第295図 遺跡出土縄文時代石器(9)



第296図 縄文時代石器出土遺構 (1/800)
(除く縄文時代遺構。但し「塚下遺跡(1)」に掲載漏れの114号・119号住居跡を含む)

VII. 旧石器時代の遺構と遺物

1 遺跡の概要

(1) 遺跡の立地

塚下遺跡は利根川中流域、関東平野の北西端部に位置する。遺跡の北方には雄大な裾野が広がる赤城山が見え、その裾野が関東平野へと移行する赤城山南麓末端部の平野に遺跡は立地する。

本遺跡が立地する一帯は大間々扇状地と呼ばれる。大間々扇状地は古渡良瀬川によって形成された扇状地で、みどり市大間々町を扇頂部、伊勢崎市から太田市一帯を扇端部とする。扇頂部から扇端部まで南北約16km、扇端部東西約13kmの範囲に広がる。扇頂部の標高約200m、扇端部の標高約60m、その比高差は約140mで、北から南へ緩やかに傾斜する。大間々扇状地は形成時期の異なる複数の段丘面で構成されているが、大きくは桐原面と藪塚面の二つの段丘面に分かれる。このうち本遺跡は桐原面に立地する。桐原面は粕川から早川までの間に広がる上位段丘面、藪塚面は早川から八王子丘陵・金山までの間に広がる下位段丘面である。桐原面は、基盤礫層の上に赤城湯ノ口軽石や榛名八崎軽石が堆積していることから、少なくとも4万2千年以前には古渡良瀬川が離水し形成された段丘面と考えられている。一方、藪塚面は浅間板鼻褐色軽石群が堆積していることから、少なくとも2万2千年以前に形成された段丘面と考えられている。藪塚面の形成以後、渡良瀬川の流路は現在の流路である八王子丘陵の東側、群馬・栃木県境の方面に移動した。

大間々扇状地には伏流水が湧き出る湧水池が点在している。大間々扇状地桐原面では、特に本遺跡周辺地域（現在の伊勢崎インターチェンジ・三和工業団地一帯）の標高90m付近一帯にかつて湧水池が集中していた。本遺跡の南西に隣接する西小保方沼や北西約800mのところにある湧水「あまが池」、さらにその西方にある「男井戸」はその代表的な例である。これらの湧水池は水源となり、ここから流れ出る沢筋が台地を樹枝状に刻み、現在では一見平坦に見える大間々扇状地桐原面もかつては複雑で起伏に富んだ地形であった。しかし、現在では大規模な工業団地が造成され、土地改良や宅地開発も進行し湧水池の多くは消滅してしまい、現存するのは移転して復元された「男井戸」、公園整備された湧水「あまが池」を数えるのみとなってしまった。谷地も埋め立てられ、区画整理の進んだ水田に変貌しかつての面影を残している地形は極めて少なくなってしまった。

本遺跡が立地する地形は、西側から延びる谷地と北から延びる谷地に挟まれ、東側に広がる谷地に向かって突き出した舌状台地である。台地と谷地との比高差はおおよそ1～3m程度で、微高地状の平坦な台地である。谷地は現在、水田として利用されている。西側の同じ台地には前道下遺跡が隣接する。

(2) 周辺遺跡

緩やかな裾野が広がる赤城山西麓から南麓にかけての地域は、赤城山山頂部を中心として放射状に粕川や荒砥川をはじめとする中小河川が流れ下り、さらにそれらの河川に注ぐ沢筋が台地を刻む。その中の一つ赤城山南麓一帯は、日本旧石器時代研究の出発点となった岩宿遺跡をはじめ武井遺跡、元宿遺跡、三屋遺跡など研究史に欠かすことのできない著名な遺跡が数多く存在する地域である。

1980年代以降では上武道路建設事業をはじめとする大規模開発事業に伴う発掘調査の増加により、旧石器遺跡の調査件数も飛躍的に増加し、その中から重要な遺跡がいくつも調査された。例えば、環状ブロック群

VII. 旧石器時代の遺構と遺物



第297図 周辺遺跡

の発見により旧石器時代における集落研究の大きな画期となった下触牛伏遺跡、日本列島を代表する巨大な拠点集落であるとともに旧石器時代における狩猟活動の様相を解明する上で重要な武井遺跡、多田山丘陵全域を調査し複数の地点で数多くの文化層が発見されセトルメント研究に欠かすことのできない存在となった今井三騎堂・今井見切塚遺跡、県内では類例の少ない石刃製エンドスクレイパーが多数出土した波志江西宿遺跡などが代表的な遺跡として挙げられる。

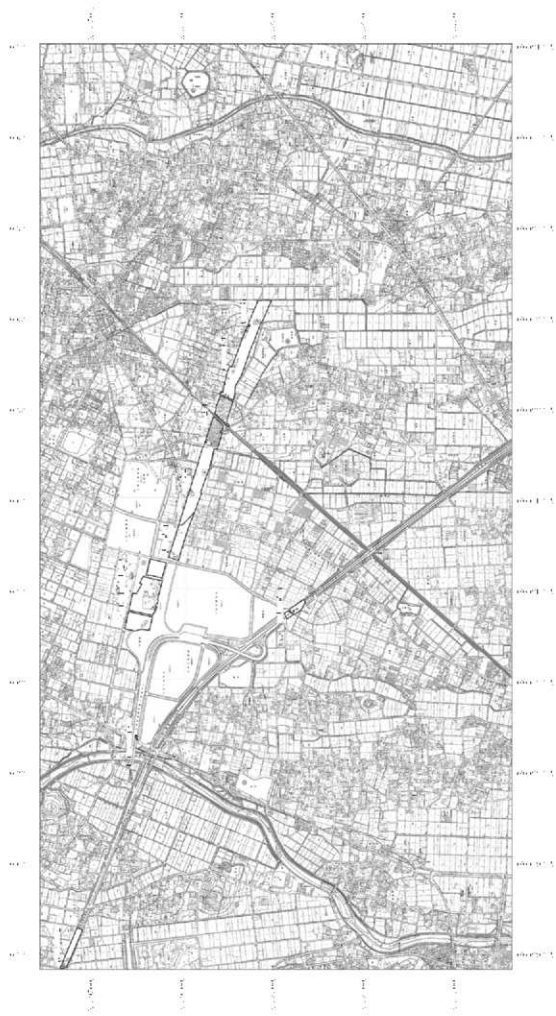
次に、赤城山南麓から大間々扇状地桐原面へと接近し地形の様子と遺跡の分布を概観する。先述したように、大間々扇状地桐原面には湧水池が点在していることが特徴である。湧水池の周辺やそこから流れ出る谷地を望む台地縁辺部で、旧石器・縄文・古墳時代の遺跡が多数発見されているが、その中でも旧石器時代の遺跡が最も多く分布することが特筆される。はるか旧石器時代の太古から現代に至るまで悠久の歴史の中を途切れることなく湧き出る湧水は、旧石器時代、縄文時代、古墳時代そして現代へと人類の生活と密接に関わりながら連続と利用されてきた訳である。

男井戸やあまが池などの湧水池を水源とする標高90m付近一帯の地域は、県内でも有数の旧石器時代の遺跡群が形成されている地域である。密集した分布の様相はまさに湧水池遺跡群とも形容できる。この地域では、これまで本関町古墳群、上植木光仙房、光仙房、三和工業団地Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ、舞台、書上本山、書上、天ヶ堤、大上、前道下などの多数の旧石器時代遺跡が調査されている。本報告の塚下遺跡もその一つである。また、環状ブロック群が発見された三和工業団地Ⅰ遺跡や舞台遺跡をはじめ暗色帯層の遺跡数が多いことが特徴の一つであるが、県内ではこれまで発見例の少なかった浅間板岩褐色軽石群に出土層準を持つ遺跡も、前道下遺跡や大上遺跡で発見されている。特に、前道下遺跡では大規模な礫群も検出されており、この時期の遺跡構造及びセトルメント研究に欠かすことのできない重要な存在になるであろう。さらに、大上遺跡では黒曜石製ナイフ形石器器群、本関町古墳群遺跡では黒曜石製槍先形尖頭石器器群、前道下遺跡ではチャート製槍先形尖頭石器器群、光仙房遺跡ではホロカ型細石刃石器群、三和工業団地Ⅳ遺跡では黒曜石製円錐形細石刃石器群も発見されている。

このように本遺跡が立地する大間々扇状地桐原面では、後期旧石器時代前半から後半まで地点を変えて連続と遺跡が残されていることが大きな特徴である。また、大上遺跡のように一つの遺跡内で複数の文化層が重複する遺跡は層位的に石器群の変遷を捉え、地域編年を構築するのに重要である。今後、これらの遺跡から出土した石器群は利根川流域のこれまで空白であった編年を埋める遺跡として重要になるはずである。

周辺遺跡

No.	遺跡名	所在地	出土層準	備考
1	塚下	伊勢崎市上田町	暗色帯	本報告書の遺跡
2	前道下	伊勢崎市上田町	As-Ok 1、As-BP、暗色帯	複数地点、複数文化層、槍先形尖頭器、ナイフ形石器、大規模な礫群
3	大上	伊勢崎市上田町	As-BP、AT、暗色帯	複数地点、複数文化層、ナイフ形石器、環状ブロック群
4	天ヶ堤	伊勢崎市三和町	As-YP、As-BP、暗色帯	複数文化層、複数地点、環状ブロック群
5	書上本山	伊勢崎市三和町	暗色帯	ナイフ形石器、石刃
6	書上	伊勢崎市三和町	暗色帯	複数地点、複数文化層
7	書上	伊勢崎市三和町	暗色帯	ナイフ形石器、石刃、伊勢崎市教委調査
8	三和工業団地Ⅰ	伊勢崎市三和町	暗色帯他	複数文化層、環状ブロック群、黒曜石製台形縁石器
9	三和工業団地Ⅳ	伊勢崎市三和町	As-YP～As-SP、暗色帯	複数地点、複数文化層、細石刃、ナイフ形石器、石刃
10	舞台	伊勢崎市三和町	暗色帯他	複数地点、複数文化層
11	光仙房	伊勢崎市三和町	As-YP～As-Ok 1、As-Ok 1～As-BP	複数文化層、ホロカ型細石刃石器、槍先形尖頭器
12	上植木光仙房	伊勢崎市三和町	As-YP	細石刃石器群
13	本関町古墳群	伊勢崎市本関町	As-Ok 1～As-BP	黒曜石製槍先形尖頭器
14	下輪牛伏	伊勢崎市下輪町	As-Ok 1、暗色帯	複数文化層、環状ブロック群
15	波志江西留	伊勢崎市波志江町	As-Ok 1～暗色帯	複数文化層、エンドスプレイバー、環状ブロック群
16	波志江中留	伊勢崎市波志江町	As-BP、暗色帯	複数文化層
17	武井	桐生市新里町	As-YP～暗色帯	複数文化層、大規模な槍先形尖頭器製作遺跡
18	今井三騎堂	前橋市東大室町・伊勢崎市赤堀今井町	As-YP～暗色帯	複数文化層、複数地点、丘陵全域から多数の石器群が出土
19	今井見切塚	前橋市東大室町・伊勢崎市赤堀今井町	As-YP～暗色帯	複数文化層、複数地点、丘陵全域から多数の石器群が出土



第298区 周辺の遺跡

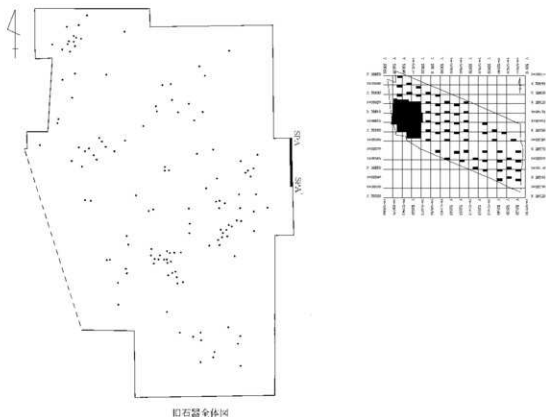
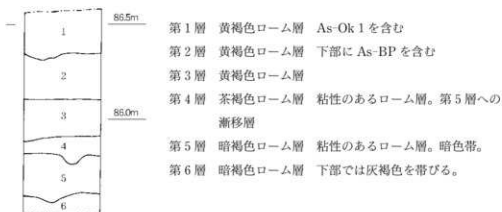


第299図 塚下遺跡地形図

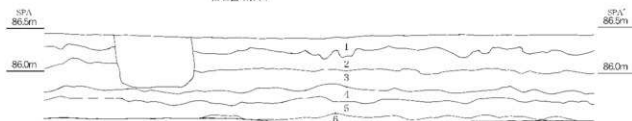
Ⅶ. 旧石器時代の遺構と遺物

(3) 基本土層

I区では次のようなローム層の堆積を確認した。



旧石器全体図



第300図 塚下遺跡基本土層及び調査区土層

(4) 旧石器時代の調査概要

旧石器時代の発掘調査は、はじめに試掘調査を行い遺跡が確認された場合には本調査を行うという方式で行った。試掘調査は縄文時代以降の発掘調査終了後に試掘トレンチを設定して行った。対象調査区はI区のローム台地である。試掘調査方法は、南北2m×東西4mの試掘トレンチを10×10mの範囲の中に1カ所を設定し、人力掘削により行った。試掘トレンチの間隔は南北8m、東西6mで、I区全体に試掘トレンチを設定した(第301図)。試掘面積は調査区全体面積の8%に相当する。掘削深度はローム層上面から第6層上面までとした。人力掘削では主に鋤鎌を使用し必要に応じてスコップを用いた。

試掘調査の結果、南北X=38585~38625、東西Y=-53020~-53050の範囲内の数カ所の試掘トレンチで遺物を確認した。この範囲以外の試掘トレンチでは遺物は確認できなかった。このため、本調査区以外の範囲は遺跡なしと判断し本調査から除外した。

本調査は、試掘調査により遺跡の存在を確認した南北X=38585~38625、東西Y=-53020~-53050の範囲を本調査区に設定して行った。

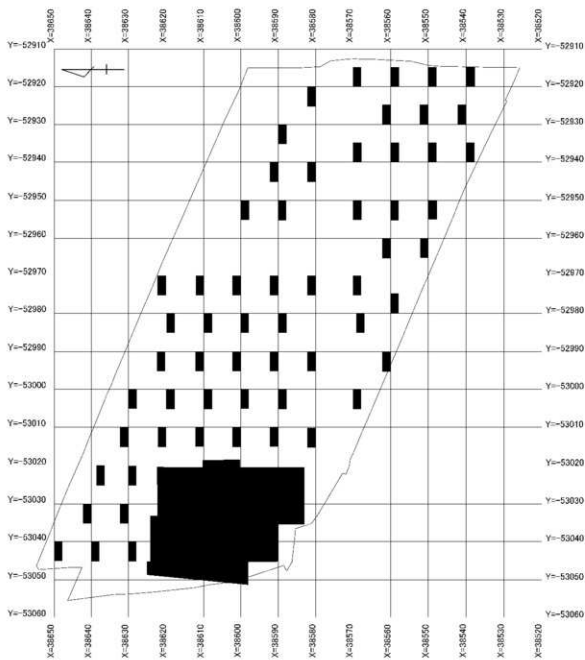
(5) 遺物の出土状況と文化層

旧石器時代の遺物は、西小保方沼方面の低地に向かって南西方向へ緩やかに傾斜するI区の台地縁辺部から出土した。出土した遺物は総数127点で、石器が116点、礫が11点である。この石器群の他に所在不明なものが5点ある。遺物は、X=38585~38625、Y=-53020~-53050の南北約40m、東西約30mの範囲に分布していた。遺物の出土標高は85~87mの範囲で、そのうちのほとんどが85.5~86.0mから出土している。遺物はこの範囲の中に散漫に分布していた。本報告では1号ブロック~6号ブロックまでの6カ所のブロックに分離した。出土層位と文化層の対応関係については、遺物1点毎に出土層位を記録した遺物の取り上げを行っていないため、帰属層位を詳細に判断することは困難である。調査担当者の所見は、遺物は浅間板鼻褐色軽石層群から暗色帯にかけて出土し、そのなかでも暗色帯からの出土点数が最も多かったということである。また、遺物の出土標高と本調査区で採取したセクション図との対応関係を見ると第5層(暗色帯)に概ね対応している。このことから、I区で出土した石器群は層位的には暗色帯層群に帰属すると判断できる。さらに、器種別・石材別の石器分布状況、接合資料の分布状況などを総合して判断すると1号ブロック~6号ブロックは同一時期に形成された文化層と考えられる。これに基づき、塚下遺跡I区の石器群を暗色帯に帰属する文化層(暗色帯文化層)と設定した。

なお、黒曜石製の槍先尖頭器については、出土層位が他の石器と比較して上層であることと石器型式から暗色帯層群の石器群とは別時期の石器と判断した。槍先尖頭器が帰属する層位は、暗色帯より上層から出土したことは確実であるが、出土層位を記録していないため詳細は不明である。

また、石器の他に自然礫が多数出土した。自然礫の大きさは米粒程度の微細なものから直径3cm程度である。層位的にはほとんどが暗色帯からの出土で、石器と混在していた。平面分布・垂直分布では礫群のように集中することはなく、調査区内に散在していた。形状は円礫や縁辺が摩滅した破砕礫である。石材は粗粒輝石安山岩やホルンフェルス、チャート、頁岩が中心で、風化が著しく脆い。これらの礫はいわゆる「イモ石」と呼ばれるもので、遺物ではなく自然礫と判断した。拳大を超える大きさのものや被熱して赤化したもの、破砕礫の一部については人為的に遺跡内に持ち込まれた礫と判断し遺物と認定した。

VII. 旧石器時代の遺構と遺物



第301図 球下遺跡旧石器時代全体図

2 石器

出土した石器は総数116点である。器種別に、槍先形尖頭器1点、ナイフ形石器2点、彫刻刀形石器1点、楔形石器2点、スクレイパー2点、二次加工のある剥片2点、石核6点、石刃2点、剥片95点、砕片2点である。他に鏝が11点出土した。なお、槍先形尖頭器については別の文化層の混入と判断しているため、暗色帯文化層から出土した石器は総計115点である。ここでは、暗色帯文化層に帰属する石器について詳述する。

石器組成表

	ナイフ形石器	スクレイパー	彫刻刀形石器	楔形石器	石核	石刃	二次加工剥片	剥片	砕片	鏝	総計
数量	2	2	1	2	6	2	3	95	2	11	126
重量(g)	22.78	112.40	2.83	28.52	185.33	29.74	105.78	1001.13	0.28	405.49	1885.28

ナイフ形石器 (第303図1・2)

1は石刃を素材とする。調整加工は左側縁全体と右側縁下半部に施される。左側縁先端部では稜上からの調整加工も見られる。端部は折断。硬質頁岩製。2は石刃を素材とする。左側縁に調整加工が施される。黒色頁岩製。

彫刻刀形石器 (第303図3)

3は横長剥片を素材とする。折断面を打面にして左側縁に彫刻刀面が一条作出される。碧玉製。

楔形石器 (第303図4・5)

4は石核を転用している。上下両端部に両極剥離痕が認められる。黒色安山岩製。5は両極剥離痕が上下両端部の背面の上下両端部、主要剥離面の下端部に認められる。素材は、剥離が進行して原形をとどめていないが、横長剥片と考えられる。珪質頁岩製

スクレイパー (第303図6～第304図7)

6は厚手の縦長剥片を素材とする。左側縁から右側縁の主要剥離面側に鋸歯状の粗い刃部を作出。黒色頁岩製。7は厚みのある大型の幅広剥片を素材とする。左側縁に鋸歯状の刃部を作出。黒色頁岩製。

二次加工のある剥片 (第304図8～第305図10)

8は横長剥片を素材とする。打面を除去するかたちで背面側から折断による二次加工が施されている。左右両側縁と端部は折断面である。黒色安山岩製。9は幅広の縦長剥片を素材とする。打面は平坦打面。端部折断後に右側縁に二次加工が施される。黒色頁岩製。10は右側縁の背面・主要剥離面に平坦な二次加工が施される。二次加工の部分を除き全周に折断面が見られ、折断による二次加工も行われている。黒色安山岩製。

石刃 (第305図11・12)

11は中央部に稜線。背面は主要剥離面と180°加撃方向の異なる剥離面で構成される。打面は平坦打面。珪質頁岩製。12は断面三角形状で厚手である。背面は自然面と主要剥離面と同一方向の剥離面で構成される。打面は平坦打面。碧玉製。

石核 (第305図13～第306図18)

13はチャート製で小型の不定形剥片が剥離された石核。14は黒色安山岩製(黒色安山岩2個体A)で厚手の幅広縦長剥片を素材とする。15は黒色頁岩製で厚手の幅広縦長剥片を素材とする。主要剥離面側で横長剥片が剥離されている。打面側の背面側には連続するスクレイパー状の刃部が作出されている。17は硬質頁岩製。18は黒色頁岩製の幅広縦長剥片を素材とする。打面側と左側縁で彫刻刀面を作出するように縦長剥片が剥離されている。

VII. 旧石器時代の遺構と遺物

3 石材・母岩別資料・接合資料

(1) 石材

出土した石器は、石材別に黒色安山岩、黒色頁岩、珪質頁岩、硬質頁岩、黒曜石、チャート、ホルンフェルス、碧玉の計8種類に分類した。このうち、黒色安山岩と黒色頁岩の二つの石材で数量別・重量別ともに全体の半数以上を占める。硬質頁岩や珪質頁岩、碧玉も多く組成する。

石材別石器組成表

(上段=数量、下段=重量(g))

石 材	ナイフ形石器	彫刻刀形石器	楔形石器	スクレイパー	石 核	石 刃	二面刃両面刃	剥 片	砕 片	総 計
チャート					1 12.7			8 29.34		9 52.04
ホルンフェルス								2 33.46		2 33.46
珪質頁岩	1 0.39		1 10.23			1 3.97		6 42.41		9 61.09
硬質頁岩					1 18.33			6 35.43	1 7	7 53.76
黒色安山岩			1 18.29		2 70.24		2 68.63	2 429.93	1 0.08	5 563.17
黒色頁岩	1 17.39			2 112.4	2 78.06		1 37.15	2 250.98	1 0.2	7 532.18
黒曜石								4 2.61		4 2.61
碧玉		1 2.83				1 16.87		1 10		2 156.67
数 量 合 計	2 22.78	1 2.63	2 28.52	2 112.4	6 185.33	2 20.74	2 160.78	9 1001.13	2 0.28	11 1479.29

(2) 母岩別資料・接合資料

出土した石器については、石材別に分類した後接合作業と母岩分類作業を反復的に繰り返す行い、最終的には黒色安山岩6母岩、黒色頁岩9母岩、珪質頁岩4母岩、硬質頁岩1母岩、黒曜石4母岩、チャート2母岩、ホルンフェルス2母岩、碧玉5母岩の計33種類の母岩別資料に分類した。接合関係は115点の石器のうち、45点に確認できた。接合率は39%である。

黒色安山岩 1 (第307図)

4例11点の接合資料と7点の非接合資料の計18点で構成される。

黒色安山岩 1(1) (第307図1～3)

石核1点と剥片2点の接合である。剝離順は1→3→2。1は厚手の幅広縦長剥片で石核として利用される。2・3は横長剥片。接合図表面の上端部には背面と打面の両面に連続する調整加工が施されている。この調整加工はやや鈍角ではあるが楔形石器の刃部に類似しており、1・3を剝離する以前は大型の楔形石器として機能していた可能性も考えられる。

黒色安山岩 1(2) (第307図4～第 図7)

二次加工のある剥片1点、剥片3点の接合資料である。剝離順は4→5→6→7。4を剝離後90°打面転移して5を剝離→90°打面転移して6を剝離→90°打面転移して7を剝離。

黒色安山岩 1(3) (第308図8・9)

剥片2点の接合である。剝離順は9→8。8は縦長剥片。9は横長剥片で上半部が複数回の加撃によって折断されている。

黒色安山岩 1(4) (第308図10・11)

剥片2点の接合。剝離順は10→11。10は縦長剥片で下半部は折断。11は幅広の縦長剥片。

黒色安山岩 1非接合 (第308図12～第309図18)

12は二次加工のある剥片、13は楔形石器、14～18は剥片。

黒色安山岩 2 (第309図)

1例 4点の背接合資料と3点の非接合資料の計7点の資料で構成される。

黒色安山岩 2 個体A (第309図1～3)

石核1点、剥片3点(接合後2点)の接合資料である。剥離順は1→2→3。厚手の幅広縦長剥片を石核とする。側面を作業面、素材打面を打面に設定して、彫刻刀形石器の削片を剥離するように、打点を後退させながら縦長剥片を連続して剥離している。石核の最終的な剥離面の形状は彫刻刀形石器に類似。

黒色安山岩 2 非接合 (第309図4～6)

4・5は小型の剥片、6は幅広の縦長剥片

黒色安山岩 3 (第310図)

1例 2点の接合資料と1点の非接合資料の計3点の資料で構成される。

黒色安山岩 3 (第310図1・2)・非接合 (第310図3)

剥片2点の接合資料である。剥離順は1→2。1は断面三角形の厚手の縦長剥片、2は三角形の剥片、3は非接合資料で横長剥片。

黒色安山岩 4・5・6・分類不能 (第310図4～10)

黒色安山岩4(第310図4・5)は剥片2点で構成される。接合関係は確認できなかった。黒色安山岩5(第310図6)は剥片2点(接合後1点)の資料である。黒色安山岩6(第310図7)は剥片2点(接合後1点)の資料である。8～10は分類不能とした剥片。

黒色頁岩 1 (第311図)

2例 6点の接合資料と10点の非接合資料の計16点の資料で構成される。

黒色頁岩 1(1) (第311図1～3)

スクレイパー1点、剥片3点(接合後2点)の計4点の接合資料。剥離順は1→3→2。1を剥離後90°打面転移して3の剥離→打点を移動して2の剥離。

黒色頁岩 1(2) (第311図4・5)

剥片2点の接合資料。剥離順は5→4。4・5とも縦長剥片で、4は上半部を折断。背面構成は4・5を含め連続的に縦長剥片を剥離していることを示している。

黒色頁岩 1 非接合 (第312図1～8)

1はスクレイパー、2は石核、3～8は剥片である。

黒色頁岩 2 (第312図)

1例 3点の接合資料と1点の非接合資料の計4点の資料で構成される。

黒色頁岩 2 (第312図9～11)・黒色頁岩 2 非接合 (第312図12)

剥片3点の接合資料。剥離順は9→10→11。9の小型の剥片を剥離した後90°打面転移して10を剥離→打点を移動して11を剥離。12は縦長剥片で右側面は作業面。

黒色頁岩 3～9 (第313図)

黒色頁岩3はナイフ形石器(第303図2)1点、黒色頁岩4は二次加工のある剥片1点と剥片1点の接合資料(第304図9)、黒色頁岩5は石核(第306図15)1点、黒色頁岩6～9(第313図1～4)はそれぞれ剥片1点の単独資料。

珪質頁岩 1 (第313図)

剥離面の色調は灰黄褐色(10YR5/2)を呈する。剥離面は緻密で滑らかであるが、油脂状光沢は見られな

Ⅶ. 旧石器時代の遺構と遺物

い。2例4点の接合資料で構成される。

珪質頁岩1(1) (第313図5・6)

剥片2点の接合資料。剥離順は6→5。6の厚手の幅広縦長剥片を剥離→打点を後退して5を剥離。

珪質頁岩1(2) (第313図7・8)

剥片2点の接合資料。剥離順は7→8。7の縦長剥片を剥離→打点を後退させて8を剥離。

珪質頁岩2 (第313図9～11)

色調は自然面・剥離面とも明黄褐色(2.5Y6/8)を呈する。楔形石器1点、剥片2点の計3点の接合資料で構成される。剥離順は11→10→9。9は石核として利用された後に楔形石器に転用されている。10の端部背面には楔形石器の刃部が認められるが、11には認められない。このことから、10は楔形石器に転用された後に剥離された剥片、11は石核の段階で剥離された剥片と判断できる。

珪質頁岩3・4 (第303・305図)

珪質頁岩3はナイフ形石器(第303図1)1点、珪質頁岩4は石刃(第305図11)1点の単独資料。

硬質頁岩1 (第314図1～5)

色調は自然面では褐色(10YR4/4)、剥離面では黒褐色(10YR2/3)。自然面・剥離面とも密緻で滑らかである。1例5点の接合資料と2点の非接合資料の計7点の資料で構成される。接合資料(第314図1～4)は石核1点、剥片4点(接合後3点)の計5点である。剥離順は1→2→3→4。1を剥離→90°打面転移して2を剥離→90°打面転移して3を剥離→4の石核。自然面から母岩は拳大程度の大きさの円礫と判断される。接合状況から1の剥離以前には打面を固定して同一作業面から縦長剥片を連続的に剥離し、1の剥離以後は90°打面転移を繰り返しながら小型の剥片を剥離していることがわかる。5は非接合資料。

碧玉1 (第314図6～第315図10)

1例2点の接合資料と4点の非接合資料の計6点の資料で構成される。接合資料は剥片2点、剥離順は7→6。7を剥離後90°打面転移して6を剥離。非接合資料8・9が縦長剥片、10が石刃。

碧玉2～5 (第303図3・第315図11～15)

碧玉2(第315図11～13)は剥片3点、碧玉3(第315図14)は剥片1点、碧玉4(第303図3)は彫刻刀形石器1点、碧玉5(第315図15)は剥片1点で構成される。

ホルンフェルス1・2 (第315図17・18)

いずれも剥片1点の単独資料。1は横長剥片、2は縦長剥片。

チャート1 (第315図19～24)

剥離面の色調は青灰色(10BG5/1)。褐色の縞模様が入る。石核1点、剥片6点の計7点で構成される。接合関係は確認できなかった。自然面は円礫の特徴を持つ。6は石核、7～11は剥片。

チャート2 (第315図25・26)

剥離面の色調は青灰色(10BG5/1)。剥片2点で構成される。接合関係は確認できなかった。

黒曜石1～4 (第302図・第315図16)

黒曜石1は槍先形尖頭器(第302図)の単独資料。暗色帯文化層と異なる石器として扱った。黒曜石2～4は剥片1点の単独資料である。黒曜石2は剥片(第315図16)で背面に主要剥離面と180°異なる加撃方向の剥離面。

3 石材・母岩別資料・接合資料

母岩別組成表(1)

(上段=数量、下段=重量(kg))

母岩 No.	ナイフ形石器	鋸形刀形石器	楔形石器	スタレイバー	石 槓	石 刃	二次加工剥片	剥 片	砕 片	総 計
チャート 1					1 12.7			6 32.07		7 44.77
チャート 2								2 7.27		2 7.27
ホルンフェルス 1								1 6.58		1 6.58
ホルンフェルス 2								1 26.88		1 26.88
珪質頁岩 1								4 37.43		4 37.43
珪質頁岩 2			1 10.23					2 4.98		3 15.21
珪質頁岩 3	1 5.39									1 5.39
珪質頁岩 4						1 3.87				1 3.87
硬質頁岩 1					1 18.33			6 35.43		7 53.76
黒色安山岩 1			1 18.29		1 61.2		2 68.63	14 187.01		18 335.13
黒色安山岩 2					1 15.04			6 78.71		7 93.75
黒色安山岩 3								3 70.23		3 70.23
黒色安山岩 4								2 25.66		2 25.66
黒色安山岩 5								2 30.2		2 30.2
黒色安山岩 6								2 27.62		2 27.62
黒色頁岩 1				2 112.4	1 33.05			13 168.36		16 313.81
黒色頁岩 2								4 71.08		4 71.08
黒色頁岩 3	1 17.39									1 17.39
黒色頁岩 4							1 37.15	1 3.07		2 40.22
黒色頁岩 5					1 45.01					1 45.01
黒色頁岩 6								1 17.75		1 17.75
黒色頁岩 7								1 9.54		1 9.54
黒色頁岩 8								1 6.52		1 6.52

VII. 旧石器時代の遺構と遺物

母岩別組成表(2)

(上段=数量、下段=重量(g))

母岩 No.	ナイフ形石器	鋸形刀形石器	楔形石器	スクレイパー	石 槌	石 刃	二次加工剥片	剥 片	砕 片	総 計
黒色頁岩 9								1 9.2		1 9.2
黒曜石 2								1 0.76		1 0.76
黒曜石 3								1 0.32		1 0.32
黒曜石 4								1 1.28		1 1.28
分類不能								9 12.21	2 0.28	11 12.49
碧玉 1						1 16.87		5 95.76		6 112.63
碧玉 2								3 16.93		3 16.93
碧玉 3								1 5.42		1 5.42
碧玉 4		1 2.83								1 2.83
碧玉 5								1 12.86		1 12.86
数量合計	2	1	2	2	6	2	3	95	2	115
重量合計	22.78	2.83	28.52	112.4	185.33	20.74	105.78	1001.13	0.28	1479.79

4 石器の分布と接合関係

(1) 概要

遺物は南北約40m、東西約30mの範囲に分布し、1号～6号ブロックまでの6カ所のブロックに分離した。いずれのブロックも小規模で、ブロックを構成する遺物点数は少なく分布状況も散漫である。接合資料はブロック内で収束するものが主体であるが、隣接するブロック間での接合資料も確認できた。

ブロック別石材別組成表

(上段=数量、下段=重量(g))

ブロック	チャート	ホルンフェルス	珪質頁岩	硬質頁岩	黒色安山岩	黒色頁岩	黒曜石	碧玉	総計
1号ブロック	1 4.87	1 26.88	5 42.82		5 46.19	1 8.81			13 129.57
2号ブロック	1 1.1				2 27.62	2 26.59		5 95.76	10 151.07
3号ブロック	5 38.8		4 19.08	1 3.37	3 55.8	3 19.13	1 0.76		17 136.94
4号ブロック	2 7.27	1 6.58			21 318.59	13 195.14		2 15.11	39 542.69
5号ブロック				6 50.39	5 46.11	10 229.14		4 22.93	25 348.57
6号ブロック					6 98.86	1 53.37	3 1.85	1 16.87	11 170.95
数量合計	9	2	9	7	42	20	4	12	115
重量合計	52.94	33.46	61.9	53.76	503.17	532.18	2.61	159.67	1479.79

ブロック別器種別組成表

(上段=数量、下段=重量(g))

ブロック	ナイフ形石器	鋸形石器	楔形石器	スクレイパー	石槌	石刃	二次加工剥片	剥片	砕片	総計
1号ブロック	1 5.39		1 18.29					11 105.89		13 129.57
2号ブロック	1 17.39							9 133.68		10 151.07
3号ブロック			1 10.23		1 12.7	1 3.87		14 110.14		17 136.94
4号ブロック					4 154.3			34 288.31	1 0.08	39 542.69
5号ブロック	1 2.83			2 112.4	1 18.33		1 37.15	19 177.66	1 0.2	25 348.57
6号ブロック						1 16.87	2 68.63	8 85.45		11 170.95
数量合計	2	1	2	2	6	2	3	95	2	115
重量合計	22.78	2.83	28.52	112.4	185.33	20.74	105.78	1001.13	0.28	1479.79

(2) ブロック

1号ブロック (第318・319図)

ナイフ形石器1点、楔形石器1点、剥片11点の計13点の石器と、礫1点から構成される。石材別では、黒色頁岩5点、珪質頁岩5点にチャート、ホルンフェルス、黒色頁岩が各1点である。接合関係は珪質頁岩1で2例確認した。

Ⅶ. 旧石器時代の遺構と遺物

2号ブロック (第320・321図)

ナイフ形石器1点、剥片9点の計10点の石器と礫2点から構成される。石材別では、チャート1点、黒色安山岩2点、黒色頁岩2点、碧玉5点である。接合関係は黒色安山岩で1例、碧玉で1例の計2例を確認した。槍先形尖頭器(第302図)は、平面的には本ブロックと重複して出土したが、層位的には他の石器よりも上層から出土しており、別の文化層として分離した。

3号ブロック (第322・323図)

楔形石器1点、石核1点、石刃1点、剥片14点の計17点の石器と礫4点から構成される。石材別では、チャート5点、珪質頁岩4点、硬質頁岩1点、黒色安山岩3点、黒色頁岩3点、黒曜石1点である。

接合関係は珪質頁岩、硬質頁岩、黒色安山岩、黒色頁岩で各1例計4例を確認した。硬質頁岩と黒色頁岩では5号ブロックとの間で接合関係を確認できた

4号ブロック (第324・325図)

石核4点、剥片34点、碎片1点の計39点の石器と、礫3点から構成される。石材別では、チャート2点、ホルンフェルス1点、黒色安山岩21点、黒色頁岩13点、碧玉2点である。接合関係は黒色安山岩で5例、黒色頁岩で2例の計7例を確認した。5号・6号ブロック間で接合する。

5号ブロック (第326・327図)

スクレイパー2点、彫刻刀形石器1点、二次加工のある剥片1点、石核1点、剥片19点、碎片1点の計25点の石器と礫1点から構成される。石材別では、硬質頁岩6点、黒色安山岩5点、黒色頁岩10点、碧玉4点である。接合関係は硬質頁岩で1例、黒色安山岩で3例、黒色頁岩で3例の計7例を確認した。3号・4号ブロック間で接合する。

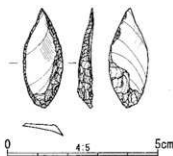
6号ブロック (第328・329図)

二次加工のある剥片1点、石刃1点、剥片9点の計11点の石器から構成される。石材別では、黒色安山岩6点、黒色頁岩1点、黒曜石3点、碧玉1点である。接合関係は黒色安山岩で1例確認し、4号ブロック間で接合する。

5. その他の石器

槍先形尖頭器 (第302図)

比較的薄手の縦長剥片を素材とする。全周に調整加工が施される。左側縁は微細、裏面はバルブを取り除く平坦な調整加工がそれぞれ施される。黒曜石製。暗色帯文化層の2号ブロックと平面的には重複するが、層位的には暗色帯よりも上層から出土。



第302図 その他の石器

4 石層の分布と接合関係

旧石器データベース一覧表(1)

No.	分類	器種	石材	接合	母岩No.	組合No.	個体No.	新石器	プロック	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	X座標(m)	Y座標(m)	Z座標(m)	調査年月日
1	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	2.98	38623.26	-53039.48	86.256	2002/8/21
2	不明	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	38621.48	-53035.64	85.769	2002/8/22	
3	石器	刮片	黒色安山岩	—	黒色安山岩 4	—	—	—	1	4.2	4.0	1.2	18.72	38622.24	-53040.44	85.712	2002/8/21
4	石器	刮片	チャート	—	チャート 1	—	—	—	1	3.0	2.0	0.7	4.87	38622.06	-53041.72	85.829	2002/8/21
5	石器	刮片	珪質頁岩	—	珪質頁岩 1	珪質頁岩 1(1)	—	—	2	3.5	2.9	1.1	9.10	38621.08	-53040.98	85.800	2002/8/21
6	不明	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	38620.94	-53040.72	85.726	2002/8/22	
7	石器	刮片	珪質頁岩	—	珪質頁岩 1	珪質頁岩 1(2)	—	—	1	3.4	2.4	0.6	3.43	38620.30	-53040.86	85.678	2002/8/21
8	石器	刮片	珪質頁岩	—	珪質頁岩 1	珪質頁岩 1(1)	—	—	1	4.3	3.7	1.6	22.49	38620.34	-53041.04	85.669	2002/8/21
9	石器	刮片	黒色安山岩	—	黒色安山岩 4	—	—	—	1	2.6	2.9	1.2	6.94	38620.44	-53041.56	85.728	2002/8/21
10	石器	刮片	黒色安山岩	—	分断不能	—	—	—	1	3.5	2.8	0.4	1.42	38620.24	-53041.70	85.835	2002/8/21
11	石器	刮片	珪質頁岩	—	珪質頁岩 1	珪質頁岩 1(2)	—	—	2	2.2	2.2	0.6	2.41	38620.14	-53043.26	85.719	2002/8/21
12	石器	刮片	黒色頁岩	—	黒色頁岩 1	—	—	—	1	3.3	4.0	0.7	8.81	38619.70	-53042.18	85.785	2002/8/21
13	石器	ナイフ彫石層	珪質頁岩	—	珪質頁岩 3	—	—	—	1	5.2	1.8	0.6	5.29	38619.50	-53041.20	85.882	2002/8/21
14	鏝	—	砂岩	—	—	—	—	—	2	2.7	1.9	1.0	3.28	38619.44	-53024.54	86.061	2002/8/21
15	鏝	—	—	—	—	—	—	—	2	3.2	2.7	0.8	6.44	38617.26	-53027.77	85.615	2002/8/21
16	石器	刮片	黒色頁岩	—	黒色頁岩 9	—	—	—	2	2.9	3.4	0.9	9.20	38616.74	-53027.18	85.770	2002/8/21
17	石器	刮片	碧玉	—	碧玉 1	—	—	—	1	4.9	4.0	1.3	20.81	38615.92	-53009.82	85.747	2002/8/21
18	石器	刮片	黒色安山岩	—	黒色安山岩 6	黒色安山岩 6(1)	—	—	2	3.0	3.9	1.2	13.26	38615.82	-53031.68	85.771	2002/8/21
19	石器	刮片	碧玉	—	碧玉 1	碧玉 1	—	—	2	3.0	4.7	1.2	12.73	38612.94	-53027.44	85.796	2002/8/21
20	石器	刮片	チャート	—	チャート 1	—	—	—	2	1.1	2.2	0.4	1.10	38613.82	-53028.96	85.852	2002/8/21
21	石器	刮片	碧玉	—	碧玉 1	—	—	—	2	2.8	1.4	0.2	0.51	38612.05	-53028.39	85.735	2002/8/21
22	石器	刮片	碧玉	—	碧玉 1	—	—	—	2	3.9	3.5	0.8	9.03	38612.90	-53009.04	85.823	2002/8/21
23	不明	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	38614.22	-53009.68	85.726	2002/8/21	
24	石器	ナイフ彫石層	碧玉	—	碧玉 3	—	—	—	2	7.3	2.6	0.8	17.39	38613.64	-53032.36	85.642	2002/8/21
25	石器	刮片	碧玉	—	碧玉 1	碧玉 1	—	—	2	5.3	7.2	1.9	52.68	38613.08	-53032.31	85.775	2002/8/21
26	石器	燧石石層	黒色安山岩	—	黒色安山岩 1	—	—	—	1	4.0	2.9	1.4	18.29	38616.94	-53027.46	85.838	2002/8/21
27	鏝	—	滑石層状頁岩	—	分断不能	—	—	—	1	1.9	1.5	0.3	0.87	38617.10	-53040.88	85.758	2002/8/21
28	鏝	—	—	—	—	—	—	—	1	3.4	1.8	0.7	2.69	38616.43	-53042.14	85.638	2002/8/21
29	石器	刮片	ホルンフェルス	—	ホルンフェルス 2	—	—	—	3	5.9	3.3	1.6	26.88	38614.53	-53041.18	85.717	2002/8/21
30	鏝	—	砂岩	—	—	—	—	—	3	4.9	3.0	1.0	13.29	38612.28	-53042.60	85.542	2002/8/21
31	石器	刮片	黒色安山岩	—	黒色安山岩 2	—	—	—	3	4.4	3.6	0.6	11.06	38611.88	-53042.73	85.619	2002/8/21
32	鏝	—	砂岩	—	—	—	—	—	3	3.9	1.3	0.6	2.96	38609.56	-53044.70	85.572	2002/8/21
33	石器	燧石形先頭器	黒曜石	—	黒曜石 1	—	—	—	3	3.3	1.3	0.5	1.23	38611.56	-53033.78	86.117	2002/8/21
34	石器	刮片	黒色頁岩	—	黒色頁岩 7	—	—	—	3	4.2	2.0	1.1	9.54	38610.02	-53035.74	85.695	2002/8/21
35	石器	刮片	黒曜石	—	黒曜石 2	—	—	—	3	1.8	0.7	0.5	0.76	38608.26	-53036.82	85.929	2002/8/21

Ⅶ. 旧石器時代の遺構と遺物

旧石器データ一覧表(2)

N	分類	器 種	石 材	接合	母 岩 No	接 合 No	部 位 No	新 規 部 位 No	ア ロ ッ ク	長 さ (cm)	幅 (cm)	厚 さ (cm)	重 量 (g)	X 座 標 (m)	Y 座 標 (m)	Z 座 標 (m)	調査 年 月 日
36	石器	刮片	珪質頁岩	○	珪質頁岩2	珪質頁岩2(1)	1	3	3.3	2.6	1.0	3.98	38609.27	-53007.68	85.691	2002/8/21	
37	石器	刮片	チャート	-	チャート1			3	2.1	2.0	0.6	1.53	38609.82	-53008.18	85.698	2002/8/21	
38	石器	刮片	黒色頁岩	-	黒色頁岩8			3	1.9	3.3	1.1	6.52	38610.22	-53008.42	85.634	2002/8/21	
39	石器	刮片	黒色安山岩	○	黒色安山岩3	黒色安山岩3(1)	2	3	6.4	3.4	1.9	31.25	38609.03	-53009.49	85.648	2002/8/21	
40	石器	刮片	チャート	-	チャート1			3	2.4	1.5	0.6	1.62	38608.81	-53009.86	85.677	2002/8/21	
41	41	鏢	砂岩	-				3	4.1	2.1	0.8	5.48	38608.87	-53009.92	85.666	2002/8/21	
42	石器	刮片	チャート	-	チャート1			3	3.8	3.9	1.4	18.75	38609.25	-53000.52	85.522	2002/8/21	
43	石器	刮片	珪質頁岩	○	珪質頁岩2	珪質頁岩2(1)	2	3	1.8	1.2	0.6	1.00	38607.95	-53008.74	85.634	2002/8/21	
44	石器	輝彩石器	珪質頁岩	○	珪質頁岩2	珪質頁岩2(1)	3	3	3.3	2.9	1.3	10.23	38608.45	-53009.01	85.554	2002/8/21	
45	石器	石刃	珪質頁岩	-	珪質頁岩4			3	4.4	1.8	0.6	3.87	38607.14	-53040.26	85.516	2002/8/21	
46	石器	石核	チャート	-	チャート1			3	2.0	2.9	1.6	12.70	38607.90	-53041.39	85.756	2002/8/21	
47	石器	刮片	硬質頁岩	○	硬質頁岩1	硬質頁岩1(1)	4	3	1.6	2.6	0.9	3.57	38603.98	-53009.97	85.707	2002/8/21	
48	48	鏢	溶結凝灰岩	-				4	2.8	2.5	1.0	5.57	38604.46	-53004.67	85.559	2002/8/21	
49	石器	刮片	黒色安山岩	○	黒色安山岩1	黒色安山岩1(3)	1	4	3.1	6.0	1.4	26.02	38607.02	-53001.52	85.698	2002/8/21	
50	石器	刮片	黒色頁岩	○	黒色頁岩1	黒色頁岩1(1)	1	4	3.5	5.7	1.2	17.65	38606.26	-53031.54	85.598	2002/8/21	
51	石器	刮片	黒色頁岩	○	黒色頁岩1	黒色頁岩1(1)	2	4	2.7	4.2	1.1	6.86	38606.22	-53031.10	85.733	2002/8/21	
52	石器	石核	黒色頁岩	-	黒色頁岩5			4	5.2	6.0	1.3	45.01	38608.48	-53028.12	85.743	2002/8/21	
53	石器	刮片	黒色安山岩	-	黒色安山岩2	黒色安山岩2	1	4	3.8	2.1	1.4	8.32	38608.90	-53026.26	85.767	2002/8/21	
54	石器	刮片	ホルンフェルス	-	ホルンフェルス1			4	2.5	4.3	1.0	6.58	38608.40	-53021.76	86.334	2002/8/21	
55	石器	刮片	黒色安山岩	-	分層不能			4	1.6	1.3	0.4	0.91	38607.22	-53023.40	85.720	2002/8/21	
56	石器	刮片	黒色安山岩	-	分層不能			4	1.6	2.4	0.3	0.97	38606.92	-53022.68	85.612	2002/8/21	
57	石器	刮片	黒色安山岩	-	分層不能			4	1.9	1.8	0.6	1.32	38606.70	-53022.74	85.634	2002/8/21	
58	石器	刮片	黒色頁岩	-	黒色頁岩1			4	2.3	2.8	0.8	5.65	38606.46	-53023.00	85.679	2002/8/21	
59	石器	刮片	黒色頁岩	-	黒色頁岩6			4	3.9	3.3	1.6	17.75	38605.92	-53022.40	85.673	2002/8/21	
60	石器	刮片	チャート	-	チャート2			4	2.2	3.1	1.0	3.66	38605.56	-53023.28	85.596	2002/8/21	
61	石器	刮片	チャート	-	チャート2			4	2.8	1.7	0.9	3.61	38604.62	-53022.00	85.660	2002/8/21	
62	石器	刮片	黒色頁岩	-	黒色頁岩1			4	5.6	2.1	0.9	5.23	38602.16	-53020.84	85.610	2002/8/21	
63	石器	刮片	碧玉	-	碧玉2			4	3.4	3.3	1.1	13.63	38602.70	-53022.20	85.739	2002/8/21	
64	石器	刮片	黒色安山岩	-	黒色安山岩2	黒色安山岩2	2	4	4.4	3.1	2.0	27.29	38600.60	-53022.29	85.657	2002/8/21	
65	石器	石核	黒色頁岩	-	黒色頁岩1			4	5.2	3.9	1.4	33.05	38601.68	-53023.64	85.650	2002/8/21	
66	石器	刮片	黒色安山岩	-	分層不能			4	1.8	3.0	1.2	4.20	38601.28	-53024.16	85.780	2002/8/21	
67	石器	刮片	黒色頁岩	-	黒色頁岩1			4	2.0	2.4	0.3	1.33	38603.12	-53023.74	85.925	2002/8/21	
68	68	自然石		-				4	0.62	38604.52	-53023.86	85.754	2002/8/21				
69	69	鏢	溶結凝灰岩	-				4	12.16	38605.78	-53026.96	85.719	2002/8/21				
70	石器	刮片	黒色安山岩	○	黒色安山岩1	黒色安山岩1(1)	3	4	3.96	38605.24	-53027.32	85.960	2002/8/21				

4 石層の分布と接合関係

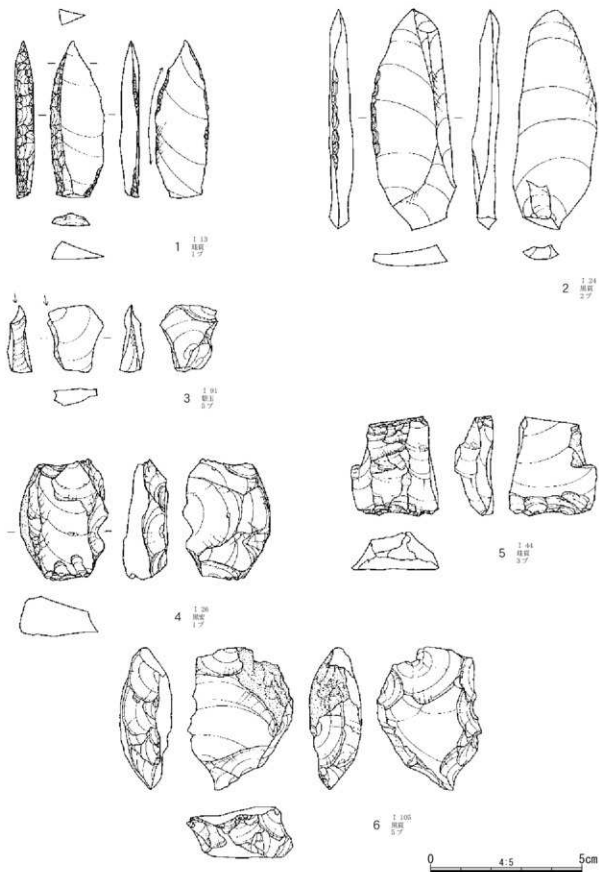
旧石器データ一覧表(3)

N	分類	器種	石材	接合	母岩No	接合No	部体No	部体No	プロック	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	X座標(m)	Y座標(m)	Z座標(m)	調査年月日	
71	石器	刮片	黒色頁岩	-	分類不能				4	1.8	2.9	0.4	1.46	38603.68	-5305.28	85.663	2002/8/21	
72	石器	刮片	碧玉	-	碧玉 2				4	2.2	1.8	0.5	1.48	38603.62	-5305.85	85.665	2002/8/21	
73	石器	刮片	黒色頁岩	○	黒色頁岩 1				4	4.8	5.3	1.4	29.60	38603.58	-5305.92	85.705	2002/8/21	
74	石器	刮片	黒色頁岩	○	黒色安山岩 2				3	4.8	2.1	1.9	20.62	38603.79	-5306.18	85.672	2002/8/21	
75	石器	刮片	黒色安山岩	○	黒色安山岩				3	4.7	0.8	0.1	0.68	38601.17	-5304.62	85.536	2002/8/21	
76	石器	刮片	ホルンフェルス	-	分類不能				4	4.7	4.2	1.7	29.29	38601.32	-5304.90	85.538	2002/8/21	
77	石器	刮片	黒色安山岩	○	黒色安山岩 1				4	4.8	5.0	0.8	17.72	38600.65	-5305.19	85.845	2002/8/21	
78	石器	刮片	黒色安山岩	○	黒色安山岩 1				4	4.1	1.5	1.1	4.79	38600.16	-5305.11	85.712	2002/8/21	
79	石器	刮片	黒色安山岩	○	黒色安山岩 1				4	4.2	5.2	1.1	22.17	38600.37	-5305.45	85.547	2002/8/21	
80	石器	刮片	黒色安山岩	○	黒色安山岩 1				4	5.5	3.9	1.3	24.63	38600.82	-5305.76	85.714	2002/8/21	
81	石器	刮片	黒色安山岩	○	黒色安山岩 1				4	6.3	4.1	1.7	40.33	38600.04	-5305.69	85.587	2002/8/21	
82	石器	刮片	黒色安山岩	○	分類不能				4	1.7	1.4	0.4	0.88	38599.58	-5305.91	85.796	2002/8/21	
83	石器	石核	黒色安山岩	○	黒色安山岩 2				4	3.2	2.7	1.7	15.04	38599.72	-5306.06	85.721	2002/8/21	
84	石器	刮片	黒色安山岩	○	黒色安山岩 1				4	3.2	2.9	0.8	8.70	38599.14	-5306.94	85.688	2002/8/21	
85	石器	刮片	黒色安山岩	○	黒色安山岩 3				4	4.2	5.0	1.5	25.49	38597.98	-5304.26	85.727	2002/8/21	
86	石器	刮片	黒色頁岩	-	黒色頁岩 1				4	1.4	1.6	0.3	0.55	38600.46	-5309.68	85.674	2002/8/21	
87	石器	刮片	黒色頁岩	○	黒色頁岩 1				4	3.3	3.3	1.0	10.90	38601.44	-5308.58	85.732	2002/8/21	
88	石器	刮片	黒色頁岩	○	黒色頁岩 1				4	6.3	3.8	1.0	21.20	38603.10	-5309.06	85.546	2002/8/21	
89	石器	刮片	黒色安山岩	○	黒色頁岩 1				4	2.4	2.3	0.7	3.97	38602.98	-5302.96	85.637	2002/8/21	
90	石器	石核	黒色安山岩	○	黒色安山岩 1				4	6.2	4.9	2.1	61.20	38602.86	-5303.33	85.680	2002/8/21	
91	石器	彫刻刀形石鏢	碧玉	-	碧玉 4				5	2.2	1.9	0.7	2.83	38600.23	-5305.66	85.693	2002/8/21	
92	石器	刮片	黒色頁岩	-	黒色頁岩 2				5	5.2	3.3	1.6	25.34	38599.37	-5305.46	85.644	2002/8/21	
93	石器	鏢	彫刻刀形石鏢	-	黒色頁岩 2				5	3.5	3.5	1.6	314.40	38597.63	-5307.44	85.381	2002/8/21	
94	不明	不明		-					5									
95	不明	不明		-					5									
96	石器	刮片	碧玉	-	碧玉 2				5	1.6	2.0	0.6	1.82	38596.68	-5305.75	85.512	2002/8/21	
97	石器	刮片	黒色安山岩	○	黒色安山岩 2				5	2.6	2.5	0.7	5.08	38605.21	-5306.56	85.497	2002/8/21	
98	石器	刮片	黒色安山岩	○	黒色安山岩 1				5	3.8	2.9	0.7	7.68	38592.88	-5306.56	85.597	2002/8/21	
99	石器	刮片	黒色安山岩	○	黒色安山岩 5				1	5	4.0	3.5	1.0	11.83	38598.81	-5303.12	85.637	2002/8/21
100	石器	刮片	黒色安山岩	○	黒色安山岩 5				2	5	4.7	3.6	1.1	18.37	38598.14	-5303.14	85.640	2002/8/21
101	石器	刮片	黒色頁岩	-	黒色頁岩 1				5	3.9	2.3	0.8	6.73	38597.23	-5302.84	85.770	2002/8/21	
102	石器	刮片	黒色頁岩	-	分類不能				5	0.9	0.9	0.2	0.20	38597.64	-5302.70	85.644	2002/8/21	
103	石器	二次加工の有る刮片	黒色頁岩	○	黒色頁岩 4				1	5	4.8	4.1	1.4	37.15	38597.71	-5302.34	85.584	2002/8/21
104	石器	刮片	黒色頁岩	○	黒色頁岩 2				1	5	1.8	1.8	0.4	0.82	38598.07	-5302.20	85.638	2002/8/21
105	石器	スクレイパー	黒色頁岩	○	黒色頁岩 1				5	4.8	3.5	1.7	27.47	38598.56	-5301.40	85.696	2002/8/21	

VII. 旧石器時代の遺構と遺物

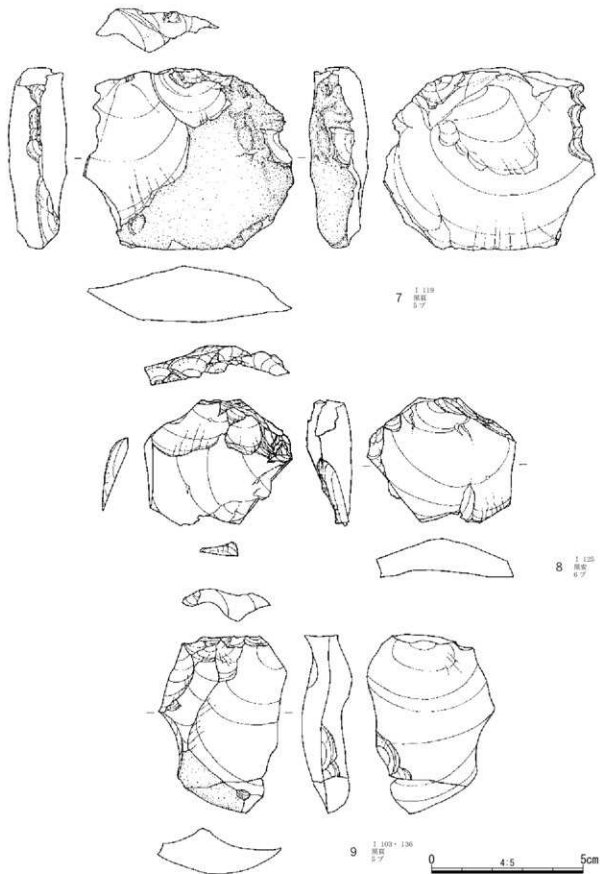
旧石器データ一覧表(4)

N	分類	器種	石材	接合	母岩No	層合No	部体No	新機軸	アロック	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	X 径(mm)	Y 径(mm)	Z 径(mm)	調査年月日
106	石器	剥片	碧玉	碧玉5					5	4.6	3.1	3.1	12.86	36398.39	53001.12	85.700	2002/8/21
107	石器	石核	硬質頁岩	硬質頁岩1	硬質頁岩1(1)		5		5	3.7	3.0	3.7	18.33	36398.33	53000.62	85.777	2002/8/21
108	石器	剥片	硬質頁岩	硬質頁岩1	硬質頁岩2(1)		5		5	2.1	1.9	0.3	1.09	36398.38	53009.95	85.692	2002/8/21
109	石器	剥片	黒色頁岩	黒色頁岩2	黒色頁岩2(1)		3		5	3.7	3.1	0.8	6.67	36397.66	53001.72	85.629	2002/8/21
110	石器	剥片	硬質頁岩	硬質頁岩1	硬質頁岩2(1)		5		5	1.7	1.1	0.3	0.42	36397.67	53001.44	85.757	2002/8/21
111	石器	剥片	黒色安山岩	黒色安山岩1	黒色安山岩1(14)		1		5	2.3	3.0	0.6	3.75	36397.39	53001.36	85.694	2002/8/22
112	石器	剥片	硬質頁岩	硬質頁岩1	硬質頁岩1(1)		1		5	4.6	3.5	0.9	12.78	36397.38	53001.05	85.343	2002/8/22
113	—	自然石							5				0.36	36396.89	53001.08	85.696	2002/8/22
114	石器	剥片	黒色頁岩	黒色頁岩1	黒色頁岩1		5		5	1.4	1.9	0.6	1.58	36396.66	53000.92	85.391	2002/8/22
115	石器	剥片	硬質頁岩	硬質頁岩1	硬質頁岩1(1)		3		5	3.2	2.9	1.6	10.64	36396.40	53000.54	85.719	2002/8/22
116	石器	剥片	硬質頁岩	硬質頁岩1	硬質頁岩1(1)		2		5	2.0	3.3	1.0	7.13	36395.77	53000.39	85.637	2002/8/22
117	石器	剥片	碧玉	碧玉3			5		5	3.1	2.3	0.9	5.42	36395.25	53009.72	85.300	2002/8/22
118	石器	剥片	黒色頁岩	黒色頁岩2	黒色頁岩2(1)		2		5	5.1	6.9	1.4	38.25	36395.09	53000.39	85.613	2002/8/22
119	石器	スクレイパー	黒色頁岩	黒色頁岩1	黒色頁岩1(1)		4		5	6.0	7.0	1.9	84.93	36392.08	53001.52	85.561	2002/8/22
120	石器	剥片	黒色安山岩	黒色安山岩1	黒色安山岩1		6		6	2.8	2.8	0.5	3.78	36389.89	53000.14	85.561	2002/8/22
121	石器	剥片	黒曜石	黒曜石3			6		6	1.7	1.1	0.2	0.32	36389.42	53008.73	85.556	2002/8/22
122	石器	剥片	黒曜石	黒曜石4			6		6	2.2	1.0	0.7	1.28	36389.86	53007.92	85.625	2002/8/22
123	石器	剥片	黒曜石	不明な産地			6		6	1.3	1.0	0.4	0.25	36389.02	53007.88	85.526	2002/8/22
124	石器	剥片	黒色頁岩	黒色頁岩1	黒色頁岩1		6		6	5.0	6.0	1.8	53.37	36386.71	53008.00	85.610	2002/8/22
125	石器	二次加工の有る剥片	黒色安山岩	黒色安山岩1	黒色安山岩1(2)		1		6	4.2	4.9	1.3	28.69	36387.25	53006.65	85.533	2002/8/22
126	石器	剥片	黒色安山岩	黒色安山岩1	黒色安山岩1(1)		2		6	3.1	3.8	1.5	12.05	36387.25	53006.59	85.613	2002/8/22
127	石器	剥片	黒色安山岩	黒色安山岩1	黒色安山岩1		6		6	4.2	3.2	0.7	8.06	36390.41	53005.02	85.713	2002/8/22
128	石器	剥片	黒色安山岩	黒色安山岩2	黒色安山岩2		6		6	2.6	2.8	0.9	6.34	36389.42	53003.77	85.614	2002/8/22
129	石器	石片	碧玉	碧玉5			6		6	6.1	2.4	1.4	16.87	36386.65	53004.02	85.643	2002/8/22
130	石器	二次加工の有る剥片	黒色安山岩	黒色安山岩1	黒色安山岩1		1		6	8.2	4.7	1.2	40.03	36386.25	53003.70	85.443	2002/8/22
131	石器	剥片	黒色安山岩	黒色安山岩3	黒色安山岩3(1)		1		3	3.7	3.5	1.4	13.49	36601.36	53046.17	85.365	2002/9/19
132	—	自然石							3				5.49	36602.66	53044.92	85.425	2002/9/19
133	133	石器	チャート	チャート1			3		3	2.4	3.0	0.6	4.20	36602.89	53045.32	85.229	2002/9/19
134	134	石器	溶結凝灰岩				3		3	3.5	2.9	0.9	9.83	36609.66	53048.39	85.471	2002/9/19
135	135	石器	黒色安山岩	黒色安山岩6	黒色安山岩6(1)		2		2	3.0	3.9	1.1	14.36	36613.00	53001.48	85.572	2002/8/21
136	136	石器	黒色頁岩	黒色頁岩4	黒色頁岩4(1)		2		3	1.1	2.7	1.2	3.07	36609.53	53043.92	85.972	2002/8/21

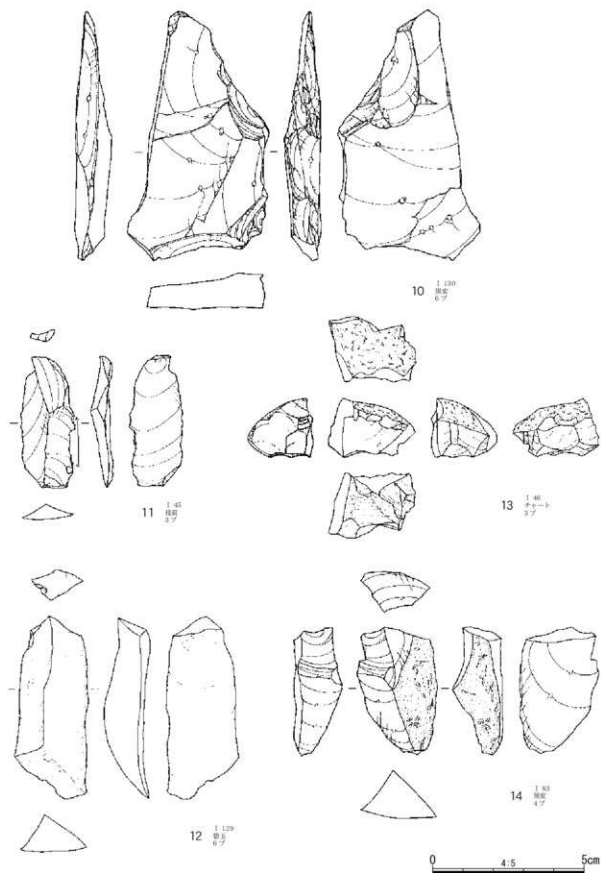


第303図 出土石器(1)

VII. 旧石器時代の遺構と遺物

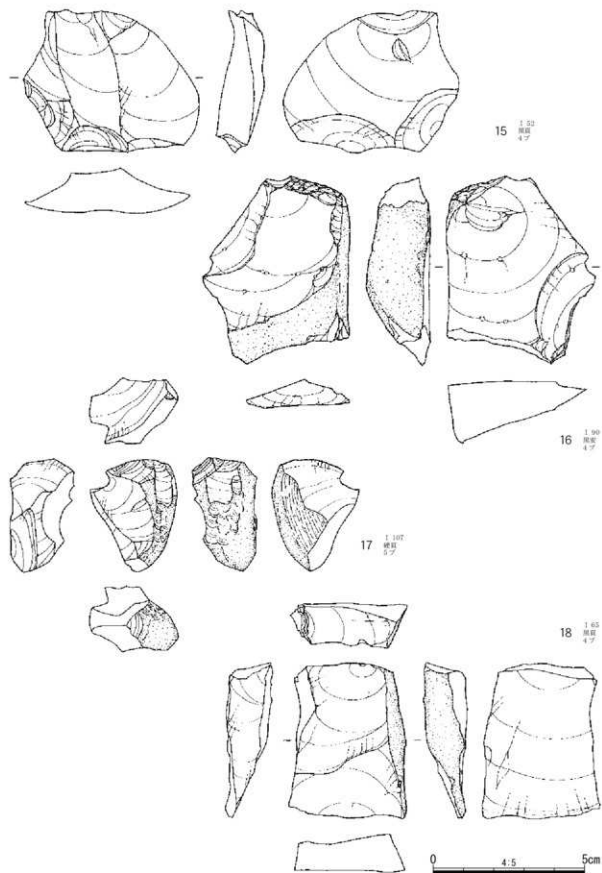


第304図 出土石器(2)



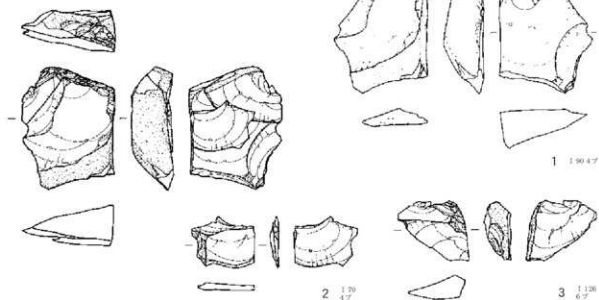
第305図 出土石器(3)

VII. 旧石器時代の遺構と遺物

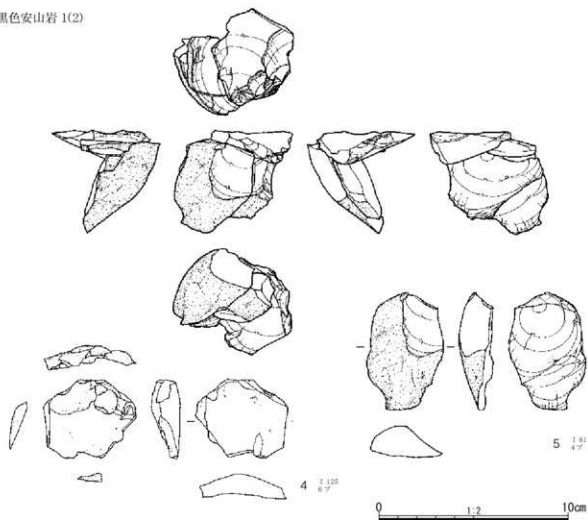


第306図 出土石器(4)

黒色安山岩 1(1)



黒色安山岩 1(2)



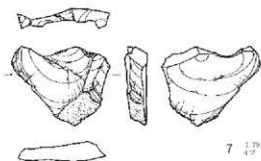
第307図 出土石器(5)

VII. 旧石器時代の遺構と遺物

黑色安山岩 1(2)

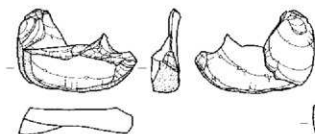


6 134
17

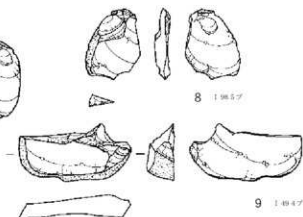


7 139
17

黑色安山岩 1(3)

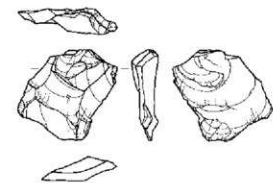


8 136
17

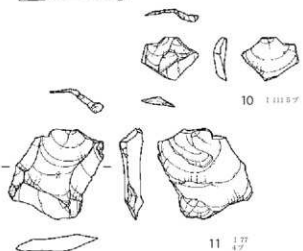


9 139
17

黑色安山岩 1(4)

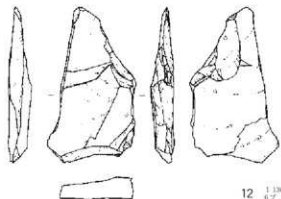


10 133
17

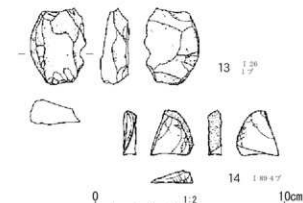


11 137
17

黑色安山岩 1 非接合



12 130
17



13 138
17

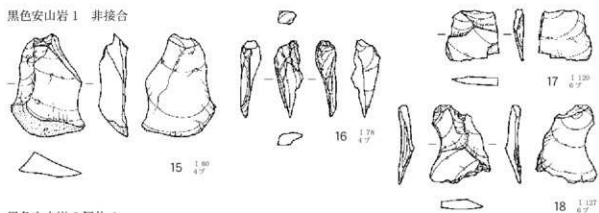
14 139
17

0 1.2 10cm

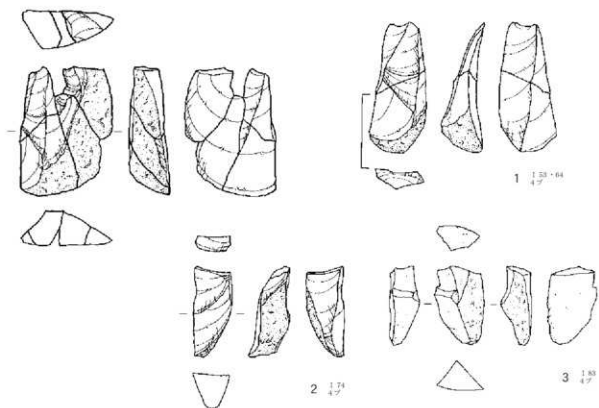
第308図 出土石器(6)

4 石器の分布と接合関係

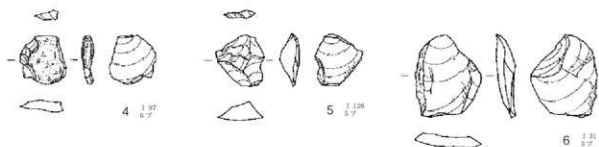
黒色安山岩 1 非接合



黒色安山岩 2 個体 A



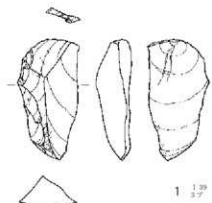
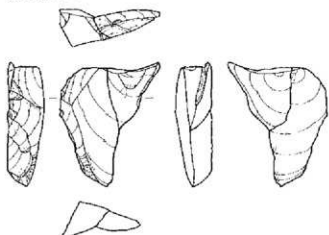
黒色安山岩 2 非接合



第309図 出土石器(7)

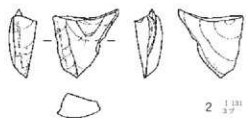
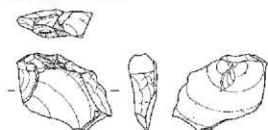
VII. 旧石器時代の遺構と遺物

黑色安山岩 3



1 1.27
1.37

黑色安山岩 3 非接合

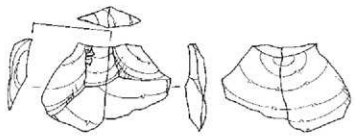


2 1.31
1.37

黑色安山岩 5



3 1.85
1.47



6 1.99-100
1.57

黑色安山岩 4

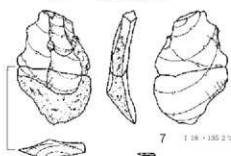


4 1.13
1.17



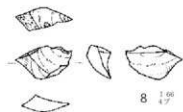
5 1.17

黑色安山岩 6

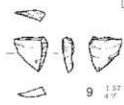


7 1.18-135.27

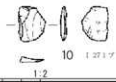
黑色安山岩 分類不能



8 1.06
1.47



9 1.57
1.47

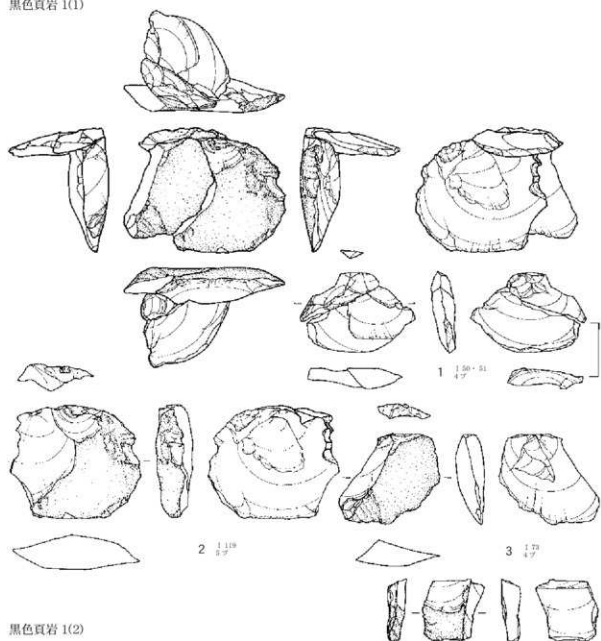


10 1.2717

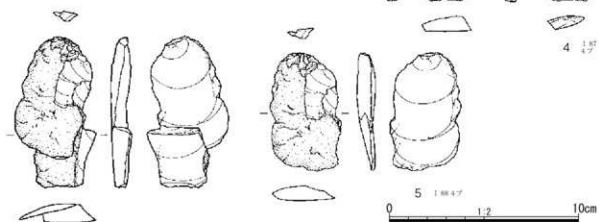


第310図 出土石器(8)

黒色頁岩 1(1)



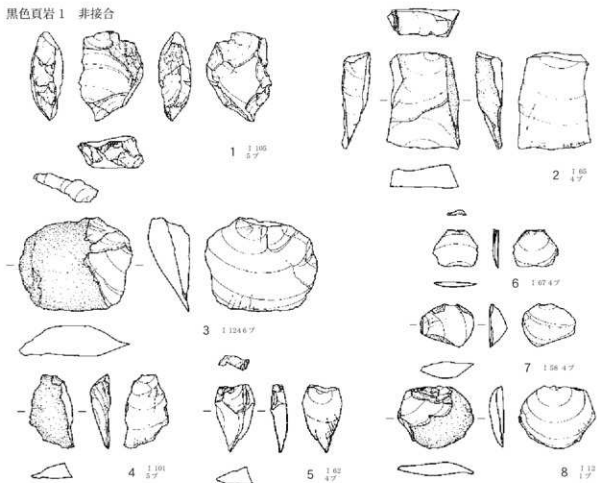
黒色頁岩 1(2)



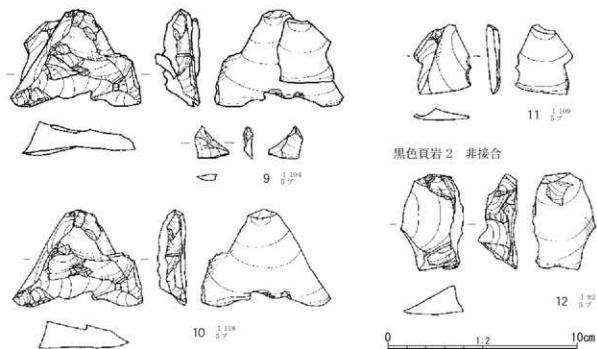
第311図 出土石器(9)

VII. 旧石器時代の遺構と遺物

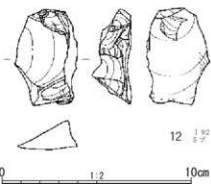
黑色頁岩 1 非接合



黑色頁岩 2

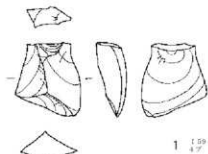


黑色頁岩 2 非接合

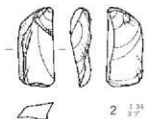


第312図 出土石器00

黒色頁岩 6



黒色頁岩 7



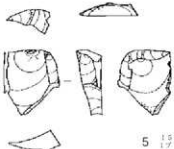
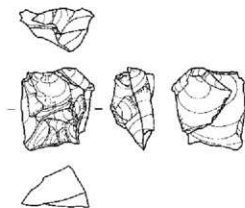
黒色頁岩 8



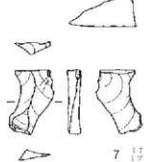
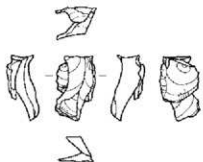
黒色頁岩 9



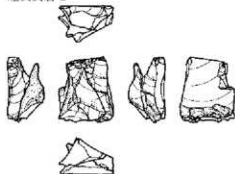
珪質頁岩 1(1)



珪質頁岩 1(2)



珪質頁岩 2

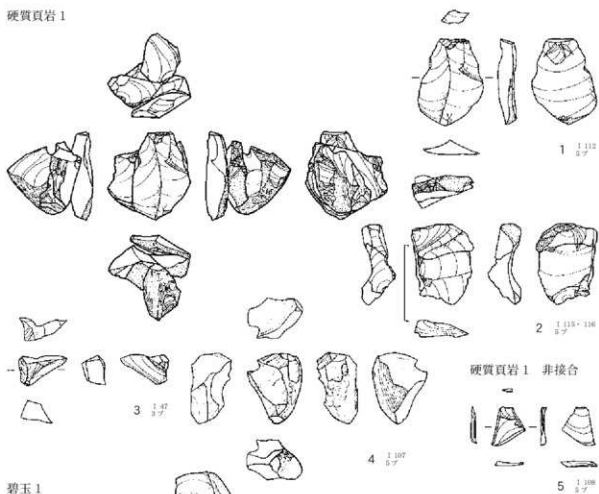


0 10cm
1:2

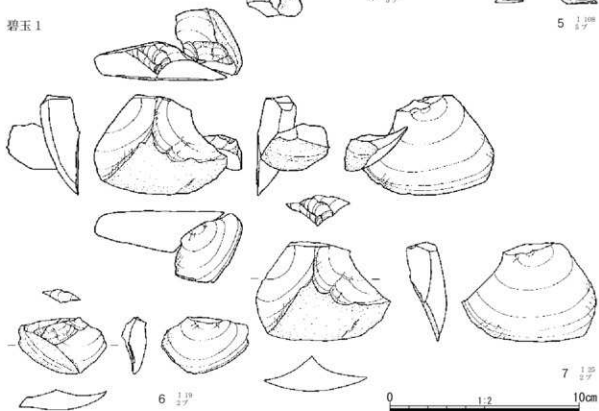
第313図 出土石器00

VII. 旧石器時代の遺構と遺物

硬質頁岩 1

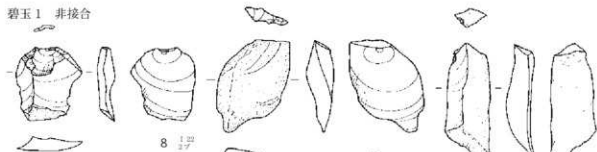


碧玉 1

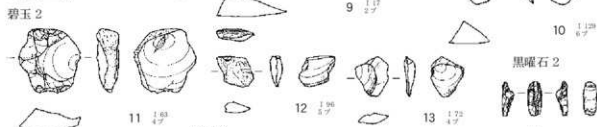


第314図 出土石器叢

碧玉 1 非接合



碧玉 2

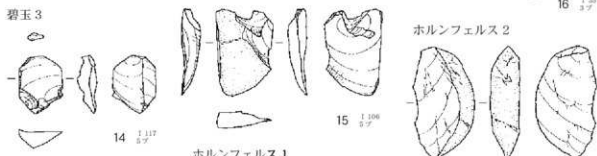


黒曜石 2

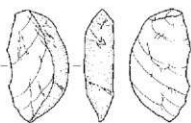


碧玉 5

碧玉 3



ホルンフェルス 2



ホルンフェルス 1

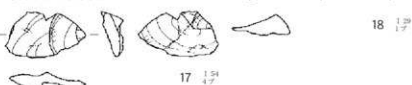


チャート 1

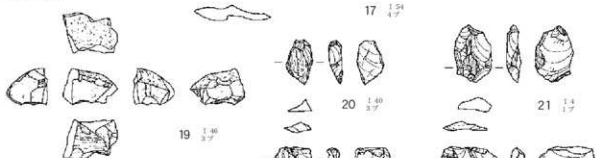
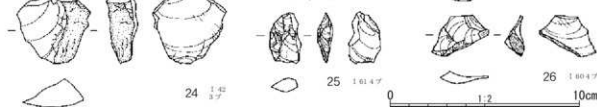


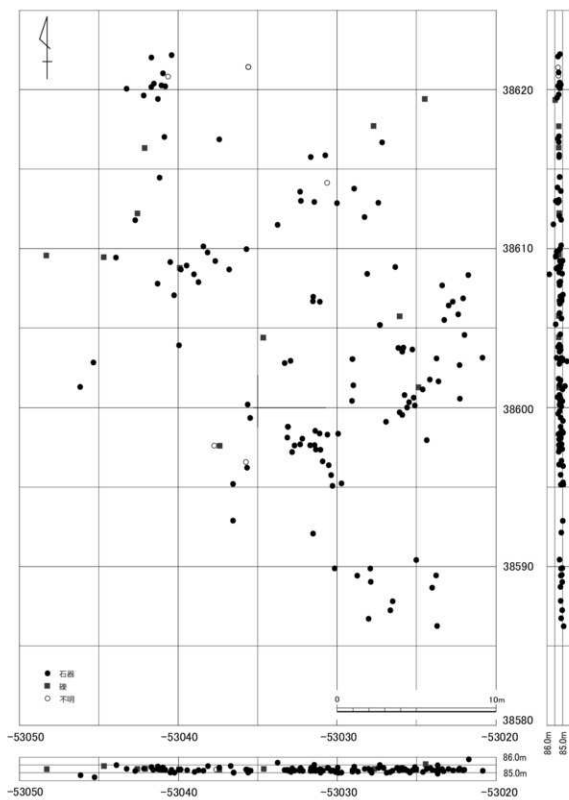
チャート 2



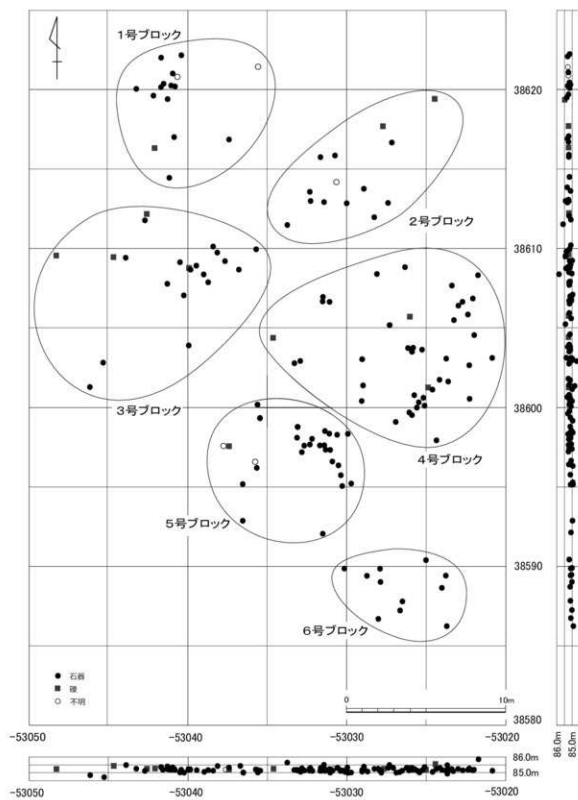
0 1.2 10cm

第315図 出土石器③

VII. 旧石器時代の遺構と遺物

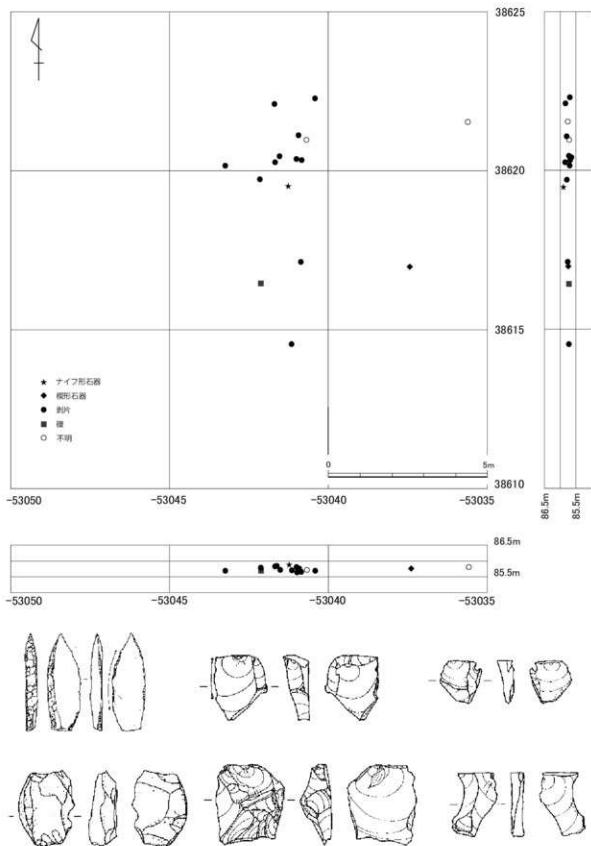


第316図 石器分布全体図

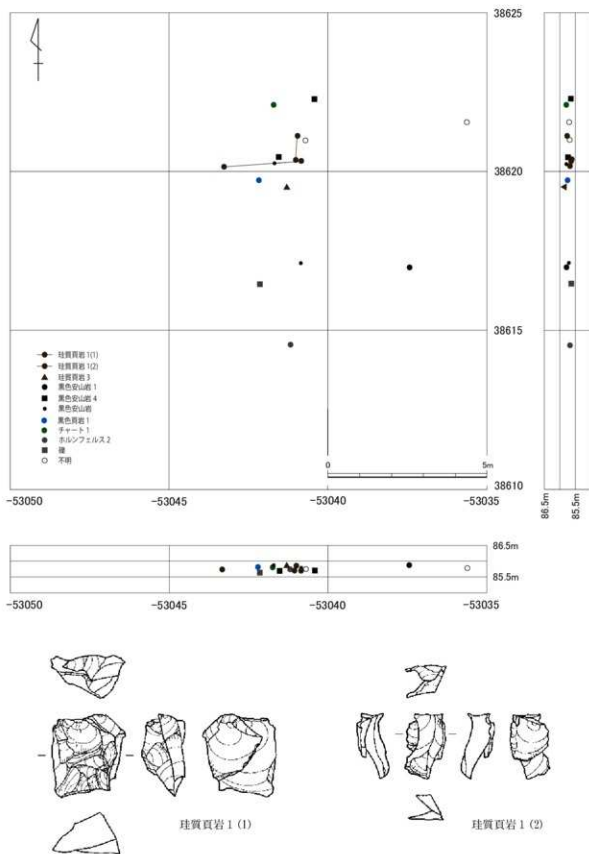


第317図 ブロック設定図

VII. 旧石器時代の遺構と遺物

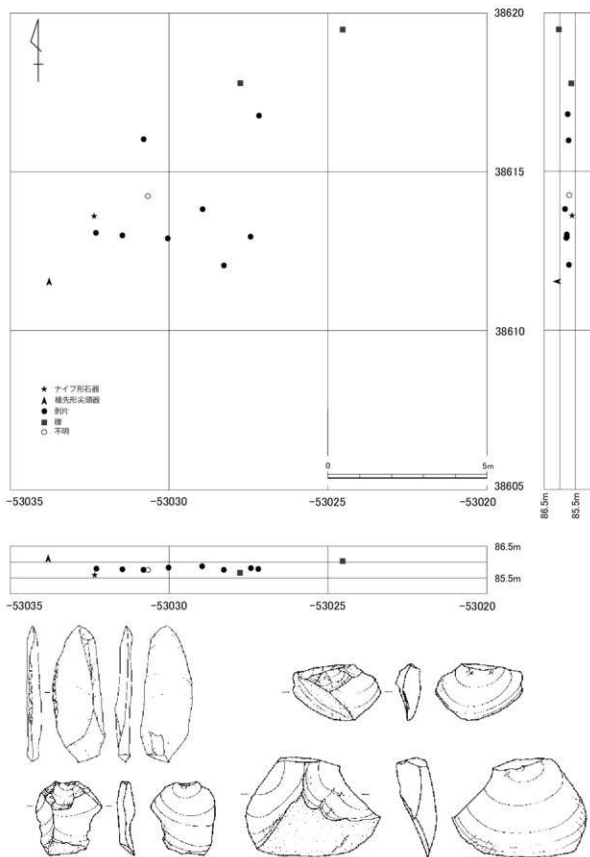


第318図 1号ブロック器種別石器分布図

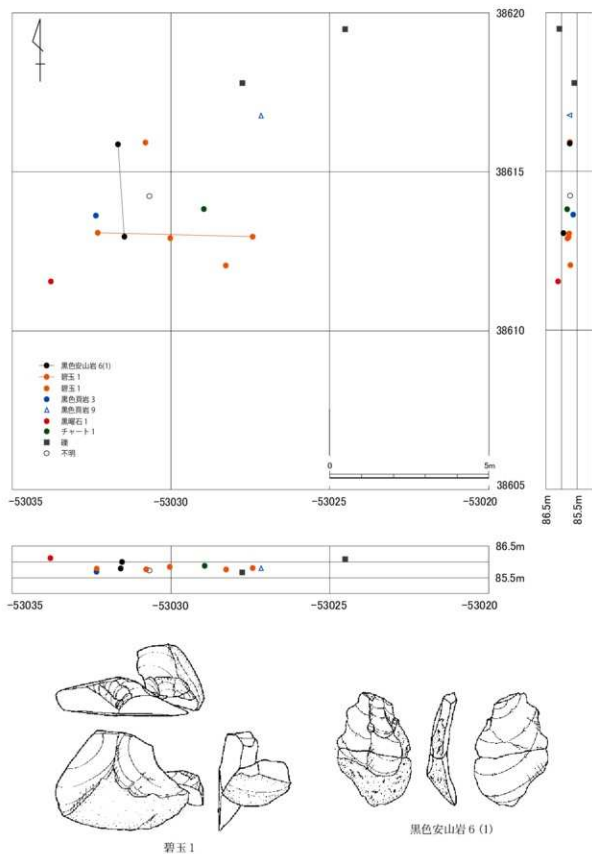


第319図 1号ブロック母岩別石器分布図

VII. 旧石器時代の遺構と遺物

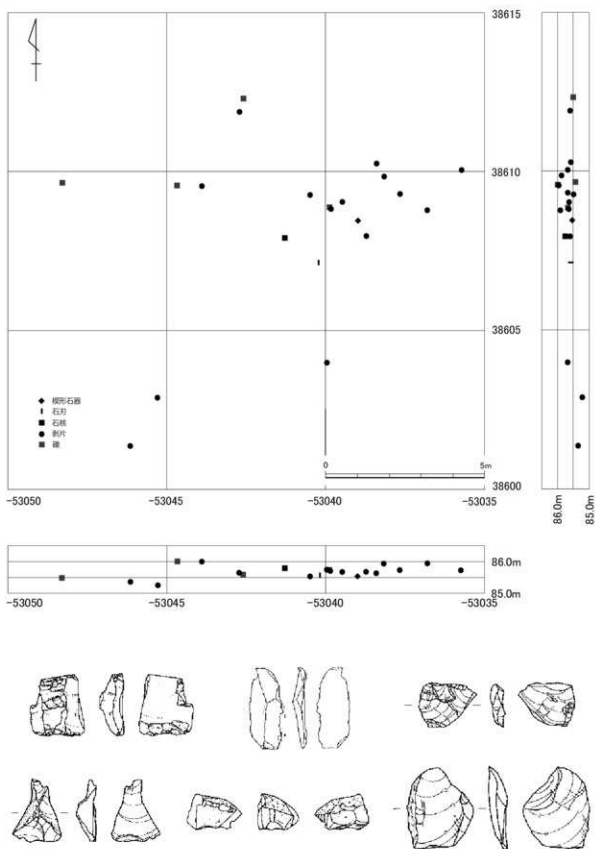


第320図 2号ブロック器種別石器分布図

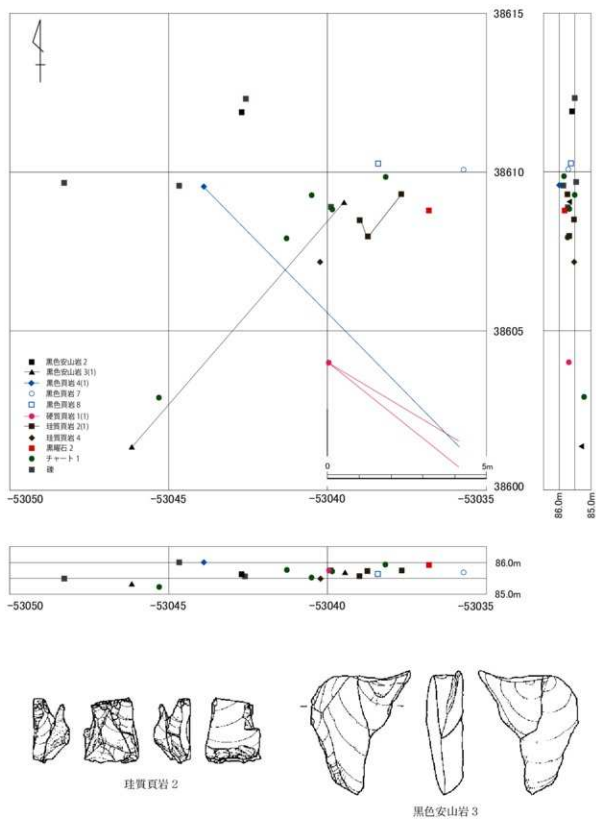


第321図 2号ブロック母岩別石器分布図

VII. 旧石器時代の遺構と遺物

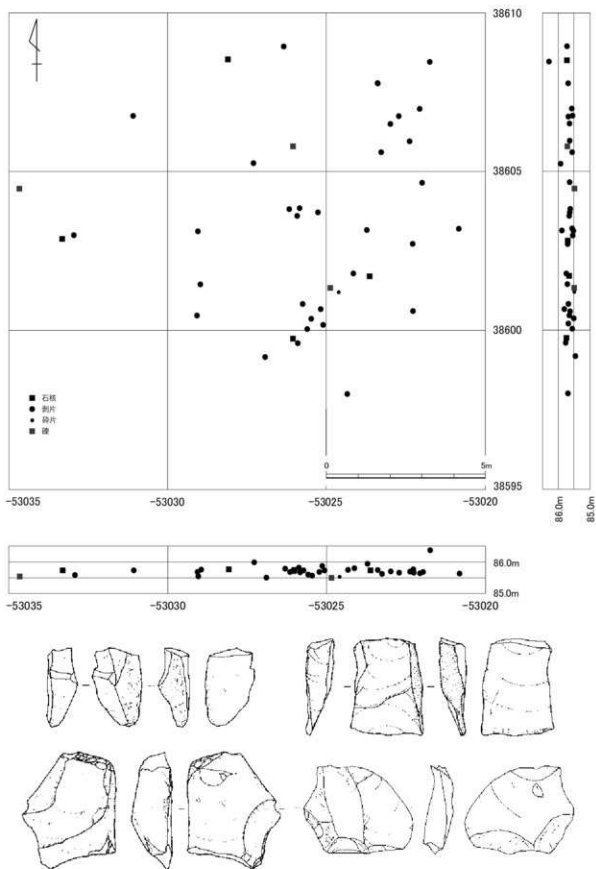


第322図 3号ブロック器種別石器分布図

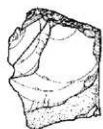
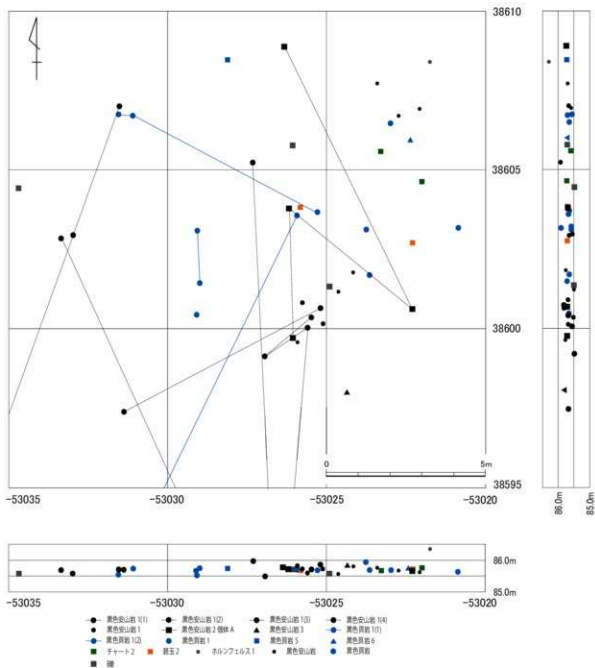


第323図 3号ブロック母岩別石器分布図

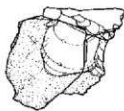
VII. 旧石器時代の遺構と遺物



第324図 4号ブロック器種別石器分布図



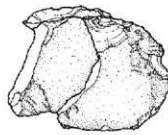
黒色安山岩 1 (1)



黒色安山岩 1 (2)



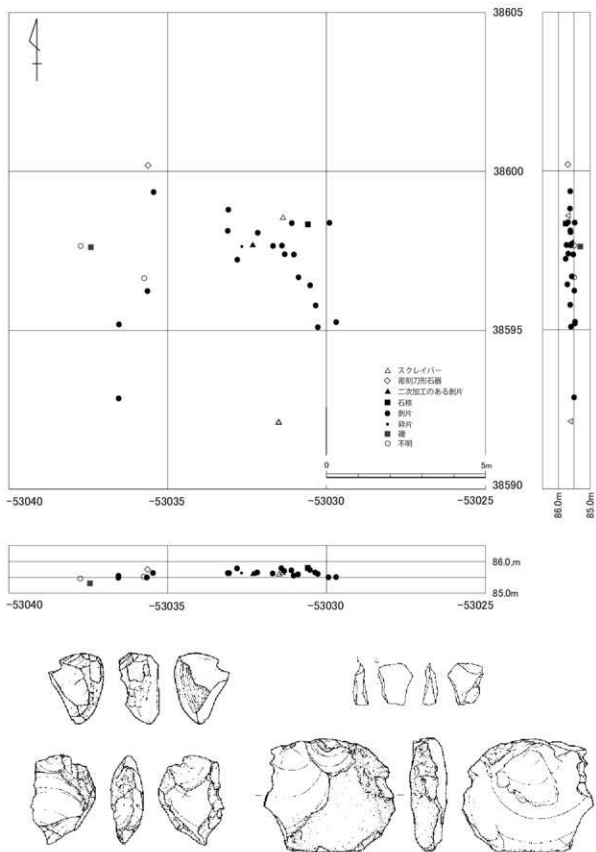
黒色安山岩 2



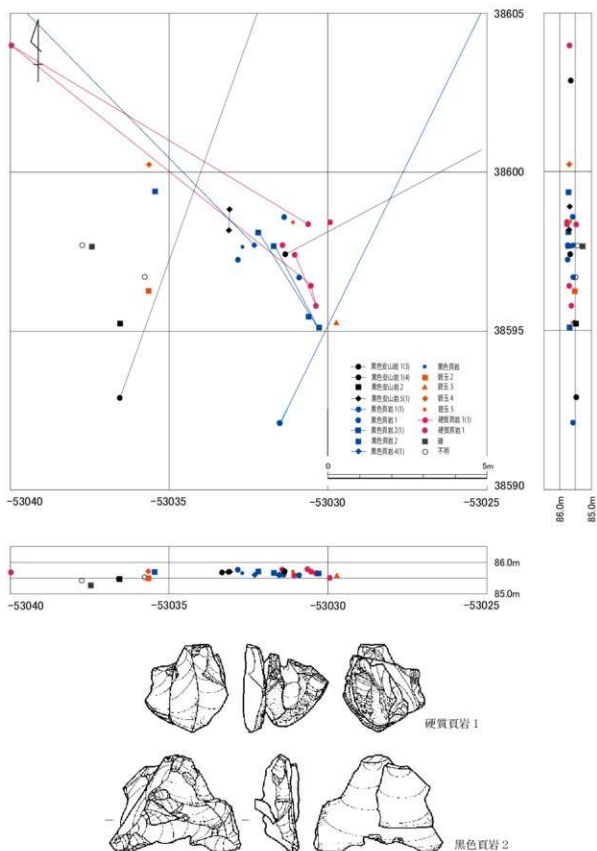
黒色頁岩 1 (2)

第325図 4号ブロック母岩別石器分布図

VII. 旧石器時代の遺構と遺物

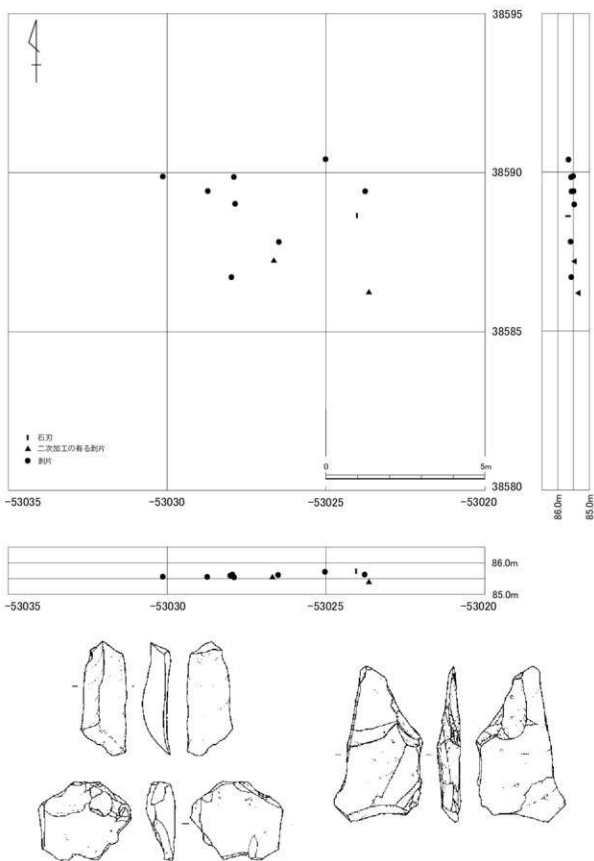


第326図 5号ブロック器種別石器分布図

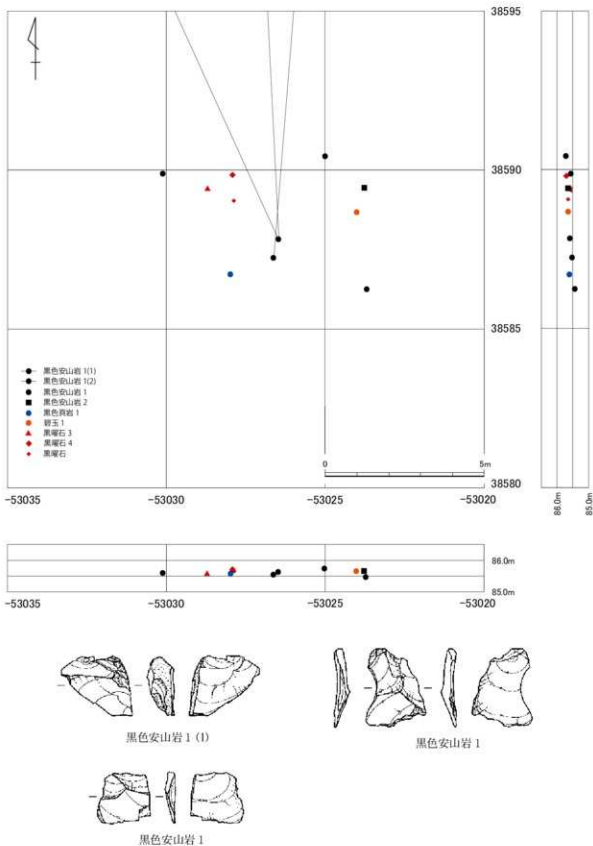


第327図 5号ブロック母岩別石器分布図

VII. 旧石器時代の遺構と遺物

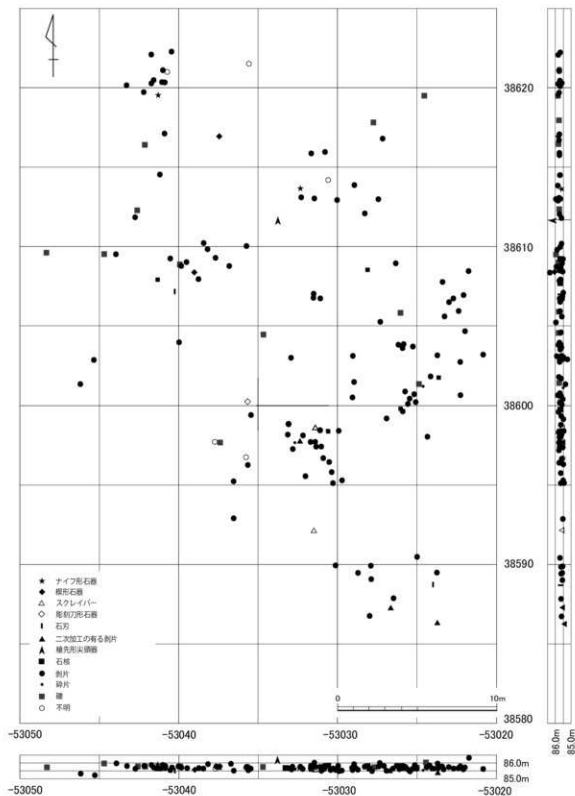


第328図 6号ブロック器種別石器分布図

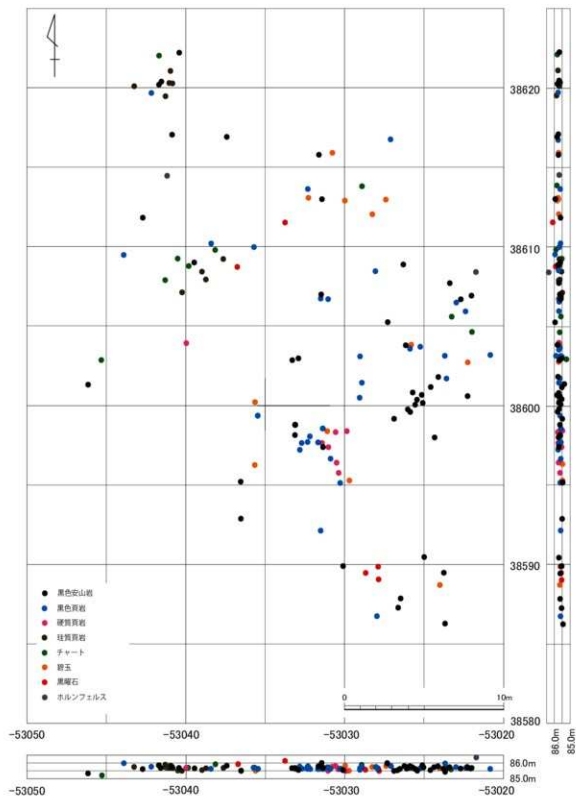


第329図 6号ブロック母岩別石器分布図

VII. 旧石器時代の遺構と遺物

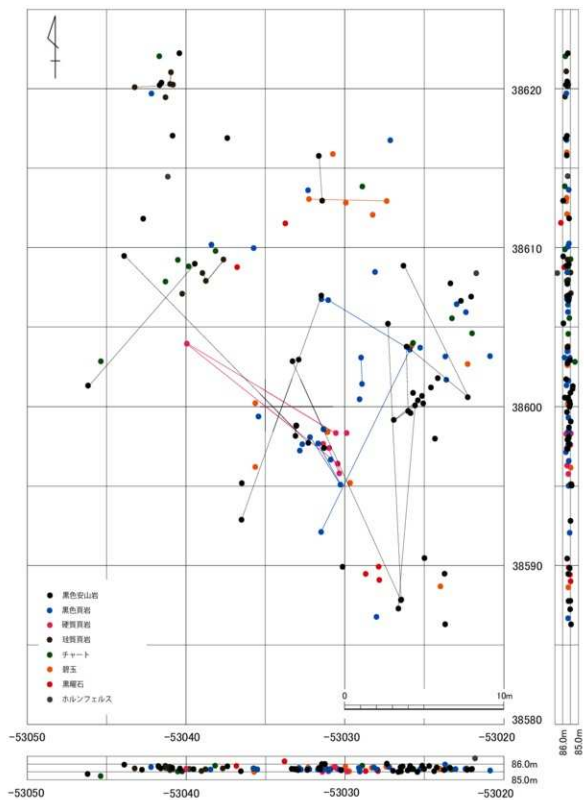


第330図 器種別石器分布全体図



第331図 石材別石器分布全体図

VII. 旧石器時代の遺構と遺物



第332図 接合全体図

附編 自然科学分析

I. 塚下遺跡の火山灰分析

II. 塚下遺跡の炭化材樹種同定

附編 自然科学分析

I. 塚下遺跡の火山灰分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

群馬県域に分布する後期更新世以降に形成された土壌や堆積物の中には、浅間火山や榛名火山をはじめとする北関東地方とその周辺に分布する火山のほか、九州地方の始良カルデラや鬼界カルデラなど遠方の火山に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、土層の形成年代や遺構の構築年代、さらに遺物包含層などの堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで塚下遺跡においても、地質調査、火山ガラス比分析、さらに屈折率測定を合わせて行って、土層の層序を記載するとともに、示標テフラの層位を把握して、土層の年代に関する資料を収集することになった。調査の対象となった地点は、IV区570-940グリッドと530-920グリッドの2地点である。

2. 土層層序

(1) 570-940グリッド

台地上に位置する570-940グリッドでは、下位より灰色粘質土（層厚30cm以上）、黄色細粒軽石混じり灰色土（層厚7cm、軽石の最大径2mm）、黄褐色砂質土（層厚27cm）、褐色土（層厚9cm）、黄色軽石混じり黄褐色土（層厚19cm、軽石の最大径3mm）、黄色軽石を多く含む黄褐色砂質土（層厚12cm、軽石の最大径6mm）、灰色土（層厚10cm）が認められる（図1）。

(2) 530-920グリッド

低地に位置する530-920グリッドでは、下位より黒褐色泥炭層（層厚6cm以上）、暗褐色泥炭層（層厚5cm）、成層したテフラ層（層厚9cm）、成層した黄灰色砂層（層厚12cm）、暗灰色砂質泥層（層厚19cm）、灰色シルト層（層厚0.8cm）、暗灰色砂質泥層（層厚6cm）、灰色シルト層（層厚3cm）、暗灰色泥層（層厚2cm）、暗灰色砂層（層厚1cm）、灰色シルト層（層厚9cm）、灰褐色砂層（層厚3cm）、暗灰色土（層厚122cm）、砂混じり灰色土（層厚22cm）、砂混じりで若干色調が暗い灰色土（層厚7cm）、暗灰褐色砂質土（層厚18cm）が認められる（図2）。

これらのうち成層したテフラ層は、下位より灰色細粒火山灰層（層厚0.2cm）、黄色粗粒火山灰層（層厚1cm）、灰色粗粒火山灰層（層厚1cm）、桃色粗粒火山灰層（層厚0.8cm）、暗灰色粗粒火山灰層（層厚2cm）、黄色粗粒火山灰層（層厚1cm）、暗灰色粗粒火山灰層（層厚2cm）、桃色細粒火山灰層（層厚1cm）からなる。このテフラ層は、層相から1108（天仁元）年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ（As-B, 荒牧, 1968, 新井, 1979）に同定される。

3. 火山ガラス比分析

(1) 分析試料と分析方法

570-940グリッドにおいて、基本的に厚さ5cmごとに設定採取された試料のうち、9点を対象に火山ガラス

比分析を試みた。分析の手順は次のとおりである。

- 1) 試料15gを秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 分析篩により1/4-1/8mmの粒子を篩別。
- 5) 偏光顕微鏡下で250粒子を観察し、火山ガラスの形態別比率を求める。

(2) 分析結果

火山ガラス比分析の結果をダイアグラムにして図3に、火山ガラス比の内訳を表1に示す。570-940グリッドでは、試料12を除く試料から火山ガラスが検出された。試料18や試料16には、無色透明のバブル型ガラスが認められる(0.8~1.2%)。試料10より上位の試料では、上方にむかって分厚い中間型ガラスの量が増加し、試料8から試料4にかけて比較的多く含まれる傾向がある。またこれらの試料には、スポンジ状に発泡した軽石型ガラスも少量ずつ含まれている。層相を合わせて考慮すると、ここでは試料18付近に無色透明のバブル型ガラスで特徴づけられるテフラ、試料15付近に火山砂で特徴づけられるテフラ、試料8付近と試料4付近に黄色軽石や中間型ガラスで特徴づけられるテフラの降灰層準があると推定される。

4. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

570-940グリッドにおいて火山ガラス比分析を行った試料のうち、試料16と試料4について屈折率測定を行って示標テフラとの同定を試みるようになった。測定は、温度一定屈折率測定法(新井, 1972, 1993)による。

(2) 測定結果

屈折率の測定結果を表2に示す。試料16に含まれるバブル型火山ガラスの屈折率(n)は、1.499-1.501である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石のほか、少量の角閃石が含まれている。斜方輝石の屈折率(γ)は、1.701-1.711である。試料4に含まれる火山ガラスの屈折率(n)は、1.502-1.505である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石の屈折率(γ)は、1.708-1.712である。

5. 考察—示標テフラとの同定

試料18付近に降灰層準があると考えられるテフラは、火山ガラスの形態、色調、試料16に含まれる同じ火山ガラスの屈折率などから、約2.4~2.5万年前^{*)}に南九州の始良カルデラから噴出した始良 Tn 火山灰(AT, 町田・新井, 1976, 1992, 松本ほか, 1987, 池田ほか, 1995)に由来すると考えられる。また試料4付近に降灰層準があると考えられるテフラは、火山ガラスの形態、色調、屈折率、重鉱物の組み合わせ、斜方輝石の屈折率などから、約1.3~1.4万年前^{*)}に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石(As-YP, 新井, 1962, 町田・新井, 1992)に由来すると考えられる。

したがってこれら2層のテフラの間に層位がある2層準のテフラのうち、試料15付近に火山砂で特徴づけられるテフラについては、層位や層相から約1.9~2.4万年前^{*)}に浅間火山から噴出した浅間板鼻褐色軽石群(As-BP Group, 新井, 1962, 町田・新井, 1992, 早田, 1996, 未公表資料)の中・上部に同定される。ま

1. 塚下遺跡の火山灰分析

た、試料 8 付近に降灰層準があると考えられる黄色軽石や中間型ガラスで特徴づけられるテフラは、1.6~1.8 万年前*1 に浅間火山から噴出した浅間大窪沢第 1 軽石 (As-Ok 1, 中沢ほか, 1984, 町田・新井, 1992, 早田, 1996) や浅間大窪沢第 2 軽石 (As-Ok 2, 中沢ほか, 1984, 町田・新井, 1992, 早田, 1996) と考えられる。

6. まとめ

塚下遺跡において、地質調査、火山ガラス比分析、屈折率測定を行った。その結果、下位より始良 Tn 火山灰 (AT, 約 2.4~2.5 万年前*)、浅間板鼻褐色軽石群 (As-BP Group, 約 1.9~2.4 万年前*) 中・上部、浅間大窪沢第 1 軽石 (As-Ok 1) あるいは浅間大窪沢第 2 軽石 (As-Ok 2 ; 以上約 1.6~1.8 万年前*)、浅間板鼻黄色軽石 (As-YP, 約 1.3~1.4 万年前*)、さらに浅間 B テフラ (As-B, 1108 年) などを検出することができた。

*1 放射性炭素 (¹⁴C) 年代。

文 献

- 新井房夫 (1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年, 群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.
 新井房夫 (1972) 斜方輝石・角閃石によるテフラの同定-テフロロジーの基礎的研究, 第四紀研究, 11, p.254-269.
 新井房夫 (1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層, 考古学ジャーナル, no.53, p.41-52.
 新井房夫 (1993) 温度一定型屈折率測定法, 日本第四紀学会編「第四紀試料分析法-研究対象別分析法」, p.138-148, 笠倉重雄 (1968) 浅間火山の地質, 地誌研報, no.45, 65p.
 池田真子・鹿野 充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫 (1995) 南九州, 始良カルデラ起源の大窪沢と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による¹⁴C年代, 第四紀研究, 34, p.377-380.
 町田 洋・新井房夫 (1976) 広域に分布する火山灰-始良 Tn 火山灰の発見とその意義-, 科学, 46, p.339-347.
 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス, 東京大学出版会, 276p.
 松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗 (1987) 始良 Tn 火山灰 (AT) の¹⁴C年代, 第四紀研究, 26, p.79-83.
 中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦 (1984) 浅間火山, 黒斑~前掛期のテフラ層序, 日本第四紀学会講演要旨集, no.14, p.69-70.
 早田 勉 (1996) 関東地方~東北地方南部の示標テフラの認特徴とくに御岳第 1 テフラより上位のテフラについて-, 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, 7, p.256-267.
 若狭 毅 (2000) 群馬の発生土器が終わるとき, かみつけの黒博物館編「人が動く・土器も動く-古墳が成立する頃の土器の交流」, p.41-43.

表 1 IV区における火山ガラス比分析結果

グリッド	試料	bw (cl)	bw (pb)	bw (br)	md	pm (sp)	pm (fb)	その他	合計
570-940	4	0	0	0	14	1	0	235	250
	6	0	0	0	12	2	0	236	250
	8	0	0	0	7	4	1	238	250
	10	0	0	0	3	2	0	245	250
	12	0	0	0	0	0	0	250	250
	14	0	0	0	0	0	1	249	250
	16	3	0	0	0	1	0	246	250
	18	2	0	0	0	0	0	248	250
	20	0	0	0	0	4	0	246	250

数字は粒子数, bw: バブル型, md: 中間型, pm: 軽石型, cl: 透明, pb: 淡褐色, br: 褐色, sp: スポンジ状, fb: 繊維束状。

表 2 IV区における屈折率測定結果

グリッド	試料	火山ガラス (n)	重鉱物	斜方輝石 (γ)	角閃石 (n ₂)
570-940	4	1.502-1.505	opx > cpx	1.708-1.712	-
570-940	16	1.499-1.501	opx > cpx, (ho)	1.701-1.711	-

屈折率測定は、温度一定型屈折率測定法(新井, 1972, 1993)による。opx: 斜方輝石, cpx: 単斜輝石, ho: 角閃石, () は量が少ないことを示す。

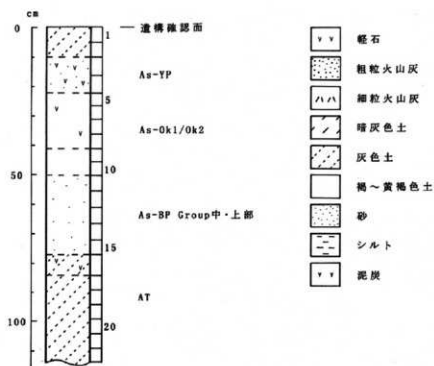


図1 塚下遺跡IV区570-940グリッドの土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

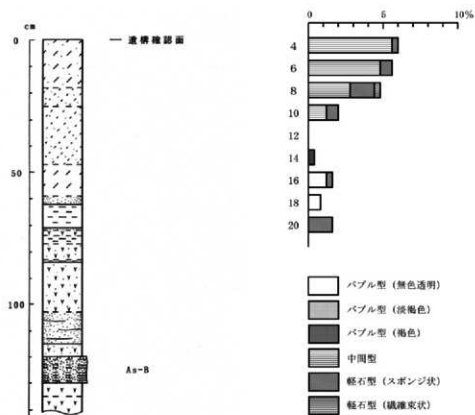


図2 塚下遺跡IV区530-920グリッドの土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

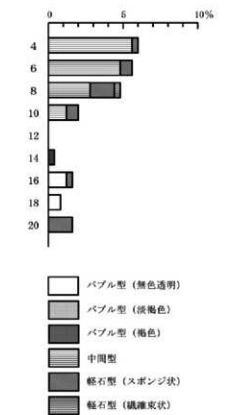


図3 IV区の火山ガラス比ダイヤグラム

II. 塚下遺跡住居跡出土炭化材の樹種同定

野村敏江 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

塚下遺跡は群馬県伊勢崎市上田町にあり、大間々扇状地のI面(桐原面)上に位置する。遺跡近辺には伏流水による遊水池が点在している。ここでは、竪穴住居跡である40号住居跡(古墳時代後期)、19号住居跡(古墳時代前期)、56号住居跡(古墳時代前期)から出土した炭化材18試料の樹種同定結果について報告する。なお、炭化材は焼失住居跡のものと考えられているが、建築材かどうかは明らかにされていない。

2. 炭化材樹種同定の方法

炭化材樹種同定を実施する炭化材を選び出す際には、材の3方向の断面(横断面・接線断面・放射断面)を作成することが可能な大きさの炭化材を選び出した。次に、走査電子顕微鏡写真を撮影するため、材の3方向の断面を作成し材組織を観察、撮影した。走査電子顕微鏡用の試料は3断面を5mm角程度の大きさに整形したあと、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し試料台を作成した。この後試料台を乾燥させ、金蒸着を施し走査電子顕微鏡(日本電子製 JSM-T100型)で撮影を行った。同定を行った試料のうち、各分類群を代表する試料については写真図版(図版1)を添付し、同定結果を記載した。なお、同定された炭化材は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に保管されている。

3. 結果と考察

各試料の樹種同定結果の一覧を表1に示した。同定を行なった炭化材18試料はコナラ属コナラ亜属コナラ節(以下コナラ節と呼ぶ)が6試料、コナラ属コナラ亜属クスギ節(以下クスギ節と呼ぶ)が12試料であった。炭化材の形状は全ての試料が破片状であった。

表1から各遺構の樹種構成を検討する。なお、時期は表1に従い、時代が新しいものから記述した。古墳時代後期にあたる40号住居跡の12試料はコナラ節が1試料、クスギ節が11試料であった。古墳時代前期にあたる19号住居跡の2試料はコナラ節であり、同じく古墳時代前期にあたる56号住居跡の4試料はコナラ節が3試料、クスギ節が1試料であった。

山田(1993)による北関東地方の樹種同定結果の集計によると、コナラ節とクスギ節は4世紀以前に使用のピークがあるが、5～7世紀にかけても引き続きその傾向がみられる。今回の同定結果でも、遺跡周辺の森林資源に対し両樹種への選択性が強く働いていたことが示唆された。なお、各住居跡のコナラ節とクスギ節の組成の違いの要因は、それぞれの試料数が少ないことと、いずれの炭化材も破片状であることから炭化材の性格が明らかでないため不明である。

次に同定された樹種の材組織について記載を行なう。

- (1) コナラ属コナラ亜属コナラ節 *Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科

図版1 1a-1c (No12)

大型の道管が年輪界で一列に並び、それ以外の部分では径を減じた壁の薄い角張った道管が配列する環孔材である。放射組織は同性の単列および集合放射組織から構成される。道管の穿孔は単穿孔であり、放射組織と道管の壁孔は櫛状となる。

コナラ節には、カシワ、ミズナラ、コナラ、ナラガシワなどが含まれる。代表的なコナラ節であるミズナ

ラの材は広葉樹材のうちでは重硬な方であり、切削などの加工はやや困難で割れが生じやすいとされる。同じく代表的なコナラ節であるコナラはミズナラよりも重硬とされ、加工しにくく乾燥で割れが生じやすいとされている。

(2) コナラ属コナラ亜属クヌギ節 *Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Cerris* ブナ科

図版1 2a-2c (No.7)

大型の道管が年輪界で並び、孔圏外の道管は径を減じた円形の小道管が放射方向に並ぶ環孔材である。放射組織は同性で単列であるが集合放射組織も伴う。道管の穿孔は単穿孔で、道管と放射組織の壁孔には柵状の壁孔が認められる。

クヌギ節にはクヌギとアベマキがあり、本州（岩手県・山形県以南）・四国・九州に分布する高さ30mの落葉高木であり、丘陵から山地に生育する。

引用文献

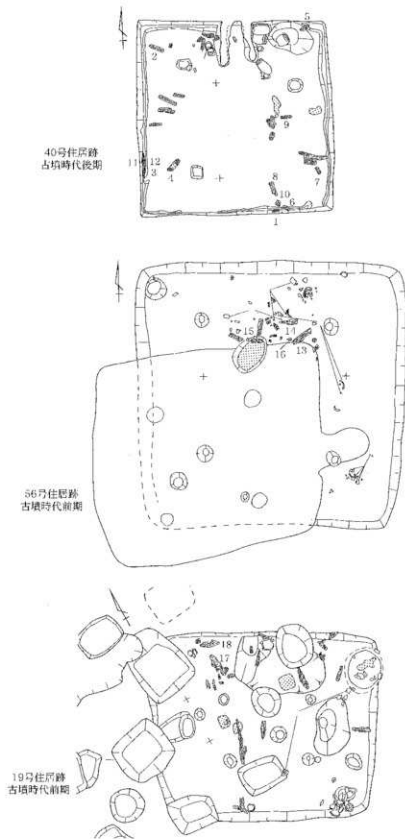
山田昌久 (1993) 日本列島における木質出土遺跡文献集成—用材からみた人間・植物関係史, 「植生史研究特別第1号」242p, 日本植生史学会。

表1 塚下遺跡出土住居跡炭化材の樹種同定結果

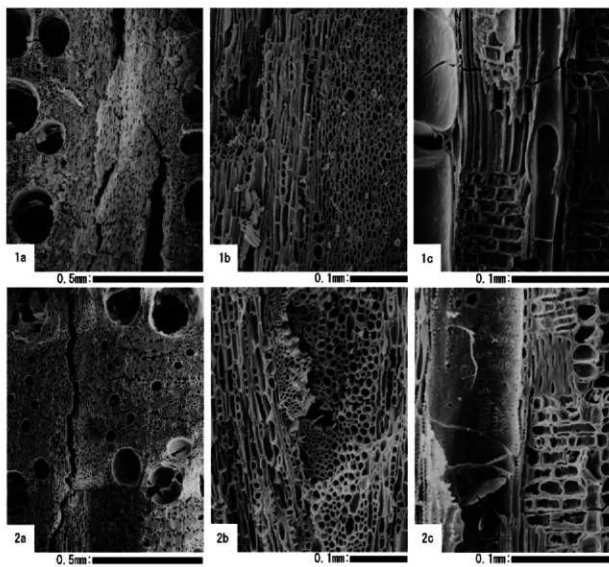
No.	遺構	番号	時期	樹種	備考
1	40号住居	6	古墳後期	クヌギ節	破片
2	40号住居	20	古墳後期	クヌギ節	破片
3	40号住居	11	古墳後期	クヌギ節	破片、半径2.3cmの破片あり
4	40号住居	15	古墳後期	クヌギ節	破片
5	40号住居	10	古墳後期	クヌギ節	破片
6	40号住居	5	古墳後期	クヌギ節	破片
7	40号住居	2	古墳後期	クヌギ節	破片
8	40号住居	3	古墳後期	コナラ節	破片
9	40号住居	9	古墳後期	クヌギ節	破片
10	40号住居	4	古墳後期	クヌギ節	破片
11	40号住居	14	古墳後期	クヌギ節	破片
12	40号住居	12	古墳後期	クヌギ節	破片

13	56号住居	1	古墳前期	コナラ節	破片
14	56号住居	3	古墳前期	クヌギ節	破片
15	56号住居	4	古墳前期	コナラ節	破片
16	56号住居	2	古墳前期	コナラ節	破片

17	19号住居	I	古墳前期	コナラ節	破片
18	19号住居	II	古墳前期	コナラ節	破片



第336図 炭化材出土住居跡



図版1 塚下遺跡住居跡出土炭化材の材組織の走査電子顕微鏡写真
1a-1c: コナラ節 (No12) 2a-2c: クスギ節 (No7)
a: 横断面 b: 接線断面 c: 放射断面

上 柳 沢 遺 跡

例 言

1. 本報告は北関東自動車道（伊勢崎～県境）地域建設に伴う本線部および県道香林西国定伊勢崎線（県側道部）建設事業に伴う事前調査で、両者にまたがる上柳沢遺跡の遺跡範囲確認調査とそれに基づいて実施された本調査の発掘調査報告書である。
2. 本遺跡の報告は、西に接する塚下遺跡の報告「塚下遺跡(2)」に併せ掲載するものである。
3. 上柳沢遺跡は群馬県伊勢崎市田部井町（旧佐波郡東村田部井）635・636他に所在する。
4. 事業主体 北関東自動車道本線部＝東日本高速自動車道路株式会社（旧日本道路公団）
県側道部＝群馬県中部県民局伊勢崎土木事務所
5. 調査主体 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
6. 調査期間 平成15年5月1日～平成15年5月31日
平成15年6月1日～平成15年6月30日（県側道）
7. 整理期間 平成17年4月1日～平成19年7月31日（塚下遺跡並行整理）
8. 調査担当 石塚久則・関口博幸・増田眞次・田村 博・飯田公規
9. 整理担当・Staff 綿貫邦男・尾田正子・岩田彰子・梅沢きく江・加藤 綾・酒井史恵・田村浩子
長谷川公子
10. 発掘調査資料・出土遺物は群馬県埋蔵文化財センターに保管してある。
11. 発掘調査および報告書作成には次の方々からご協力・ご指導をいただいた。
伊勢崎市教育委員会・旧東村教育委員会・地元関係者各位
12. 本書執筆は調査担当者の所見をもとに、綿貫が行った。
13. 本書編集 綿貫邦男

凡 例

1. 本書における遺構名称は算用数字と遺構形状や機能による習慣的名称で表す。数字は調査の進行に伴って便宜上付与してあるためいかなる順位をも示すものではなく、遺構の固有名称の一部である。
2. 本書の遺構図版中にある+印とそれに付記される5桁2種の数値は国家X・Y値を表す。
3. 本書における遺構・遺物図版にはそれぞれ縮尺比例尺を付した。
4. 本書における遺構図版中の断面水平基準は標高値でこれを表した。単位はメートル（m）である。
5. 土層および土器の色調名は「標準土色帳」農林省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修に基本的に準じた。
6. 本書で使用する浅間山・榛名山噴火による降下火砕物の呼称については以下のように表記する。
As-A : 浅間山噴出の火砕物 1738（天明三）年
As-B : 浅間山噴出の火砕物 1108（天仁元）年
Hr-FP : 榛名山二ツ岳噴出の火砕物 古墳時代
Hr-FA : 榛名山二ツ岳噴出の火砕物 古墳時代
As-C : 浅間山噴出の火砕物 古墳時代

目 次

例 言

凡 例

目 次

挿図・写真目次

報告書抄録

I. 発掘調査の概要	337	遺構と遺物	343
1. 調査に至る経緯と経過	337	(1) 古墳時代の遺構と遺物	343
2. 調査日誌抄	337	(2) 中近世の遺構と遺物	345
3. 土層堆積状況	338		
4. 試掘調査状況	339	III. おわりに	346
II. 検出された遺構と遺物	343	附章 上柳沢遺跡の火山灰分析	349
1. P5区・P6区・側道部の調査と検出された			

図版・写真目次

挿 図	写 真
第1図 上柳沢遺跡位置図	PL.1 1. 上柳沢遺跡遠景 2. 側道部全景
第2図 上柳沢遺跡試掘溝・調査区位置図および 土層堆積図	3. 3号溝 4. 1・2号溝 PL.2 1. 2号溝 2. 3号溝
第3図 上柳沢遺跡本線および側道部調査 遺構全体図	3. 6号溝 4. 7・8号溝 PL.3 1. 3号溝 2. 3号溝土層
第4図 溝跡・井戸跡・出土遺物	3. 1号井戸 4. 1号井戸土層
第5図 溝跡・土坑・出土遺物	5. 3号溝・4号溝 6. 4号溝土層
附 章 第1図・第2図 土層柱状図	PL.4 1. 1号溝 2. 4号溝 3. 5号溝
表1 テフラ検出分析結果	4. 1号土坑 5. 1号土坑土層
表2 屈折率測定結果	

I. 発掘調査の概要

1 調査に至る経緯と経過

本調査は北関東自動車道建設事業に伴う上柳沢遺跡の発掘調査を実施するにあたり、遺跡の範囲が不確定であるため、本調査に先立ち範囲確認調査を実施することとなった。この範囲確認調査は平成15年5月1日より同年6月13日まで行ったが、当調査と同時並行して隣接する遠西遺跡も確認調査を行っている。

上柳沢遺跡は、佐波郡東村の西部、JR国定駅の南約1kmに位置する。範囲確認のための調査区の設定に関しては、遺跡地内の北関東自動車道橋脚設置部分を基本的な調査区とし、西よりP1区・P2区…、としP19区まで設定した。原則として、調査区毎に幅1m×長さ10mの試掘溝をほぼ等間隔に3本ずつを設定した。調査区内に用水路や道路等が存在する場合はその状況に応じて変則的に試掘溝を設定した。調査区（橋脚部）はP1区～P19区を設定し区内試掘溝名はP1-1～P1-3とした。試掘溝総数は長・短合わせて39試掘溝になる。

上柳沢遺跡の試掘調査によって確認された遺構はP5区とP6区がかなり限定的であると判断された。当該区の遺構検出・調査に必要な範囲を拡張して本調査を行ったが、上柳沢遺跡総面積4,648㎡のうちP5区(226㎡)、P6区(242㎡)を調査の対象にした。また、県側道部分についての調査区は、本線部分範囲確認調査の結果から遺構分布範囲を確定し、遺跡範囲のうち941㎡を調査対象として設定した。

2 調査日誌抄

調査日誌には、本上柳沢遺跡の調査と並行しおよび前後して実施された遠西遺跡の範囲確認試掘調査工程も含まれている。

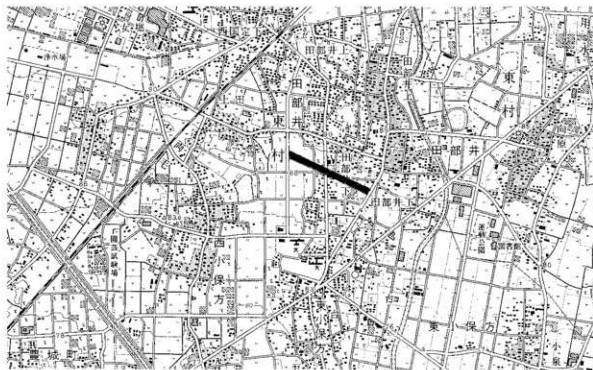
平成15年5月1日	上柳沢遺跡・遠西遺跡試掘範囲確定
5月6日	上柳沢遺跡範囲確認開始
5月14日	遠西遺跡範囲確認開始
5月19日	上柳沢遺跡範囲確認終了
5月23日	上柳沢遺跡P5区・P6区調査開始
5月27日	遠西遺跡範囲確認終了
5月28日	上柳沢遺跡P5区・P6区全景写真撮影
5月30日	上柳沢遺跡P5区・P6区調査終了
6月2日	上柳沢遺跡（県側道）調査開始
6月9日	上柳沢遺跡（県側道）全景写真撮影
6月13日	上柳沢遺跡（県側道）調査終了

1. 発掘調査の概要

3 遺跡の立地と土層堆積状況 (第1・2図)

上柳沢遺跡は、大間々扇状地形のI面(桐原面)上にある。伊勢崎市田部井町(旧佐波郡東村)の北西部に位置し、小河川に開析された谷地部と微高地状地形を横断的に含む地帯に立地する。

上柳沢遺跡地帯は昭和年代に暗渠の埋設等の土地改良の改変とその後(同じく昭和時代)に行われた圃場整備事業に因る削平と客土が顕著である。比較的土層堆積の残存状況が良好な箇所での層序は次のごとくであり、本遺跡の基本土層となる。



第1図 上柳沢遺跡位置図(国土地理院「大胡」「桐生」1/25,000)

I層：表土。

1. 現表土および攪乱土

II層：古代末～中・近世

1. As-A
2. As-B 二次堆積層
3. 暗褐色土 As-B 混土

III層：古墳時代

1. 黒褐色土 As-C 混土
2. 暗褐色土 As-C 混土 1よりAs-Cの混入が少ない
3. 黒褐色土 As-C 混土 1よりAs-Cの混入が少ない

IV層：縄文時代

1. 黒褐色土 変質した単色黒ボク土層 やや粘質
2. 黒褐色土 いわゆる単色黒ボク土層

V層：縄文～旧石器時代（低地部・水性堆積）

なお、試掘溝による調査地点の大半はI層：表土。圃場整備時の客土直下にV層（loam層）が露呈する。V層の細分層は次の様であり、互層（縞状）堆積も見られる。

1. 鈍黄褐色土 やや砂質
2. 灰黄褐色砂質土
3. 灰黄褐色土 やや粘質
4. 褐灰色砂質土
5. 褐灰色粘質土
6. 褐灰色砂質土 4より粒が細かめ
7. 褐灰色粘質土 5より粒が細かく、粘性に富む
8. 黒色粘質土 やや砂粒が混じる（9の混入）
9. 黒色砂質土 As-YP相当
10. 黒色粘質土 木片出土

VI層：旧石器

1. As-YP
2. As-OPを含む漸移 loam層
3. As-OPを含む hard loam層
4. As-BPを含む
5. As-BP・ATの中間層
6. AT相当層
7. 暗色帯

4 試掘調査状況（第2図）

P1区

P1-1～P1-3の試掘溝3ヶ所を設定した。明確な遺構はなく、遺物も出土していない。

いずれの試掘溝も近年の圃場整備事業の影響からかI層の直下がV-1層あり、陸性の堆積が見られない。また、P1-1試掘溝の西端を深さ4mほど深掘したところ、V-1～V-10層が確認された。以上のことから、当区は縄文時代以前には沼地もしくは小河川の流路であったと考えられる。なお、深掘り部分より旧石器は出土していない。

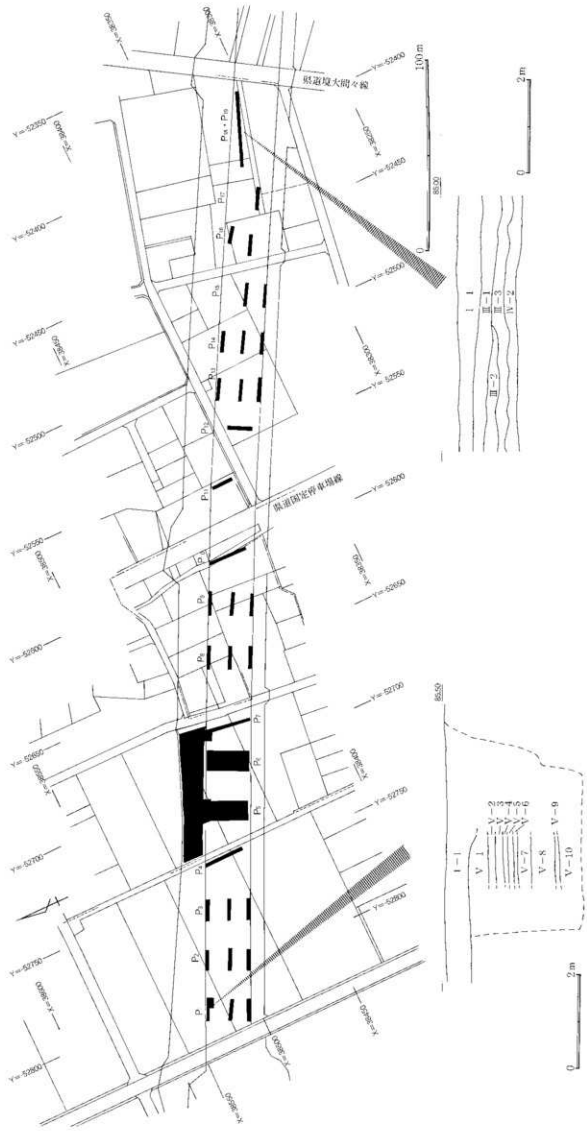
P2区

P2-1～P2-3の試掘溝3ヶ所を設定した。明確な遺構は無く、遺物も出土していない。

いずれの試掘溝も圃場整備の影響からかI-1層の直下がV-1層であり、陸性の堆積が見られない。

P3区

P3-1～P3-3の試掘溝3ヶ所を設定した。明確な遺構は無いが、P3-3試掘溝から小片ながら土器片数点が出土した。



第2図 上柳沢道跡試掘調査・調査区位置図 (1/2,000) および土層堆積図 (1/80)

4 試掘調査状況

P 3-1・P 3-2 試掘溝は圃場整備の影響からか I-1 層の直下が V-1 層であり、陸性の堆積が見られない。P 3-3 試掘溝には部分的に II-2・III-1・IV-1 層が計 30cm ほどの厚さで堆積していたが、基本的には P 2 区以西の試掘溝の状況と大きな差は無い。

P 4 区

調査区内に用水路がかかるため、変則的に P 4 試掘溝 1 か所を設定した。明確な遺構は無く、遺物も出土していない。

P 3 区以西に比べて土層堆積は良好であり、V-4～7 層の上に IV・III 層の堆積が確認された。このことから、当区より東側の台地に向かって地形の高まりつつあることが窺われる。

P 5 区

P 5-1～P 5-3 の試掘溝 3 か所を設定した。埋土に Hr-FA を含む溝 1 条が確認された。遺物は出土していない。

I-1・III-3・IV-1 層の堆積が確認された。P 4 区以西に比べて陸性の堆積が厚くなり、台地に向かう縁辺に近い部分であることが窺われる。

P 6 区

P 6-1～P 6-3 の試掘溝 3 か所を設定した。暗褐色の埋土をもつ溝 1 条（中・近世か）が確認された。遺物は出土していない。

I-1・III-3・IV-2 層の堆積が確認された。P 5 区以西に比べ陸性の堆積がより厚みを増している。

P 7 区

調査区内に現道がかかるため、変則的に P 7 試掘溝を 1 か所設定した。黒褐色の埋土をもつ溝 2 条（中近世か）が確認された。

圃場整備の影響からか、部分的に 1～2cm の厚さで IV-2 層を残すが、基本的には I-1・III-1・IV-2 層の下に VI-1～3 層となる。また、試掘溝北端を 2m ほど深掘りしたところ、VI-7 層まで確認された。なお深掘り部分からは旧石器の出土は無い。

P 8 区

P 8-1～P 8-3 の試掘溝 3 か所を設定した。明確な遺構はなく、遺物も出土していない。

ところどころに攪乱が見られるものの堆積は良好であり、I-1・III-1・IV-2・VI-1 層が確認された。

P 10 区

調査区東側が渠道に接するため、安全面を考慮して、変則的に P 10 試掘溝を設定した。明確な遺構は無く、遺物も出土していない。

ところどころに攪乱が見られるものの堆積は良好であり、I-1・IV-2・VI-1 層が確認された。

P 11 区

I、発掘調査の概要

調査区に現道がかかるため、変則的にP11試掘溝を設定した。明確な遺構は確認されず、遺物も出土していない。

堆積は良好であり、I-1・IV-2・VI-1層が確認された。

P12区

調査区に現道がかかるため、変則的にP12試掘溝を設定した。明確な遺構は無く、遺物も出土していない。堆積は良好であり、I-1・IV-2・VII-1層が確認された。

P13区

P13-1～P13-3の試掘溝3カ所を設定した。明確な遺構は確認されず、遺物の出土も無い。

ところどころに攪乱が見られるものの堆積は良好であり、I-1・II-3・IV-2・VI-1層が良好な状態で残存している。また、試掘溝北端を2mほど深掘りしたところ、VI-1～VI-7層が確認された。深掘り部分からは旧石器の出土は無い。

P14区

P14-1～P14-3の試掘溝3カ所を設定した。明確な遺構は無く、遺物も出土していない。

ところどころに攪乱が見られるものの、堆積は良好であり、I-1・II-2・IV-2・VI-1層が確認された。

P15区

調査区の一部に混凝土の、べた基礎が残り試掘溝の設定が困難なため、変則的にP15-2・P15-3の試掘溝2カ所を設定した。明確な遺構は無く、遺物も出土していない。

ところどころに攪乱が見られるものの堆積は良好であり、I-1・II-2・IV-2・VI-1層が確認された。

P16区

調査区の一部が試掘溝の設定が困難なため、変則的にP16-1・P16-2の試掘溝2カ所を設定した。明確な遺構は無く、遺物も出土していない。

ところどころに攪乱が見られるものの、堆積は良好であり、I-1・IV-2・VI-1層が確認された。

P17区

調査区の一部が試掘溝の設定が困難なため、変則的にP17-1・P17-2の試掘溝2カ所を設定した。明確な遺構は無く、遺物も出土していない。

ところどころに攪乱が見られるものの、堆積は良好であり、I-1・IV-2・VI-1層が確認された。

P18・19区

調査区の一部に未除去地がかかり試掘溝の設定が困難なため、変則的にP18・P19試掘溝を設定した。明確な遺構は無く、遺物も出土していない。

ところどころに攪乱が見られるものの堆積は良好であり、試掘溝中央部には小さな埋没谷が確認された。谷部においてはI-1・III-1・III-2・III-3・IV-2・VI-1層が良好な状態で堆積している。

II. 検出された遺構と遺物

1. P5区・P6区・側道部の調査と検出された遺構・遺物 (第3回)

上柳沢遺跡の範囲確認調査の結果、遺構が確認された地区は試掘溝設定のP5区からP6区の周辺に集中することが判明した。このため、この区域を中心に範囲を設定し遺構の広がりから合わせ、県側道部を調査した。検出した遺構は古墳時代に属すると考えられる溝跡5条、井戸跡1基。中近世の遺構として、土坑1基、溝跡4条である。いずれも圃場整備に因る削平を被っているものも多く遺構の遺存状態は、頗る不良である。出土遺物は、土師器・陶磁器類で各時代とも少量でなお小破片である。

(1) 古墳時代の遺構と遺物

2号溝跡(本線部)(第4図、PL.1・2)

P6区の南半部をほぼ東西方向に直進する。検出長12.6m、上幅50~70cm、深さ20cm足らずの浅く緩いU字形断面を呈す。埋土はAs-Cを含む黒褐色土単層で、出土遺物は無い。

3号溝(本線部~側道部)(第4図、PL.1・2・3)

側道部よりP5区をほぼ南北方向に走行するが本線部では大小の蛇行が見られる。北方側道部よりN-18°-W方で、本線部に入りN-12°-Eへ転じて再びN-20°-W方へ走る。検出延長26.4m、上幅70~130cm、深さ50cmで、断面形状U字形を呈し、上位は大きく開く。埋土中にHr-FAの一次堆積があり、その下位にAs-Cを含む黒色土がある。出土遺物は土師器壺・高坏片などである。

(1・2)は高坏で坏部底盤と脚である。(1)は器面のあれ著しい。体部との接合痕は明らかに径10.5cm。明赤褐色を呈し、粗い胎土だが細密土を上塗りか。(2)は短めの脚円柱で嵌位の磨きか。橙色を呈し、細白色粒混じる。残高6.7cm。(3)は球胴形の甕で口縁部から胴部。口縁短く「く」の字に屈する。口径17.8cm、胴部最大径は30cm弱になろう。残高14.4cm。淡黄灰色で比較的細土

6号溝跡(側道部)(第4図、PL.2)

側道部の西部をほぼ南北方向に走行し、走行方N-6°-Wを示す。検出長11.8m、上幅30~50cm、深さは極浅く5~6cmの窪み状帯である。埋土はAs-Cを混入する黒色土である。出土遺物は無い。

7号溝跡(側道部)(第4図、PL.2)

側道部の西部をほぼ南北方向に6号溝と平行して走り、北端は8号溝と合する。走行方N-7°-Wを示し、検出長5.5m、上幅40~70cm、深さ15cmで断面は開きの大きいV字形を呈する。埋土はAs-Cを混ざる黒色土である。出土遺物は無い。

8号溝(側道部)(第4図、PL.2)

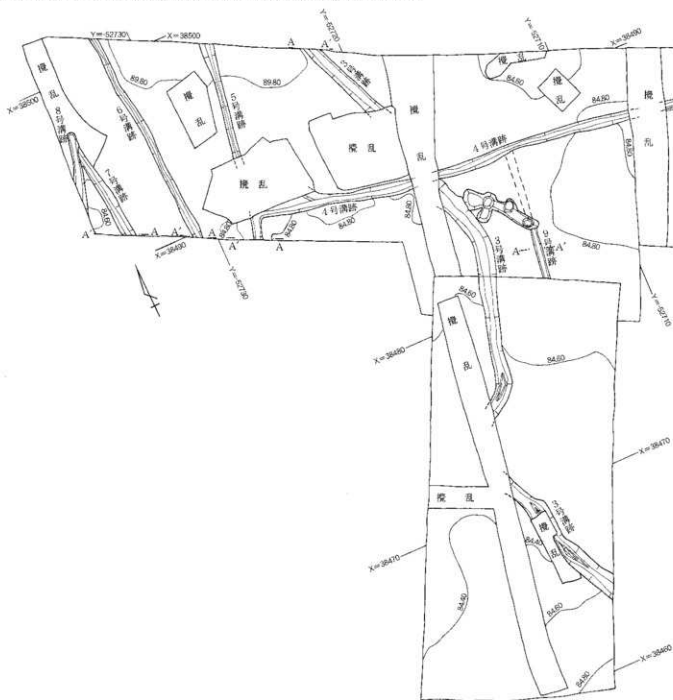
側道部の西端をほぼ南北方向に走行し、北端で7号溝と合する。走行方はN-18°-Eを示す。検出長4.5m、上幅40~60cm、深さ20cmで断面形状は緩いU字形を呈する。埋土はAs-Cを混入する黒色粘質土である。出土

II. 検出された遺構と遺物

遺物は無い。

1号井戸跡（本線部）（第4図、PL.3）

P6区の北端に位置し、中近世の1号土坑と重なる。平面形状は略円形を呈する。上縁は径1.75mで大きく開き緩い壁面をなす。検出面より30cmほど下位で径90cmに窄まりU字形に落ち込む。深さ90cm足らずで井戸跡にしては浅い。埋土中に Hr-FA の一次堆積があり、3号溝とほぼ同時期になろう。出土遺物には土師器甕・高坏小片などがある。湧水を示すような壁面の乱れは観察されていない。

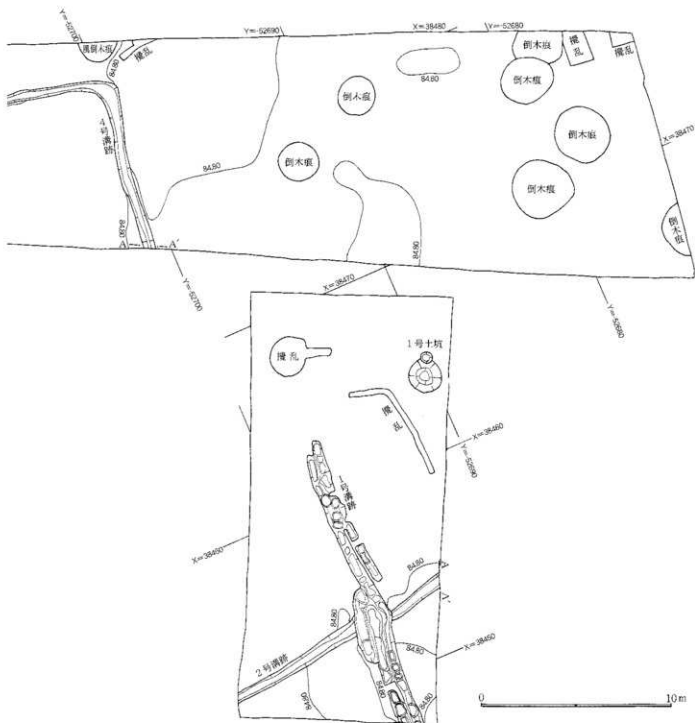


第3図 上柳沢遺跡本線および側道部調査遺構全体図

(2) 中近世の遺構と遺物

1号溝(本線)(PL.1・4)

P6区をほぼ南北に走る。削平により溝縁部は痕跡をとどめるほどである。底面は掘形による大小の凹凸が平行して連続するところから、少なくとも2度の掘り返しまたは改変が行われている。遺物は陶器を含む微細片が極少出土する。



Ⅲ. おわりに

4・5・9号溝（第5図、PL.3・4）

側道部のほぼ中央に、3条の溝が連結する。その形状から用水路と考えられる。

4号溝は本線部に延びる南北方向N-8°-Eの走行の後、直に屈して西方向にN-83°-Wで走行し5号溝に合する。検出総長36.5m、上幅40~80cm、深さ15cmで断面形状U字形を呈す。

5号溝は4号溝直交結合し、南北方向N-10°-Eで走行する。検出長10.6m、上幅70~100cm、深さ25cmで緩いU字形を呈す。埋土は暗褐色土である。

9号溝は4号溝の東西走部分のほぼ中間に位置し、4号溝より南側に延びる。結合部は不鮮明で痕跡程度のため5号溝と同じように直交して北方にもおよぶかは確認できない。検出長7.0m、上幅40cm、深さは辛うじて緑線を知るにすぎない。

遺物は、4号溝より灯明皿など数点の陶磁器類が出土している。(1)は肥前波佐見系磁器小碗で径3.5cmの薄身高台で腰部は厚め。高台脇に3条の円圈、体部に不明紋。(2)は灯明皿。やや深めで口縁より内縁がやや高い。口径11.6cm、内縁径6.4cm、残高2.5cm。内縁にくり抜き孔の芯出し、内面黒褐色の無光沢の施釉で外面は無釉。胎土は明橙色で軟調ざらつく感じ。静岡志戸呂焼きか。(3)は瀬戸・美濃製。寸胴の小壺である。口の上縁は平坦で断面矩形。胴部の上位に2条の凹線巡る。口径24.6cm、残高5.5cm。内外面くすみ色の鉄釉。胎土は淡黄灰色で粗め。

1号土坑（第5図、PL.4）

P6区の北端に位置し、古墳時代1号井戸跡と重なる。形状は略円形を呈し、上径60cm、下径40cm、深さ35cmの箱形断面形状をなす。埋土はAs・B混土で出土遺物は無い。

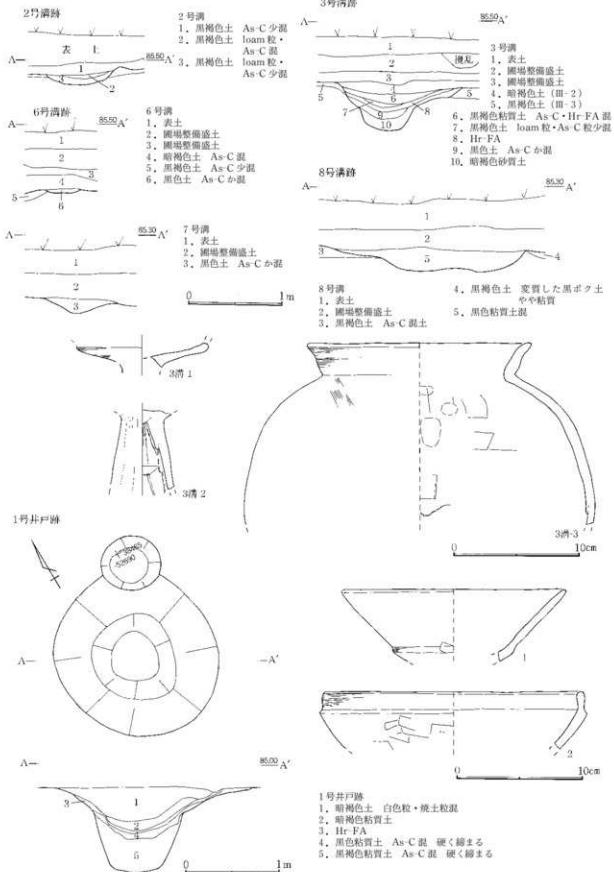
補遺 遺跡内表土中より縄文時代石鏃がある。形状は凹基無茎形で石材はチャート。長2.1cm、基部幅1.6cm、厚さ0.3cm、重0.78g（第5図、PL.4）

Ⅲ. おわりに

上柳沢遺跡は大半が低地様の谷地地形で、その基部に近い地勢を思わせるものである。側道部東側には時期は不明ながらかなりの倒木痕が認められ、台地の縁辺が間近であることを示している。また、本線部のP6区北東隅に検出された井戸跡の存在もこのことを裏付ける。

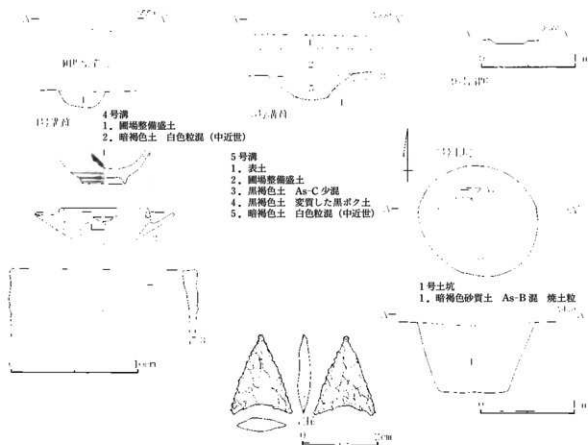
上柳沢遺跡の性格としては、西方に続く低台地は塚下遺跡として古墳時代と奈良・平安時代の集落であることから、本遺跡ではその地勢からしても水田跡などの生産関連遺構の発見が予想された。しかし、昭和期に行われた圃場整備の土地改変は深い削平を伴っており、多くの遺構を消滅せしめた可能性が高い。そのような状況の中でも、古墳時代に属し、水路的な性格と考えられる2号・3号・6号~8号溝などの存在は、上柳沢遺跡に対して抱いていた生産遺跡という我々の予想をまったく裏切るものでは無かろう。

1 P5区・P6区・側道部の調査と検出された遺構・遺物
3号溝跡



第4図 溝跡・井戸跡・出土遺物

III. おわりに



第5図 溝跡・土坑・出土遺物

附章 上柳沢遺跡の火山灰分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

関東地方北西部に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、赤城、榛名、浅間、八ヶ岳など北関東地方とその周辺の火山、中部地方や中国地方さらには九州地方などの火山に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、層位や年代が不明な土層が検出された東村上柳沢遺跡においても、地質調査を行い土層層序を記載するとともに、テフラ検出分析や屈折率測定を行って指標テフラの層位を把握し、土層の層位や年代などに関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、P 1-1 トレンチおよびP 5-1 トレンチである。

2. 土層層序

(1) P 1-1 トレンチ

P 1-1 トレンチでは、下位より暗灰泥層（層厚 7 cm 以上、V-10 層）、灰色砂層（層厚 9 cm、V-9 層）、暗灰色泥層（層厚 10 cm）、灰色砂層（層厚 1 cm）、暗灰色泥層（層厚 8 cm）、灰色砂層（層厚 5 cm）、暗灰色泥層（層厚 7 cm）、灰色砂層（層厚 0.3 cm）、暗灰色泥層（層厚 16 cm、以上 V-8 層）、灰色シルト層（層厚 9 cm）、灰色砂層（層厚 9 cm）、砂混じり灰色シルト層（層厚 12 cm、以上 V-7 層）、灰色砂層（層厚 9 cm、V-6 層）、砂混じり灰色シルト層（層厚 9 cm、V-5 層）、灰色砂層（層厚 10 cm、V-4 層）、砂混じり灰色シルト層（層厚 15 cm、V-3 層）、シルト混じり灰色砂層（層厚 15 cm、V-2 層）、褐色砂層（層厚 29 cm）、暗灰褐色土（層厚 13 cm、以上 V-1 層）、黒灰褐色土（層厚 21 cm）、暗灰褐色土（層厚 23 cm、以上 I-1 層）が認められた（図 1）。

(2) P 5-1 トレンチ

P 5-1 トレンチでは、溝状遺構が認められた。溝状遺構の覆土は、下位より暗灰色土（層厚 12 cm）、黒色土（層厚 5 cm）、白色軽石混じり黄色砂質細粒火山灰層（層厚 2 cm、軽石の最大径 6 mm）、暗灰褐色砂質土（層厚 5 cm）、砂混じり暗灰色土（層厚 22 cm）、暗灰褐色土（層厚 22 cm）、暗灰褐色作土（層厚 24 cm）からなる（図 2）。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

P 1-1 トレンチにおいて、基本的に厚さ 5 cm ごと設定採取された試料のうちの 25 点、P 5-1 トレンチにおいてテフラ層から採取された試料 1 点の合計 26 点を対象にテフラ検出分析を行った。分析の手順は、次の通りである。

- 1) 試料 10 g を秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80°C で恒温乾燥。

4) 実体顕微鏡下で、テフラ粒子の量や特徴を観察。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。P1-1トレンチでは、試料45、試料43、試料3、試料1に、軽石が認められた。試料45および試料43に含まれる軽石は白色(最大径3.1mm)、試料3および試料1に含まれる軽石は灰白色(最大径2.8mm)を呈する。いずれの班品にも、斜方輝石や単斜輝石が認められる。後者は、スポンジ状に比較的良く発泡している。

火山ガラスは、いずれの試料にも含まれている。その中では、試料45から試料1にかけて、また試料7や試料1に比較的多くの火山ガラスが含まれている。火山ガラスとしては、試料45および試料43において軽石の細粒物の白色の軽石型、試料41から試料19にかけては無色透明の軽石型やバブル型、試料17から試料5にかけては無色透明や白色の軽石型、さらに試料3や試料1には軽石の細粒物の灰白色の軽石型ガラスが含まれている。

P5-1トレンチの試料1には、発泡がさほど良くない白色の軽石(最大径7.9mm)や、その細粒物である白色の軽石型ガラスが多く含まれている。軽石の班品としては、斜方輝石や単斜輝石が認められる。

4. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

テフラ粒子の起源を明らかにするために、P1-1トレンチの試料43および試料37の2試料を対象に、日本列島とその周辺のテフラカATALOGの作成に利用された温度一定屈折率測定法(新井, 1972, 1993)により、テフラ粒子の屈折率測定が行われた。

(2) 測定結果

屈折率測定の結果を表2に示す。P1-1トレンチの試料43に含まれる火山ガラスの屈折率(n)は、1.502-1.504である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石の屈折率(γ)は、1.707-1.711である。一方、試料37に含まれる火山ガラスの屈折率(n)は、1.500-1.504(modal range: 1.502-1.504)である。重鉱物としては、斜方輝石、角閃石、単斜輝石がごく少量含まれている。斜方輝石の屈折率(γ)は、1.707-1.711である。

5. 考察

屈折率測定の対象となった試料のうち、P1-1トレンチの試料43や試料37に多く含まれるテフラ粒子は、火山ガラスの形態や色調、屈折率、さらに斜方輝石や単斜輝石が含まれていること、斜方輝石の屈折率などから、約1.3~1.4万年前¹⁾に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石(As-YP, 新井, 1962, 町田・新井, 1992)に由来する可能性が非常に高い。両試料を比較すると、下位の試料43の方が純度が高く、この試料に近い層準にAs-YPの堆積層準がある可能性が指摘されよう。試料45に含まれるテフラ粒子についても、試料43のそれと同じ特徴をもつことから、As-YPに由来すると考えられる。

また試料3や試料1に含まれる灰白色軽石については、その特徴から、3世紀終末~4世紀初頭に浅間火山から噴出した浅間C軽石(As-C, 荒牧, 1968, 新井, 1979, 友廣, 1988, 若狹, 2000)に由来すると考えられる。なお、これらの試料の間の層準から検出されるテフラ粒子のうち、無色透明のバブル型ガラスの多

くについては、その層位や特徴から約2.4~2.5万年前*1に南九州の始良カルデラから噴出した始良 Tn 火山灰 (AT, 町田・新井, 1976, 1992, 松本ほか, 1987, 村山, 1993, 池田ほか, 1995) に由来すると思われる。以上のことから、P 1-1 トレンチにおいて観察された作土を除く土層については、少なくとも As-YP より上位にある可能性が高いと考えられる。より詳細な堆積年代については、放射性炭素 (¹⁴C) 年代測定などが実施されると良い。

P 5-1 トレンチの試料 1 のテフラ層については、層相、軽石の岩相、珙品鉱物の組合せなどから、6 世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名ニツ岳渋川テフラ (Hr-FA, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992) に同定される。以上のことから、本地点の溝状遺構の層位については、Hr-FA より下位にあると考えられる。

6. まとめ

上柳沢遺跡において、地質調査、テフラ検出分析、屈折率測定を行った。その結果、下位より始良 Tn 火山灰 (AT, 約2.4~2.5万年前*)、浅間板鼻黄色軽石 (As-YP, 約1.3~1.4万年前*)、浅間 C 軽石 (As-C, 3 世紀終末~4 世紀初頭)、榛名ニツ岳渋川テフラ (Hr-FA, 6 世紀初頭) などのテフラ層やテフラ粒子が検出された。P 1-1 トレンチの作土を除く土層については、As-YP より上位にある可能性が高いと考えられる。また、P 5-1 トレンチで検出された溝状遺構の層位については、Hr-FA より下位にあると考えられる。

*1 放射性炭素 (¹⁴C) 年代。

文 献

- 新井房夫 (1972) 斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロロジーの基礎的研究。第四紀研究, 11, p.254-269.
- 新井房夫 (1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル, no.53, p.41-52.
- 新井房夫 (1993) 温度一定型屈折率測定法。日本第四紀学会編「第四紀試料分析法—研究対象別分析法」, p.138-148.
- 荒牧重雄 (1968) 浅間火山の地質。地質研専報, no.45, 65p.
- 池田晃子・奥野 充・中村俊夫・小林哲夫 (1995) 南九州, 始良カルデラ 起源の大規模下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器¹⁴C年代。第四紀研究, 34, p.377-379.
- 町田 洋・新井房夫 (1976) 広域に分布する火山灰—始良 Tn 火山灰の発見とその意義—。科学, 46, p.339-347.
- 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス。東京大学出版会, 276p.
- 松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗 (1987) 始良 Tn 火山灰 (AT) の¹⁴C年代。第四紀研究, 26, p.79-83.
- 村山直史・松本英二・中村俊夫・岡村 真・安田尚登・平 朝彦 (1993) 四国沖ベシトンコア試料を用いた AT 火山灰噴出年代の再検討—タンデム加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の¹⁴C年代。地質雑報, 99, p.787-798.
- 坂口 一 (1986) 榛名ニツ岳起源 FA・FP 層下の土師器と須恵器。群馬県教育委員会編「荒砥平原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119.
- 早田 勉 (1989) 6 世紀における榛名火山の 2 回の噴火とその災害。第四紀研究, 27, p.297-312.
- 友廣哲也 (1988) 古式土師器出現期の榛相と浅間山 C 軽石。群馬県埋蔵文化財調査事業団編「群馬の考古学」, p.325-336.
- 若狭 徹 (2006) 群馬の発生土器が終わるとき、かみつけの里博物館編「人が動く・土器も動く—古墳が成立する頃の土器の交流」, p.41-43.

表1 テフラ検出分析結果

地点	試料	軽石・スコリア			火山ガラス		
		量	色調	最大径	量	形態	色調
P 1-1 トレンチ	1	++	灰白	2.8	++	pm	灰白
	3	+	灰白	1.4	+	pm	灰白
	5	-	-	-	+	pm	灰白, 白
	7	-	-	-	++	pm	透明, 白
	9	-	-	-	+	pm	透明, 白
	11	-	-	-	+	pm	透明, 白
	13	-	-	-	+	pm	透明, 白
	15	-	-	-	+	pm	透明
	17	-	-	-	+	pm	透明, 白
	19	-	-	-	+++	pm > bw	透明
	21	-	-	-	++	pm > bw	透明
	23	-	-	-	+++	pm > bw	透明
	25	-	-	-	++	pm > bw	透明
	27	-	-	-	+++	pm > bw	透明
	29	-	-	-	++	pm > bw	透明
	31	-	-	-	+++	pm > bw	透明
	33	-	-	-	+++	pm, bw	透明
	35	-	-	-	++	bw, pm	透明
	36	-	-	-	+++	pm, bw	透明
	37	-	-	-	+++	pm, bw	透明
39	-	-	-	++	pm, bw	透明	
40	-	-	-	+++	pm > bw	透明	
41	-	-	-	++	pm, bw	透明	
43	+++	白	3.1	+++	pm	白	
45	+	白	2.1	++	pm	白	
P 5-1 トレンチ	1	+++	白	7.9	+++	pm	白

++++: とくに多い, +++: 多い, ++: 中程度, +: 少ない, -: 認められない, 最大径の単位は, mm.

表2 屈折率測定結果

地点	試料	火山ガラス(n)	重鉱物	斜方輝石(γ)	角閃石(n_2)
P 1-1 トレンチ	37	1.500-1.504 (1.502-1.504)	(opx, ho, cpx)	1.707-1.711	-
P 1-1 トレンチ	43	1.502-1.504	opx > cpx	1.707-1.711	-

屈折率の測定は, 温度一定型測定法 (新井, 1972, 1993) による, () は, modal range を示す, opx: 斜方輝石, cpx: 単斜輝石, ho: 角閃石, 重鉱物の () は, 量が少ないことを示す.

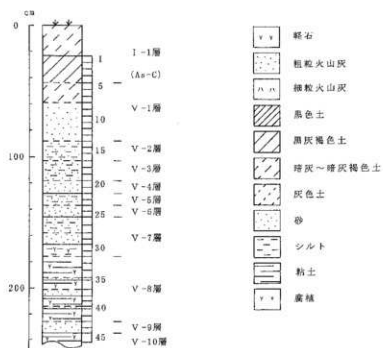


図1 P 1-1トレンチの土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

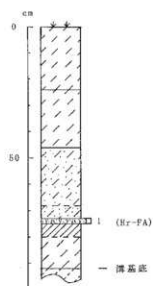


図2 P 5-1トレンチの土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

上柳沢遺跡報告書抄録

書名ふりがな	かみやなぎさわいせき
書名	上柳沢遺跡
副書名	北関東自動車道（伊勢崎～県境）地域埋蔵文化財発掘調査並びに（一）香林西国定伊勢崎線地方特定道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	第414集
編著者名	綿貫邦男
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20071201
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784-2
遺跡名ふりがな	かみやなぎさわいせき
遺跡名	上柳沢遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんいせきさしかみだまち
遺跡所在地	群馬県伊勢崎市上田町
市町村コード	10-204
遺跡番号	21005-00763
北緯(日本測地系)	36°20'44"
東経(日本測地系)	139°14'49"
北緯(世界測地系)	36°20'55"
東経(世界測地系)	139°14'37"
調査期間	20030501-20030613
調査面積	1,419m ²
調査原因	地方特定道路整備事業
種別	生産跡
主な時代	古墳/近世
遺跡概要	古墳前・中期井戸+溝/近世溝
特記事項	近世静岡志戸呂焼き灯明皿

塚下遺跡(2)

写真図版



塚下遺跡全景



3号・14号・15号住居跡 (西から)



4号住居跡 (西から)



10号住居跡 (西から)



10号住居跡1号・2号竈 (西から)



12号住居跡 (西から)



13号住居跡 (西から)



34号住居跡 (西から)



34号住居跡遺物出土状況 (西から)



35号住居跡 (西から)



36号住居跡 (西から)



37号住居跡 (西から)



37号住居跡i遺物出土状況 (西から)



41号住居跡 (西から)



41号住居跡1竈 (西から)



42号住居跡 (西から)



42号住居跡竈遺物出土状況 (西から)



44号住居跡 (西から)



44号住居跡貯蔵穴 (西から)



45号住居跡 (北から)



45号住居跡貯蔵穴 (東から)



47号住居跡 (西から)



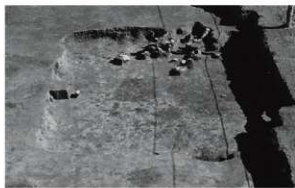
47号住居跡竈 (西から)



48号住居跡 (西から)



48号住居跡竈遺物出土状況 (西から)



49号住居跡 (西から)



49号住居跡竈遺物出土状況 (西から)



53号住居跡 (南西から)



53号住居跡竈 (西から)



54号住居跡 (西から)



54号住居跡竈 (西から)



55号住居跡 (西から)



55号・56号住居跡 (西から)



57号住居跡 (西から)



57号住居跡掘形 (西から)



58号住居跡掘形 (西から)



58号住居跡床下土坑



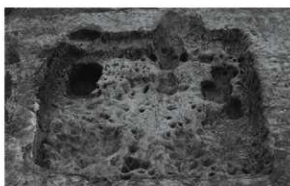
61号住居跡 (西から)



62号住居跡 (西から)



64号住居跡 (西から)



64号住居跡掘形 (西から)



67号住居跡 (西から)



67号住居跡竈遺物出土状況 (西から)



68号住居跡 (西から)



71号住居跡 (西から)



75号住居跡 (西から)



75号住居跡竈遺物出土状況 (西から)



77号住居跡 (西から)



77号住居跡遺物出土状況 (西から)



78号住居跡 (西から)



78号住居跡遺物出土状況 (南西から)



85号住居跡 (西から)



85号住居跡遺物出土状況 (西から)



86号住居跡 (西から)



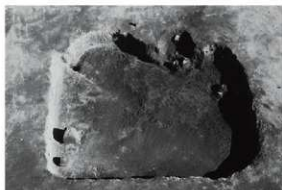
86号住居跡遺物出土状況 (西から)



87号住居跡 (西から)



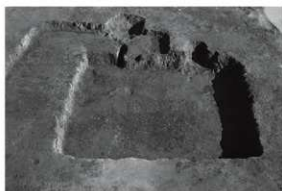
87号住居跡遺物出土状況 (南から)



88号住居跡 (西から)



88号住居跡竈遺物出土状況 (西から)



90号住居跡 (西から)



90号住居跡竈遺物出土状況 (西から)



91号住居跡 (西から)



91号住居跡竈遺物出土状況 (西から)



94号住居跡 (西から)



94号住居跡竈遺物出土状況 (西から)



99号住居跡 (西から)



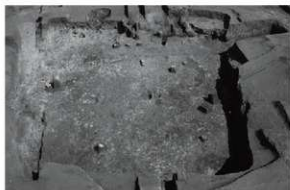
123号住居跡 (西から)



126号住居跡掘形 (西から)



128号住居跡掘形 (西から)



135号・137号住居跡 (西から)



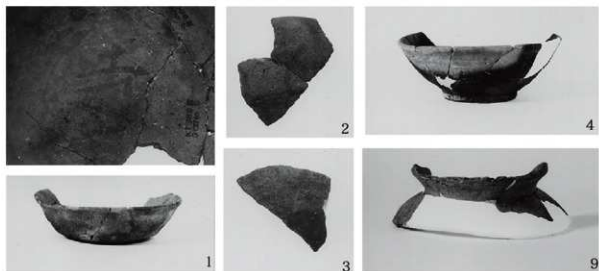
136号住居跡 (西から)



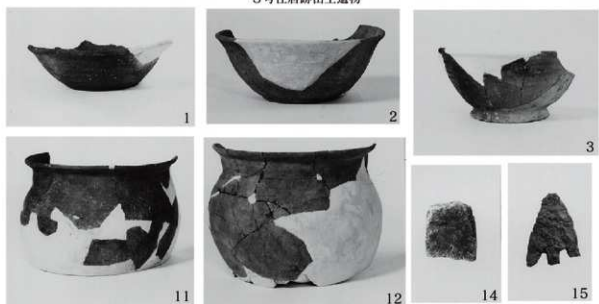
調査風景



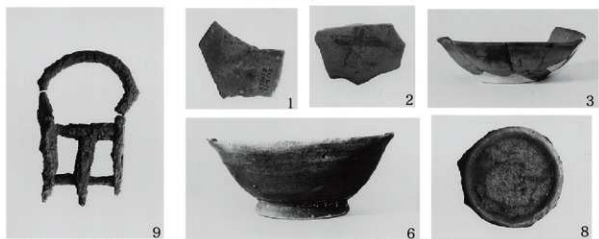
調査風景



3号住居跡出土遺物



4号住居跡出土遺物



10号住居跡出土遺物

12号住居跡出土遺物(1)



12号住居跡出土遺物(2)



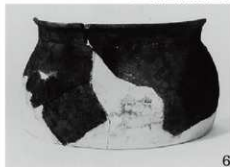
13号住居跡出土遺物



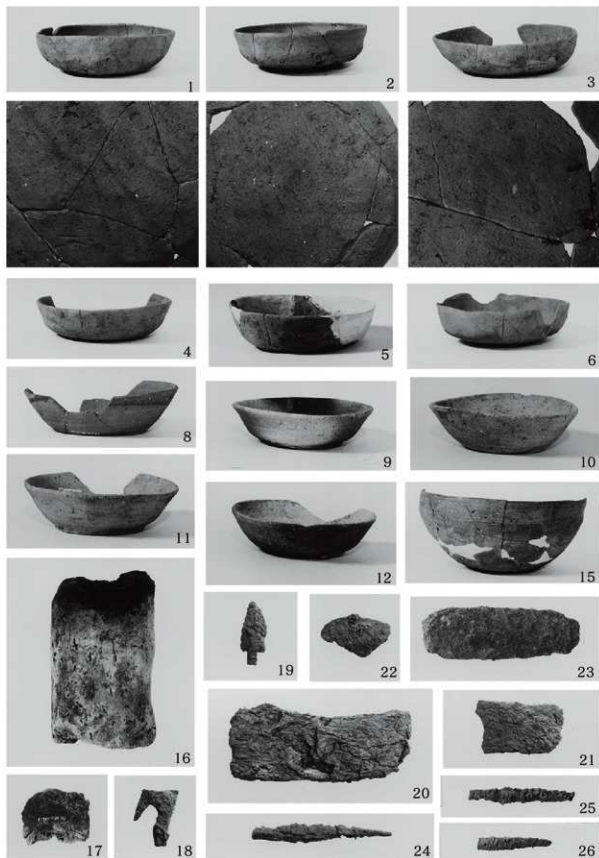
17号住居跡出土遺物



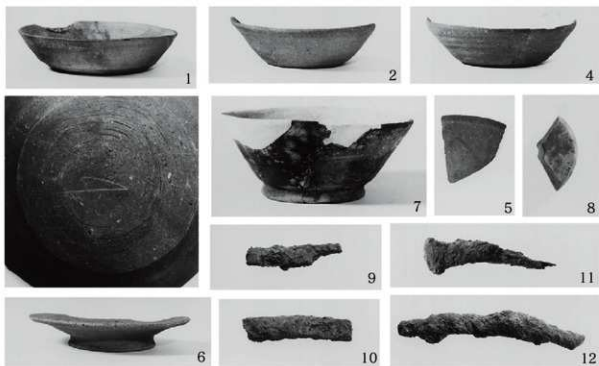
34号住居跡出土遺物



35号住居跡出土遺物



36号住居跡出土物



37号住居跡出土遺物



41号住居跡出土遺物



42号住居跡出土遺物



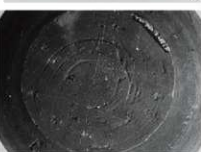
44号住居跡出土遺物



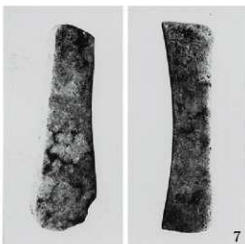
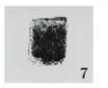
45号住居跡出土遺物(1)



45号住居跡出土遺物(2)



47号住居跡出土遺物



48号住居跡出土遺物



49号住居跡出土遺物(1)



3

49号住居跡出土遺物(2)



3



4



5



6



8



7

53号住居跡出土遺物



1



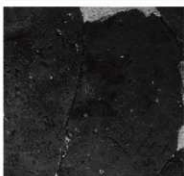
3



5

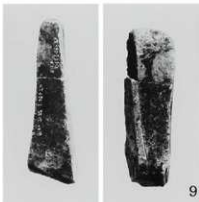


4



10

54号住居跡出土遺物



9



2



4



10

55号住居跡出土遺物(1)



5



4

55号住居跡出土遺物(2)



1



3



13



2



7



8



10

57号住居跡出土遺物(1)



11



12

57号住居跡出土遺物(2)



1



3



7



2



4

58号住居跡出土遺物



1



10



1



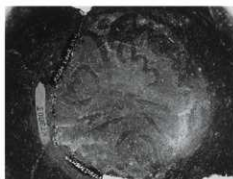
2

61号住居跡出土遺物

62号住居跡出土遺物



67号住居跡出土遺物(1)



67号住居跡出土遺物(2)

71号住居跡出土遺物

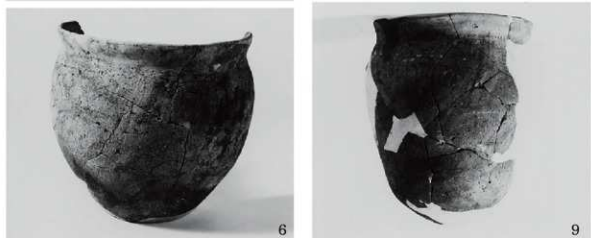
75号住居跡出土遺物



78号住居跡出土遺物



85号住居跡出土遺物



87号住居跡出土遺物(1)



87号住居跡出土遺物(2)



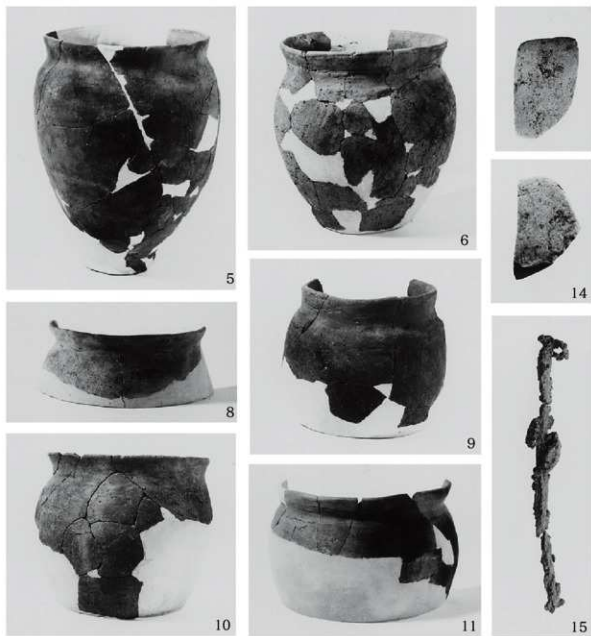
90号住居跡出土遺物



91号住居跡出土遺物



94号住居跡出土遺物(1)



94号住居跡出土遺物(2)



99号住居跡出土遺物



123 号住居跡出土遺物



3



4



128 号住居跡出土遺物



7



8



2



10



4



17



11



15



16



18

135 号住居跡出土遺物



5

136 号住居跡出土遺物



1号住居跡 (西から)



1号住居跡遺物出土状況 (西から)



1号住居跡貯蔵穴遺物出土状況 (東から)



1号住居跡竈



5号住居跡 (北から)



5号住居跡竈 (北から)



16号住居跡 (南から)



16号住居跡竈掘形 (南から)



18号住居跡 (西から)



18号住居跡竈 (西から)



18号住居跡貯蔵穴 (西から)



18号住居跡貯蔵穴遺物出土状況 (西から)



22号住居跡 (西から)



22号住居跡竈 (西から)



22号住居跡貯蔵穴 (北から)



22号住居跡貯蔵穴遺物出土状況 (西から)



24号住居跡 (北から)



24号住居跡貯蔵穴 (西から)



24号住居跡炉跡 (南から)



27号住居跡 (東から)



29号住居跡 (南西から)



29号住居跡貯蔵穴 (南西から)



33号住居跡 (西から)



33号住居跡遺物出土状況 (南から)



40号住居跡 (南から)



40号住居跡遺物出土状況 (南から)



40号住居跡遺物出土状況 (南から)



40号住居跡貯蔵穴 (南から)



46号住居跡 (西から)



46号住居跡遺物出土状況 (西から)



46号住居跡竈 (西から)



46号住居跡竈 (西から)



50号住居跡（西から）



50号住居跡遺物出土状況（北から）



50号住居跡床面遺物出土状況（西から）



50号住居跡周辺遺物出土状況



50号住居跡遺物出土状況（南から）



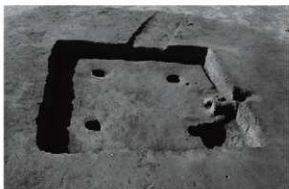
50号住居跡遺物出土状況（東から）



72号住居跡（南から）



72号住居跡遺物出土状況（南から）



80号住居跡 (東から)



80号住居跡 (南から)



80号住居跡竈 (南から)



80号住居跡竈 (南から)



80号住居跡竈 (南から)



80号住居跡竈 (南から)



80号住居跡竈 (西から)



80号住居跡貯蔵穴遺物出土状況 (東から)



2号住居跡 (北から)



2号住居跡遺物出土状況 (北から)



6号住居跡 (北から)



8号住居跡 (南から)



9号住居跡 (西から)



9号住居跡貯藏穴 (北から)



19号住居跡 (西から)



19号住居跡貯藏穴遺物出土状況 (東から)



21号住居跡（北から）



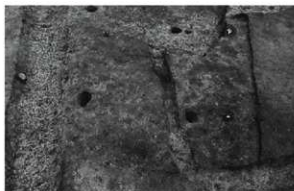
21号住居跡遺物出土状況（東から）



23号住居跡（北から）



25号住居跡（西から）



26号住居跡（西から）



26号住居跡貯蔵穴遺物出土状況（北から）



28号住居跡掘形（南から）



30号住居跡（南から）



38号住居跡 (南から)



38号住居跡炉跡 (東から)



38号住居跡床下土坑 (北東角)



51号住居跡 (西から)



51号住居跡炉跡1・炉跡2 (東から)



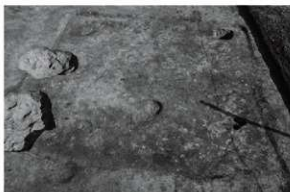
51号住居跡炉跡4 (東から)



56号住居跡掘形 (北から)



56号住居跡炉跡 (南から)



60号住居跡 (西から)



63号住居跡 (西から)



63号住居跡炉跡 (西から)



63号住居跡遺物出土状況 (北から)



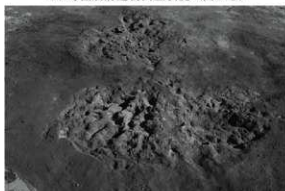
66号住居跡 (西から)



66号住居跡遺物出土状況 (西から)



76号住居跡 (西から)



76号住居跡炉跡 (西から)



79号住居跡 (西から)



79号住居跡炉跡 (西から)



79号住居跡遺物出土状況 (西から)



79号住居跡遺物出土状況 (西から)



83号住居跡 (北から)



83号住居跡炉跡 (西から)



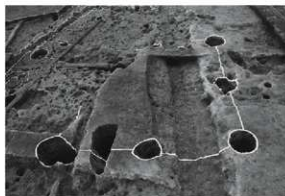
84号住居跡 (北から)



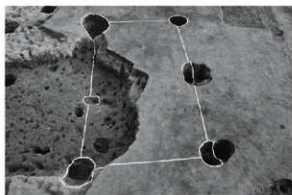
127号住居跡弧形 (南から)



1号掘立柱建物跡 (西から)



2号掘立柱建物跡 (東から)



3号掘立柱建物跡 (西から)



4号掘立柱建物跡 (北から)



5号掘立柱建物跡 (東から)



6号掘立柱建物跡 (南から)



3号井戸跡 (南から)



4号井戸跡 (北から)



1号・2号溝跡土層断面



3号溝跡土層断面 (南から)



4号溝跡土層断面 (南から)



5号溝跡 (南から)



8号溝跡 (南から)



10号溝跡土層断面 (南から)



9号溝跡 (南から)



11号溝跡 (西から)



13号溝跡 (南から)



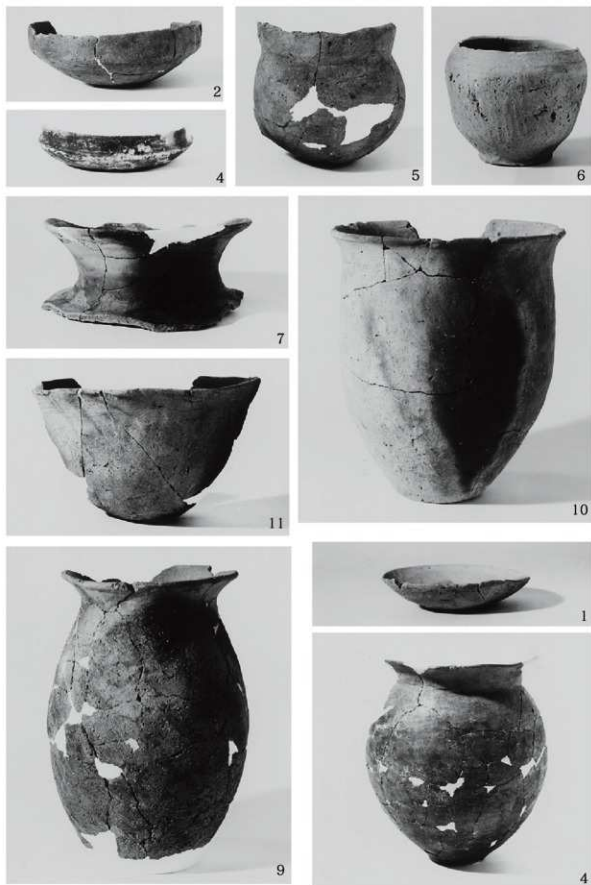
16号溝跡 (南から)



13号溝跡遺物出土状況 (南から)



16号溝跡土層断面 (西から)



1号住居跡出土遺物

5号住居跡出土遺物



15号住居跡出土遺物



16号住居跡出土遺物



18号住居跡出土遺物 (I)





18号住居跡出土遺物(3)



18号住居跡出土遺物(4)



18号住居跡出土遺物(5)





50



51



52



54



55



56

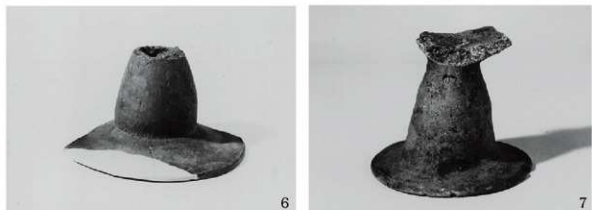
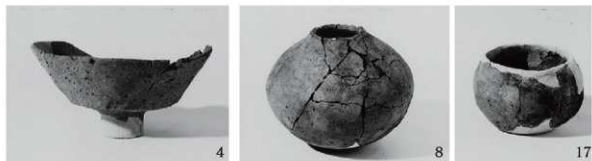


57



58

18号住居跡出土遺物(7)



20号住居跡出土遺物



22号住居跡出土遺物(1)



7



8

22号住居跡出土遺物(2)



3



1



2



4



6



10

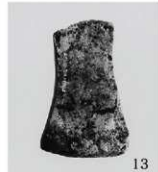
24号住居跡出土遺物(1)



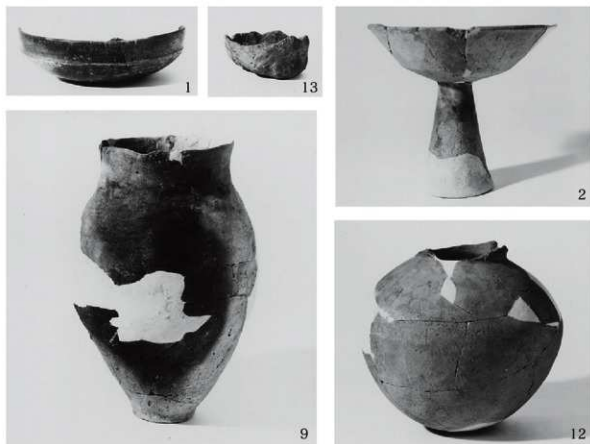
24号住居跡出土遺物(2)



27号住居跡出土遺物



29号住居跡出土遺物



33号住居跡出土遺物



40号住居跡出土遺物(1)



6



8



10



9

40号住居跡出土遺物(2)



1



3



4



5

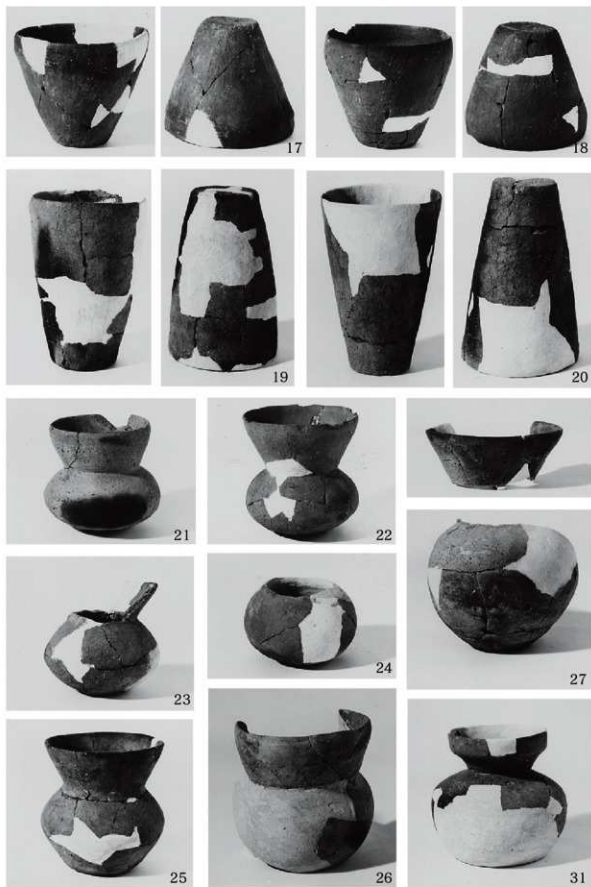
46号住居跡出土遺物(1)



46号住居跡出土遺物(2)



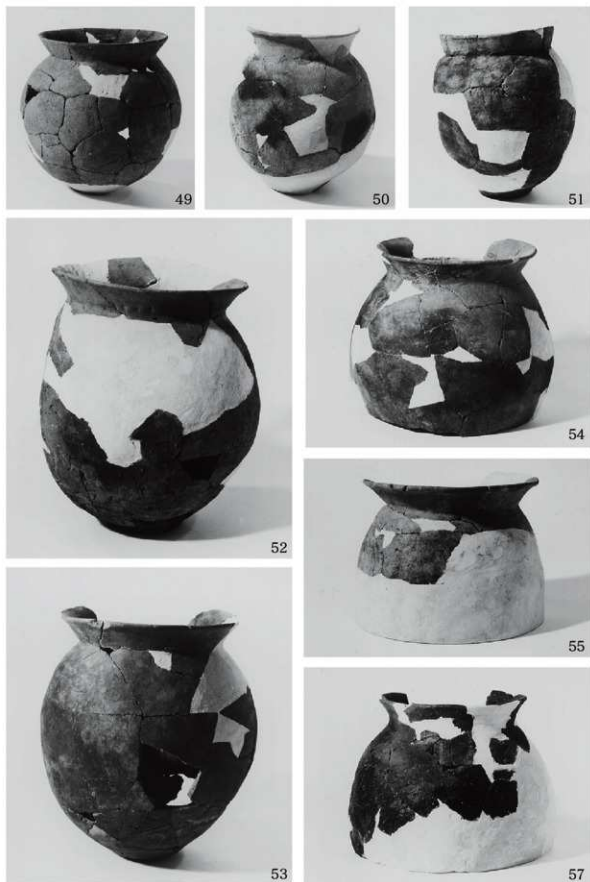
50号住居跡出土遺物(1)



50号住居跡出土遺物(2)



50号住居跡出土遺物(3)



50号住居跡出土遺物(4)



50号住居跡出土遺物(5)



72号住居跡出土遺物

80号住居跡出土遺物(1)



80号住居跡出土遺物(2)



15



16

80号住居跡出土遺物(3)



4

2号住居跡出土遺物



1

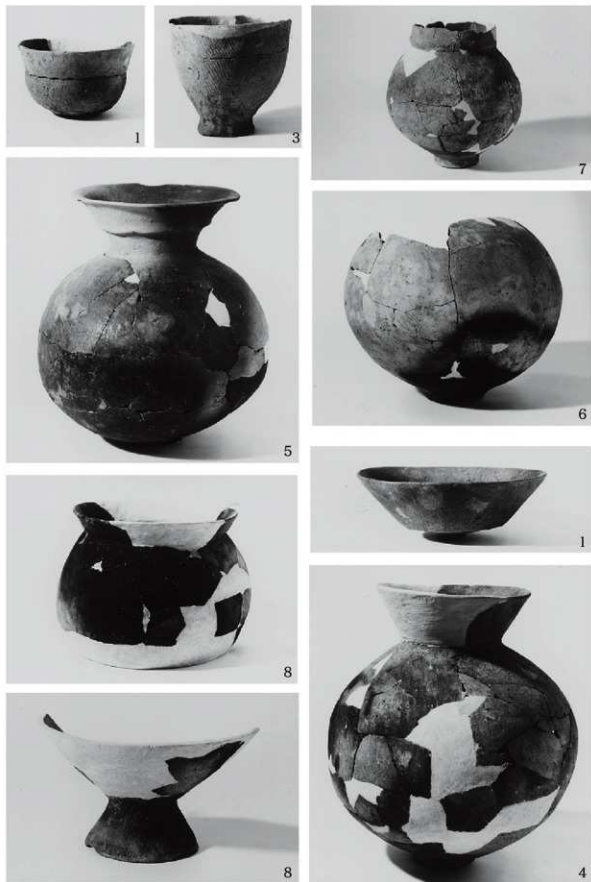


3



2

11号住居跡出土遺物



19号住居跡出土遺物

21号住居跡出土遺物(1)



21号住居跡出土遺物(2)



23号住居跡出土遺物



30号住居跡出土遺物



38号住居跡出土遺物



51号住居跡出土遺物



56号住居跡出土遺物



60号住居跡出土遺物



63号住居跡出土遺物(1)



63号住居跡出土遺物(2)



24

63号住居跡出土遺物(3)



9



10



1



4

74号住居跡出土遺物



2



8



13



19



14

79号住居跡出土遺物(1)



83号住居跡出土遺物



84号住居跡出土遺物



3号井戸出土遺物



4号井戸出土遺物

75号土坑出土遺物



363B号土坑出土遺物



16号溝出土遺物



32号住居跡 (南から)



70号住居跡 (南から)



70号住居跡遺物出土状況 (北から)



70号住居跡遺物出土状況 (南から)



70号住居跡炉跡出土状況 (北から)



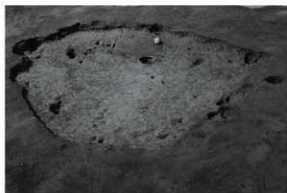
70号住居跡炉跡 (北から)



70号住居跡炉跡 (南西から)



70号住居跡炉跡 (東から)



82号住居跡（北から）



82号住居跡遺物出土状況（南から）



82号住居跡埋置跡（北から）



82号住居跡埋置跡（南から）



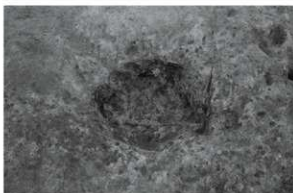
110号住居跡（南から）



110号住居跡遺物出土状況（北から）



110号住居跡遺物出土状況（南から）



110号住居跡跡跡（西から）



31号土坑 (南から)



33号土坑 (東から)



40号土坑 (東から)



42号土坑 (北から)



60号土坑 (南から)



67号土坑 (西から)



75号土坑遺物出土状況 (西から)



75号土坑 (北から)



141号土坑 (東から)



162号土坑 (北から)



163号土坑 (北から)



170号土坑 (東から)



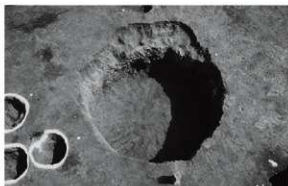
171号土坑 (南から)



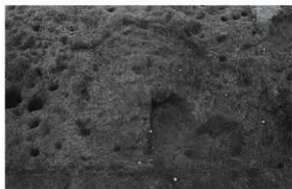
172号土坑 (西から)



173号土坑 (南から)



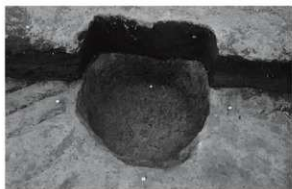
177A号土坑 (南から)



184号土坑 (南から)



184号土坑遺物出土状況 (南から)



185号土坑 (南から)



185号土坑遺物出土状況 (南から)



191号土坑 (南から)



213A号土坑 (南から)



226号土坑遺物出土状況 (南から)



230号土坑 (北から)



231号土坑 (北から)



233号土坑 (南から)



239号土坑 (南から)



245号土坑 (南から)



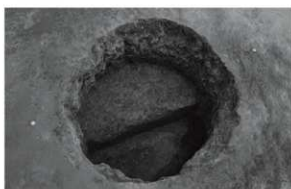
249号土坑 (西から)



327A号土坑 (東から)



342A号土坑 (北から)



343号土坑 (南から)



345号土坑 (南東から)



387号土坑 (南から)



388号土坑 (東から)



405号・440号土坑 (南から)



448号土坑 (南から)



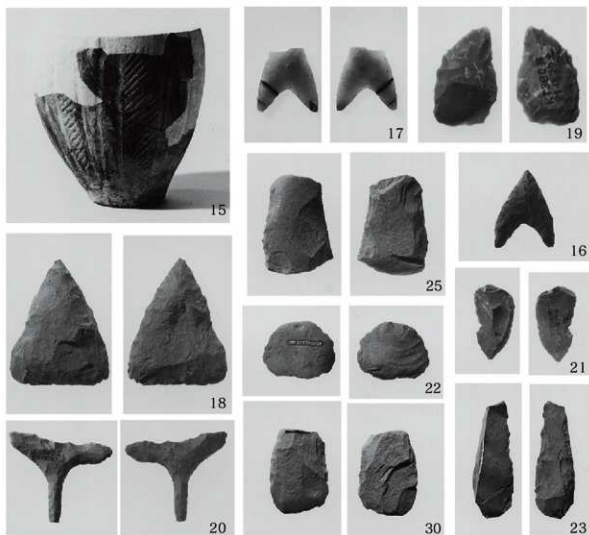
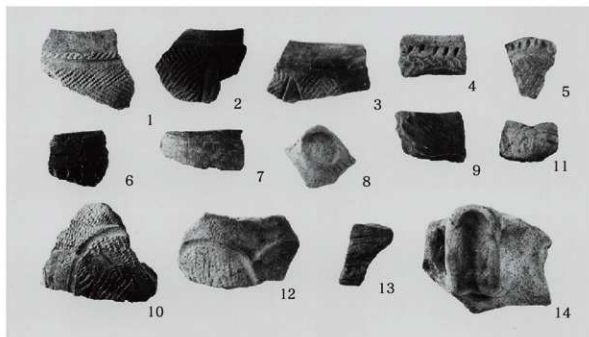
1号埋甕跡 (南から)



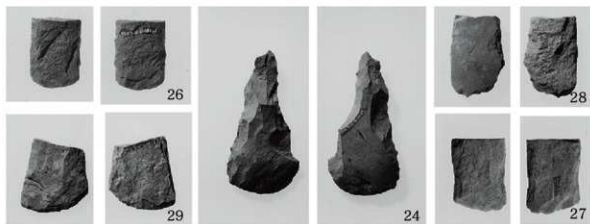
2号埋甕跡 (南から)



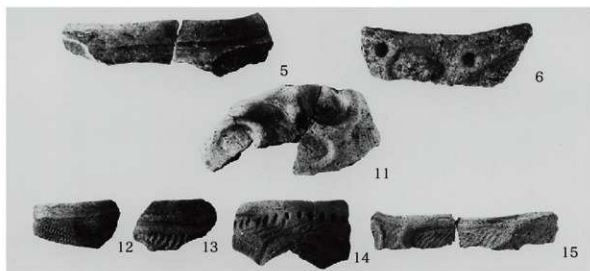
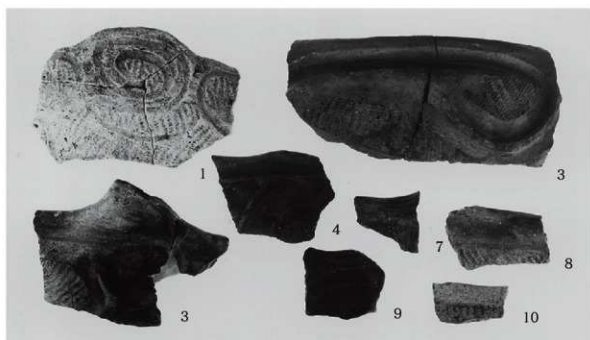
甕埋設土坑 (南から)



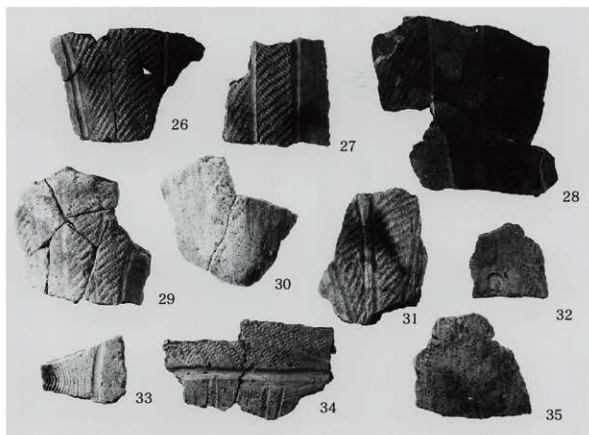
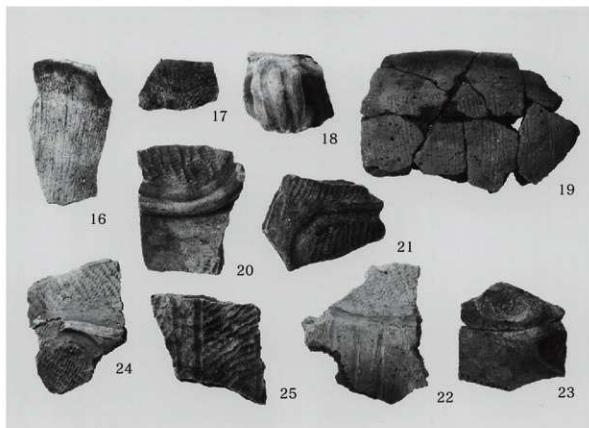
32号住居跡出土遺物(1)



32号住居跡出土遺物(2)



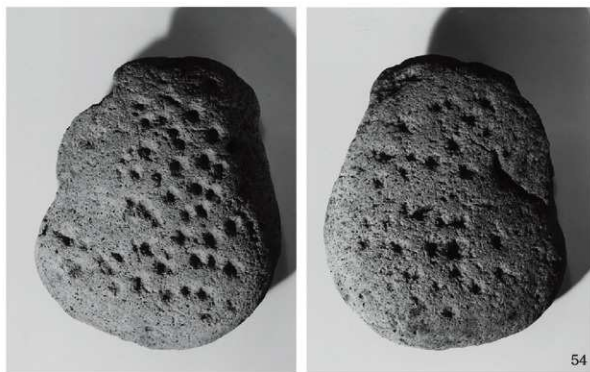
70号住居跡出土遺物(1)



70号住居跡出土遺物(2)



70号住居跡出土遺物(3)



70号住居跡出土遺物(4)

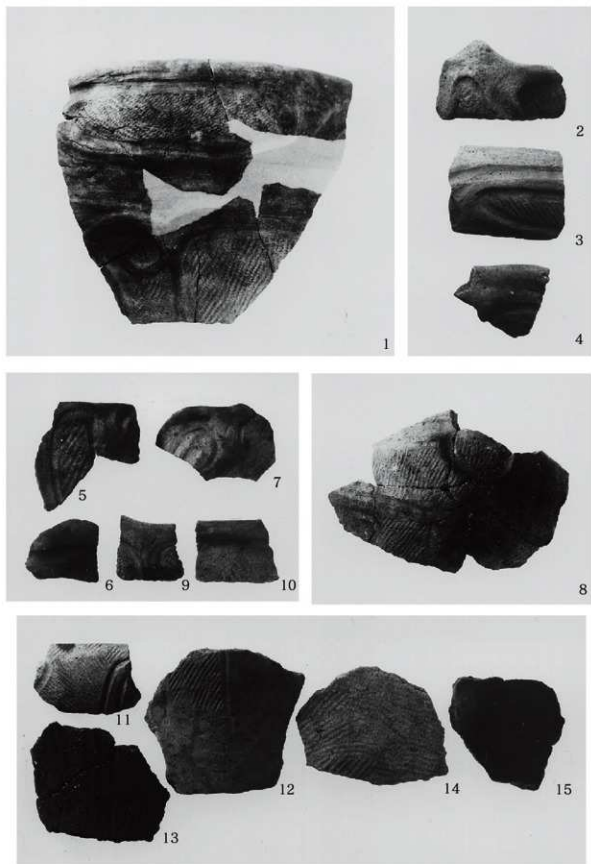


70号(5)・82号住居跡出土遺物(1)

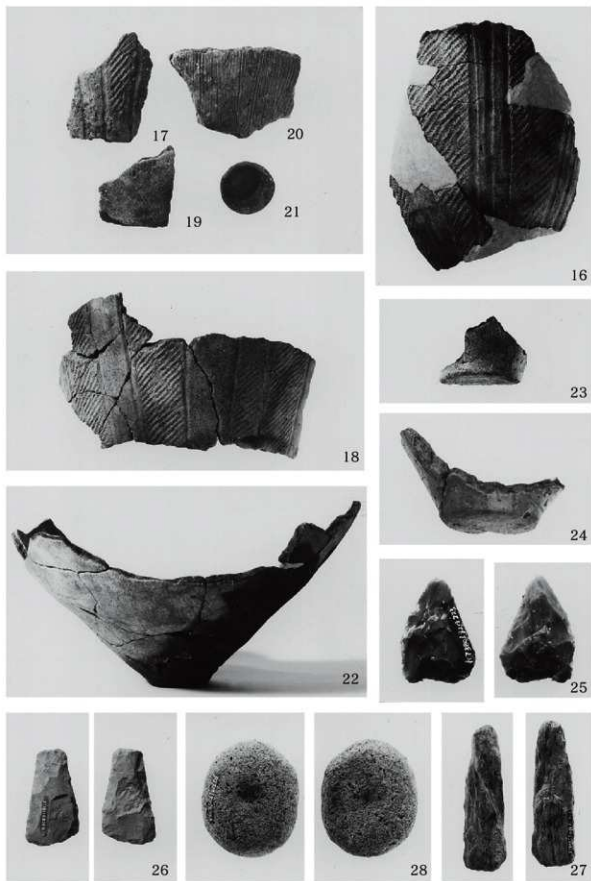


82号住居出土遺物(1)

炉埋甕



82号住居跡出土遺物(2)



82号住居跡出土遺物(3)



110号住居跡出土遺物(1)



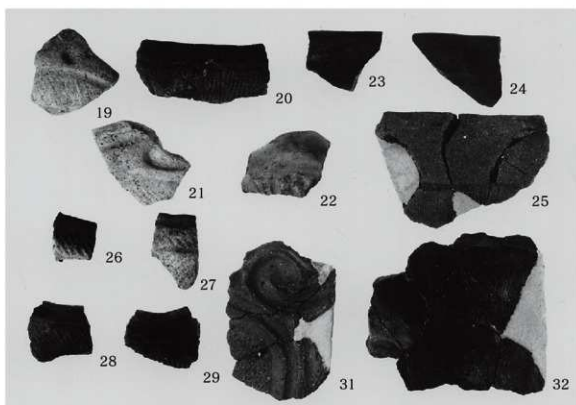
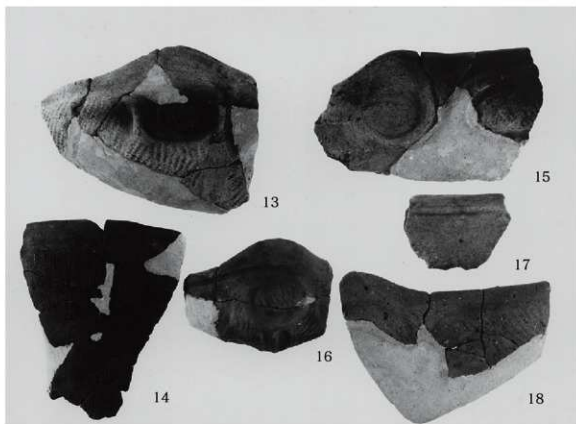
110号住居跡出土遺物(2)



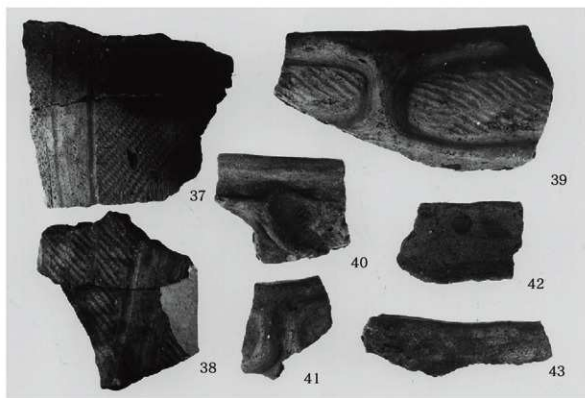
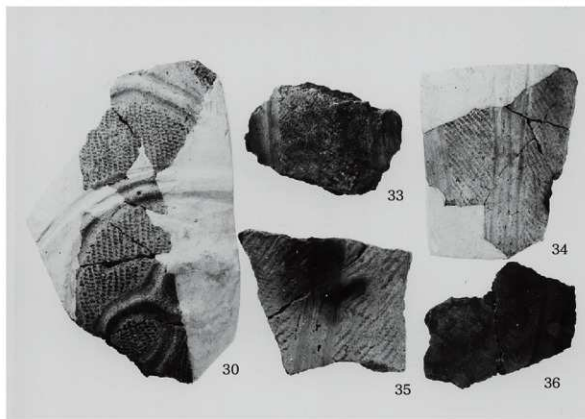
110号住居跡出土物(3)



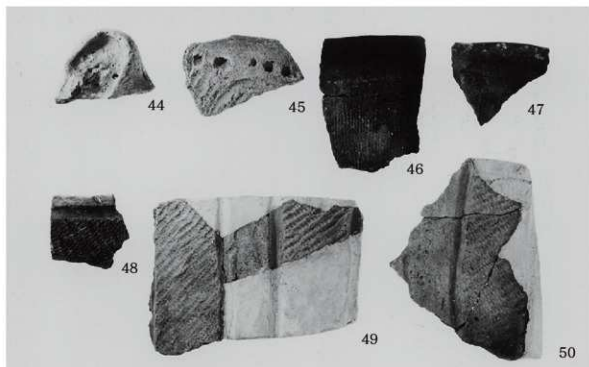
110号住居跡出土遺物(4)



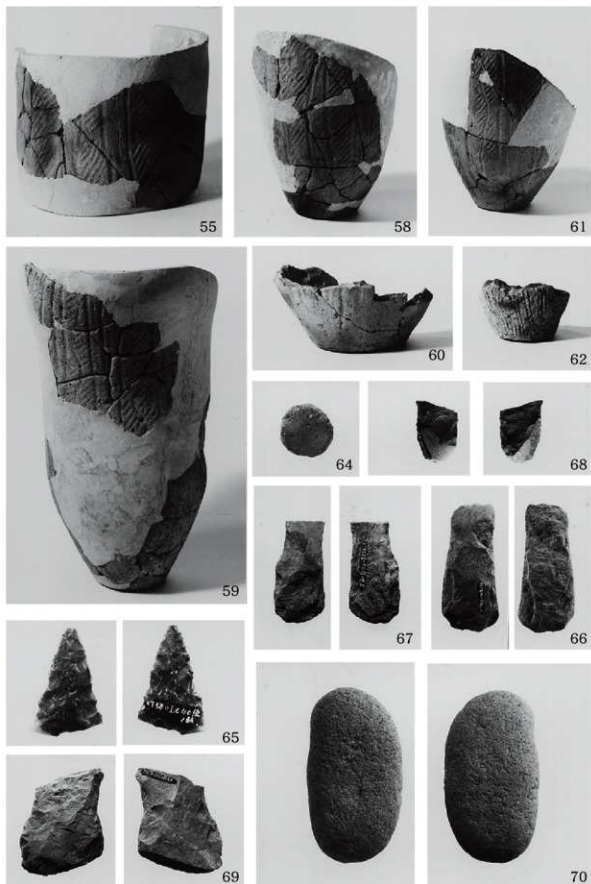
110号住居跡出土遺物(5)



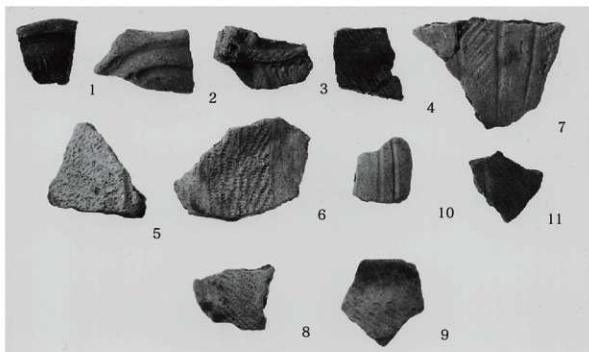
110号住居跡出土遺物(6)



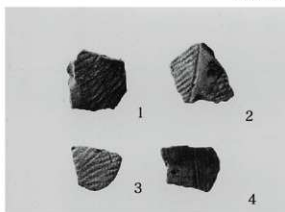
110号住居跡出土遺物(7)



110号住居跡出土物(8)



122 号住居跡出土遺物



129 号住居跡出土遺物



2 号炉跡出土遺物



1 号埋甕出土遺物



2号埋甕出土遺物



1

5号土坑出土遺物



1

20号土坑出土遺物



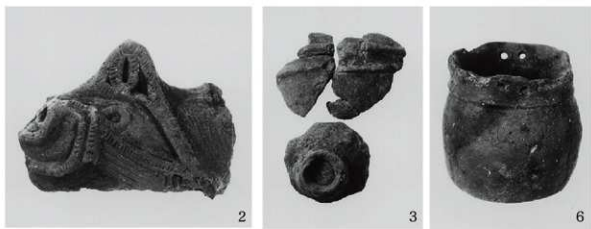
1

16号土坑出土遺物



1

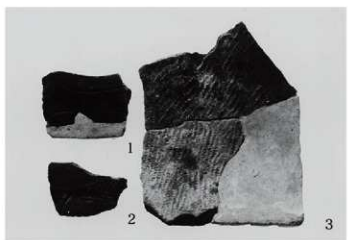
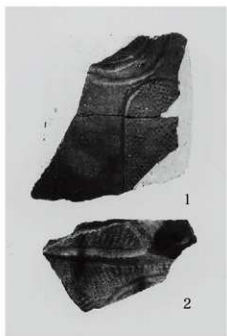
25号土坑出土遺物(1)



25号土坑出土遺物(2)



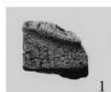
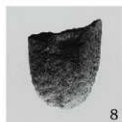
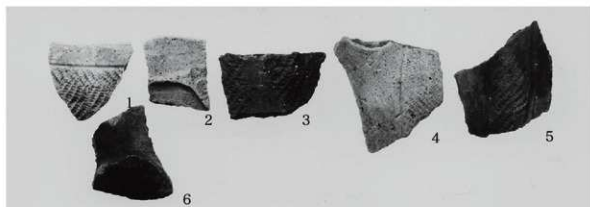
31号土坑出土遺物



33号土坑出土遺物



40号土坑出土遺物

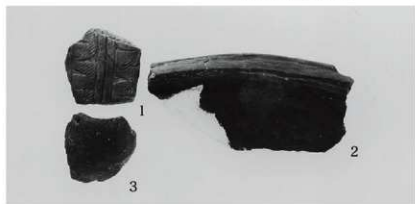


67号土坑出土遺物

42号土坑出土遺物



141号土坑出土遺物



143号土坑出土遺物



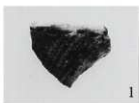
148号土坑出土遺物



155号土坑出土遺物



163号土坑出土遺物



175号土坑出土遺物



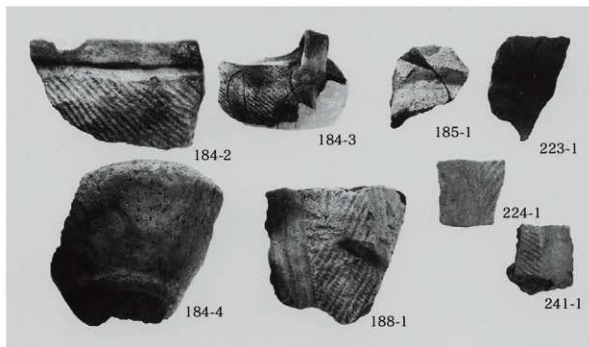
177A号土坑出土遺物



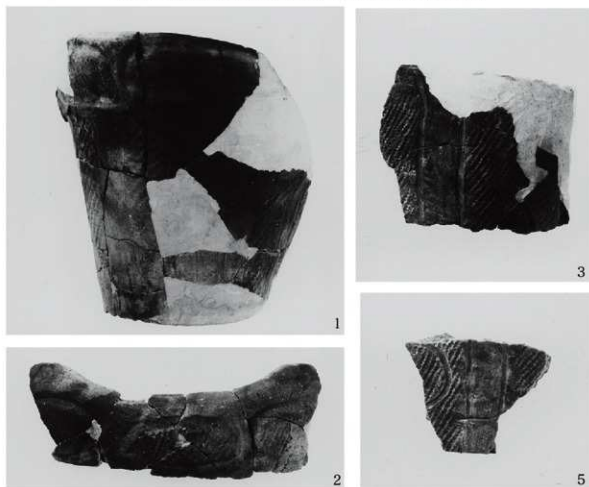
170号土坑出土遺物



184号土坑出土遺物



184号・185号・188号・223号・224号・241号土坑出土遺物



226号土坑出土遺物(1)



226号土坑出土遺物(2)

4



6



1

252号土坑出土遺物



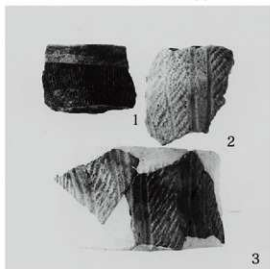
1

248号土坑出土遺物



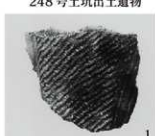
1

257号土坑出土遺物



273号土坑出土遺物

3



1

258号土坑出土遺物



264号土坑出土遺物

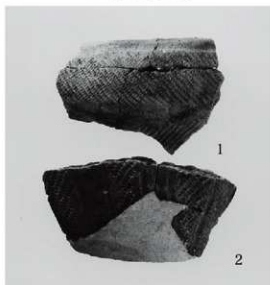


1

319号土坑出土遺物



1



342A号土坑出土遺物

1

2

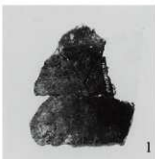


2

338A号土坑出土遺物



3



1

345号土坑出土遺物



1

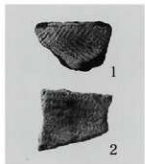
361B号土坑出土遺物



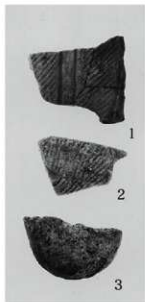
365A 号土坑出土遺物



369B 号土坑出土遺物



405 号土坑出土遺物



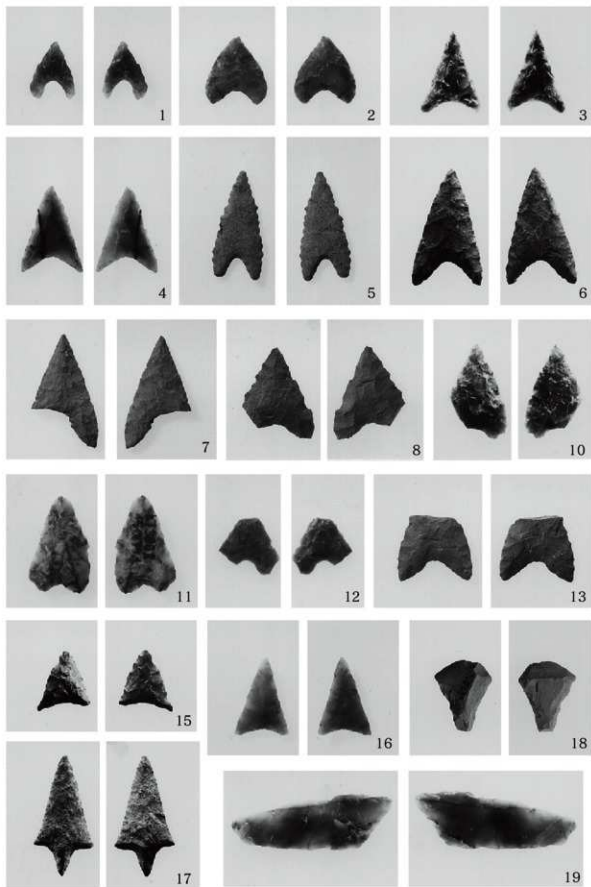
411 号土坑出土遺物



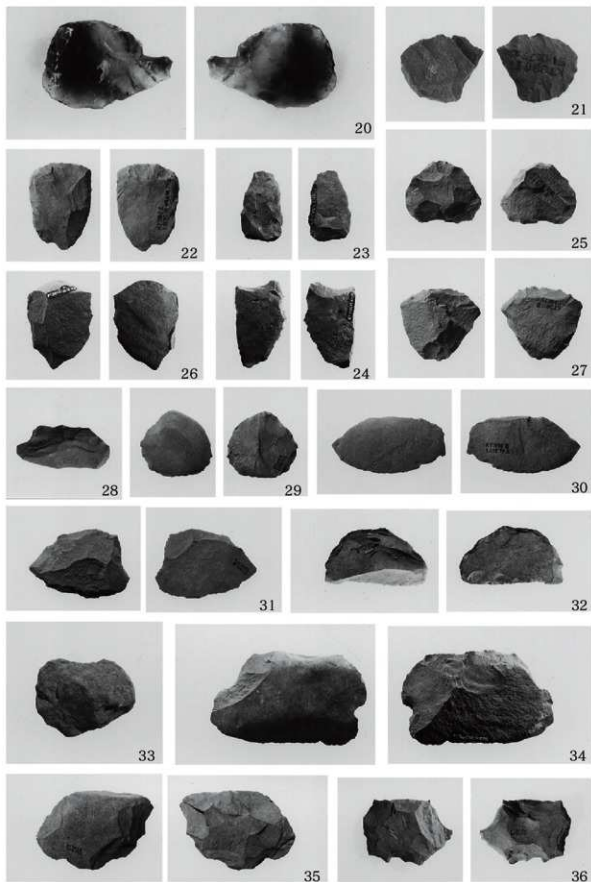
388 号土坑出土遺物



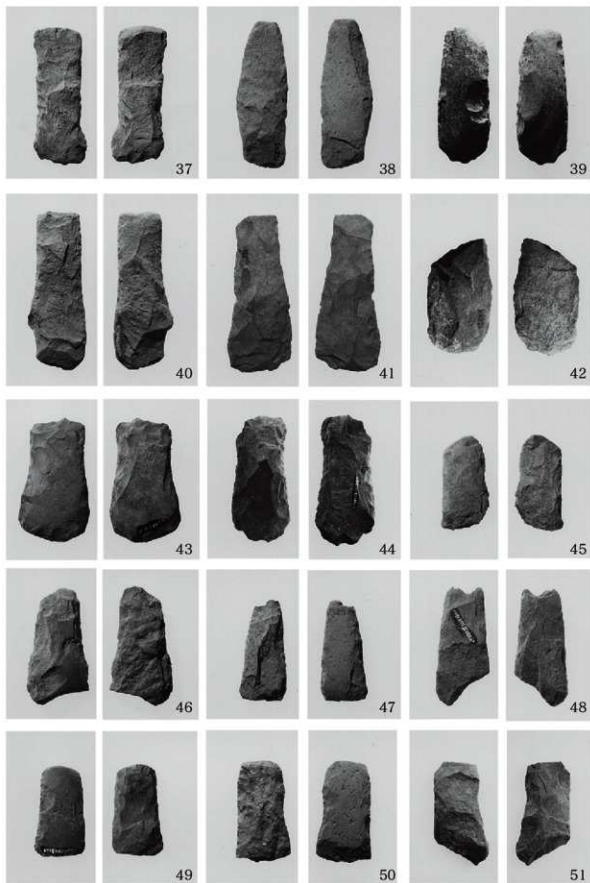
遺跡出土土器



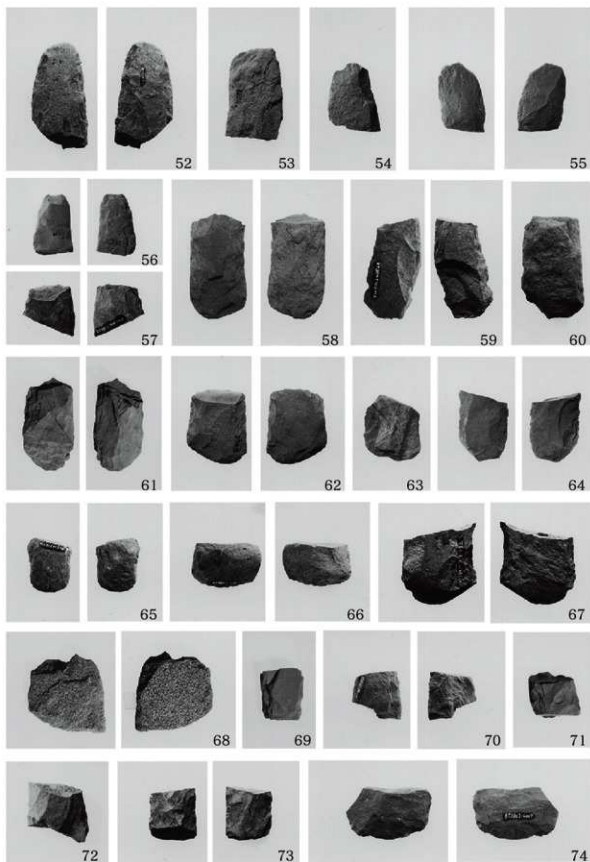
遺跡出土石器(1)



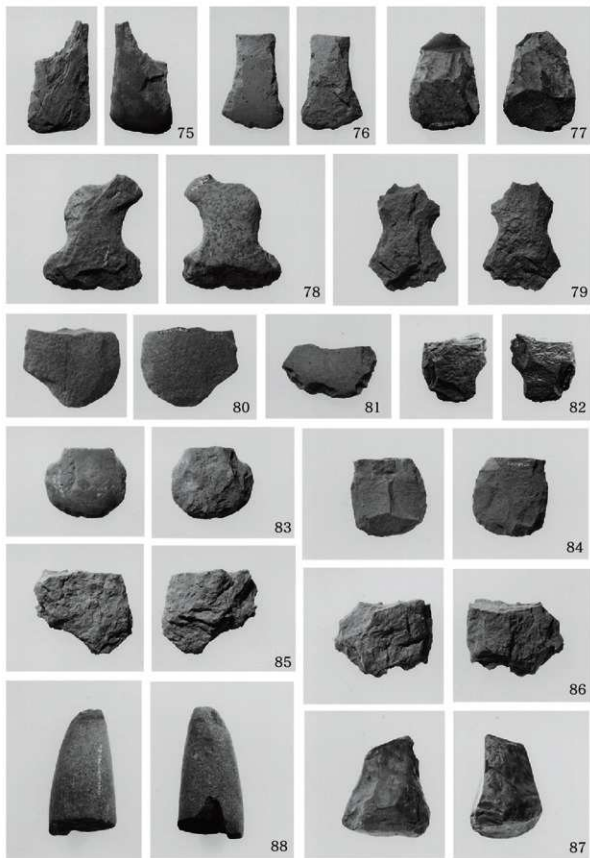
遺跡出土石器 (2)



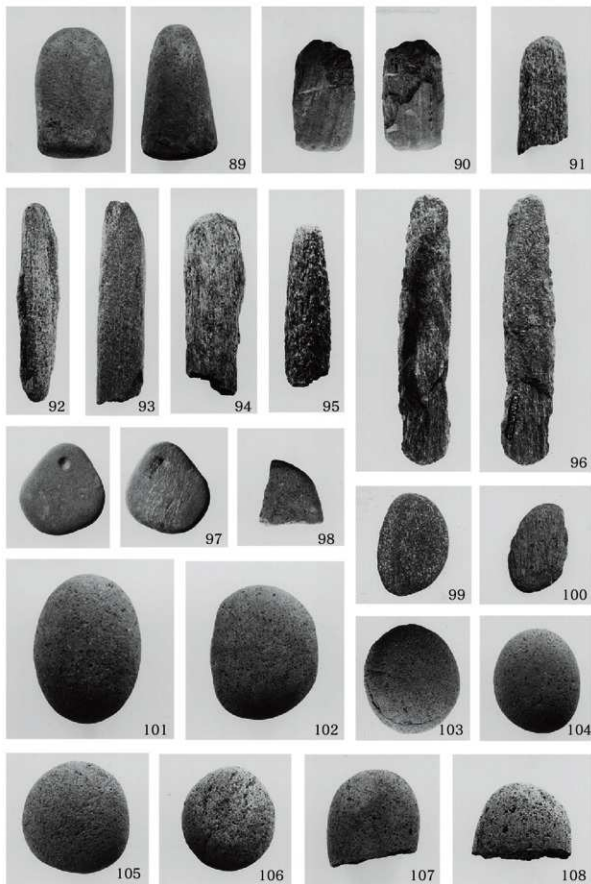
遺跡出土石器 (3)



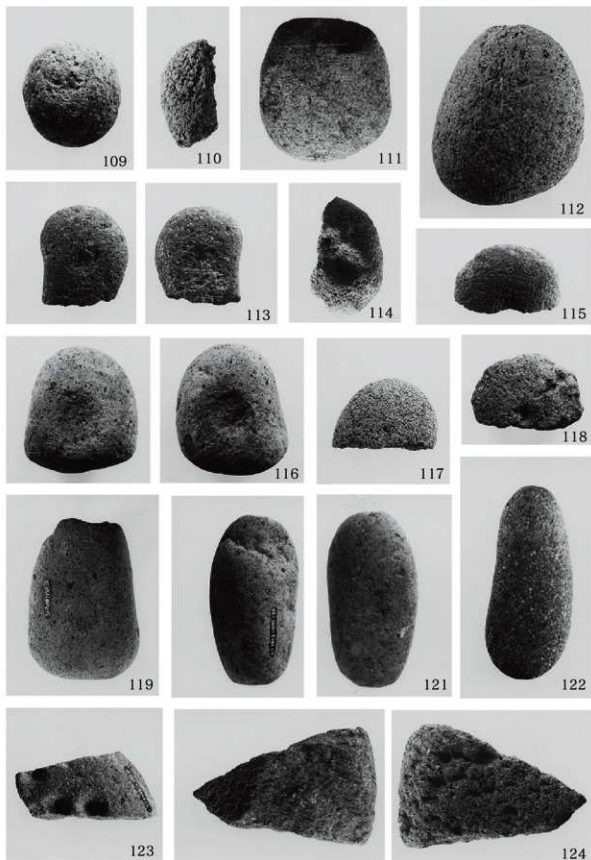
遺跡出土石器 (4)



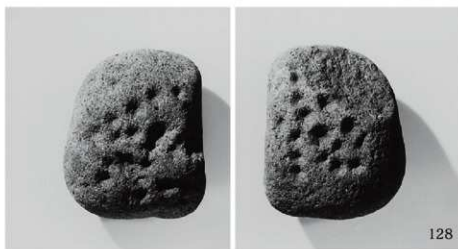
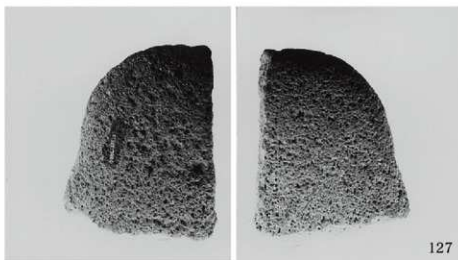
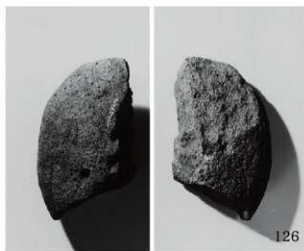
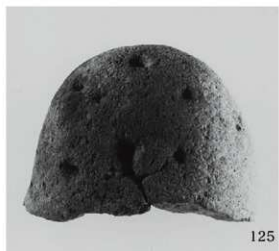
遺跡出土石器 (5)



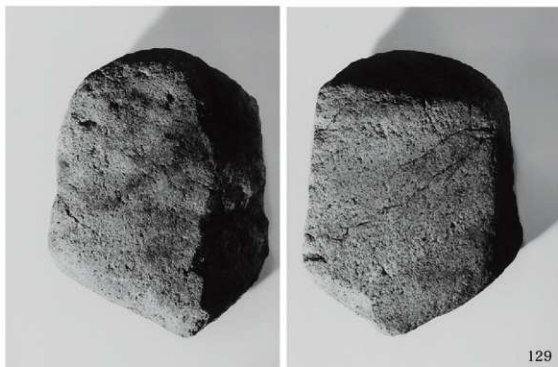
遺跡出土石器 (6)



遺跡出土石器 (7)



遺跡出土石器 (8)



遺跡出土石器 (9)



旧石器出土状況（東から）



旧石器出土状況（北から）



1号・2号・3号ブロック (東南から)



2号・3号・4号・5号ブロック (東から)



4号ブロック (南から)



5号ブロック (南から)



6号ブロック (北から)



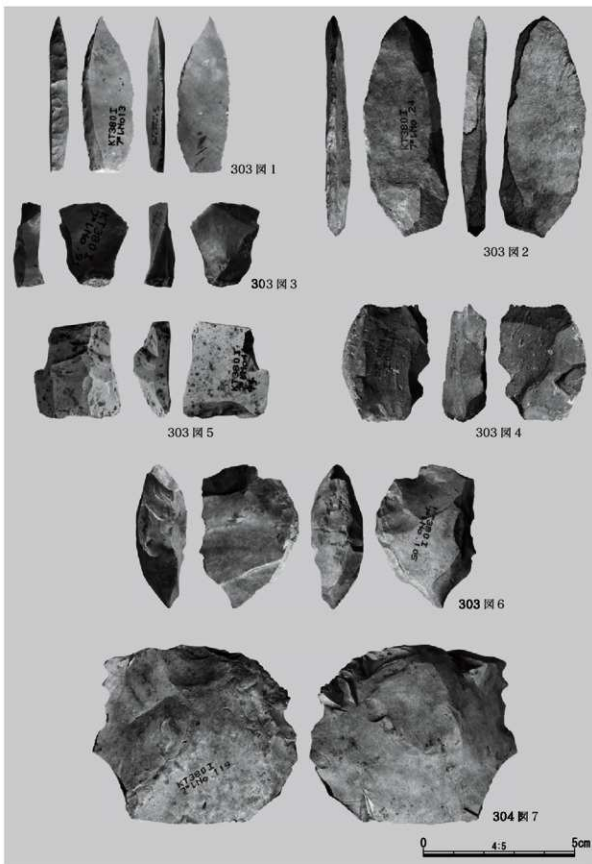
調査風景



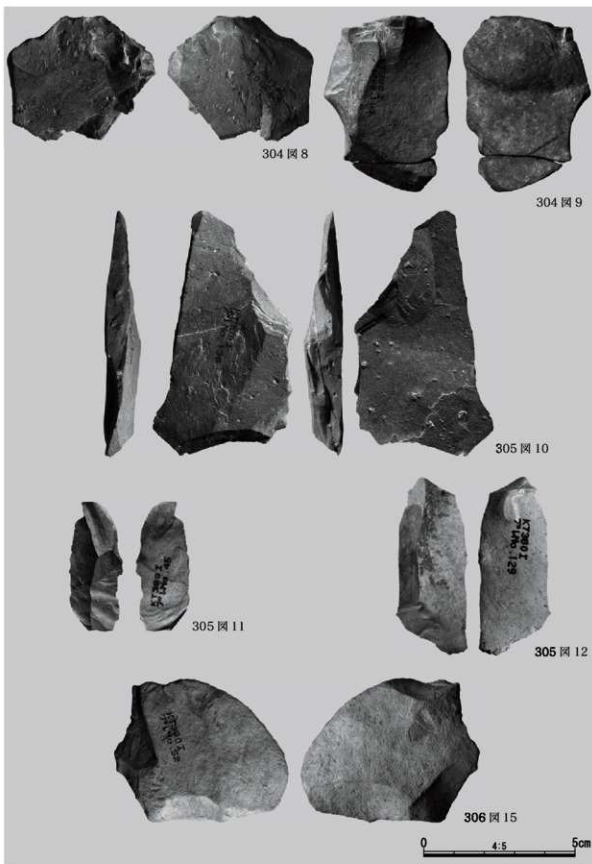
調査風景



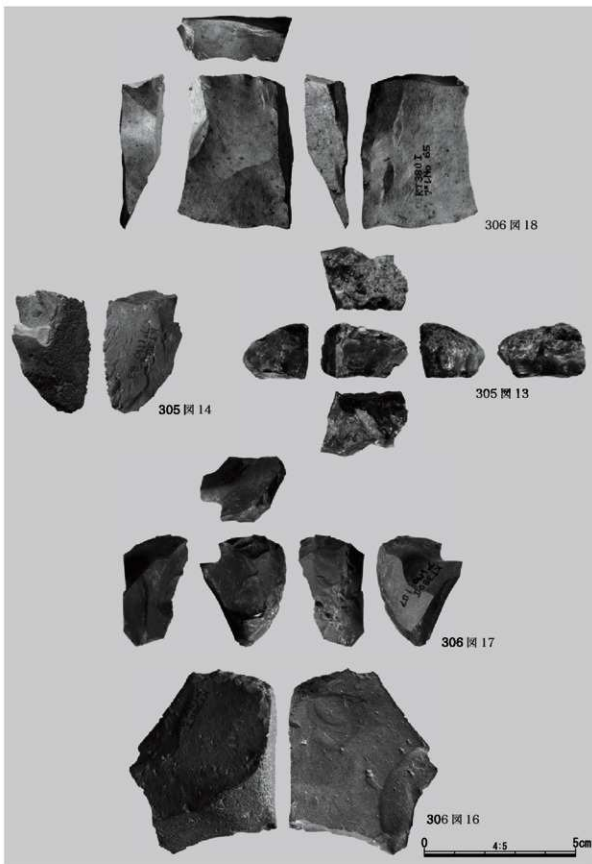
調査風景



I区出土旧石器(1)

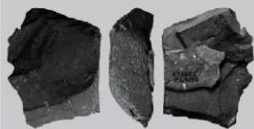


I 区出土旧石器 (2)



I 区出土旧石器 (3)

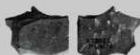
黑色安山岩 1(1)



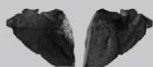
307 网



307 网 1

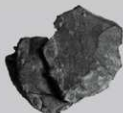


307 网 2



307 网 3

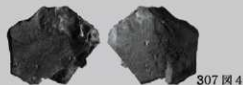
黑色安山岩 1(2)



307 网



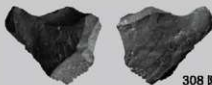
307 网 5



307 网 4



308 网 6



308 网 7

0 1:2 10cm

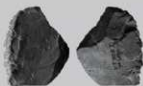
I 区出土旧石器 (4)

PL.112



I 区出土旧石器 (5)

黑色安山岩 2 非接合



309 图 6



309 图 4



309 图 5

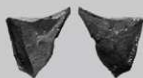
黑色安山岩 3



310 图



310 图 1



310 图 2

黑色安山岩 3 非接合

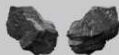


310 图 3

黑色安山岩 4

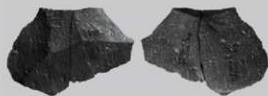


310 图 5



310 图 4

黑色安山岩 5



310 图 6

黑色安山岩 6



310 图 7

黑色安山岩 分类不能



310 图 8



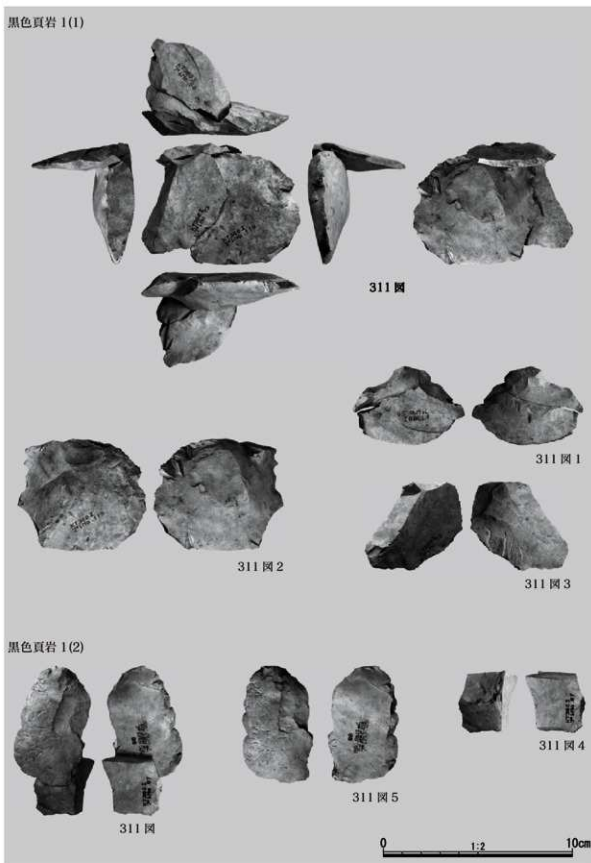
310 图 9



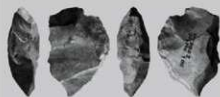
310 图 10

0 1:2 10cm

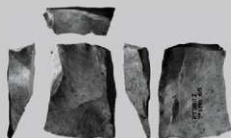
黑色頁岩 1(1)



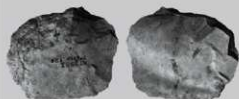
黑色頁岩 1 非接合



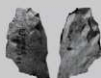
312 网 1



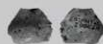
312 网 2



312 网 3



312 网 4



312 网 6



312 网 7

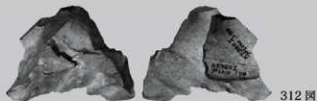


312 网 8



312 网 5

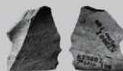
黑色頁岩 2



312 网



312 网 10



312 网 11



312 网 9

黑色頁岩 2 非接合

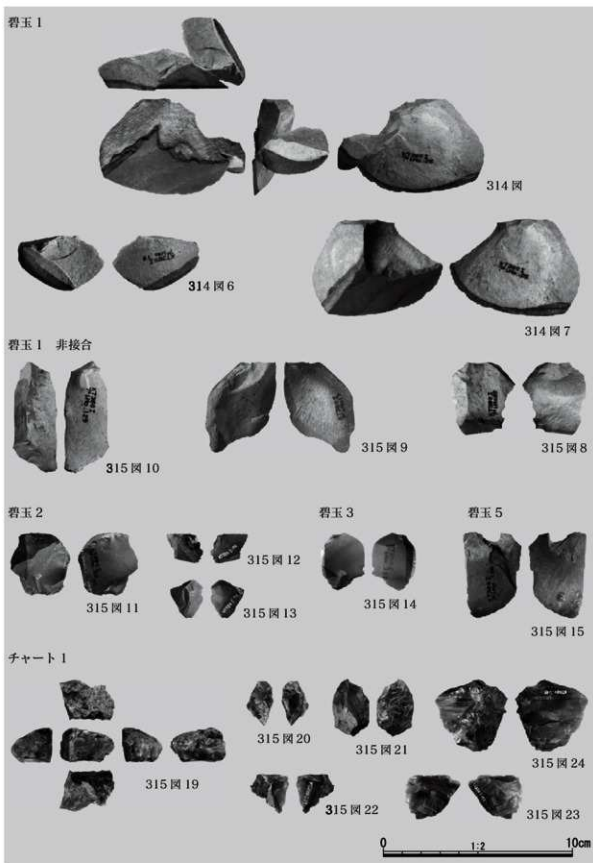


312 网 12



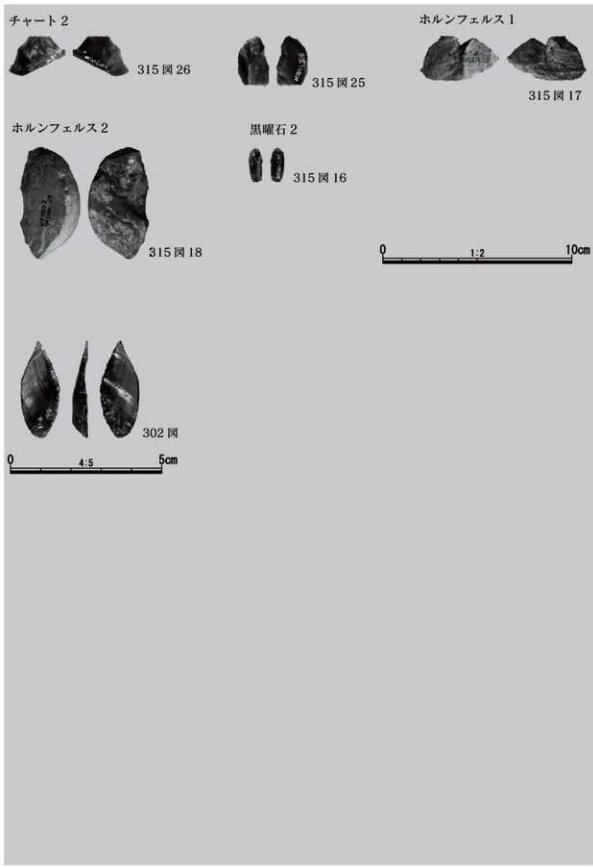


I区出土石器(9)



I 区出土旧石器 (10)

PL.118



I 区出土旧石器 (11)

上 柳 沢 遺 跡
写 真 図 版

上柳沢遺跡

PL.1



上柳沢遺跡遠景 (東から)



上柳沢遺跡県側道部 (東から)

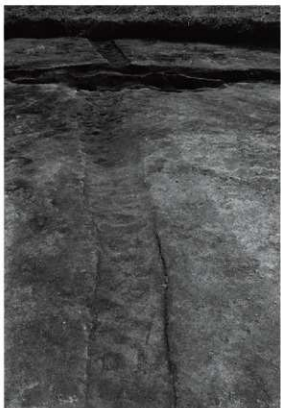


1・2号溝跡 (南から)



3号溝跡 (南から)

PL.2



2号溝跡 (西から)



3号溝跡 (南から)



6号溝跡 (南から)



7・8号溝跡 (南から)



3号溝跡 (南から)



3号溝跡土層



1号井戸跡



3号溝跡 側道部で4号溝が横断 (南から)



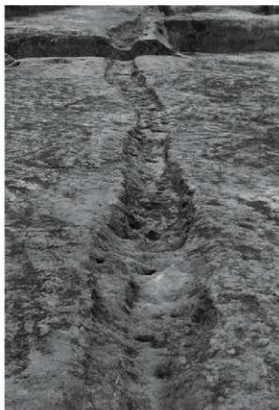
1号井戸跡土層



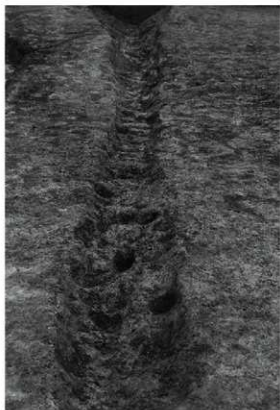
4号溝跡土層



1号溝跡 (南から)



4号溝跡 (東から)



5号溝跡 (南から)



1号溝跡 (南から)



表採遺物

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第414集

塚 下 遺 跡 (2)
上 柳 沢 遺 跡

平成19年(2007年)11月20日 印刷

平成19年(2007年)12月1日 発行

編集／発行 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北碓町下箱田784番地の2

電話 0279 (52) 2511 (代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／朝日印刷工業株式会社



